

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXI —

福岡県粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査 2

1 9 7 8

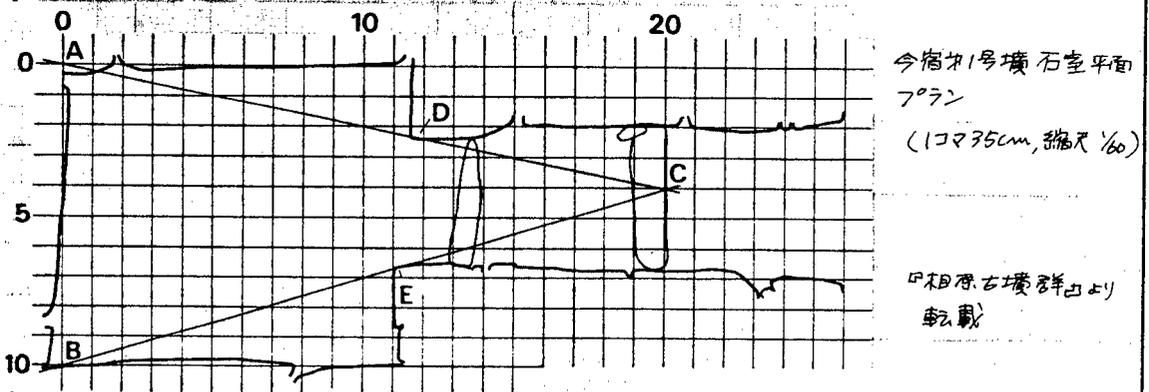
福岡県教育委員会

正 誤 表

(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXI)

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
3	註2	<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告>	<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告N>	105	Fig. 63	(1/4)	(1/6)
37	6	である(註1)	である(註1)。	108	Fig. 66	(1/80)	(1/60)
69	3	長さ1.4mm弱	長さ1.4cm弱	112	1	(Fig. 1~5)	(Fig. 74-1~5)
73	33	手掘土器	手掘土器	123	2	自然釉	自然釉
89	13	0.6~0.6m	0.6m	151	Fig. 106	(1/2)	(実大)
97	10	B・C・G・I	B・C・G・H	160	32	2mほど	2mほど
99	2	2.1m	2.1m	164	Fig. 118	(1/80)	(1/60)
"	"	16.8m	16.8m	184	Fig. 131	(1/3)	(1/2)
210	13	大田町遺跡	太田町遺跡	目次 7	(1)	蒲原宏行	蒲原宏行 新開淑子

Fig.128(P176) 菅尺方眼と石室平面プランの適合状況 (脱落につき追加図115)



上記の他、目次の Fig. 55~63 と本文中の Fig. 55~63 のタイトルとがズレているが、本文中のタイトルが正しい。

編者のミスにより、執筆者に御迷惑をおかけしたことをお詫言いたします。

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXI —

福岡県粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査 2

昭和53年

福岡県教育委員会

序

ここにお届けする本書は、日本道路公団による九州縦貫高速自動車道建設に伴ない、当教育委員会が調査を実施した粕屋郡古賀町関係の諸遺跡についての2冊目の報告書であります。

本文で述べていますように、これらの調査は建設工程と調査スケジュールとの調整に苦慮するという切迫した状況下で行なわれたものであり、このためもあって記録保存のための調査として意を尽くしているとは必ずしもいえず、今後の課題として検討すべき余地があると考えております。

調査の実施にあたりましては、地元古賀町教育委員会、同町歴史研究会の諸般にわたる御協力・御尽力があり、また、奈良国立文化財研究所、筑波大学調査団（団長増田精一教授）に調査の一部を担当していただきました。これらの機関ならびに関係各位に対して心から御礼申し上げますとともに、本書が文化財理解の一助としてあるいは学術研究の資料として活用されますことを願ってやみません。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和47年度から同50年度にかけて発掘した粕屋郡古賀町所在遺跡群についての2冊目の報告書であり、所収遺跡と所在地は下記のとおりである。

太田町遺跡	古賀町大字新原字太田町
川原庵山遺跡	古賀町大字新原字下別当
川原庵山第5号墳	古賀町大字新原字下別当
深町第1・2号墳	古賀町大字薬王寺字深町 大字新原字原口
原口B1号墳	古賀町大字新原字原口
水上遺跡	古賀町大字新原字水上 大字筵内字丸尾
古野古墳群	古賀町大字薦野字古野

なお、上記以外については、既に九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳとして、昭和48年度（本文編）、昭和49年度（図版編）に報告している。

2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施したが、昭和48年度の太田町遺跡の写真測量については奈良国立文化財研究所（伊東大作・佃幹雄・黒崎直）、昭和49年度の古野古墳群第Ⅱ次調査については筑波大学調査団（団長増田精一教授・副団長加藤晋平助教授）が各担当された。
3. 本文の作成にあたっては、下記が執筆し、その分担は目次および各文末に記すとおりである。

筑波大学	尾垣勝彦	蒲原宏行
福岡県教育庁管理部文化課	技師 石山 勲	副島邦弘 木下 修 中間研志
		児玉真一
発掘調査補助員	平ノ内幸治	平島勇夫

なお、挿図についての分担は、挿図目次に記すとおりである。

4. 図版のうち、遺構については図版目次に記す各担当者が撮影したが、遺物については図版目次に記す一部を除く他全ては、九州歴史資料館石丸洋氏の指導のもとに岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の3君が撮影・現像・焼付を行なったものである。
5. 遺物の整理は、一部を古賀発掘調査事務所で行なったが、大部分は岩瀬正信氏指導のもとに九州歴史資料館で行ない、現在同館にて収蔵・保管している。
6. 本書の編集は、中間の協力を得て石山が行なった。なお、P L. 10～23, 25, 48～56については中間が割付けた。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告— XXI —

福岡県粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査 2

目 次

	頁
I 調査の経過	石山勲 1
II 位置と環境	〃 4
III 各遺跡の調査	
1. 太田町遺跡	7
1. 遺構	〃 9
2. 遺物	10
(1) 石器	中間研志 10
(2) 土器	〃 13
A. 遺構に伴なう弥生式土器・土師器	〃 13
B. 弥生中期～後期前半の出土土器について	〃 32
C. 包含層その他出土の弥生式土器・土師器	〃 40
D. 包含層その他出土の須恵器	石山勲 65
(3) 鉄器	〃 68
(4) 滑石製品	〃 68
(5) 歴史時代土器	中間研志 71
3. 小結	〃 72
2. ^{せげんだ} 川原庵山遺跡	79
1. 遺構	石山勲 80
2. 遺物	中間研志 81
3. 川原庵山第5号墳(附、川原庵山第4号墳)	石山勲・児玉真一 87

	頁
4. 深町第1, 2号墳	93
1. はじめに	石山 勲 95
2. 深町第1号墳	〃 97
3. 深町第2号墳	中間研志 100
4. 壺 棺	石山 勲 104
5. 小 結	〃 104
5. 原口B1号墳	児玉真一 107
6. 水上遺跡	111
1. 調査の経過	中間研志 111
2. A地区の調査	〃 111
3. B地区の調査	〃 112
4. C地区の調査	〃 114
5. D地区の調査	〃 114
6. E地区の調査	〃 120
7. 小 結	130
(1) 縄文式土器について	中間研志・平島勇夫 130
(2) 古墳について	中間研志 131
7. 古野古墳群	133
1. 古墳の配列	石山 勲 133
2. A 単 位	133
(1) 古野 第3号墳	児玉真一・石山勲 133
(2) 〃 第4号墳	石山 勲 136
(3) 〃 第5号墳	中間研志・石山勲 138
(4) 〃 第6号墳	中間研志 140
(5) 〃 第7号墳	〃 143
3. B 単 位	144

	頁
(1) 古野 第 16 号墳	児 玉 真 一 144
(2) 〃 第 17 号墳	石山勲・中間研志 145
(3) 〃 第 18 号墳	平ノ内幸治 147
(4) 〃 第 22 号墳	〃 148
4. C 单 位	149
(1) 〃 第 19 号墳	中 間 研 志 149
(2) 〃 第 20 号墳	〃 152
(3) 〃 第 21 号墳	石 山 勲 156
5. D 单 位	158
(1) 〃 第 8 号墳	蒲 原 宏 行 159
(2) 〃 第 9 号墳	〃 164
(3) 〃 第 10 号墳	〃 169
(4) 小 結	〃 175
6. E 单 位	182
(1) 〃 第 12 号墳	児玉真一・副島邦弘・石山勲 182
(2) 〃 第 13 号墳	石 山 勲 186
(3) 〃 第 14 号墳	中 間 研 志 188
(4) 〃 第 15 号墳	児 玉 真 一 192
(5) 〃 第 23 号墳	平ノ内幸治 193
7. F 单 位	194
(1) 〃 第 2 号墳	石 山 勲 194
8. G 单 位	196
(1) 〃 第 11 号墳	蒲 原 宏 行 196
(2) 〃 第 24 号墳	尾 垣 勝 彦 197
9. そ の 他	198
(1) 〃 第 1 号墳	中 間 研 志 198
10. 小 結	石 山 勲 198
IV. 結 語	〃 203

V. 周辺の遺構と遺物

1. 中ノ坪甕棺墓	中間研志	208
1. 調査の経過		208
2. 調査の内容		208
3. 結 語		209
2. 藤津第1号石棺	石山 勲	211
1. 調査にいたる経過		211
2. 遺跡の内容		212
3. 遺 物		212
3. 鴻ノ巣第1号石棺出土遺物	〃	213

図 版 目 次

		本文対照頁
PL. 1	(1) 太田町遺跡全景(北西から)……………(石山撮影)	9
	(2) 太田町遺跡全景(南東から)……………(石山撮影)	9
PL. 2	太田町遺跡モザイク写真……………(奈良国立文化財研究所撮影)	10
PL. 3	(1) 太田町遺跡第1～4号住居跡全景(北東から)……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡第3号住居跡(西から)……………(石山撮影)	10
PL. 4	(1) 太田町遺跡第4号住居跡(北東から)……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡第4号住居跡土器出土状態(南西から)……………(石山撮影)	10
PL. 5	(1) 太田町遺跡近景(右下方形周溝遺構)……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡第5・6号住居跡(南西から)……………(石山撮影)	10
PL. 6	(1) 太田町遺跡近景(右上方土器溜り北東から)……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡土器溜(西から)……………(石山撮影)	10
	(3) 太田町遺跡溝5土器堆積状態……………(石山撮影)	10
PL. 7	(1) 太田町遺跡土器4出土状態……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡第6号住居跡土器22出土状態……………(石山撮影)	10
PL. 8	(1) 太田町遺跡溝1土器26, 27出土状態……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡土器35(左)・36(右)出土状態……………(石山撮影)	10
PL. 9	(1) 太田町遺跡土器44出土状態……………(石山撮影)	10
	(2) 太田町遺跡滑石製子持勾玉出土状態……………(石山撮影)	68
PL. 10	太田町遺跡出土弥生式土器1……………(平島撮影)	13～52
PL. 11	太田町遺跡出土弥生式土器2……………(平島撮影)	13～52
PL. 12	(1) 太田町遺跡出土弥生式土器3……………(平島撮影)	13～52
	(2) 太田町遺跡出土環状石斧……………(平島撮影)	11
PL. 13	太田町遺跡出土弥生式土器4……………(平島撮影)	13～52
PL. 14	太田町遺跡出土弥生式土器5……………(平島撮影)	13～52
PL. 15	太田町遺跡出土弥生式土器6……………(平島撮影)	13～52
PL. 16	太田町遺跡出土弥生式土器7……………(平島撮影)	13～52
PL. 17	太田町遺跡出土石器, 砥石……………(平島撮影)	11
PL. 18	太田町遺跡出土土師器1……………(平島撮影)	53～65
PL. 19	太田町遺跡出土土師器2……………(平島撮影)	53～65
PL. 20	太田町遺跡出土土師器3……………(平島撮影)	53～65
PL. 21	太田町遺跡出土土師器4……………(平島撮影)	53～65

		本文対照頁
P L. 22	太田町遺跡出土土師器 5	(平島撮影) ……53~65
P L. 23	太田町遺跡出土土師器 6	(平島撮影) ……53~65
P L. 24	太田町遺跡出土須恵器	(平島撮影) ……65
P L. 25	太田町遺跡出土須恵器・瓦器・青磁	(平島撮影) ……71
P L. 26	太田町遺跡出土滑石製玉および鉄斧形鉄器	……………68
P L. 27	(1) 川原庵山遺跡近景(西から)	(石山撮影) ……81
	(2) 川原庵山遺跡土器10・11出土状態	(石山撮影) ……82
P L. 28	(1) 川原庵山遺跡土器10出土状態	(石山撮影) ……82
	(2) 川原庵山遺跡土器11出土状態	(石山撮影) ……82
P L. 29	(1) 川原庵山遺跡土器7・9出土状態(北から)	(石山撮影) ……82
	(2) 川原庵山遺跡土器9出土状態	(石山撮影) ……82
	(3) 川原庵山遺跡土器7出土状態	(石山撮影) ……82
P L. 30	(1) 川原庵山第5号墳航空写真(上方は高速道路)	(児玉撮影) ……87
	(2) 川原庵山第5号墳全景	(石山撮影) ……87
P L. 31	(1) 川原庵山第5号墳全景(後方は第4号墳)	(石山撮影) ……87
	(2) 川原庵山第5号墳全景(左側の側道が拡幅された)	(石山撮影) ……87
P L. 32	(1) 川原庵山第5号墳近景	(石山撮影) ……87
	(2) 川原庵山第5号墳主体部	(児玉撮影) ……89
P L. 33	(1) 川原庵山第5号墳主体部	(児玉撮影) ……89
	(2) 川原庵山第5号墳主体部	(児玉撮影) ……89
	(3) 川原庵山第5号墳主体部	(児玉撮影) ……89
P L. 34	(1) 川原庵山第5号墳主体部遺物出土状態	(児玉撮影) ……89
	(2) 川原庵山第4号墳墳丘(手前は第5号墳)	(児玉撮影) ……91
P L. 35	(1) 深町第1・2号墳遠景(西から)	(中間撮影) ……95
	(2) 深町第1号墳墳丘近景(南から)	(中間撮影) ……95
P L. 36	(1) 深町古墳群(1)および原口古墳群第1号墳(2)航空写真(西から)	(児玉撮影) ……95
	(2) 深町第1・2号墳航空写真(東から)	(児玉撮影) ……95
P L. 37	(1) 深町第1・2号墳航空写真(南から)	(児玉撮影) ……95
	(2) 深町第1号墳墳丘地山整形面(南西から)	(中間撮影) ……97
P L. 38	(1) 深町第1号墳主体部全景(西から)	(中間撮影) ……98
	(2) 深町第1号墳墓壙全景(西から)	(中間撮影) ……99
	(3) 深町第1号墳東端出土ガラス玉	(石山撮影) ……100
	(4) 深町第1号墳主体部東端礫	(中間撮影) ……99
	(5) 深町第1号墳主体部西端礫	(中間撮影) ……99
P L. 39	(1) 深町第2号墳墳丘遺存状態(南から)	(石山撮影) ……101
	(2) 深町第2号墳全景(南から)	(中間撮影) ……102
P L. 40	(1) 深町第2号墳主体と墳丘盛土(南から)	(中間撮影) ……102
	(2) 深町第2号墳主体部石蓋(南から)	(中間撮影) ……102

			本文対照頁
P L. 57	(1)	古野古墳群全景航空写真……………	(児玉撮影) …… 133
	(2)	古野古墳群全景……………	(石山撮影) …… 133
P L. 58	(1)	古野古墳群中央支群A単位全景……………	(石山撮影) …… 133
	(2)	古野古墳群B～E単位全景……………	(石山撮影) …… 133
P L. 59	(1)	古野第3号墳全景……………	(児玉撮影) …… 133
	(2)	古野第3号墳羨道部……………	(児玉撮影) …… 134
P L. 60	(1)	古野第3号墳石室全景……………	(児玉撮影) …… 134
	(2)	古野第3号墳玄室奥壁……………	(児玉撮影) …… 134
P L. 61	(1)	古野第3号墳腰石据付状態……………	(児玉撮影) …… 135
	(2)	古野第3号墳遺物出土状態……………	(児玉撮影) …… 135
P L. 62	(1)	古野第4号墳墳丘全景(北から)……………	(石山撮影) …… 136
	(2)	古野第4号墳閉塞状態……………	(石山撮影) …… 137
P L. 63	(1)	古野第4号墳墳丘断面東半……………	(石山撮影) …… 136
	(2)	古野第4号墳墳丘断面西半……………	(石山撮影) …… 136
P L. 64	(1)	古野第4号墳石室全景……………	(石山撮影) …… 136
	(2)	古野第4号墳羨道左側壁(上方は第3号墳)……………	(石山撮影) …… 137
P L. 65	(1)	古野第4号墳石室根石据付状態……………	(石山撮影) …… 137
	(2)	古野第4号墳仕切石と根締状態……………	(石山撮影) …… 137
	(3)	古野第4号墳台付瞭出土状態……………	(石山撮影) …… 137
	(4)	古野第4号墳亀形提瓶出土状態……………	(石山撮影) …… 137
P L. 66	(1)	古野第5号墳石室全景……………	(中間撮影) …… 138
	(2)	古野第5号墳玄室奥壁(右上方は第4号墳)……………	(中間撮影) …… 139
P L. 67	(1)	古野第5号墳左側壁……………	(中間撮影) …… 139
	(2)	古野第6号墳発掘前石材露出状態……………	(石山撮影) …… 141
P L. 68	(1)	古野第6号墳石室全景……………	(石山撮影) …… 141
	(2)	古野第7号墳?石材残存状態……………	(中間撮影) …… 143
P L. 69	(1)	古野第16号墳発掘前全景……………	(児玉撮影) …… 144
	(2)	古野第16号墳石室全景……………	(児玉撮影) …… 145
P L. 70	(1)	古野第16号墳玄室腰石付状態(左端は第18号墳)……………	(児玉撮影) …… 145
	(2)	古野中央支群B単位墓壇全景……………	(石山撮影) …… 144
P L. 71	(1)	古野第17号墳石材残存状態……………	(副島撮影) …… 145
	(2)	古野第17号墳石室全景……………	(副島撮影) …… 146
P L. 72	(1)	古野第18号墳石室全景……………	(副島撮影) …… 147
	(2)	古野第18号墳腰石据付状態……………	(副島撮影) …… 147
P L. 73	(1)	古野第22号墳石室全景……………	(副島撮影) …… 148
	(2)	古野第22号墳墓壇全景……………	(副島撮影) …… 148
P L. 74	(1)	古野第19号墳石室全景……………	(中間撮影) …… 149
	(2)	古野第19号墳石室全景(閉塞石除去後)……………	(中間撮影) …… 150

			本文対照頁
	(3)	古野第19号墳石室腰石掘付状態……………	(中間撮影) …… 150
P L. 75	(1)	古野第19号墳玄室横口部土器出土状態……………	(中間撮影) …… 149
	(2)	古野第19号墳丁字頭勾玉出土状態……………	(中間撮影) …… 149
P L. 76	(1)	古野第20号墳石室全景……………	(中間撮影) …… 152
	(2)	古野第20号墳玄室奥壁……………	(中間撮影) …… 153
P L. 77	(1)	古野第20号墳石室腰石掘付状態……………	(中間撮影) …… 154
	(2)	古野第20号墳長頸壺出土状態……………	(中間撮影) …… 154
P L. 78	(1)	古野第21号墳発掘前石材露出状態……………	(石山撮影) …… 156
	(2)	古野第21号墳石室全景(床上層の小円礫除去後)……………	(石山撮影) …… 157
P L. 79	(1)	古野第21号墳腰石掘付状態……………	(石山撮影) …… 157
	(2)	古野第21号墳墓壇全景……………	(石山撮影) …… 157
P L. 80	(1)	古野東支群D単位発掘前全景……………	(筑波大撮影) …… 158
	(2)	古野東支群D・E単位全景……………	(石山撮影) …… 158
P L. 81	(1)	古野第8号墳石室全景……………	(筑波大撮影) …… 159
	(2)	古野第8号墳石室近景……………	(筑波大撮影) …… 159
P L. 82	(1)	古野第8号墳玄室奥壁……………	(筑波大撮影) …… 160
	(2)	古野第8号墳土器出土状態……………	(筑波大撮影) …… 161
P L. 83	(1)	古野第9号墳石室近景……………	(筑波大撮影) …… 164
	(2)	古野第9号墳石室左側壁……………	(筑波大撮影) …… 165
P L. 84	(1)	古野第9号墳石室全景(右上方は第10号墳)……………	(筑波大撮影) …… 165
	(2)	古野第9号墳玄室遺物出土状態……………	(筑波大撮影) …… 167
P L. 85	(1)	古野第10号墳石室全景……………	(筑波大撮影) …… 169
	(2)	古野第10号墳石室全景……………	(筑波大撮影) …… 170
P L. 86	(1)	古野第10号墳遺物出土状態全景……………	(筑波大撮影) …… 171
	(2)	古野第10号墳須恵器出土状態近景……………	(筑波大撮影) …… 171
P L. 87	(1)	古野第12号墳石材露出状態……………	(副島撮影) …… 182
	(2)	古野第12号墳石室全景……………	(副島撮影) …… 182
P L. 88	(1)	古野第12号墳石室全景……………	(副島撮影) …… 182
	(2)	古野第12号墳玄室床面(右が奥壁)……………	(副島撮影) …… 182
P L. 89	(1)	古野第12号墳腰石掘付状態……………	(副島撮影) …… 183
	(2)	古野第12号墳腰石掘付のための孔と根石……………	(副島撮影) …… 183
P L. 90	(1)	第12号墳玄室遺物出土状態……………	(副島撮影) …… 184
	(2)	第13号墳全景……………	(石山撮影) …… 186
P L. 91	(1)	古野第13号墳墳丘中核と玄室腰石掘付状態……………	(石山撮影) …… 186
	(2)	古野第13号墳玄室奥壁と左側壁……………	(石山撮影) …… 186
P L. 92	(1)	古野第13号墳石室全景……………	(石山撮影) …… 186
	(2)	古野第13号墳腰石掘付状態全景……………	(石山撮影) …… 187
P L. 93	(1)	古野第13号墳腰石掘付状態(南東から)……………	(石山撮影) …… 187

		本文対照頁
	(2) 古野第13号墳玄室床面と羨道床面関係…………… (石山撮影) ……	187
P L . 94	(1) 古野第14号墳石材露出状態…………… (中間撮影) ……	188
	(2) 古野第14号墳奥壁背面墳丘断面…………… (中間撮影) ……	188
P L . 95	(1) 古野第14号墳全景…………… (中間撮影) ……	188
	(2) 古野第14号墳玄室腰石据付状態…………… (中間撮影) ……	190
P L . 96	(1) 古野第14号墳土器出土状態…………… (中間撮影) ……	190
	(2) 古野第14号墳…………… (中間撮影) ……	193
P L . 97	(1) 古野第15号墳玄室全景…………… (児玉撮影) ……	193
	(2) 古野第15号墳玄室腰石据付状態…………… (児玉撮影) ……	193
P L . 98	(1) 古野第23号墳玄室奥壁…………… (中間撮影) ……	193
	(2) 古野第23号墳腰石据付状態…………… (中間撮影) ……	193
P L . 99	(1) 古野第2号墳 (南東から) …… (石山撮影) ……	194
	(2) 古野第2号墳 (北から) …… (石山撮影) ……	194
P L . 100	(1) 古野第2号墳石室全景…………… (石山撮影) ……	195
	(2) 古野第2号墳玄室奥壁と右側壁…………… (石山撮影) ……	195
P L . 101	(1) 古野第11号墳石材集積状態 (西から) …… (筑波大撮影) ……	196
	(2) 古野第11号墳石材集積状態…………… (筑波大撮影) ……	196
P L . 102	(1) 古野第11号墳石材集積状態 (西南から) …… (筑波大撮影) ……	196
	(2) 古野第11号墳玄室全景…………… (筑波大撮影) ……	196
P L . 103	(1) 古野第11号墳玄室奥壁…………… (筑波大撮影) ……	197
	(2) 古野第11号墳玄室左側壁…………… (筑波大撮影) ……	197
P L . 104	(1) 古野第1号墳 (発掘前) …… (中間撮影) ……	198
	(2) 古野第1号墳 (発掘後) …… (中間撮影) ……	198
P L . 105	(1) 古野第3号墳出土須恵器……………	136
	(2) 古野第4号墳出土須恵器……………	138
P L . 106	古野第6・19・20号墳出土遺物……………	142・151・155
P L . 107	古野第8号墳出土土器…………… (筑波大撮影) ……	161
P L . 108	(1) 古野第8号墳出土遺物…………… (筑波大撮影) ……	163
	(2) 古野第9号墳出土土器…………… (筑波大撮影) ……	167
P L . 109	古野第10号墳出土遺物…………… (筑波大撮影) ……	171
P L . 110	古野第12・13・14・23号墳出土遺物……………	185・188・190・194
P L . 111	古野第14号墳出土土製模造品……………	191
P L . 112	(1) 中ノ坪蓋甕棺全景…………… (石山撮影) ……	208
	(2) 中ノ坪甕棺……………	209
P L . 113	(1) 藤津第1号石棺全景 (足部から) …… (石山撮影) ……	212
	(2) 藤津第1号石棺全景 (頭部から) …… (石山撮影) ……	212
	(3) 藤津第1号石棺出土鉄器……………	212
	(4) 鴻巣第1号石棺出土鉄器……………	213

挿 図 目 次

	頁 折込
Fig. 1 古賀町周辺遺跡分布図(1/25,000) (作製 石山)	7
Fig. 2 太田町遺跡周辺地形図(1/2,000) (原図日本道路公団, 石山製図)	7
Fig. 3 太田町遺跡遺構写真測量図(1/60) (作製K. K. 国際航業, 石山加筆製図)	8
Fig. 4 太田町遺跡土層実測図(1/120) (瀬戸・副島(源)・佐々木実測, 中間製図)	9
Fig. 5 太田町遺跡出土環状石斧実測図(1/2) (木下実測・製図)	11
Fig. 6 太田町遺跡出土石器実測図(1/2) (平島実測, 中間製図)	12
Fig. 7 太田町遺跡出土砥石実測図(1/3) (平島実測, 中間製図)	12
Fig. 8 太田町遺跡出土石鏃実測図(2/3) (実測・製図中間)	13
Fig. 9 太田町遺跡溝1出土弥生式土器実測図(1/3) (実測・製図中間)	15
Fig. 10 太田町遺跡溝36出土弥生式土器実測図(1/3) (実測・製図中間)	16
Fig. 11 太田町遺跡土器溜り出土弥生式土器実測図1(1/3) (実測・製図中間)	18
Fig. 12 太田町遺跡土器溜り出土弥生式土器実測図2(1/3) (実測・製図中間)	19
Fig. 13 太田町遺跡土器溜り出土弥生式土器実測図3(1/3) (実測・製図中間)	21
Fig. 14 太田町遺跡第4号住居跡出土土器実測図(1/3) (実測・製図中間)	23
Fig. 15 太田町遺跡第6号住居跡出土土器実測図(1/3) (実測・製図中間)	23
Fig. 16 太田町遺跡第7号住居跡出土土器実測図(1/3) (実測・製図中間)	24
Fig. 17 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図1(1/3) (実測・製図中間)	27
Fig. 18 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図2(1/3) (実測・製図中間)	29
Fig. 19 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図3(1/3) (実測・製図中間)	31
Fig. 20 太田町遺跡出土弥生式土器実測図1(1/3) (実測・製図中間)	33
Fig. 21 太田町遺跡出土弥生式土器実測図2(1/3) (実測・製図中間)	34
Fig. 22 太田町遺跡出土弥生式土器実測図3(1/3) (実測・製図中間)	35
Fig. 23 太田町遺跡出土弥生式土器実測図4(1/3) (実測・製図中間)	36
Fig. 24 太田町遺跡出土弥生式土器実測図5(1/3) (実測・製図中間)	37
Fig. 25 太田町遺跡出土弥生式土器実測図6(1/3) (実測・製図中間)	38
Fig. 26 太田町遺跡出土弥生式土器実測図7(1/3) (実測・製図中間)	39
Fig. 27 太田町遺跡出土土器実測図1(1/3) (実測・製図中間)	53
Fig. 28 太田町遺跡出土土器実測図2(1/3) (実測・製図中間)	54
Fig. 29 太田町遺跡出土土器実測図3(1/3) (実測・製図中間)	55
Fig. 30 太田町遺跡出土土器実測図4(1/3) (実測・製図中間)	56

	頁
Fig. 31 太田町遺跡出土土師器実測図 5 (1/3) (実測・製図中間)	57
Fig. 32 太田町遺跡出土須恵器実測図 1 (1/3) (実測・製図石山)	66
Fig. 33 太田町遺跡出土須恵器実測図 2 (1/3) (実測・製図石山)	67
Fig. 34 太田町遺跡出土鉄器実測図(1/2) (実測・製図石山)	69
Fig. 35 太田町遺跡出土滑石製品実測図(実大) (実測・製図石山)	70
Fig. 36 太田町遺跡出土歴史時代土師器・瓦器・青磁実測図(1/3) (実測・製図中間)	71
Fig. 37 太田町遺跡出土弥生終末～古式土師器分類表(1/6) (作製中間)	折込
Fig. 38 川原庵山遺跡・川原庵山古墳群周辺地形図(1/3,000) (原図日本道路公団, 製図石山)	79
Fig. 39 川原庵山遺跡遺構全体図(1/100)(実測石山・副島(源)・岩崎・瀬戸・川述(公)・内田, 製図中間)	80
Fig. 40 川原庵山遺跡土層断面図(1/40) (実測瀬戸・川述(公), 製図中間)	81
Fig. 41 川原庵山遺跡土器出土状態実測図(1/20) (実測瀬戸・菊地・岩崎, 製図中間)	82
Fig. 42 川原庵山遺跡弥生式土器 1 (1/3) (実測・製図中間)	83
Fig. 43 川原庵山遺跡弥生式土器 2 (1/3) (実測・製図中間)	84
Fig. 44 川原庵山遺跡出土石斧実測図(1/2) (実測平島, 製図中間)	86
Fig. 45 川原庵山遺跡出土石鏃(23/) (実測・製図中間)	86
Fig. 46 川原庵山第 5 号墳墳丘測量図(1/200) (実測石山・児玉・中間・次郎丸, 製図児玉)	87
Fig. 47 川原庵山第 5 号墳地山整形面測量図(1/100) (実測石山・児玉・中間・次郎丸, 製図二神)	88
Fig. 48 川原庵山第 5 号墳地山整形面断面図(1/80) (実測児玉・次郎丸, 製図二神)	88
Fig. 49 川原庵山第 5 号墳主体実測図(1/30) (実測児玉・次郎丸, 製図大石)	90
Fig. 50 川原庵山第 5 号墳体出土遺物実測図(1/2) (実測・製図児玉)	90
Fig. 51 川原庵山第 4 号墳墳丘測量図(1/100) (実測上野・池辺・小宮山, 製図二神)	91
Fig. 52 深町第 1・2 号墳・原口 B 1 号墳周辺地形図(1/3,000)(原図日本道路公団, 製図平田)	93
Fig. 53 深町第 1・2 号墳墳丘測量図(1/300) (実測石山・中間・高田・進, 製図中間)	94
Fig. 54 深町第 1・2 号墳発掘後全体図(1/300) (製図中間)	95
Fig. 55 深町第 1 号墳墳丘断面図(1/80) (実測川述(公)・進, 製図石山)	96
Fig. 56 深町第 1 号墳主体部実測図(1/30) (実測石山・中間・川述(公)・進, 製図石山)	96~97
Fig. 57 深町第 2 号墳地山整形面測量図(1/30) (実測石山・中間・川述(公)・進, 製図中間)	98
Fig. 58 深町第 2 号墳墳丘断面図(1/80) (実測・製図中間)	100
Fig. 59 深町第 2 号墳主体部実測図(1/30) (実測・製図中間)	101
Fig. 60 深町第 2 号墳南東裾部壺棺実測図(1/20) (実測・製図石山)	100~101
Fig. 61 深町第 2 号墳南東裾部壺棺使用土器実測図(1/4) (実測・製図石山)	103
Fig. 62 深町第 1 号墳南側出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図石山)	104
Fig. 63 深町第 1 号墳盛土中出土石器実測図(2/3) (実測・製図平ノ内)	105
Fig. 64 原口 B 1 号墳墳丘実測図 (1/200) (実測石山・児玉・川述(公), 製図大石)	107
Fig. 65 原口 B 1 号墳地山整形面実測図 (1/100) (実測石山・児玉・川述(公), 製図大石)	108
Fig. 66 原口 B 1 号墳墳丘断面図(1/80) (実測児玉・進, 製図二神)	108~109
Fig. 67 原口 B 1 号墳内部主体実測図(1/30) (実測児玉・川述(公), 製図平田)	折込
Fig. 68 原口 B 1 号墳墳丘内出土弥生式土器実測図(1/3) (実測・製図石山)	110

	頁
Fig. 69 水上遺跡周辺地形図(1/3,000) (原図日本道路公団, 製図中間)	112
Fig. 70 水上A・B区遺構全体実測図(1/300) (実測次郎丸・児玉・中間, 製図中間)	113
Fig. 71 水上B区第1号土壙・D区第1号土壙実測図(1/40) (実測児玉, 製図中間)	115
Fig. 72 水上D区出土縄文式土器(1)拓影(1/3) (実測平島・中間手拓, 製図平島)	116
Fig. 73 水上D区出土縄文式土器(2)拓影(1/3) (実測平島・中間手拓, 製図平島)	117
Fig. 74 水上遺跡出土石器実測図(2/3) (実測・製図中間)	119
Fig. 75 水上E区遺構全体実測図(1/300) (実測児玉・次郎丸・音成, 製図中間)	121
Fig. 76 水上E1号墳石室及び周溝土層断面実測図(1/60) (実測立石・福井・次郎丸・児玉・諸隈・音成, 製図平島)	122
Fig. 77 水上E1号墳出土須恵器・土師器実測図(1/3) (実測平島・中間, 製図平島)	123
Fig. 78 水上E1号墳出土玉類実測図(実大) (実測・製図中間)	124
Fig. 79 水上E1号墳出土鉄鏃実測図(1/2) (実測・製図中間)	126
Fig. 80 水上E地区第1・2号土壙実測図(1/40) (実測末永・児玉・福井・音成・次郎丸, 製図中間)	127
Fig. 81 水上E地区第3・4・5号土壙実測図(1/40) (実測児玉・坂井・次郎丸, 製図中間)	128
Fig. 82 水上E地区石組掘立柱及び溝状遺構実測図(1/40) (実測次郎丸・立石・福井・音成, 製図中間)	129
Fig. 83 古野古墳群全体図(1/1,000) (原図K. K. 戸田建設, 製図平田)	折込
Fig. 84 古野古墳群A単位全体図(1/300) (実測石山・児玉・川述(公), 製図平田)	134
Fig. 85 古野第3号墳石室実測図(1/60) (実測・製図児玉)	折込
Fig. 86 古野第3号墳遺物出土状態実測図(1/40) (実測・製図児玉)	135
Fig. 87 古野第3号墳出土土器実測図(1/3) (実測・製図石山)	136
Fig. 88 古野第4号墳墳丘断面図(1/80) (実測高田, 製図石山)	折込
Fig. 89 古野第4号墳石室実測図(1/60) (実測・製図石山)	折込
Fig. 90 古野第4号墳石室閉塞状態実測図(1/40) (実測・製図石山)	137
Fig. 91 古野第4号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図石山)	138
Fig. 92 古野第5号墳石室実測図(1/60) (実測中間・中牟田, 製図中間)	139
Fig. 93 古野第5号墳出土土玉実測図(実大) (実測・製図中間)	140
Fig. 94 古野第5号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図石山)	140
Fig. 95 古野第6号墳石室実測図(1/60) (実測中牟田, 製図中間)	141
Fig. 96 古野第6号墳出土玉類実測図(実大) (実測・製図中間)	142
Fig. 97 古野第7号墳石室実測図(1/60) (実測上野, 製図中間)	143
Fig. 98 古野第7号墳B・C単位実測図(1/300) (実測石山・児玉・川述(公), 製図平田)	144
Fig. 99 古野第16号墳石室実測図(1/60) (実測児玉, 製図石山)	145
Fig. 100 古野第17号墳石室実測図(1/60) (実測副島(邦), 製図石山)	146
Fig. 101 古野第17号墳出土磁器実測図(1/3) (実測副島(邦), 製図石山)	146
Fig. 102 古野第18号墳石室実測図(1/60) (実測児玉・平ノ内, 製図平ノ内)	147
Fig. 103 古野第22号墳石室実測図(1/60) (実測児玉・平ノ内, 製図平ノ内)	148
Fig. 104 古野第19号墳石室実測図(1/60) (実測・製図中間)	150
Fig. 105 古野第19号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図中間)	151
Fig. 106 古野第19号墳玄室床面出土装身具実測図(実大) (実測・製図中間)	151

	頁
Fig. 107 古野第19号墳出土鉄器実測図(1/2) (実測・製図中間)	152
Fig. 108 古野第20号墳石室実測図(1/60) (実測児玉・平ノ内・中間, 製図中間)	153
Fig. 109 古野第20号墳玄室床面出土装身具実測図(実大) (実測・製図中間)	154
Fig. 110 古野第20号墳出土鉄器実測図(1/2) (実測・製図中間)	155
Fig. 111 古野第20号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図中間)	156
Fig. 112 古野第21号墳石室実測図(1/60) (実測石山・平ノ内, 製図石山)	157
Fig. 113 古野第21号墳東支群D・E単位実測図(1/300) (実測・製図平田)	158
Fig. 114 古野第8号墳石室実測図(1/60) (実測・製図筑波大)	159
Fig. 115 古野第8号墳石室内遺物出土状態実測図(1/30) (実測・製図筑波大)	160
Fig. 116 古野第8号墳出土遺物実測図1(1/3) (実測・製図筑波大)	162
Fig. 117 古野第8号墳出土遺物実測図2(1/3) (実測・製図筑波大)	163
Fig. 118 古野第9号墳墳丘断面実測図(1/80) (実測・製図筑波大)	164
Fig. 119 古野第9号墳石室実測図(1/60) (実測・製図筑波大)	166
Fig. 120 古野第9号墳石室内遺物出土状態実測図(1/30) (実測・製図筑波大)	167
Fig. 121 古野第9号墳出土遺物実測図1(1/3) (実測・製図筑波大)	168
Fig. 122 古野第9号墳出土遺物実測図2(1/3) (実測・製図筑波大)	169
Fig. 123 古野第10号墳墳丘断面図(1/60) (実測・製図筑波大)	170
Fig. 124 古野第10号墳石室実測図(1/60) (実測・製図筑波大)	170
Fig. 125 古野第10号墳玄室内遺物出土状態実測図(1/60) (実測・製図筑波大)	171
Fig. 126 古野第10号墳出土遺物実測図(1)(1/2) (実測・製図筑波大)	172
Fig. 127 古野第10号墳出土遺物実測図(2)(1/3) (実測・製図筑波大)	173
Fig. 128 唐尺方眼と石室平面プランの適合状況 上第9号墳, 下第8号墳(1コマ30cm)(作製蒲原) ...	176
Fig. 129 古野第12号墳石室実測図(1/60) (実測児玉, 製図平田)	182
Fig. 130 古野第12号墳遺物出土状態実測図(1/60) (実測児玉)	184
Fig. 131 古野第12号墳出土鉄器実測図(1/2) (実測・製図副島)	184
Fig. 132 古野第12号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図石山)	185
Fig. 133 古野第13号墳墳丘断面図(1/80) (実測平ノ内, 製図平山)	186~187
Fig. 134 古野第13号墳石室実測図(1/60) (実測平ノ内, 製図石山)	折込
Fig. 135 古野第13号墳出土耳環・刀3片実測図(1/2) (実測・製図石山)	188
Fig. 136 古野第13号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図石山)	188
Fig. 137 古野第14号墳石室実測図(1/60) (実測・製図中間)	189
Fig. 138 古野第14号墳出土須恵器実測図(1/3) (実測・製図中間)	190
Fig. 139 古野第14号墳周溝底出土模造品実測図(1/3) (実測・製図中間)	191
Fig. 140 古野第15号墳石室実測図(1/60) (実測児玉, 製図平田)	193
Fig. 141 古野第23号墳石室実測図(1/60) (実測児玉・川述(公), 製図平ノ内)	194
Fig. 142 古野第2号墳墳丘断面図(1/80) (実測高田, 製図石山)	195
Fig. 143 古野第2号墳石室実測図(1/60) (実測高田, 製図石山)	195
Fig. 144 古野第2号墳出土土器実測図(1/3) (実測・製図石山)	195

	頁
Fig. 145 古野第11号墳石室および墳丘断面実測図(1/60) (実測・製図筑波大)	196
Fig. 146 古野第24号墳出土土器実測図(1/3) (実測・製図筑波大)	197
Fig. 147 古野第1号墳実測図(1/60) (実測中間・中牟田, 製図中間)	198
Fig. 148 花見古墳石室平面図 (日本考古学年報8から転載)	205
Fig. 149 中ノ坪壙棺墓検出状態実測図(1/20) (実測石山・中間, 製図中間)	209
Fig. 150 中ノ坪壙棺実測図(1/6) (実測・製図中間)	210
Fig. 151 藤津第1号石棺実測図(1/20) (実測石山・中間・児玉・川述(公), 製図石山)	211
Fig. 152 藤津第1号石棺棺材工具痕拓影(1/2) (実測手拓・石山)	212
Fig. 153 藤津第1号出土状態実測図(1/20) (実測石山・中間・児玉・川述(公), 製図石山)	212
Fig. 154 藤津第1号石棺出土鉄器実測図(1/2) (実測・製図石山)	213
Fig. 155 鴻ノ巣第1号石棺出土鉄器実測図(1/3) (実測・製図石山)	214

表 目 次

	頁
Tab. 1 土器の観察 (その1) 太田町遺跡溝1出土弥生式土器	13. 14
Tab. 2 土器の観察 (その2) 太田町遺跡溝36出土弥生式土器	14~16
Tab. 3 土器の観察 (その3) 太田町遺跡土器溜出土弥生式土器	16. 17. 20. 21
Tab. 4 土器の観察 (その4) 太田町遺跡第4号住居跡出土土師器	21. 22
Tab. 5 土器の観察 (その5) 太田町遺跡第6号住居跡出土土師器	22. 23
Tab. 6 土器の観察 (その6) 太田町遺跡第7号住居跡出土土師器	23~25
Tab. 7 土器の観察 (その7) 太田町遺跡その他の遺構出土土器	25. 26. 28. 30. 32
Tab. 8 土器の観察 (その8) 太田町遺跡包含層出土土器1	40. 41
Tab. 9 土器の観察 (その9) 太田町遺跡包含層出土土器2	42. 43
Tab. 10 土器の観察 (その10) 太田町遺跡包含層出土土器3	43~45
Tab. 11 土器の観察 (その11) 太田町遺跡包含層出土土器4	45~47
Tab. 12 土器の観察 (その12) 太田町遺跡包含層出土土器5	47~48
Tab. 13 土器の観察 (その13) 太田町遺跡包含層その他出土土器1	48~49
Tab. 14 土器の観察 (その14) 太田町遺跡包含層その他出土土器2	49. 50
Tab. 15 土器の観察 (その15) 太田町遺跡包含層その他出土土器3	50~52
Tab. 16 土器の観察 (その16) 太田町遺跡包含層その他出土土器4	52. 58. 59
Tab. 17 土器の観察 (その17) 太田町遺跡包含層その他出土土器5	59~62
Tab. 18 土器の観察 (その18) 太田町遺跡包含層その他出土土器6	62~64

	頁
Tab. 19 土器の観察(その19) 太田町遺跡包含層その他出土土器 7	64, 65
Tab. 20 土器の観察(その20) 太田町遺跡包含層その他出土土器 8	71, 72
Tab. 21 土器の観察(その1)	81, 83~85
Tab. 22 土器の観察(その2)	85
Tab. 23 水上 E 1 号墳出土玉類計測一覧表	124, 125
Tab. 24 古野第 8 号墳遺物番号対照表	163~164
Tab. 25 古野第 9 号墳遺物番号対照表	169
Tab. 26 古野第10号墳遺物番号対照表	174
Tab. 27 各古墳出土須恵器編年表	181

I 調査の経過

古賀工事区関係（道路公団福岡工事事務所担当）の遺跡の調査は、昭和47～50年度にまたがり、49年度からは現地に調査事務所を設置し、常時3～4名の職員（技師）を配置して行なわれた。48年当時は、古賀～鳥栖間の開通を目指す公団と施工業者の工程に合わせる形で調査着手順が決定されており、目まぐるしく調査地点を移動せざるを得ない状況であった。この時期の古賀工事区関係についての経緯は九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳに詳述しているので、それに拠られたい。

49年度以降では、古賀～筑豊西I.C.間に所在する遺跡の調査を行なったが、小I.C.の新設に伴ない川原庵山5号墳の調査の必要が唐突に生じ、また、新たに古賀町薦野地区に採土場を設けたいとする公団側の意向が示され、昭和49年秋にはいったん現地調査を了え報告書の刊行準備を進めたいとする当課のスケジュールと大きく齟齬することとなった。49年度には、東接する鞍手郡若宮町、宮田町においても、筑豊東～西I.C.間（直方工事事務所担当）の調査が着手され、同区間での地点の追加が相次ぎ、調査体制の増強がない限り調査期間の大巾延長が既に必至の情勢であった。これに加えて、既調査遺跡についての図面・出土遺物の整理が未着手状態に近く、報告書の刊行が遅延を重ねており、現場・室内両作業共に難問が累積し、しかもこうした異常が日常化した状態から脱出するために、年間調査日数を150日に抑えようと文化課担当職員で申し合せたばかりであり、対策に苦慮する日々が続いた。

古賀工事区関係で特に問題となったのは、土取場に所在する24基から成る古野古墳群についてであった。当初遺構の分布は稀薄と見られたが、念のためのトレンチ調査を行なったところ円墳の所在（第3号墳）が知られ、その後の分布調査で20基を超えることが確実となった。加えて、用買交渉も進んでおり、他にこれを求めても同様に文化財が所在することが予想され、調査せざるを得ない状態であったが、上述の我々内部の問題と同時に直方工事事務所からの増援要望もあり、公団側に工程の見直しを再三にわたって要望した。協議を重ねた結果、古野古墳群については、年内に最高所にある1～6号墳を調査することによって50年3月分までの採土量を確保し、50年3月に筑波大学調査団（団長増田精一教授）が5基を、4月以降に残りを調査するという、まさに切り売りのな処置をとることとなった。

かくして、昭和50年6月30日をもって古賀発掘調査事務所を閉鎖・撤収し、同工事区関係の調査は完了した。ひき続いて7月3日には、鞍手郡鞍手町に事務所を新設し、中山工事区関係

の発掘調査に着手したのである。

これらの他に、ブルドーザによる試掘調査を行なった地区もあるが、遺構・遺物を確認していないので、これらについては省略している。

以下に、古賀工事区関係の調査工程表を掲げる。

昭和47年度

※ 川原庵山第6～8号墳（古3・4・12地点）

自 昭和48年1月6日

至 〃 3月20日

川原庵山遺跡（古9地点）

自 昭和48年2月1日

至 〃 3月8日

※ 道田第1号墳（古2地点）

自 昭和48年3月9日

至 〃 3月20日

※ 下別当第1号墳（古10地点）

自 昭和48年3月9日

至 〃 3月20日

昭和48年度

太田町遺跡（古13地点）

自 昭和48年4月6日

至 〃 5月10日

※ 原口A1号墳（古11地点）

自 昭和48年5月11日

至 〃 6月10日

昭和49年度

川原庵山5号墳（古16地点）

自 昭和49年5月16日

至 〃 6月18日

水上遺跡（古8地点）

自 昭和49年6月4日

至 〃 9月11日

深町第1・2号墳（古5・6・14地点）

自 昭和49年8月8日

至 〃 10月31日

原口B1号墳（古18地点）

自 昭和49年9月7日

至 〃 10月12日

古野古墳群（古17地点）

I 自 昭和49年10月9日

至 〃 12月7日

II 昭和50年3月14日

至 〃 3月31日

昭和50年度

III 自 昭和50年4月2日

至 〃 6月30日

- 註 1. 地点名のうち、古は古賀地区を示し、また番号は『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報（総編）』による。
2. ※印は、＜九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告＞にて、報告済分を示す。
3. 古18地点については、古11地点の旧原口1号墳の至近にあり、原口古墳群として包括されるが年代的に先後関係にあるため、これを原口古墳群B支群第1号墳（B1号墳）、旧原口1号墳をA支群第1号墳（A1号墳）と改称している。

調査の実施にあたっては、主として別記の文化課職員が担当し、多くの調査補助員諸君の御尽力を得た。なお、古野古墳群第III次調査については下記編成による筑波大学調査団に担当いただいた。

筑波大学調査団

団長	教授	増田 精一		
副団長	助教授	加藤 晋平		
調査員	助手	禿 仁志		
〃		松浦有一郎（東京教育大学大学院博士課程）		
〃		田平 徳栄（東京教育大学大学院博士課程）		
	学生	青木 一元	井上 哲夫	上杉 茂
		尾垣 勝彦	蒲原 宏行	川内麻里子
		小林 浩	小松 進	小谷内郁宏
		佐田穰太郎	新開 淑子	新谷 仁志
		鈴木 悦子	西口 徹	福島 律子

II 位置と環境

藤井 一徳	細川 正徳	洞口 正史
松居 尚	村瀬 信之	室本 信行
山中 豊		

福岡県教育庁管理部文化課

昭和47年度

庶務担当	主事	植田 実
調査担当	技師	石山 勲

昭和48年度

庶務担当	主事	滝 龍二	嘱託	因 将太
調査担当	技師	石山 勲	同	川述 昭人

昭和49年度

庶務担当	主事	滝 龍二	嘱託	因 将太
調査担当	技師	石山 勲	同	中間 研志 同 児玉 真一

昭和50年度

庶務担当	主事	山本 文和	嘱託	因 将太
調査担当	技師	石山 勲	同	副島 邦弘 同 中間 研志

調査補助員

昭和47年度	岩崎 逸男	瀬戸 孝司	川述 公紀
昭和48年度	佐々木隆彦	川述 公紀	副島 源司
昭和49年度	次郎丸達朗	川述 公紀	進 博次
	八木 達也	諸隈 正人	音成 信
	福井 真弓	末永 博治	鶴崎久美子
	神代 公治	坂井 隆	中牟田賢治
	高田 一弘		
昭和50年度	日高 正幸	平ノ内幸治	

上記の他、文化課上野精志、森田勉、池辺元明三技師の来援を得た。(石山 勲)

II 位置と環境

古賀町は粕屋郡に属するが、西は玄界灘に面し、北は宗像郡、東は鞍手郡にそれぞれ接しており、所謂裏粕屋にあたる地域である。このため、福岡平野に近い表粕屋（宇美町・須恵町・粕屋町等）とは自ずと考古学的環境において相違があり、特に古墳時代には北接する宗像地区

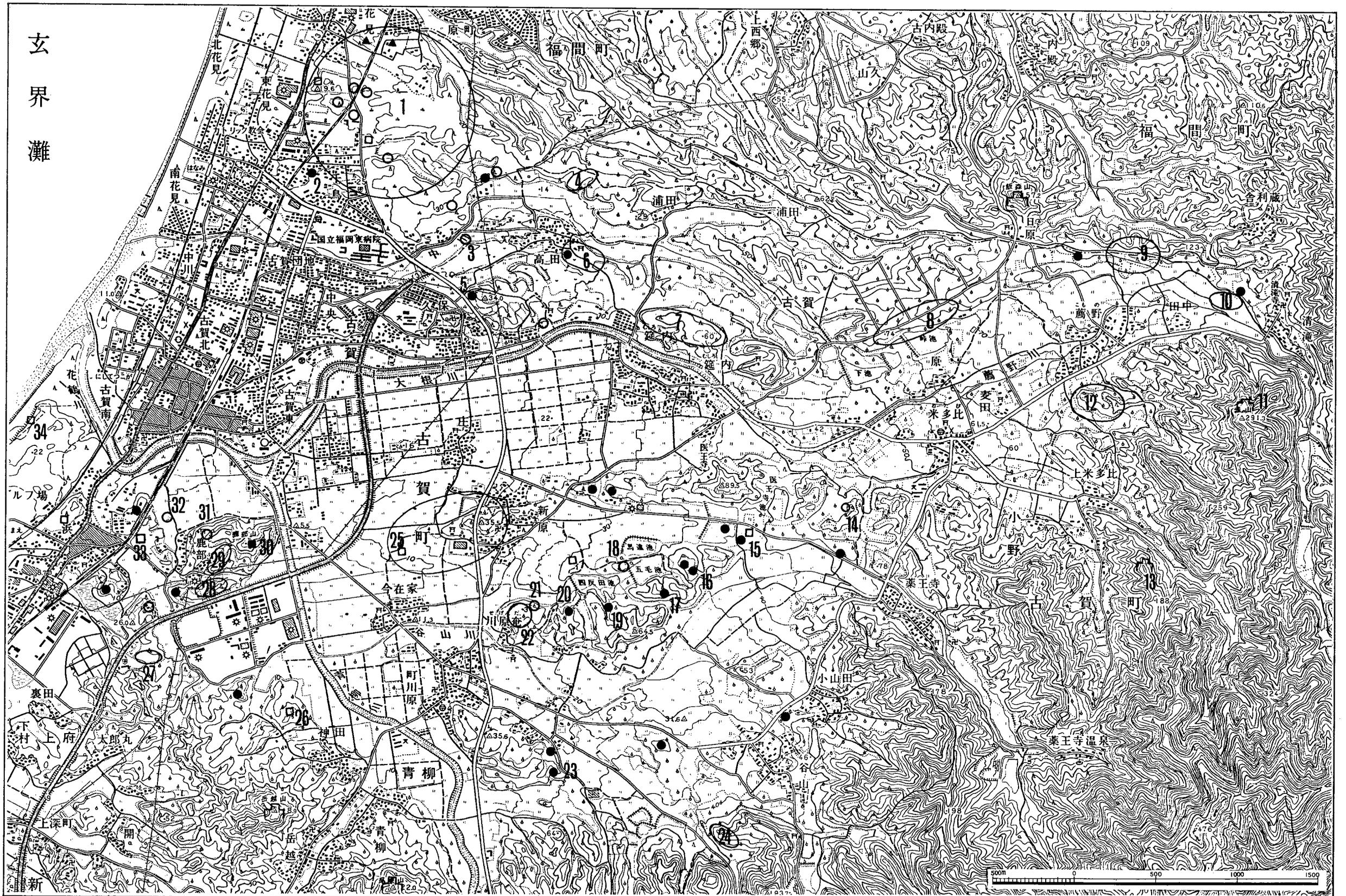


Fig. 1 古賀町周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

からの強い影響がみられることは次章以下で述べるとおりで、また確実な前方後円墳が知られていないことも特徴的である。

また弥生時代の当町を特色づけるものとしては、支石墓を想定させる巨石群の存在が挙げられる。皇石宮（Fig.1—31）の御神体としての巨石（ $2.5 \times 2 \times 0.5m$ ）は著名であるが、大字薬王寺の山中にある一巨石（Fig.1—14）もまたその可能性が強く、小字（立石）にその名をとどめている。これらの他さらに2カ所に巨石が所在することが知られており、うち一石は原位置から今在家（いまざいけ）の公民館庭へと移動されている。これらの巨石については調査例がなく実態はなお不明のままであるが、現春日市を中心とする福岡平野との強い関連を示唆するものとして注意される。

時代は降って戦国時代にいたっても、当町北部は大友・大内両勢力のボーダー・ラインとなり、大友側の高橋・立花および薦野（こもの）の三氏は青柳・米多比（めたび）・薦野にかけて、対する大内側の宗像大宮司家は花見から隣接する福岡町にかけて各散兵し、局地戦がくり返されている。

以上を要するに、古賀町一帯は各時期により多少の相違はあるが、基本的には当該地域の南北にある二つの大きな文化的中心の周辺部・かつ接点であったと見做される点にその特色が求められる。

なお、当町に所在する遺跡の個々については、下記の文献を参照されたい。（石山 勲）

『福岡県粕屋郡花見古墳』＜日本考古学年報8＞所収 1973年

『鹿部山遺跡』鹿部山遺跡調査会 1973年

『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 1973年

『佐谷・脇田山古墳調査報告』福岡県教育委員会 1974年

＜九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ＞福岡県教育委員会 1974年

	1. 浜山花見遺跡群	2. 花見古墳	3. 久保長崎遺跡
	4. 佐谷古墳群（6基）	5. 鴻ノ巣第1号石棺	6. 高田石棺群
	7. 小森古墳群（19基）	8. 峠古墳群（12基）	9. 中原古墳群（17基）
遺 跡 記 号	10. 畑田古墳群（4基）	11. 薦野城跡 <small>（こもの）</small>	12. 古野古墳群（22基）
▲ 縄文時代	13. 米多比城跡 <small>（めたび）</small>	14. 立石ドルメン	15. 水上遺跡群
○ 弥生時代	16. 深町古墳群	17. 原口B1号墳	18. 中ノ坪壘棺墓
● 古墳時代	19. 原口A1号墳	20. 下別当第1号墳	21. 川原庵山遺跡 <small>（せげんだやま）</small>
■ 歴史時代	22. 川原庵山古墳群（8基）	23. 道田第1号墳	24. 良仙寺古墳群（6基）
□ 複合遺跡	25. 太田町遺跡	26. 藤津遺跡	27. 播摩古墳群（3基）
	28. 浦口古墳群（4基）	29. 唐ヶ坪古墳群（6基）	30. 鹿部山経塚 <small>（ししふやま）</small>
	31. 皇石宮遺跡 <small>（おおいしぐう）</small>	32. 東町遺跡	33. 神ノ上遺跡
	34. 向浜遺跡	（太字は、本書所収遺跡）	

Ⅲ 各遺跡の調査

1. 太田町遺跡

Ⅲ-1 太田町遺跡

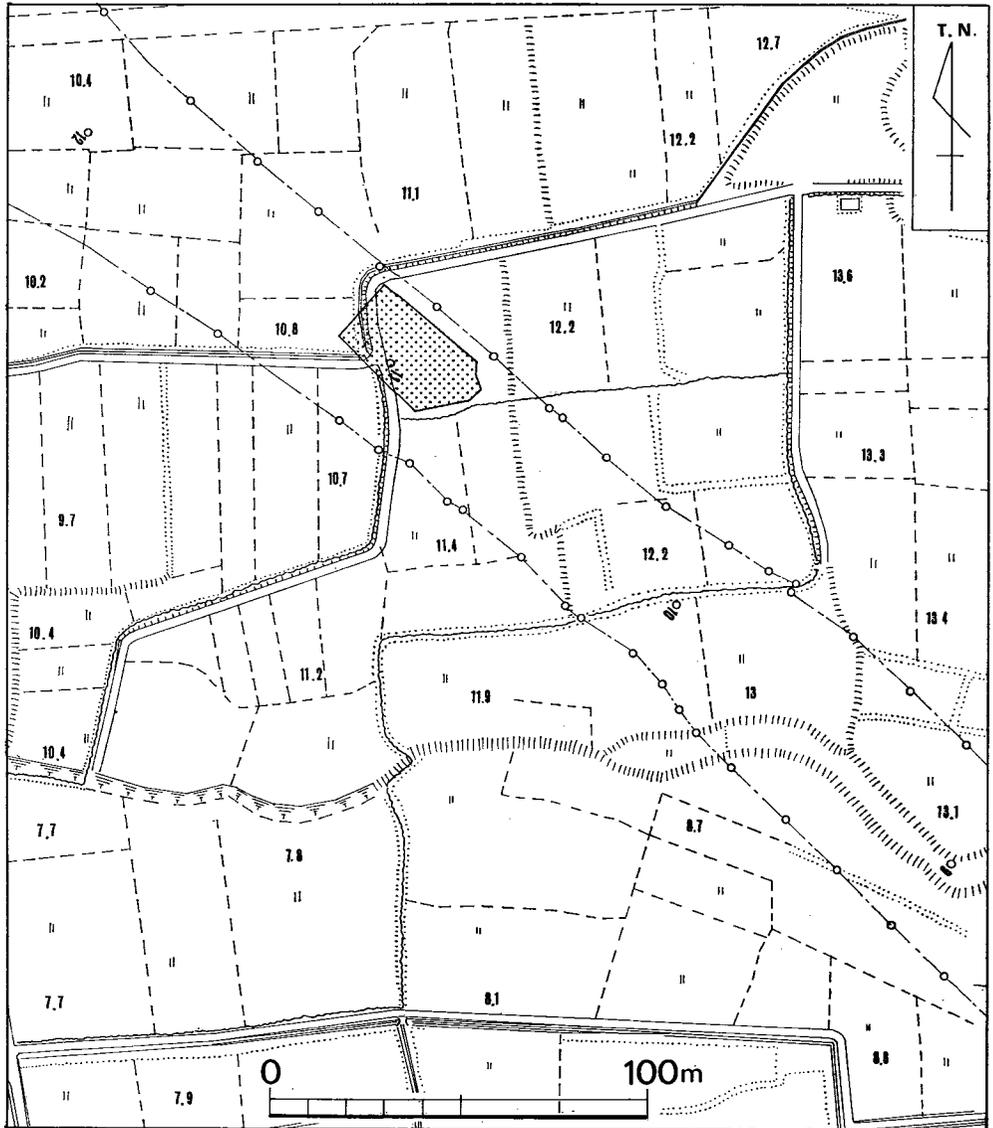
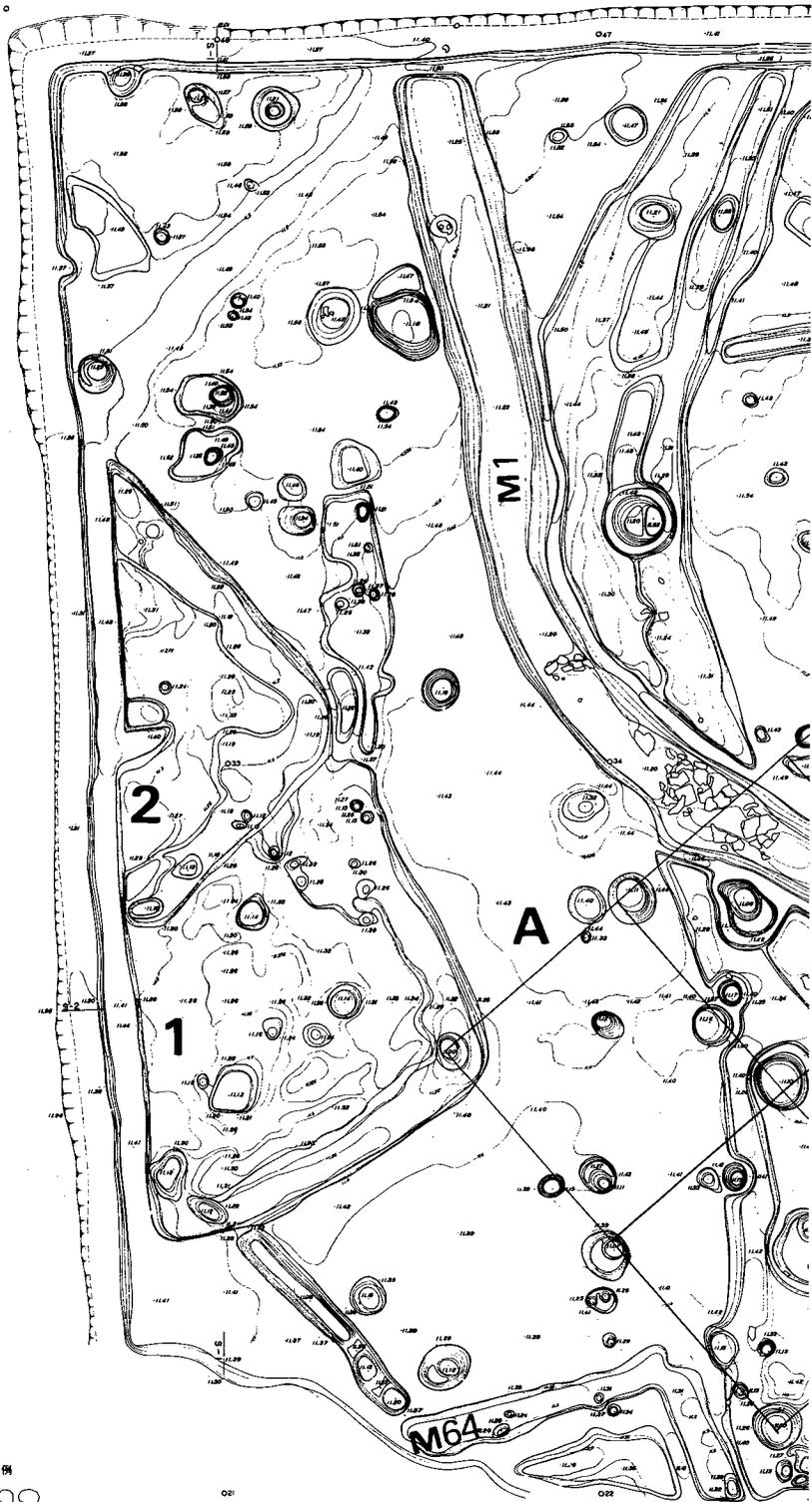


Fig. 2 太田町遺跡周辺地形図 (1/2,000)

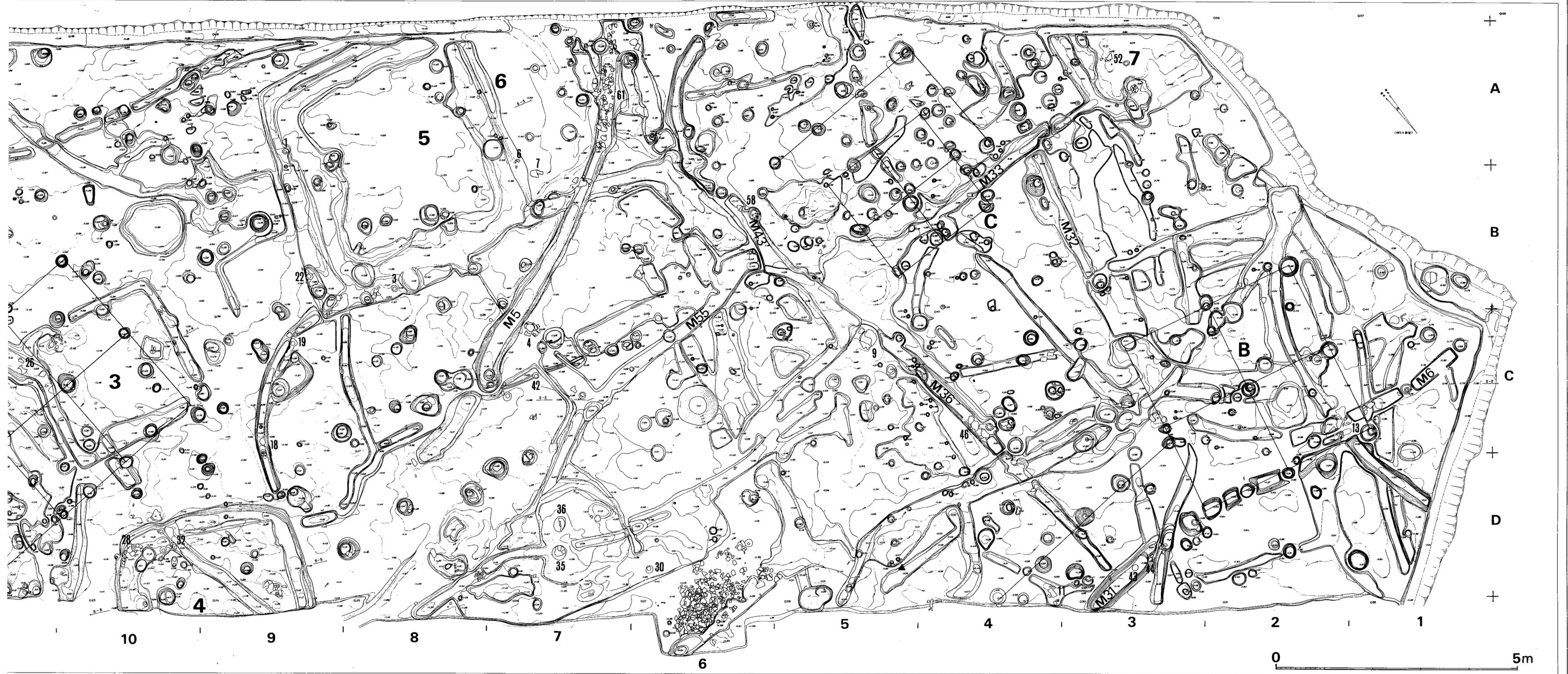


- 凡 例
- 土 層 ○
 - 穴上及び溝上 ○
 - 穴下及び溝下 ○
 - コンクリート 〰〰〰
 - 遺 蹟 点 O33
 - 遺 蹟 点 A
 - 新 築 部 〰〰〰
 - 切 取 部 〰〰〰

12

11

Fig. 3 太田町遺跡写真測量図 (縮尺1/60)



太田町遺跡は、南側水田との比高2.5~4.8mの東高西低の舌状台地上に位置している (Fig. 2)。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳに既述したように、当遺跡は工事着手後にその所在が確認されたという経緯がある。このため、調査範囲は未着手部分に限定され、また、逼迫した調査スケジュールの調整のため、奈良国立文化財研究所の御協力により写真測量を実施し、空中写真撮影直後に次の調査地点 (原口A 1号) へ移動した。従って、時間的な短縮とはなったが実測を行なう過程で遺構・遺物についての観察・理解がより深まるという通常の考古学的実測の利点を自ら放棄することとなり、土器を中心とする多種・多量の遺物を採取し得たものの遺構についてはその構造・性格に多くの不明点を残す結果となり、この点忸怩たるものがある。秀れた長所をもつ写真測量という手段を、時間短縮としてのみ用いた点にその原因の一つがあり、慙慙にたえない。

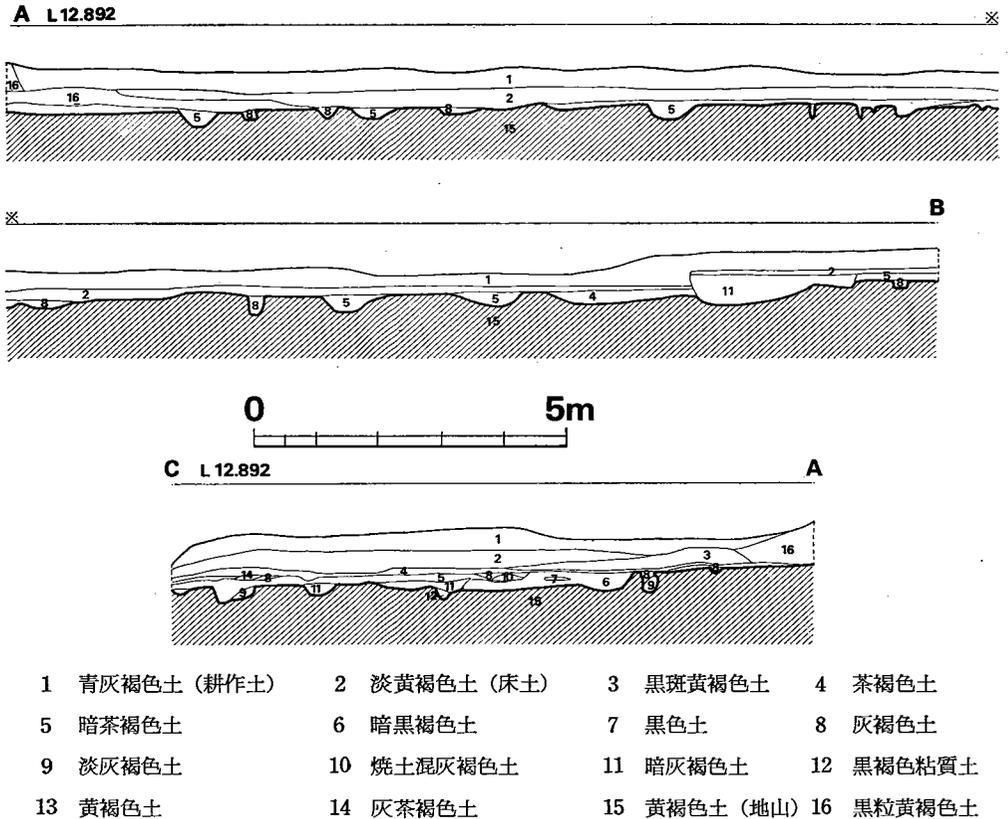


Fig. 4 太田町遺跡土層実測図 (1/120)

1. 遺 構 (Fig.3)

遺構は、溝 (M)、住居跡 (P. D.)、柱穴、群土器溜り等多種にわたるが、立地からみて当然発掘区域外にも達したとみられる。

溝 (Fig. 3—M)

調査区全体を縦横に走っているが、特に東半部に著しい。いずれも北あるいは東側が高く、南・西側に向って緩く下傾する。これらのうち溝 1・5・36は他に比して規模が大きく、かつ多量の弥生式土器を伴う。

住居跡 (Fig. 3—P. D. 1～7)

完掘したのは第3号住居跡のみであるが、いずれも隅丸不整形プランの小型住居跡であり、規模に比すれば巾の広い壁溝が全周する点が特徴的である。調査範囲の西半に集中しており、第7号住居跡のみが東偏している。

第1号住居跡は、1辺約3mとみられ、巾40～50cmの壁溝がめぐらされている。壁溝は西隅角が最も低く、これは他の住居跡とも共通する。第3号住居跡は、東西3.2m、南北3mで、壁溝の巾は20～55cm。第4号住居跡は、東西約4m。壁溝の巾は50cm内外で、東隅が最も高く、南・西へと下傾する。第5・6号住居跡は、方形周溝遺構と仮称したこともあるが、4本柱の住居址2軒が重複したものと見做される。東隅に当る部分に調査の便のために排水溝を設けたために完掘していないが、壁溝は両者とも全周していたと見られる。先行したと思われる内側の第5号住居跡が4.3mの方形プランであるのに対し、外側の第6号住居跡は東西長4.8m、南北長5.25mとプランに若干の相違がある。第6号住居跡の壁溝の方が高位にあり、土器を伴ない、第4号住居跡の方向へ排水溝を付設している。第7号住居跡は、第6号住居跡とは約11m離れている。以上の他、溝64もまた壁溝である可能性が強い。

柱穴群 (Fig. 3—A～C)

夥しい数に達し、特に調査区の東半に輻輳する点は溝と同様である。建物としての確実なまとまりをもつのは、2棟分である。A棟は桁行を略東西にとり、2間×3間、4m(2+2)×5.4m(1.8+1.8+1.8)の規模である。B棟は、2間×2間、1辺3.8m(1.9+1.9)とひとまわり小さく、一辺は北西から南東に向ってA棟とは少しく方向が異なる。この他に、A棟と略同方向に2間×2間、一辺2.4m(1.2+1.2)の規模かと思われるさらに小型のC棟や、柵列とも思われるまとまりがいくつかあるが判然としない。

土器溜り

東西約2.5m、南北約1.5mの範囲から多数の土器が検出された。平面的な広がりはあるが深くはない。

(石山 勲)

2. 遺物

(1) 石器

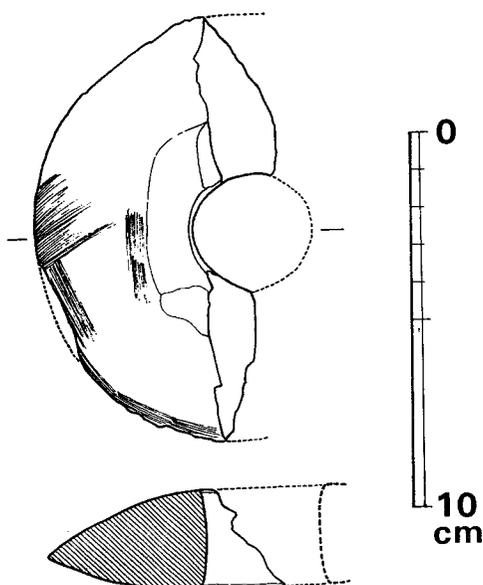


Fig. 5 太田町遺跡出土環状石斧
実測図 (1/2)

環状石斧 (Fig. 5)

玄武岩質の半欠品である。復原径11.5cm, 厚さ2.6cm, 孔径3.15cmを測る。全磨製で刃部は蛤刃状になり鋭いが, 周縁は使用による刃こぼれ痕が著しい。体部表面は擦痕が周縁を中心に観察される。

棒を装着した孔は上下端に敲打痕が顕著であり, 孔腹面は上下方向の擦痕がついている。

当品は弥生時代中期初頭の包含層から出土している。県内の弥生時代の環状石斧は9例(註1)知られ, 飯塚市甘木山遺跡(註2)は中期前半, 福岡市板付遺跡(註3)小郡市津古内畑遺跡(註4)は前期末頃の所産である。
(木下 修)

註 1 後藤直・沢皇臣編「板付 市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971~1974」〈福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集〉1976 所載の地名表による。

註 2 児島隆人・藤田等編「甘木山遺跡」『嘉穂地方史, 先史編』1973年

註 3 註1に同じ

註 4 柳田康雄編『津古内畑遺跡—第5次(遺構篇)』福岡県教育委員会 1974年

大型蛤刃石斧 (Fig. 6—1)

砂岩質の原材を用い, 幅5.4cm・厚さ4.0cm・現存長10.1cmを測る。重量359gを計る。全面にわたって研磨を施すが, 所々に敲打痕を残す。小型の蛤刃石斧になると推定される。

石鎌 (Fig. 6—2)

幅3.6cm・厚さ0.5cm・現存長5.5cmを計る。重量20gで安山岩を用いる。表面の風化が著しく調整痕ははっきりしないが, 図の下側を刃部と考え一応石鎌と推定したい。

敲石 (Fig. 6—3)

長さ9.8cm・幅4.9cm・厚さ4.0cmを計る。石質砂岩で重量249gを測る。側面および端部にあまり窪まない敲痕が見られる。自然転礫を転用したものと思われる。

砥石 (Fig. 7)

1は, 粘板岩質の原材を用い, 現存長7.5cm・幅6.1cm・厚さ0.9cmを計る。全面にわたって研磨され, 特に表面は中央がくぼみ, 一部に縦位の擦痕がみられる。

2は暗い白色を呈す, きめの細かい粘板岩質の原材を用い, 長さ8.1cm・最大幅3.5cm・厚さ

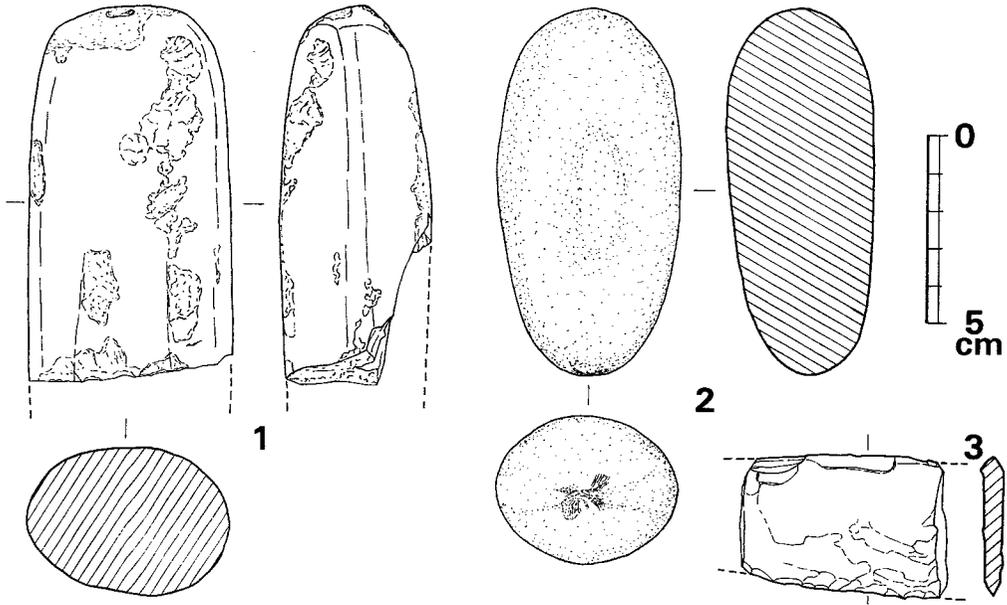


Fig. 6 太田町遺跡出土石器実測図 (1/2)

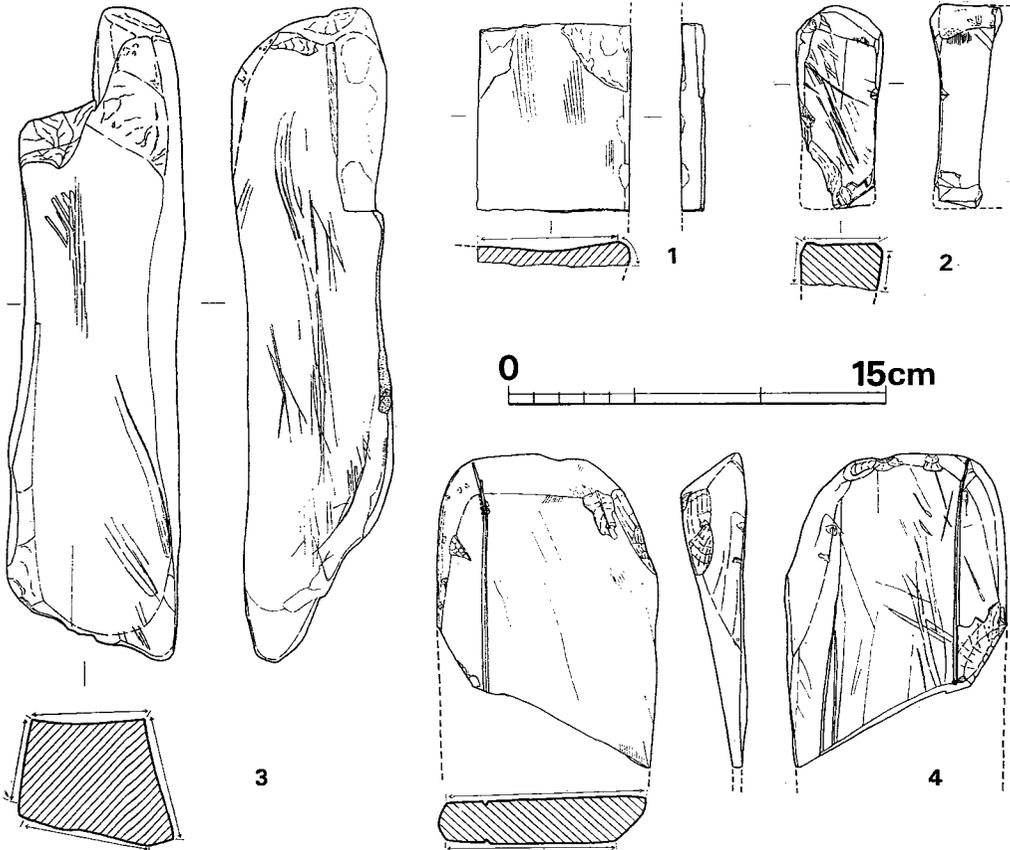
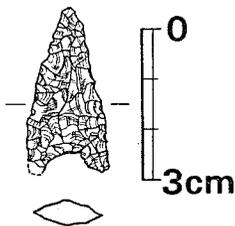


Fig. 7 太田町遺跡出土砥石実測図 (1/3)

1.9cmを計る。全面にわたって研磨され、特に表面は擦痕が著しい。両側面にはほとんど擦痕は見られず、つるつるしている。

3は、灰黒色のきめの細かい砂岩を用い、長さ26.1cm・幅6.0cm・厚さ5.1cmを計る大型品である。表面および両側面はかなり使用され擦痕も残っている。裏面は凸凹しているが、擦痕はかなり見られる。

4は、灰黒色のきめの細かい砂岩を用い、現存長12.5cm・幅8.2cm・厚さ1.8cmを計る。表・裏面、両側面ともよく使用され、擦痕もかなり残っている。幅2mm・深さ1.5mmの断面V字状の沈線が表面から裏面にかけて左端に施されている。裏面の沈線と割れ口との境に径2mm・深さ3mmぐらいの穿孔がみられる所から、この砥石の一部を切り落そうとしたのではないかと考えられる。以上の砥石のうち、3・4は床土下層～遺構面より出土しており、当遺跡出土の各種鉄器の存在を考えると、それらの研磨に使用されたことは想像に難くない。4は粗砥に、3は中砥もしくは仕上げ砥に、1・2は仕上げ砥に考えられよう。(平島勇夫)



石鎌 (Fig. 8)

黒色半透明良質の腰岳系黒曜石を用い、表裏ともに丁寧な調整を施す。長さ3.25cm、巾1.6cmを測り、抉りの浅い長めの類である。黒色土層出土品である。

(中間研志)

Fig. 8 太田町遺跡出土石鎌実測図(2/3)

(2) 土器

A. 遺構に伴う弥生式土器・土師器

Tab. 1 土器の観察 (その1) 太田町遺跡溝1出土弥生式土器 (備考欄のゴチック体はFig. 3の土器No.と一致する)

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig. 9-1	(1) 口径 20.4cm (2) — (3) 胴最大径 19.5	・頸部内面に稜を作り薄くやや長く外反する 口縁 ・横ナデか	・あまり張らない胴部 ・内面へら削りではない	・胎土に粗砂極めて多量 ・焼成不良 ・白褐色	
甕 Fig. 9-2	(1) 22.6 (2) — (3) —	・内面に稜を作り外反する口縁 ・口唇部角ばり外面中ぶくらみ	・薄手で張らない胴部 ・内外面斜めハケ	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・内面茶褐色	

		<ul style="list-style-type: none"> ・内面粗い横ハケ ・外面横ナデ 		<ul style="list-style-type: none"> ・外面暗褐色 	
甕 Fig. 9-3	(1) 20.8 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部内面に稜を作り丸く大きく外反する口縁 ・内面下半横ハケ, 中位ハケの上横ナデ ・外面横ナデ頸部外面縦ハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・かなり張る胴部 ・外面細かい斜めハケ ・内面上端横ナデ以下縦ハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土かなり精良 ・焼成良好 ・暗褐色～暗茶色 	
底部 Fig. 9-4	(1) — (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・厚く小さい不安定な平底風丸底 ・内面細かい斜めハケ ・小さい鉢か 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・内面明茶色～外面暗黄褐色 	
		杯部の特徴	脚部の特徴		
高杯 Fig. 9-5	(1) 杯部径 19.7 (2) 器高 16.8 (3) 脚部径 15.8	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく開き浅い杯部 ・口唇内面に強いナデによる不明瞭な稜 	<ul style="list-style-type: none"> ・細く長い脚柱から自然に開く ・対称に2孔 ・全面丁寧なナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡茶褐色 	26
高杯 Fig. 9-6	(1) — (2) — (3) 14.1	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・外端上に張り出し開く脚部 ・内面上シボリ痕以下横ナデ ・外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂わずかに含む ・焼成やや良 ・淡褐色 	
台付鉢 Fig. 9-7	(1) — (2) — (3) 12.8	<ul style="list-style-type: none"> ・薄く鉢状に開く 	<ul style="list-style-type: none"> ・低く大きく開く脚部 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂極めて多量 ・焼成やや良 ・赤褐色 	

Tab. 2 土器の観察(その2) 太田町遺跡溝36出土弥生式土器

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
台付壺 Fig. 10-1	(1) 口径 15.2cm (2) 器高 14.5	<ul style="list-style-type: none"> ・短かく外反する口縁 ・横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・球形に張る胴部に低く短かい脚を付ける ・胴外面細かい斜めハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや不良 	2/3残存

(3) 脚部径 11.4	・脚接合部外面指オサ エ, 脚内外面横ナデ	・淡灰褐色
-----------------	--------------------------	-------

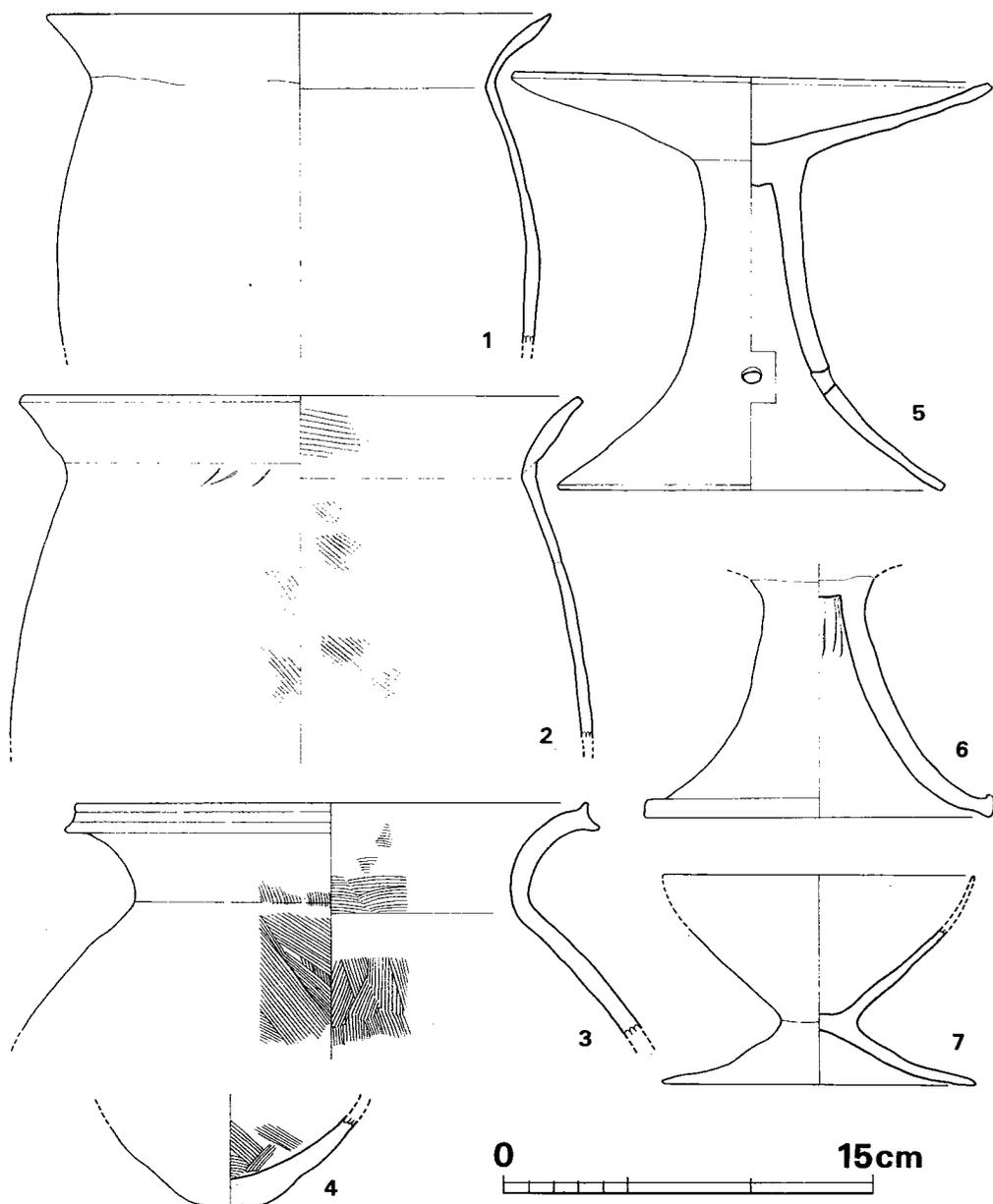


Fig. 9 太田町遺跡溝1出土弥生式土器実測図 (1/3)

小壺 Fig.10-2	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・厚い器壁の丸底 ・内面一部指オサエ ・底外面二次焼成受ける	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・暗灰褐色
台付壺 Fig.10-3	(1) — (2) — (3) 15.8	・欠損	・広く開く厚手の脚部 ・やや上位に小さい孔を穿つ(3孔) ・外面縦ハケ ・脚内面上位横ハケ	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成やや不良 ・暗赤茶色
器台 Fig.10-4	(1) 受部径 12.9 (2) — (3) —	・直線的に開き端部の尖る受部 ・内外面横ナデ	・充実する短かい脚柱から端部へ開く ・外面上端縦ハケ, 脚柱やや中ぶくらみ ・脚柱外面へラ削り	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・淡黄赤褐色

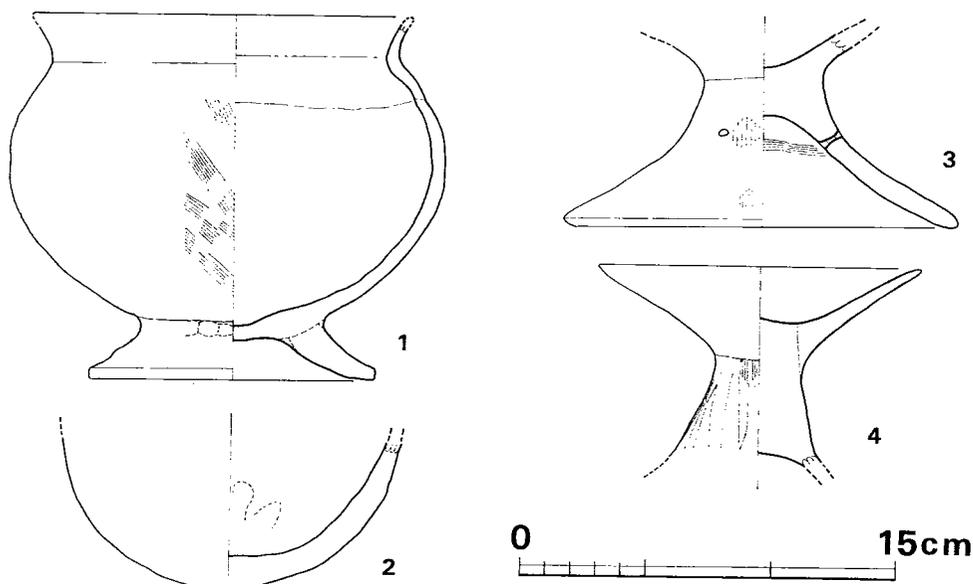


Fig 10. 太田町遺跡溝36出土弥生式土器実測図 (1/3)

Tab. 3 土器の観察(その3) 太田町遺跡土器溜出土弥生式土器

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
壺 Fig.11-1	(1) 口径 15.9cm	・短く外反し, 中ぶくらみの口縁	・胴最大部はやや上位にとり小さい	・胎土に粗砂少量含む	1/3残存

	(2) 器高 18.3	・内外面横ナデ ・頸部外面縦ハケ	平底風丸底へすぼまる ・外面細かい縦ハケ ・内面ナデ, 外面煤附着	・焼成良好 ・暗茶褐色	
	(3) 胴最大 径 16.9				
甕 Fig. 11-2	(1) 22.0 (2) — (3) 23.3	・丸く屈曲する頸部から 中ぶくらに外反する ・内外面横ナデ	・胴最大径を上位にと り, やや長い胴部 ・内面細かい横ハケ ・外面縦ハケ, 煤附着	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成やや不良 ・内面淡灰褐色 外面暗褐色	1/2残存
甕 Fig. 11-3	(1) 19.8 (2) — (3) —	・頸部内面に不明瞭な稜 をつくり外反する口縁 ・頸部外面ふくらむ部分 もあり ・外面縦ハケ残る	・張る胴部をつくる ・胴部外面細かい縦ハケ	・胎土に細砂かなり 含む ・焼成良好 ・外面暗褐色 内面茶褐色	1/4残存
甕 Fig. 11-4	(1) — (2) — (3) —	・「く」の字状に頸部で 屈折し外端部突出する 口縁 ・頸部外面細かい縦ハケ	・張らない胴部をつくる ・内面細かいハケ	・胎土に細砂幾らか 含む ・焼成良好 ・淡茶褐色	小片
甕 Fig. 11-5	(1) 18.9 (2) — (3) —	・頸部内面に稜をつく り, 端部は凹状をなす 口縁 ・頸部外面細かい縦ハケ	・張る胴部をつくる ・内面横ハケ外面縦ハケ	・胎土に細砂幾らか 含む ・焼成良好 ・茶褐色	1/3残存
壺 Fig. 11-6	(1) 17.9 (2) — (3) —	・頸部から丸く外反する 口縁 ・口唇上面と頸部凸帯上 に斜め刻目 ・外面へラ磨き	・丸く張る胴部 ・外面へラ磨き ・内面ナデか	・胎土に粗砂少量含 む ・焼成良好 ・茶褐色	1/4残存
壺 Fig. 11-7	(1) 24.0 (2) — (3) —	・丸く長く外反する口縁 ・頸部に凸帯を削り出 し, 斜め刻目 ・凸帯裏面指オサエ	・欠損	・胎土に粗砂少量含 む ・焼成良好 ・灰白褐色	
壺 Fig. 12-8	(1) 23.7 (2) — (3) —	・頸部内面に稜を作り長 く開く口縁 ・口唇外面へこむ ・内面下半細かい横ハケ	・丸く張る胴部 ・内面斜めハケ	・胎土に粗砂多く含 む ・焼成良好 ・茶褐色	

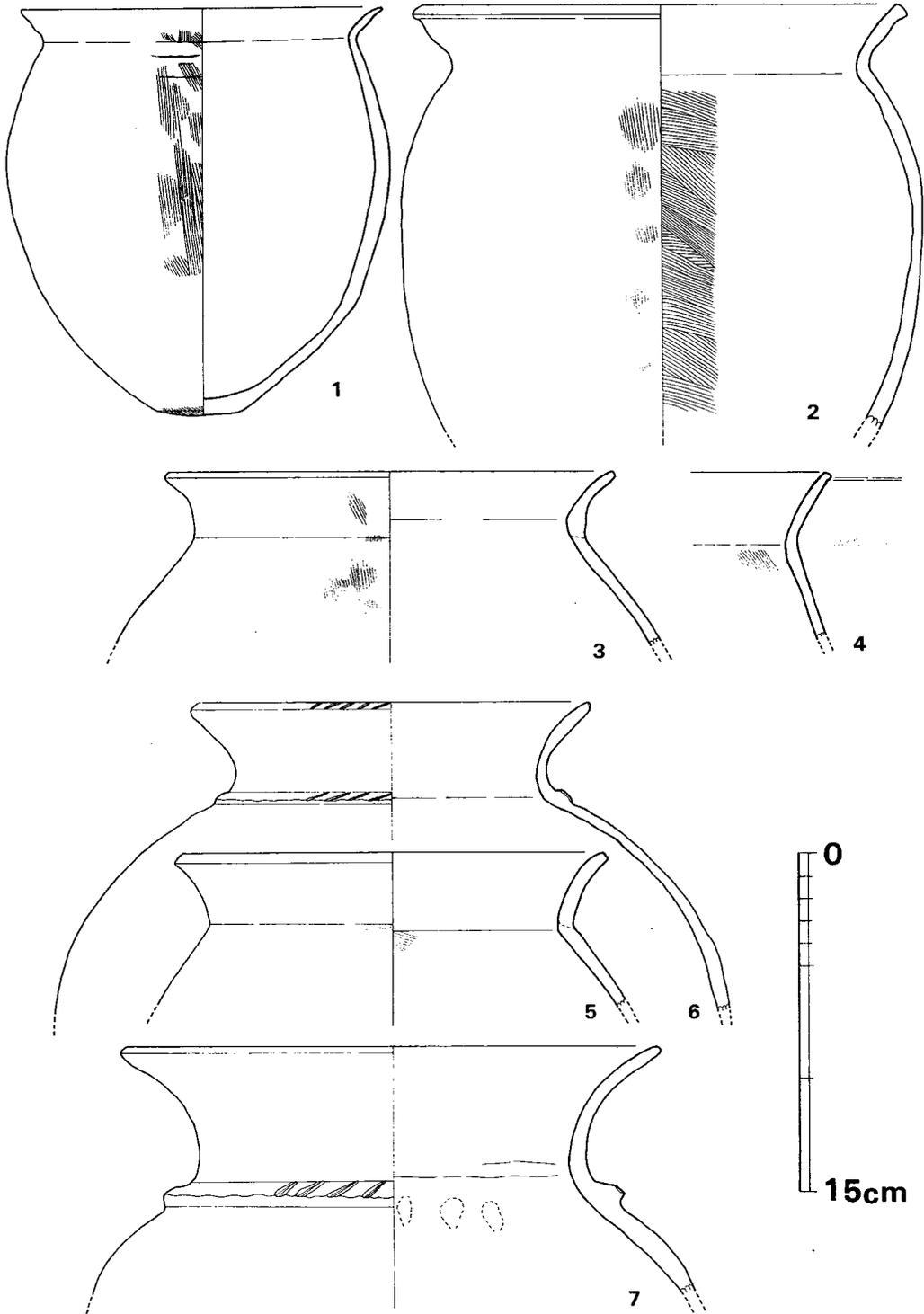


Fig. 11 太田町遺跡土器溜出土弥生式土器実測図1 (1/3)

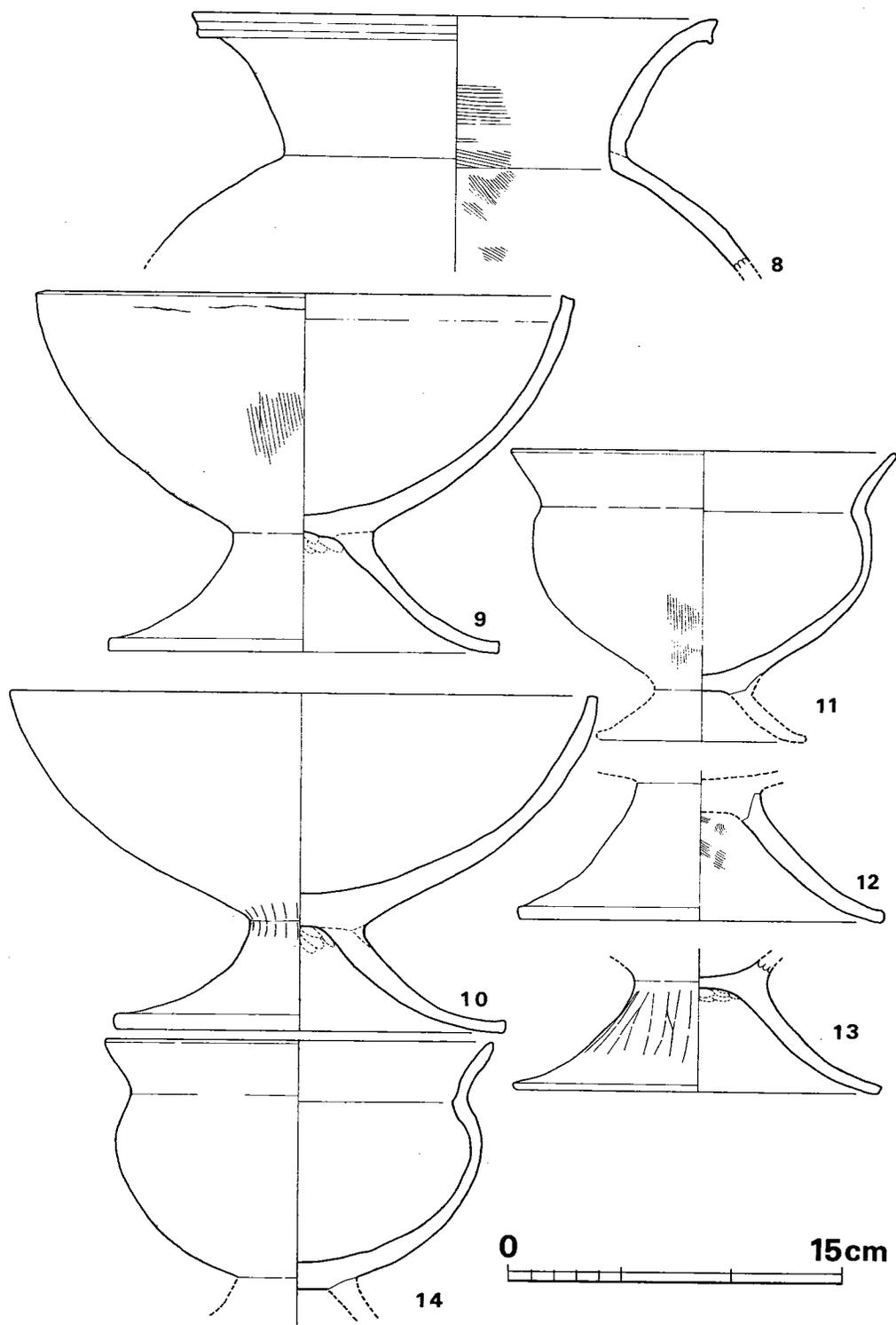


Fig. 12 太田町遺跡土器溜出土弥生式土器実測図2 (1/3)

台付鉢 Fig. 12-9	(1) 口径 24.3cm (2) 器高 16.1 (3) 脚部径 17.6	<ul style="list-style-type: none"> 口唇上面部分的にへこみ外傾する 上端内外面横ナデ 内面縦へら磨き 外面下半縦ハケ, 上半ナデでハケを消す 	<ul style="list-style-type: none"> 開く脚部をつける 底外面指オサエ 内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂かなり含む 焼成良好 茶褐色 	1/2残存
		杯部の特徴	脚部の特徴		
台付鉢 Fig. 12-10	(1) 26.5 (2) 15.1 (3) 17.6	<ul style="list-style-type: none"> 内湾ぎみに開き, 口唇上面は平坦面をなす 内面へら磨きか 	<ul style="list-style-type: none"> 開く脚部をつける 底外面指オサエ 接合部外面縦へら削り 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土かなり精良 焼成良好 茶褐色 	
台付鉢 Fig. 12-11	(1) 17.5 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> 頸部内面に稜を作りやや長く外反する口縁 胴下半外面やや細かい縦ハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 低い脚がつくか 接合面ではずれる 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂多く含む 焼成やや不良 外面淡灰褐色 内面暗褐色 	1/2残存
脚部 Fig. 12-12	(1) — (2) — (3) 16.5	<ul style="list-style-type: none"> 欠損 台付鉢となるか 	<ul style="list-style-type: none"> 厚く開く脚部接合面ではずれる 内面細かいハケの上ナデ 外面横ナデの上へら磨き 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂かなり含む 焼成良好 赤茶色 	
脚部 Fig. 12-13	(1) — (2) — (3) 16.7	<ul style="list-style-type: none"> 欠損 台付壺(鉢)となるか 	<ul style="list-style-type: none"> 薄い底部に開く脚部をつける 底外面指オサエ 外面へら削り以下横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂幾らか含む 焼成やや良 赤褐色 	
台付鉢 Fig. 12-14	(1) 17.5 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> 頸部内面に稜をつくり外反する口縁 	<ul style="list-style-type: none"> 厚い底部に脚をつくる 接合面ではずれる 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂多く含む 焼成やや不良 内面暗茶褐色 外面灰黒褐色 	1/3残存
高杯 Fig. 13-15	(1) 杯部径 30.5 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> 体部で屈折し長く大きく開く口縁 	<ul style="list-style-type: none"> 細く長い脚柱をつける 内面縦ナデ 外面縦へら削り 孔は不明 	<ul style="list-style-type: none"> 胎土に粗砂少量含む 焼成良好 黄茶褐色 	

高杯脚部 Fig. 13—16	(1) — (2) — (3) 17.3	・欠損	・広がる薄手の脚部 ・穿孔がみられるが、数は不明	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡茶褐色	1/5残存
		口頸部の特徴	胴・底部の特徴		
壺 Fig. 13—17	(1) — (2) — (3) 胴最 大幅 15.9	・欠損	・球形の胴部に小さい不安定な平底をつくる ・外面二次焼成を受ける	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・内面 淡茶褐色 外面 赤変	

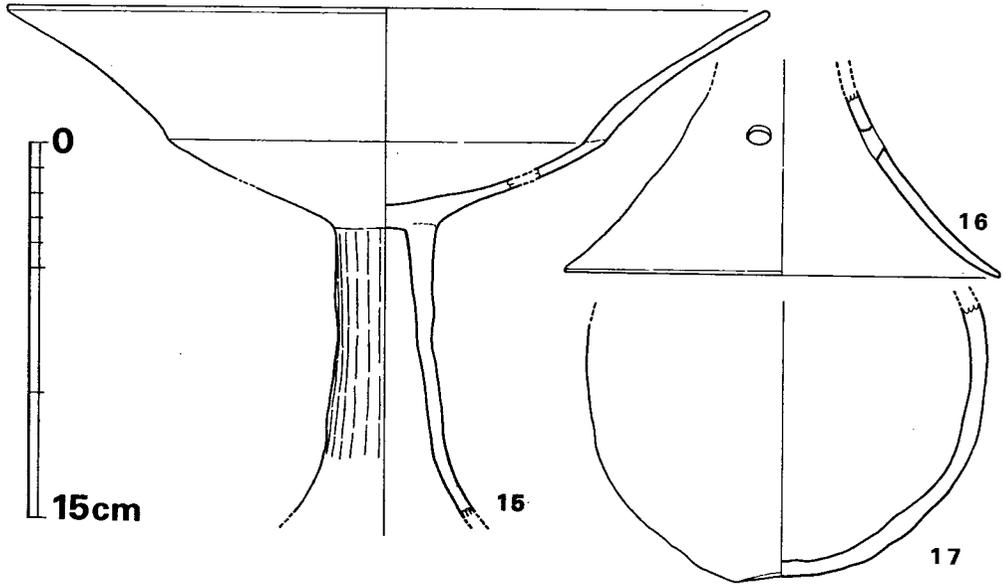


Fig. 13 太田町遺跡土器溜出土弥生式土器実測図3 (1/3)

Tab. 4 土器の観察 (その4) 太田町遺跡第4号住居跡出土土器

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
壺 Fig. 14—1	(1) 口径 21.3cm (2) — (3) —	・二重口縁で、大きく開く下段口縁にはほぼ直口する上段を貼り付ける ・口唇部はわずかに外反して尖る	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成やや不良 ・内面黒褐色 外面明茶色	

罎 Fig. 14-2	(1) 口径 7.8 (2) 器高 11.5 (3) 胴最大 径 12.8	・薄く中ぶくらみしわず かに外反する直口ぎみ の口縁 ・内外面強い横ナデ	・胴最大径を中位にとり 、やや扁平な球形の胴 部 ・底部内面強い指オサエ	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成やや良 ・赤茶色	32
罎 Fig. 14-3	(1) 9.0 (2) 7.2 (3) 9.4	・短く外反し先端に細い 口縁部 ・内面横ナデ ・外面横磨き	・胴中位の薄いやや扁平 な胴部 ・底部内面指オサエ ・外面ヘラ磨きか	・胎土精良 ・焼成良好 ・赤褐色	28
杯 Fig. 14-4	(1) 13.7 (2) 5.5 (3) —	・口唇部の横ナデで内面 に稜をなす口縁	・厚い丸底の底部 ・内面丁寧なヘラ磨き	・胎土精良 ・焼成やや不良 ・暗赤褐色	
高杯 Fig. 14-5	(1) — (2) — (3) 脚部径 11.8	・欠損	・短かい脚柱から内面に 稜を作り尖る端部へ開 く ・内面シボリ痕 ・杯部との接合はヘソ挿 入法	・胎土に粗砂少量含 む ・焼成やや良 ・赤茶色	1/2残存

Tab. 5 土器の観察(その5) 太田町遺跡第6号住居跡出土土器

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
杯 Fig. 15-1	(1) 口径 14.1cm (2) 器高 5.5 (3) 胴最大 径 —	・厚い体部から薄く端部 へわずかに外反する口 縁 ・二次焼成受ける	・底部内面中心よりやや ずれて径5mm深さ2mm の貫通しない1孔あり ・底外面ヘラ沈線1条	・胎土に粗砂わずかに 含む ・焼成良好 ・外面赤褐色 内面暗茶褐色	22
小壺 Fig. 15-2	(1) 11.0 (2) 13.8 (3) 14.0	・頸部でゆるく屈曲しわ ずかに外傾する口縁 ・口唇部尖る	・胴最大径を中位にとり 安定の良い丸底風平底 ・内面下半指オサエ、外 面二次焼成受ける ・巻き上げ痕明瞭	・胎土わりと精良 ・焼成良好 ・赤褐色	1/2残存 1
小壺	(1) 10.5 (2) 14.5	・頸部で屈曲しやや直線 的に開く口縁	・やや扁平な球形の胴部 ・内面頸部直下ヘラ削り	・胎土に粗砂かなり 含む	1/3残存 3

Fig. 15-3	(3) 15.0	<ul style="list-style-type: none"> ・外面やや中ぶくらみの部分もあり ・内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面丁寧なナデか 	<ul style="list-style-type: none"> ・焼成良好 ・赤茶色 	
-----------	----------	---	--	---	--

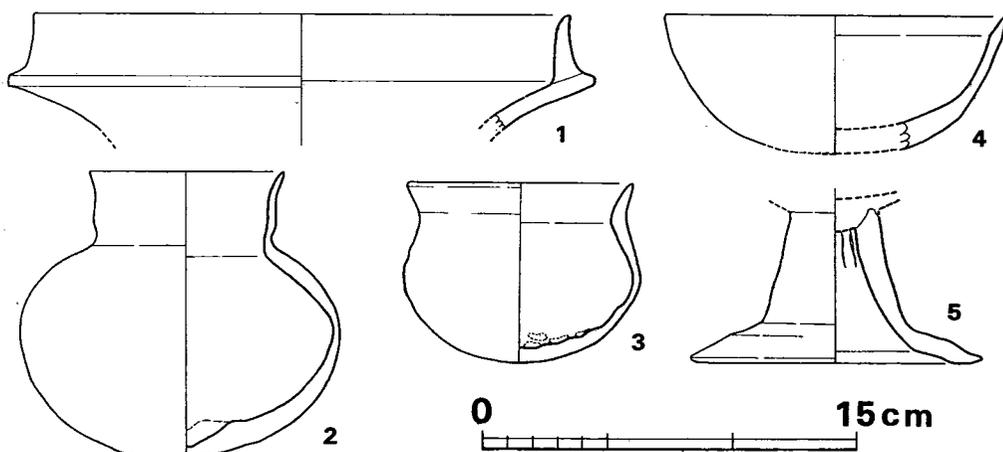


Fig. 14 太田町遺跡第4号住居跡出土土師器実測図 (1/3)

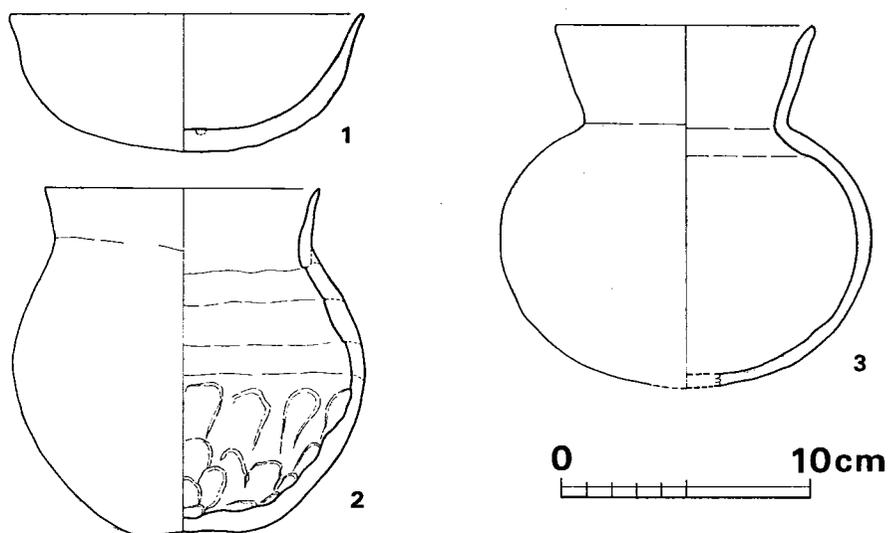


Fig. 15 太田町遺跡第6号住居跡出土土師器実測図 (1/3)

Tab. 6 土器の観察(その6) 太田町遺跡第7号住居跡出土土師器

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
壺	(1) 口径 14.3cm	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部から薄く外反する 口縁 	<ul style="list-style-type: none"> ・張る胴部 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂かなり含む 	

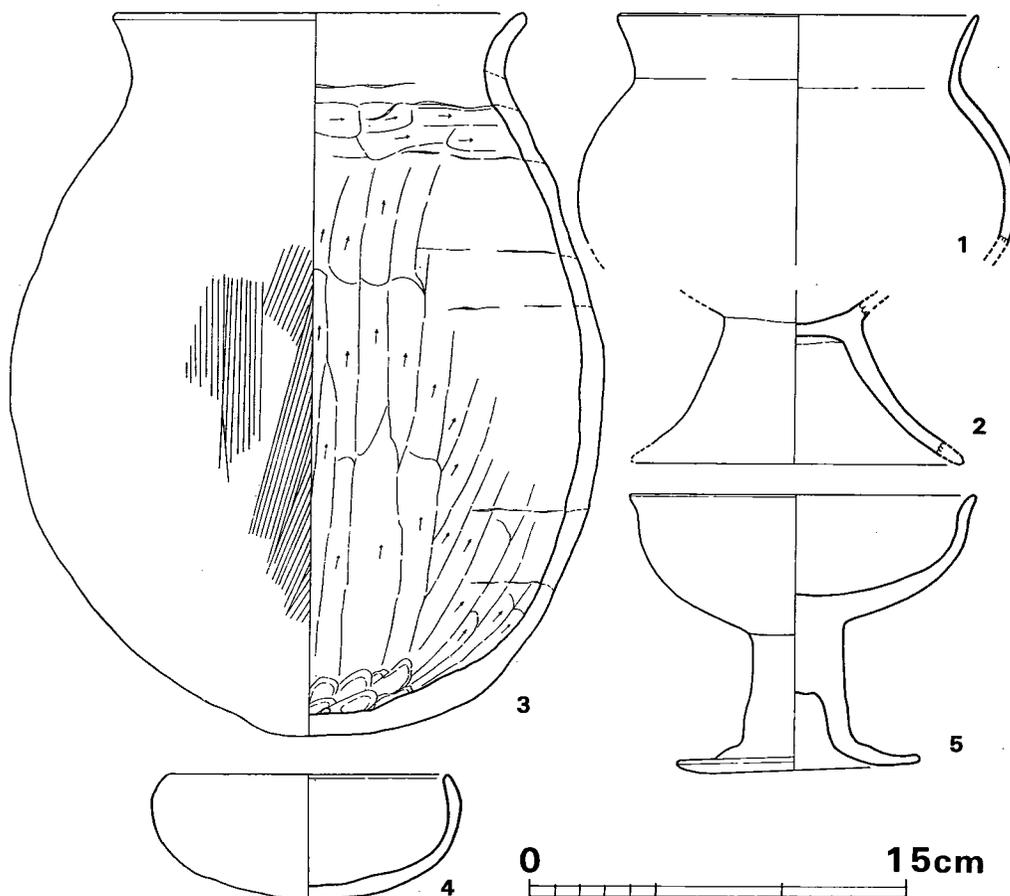


Fig. 16 太田町遺跡第7号住居跡出土土師器実測図 (1/3)

Fig. 16-1	(2) 器高 — (3) 胴最大径 17.4		・台付鉢となる可能性も あり	・焼成良好 ・茶褐色	
脚台部 Fig. 16-2	(1) — (2) — (3) 脚部径 13.2 (復元)	・欠損	・台付鉢(壺)の脚台部 ・薄い底部に開く脚部	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成良好 ・茶褐色	Fig. 16 -1と 接合す るか?
甕 Fig. 16-3	(1) 16.5 (2) 29.0 (3) 23.8	・やや締まる頸部から短 く外反する口縁 ・内外面横ナデ	・長い胴部に不安定な丸 底 ・内面へラ削り底指オサ エ	・胎土に粗砂多く含 む ・焼成良好	1/2残存

			・外面 1.5 cm 単位の縦ハケ(板状工具)	・淡茶褐色
杯 Fig. 16—4	(1) 11.1 (2) 4.9 (3) 胴最大幅 12.2	・口縁丸く内湾し, 先端は丸くおさめる	・盃状の器形	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・暗茶褐色
		杯 部 の 特 徴	脚 部 の 特 徴	
高 杯 Fig. 16—5	(1) 13.8 (2) 10.9 (3) 脚部径 9.6	・口縁端部が折れて短かく外傾する ・杯部内面ナデ	・上半充実する脚柱に, 開き端部が上方へ反る 脚部	・胎土に細砂かなり含む ・焼成良好 ・赤褐色

Tab. 7 土器の観察 (その7) 太田町遺跡その他の遺構出土土器

(第2欄のゴチック体はFig. 4の土器No.と一致する)

器 種	出土地点 遺 構	法 量	口 頸 部 の 特 徴	胴 底 部 の 特 徴	胎土・焼・色調	備 考
甕 Fig. 17—1	P 12	(1) 口 径 27.0cm (2) 器 高 (3) 胴部最大径	・頸部内面に稜を作り中ぶくらみの口縁 ・外端部張り出す	・内面上端横ナデ, 以下斜めハケ ・外面粗い斜めハケ	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成やや不良 ・内面暗褐色 ・外面淡赤褐色	
甕 Fig. 17—2	溝 2	(1) — (2) — (3) —	・頸部内面に稜を作り外反する口縁 ・外面縦ハケ ・頸部のやや幅広い凸帯に鋸歯文	・内面上半横ハケ以下斜めハケ	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・赤茶色	
壺 Fig. 17—3	P 12	(1) — (2) — (3) —	・頸部の「コ」の字凸帯上に×連続文	・欠損	・胎土に粗石英粒多し ・焼成良好 ・淡白褐色	
埴 Fig. 17—4	19	(1) 10.0 (2) 8.9 (3) 10.2	・わずかに外反し中ぶくらみで上端平坦面を作る口縁 ・内横ハケの上横面ナ	・球形の器壁の胴底部 ・外面細かい縦ハケの上縦へう磨き ・底内面指オサエ	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・茶褐色	

Fig. 17-4			デ ・外面縦ハケの上縦磨き			
直口壺 Fig. 17-5	18	(1) 12.8 (2) 12.1 (3) 15.1	・外ぶくらの直立する口縁 ・上端は小さな平坦面をなす	・胴最大径が上位にあり小さな平底風丸底にすぼまる ・底部内面一部ハケ ・胴外面煤付着	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや不良 ・茶褐色	1/2残存
			受け部の特徴	脚部の特徴		
器台 Fig. 17-6	11	(1) 受け部径 12.2 (2) 器高 16.1 (3) 脚部径 12.0	・やや上位でくびれ大きく開き端部は一部凹状になる ・くびれ部内面オサエナデ上げ	・直線的に開き内端で接地する ・外面凹凸著しい	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色	
器台 Fig. 17-7	溝5	(1) — (2) — (3) 11.8	・極めて厚く中ほどでくびれる ・内面指ナデ上げ	・全体に手捏ね的に指オサエが強い	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・内面茶褐色 ・外面淡灰褐色	
杏形器台 Fig. 17-8	58	(1) 6.7 (2) 10.5 (3) 11.4	・傾斜する上面の一端を小さくひき出し中心よりずれて上から一孔を穿つ	・直線的に開き脚端に薄くなる ・外面縦ヘラ削り ・二次焼成を受ける	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや良好 ・赤褐色	
高杯 Fig. 17-9	溝6	(1) 26.9 (2) — (3) —	・浅い体部から屈折して長く大きく開く口縁	・欠損	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成やや良 ・明茶色	1/4残存
高杯 Fig. 17-10	溝5	(1) — (2) — (3) 19.2	・欠損	・薄く脚柱下半から大きく開く脚部 ・孔は認められない	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・赤褐色	2/3残存

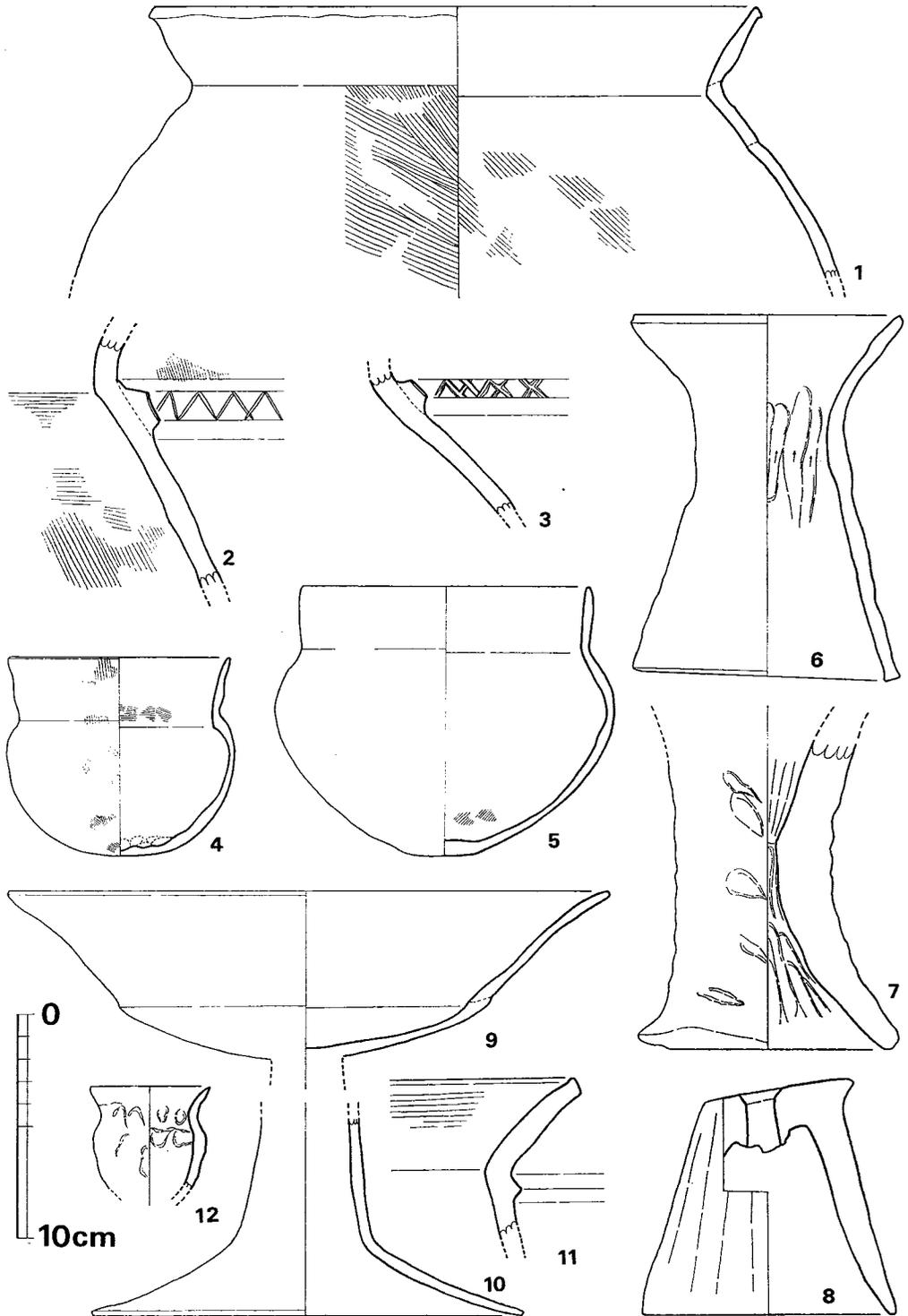


Fig. 17 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図1 (1/3)

			口頸部の特徴	胴・底部の特徴		
甕 Fig. 17-11	溝 6	(1) 口径 — (2) 器高 — (3) 胴最大径 —	・「く」の字に屈曲してひろく口縁 ・端部は上へ突出し、頸部外面に三角・凸帯をつける ・口縁内面粗い横ハケ	・あまり張らない胴部の大型甕となろう	・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・淡黄褐色	
手捏ね土器 Fig. 17-12	溝 6	(1) 5.3 (2) — (3) 5.0	・やや開く口縁 ・頸部内外面指オサエ痕	・小壺のミニチュア ・内外面に指オサエ痕	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良 ・外面淡黄褐色 ・内面淡茶褐色	1/4残存
杯 Fig. 18-13	溝 58	(1) 11.8cm (2) 5.2 (3) —	・内湾しながら立ち上がる口縁 ・口唇部丸くおさめる	・盃状の器形	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・暗茶褐色	2/3残存
壺 Fig. 18-14	30	(1) 9.5 (2) 14.8 (3) 14.7	・頸部内面に稜を作り直線的にやや外傾して立ち上がる口縁 ・内外面横ナデ	・胴最大径がやや上位にあり底部はやや厚く不安定な丸底 ・底部内面指オサエ ・外面ヘラ磨きか	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶色～黄褐色	
杯 Fig. 18-15	溝 64	(1) 14.7 (2) 6.3 (3) —	・やや内湾ぎみに開き先端は丸くおさめる ・内面ヘラ磨きか ・外面細かい縦ハケを磨きで消す	・底部は厚く安定する丸底 ・底外面に「井」の字状に細かいヘラによる記号様の沈線	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや良好 ・赤茶色	
台付盃 Fig. 18-16	43	(1) 13.5 (2) — (3) —	・やや内湾ぎみに開く盃形に細い脚部が付く ・全面ヘラ磨き	・欠損	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・茶褐色	

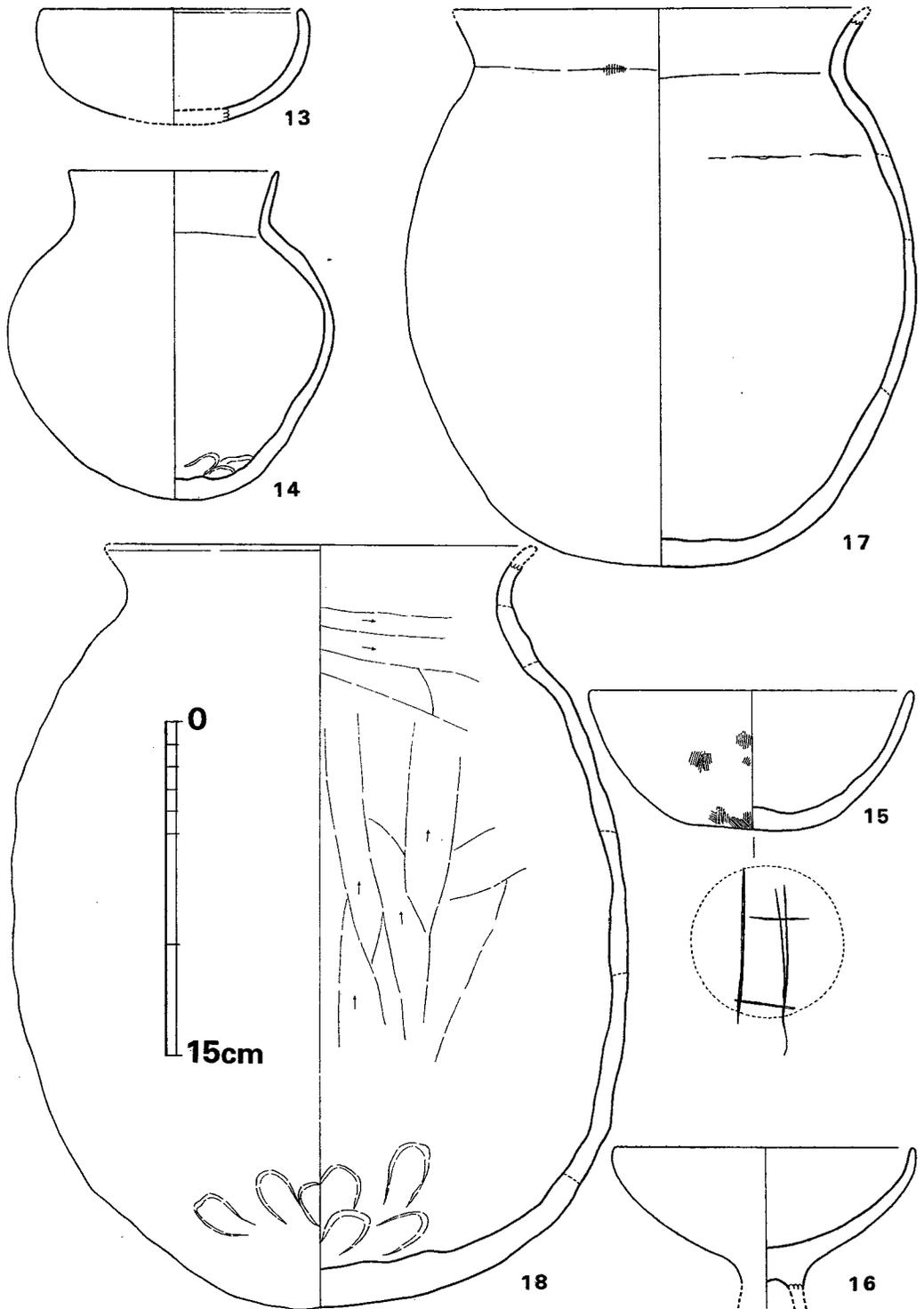


Fig. 18 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図3 (1/3)

甕 Fig. 18—17	溝 32	(1) 19.7 (復元) (2) 24.9 (3) 22.9	・やや締まる頸部から短かく外反する口縁 ・頸部外面に縦ハケ残る	・やや長めの丸い胴部にやや安定する丸底 ・調整不明	・胎土に細粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色乃至淡茶褐色	
甕 Fig. 18—18	溝 35	(1) 19.5 (復元) (2) 34.5 (3) 27.7	・やや締まる頸部から短く外反する口縁 ・内外面横ナデ	・長い胴部に不安定な厚い丸底 ・胴内面へラ削り ・底部内外面指オサエ ・外面二次焼成を受ける	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色	
甕 Fig. 19—19	第 3 号 住居跡	(1) 13.9 (2) — (3) —	・外面中ぶくらみし短かく外反する口縁 ・内面横ハケ、外面横ナデ	・かなり張る胴部 ・外面やや細かい縦ハケ、内面横方向のへラ削り	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・黄茶褐色	1/3残存
直口壺 Fig. 19—20	第 3 号 住居跡	(1) 11.2 (2) 11.7 (3) 12.8	・胴から頸・口縁へと区別をつけずに立ち上がる短かい口縁	・丸い胴部に不安定な丸底 ・底内面に浅い指オサエ	・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色	1/2残存
杯 Fig. 19—21	第 3 号 住居跡	(1) 11.9 (2) 6.4 (3) 12.4	・直線的に内傾する口縁	・やや深い器形で盃状となる ・底部は薄くなる	・胎土に細砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色	
杯 Fig. 19—22	第 2 号 住居跡	(1) 11.5 (2) 4.6 (3) 12.2	・丸く内湾し先端は尖る	・盃状の器形 ・二次焼成を受ける	・胎土に細砂幾らか含む ・焼成良 ・赤茶色～暗褐色	
杯 Fig. 19—23	4	(1) 17.7 (2) 7.3 (3) —	・頸部で屈折し内反り様に開く口縁	・大口径の完形品 ・内面へラ磨き	・胎土精良 ・焼成良好 ・茶褐色～暗褐色	

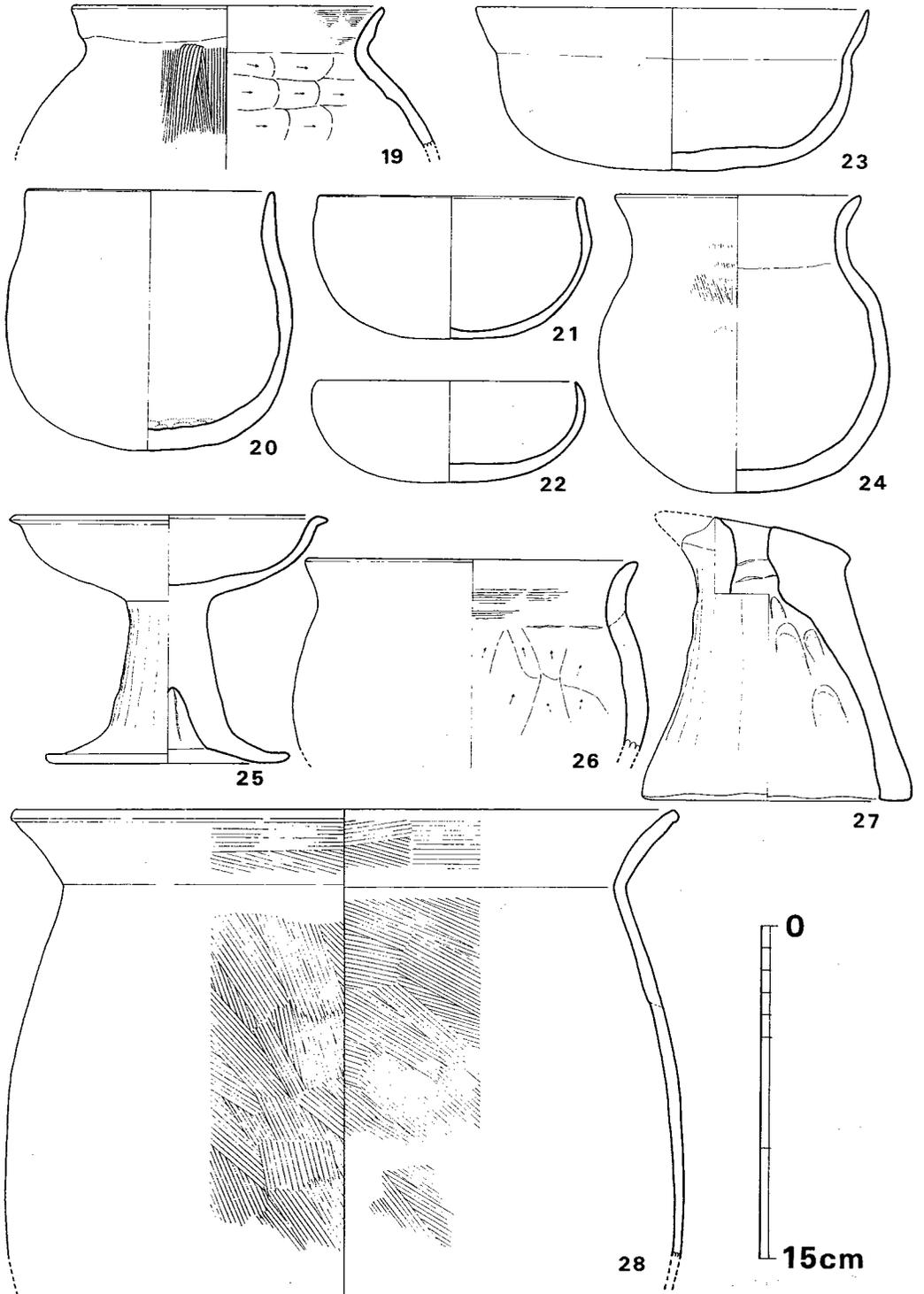


Fig. 19 太田町遺跡その他の遺構出土土器実測図3 (1/3)

小壺 Fig. 19-24	溝 55	(1) 10.9 (2) 13.4 (3) 12.9	・頸部から丸く外反する口縁 ・頸部外面に縦ハケ残る	・球形の胴部に丸底 ・胴外面細かい縦ハケ	・胎土に粗・細砂かなり含む ・焼成良好 ・内面淡白褐色 ・外面淡茶褐色	
			杯部の特徴	脚部の特徴		
高杯 Fig. 19-25	4	(1) 14.2 (2) 11.1 (3) 脚部径 10.9	・口縁端が短かく外方へ張り出す	・充実した脚柱で外面は縦へら削り ・脚端部は上方へ反る	・胎土に細砂幾らか含む ・焼成良好 ・赤茶褐色	
			口頸部の特徴	胴底部の特徴		
甕 Fig. 19-26	溝 33	(1) 14.9 (2) — (3) 胴最大径 15.9	・ゆるく締まる頸部から短かく外反する口縁 ・口頸内面横ハケ	・器壁の厚いくらいか張る胴部 ・内面へら削り	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・内面暗茶褐色 ・外面赤茶色	1/3残存
杵形器台 Fig. 19-27	42	(1) 受け部径 8.7 (復元) (2) 12.9 (復元) (3) 脚部径 12.0	・一方向に舌状突出部をつくり斜傾する受け部中心に円孔を穿つ	・外面強い縦ナデ ・内面指オサエ ・強い二次焼成を受ける	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・内面黒色 ・外面白褐色	
甕 Fig. 19-28	溝 5	(1) 口径 29.8 (2) — (3) 胴最大径 30.2	・頸部内面に稜をつくり外端部が突出する口縁 ・内外面粗い横ハケ	・張らない長い胴部 ・内外面粗い斜めハケ	・胎土に粗砂 ・焼成良好 ・明茶褐色	1/5残存

B. 弥生中期～後期前半の出土土器について

本遺跡出土の弥生時代中期から後期前半にかけての土器は、殆んどが包含層からの出土のもので、明らかに遺構に伴うものは皆無である。破片の量は極めて多いが、完全に接合されるものも全く無く、実測に供し得るもののみを選別して図示した。

遺跡全体として、土器の総量からみると、この弥生中期の間に含まれるものは、他の弥生式土器・土師器の量に比べて最も多い。中でも中期前半～後半の甕各部の破片がかなりの量みら

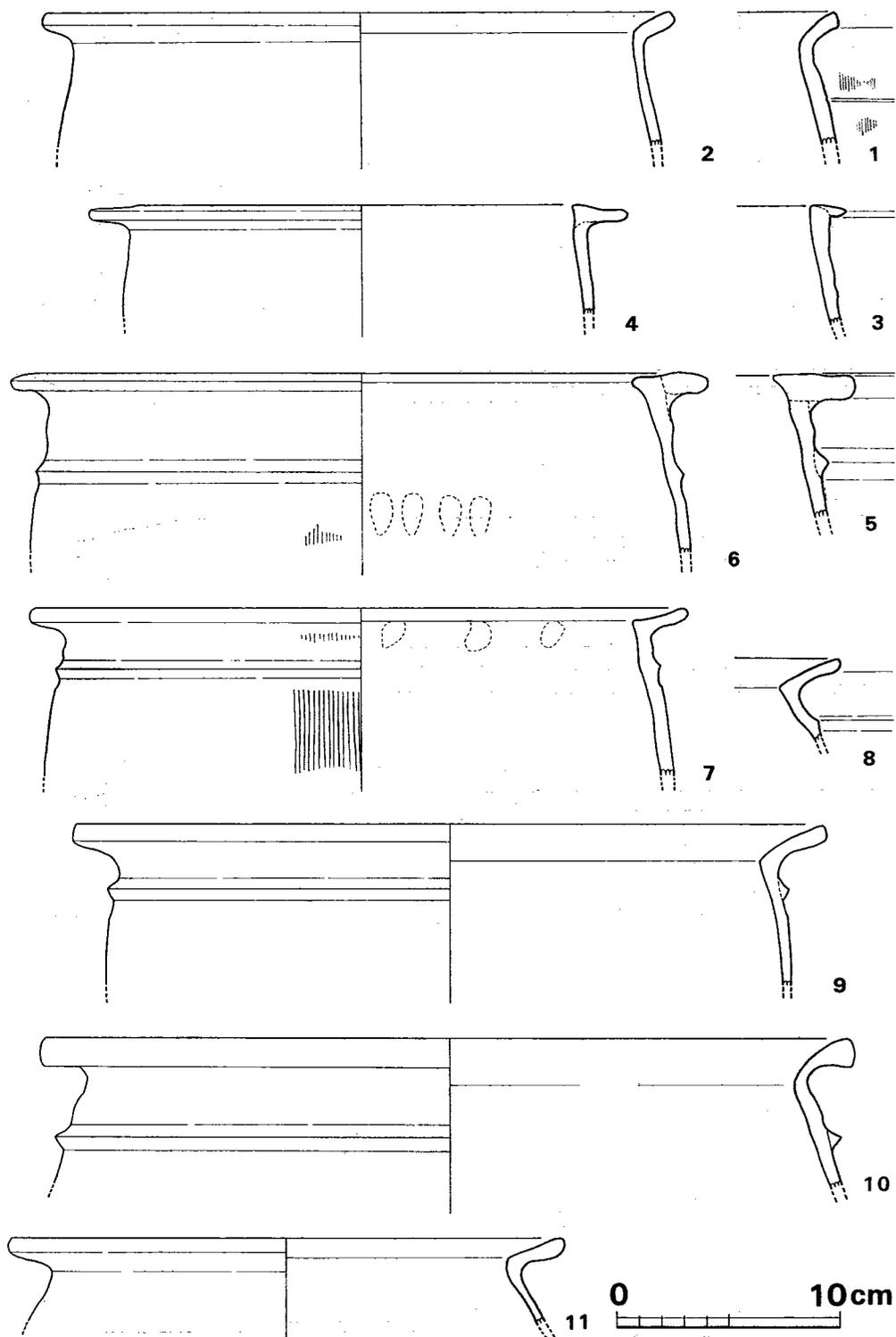


Fig. 20 太田町遺跡出土弥生式土器実測図1 (1/3)

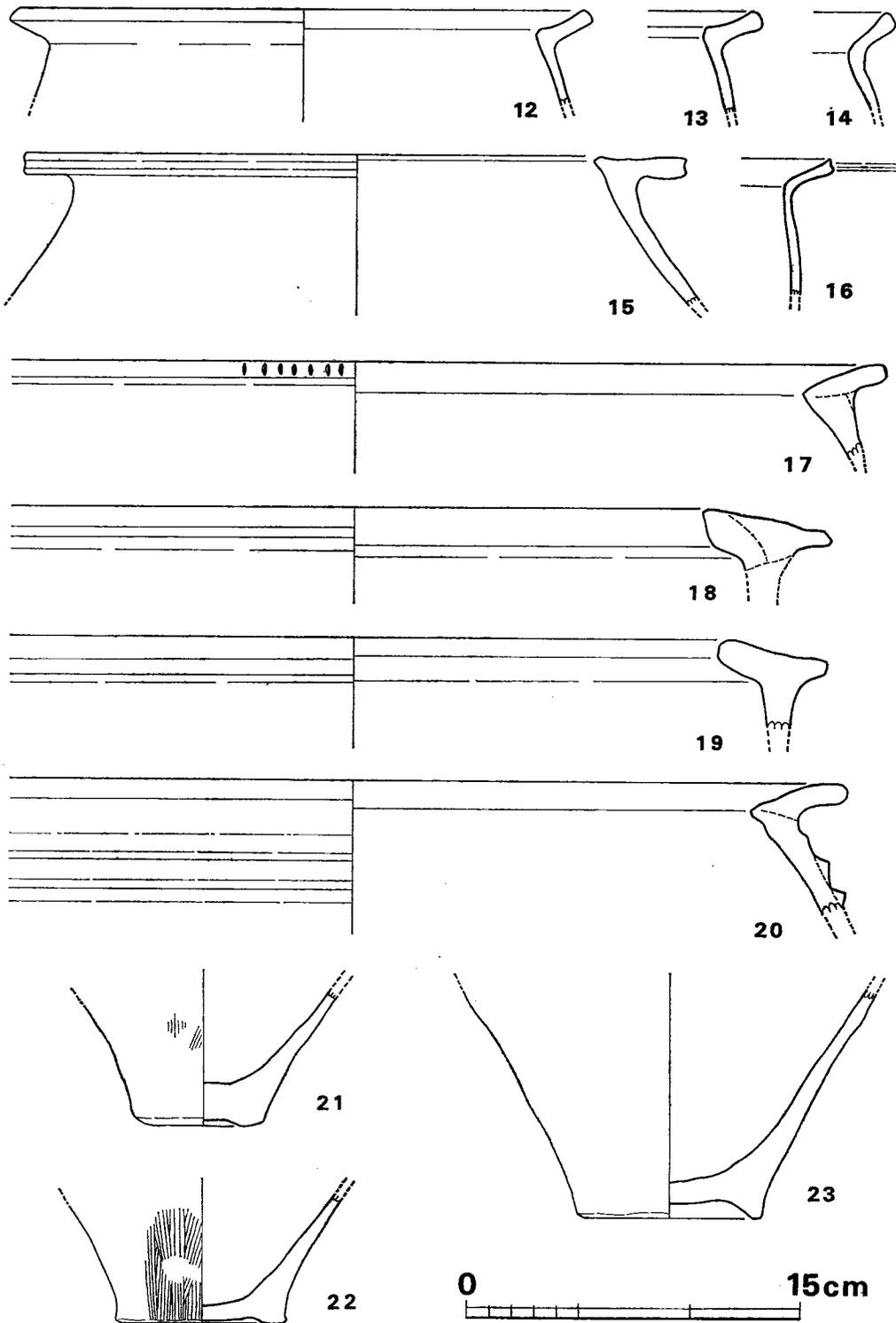


Fig. 21 太田町遺跡出土弥生式土器実測図2 (1/3)

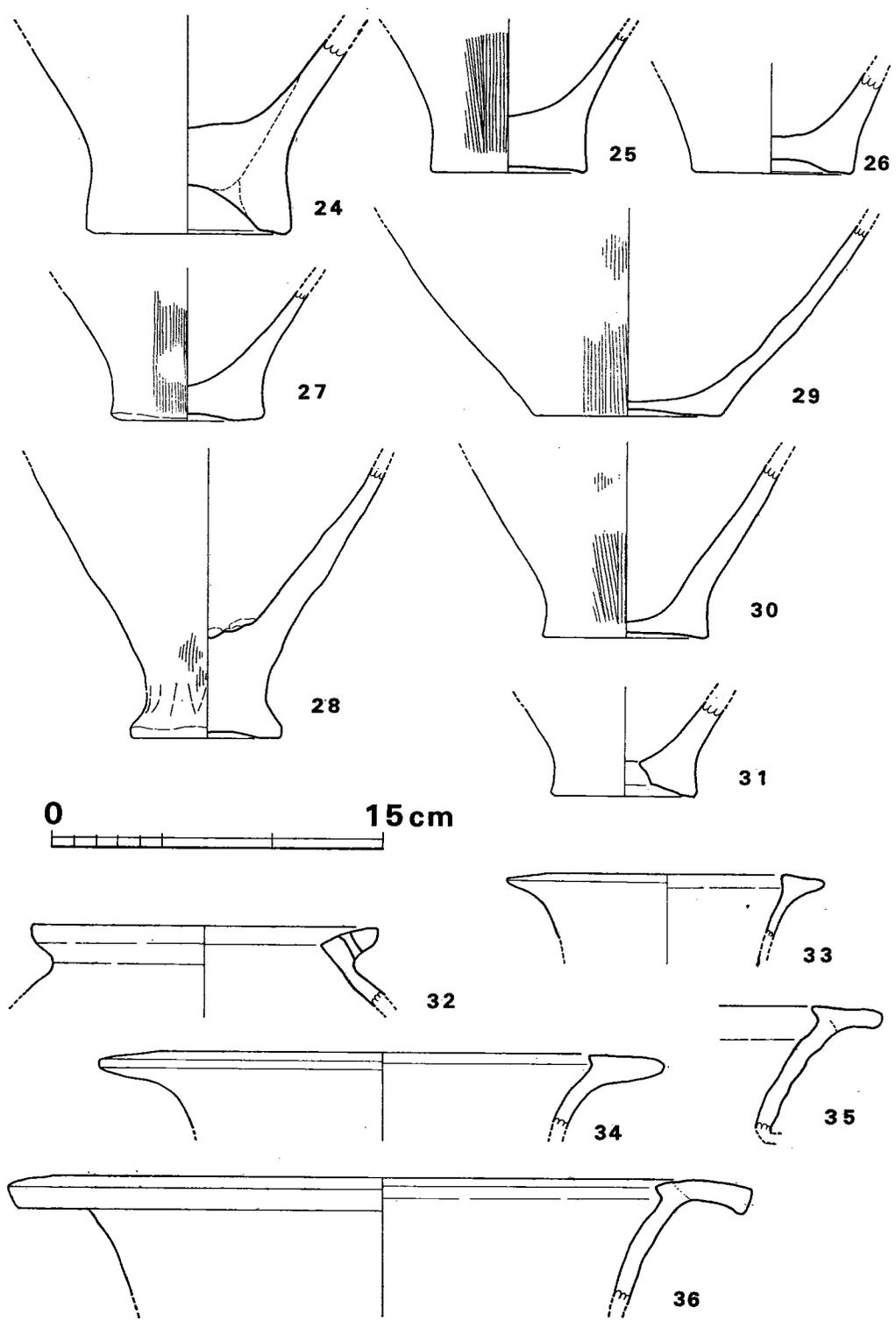


Fig. 22 太田町遺跡出土弥生式土器実測図3 (1/3)

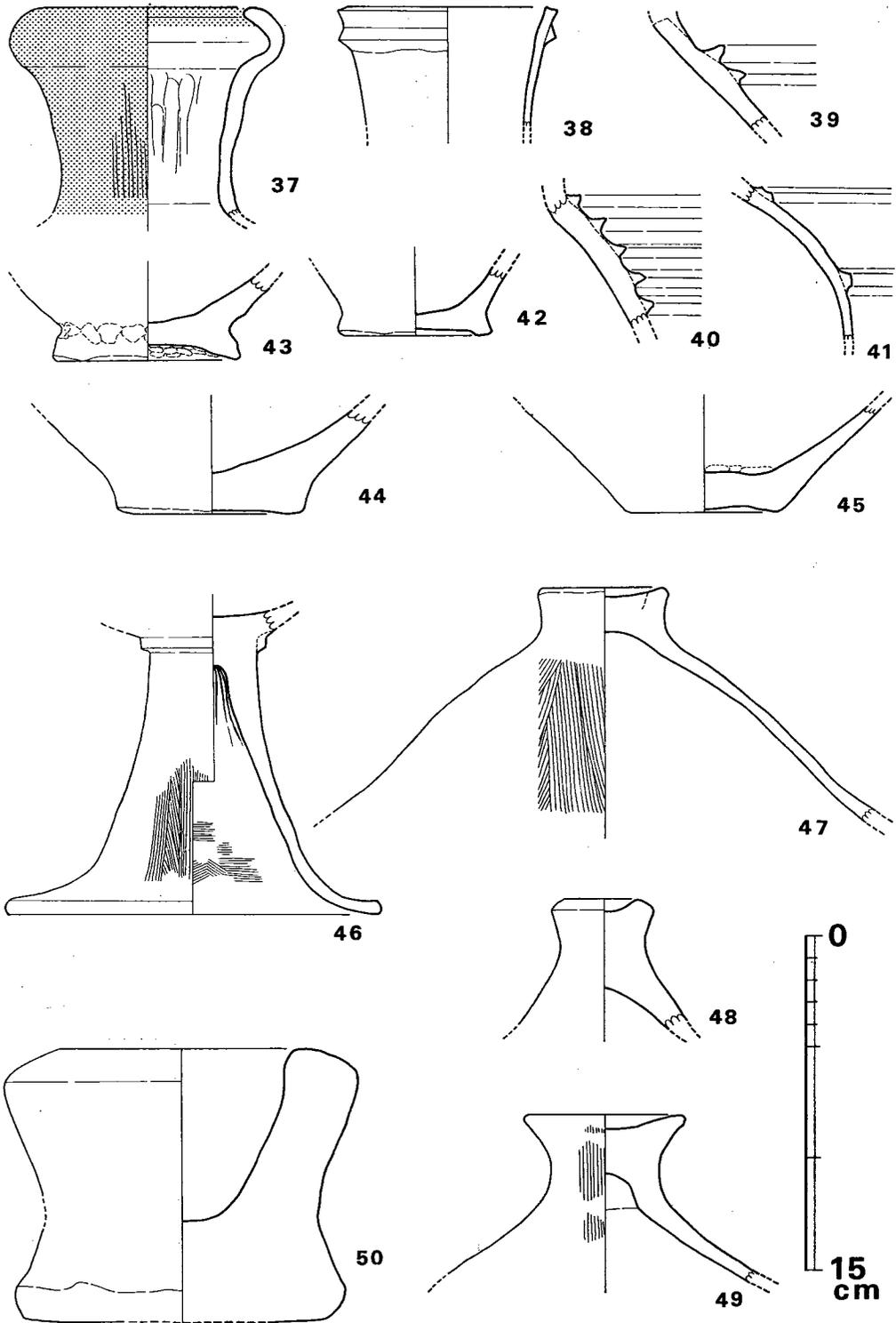


Fig. 23 太田町遺跡出土弥生式土器実測図4 (1/3)

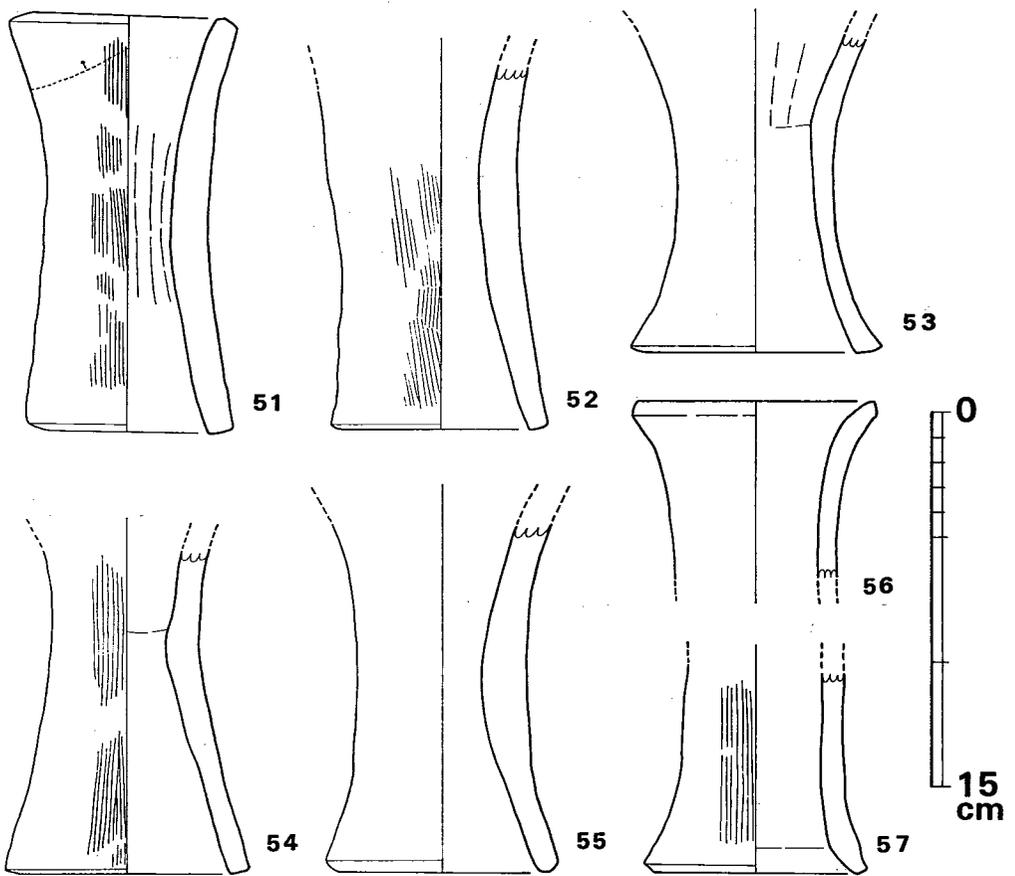


Fig. 24 太田町遺跡出土弥生式土器実測図5 (1/3)

れる。この弥生中期の土器群の次に、各遺構に伴うような、弥生後期後半～終末～古式土器の時期の遺物の量も多い。

本遺跡出土の遠賀川流域系と近年呼称されるようになった弥生式土器群について述べたい。遠賀川流域を中心とした弥生中期初頭における跳ね上がり口縁の甕形土器が、西方へ影響を及ぼし、後期前半期に古賀地域において盛行することは、鹿部東町遺跡出土土器から岩崎二郎氏により、指摘されているところである（註1）また下條信行氏により前期終末期の口縁下沈線間に沈文をつける甕、前期末～中期初頭の発生期における跳ね上がり口縁の甕、以後後期前半までの跳ね上がり口縁の甕、中期後半の朝顔型の口縁上に浮文を貼る壺、袋状口縁をつくらず直口する長頸壺などの諸例により、遠賀川以東系の土器の影響を指摘されている。（註2）

本遺跡における跳ね上がり口縁の甕は、中期初頭乃至前半期の例で（Fig. 21—16）、胴の殆んど張らない器形を呈する。量的には極めて少なく、同時期の城之越式甕形土器の量の少なさと略同様である。これ以降の時期には「T」字口縁、「く」の字口縁のものが多くなり、跳ね

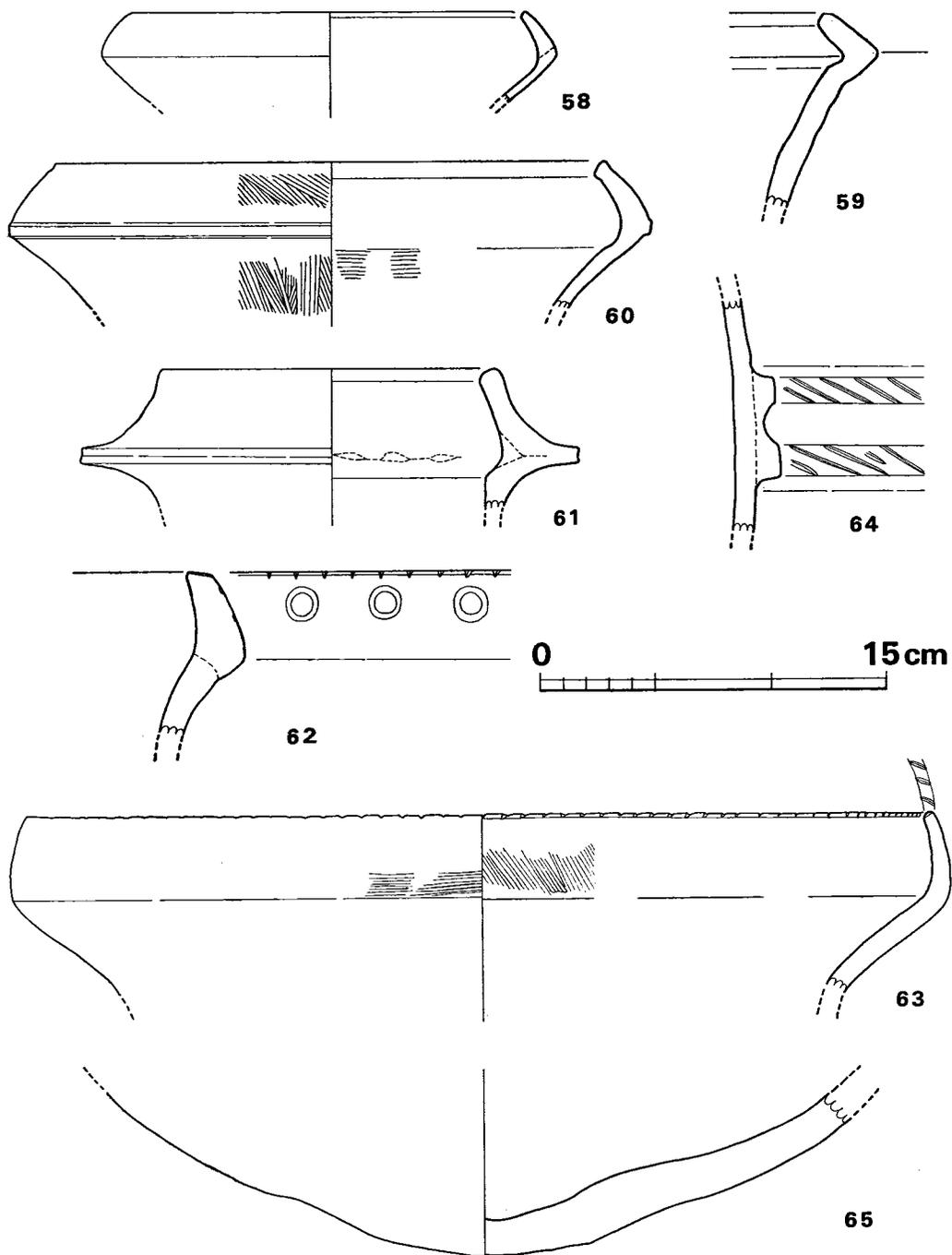


Fig. 25 太田町遺跡出土弥生式土器実測図6 (1/3)

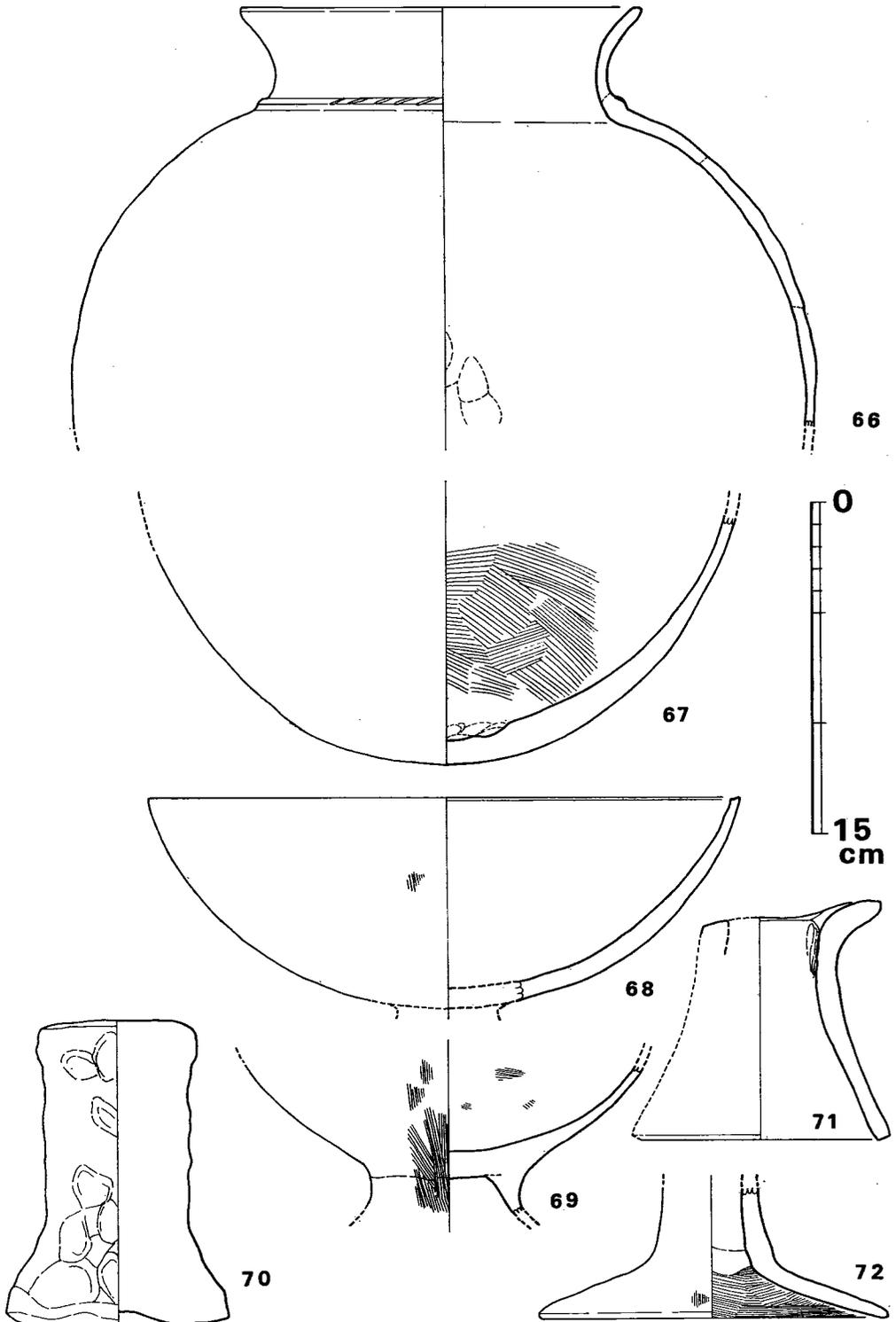


Fig. 26 太田町遺跡出土弥生式土器実測図7 (1/3)

上がり口縁は全くみられない。

また、袋状口縁をつくらず、直口状に開き口縁直下に三角凸帯を貼りつける長頸壺 (Fig. 23—38) も 1 例みられる。この器種は、近接する古賀町鹿部東町遺跡や、若干器形が異なるが、古賀町久保長崎遺跡 (註 3) においても出土する。ちなみに、鹿部東町遺跡は本遺跡の西方 1.3km、久保長崎遺跡は北方へ 1.8km の至近に位置する。また、福岡平野系の丹塗袋状口縁壺と共に出土する (Fig. 23—37) ことも、鹿部東町例と同様である。

この他に、本遺跡から破片で出土する甕棺片 (Fig. 21—17~20) をも併考すると、少なくとも中期初頭~後期初頭 (註 4) までは、東端に位置するものとして、西方の甕棺文化圏にも、確実に入れられていることが推定される。このことは、細形銅剣・銅戈を出土して著名な鹿部皇石神社甕棺群 (註 5) や、本書所収の中の坪甕棺墓の存在を考慮するとき、充分想定されることである。なお当遺跡出土遺物を見る限り、弥生中期の間においては、遠賀川系の東方の影響よりは、西方からの影響の方がいくらか強いことが考えられる。後期に入ると、鹿部例の如く、東方からの波及がかなり強くなってゆくのであろう。 (中間研志)

- 註 1 岩崎二郎「土器溜出土の土器について」『鹿部山遺跡』日本住宅公団 1973
 2 下條信行「考古学・粕屋平野」<福岡市立歴史資料館研究報告第 1 集>1977
 3 松岡史「久保長崎遺跡」『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 1973
 4 本書所収の中坪甕棺墓の時期をも含めての意
 5 古谷清「鹿部と須玖」<考古学雑誌 2—3> 1911

C. 包含層その他出土の弥生式土器・土師器

Tab. 8 土器の観察 (その 8) 太田町遺跡包含層出土土器 1

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig. 20—1	(1) 口径 — cm (2) 器高 — (3) 胴部最大径 —	・丸く外反する口縁 ・内外面に横ナデ	・頸部下に沈線 1 条 ・外面に細かい縦ハケ	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡茶褐色	
甕 Fig. 20—2	(1) 27.7 (2) — (3) —	・内面に稜を有して短く 外反する ・器表磨滅, 調整不明	・やや張る胴部を有する	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・赤茶色	
甕	(1) — (2) — (3) —	・口縁上面は外傾して短 い平坦面をなす ・器表磨滅, 調整不明	・欠損	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良	

Fig. 20—3					・外面淡褐色 内面茶赤色
甕 Fig. 20—4	(1) 24.0 (2) — (3) —	・逆「L」字形口縁で上面はややへこみ外傾する ・内面に強い横ナデ	・欠損		・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色
甕 Fig. 20—5	(1) — (2) — (3) —	・内側に張り出す「T」字形口縁で上面はほぼ水平 ・内外面とも強い横ナデ	・頸部直下に三角凸帯1条		・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色
甕 Fig. 20—6	(1) 31.1 (2) — (3) —	・内面に張り出す「T」字形口縁で上面ややへこむ ・内外面とも強い横ナデ	・頸部下に三角凸帯1条 ・外面は粗い縦ハケ ・内面は指オサエ		・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・茶褐色
甕 Fig. 20—7	(1) 29.3 (2) — (3) —	・内面に稜を有し強く外反する「く」の字形口縁で上面はへこむ ・稜の下の内面は指オサエ	・頸部直下に三角凸帯1条(削り出し) ・外面に粗い縦ハケ		・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色
甕 Fig. 20—8	(1) — (2) — (3) —	・内面に稜を有し強く外反する「く」の字形口縁	・頸部直下に三角凸帯1条		・胎土に細・粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶赤色
甕 Fig. 20—9	(1) 33.3 (2) — (3) —	・内面に稜を有し外反する「く」の字形口縁	・頸部直下に三角凸帯1条		・胎土に細・粗砂幾分含む ・焼成やや良好 ・淡茶褐色
甕 Fig. 20—10	(1) 35.8 (2) — (3) —	・内面に不明瞭な稜を有し丸く外反し先端肥厚する	・頸部下に三角凸帯1条 ・器表、摩滅するが凸帯接着面に縦ハケが残る		・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・淡茶色
甕 Fig. 20—11	(1) 24.5 (2) — (3) —	・内面に稜を有し「く」の字状に外反する ・口縁内面にややへこみ所もある ・頸部外面横ナデ	・胴の張る器形になろう ・外面に二次焼成を受ける		・胎土に粗砂幾分含む ・焼成良好 ・外面赤褐色 内面灰黒色

Tab. 9 土器の観察(その9) 太田町遺跡包含層出土土器2

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig. 21-12	(1) 口径 25.3 (2) 器高 — (3) 胴最大径 —	・内面に稜を有し上面強くへこむ「く」の字形口縁 ・内外面横ナデ	・欠損	・胎土に細砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色	
甕 Fig. 21-13	(1) — (2) — (3) —	・内面に稜を有し上面強くへこむ「く」の字形口縁 ・内外面横ナデ	・内面斜めナデ上げ	・胎土に細砂かなり含む ・焼成良好 ・外面暗褐色 ・内面黒褐色	
甕 Fig. 21-14	(1) — (2) — (3) —	・内面に不明瞭な稜を有し、上面強くへこむ「く」の字形口縁 ・内外面横ナデ	・内面斜めナデ上げ	・胎土に細砂多く含む ・焼成やや良 ・暗褐色～褐色	
甕 Fig. 21-15	(1) — (2) — (3) —	・上面はややへこみ水平で幅広い平端面をなし、先端は凹線を施す ・頸部内外面に強い横ナデ	・強く張る胴部をなす	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・淡茶色	
甕 Fig. 21-16	(1) — (2) — (3) —	・跳ね上がり口縁で先端が凹状をなす ・内外面横ナデ	・ほとんど張らない胴部をなす	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・淡黄茶色	
甕 Fig. 21-17	(1) 47.8 (2) — (3) —	・口唇部に刻目を施し内面に稜を有する短い「く」の字状口縁	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成不良 ・黒～灰黄褐色	甕棺か
甕 Fig. 21-18	(1) 43 (2) — (3) —	・上面外傾する「T」字形口縁 ・上面は強いナデで凹凸となる	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成不良 ・灰黒色～淡茶色	甕棺か
甕 Fig. 21-19	(1) 42.6 (2) — (3) —	・上面外傾する「T」字形口縁 ・上面は横ナデでへこむ	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや良 ・灰淡茶褐色	甕棺か

甕 Fig. 21-20	(1) 44.4 (2) — (3) —	・内面を強く稜をなし強く外反する ・内外面は強い横ナデでへこむ	・頸部下に三角凸帯2条 +α ・外面横ナデ	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・暗灰茶色	甕棺か
甕 Fig. 21-21	(1) 底径 5.9cm (2) — (3) —	・欠損	・底部はやや厚くわずかな上げ底状をなす ・外面にやや粗い縦ハケ ・外面に二次焼成を受ける	・胎土に粗砂多く含む ・焼成不良 ・内面黒褐色 ・外面暗赤褐色	
甕 Fig. 21-22	(1) 7.5 (2) — (3) —	・欠損	・底部はやや薄く、わずかな上げ底状をなす ・外面に粗い縦ハケ	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成やや良 ・外面黄茶褐色 ・内面暗褐色	
甕 Fig. 21-23	(1) 8.4 (2) — (3) —	・欠損	・底部はやや薄く、全体的に上げ底となる	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成不良 ・灰黒褐色	

Tab. 10 土器の観察(その10) 太田町遺跡包含層出土土器 3

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig. 22-24	(1) 底径 9.4cm (2) — (3) —	・欠損	・底部厚く丸く深い上げ底となる	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・外面茶褐色 ・内面暗褐色	1/3残存
甕 Fig. 22-25	(1) 7.1 (2) — (3) —	・欠損	・底部厚く肥厚し、わずかな上げ底をなす ・外面に縦ハケ ・外面下端は横ナデでハケを消す	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・外面赤茶色 ・内面淡茶褐色	
甕 Fig. 22-26	(1) 7.4 (2) — (3) —	・欠損	・底部やや薄く幾らか上げ底をなす ・底部内面に黒色炭化物が付着する	・胎土に細・粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色	

甕 Fig. 22-27	(1) 6.9 (2) — (3) —	・欠損	・底部やや厚くわずかな 上げ底をなす ・外面にやや粗い縦ハケ	・胎土に粗砂多く含 む ・焼成良好 ・外面茶褐色 内面暗褐色	
甕 Fig. 22-28	(1) 6.9 (2) — (3) —	・欠損	・底部は肥厚して脚台状 をなしわずかな上げ底 となる ・内面は指オサエ, 外面 縦横ナデ, ごく一部に 縦ハケ, 下端部は縦へ ラ削り残る	・胎土に幾らか粗石 英を含む ・焼成良好 ・赤茶色	
甕 Fig. 22-29	(1) 8.6 (2) — (3) —	・欠損	・胴下半から薄くわずか な上げ底の底部へとす ぼまる ・外面に粗い縦ハケ	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成良好 ・外面淡茶褐色 内面淡褐色	
甕 Fig. 22-30	(1) 7.6 (2) — (3) —	・欠損	・底部極めて薄くわずか な上げ底をなす ・外面に粗い縦ハケ	・胎土に細砂多量 粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・淡茶褐色	2/3残存
甗 Fig. 22-31	(1) 6.2 (2) 孔径 1.3 (3) —	・欠損	・やや小型の上げ底状の 底部をなす甗に焼成後 穿孔して甗に転用した もの	・胎土に粗砂幾らか 含む ・焼成やや良 ・外面淡茶色 内面白褐色	
無頸壺 Fig. 22-32	(1) 口径 15.7 (2) — (3) —	・内傾する短い口縁で内 面に稜をなす ・焼成前に小孔を穿つ (1 + α)	・胴の張る器形であろう	・胎土に細砂多く含 む ・焼成やや不良 ・黄白褐色	1/3残存
壺 Fig. 22-33	(1) 14.5 (2) — (3) —	・ゆるく外反する口縁の 上面がやや外傾する	・欠損	・胎土に粗砂少量含 む ・焼成不良 ・淡褐色	
壺 Fig. 22-34	(1) 25.8 (2) — (3) —	・上面やや外傾する鋤先 状口縁 ・内側への張り出しは顕 著ではない	・欠損	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成やや不良 ・淡赤色	

壺 Fig. 22—35	(1) — (2) — (3) —	・上面ややへこみ, わずかに外傾する鋤先状口縁 ・頸部は直線的に広がる ・内外面横ナデ	・欠損	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・内面暗灰褐色 外面黒～淡茶褐色
壺 Fig. 22—36	(1) 34.0 (2) — (3) —	・上面外湾する鋤先状口縁	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成不良 ・黄茶褐色

Tab. 11 土器の観察 (その11) 太田町遺跡包含層出土土器 4

器種	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
袋状口縁壺 Fig. 23—37	(1) 口径 9.0cm (2) 器高 — (3) 胴最大径 —	・頸部の短い袋状口縁, 内面上端と外面丹塗り ・袋状部内外面横ナデ ・頸部内外面指ナデ上げ, 外面粗い縦ハケ	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色	1/4残存
直口壺 Fig. 23—38	(1) 9.9 (2) — (3) —	・頸部はわずかに開き上端はややへこみ口縁直下に三角凸帯1条 ・全体的に薄手で精製	・欠損	・胎土精良 ・焼成良好 ・淡褐色	1/4残存
壺 Fig. 23—39	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・胴上部に接続する高い三角凸帯2条	・胎土に細砂多く含む ・焼成やや不良 ・暗茶褐色	
壺 Fig. 23—40	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・頸部くびれから胴上半に接続する三角凸帯5条+α ・器壁は厚い	・胎土に粗石英多く含む ・焼成やや不良 ・淡灰茶褐色	
壺 Fig. 23—41	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・頸部直下と胴上半に断面梯形凸帯各1条 ・全体的に薄手	・胎土に粗石英少量含む ・焼成やや不良 ・淡茶赤色	
小壺	(1) 底径 7.0cm (2) — (3) —	・欠損	・中心部 5.4cmのみがわずかな上げ底となる底部	・胎土に粗砂極めて多く含む ・焼成やや良	

Fig. 23—42				・暗黄褐色
壺 Fig. 23—43	(1) 8.3 (2) — (3) —	・欠損	・指で高台状に端部をひき出し歪な上げ底状の底部をなす ・内面は丁寧なナデ ・外面は強い指オサエ	・胎土に粗砂わずかに含む ・焼成良好 ・茶褐色
壺 Fig. 23—44	(1) 8.4 (2) — (3) —	・欠損	・厚くわずかな上げ底となる底部 ・外面へラ磨き	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・淡暗褐色
壺 Fig. 23—45	(1) 6.9 (2) — (3) —	・欠損	・厚くわずかな上げ底となる ・外面へラ磨き ・底内面指オサエ ・胴下半内面は指ナデ上げ	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・内面茶赤色 ・外面暗黄褐色
		杯部の特徴	脚部の特徴	
高杯 Fig. 23—46	(1)底部 16.9cm (2)脚部径 12.5 (3) —	・欠損	・杯部, 脚部の接合部に三角凸帯1条 ・外面細かい縦ハケ ・内面上方シボリ痕, 下方細かい横ハケ ・端部内外面横ナデ	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成やや良 ・淡黄茶色
		口縁部の特徴	つまみ・体部の特徴	
蓋 Fig. 23—47	(1)つまみ径 5.9 (2) — (3) —	・欠損	・上面ややへこみ厚いつまみ部からゆるく内湾して開く ・つまみ, 外面はへラ磨き ・体部外面は粗い縦ハケ	・胎土かなり精良 ・焼成良好 ・淡黄褐色
蓋 Fig. 23—48	(1) 4.5 (2) — (3) —	・欠損	・上面丸くへこみ, 脚台状に厚いつまみ ・やや小型の蓋であろう	・胎土に粗砂極めて多く含む ・焼成やや良 ・外面淡茶褐色 ・内面黒褐色
	(1) 7.3	・欠損	・上面ややへこみ内面も	・胎土に粗砂多く含

蓋	(2) — (3) —		丸くへこむ やや厚いつまみ ・外面粗い縦ハケ	む ・焼成やや不良 ・淡褐色	
Fig. 23—49		口縁部の特徴	体部・底部の特徴		
埴 塼	(1)口 径 10.2cm (2)器 高 12.3 (3)深 き 7.7	・厚く上面が外傾する ・内面は加熱の為か黒 変	・体部やや下位でくびれ 下端が張り出す ・底部極めて厚く全体的 に重厚さを感じる	・胎土に粗砂幾らか 含む ・焼成良好 ・黒～暗褐色	
Fig. 23—50					

Tab. 12 土器の観察 (その12) 太田町遺跡包含層出土土器 5

器 種	法 量	受け部の特徴	くびれ部, 脚部の特徴	胎土・焼・色調	備 考
器 台	(1)受け部径 9.1cm (2)器 高 16.6 (3)脚 部 径 8.2	・上端ほぼ平坦でやや外 傾する ・片側上端のみ内外に強 い二次焼成を受ける	・略中位でゆるくくび れ, 筒形の類 ・外面粗い縦ハケ, くび れ内面シボリ痕 ・上下端内外面横ナデ	・胎土に粗砂多く含 む ・焼成良好 ・茶色	
器 台	(1) — (2) — (3) 8.5	・欠損	・略中位でゆるくくび れ, 筒形の類 ・内面丁寧なナデ上げ ・外面粗い縦ハケ ・下端内外面横ナデ	・胎土に粗砂多く含 む ・焼成良好 ・茶褐色	
器 台	(1) — (2) — (3) 10.1	・欠損	・略中位でくびれ, 上下 にかなり開く ・内面上半ナデ上げ	・胎土に粗砂幾らか 含む ・焼成良好 ・茶褐色	2/3残存
器 台	(1) — (2) — (3) 9.8	・欠損	・略中位でくびれ, 上下 に幾らか開く ・外面粗い縦ハケ ・内面上半横ナデ下半縦 ナデ	・胎土かなり精良 ・焼成やや不良 ・淡茶褐色	
器 台	(1) — (2) — (3) 9.2	・欠損	・略中位でゆるくくび れ, 筒形の類 ・くびれ部器壁が厚い	・胎土に粗砂かなり 含む ・焼成やや不良	

Fig. 24—55				・黄茶褐色	
器台 Fig. 24—56	(1) 10.0 (2) — (3) —	・略中位でくびれ、ゆるく立ち上がり開く ・上端内外面横ナデ	・欠損	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・茶褐色	1/2残存
器台 Fig. 24—57	(1) — (2) — (3) 9.0	・欠損	・略中位でゆるくくびれ、筒形の類 ・外面粗い縦ハケ ・下端内外面横ナデ	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・淡茶色	

Tab. 13 土器の観察（その13）太田町遺跡包含層その他出土土器1

器種	出土地点 遺構	法量	口縁部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
壺 Fig. 25—58	包含層	(1) 口径 17.2 (2) 器高 — (3) 胴最大径 —	・外面に稜を有する逆「く」の字形口縁	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成やや不良 ・黄白色	
壺 Fig. 25—59	包含層	(1) 約 31.0 (2) — (3) —	・厚い器壁の逆「く」の字形口縁で長く頸部へすばまる ・内外面、特に屈曲内面は強い横ナデ	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・淡茶色	
壺 Fig. 25—60	地山土	(1) 23.6 (2) — (3) —	・外面稜部に「コ」の字凸帯を削り出す逆「く」の字形口縁 ・外面粗い斜め縦ハケ ・内面横ナデ粗い横ハケ	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・淡茶褐色	
壺	包含層	(1) 14.8 (2) — (3) —	・二重口縁で立ち上がりは内傾し接合部が強く外へ張り出す ・接合部内面に指オサ	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色	大型特殊器台か

Fig. 25-61			エ			
壺 Fig. 25-62	包含層	(1) — (2) — (3) —	・厚い逆「く」の字形口縁 ・外面に竹管文 ・上端に浅い刻目	・欠損	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・淡茶色	甕棺か
壺 Fig. 25-63	包含層	(1) 39.5 (2) — (3) —	・立ち上がりがゆるく内湾する二重口縁様 ・口唇部に斜めの刻目 ・立ち上がり下半内外面粗いハケ以下横ナデ	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶赤色	甕棺か
壺 Fig. 25-64	包含層	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・胴部に2条の「コ」の字形凸帯を同時に張りつける ・凸帯上に斜めの刻目	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・外面赤茶色、内面淡茶褐色	甕棺か
壺 Fig. 25-65	地山直上	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・ヘソ状にとび出す大型壺の底部	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・赤茶色	甕棺か

Tab. 14 土器の観察（その14）太田町遺跡包含層その他出土土器2

器種	出土地点 遺構	法量	口縁部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
壺 Fig. 26-66	包含層	(1)口径 18.0cm (2)器高 — (3)胴最大径 33.5	・丸く外反する口縁部 ・頸部に凸帯を削り出し、その上に斜めの刻目 ・口縁外面へラ磨き	・球形の胴をなす ・胴中ほどの内面に指オサエ ・胴上端内面斜めナデ上げ ・内外面二次焼成を受ける	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや良 ・茶褐色	1/2残存
壺	地山直上	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・球形の胴部に丸底 ・底部内面に強い指オサエ	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好	

Fig. 26-67				<ul style="list-style-type: none"> ・胴下半内面粗い斜めハケ ・外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面黒～淡茶色 ・内面茶褐色 	
鉢 Fig. 26-68	地山直上	(1) 26.6 (2) 9.5 (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇上面ややへこみ内傾する 	<ul style="list-style-type: none"> ・丸く内湾して開く ・内面へラ磨き ・外面縦ハケ一部残る 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・茶褐色 	台鉢 付か
台付鉢 Fig. 26-69	地山直上	(1) — (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・内湾して開く鉢部に低く開く台がつく ・外面細い縦ハケ ・内面ハケの上をへラ磨き 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色 	
			受け部の特徴	脚部の特徴		
支脚 Fig. 26-70	包含層	(1) 受け部径 7.0cm (2) 器高 14.1 (3) 脚部径 10.1	<ul style="list-style-type: none"> ・充実する土製支脚 ・上面はやや丸く一方向への指オサエナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや開く脚部の底面が中央でわずかな上げ底 ・外面強い指オサエで凹凸著しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・赤茶褐色 	1/2残存
支脚 Fig. 26-71	包含層	(1) 8.1 (2) 11.0 (3) 11.6	<ul style="list-style-type: none"> ・上端の片方を舌状に張り出さした杵形器台の一類 ・張り出し内面指オサエ 	<ul style="list-style-type: none"> ・裾広がりに開く脚部 ・強い二次焼成を受ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや不良 ・灰褐色 	1/2残存
台付鉢 Fig. 26-72	床土下層	(1) — (2) — (3) 15.8	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・脚中ほどからさらに大きく開く ・内面細かい横ハケ ・外面へラ磨き 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・淡茶褐色 	1/3残存

Tab. 15 土器の観察(その15) 太田町遺跡包含層その他出土土器3

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕	包含層	(1) 口径 30.3cm	・口縁は頸部内面の稜から外反し外端部は	・欠損	・胎土に粗砂幾らか含む	

Fig. 27-73		(2)器 高 (3)胴最大径	張り出す ・上端横ナデ ・外面粗い縦ハケ, 内面横ハケ		・焼成良好 ・内面淡茶色 外面淡灰茶褐色	
甕 Fig. 27-74	包含層	(1) 17.9 (2) — (3) —	・口縁は頸部内面の稜から外反し端部は角張る ・内面一部横ハケ	・欠損	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶色	
甕 Fig. 27-75	地山直上	(1) 16.0 (2) — (3) —	・口縁部は中ぶくらみし端部は丸く張り出く, 頸部のくびれが強い ・内面横ナデ ・外面細かいハケの上横ナデ	・略球形の胴部 ・外面細い斜めハケ ・内面指ナデ上げ	・胎土かなり精良 ・焼成良好 ・淡赤茶色	2/3残存
甕 Fig. 27-76	包含層	(1) — (2) — (3) —	・頸部は丸くくびれ外反し, 口縁やや中ぶくらみし, 外端は張り出す	・欠損	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・茶褐色	
甕 Fig. 27-77	包含層	(1) — (2) — (3) —	・くびれ内面の稜から外反し, 口縁やや中ぶくらみ, 外端は張り出す ・外面粗い縦ハケ	・欠損	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・暗茶褐色	
甕 Fig. 27-78	包含層	(1) 13.2 (2) — (3) —	・くびれ内面の稜から外反し, 口縁やや中ぶくらみ ・内外面横ナデ	・内面横へら削り	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡茶色	
甕 Fig. 27-79	包含層	(1) 14.3 (2) — (3) —	・やや中ぶくらみの外反する口縁で端部は小さく跳ね上がる ・内外面横ナデ	・内面横へら削り	・胎土わりと精良 ・焼成やや不良 ・淡茶褐色	1/3残存
甕	包含層	(1) —	・欠損	・やや長い胴に平底丸底	・胎土に粗砂幾らか含む	1/2残存

Fig. 27-80		(2) — (3) 16.6		<ul style="list-style-type: none"> ・外面ハケをナデで消す ・内面ヘラ削りの上縦ハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・焼成良好 ・茶褐色
甕 Fig. 27-81	包含層	(1) — (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや長い胴部に尖りぎみの丸底 ・内面やや細かいハケ, 強い指オサエ ・外面丁寧なナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・内面黒褐色 ・外面淡茶褐色
壺 Fig. 27-82	包含層	(1) 18.6 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・二重口縁ではば垂直に立ち上がり外端は張り出す ・内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・暗黄褐色
壺 Fig. 27-83	包含層	(1) 20.6 (2) — (3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・二重口縁で立ち上がりはやや外傾する ・内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・暗黄褐色
			受け部の特徴	くびれ部・脚部の特徴	
鼓形器台 Fig. 27-84	地山直上	(1)受け部径 22.3cm (2)器高 12.0 (3)脚部径 18.3	<ul style="list-style-type: none"> ・くびれ部から直線的に開き上端で外反する ・内面中ほどでややへこむ ・内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・くびれ部をはきんで上下に三角凸帯を作り出す ・脚部内面へこみ, 外面中ぶくらみ ・下端は平坦面をなす 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや良 ・白褐色

Tab. 16 土器の観察(その16) 太田町遺跡包含層その他出土土器4

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig. 28-85	包含層	(1)口径 — (2)器高 — (3)胴最大径 28.4cm	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	<ul style="list-style-type: none"> ・略球形の胴部に平底風丸底 ・内面指オサエ, ヘラ削り上げ ・外面ハケ残る ・器壁極めて薄い 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成やや不良 ・暗灰茶色 	1/2残存

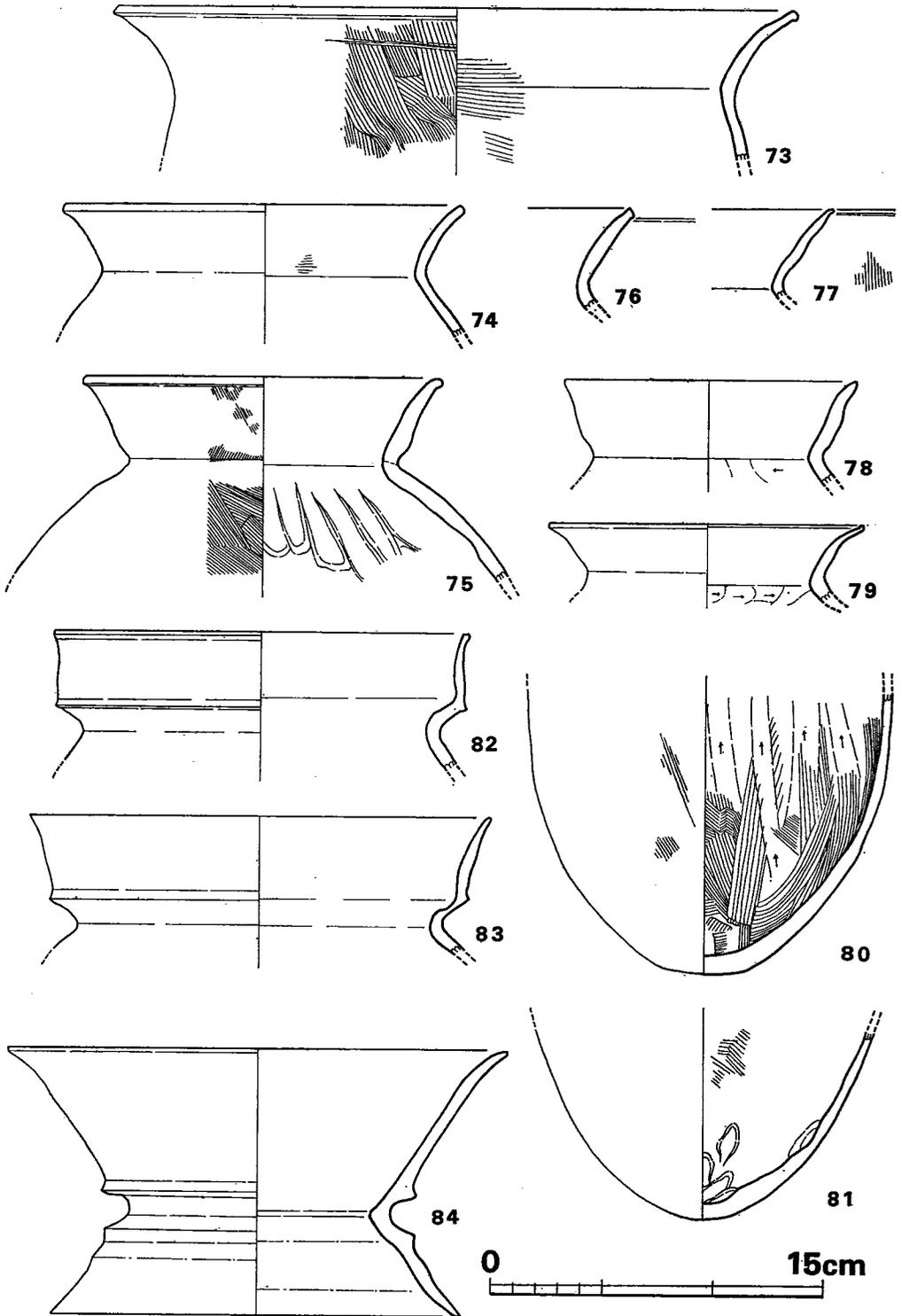


Fig. 27 太田町遺跡出土土師器実測図1 (1/3)

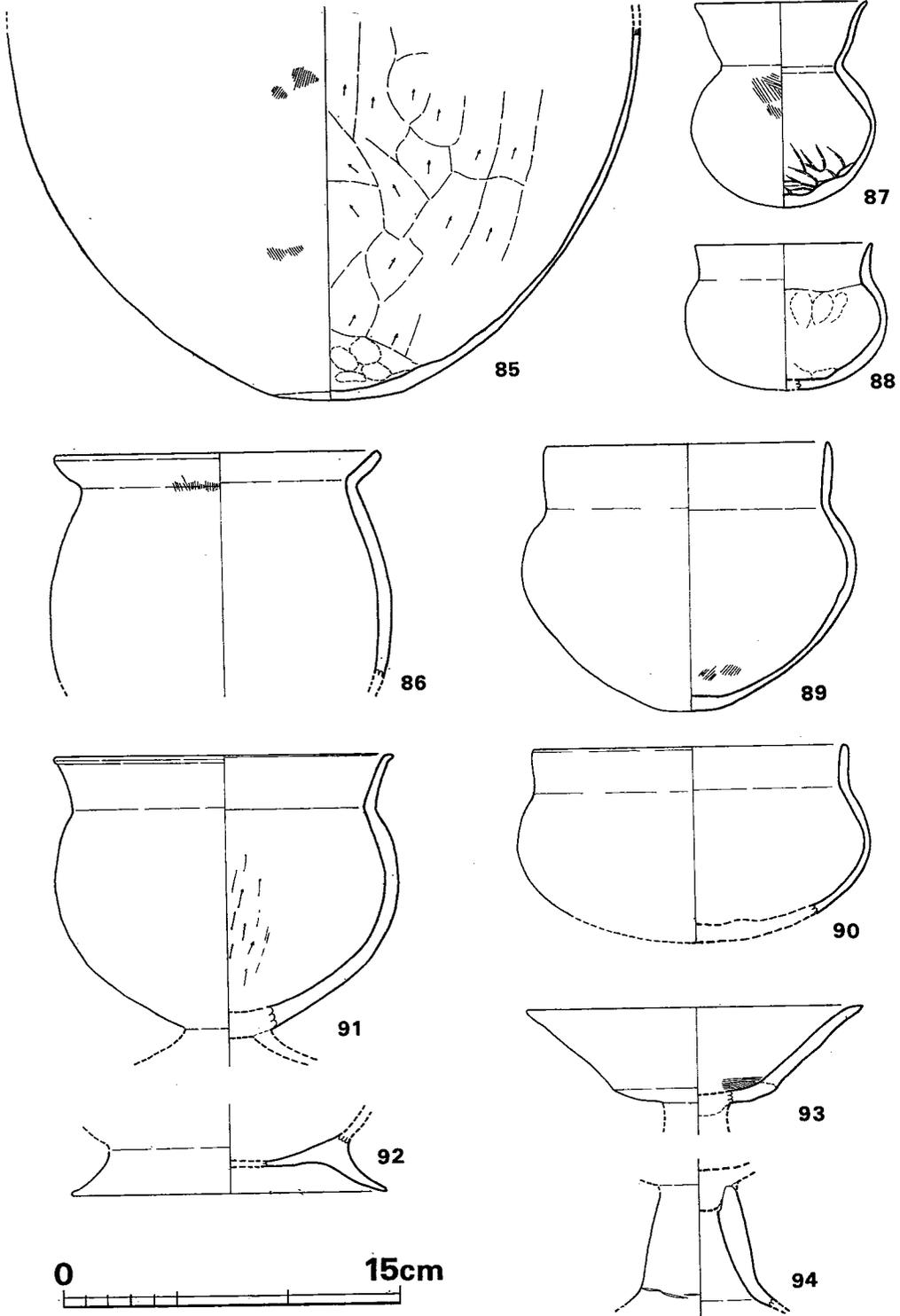


Fig. 28 太田町遺跡出土土師器実測図2 (1/3)

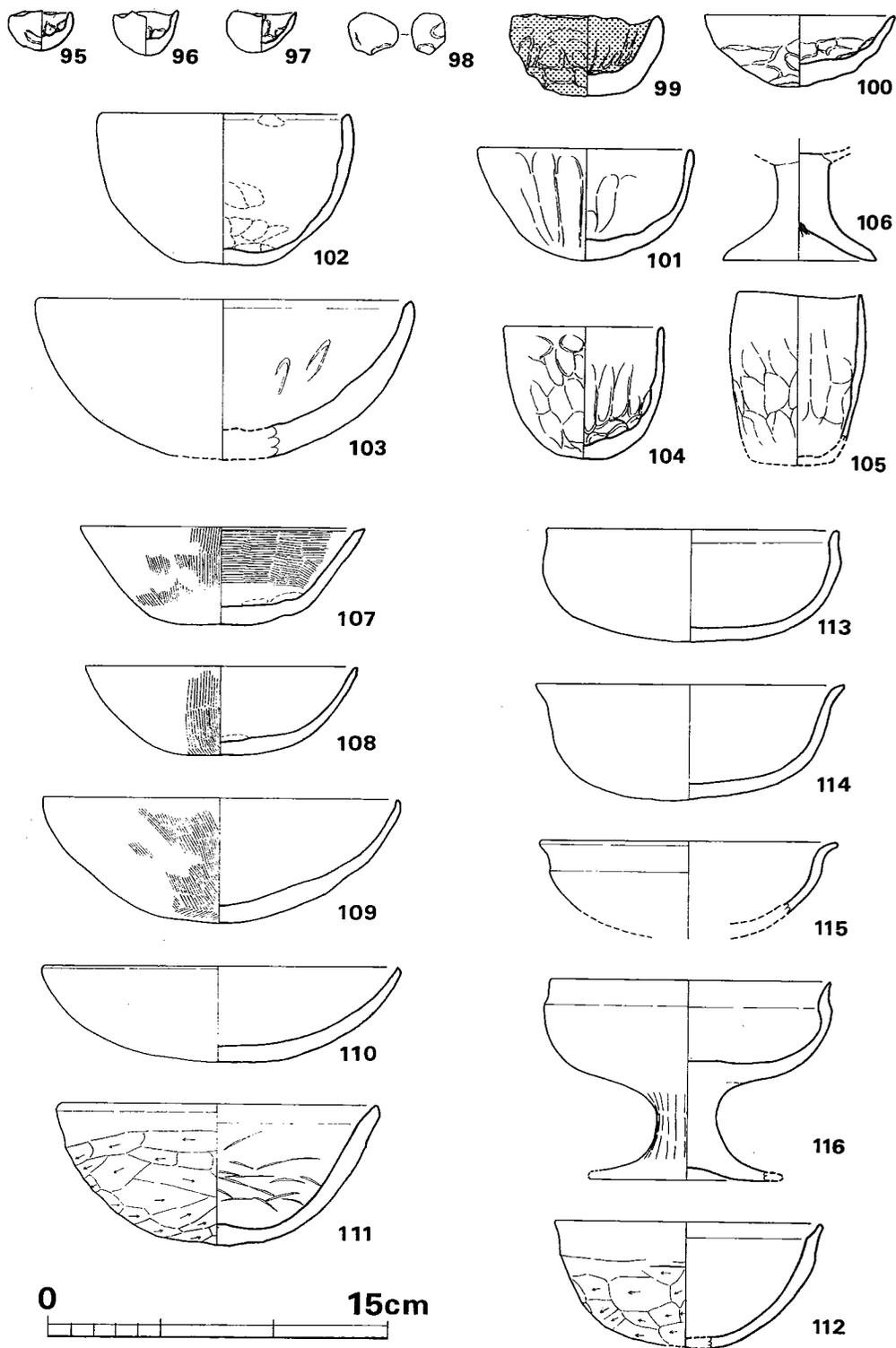


Fig. 29 太田町遺跡出土土師器実測図3 (1/3)

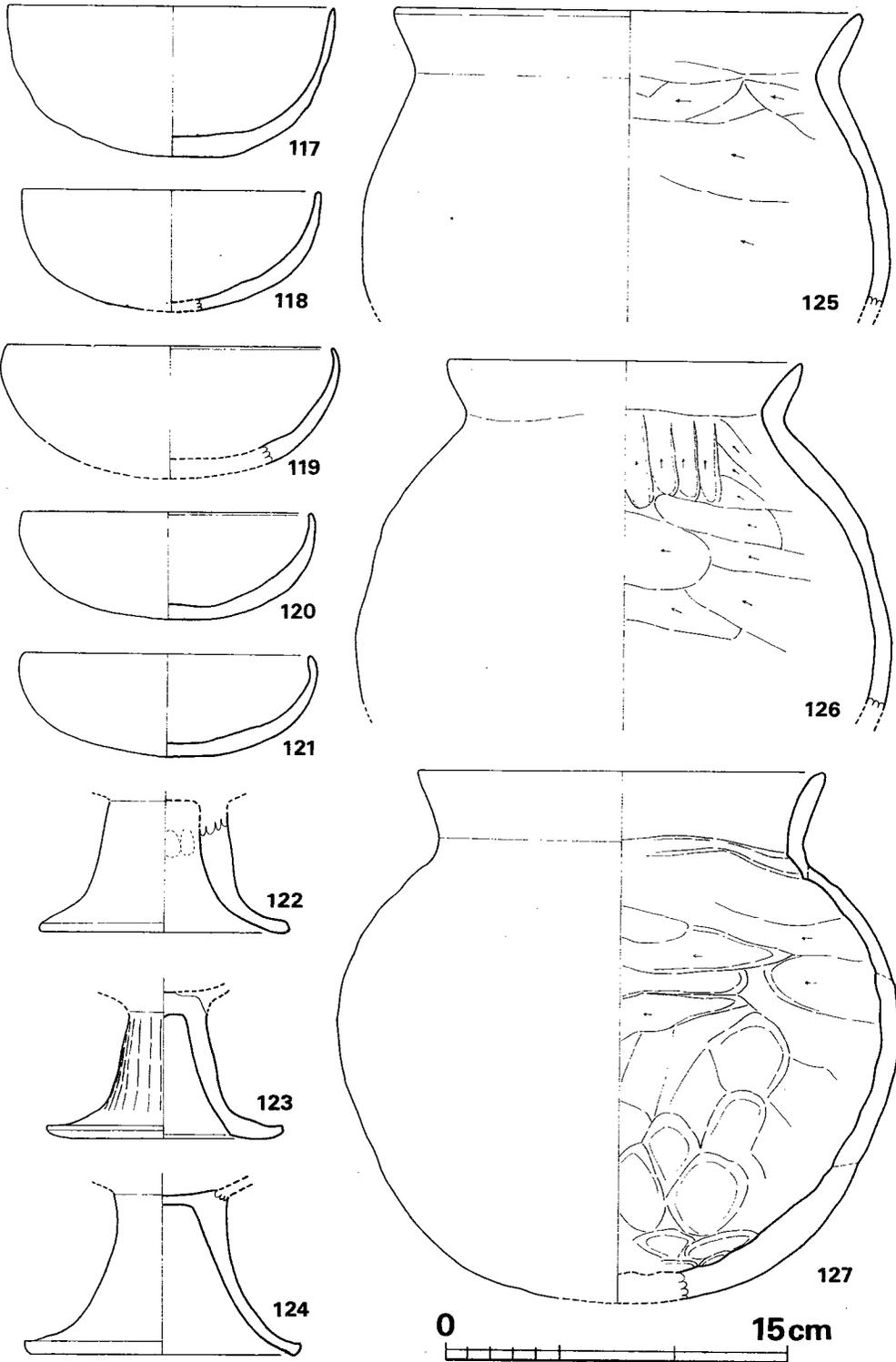


Fig. 30 太田町遺跡出土土師器実測図4 (1/3)

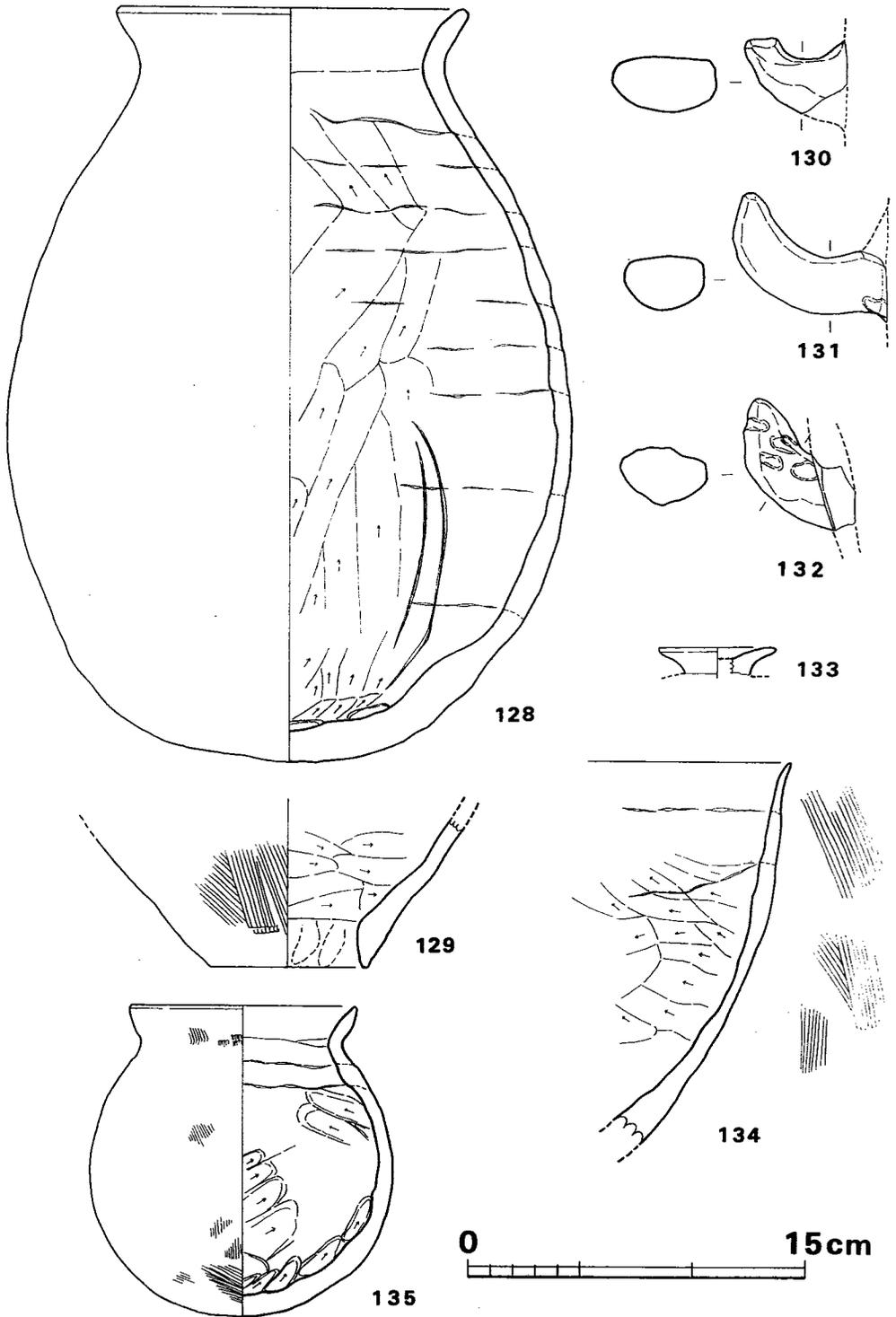


Fig. 31 太田町遺跡出土土師器実測図 5 (1/3)

甕 Fig. 28-86	床土下層	(1) 14.6 (2) — (3) 15.2	・短い口縁外反し、部分的に中ぶくらみ ・口縁内外面横ナデ ・頸部外面細かい縦ハケ	・あまり張らない胴部	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・淡茶色	1/4残存
埴 Fig. 28-87	包含層	(1) 7.8 (2) 9.2 (3) 8.5	・薄い口縁部はやや内湾して開き端部でわずかに外反 ・内外面横ナデ	・最大幅が中位にある胴部に丸底 ・底内面おさえナデ、胴上半内面横ナデ ・胴外面上半細かいハケ、下半横へら磨き	・胎土に粗砂幾らか含む ・焼成良好 ・赤褐色～黒色	2/3残存
埴 Fig. 28-88	包含層	(1) 8.0 (2) 6.6 (3) 9.1	・短く外湾ぎみに直立する口縁	・やや扁平な胴部に安定する丸底 ・内面上下に指オサエ	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや不良 ・赤茶色	2/5残存
直口壺 Fig. 28-89	地山直上	(1) 12.8 (2) 12.1 (3) 15.1	・外ぶくらみの直立する口縁 ・上端は小さな平坦面をなす	・胴最大径が上位にあり小さな平底風丸底にすぼまる ・底部内面一部ハケ ・胴部外面煤付着	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや不良 ・茶褐色	1/2残存
直口壺 Fig. 28-90	包含層	(1) 14.2 (2) 8.8 (復元) (3) 15.9	・短く直立する口縁	・扁平な胴部で胴最大径はやや上位にある	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・茶褐色	1/3残存
壺 Fig. 28-91	地山直上	(1) 15.2 (2) 12.7 (3) 15.4	・直線的に外傾する口縁で外端部張り出す ・内外面横ナデ	・胴最大径がやや上位にある ・内面ナデ上げ ・外面丁寧なナデ	・胎土に粗砂かなり含む ・焼成良好 ・内面暗褐色 ・外面赤褐色	1/2残存 台付 壺か
台付壺	包含層	(1) — (2) —	・欠損	・短く低い脚が開く ・脚内面へら磨き	・胎土に粗砂少量含む	1/3残存

Fig. 28—92		(3)脚部径 14.2		・二次焼成受ける	・焼成やや良 ・暗茶色
			杯部の特徴	脚部の特徴	
高杯 Fig. 28—93	床土下層	(1)杯部径 15.3 (2)器高 — (3)脚部径 —	・体部で屈折し長く大きく開く口縁 ・端部は尖る ・底内面細かいハケ ・口縁内外面磨き	・欠損	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・暗赤褐色
高杯 Fig. 28—94	床土	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・やや中ぶくらみの脚柱 ・外面へう磨き ・杯部脚部接合はヘソ挿入法	・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・茶褐色

Tab.17 土器の観察(その17) 太田町遺跡包含層その他出土土器5

器種	出土地点 遺構	法量	口縁部の特徴	底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
土製模造品 Fig. 29—95	包含層	(1)口径 3.0 (2)器高 1.7 (3) —	・手捏ね土器で口縁は波状のまま	・厚い丸底状の碗形ミニチュア ・指オサエ各所に見られる	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや良 ・赤茶色	
土製模造品 Fig. 29—96	包含層	(1) 3.0 (2) 2.0 (3) —	・手捏ね土器で口縁波状のまま	・厚い丸底状の碗形ミニチュア ・指オサエ各所に見られる	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや良 ・赤茶色	
土製模造品 Fig. 29—97	包含層	(1) 2.9 (2) 1.7 (3) —	・手捏ね土器で口縁波状のまま	・丸底状の碗形ミニチュア ・指オサエ各所に見られる	・胎土に粗砂少量含む ・焼成やや良 ・赤茶色	
土製模造品	包含層	(1)長さ 2.2 (2)幅 1.9	・土玉状の手捏ね土製品 ・孔等は見られない		・胎土粗砂少量含む ・焼成やや良	

Fig. 29—98		(3) 径 1.5	・指オサエ2カ所		・赤茶色	
土製模造品 Fig. 29—99	包含層	(1)口 径 6.6 (2)器 高 3.6 (3) —	・手捏ね土器で口縁波 状のまま	・丸底状の碗形ミニチュ ェア ・内面オサエナデ上げ ・外面指オサエ ・全面丹塗り	・胎土に粗石英少 量含む ・焼成良好	
土製模造品 Fig. 29—100	表土	(1) 8.5 (2) 3.1 (3) —	・口縁部開く手捏ね土 器	・丸底状の浅い碗形ミ ニチュア ・内外面指オサエ	・胎土に粗砂多く 含む ・焼成良好 ・茶褐色	
手捏ね土器 Fig. 29—101	包含層	(1) 9.8 (2) 5.0 (3) —	・手捏ね土器で幾らか 開く口縁	・厚い丸底 ・内外面指オサエナデ 上げ	・胎土に粗砂多く 含む ・焼成良好 ・淡褐色	1/5残存
手捏ね土器 Fig. 29—102	包含層	(1) 11.0 (2) 6.7 (3)底 径 4.5	・内湾ぎみに立ち上が る口縁	・安定の良い丸底風平 底 ・底部内面指オサエ ・体部内面オサエの上 ナデ	・胎土に粗砂多く 含む ・焼成良 ・淡灰褐色	1/4残存
碗 Fig. 29—103	包含層	(1) 16.8 (2) 7.1 (3) —	・厚い器壁で内湾ぎみ に開く ・内面一部にオサエナ デ上げ	・厚い器壁のまま丸底 となる ・内外面やや凹凸著し く手捏ね的	・胎土に極大粗砂 少量 ・焼成良好 ・茶色	
手捏ね土器 Fig. 29—104	包含層	(1) 7.1 (2) 5.9 (3) —	・ほぼ垂直にのびる口 縁	・丸底のコップ状の器 形 ・内外面指オサエ	・胎土に粗砂かな り含む ・焼成良好 ・淡褐色	2/5残存
手捏ね土器 Fig. 29—105	地山直上	(1) 5.6 (2) 7.6 (3) —	・薄くほぼ垂直にのび る口縁 ・上面は波状のまま	・コップ状の縦長の器 形 ・内外面指オサエ	・胎土に粗砂多く 含む ・焼成やや良 ・灰白褐色	1/2残存
土製模造品	表土	(1) —	・欠損	・高杯状のミニチュア	・胎土に粗砂かな	

Fig. 29—106		(2) — (3)脚 部 径 6.8		土器 ・充実した脚柱から端 部へ開く ・脚柱下内面にシボリ 痕	り含む ・焼成やや良 ・淡赤褐色	
杯 Fig. 29—107	床土下層	(1) 12.7 (2) 4.4 (3) —	・直線的に開く口縁 で、上面は平坦面を なし内傾する ・内面細かい横ハケ ・外面縦ハケ	・やや厚い底部からゆ るく屈曲して立ち上 がる ・内面指オサエ	・胎土に細砂幾ら か含む ・焼成やや良 ・内面黒色 外面黒茶褐色	1/2残存
杯 Fig. 29—108	包含層	(1) 12.2 (2) 4.0 (3) —	・薄（内湾ぎみに開く 口縁） ・内面一部ナデ上げ ・外面細かい縦ハケ	・内面指オサエ ・外面縦ハケ	・胎土に粗砂かな り含む ・焼成良好 ・茶色	
杯 Fig. 29—109	包含層	(1) 15.9 (2) 5.6 (3) —	・内湾ぎみに薄く開く 口唇部は尖る ・外面細かい斜めハケ	・不安定に皿状に開く	・胎土に粗砂少量 含む ・焼成やや不良 ・黒～淡黄褐色	
杯 Fig. 29—110	包含層	(1) 16.1 (2) 4.3 (3) —	・やや内湾ぎみに開く 口縁 ・内外面横ナデ	・不安定に皿状に開く	・胎土に粗砂幾ら か含む ・焼成良好 ・淡褐色	
杯 Fig. 29—111	包含層	(1) 14.0 (2) 6.3 (3) —	・厚い器壁で口唇部や や外反し、外端に稜 を有する ・内外面横ナデ	・深い碗状の器形 ・外面へら割り ・内面荒いへら調整の 上横ナデ	・胎土に粗砂かな り含む ・焼成やや良 ・暗黄褐色	
杯	第3層 黒色土	(1) 12.1 (2) 5.6 (3) —	・内湾して立ち上がる 体部 ・内面に稜を作り、短	・深い碗状の器形 ・外面へら割り ・内全面へら磨き	・胎土に粗砂幾ら か含む ・焼成良好	1/2残存

Fig.29—112			く外反する口縁 ・外面横ナデ		・淡黄褐色	
杯 Fig.29—113	包含層	(1) 13.2 (2) 5.0 (3) —	・内湾して立ち上がる 体部から、内面不明 瞭な稜を作り短く外 反する口縁 ・横へら磨き	・安定する丸底の碗状 の器形 ・底外面にへらによる 2沈線 ・二次焼成受ける	・胎土に粗砂かな り含む ・焼成良好 ・暗赤褐色	2/3残存
杯 Fig.29—114	包含層	(1) 13.8 (2) 5.1 (3) —	・開いて立ち上がる体 部からさらにゆるく 外反する口縁部 ・先端は尖る	・碗状の器形 ・内外面へら磨きか	・胎土わりと精良 ・焼成良好 ・赤褐色	
杯 Fig.29—115	包含層	(1) 13.4 (2) 4.4 (3) — (復元)	・開く体部から丸く外 反する口縁 ・内外面横ナデ	・欠損 ・台付碗となるか	・胎土わりと精良 ・焼成良好 ・赤褐色	
			杯 部 の 特 徴	脚 部 の 特 徴		
脚付碗 Fig.29—116	包含層	(1) 12.6 (2) 9.0 (3) 脚部径 8.7 (復元)	・内湾する体部から短 く外反する口縁 ・内外面横ナデ	・細く充実する脚柱 ・脚柱外面へら削り ・脚端横ナデ	・胎土に細砂多く 含む ・焼成良好 ・赤茶色	

Tab.18 土器の観察(その18) 太田町遺跡包含層その他出土土器6

器種	出土地点 遺構	法量	口縁部の特徴	底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
杯 Fig.30—117	包含層	(1) 口径 14.5cm (2) 器高 6.6 (3) —	・内湾ぎみに長く開く 口縁	・半球形の深い碗状 ・外面はやや凹凸著し い	・胎土に細砂多く 含む ・焼成良好 ・暗赤褐色	1/2残存
杯 Fig.30—118	包含層	(1) 13.1 (2) 5.3 (3) —	・内湾ぎみに開く体部 から薄くのびる口縁	・不安定な半球形の碗 状をなす	・胎土に細砂かな り含む ・焼成やや良 ・赤褐色	1/2残存

杯 Fig.30-119	包含層	(1) 14.6 (2) 5.8 (3) (復元) —	・薄くなりつつ内湾する口縁	・二次焼成を受ける ・不安定な盥状の器形	・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・赤茶色	2/3残存
杯 Fig.30-120	包含層	(1) 12.9 (2) 4.7 (3) —	・薄くなりつつ内湾する口縁	・不安定な盥状の器形	・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・赤茶色	3/4残存
杯 Fig.30-121	包含層	(1) 12.7 (2) 4.6 (3) —	・薄くなりつつ内湾する口縁	・不安定な盥状の器形	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・暗赤茶色	1/2残存
			杯 部 の 特 徴	脚 部 の 特 徴		
高 杯 Fig.30-122	包含層	(1)杯 部 径 — (2) — (3)脚 部 径 11.0	・欠損	・やや太い脚から短く開き、端部は丸くおさめる ・脚柱内面指オサエ、端部内外面横ナデ ・二次焼成を受ける	・胎土わりと精良 ・焼成良好 ・赤茶色	1/3残存
高 杯 Fig.30-123	地山直上	(1) — (2) — (3) 10.5	・欠損	・開く脚部内面に稜を作りさらに開く ・脚柱外面へラ削りの上ナデ ・端部内外面、脚柱下半横ナデ	・胎土わりと精良 ・焼成良好 ・暗茶褐色	
高 杯 Fig.30-124	包含層	(1) — (2) — (3) 12.3	・欠損	・やや太い脚部から開き、端部は上方へ張り出す	・胎土わりと精良 ・焼成やや不良 ・茶色	
			口 頸 部 の 特 徴	胴 底 部 の 特 徴		
壺	包含層	(1)口 径 20.6 (2)器 高 —	・頸部屈折し、短く外反する口縁	・やや丸く張る胴部 ・内面横へラ削り	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好	

Fig.30—125		(3)胴最大径 23.2			・茶褐色	
壺 Fig.30—126	包含層	(1) 15.6 (2) — (3) 23.7	・頸部屈折し、短く外反する口縁	・厚い器壁で丸く張る胴部 ・胴上半内面指ナデ上げ以下ヘラ削り ・外面煤付着	・胎土粗砂多く含む ・焼成良好 ・赤茶色	1/2残存
壺 Fig.30—127	床土	(1) 17.9 (2) 23.6 (3) 24.9	・頸部屈折し短く外反する口縁	・球形の胴部 ・内面上半ヘラ削り、オサエナデ ・内面下半指オサエ ・外面二次焼成受ける	・胎土粗砂多く含む ・焼成良好 ・外面赤～黒 内面暗褐色	1/2残存

Tab.19 土器の観察(その19) 太田町遺跡包含層その他出土土器7

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕 Fig.31—128	地山直上	(1)口径 15.8cm (2)器高 33.6 (3)胴最大径 25.2	・小さくすぼまる頸部から短く外反する厚手の口縁	・胴最大径が下位にあり、不安定な厚い底部となる ・胴内面ヘラ削り、ヘラ沈線状の擦痕あり ・輪積み痕明瞭	・胎土に粗砂多く含む ・焼成良好 ・暗褐色	1/2残存
甌 Fig.31—129	包含層	(1) — (2) — (3)底部径 7.0	・欠損	・大きく底をぬいた底部 ・内面ヘラ削り、穴内面指オサエ ・外面粗い縦ハケ	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡赤褐色	
把手 Fig.31—130	包含層	(1) — (2) — (3) —	・扁平で短い把手片 ・下半に粘土をつめて器壁外面に貼りつける類		・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・黄茶褐色	
把手	包含層	(1) — (2) —	・上面やや平坦な把手 ・上半に土をつめて器		・胎土に粗砂少量含む	

Fig.31-131		(3) —	壁面に貼りつける類 ・基部に指オサエ		・焼成やや不良 ・白褐色	
把手 Fig.31-132	包含層	(1) — (2) — (3) —	・手捏ね的でやや扁平な把手 ・基部を器壁に挿入する類 ・指オサエ各所		・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・淡茶色	
つまみ Fig.31-133	包含層	(1) — (2) — (3) —	・上面が大きくへこむ ・大型のつまみ		・胎土に細砂多く含む ・焼成良好 ・明赤褐色	
鉢 Fig.31-134	包含層	(1)約 30.0 (2) — (3) —	・やや開き立ち上がる胴部から小さく外反する口縁 ・先端が尖る	・内面へら削り ・外面粗い縦ハケ ・輪積み痕が見られる	・胎土に粗砂少量含む ・焼成良好 ・黄茶色	
壺 Fig.31-135	地山直上	(1) 10.2 (2) 13.8 (3) 13.6	・短くやや中ぶくらみの口縁 ・頸部外面細かい縦ハケ ・口縁内外面横ナデ	・球形の胴部で輪積み痕残る ・内面指ナデ上げ ・外面細かい縦・斜めハケ	・胎土に粗砂多く含む ・焼成やや良 ・淡暗褐色	1/2残存

(中間研志)

D. 包含層その他出土の須恵器

蓋杯

蓋 4 個, 身 5 個が採取されているが, セット関係にあるものはない。

蓋 (Fig.32-1~5)

二類に分れる。Ⅰ類は 1・2 で, 1 は最大径 11.6cm, 器高 4.5cm。2 は最大径 11.8cm, 器高 4.8cm と略同大であり, 形態・調整法からみて古式に属すると思われる。ただし, 前者が焼成堅緻でシャープであるのに対して, 後者は一部が黄灰色を呈し軟調であるという相違がある。

Ⅱ類は 3・4 で, 前者は, 復元口径 12.6cm, 同器高 4.4cm。4 は, 復元口径 13.4cm, 同器高 4.4cm とⅠ類に比しひとまわり大きい。手法上でも, 共に頂部内面に青海波文をとどめてⅠ類とは異なる。全体に厚手で野暮ったい感を受け, 黒青色を呈するが軟調である。

身 (Fig.32—5～9)

四類に分れる。Ⅰ類の5は、最大径13.7cm、器高6.2cmで、立上り部が高い点が特徴的である。灰青色を呈し、胎土も良好。底部は手持状態で篋削りを施す。Ⅱ類の6は、復元最大径14.4cm、器高5.3cm。厚手でシャープさに欠ける。灰青色を呈し焼成良好であるが、細粒が多い。篋削りの範囲は広く、これは杯類の全てに共通する。Ⅲ類の7は、最大径14cm、器高4.5cm。焼成堅緻であるが、細粒を多く含む。Ⅳ類には8・9が充てられ、形態、成形・焼成、胎

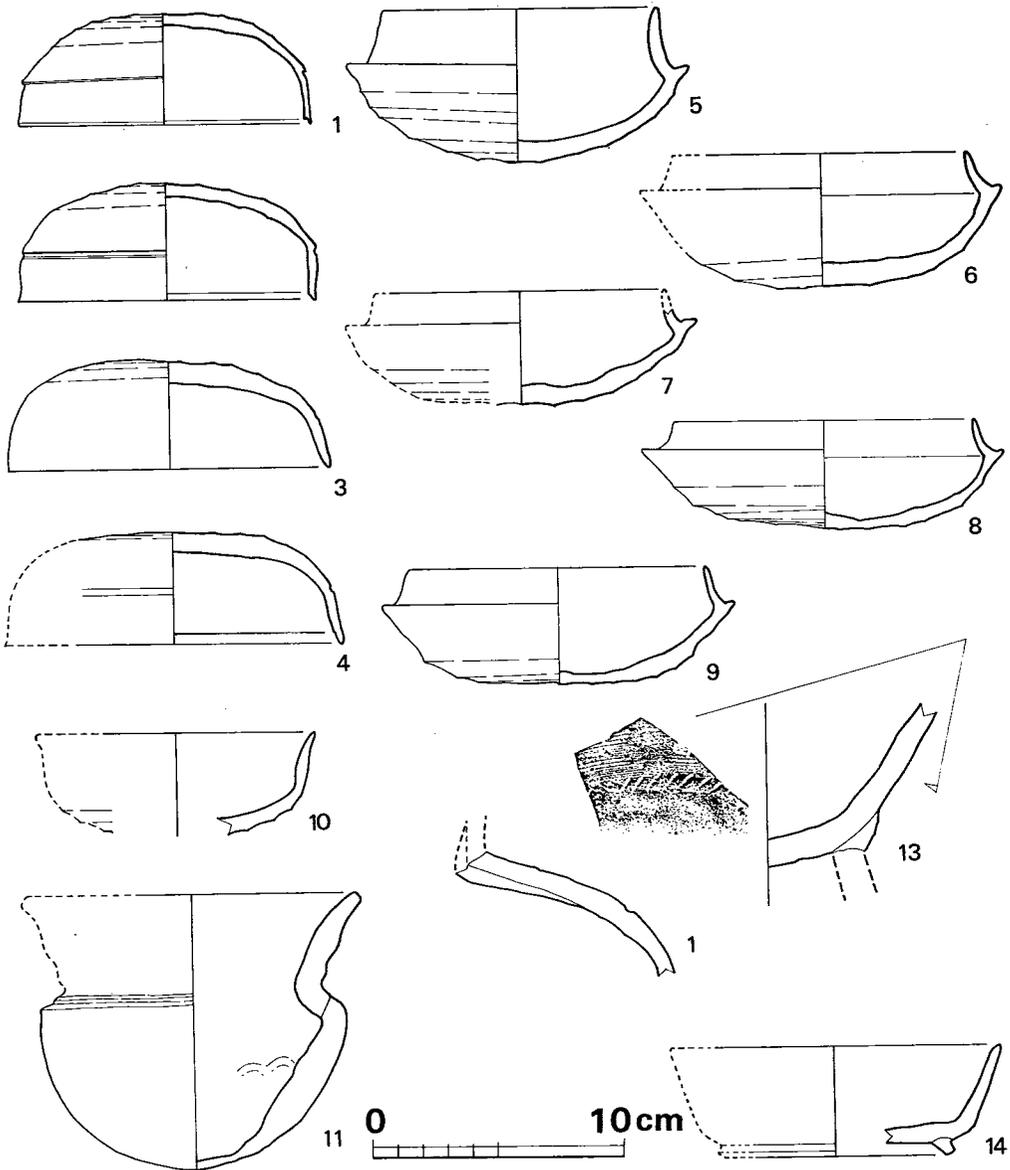
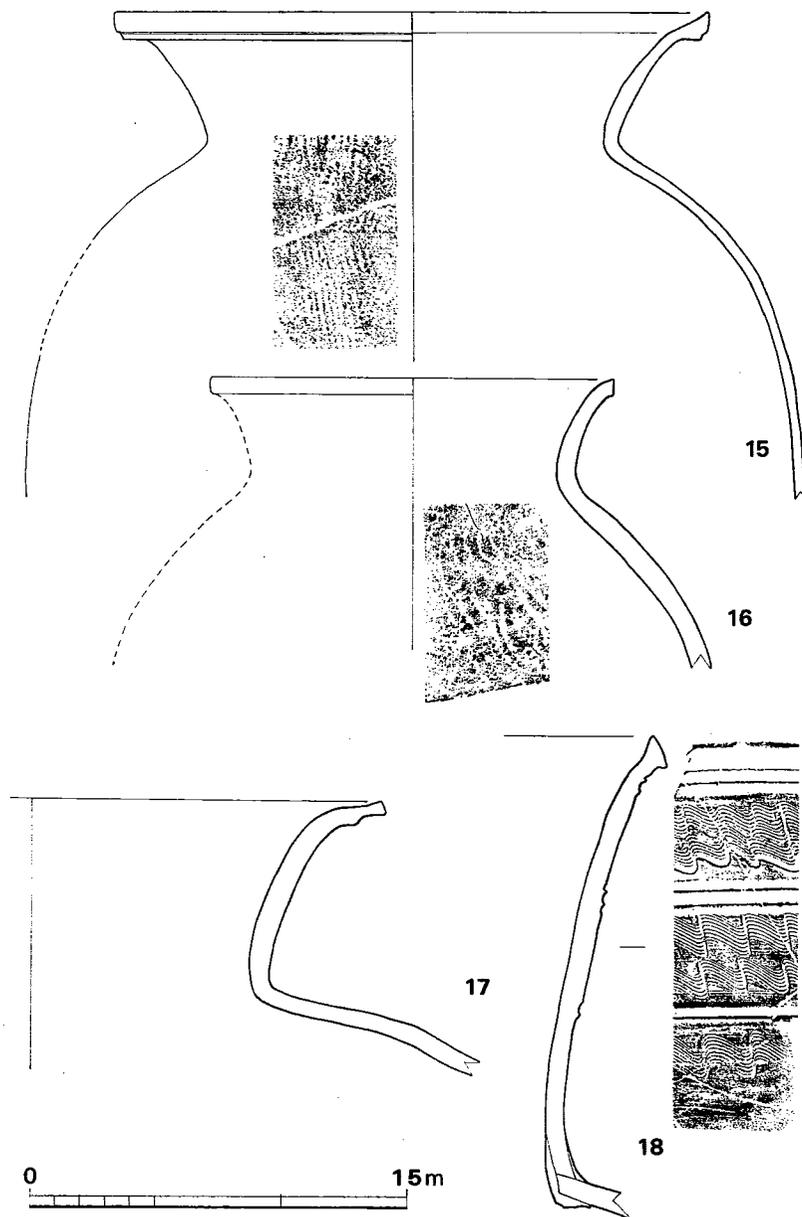


Fig. 32 太田町遺跡出土須恵器実測図1 (1/3)

土のいづれも極めて類似する。前者は最大径14.3cm，器高4.4cm，後者は14.3cm，4.5cmと法量もまた似通う。

無蓋高杯 (Fig.32-10)

杯部の一部のみ現存。復元口径11.2cm，杯部高4cm。底部に篋による切りこみ痕があり，脚部には透しがあったと思われる。



罎? (Fig.32-11)

復元口径13.2cm，胴部最大径12cm，器高11cm。全体的に厚手で，手捏風のつくりである。器表は，叩き板にて軽くしめており，肩部に篋削りを施した後にナデ調整。内面の肩部から底部にかけての各所に，輪積時に指頭によりおさえた痕跡をとどめる。黒灰色を呈し，焼成・胎土ともに良好。

平瓶? (Fig.32-12)

黒灰色を呈して焼成良好。

器台 (Fig.32-13)

鉢部の小片の

Fig. 33 太田町遺跡出土須恵器実測図2 (1/3)

み。底部近くに櫛歯文が付されている。

高台付杯 (Fig.32—14)

復元最大径13.6cm, 器高4.4cm。細粒多く, 器肌はザラつく。付高台で, 所定の位置に予め沈線がめぐらされている。

甕 (Fig.33—15~18)

4個体分の破片がある。うち、15・16は「赤焼き」である。

17は復元口径27.8cmで, 胎土・焼成ともに良好で, 器表は丁寧になでられて, 器具の痕跡をとどめない。18は復元口径38.2cm, 頸高18cmの大形品。2段に沈線帯をめぐらし, 3段にわたって櫛描波状文をめぐらす。黒灰色を呈し焼成良好であり, 古式の様相をもつ。

15は, 口径23.8cm, 頸径16.4cm, 頸高6.3cm。胴部最大径は約31cmに復元される。赤褐色を呈し軟調で, 内外面に叩き板・棒の痕をとどめる。16は, 黄灰色を呈してやはり軟調。復元口径18cmで, 3と同様, 成形・調整は須恵器のそれと同工。

(3) 鉄器

鎌 (Fig.34—1~3)

3個体分が採取されているが, いずれも柄部木質は現存しない。1は先端と基部の一部をとどめるに過ぎない。研ぎ減りによって先端の巾は狭まっているが, 棟厚5mm, 巾5cm前後の厚鎌とみられる。折り返し部は1mm弱と極めて薄い。2は, 1と同様に基部を刃部と直交させて折り曲げている。巾2.5cmで, 厚さ3mm弱と薄手で, 刃部は全体に稍内彎気味となっている。3は巾3.5cm強, 厚さ5mm。1と同様に研ぎ減りが著しい。前二者とは異なり, 柄は斜交してとりつけられている。

短刀片 (Fig.34—4)

現存長8cm強, 片面にのみ鞘部の木質をとどめる。

不明鉄器 (Fig.34—5)

径5mmの棒状品で, 先端は尖る。現存長12cm弱で, 反りがある。

鉄斧形鉄器 (Fig.34—6, 7)

刃部が斜交する形で鏽着した状態で, 2個が採取されている。いずれも鋳造品であるが, 非相称である。6は, 復元全長15.3cm (現存長14.1cm), 復元刃部最大巾15.3cm。袋部最大巾は5.8cmに復元され, 厚さは2.6cmである。7はひとまわり小さく, 復元全長12.3cm (現存長11.2cm)。復元最大巾は6.4cm。袋部最大巾は4.5cmに復元され, 厚さは2.3cmとみられる。

(4) 滑石製品

滑石製子持勾玉 (Fig.35)

E9区から, 状態としては須恵器片(甕)とともに出土しているが, 確実な遺構に伴うもの

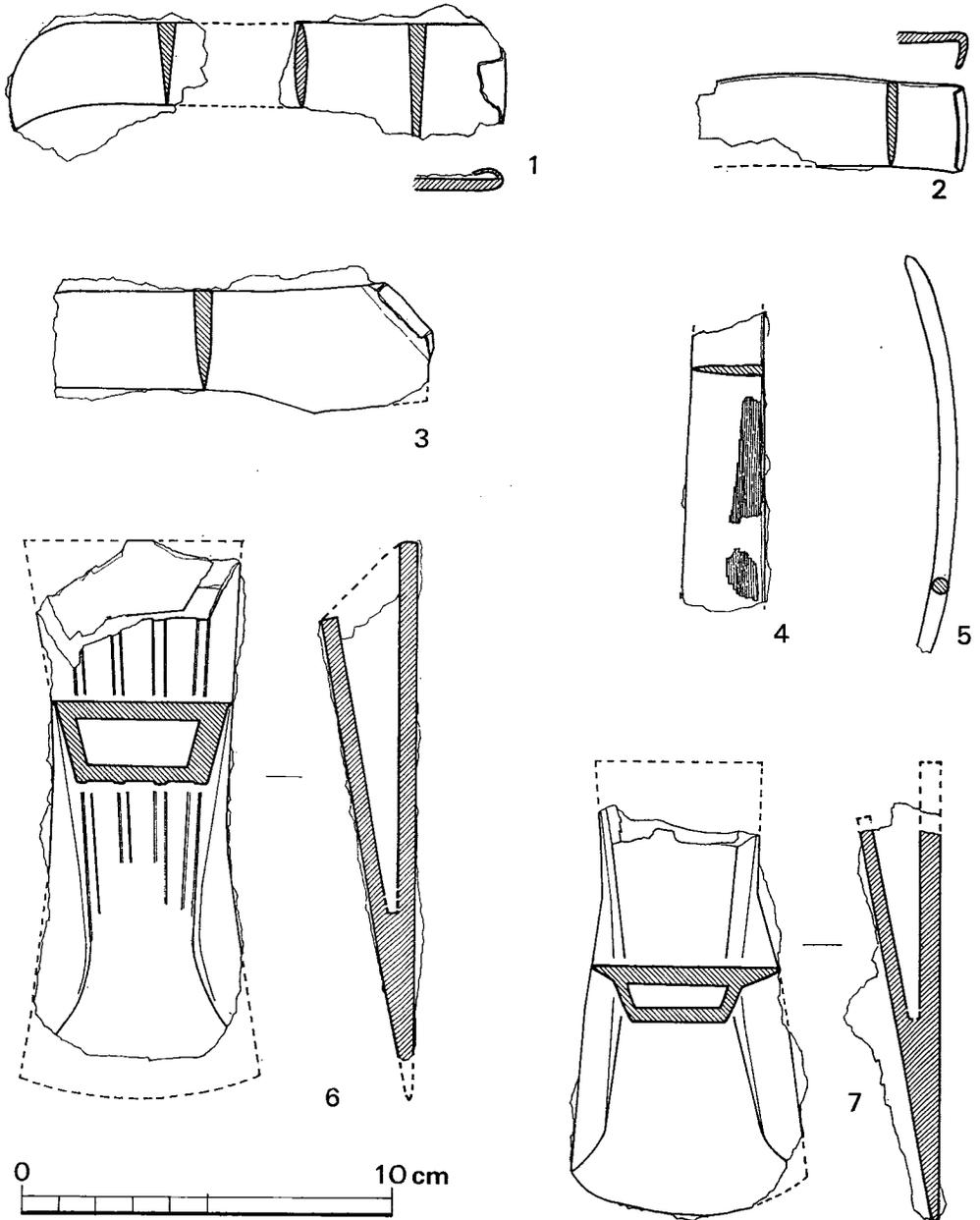


Fig. 34 太田町遺跡出土鉄器実測図 (1/3)

のではない。頭部側の一端を欠き、この他各所に傷があり、原形を損なっている。現存長12.3 cm, 最大巾4.3 cm, 最大厚2.5 cmの大型品で、両端が尖った三日月状の特異な形状を呈する。腹部の子は、削り落されているが、長さ1.4 mm弱とみられ稍貧弱で、矩形であったと思われる。背面の

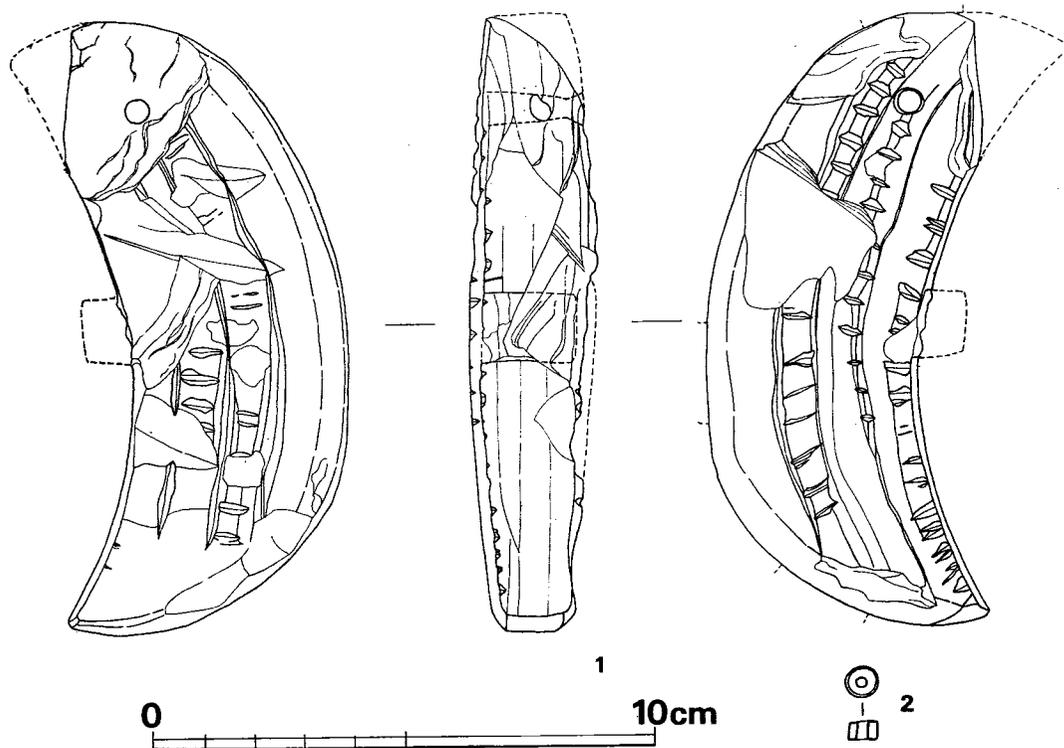


Fig. 35 太田町遺跡出土滑石製品実測図 (2/3)

子もまた現存しないが、三ヶ所に背面の縦方向の3条の工具痕とは異なる切削痕がある。けれども、背部の面取りはこの切削の後に行なわれている。従って最初三ヶ所に子をつくりかけたがうまくいかず、途中でこれらを削り落したものと推定される。側面の子の表現は、両面とも各3条の沈線を彫りこの間を適当に刻んだだけの形式的・平面的なものである。孔は現存部分は一方からの穿孔によっているが、厚さからみて両側から穿たれたと思われる。全体に、表現・仕上ともに粗雑である。

九州における滑石製子持勾玉については、既に佐田茂氏の論考があり、同氏は27ヶ所30個、うち県内では18ヶ所の出土例を挙げておられる(註1)。古賀町では初の出土例であるが、周辺では沖の島の4ヶ所をはじめ、宗像郡宗像町・同福間町でも各1例が知られており(註2)、後述する古墳時代における「宗像君」の勢力圏を考慮すると、看過できないものがある(註3)。

(石山 勲)

註 1. 同氏「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』1975所収

2. 出土例については、前掲佐田氏論考に拠る。以下同様。

3. この他、粕屋郡久山町久原出土例、鞍手郡鞍手町、火の尾1号墳出土例についても同様である。ただし、「宗像君」の根拠地とみられる宗像郡津屋崎町からは未だ出土していない。

(5) 歴史時代土器

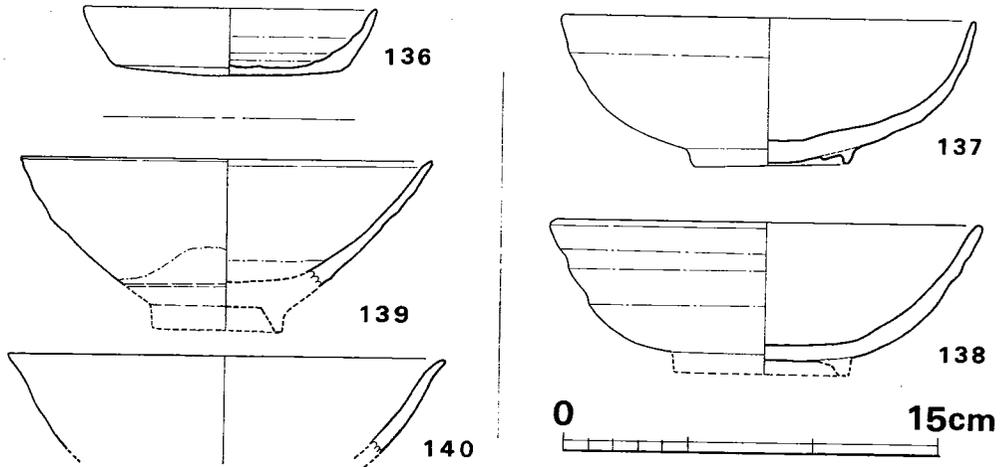


Fig. 36 太田町遺跡出土歴史時代土師器・瓦器・青磁実測図 (1/3)

Tab. 20 土器の観察 (その20) 太田町遺跡包含層その他出土土器 8

器種	法量	口縁部の特徴	底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
Ⅲ Fig.36-136	(1)口径 11.8cm (2)器高 2.7 (3)底径 9.0	・やや内湾ぎみに立ち上がる口縁 ・内外面横ナデ	・薄く底へ張り出すへら切り底	・胎土精良 ・焼成良好 ・淡茶色	
瓦器 椀 Fig.36-137	(1) 16.5 (2) 5.9 (3)高台径 6.3	・内湾して端部は丸味をおびる口縁 ・外面上半横ナデ, 下半凹凸著しい ・内面横へら磨き	・短く小さな高台を貼りつける ・内面縦横のナデつけ ・外面ナデ	・胎土精良 ・焼成やや不良 ・ねずみ色	1/2残存
瓦器 椀 Fig.36-138	(1) 17.4 (2) — (3) —	・内湾ぎみに開き, 端部は丸くおさめる口縁 ・内面丁寧な磨き ・外面ナデの上を部分的にへら磨き	・高台ははげる	・胎土精良 ・焼成良好 ・外面黒色 ・内面灰黒色	1/2残存
青磁 碗	(1) 16.5	・略直線的に開く端部が	・外面へら削り, 内外面	・胎土は密	1/2残存

Fig.36—139	(2) 6.8 (復元) (3) —	ら内面に稜をなす口縁 ・外面ナデによる凹凸	露胎 ・うぐいす色の灰褐色を おびた釉 ・細かい貫入	・焼成上半磁質、白 色 下半焼悪く淡茶色	
青磁碗 Fig.36—140	(1) 17.4 (2) — (3) —	・大きく開き先端でゆる く外反する口縁	・欠損 ・褐色をおびた暗緑色の 釉 ・全面に細かい貫入	・胎土は密 ・焼成は甘く灰色	1/3残存

3. 小 結

弥生終末～古式土師期の土器群について

本遺跡の弥生終末から古式土師期の時期にかけての土器群は、量的には包含層出土の弥生中期土器群に次ぐ出土量をみる。これらの約半分は、包含層及び遺構に伴わない地山直上のもので、他の半量は遺構内覆土・床面・土器溜等から出土したものである。この時期の土器群は、弥生終末期の従来西新式と呼称されていたもの、或いは早良平野西北端の宮の前Ⅰ式に併行すると考えられる一群と、布留式の影響を受けた有田Ⅰ～Ⅱ・湯納Ⅱ～Ⅲ・柏田Ⅲ期～下原期に略相当する一群との二期に大別される。以下、前者を太田町Ⅰ期、後者を太田町Ⅱ期と称することとする。ここでは、本遺跡近隣の川原庵遺跡の出土品をも併せて、器種毎に次のように分類した。(以下、Fig.37土器分類表を参照のこと。)

甕A類 (Fig.11—1) 小さい丸底気味の底部に、短かく外反するやや中ぶくらみの口縁をつくる類である。

B類 (a:Fig.9—1・2, Fig.11—4, Fig.19—28, Fig.27—73, b:Fig.17—11) a類は、口縁やや長く外反し、内面に稜をつくり、胴は殆んど張らない。内外面ハケ著しい。b類は大型の甕で、張らない胴部に開く口縁を有する類である。

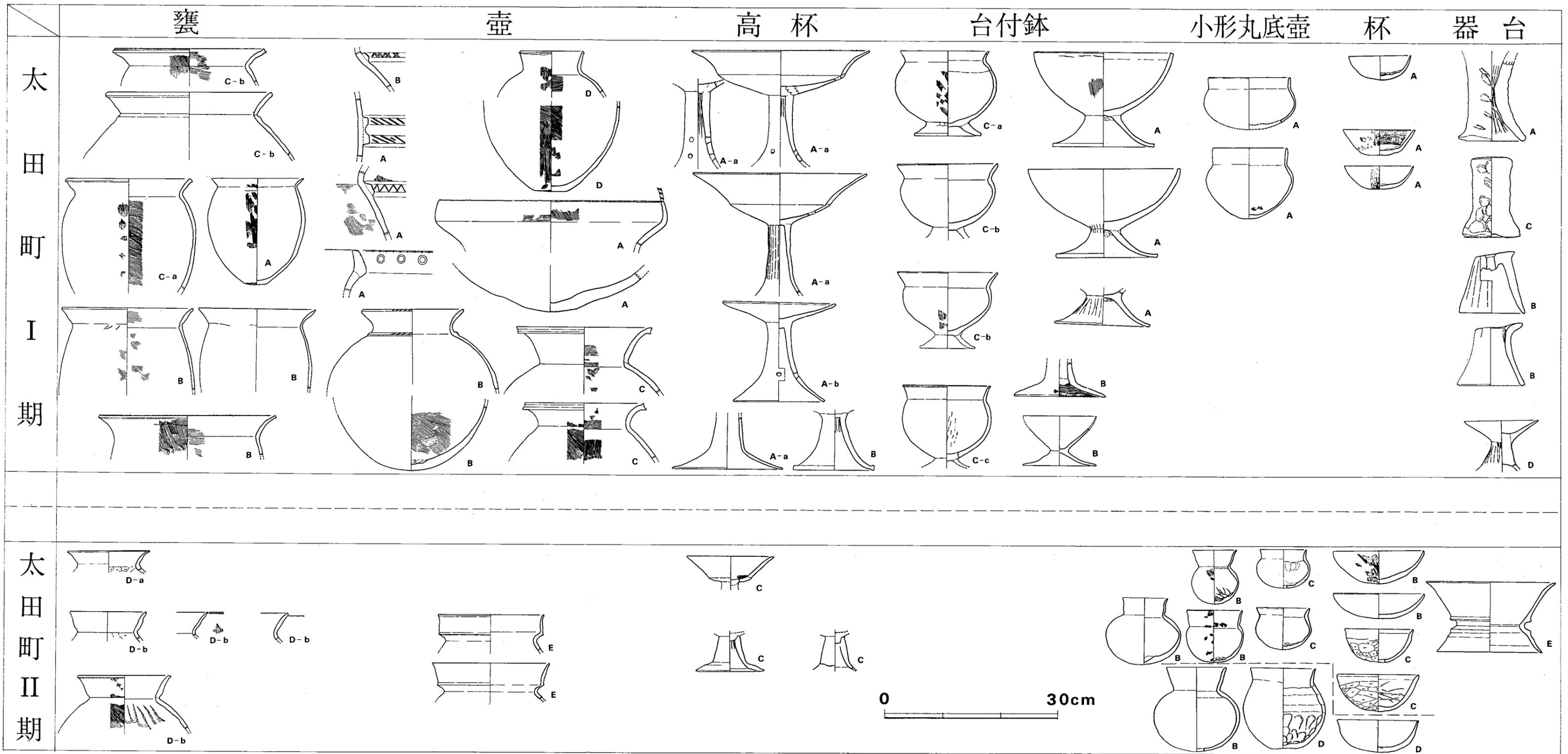
C類 (a:Fig.11—2, b:川原庵Fig.42—1・2, Fig.17—1) 中ぶくらみし、外端張り出す口縁をつくり、いくらか張る胴部をつくる。内外面ハケ著しい。頸部内面丸く屈曲するもの(a)、稜をつくり、下方へ開き張る胴部のもの(b)の二種に分けられる。

D類 (a:Fig.27—79, b:Fig.27—75・76・77・78) 口唇上端が突出し強く屈曲して外反し、庄内式系の傾向を残すもの(a)、頸部で強いくびれて球形の胴部をなし、中ぶくらみの口縁を有する布留式併行期と考えられるもの(b)がある。内面ヘラ削りが多い。

壺A類 (Fig.25—62・63・64・65, Fig.17—2) 従来西新式甕棺の類に入る大型の壺片。

B類 (Fig.17—3, Fig.11—6・7, Fig.26—66・67) 球形の胴部にやや長い口縁が開き、頸部に斜め刻目凸帯をつくる。

C類 (Fig.9—3, Fig.12—8) ラップ状に開き口縁端に凹線を廻らす。内外面ハケ著しい。



0 30cm

Fig. 37 太田町遺跡出土弥生終末～古式土師期土器分類表 (縮尺1/6)

D類 (川原庵Fig.42—4・5) 直口壺で口縁外端張り出す。丸底風平底。内外面ハケ著しい。

E類 (Fig.27—82・83) 二重口縁壺で、直に立ち上がるものと、やや外傾するものがある。

高杯A類 (a:Fig.13—15・16, Fig.17—9・10, 川原庵Fig.43—7・8・9, b:Fig.9—5) 大型の大きく開く類。b類は屈折部までで、開く口縁をつけない。

B類 (Fig.9—6) 中型で脚端部が立ち上がる類である。

C類 (Fig.28—93・94, Fig.14—5) 全体に小型化し、体部で屈折し口縁開く類。

小型丸底壺A類 (Fig.28—89・90) 短かい直口の壺で、やや大型のものと、扁平気味のものがある。

B類 (Fig.14—2, Fig.17—4, Fig.28—87, Fig.10—3) 球形の胴部に中ぶくらみする長い口縁をつける中型の類。

C類 (Fig.14—3, Fig.28—88) 小型で口縁短かく扁平気味の丸い胴部を有する。

D類 (Fig.15—2) 短かくやや外傾する口縁に安定する平底風丸底をつくる小壺の類
杯A類 (Fig.29—107・108, 川原庵Fig.42—6) 小型で薄手で、107は内外面ハケ著しい。

B類 (Fig.29—109・110) 浅い皿状に開く類で、109の外面にはハケ著しい。

C類 (Fig.29—111・112, Fig.14—4) 口縁下内面に稜をつくり外傾する口縁。内面へう磨き、外面はへう削りがみられる。やや深いタイプである。

D類 (Fig.15—1, Fig.29—113~116) 口縁が反転して短かく開く類である。116は、同類に充実する脚をつける類。

台付鉢A類 (Fig.12—9・10・12・13, Fig.26—68) 半球形の大口径の鉢に、低く広がる台を付ける。

B類 (Fig.9—7, Fig.26—72) 薄手で、低く広がる脚部をつけるものと、脚内面にハケ著しく直線的に広がるものがある。

C類 (a:Fig.10—1, b:Fig.12—11・14, c:Fig.28—91) 球形の胴部に短かく反転する口縁をつくる類(a)、頸部直下に胴最大径を有し、やや長く外反する口縁をつくる類(b)、球形の胴部から直線的にやや外傾して開き、口縁端が外方へ突出する類(c)の3類に分かれる。

器台A類 (Fig.17—7) 厚く手捏ね的な筒形の類である。

B類 (Fig.17—8, Fig.19—27, Fig.26—71) 杓形器台と呼ばれるもので、上面に当初から粘土を埋めないものと、埋めた後1孔を穿つものがある。

C類 (Fig.26—70) 充実して手捏ね的な支脚の類に入れられるものである。

D類 (Fig.10—4) 短かく充実する脚柱から直線的に開く受け部をつくる類である。

E類 (Fig.27—84) 鼓形器台と呼ばれる類で、くびれ部を挟んで上下に三角凸帯をつくり出す。

手ね捏土器 (Fig.17—12, Fig.29—95~106) 小型の模造品(碗・玉・高杯)とやや大きめの

碗状、コップ状のものがある。具体的にどの遺構に属し、如何なる祭祀等に関連するものか明確でない。

前項で甕を4類に、壺を5類に、高杯を3類に、小型丸底壺を4類に、杯を4類に、台付鉢を3類に、器台を5類にそれぞれ分類した。本遺跡においては、遺構別に一括出土品として各遺構間の差異を論ずることは、各々のセット関係の不明確さも手伝って、更に、整理時の遺構別遺物の混乱等の手違いもそれを困難にしてしまった。選別・図示し得たものからみると、これらは既述の如く2期に大別できる。Ⅰ期は弥生終末期前後に、Ⅱ期は布留式併行期前後の段階に位置付けられる。よって、両者間に1期或いは2期の土器群の存在が推定される。

甕A類は、弥生後期後半の特徴を残すが、口縁やや中ぶくらみになる点や、土器溜出土の他の弥生的な一群と一括の土器として考え、終末期に近い類とした。B類は、福岡市西区宮の前C地点墳丘内出土例(註1)にみられ、宮の前Ⅰ式に比定される。また、筑後市上北島狐塚遺跡(註2)においても出土し、狐塚Ⅰ期に含まれる。最近調査された佐賀県三養基郡基山町千塔山遺跡にもU字溝を主体としてみられ、弥生後期後半代に比定され(註3)ている。この類の甕は、最近他にも出土例が知られてきつつあり、共伴土器などから時期がかなりこれらの時期に限定されつつある。C類aもこの期に含まれようか。甕C類bは、胴の張る器形で、口縁中ぶくらみし、外端突出し、技法的に畿内古式土師器系の影響がみられることは否めない。ただ、口縁内湾気味に開く類ではないことから、布留期以前に、地元の内面までハケを著しく残す類の甕にある程度の影響を与えたことが想定されよう。以上の弥生最終末期前後の甕に伴う他の器種としては、壺A・B・C・D類がある。うちA類は従来西新式と呼ばれる壺棺片で、B類は頸部に斜め刻目凸帯をつける類で、一括土器として掲げた土器溜の一群にも含まれることから、終末期に比定される。C類は通常みられない器形であるが、筑後地方に幾らか見受けられる。即ち、狐塚第2号竪穴に類似品4例、同10号・11号・12号竪穴よりも各々出土している。山門郡瀬高町大道端C区第3号溝中(註4)からも口唇部が丸くなり刻目をつける類がみられる。狐塚例は、狐塚Ⅰ期・Ⅱ期に含まれる。目を転じて他文化圏地方をみるとこれらは大阪府高槻市安満遺跡等にみられるように従来畿内第Ⅴ様式と呼ばれる一群中にもみられる。ちなみに安満遺跡A5—2方形周溝墓出土の壺B類と称される一群は第Ⅴ様式の中でも後期中頃に位置付けられるという(註5)。このような弥生後期前後の開口壺の系統は、筑前地域においては稀少であるが、南は、鹿児島県吹上町辻堂原遺跡等においてもみられ(註6)、かなり広い分布を考えなければなるまいし、内外面にハケ著しいものであるが、狐塚第21号竪穴(狐塚Ⅱ期後半)に類例がある。

杯A類は小型でハケ著しく、精製な感じを与える類で、川原庵例などから、終末期前後の範囲に含まれよう。高杯A類は、大形の大きく開く類で、宮の前Ⅰ式を中心として代表的にみら

れる終末期のものであり、溝中出土等の一括品として他器種のもので矛盾しないであろう。小型丸底壺C類は短かく直口する類で、宮の前Ⅲ期に含まれる部分もあり、布留期より瀕り得る可能性もある。台付鉢A類は土器溜から弥生終末土器群とともに出土し、他に類例をみない。半球形鉢形土器そのものは弥生終末～古式土師器期にかけて散見するが、脚台を付ける類が出土したことは、新しい器種を付け加えた意味でも意義深い。台付鉢B類もいくらか散見するもので、終末期前後に位置付けられよう。台付鉢C類は、細部で3種に分けられるが、うち口縁が反転して開くb類は、大分県国東町安国寺遺跡出土例(註7)、熊本県下益城郡城南町塚原3号方形周溝墓出土例(註8)、福岡市西区野方中原A溝出土例(註9)などがあり、塚原例は布留式系の甕等と共伴するが、大方は後期後半～終末期の土器群とともに出土する例が多い。器台A類は、筒型の系統を引き、B類は杵形器台と通称される支脚、C類は充実する支脚である。略弥生終末期に入れられ、D類は小型丸底壺等を載せる器台としての認識から、若干時期の下降する可能性のあるものであろう。以上の太田町I期の土器群を弥生終末に比定したが、未だ流動的な要素は各所にある。例えば、甕B類の胴の張らない「く」の字に屈折する器形は、鞍手町向山遺跡第2号住居跡床面出土の布留式の影響の強い土器群中にもみられる(註10)。向山例は内面へう削りであり、直接比較はできないが、仮に内面ハケ調整がへう削り調整に先行するものだとしても、スムーズに移行している可能性は強く、布留併行期の直前期に太田町甕B類が置かれるという推定は充分可能であろう。まして、地元系土器群に外来的手法(この場合は内面へう削り)が与える影響の地域的差異の存在を認めるならば、なおさらである。いづれにせよ、この種の甕は、今後外来的土器群との共伴例に注目せねばならず、編年の鍵となるであろうと考える。

以上の弥生終末期前後に比定されるI期の土器群に対して、下降して布留併行期を中心とするⅡ期の土器群が存在する。甕D類は、布留式併行期前後のものであるが、口縁が内湾気味に開くものはない。うちD-a類は、口縁やや長く外反し口唇部上端を突出させるものであり、庄内式的な特徴をいくらか残す如き類である。壺E類は二重口縁を有するもので、やや外傾するものと、ほぼ直立するものとがある。口唇外端を突出させたり、口縁の中ぶくらみや強くくびれる頸部などの諸点は布留式系の技法の影響を受けるものであろう。高杯C類は、小型で低い脚部をつくる類で、むしろ和泉式に近い傾向を示す。小型丸底壺B類は、筑紫郡那珂川町柏田遺跡旧河川出土例(註11)で庄内式併行期にもみられ、以後布留式系の一群において盛行する。D類は、方形周溝出土のB類の1例とともに、時期が更に下降すると思われる。杯C類は大きめの皿形の類で外面にハケがみられる。この類は柏田遺跡においては、Ⅰ期にみられ、柏田Ⅲ期(布留古式期)から、下原期(布留期)に盛行する。器台E類は、鼓形器台で、この期のもので福岡市西区湯納D11溝(註12)、野方中原F4区2-a地点、有田遺跡31街区C溝上層、及び、前原町三雲遺跡からも最近出土しており、湯納例は湯納Ⅱ式期に比定され、有田例

は有田Ⅰ期に編年されている。ただ、筑前地方における鼓形器台そのものには未だ不確定な部分が多く、那珂川町門田辻田住居跡群中においては、その初現として柏田Ⅰ期に先行するものも確認されているという。(註13)

以上のように、2時期に大別してみたが、土器群として捉えてよいものについて要点のみを述べたい。まず、土器溜の一群については、かなり良好なセットとして捉え得る。甕A・C—a, 壺B・C, 台付鉢A・C, 高杯A—aなどを含む。この一群と同期のものとして溝1の一括品があり、甕B, 壺C, 高杯A—b・B, 台付鉢B, 鉢等の器種を含み、前者を補う。また一応分類表(Fig.37)に掲載はしたが、第6号住居跡出土の杯、小壺2点の一群は、他器種との共伴関係が明確ではないが、他の出土土器類などとともに更に和泉式期に近く下降する可能性が強いと言えよう。

本遺跡において、これら弥生終末期～古式土師期に属する土器群をより細分なし得なかったのは、遺構毎の一括土器群が少ないことも併せて、従来集成されたことのなかった古賀平野(裏粕屋)地域において初めての試みであったことがその理由の一つにある。古式土師器の殊に畿内の土師器群の影響を念頭に置かねばならない北部九州において、その受容の過程が各平野単位に異なる様相を示すことは、畿内の古墳造営の画期においてその勢力の浸透度等に多くの示唆を与えるものではなかろうか。早良平野西端部の宮の前遺跡、湯納遺跡、平野部の有田遺跡(註14)において各々編年が試みられ、近隣の野方中原遺跡からもかなりの土器類の出土をみるが、各遺跡間の間隙を埋める部分や、地元系(弥生系)の土器群との共伴関係など必ずしも明確でない部分が多い。またこれらの早良平野遺跡群と、福岡平野沿岸部に属する福岡市東区多々良込田遺跡(註15)と比較すると、庄内式土器をみることなどの点でかなり様相が異なる。これは、福岡平野奥部の柏田遺跡においては一層その様相の違いが歴然としてくる。更に、筑後平野の狐塚遺跡に至ると、その地域の特徴が明確に出て、畿内系の土器群は極くわずかで、地元系(弥生系)のものがその殆んどを占めるという具合になる。このように各小平野毎に、畿内系土器群の受容における差・及び弥生系土器群の地方色の在り方などにおいてかなりの差異がみられるのであり、当古賀地域においても当然予想されることである。当地域においては、本遺跡調査結果をみる限りでは、次の諸点が特色といえる。

- (1) 庄内式土器の移入をみないこと。
- (2) 布留式の影響を受けるものは多いが、特に甕において内湾する口縁を見ず、厚手のものが多く、早良平野・福岡平野等の諸遺跡例の如く布留式の影響が直接的でなく、幾らか変容したものとなる。
- (3) 弥生系土器群においては、全般には他地域と共通する類であるが、器種によっては、壺C類の如く筑後地方や畿内・南九州にまで分布するものがみられることや、台付鉢A類のように他遺跡では未検出のものがみられることなど、幾らかの独自性がみられる。また、

器表に叩目を施すものが皆無であることも特色となろう。

(4) 以上の総まとめとして、土器の組成や文化流入の状況等を勘案するとき、近隣の福岡平野の各遺跡の状況と異なることは、地元系土器群の圧倒性をみても明らかである。

今後、当地域及びその周辺地域・遺跡調査により、遺構毎の一括土器群の慎重な選定作業による調査成果が、より細緻な編年結果となり、本遺跡例に不足部分を加え得るであろう機会を待望する次第である。 (中間研志)

- 註 1) 下條信行・沢皇臣他『宮の前遺跡(A～D地点)』福岡県労働者住宅生活協同組合 1971年
 2) 小田富士雄他『狐塚遺跡』筑後市教育委員会 1970年
 3) 千塔山遺跡調査を担当された中牟田賢治氏の御教示による。
 4) 馬田弘稔他<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XIV>福岡県教育委員会 1977年
 5) 高槻市教育委員会技師森田克行氏の御教示による。
 6) 池畑耕一・弥栄久志『辻堂原遺跡』吹上町教育委員会 1977年
 7) 武末純一『福岡県北九州市小倉南区高島遺跡』<古文化談叢 第3集>九州古文化研究会 1976年
 8) 隈昭志他『塚原』<熊本県文化財調査報告第16集>熊本県教育委員会 1975年
 9) 柳田純孝『野方中原遺跡調査概報』<福岡市埋蔵文化財調査報告書・第30集>福岡市教育委員会 1974年
 10) 中間研志<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XII>福岡県教育委員会 1977年
 11) 井上裕弘<山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集下巻>福岡県教育委員会 1977年
 12) 栗原和彦他<今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4・5集>福岡県教育委員会 1976・1977年
 13) 同遺跡出土品整理中の井上裕弘氏の御教示による。
 14) 森貞次郎・小田富士雄他『有田遺跡』有田遺跡調査団 1968年
 森貞次郎・小田富士雄他『福岡市有田古代遺跡』福岡市教育委員会 1967年
 15) 折尾学『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』<福岡市埋蔵文化財調査報告32> 1975年



1. 太田町遺跡全景（北西から、×印は川原庵山第5号墳）



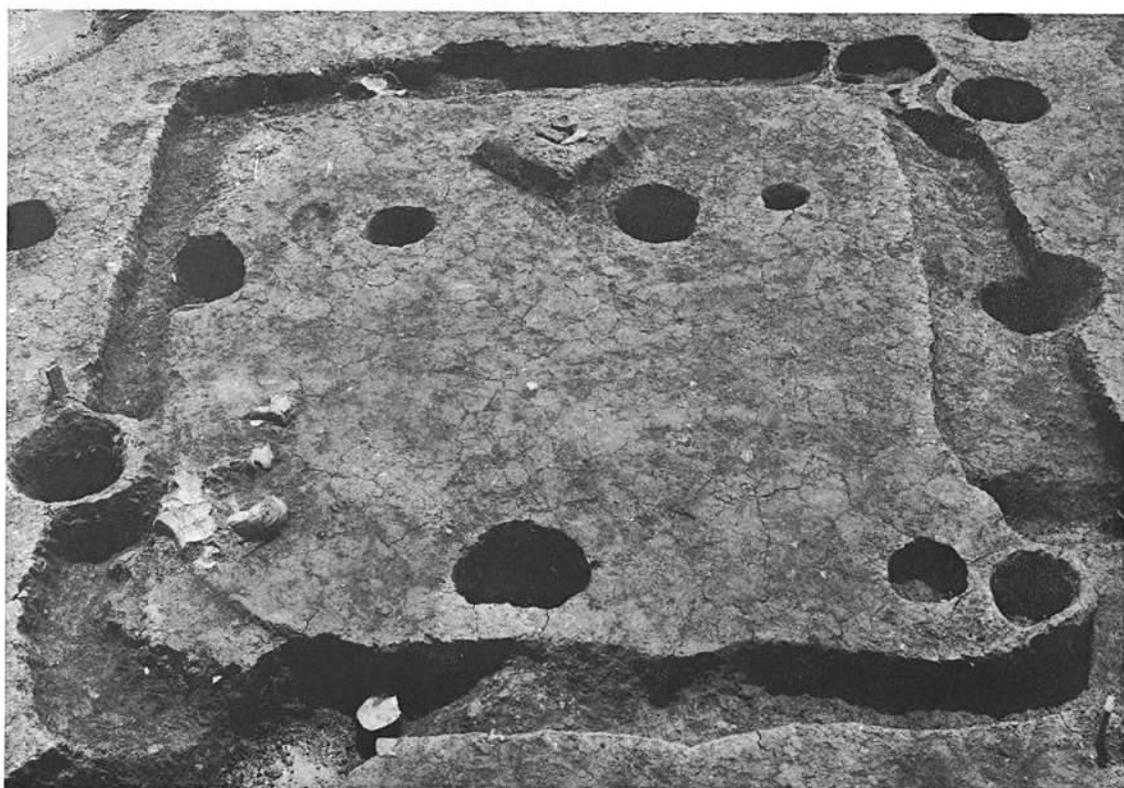
2. 太田町遺跡全景（南東から）



太田町遺跡モザイク写真



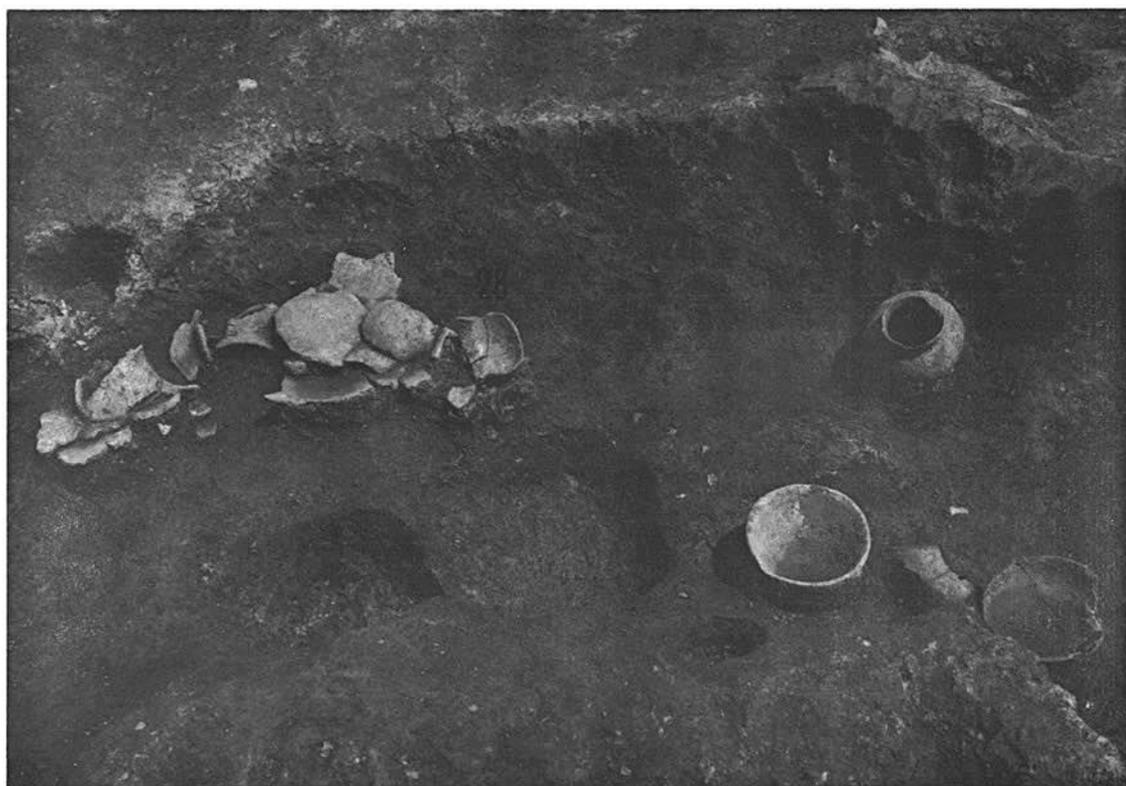
1. 太田町遺跡第1～4号住居跡全景（北東から）



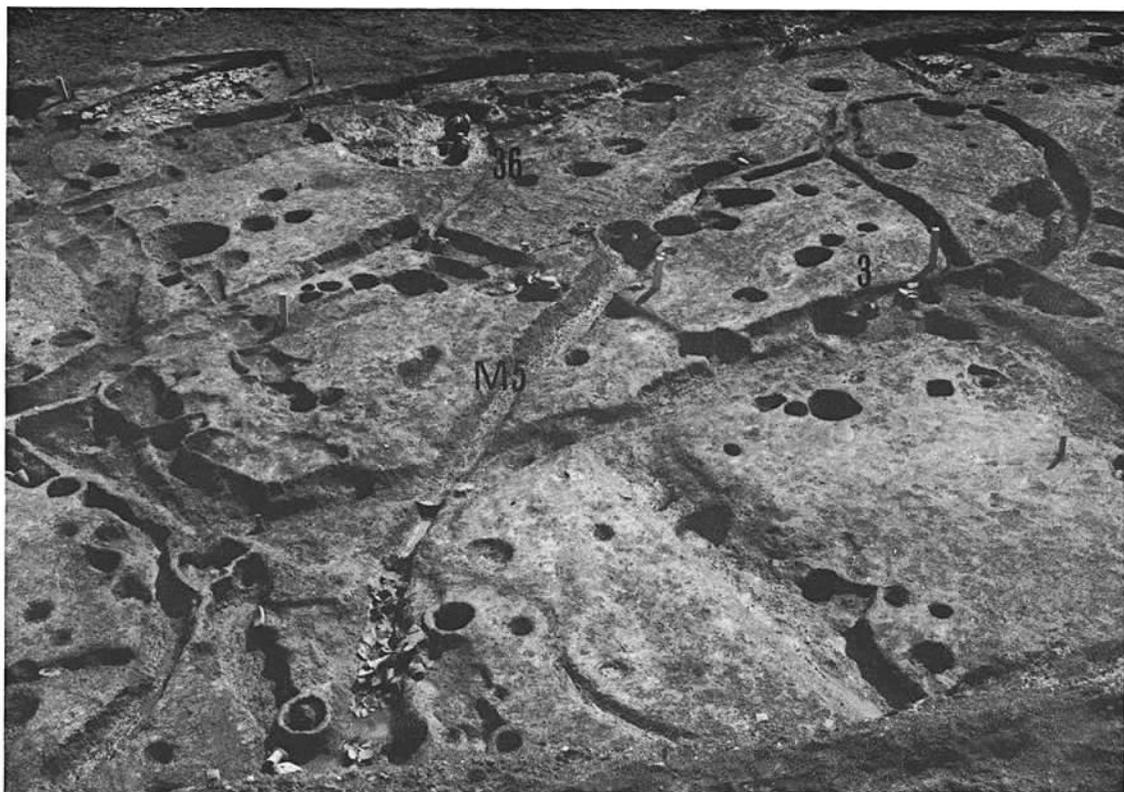
2. 太田町遺跡第3号住居跡（西から）



1. 太田町遺跡第4号住居跡（北東から）



2. 太田町遺跡第4号住居跡土器出土状態（南西から）



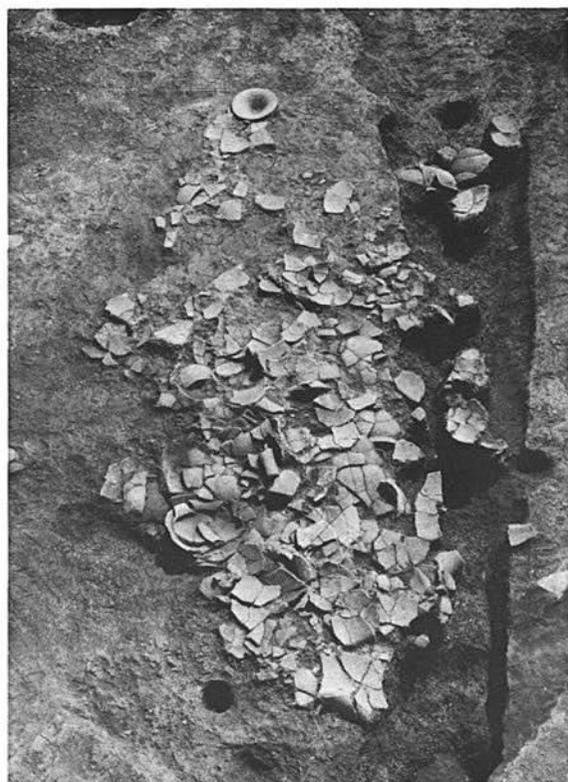
1. 太田町遺跡溝5, 第5・6号住居跡全景 (北東から)



2. 太田町遺跡第5・6号住居跡 (南西から)



1. 太田町遺跡近景（右上方土器溜り 北東から）



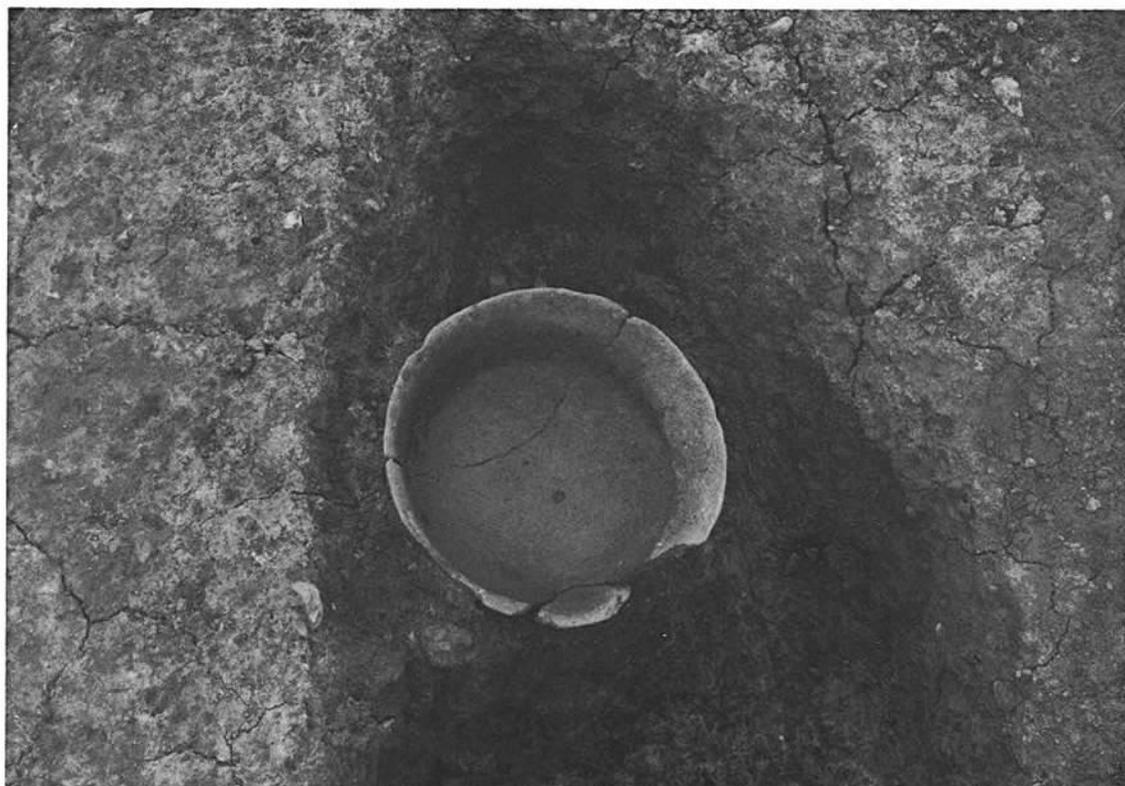
2. 太田町遺跡土器溜り（西から）



3. 太田町遺跡溝5土器堆積状態



1. 太田町遺跡土器4出土状態



2. 太田町遺跡第6号住居跡土器22出土状態



1. 太田町遺跡溝1 土器26・27出土状態



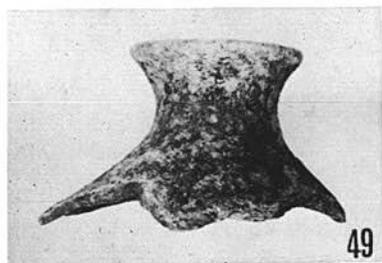
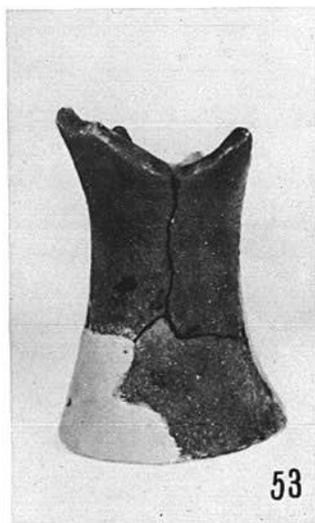
2. 太田町遺跡土器35(左)・36(右)出土状態

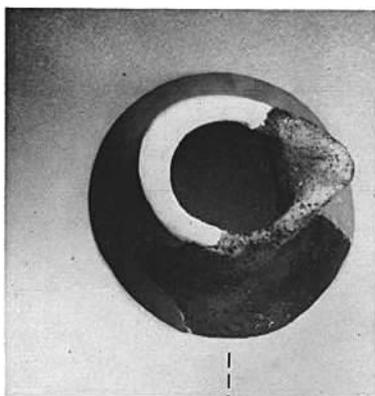
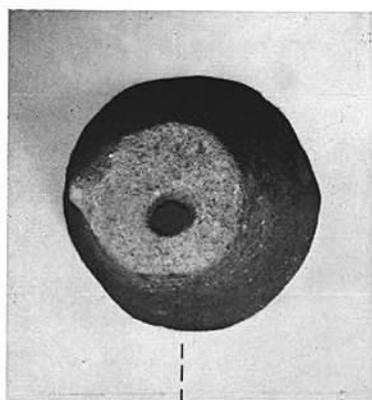


1. 太田町遺跡土器44出土状態



2. 太田町遺跡滑石製子持勾玉出土状態

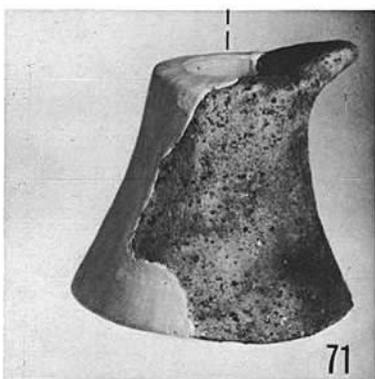




99



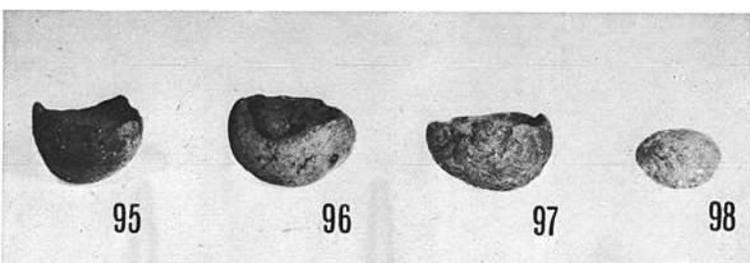
17-8



71



104



95

96

97

98



106



70



17-7

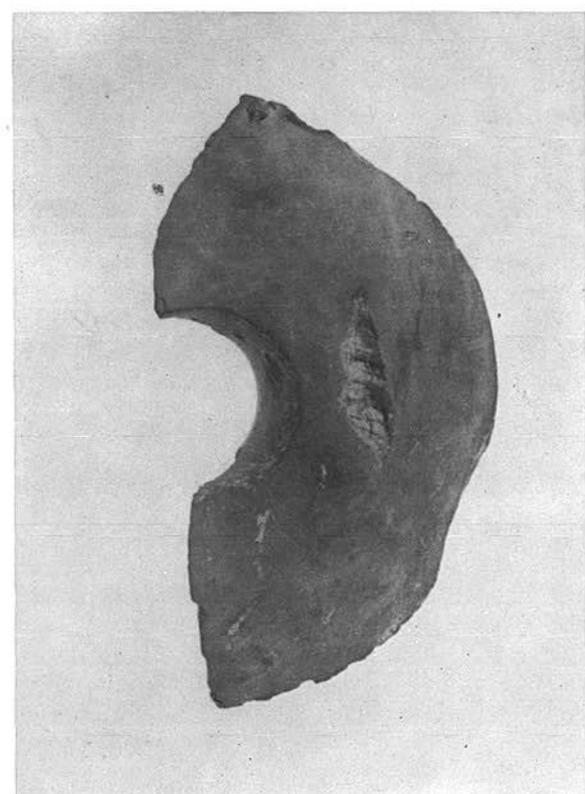


50

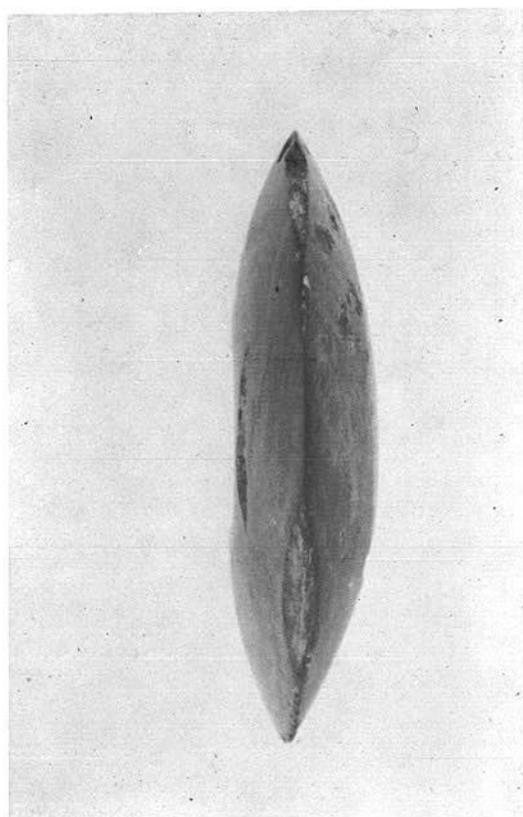
太田町遺跡出土弥生式土器 (その2)

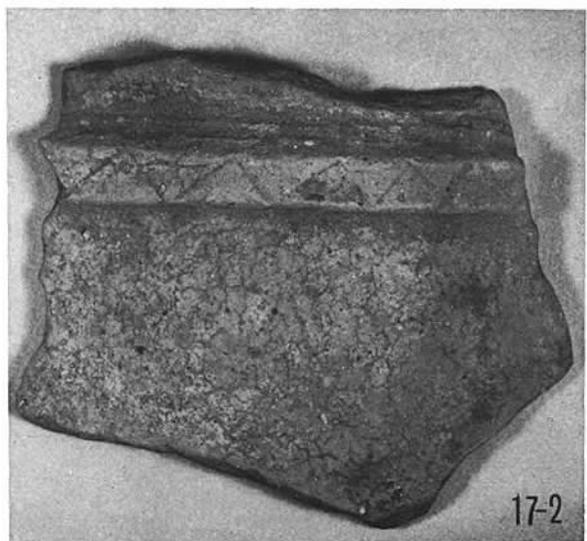
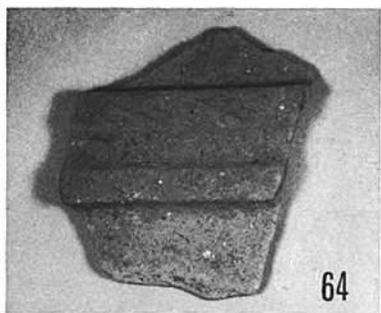
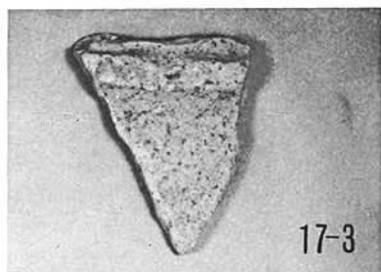
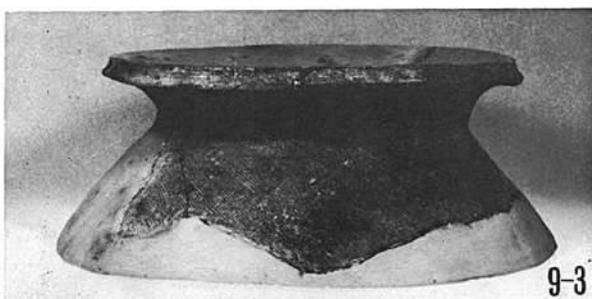
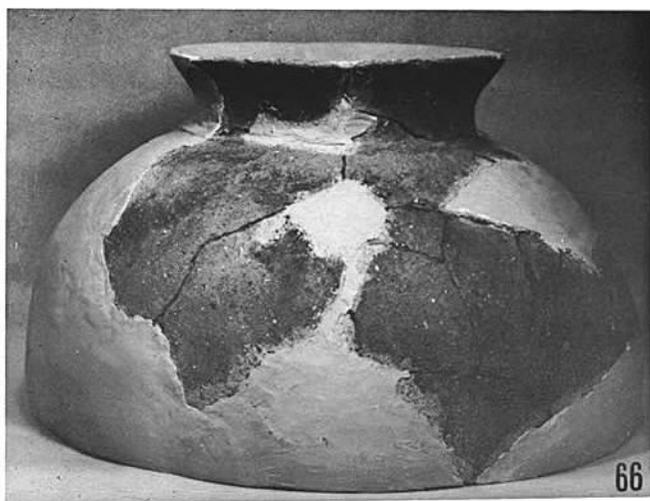


1. 太田町遺跡出土弥生式土器（その3）

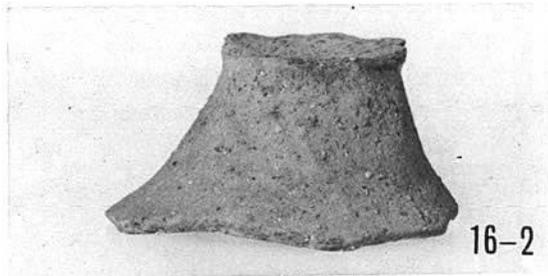
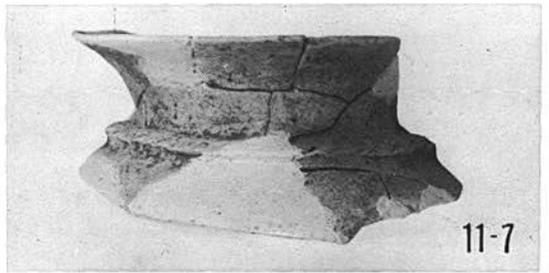
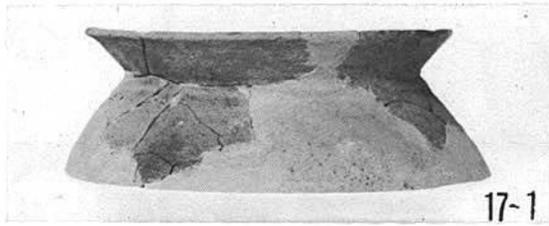


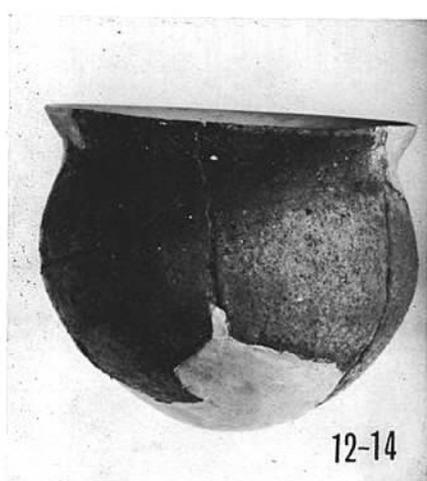
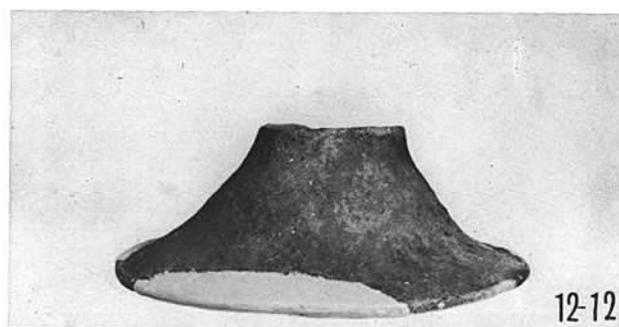
2. 太田町遺跡出土環状石斧

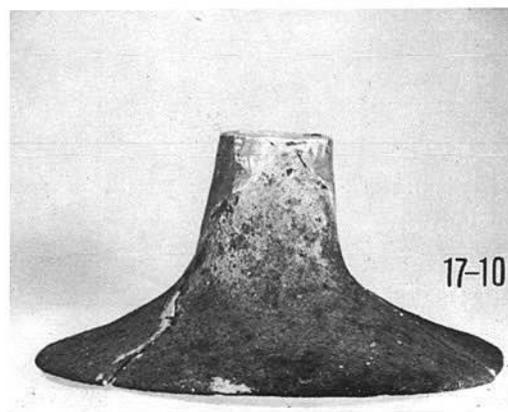
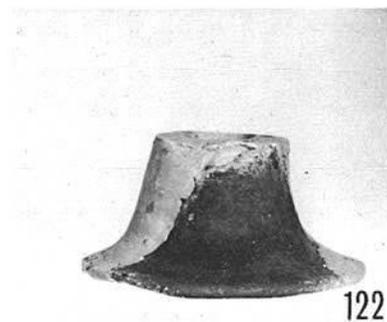
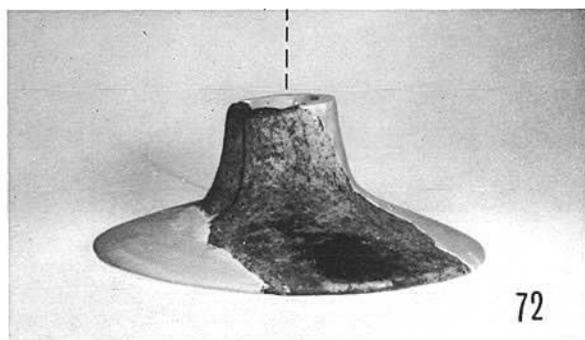
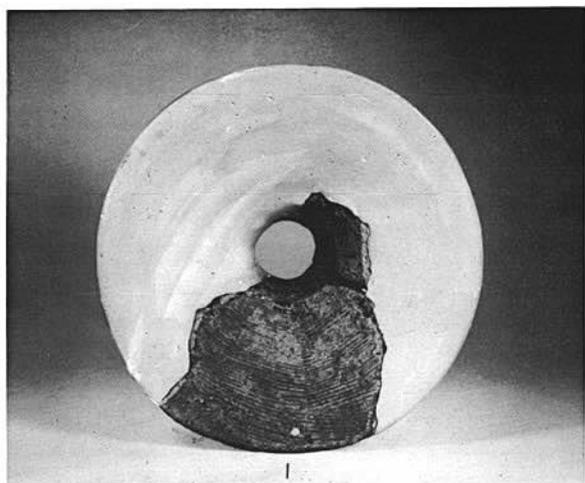




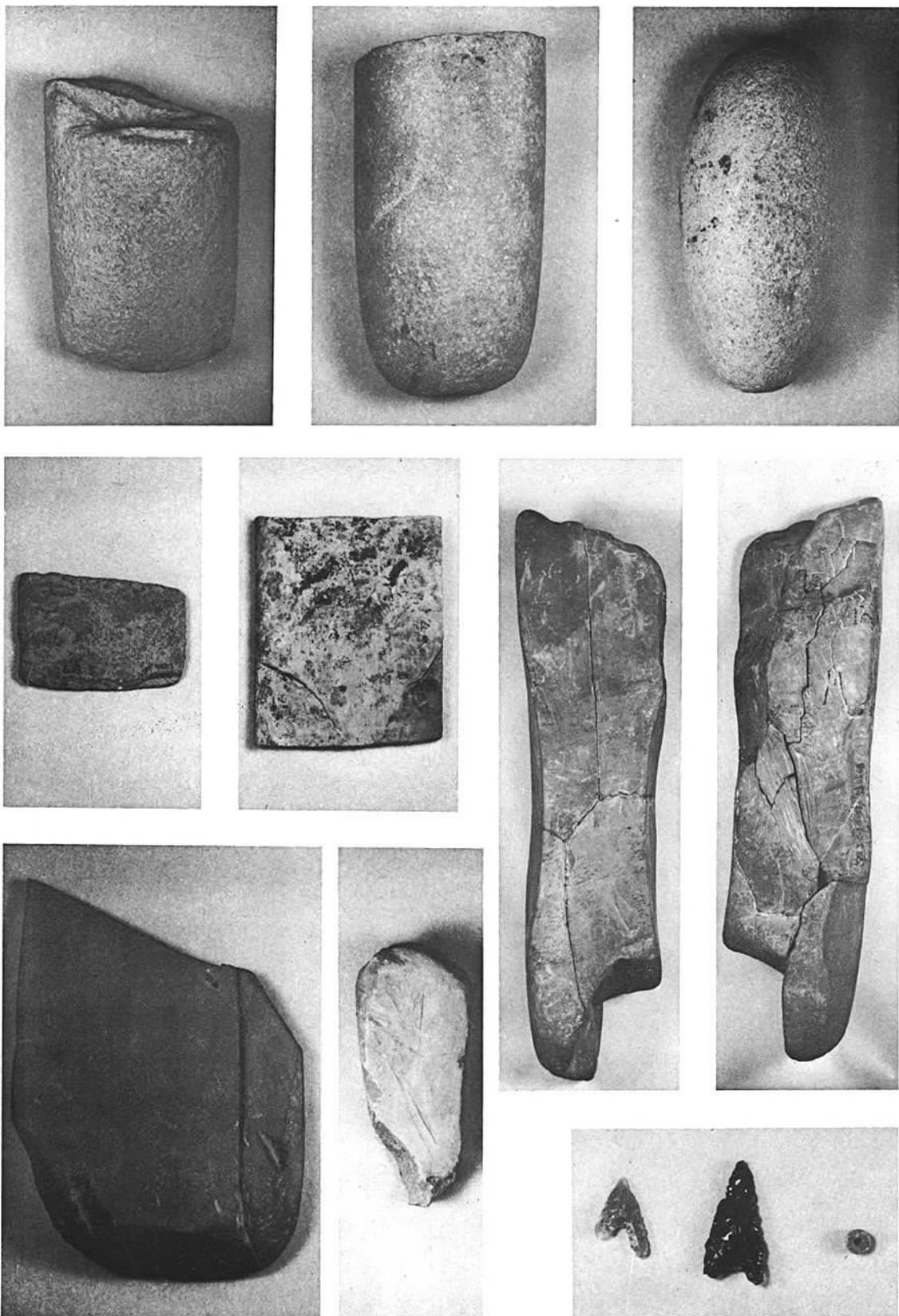
太田町遺跡出土弥生式土器（その4）



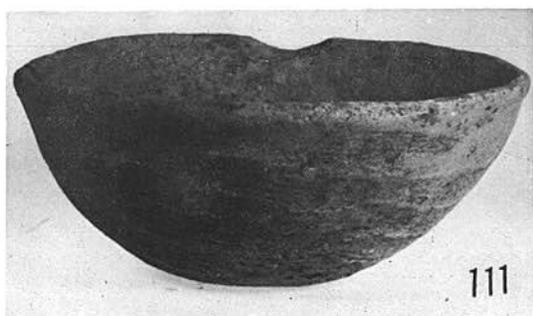
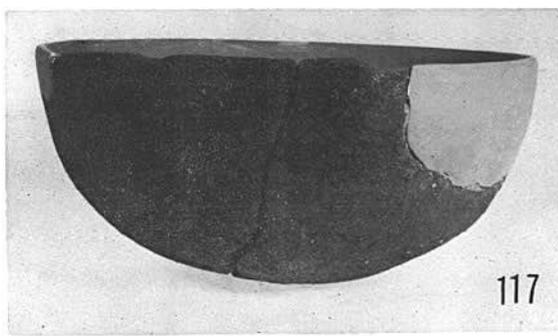
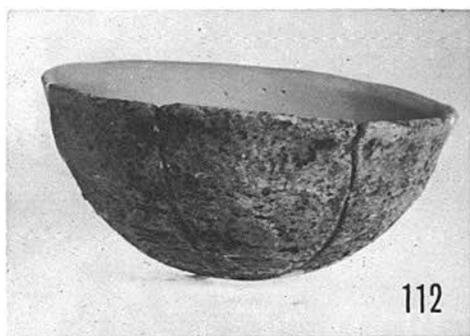
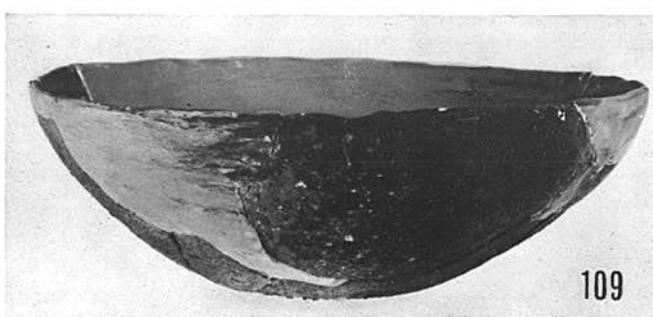
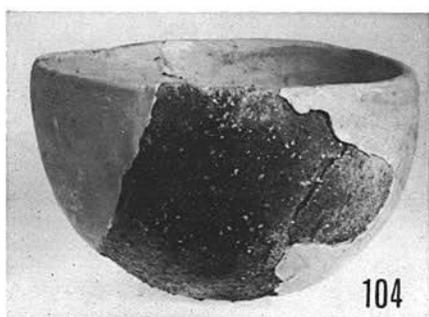
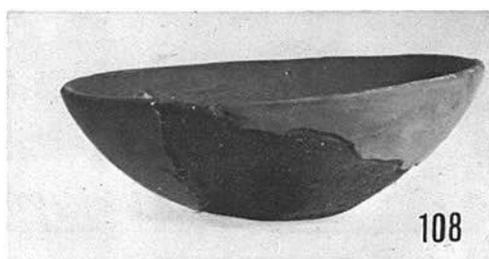
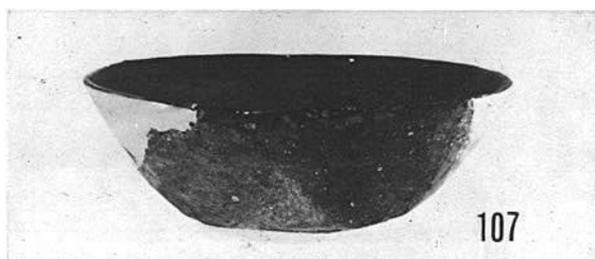
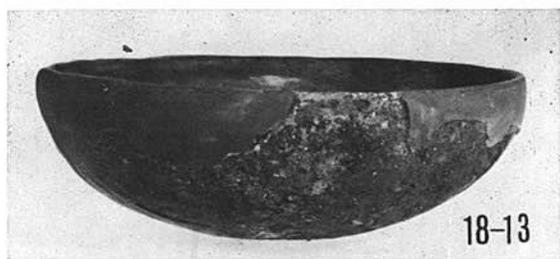


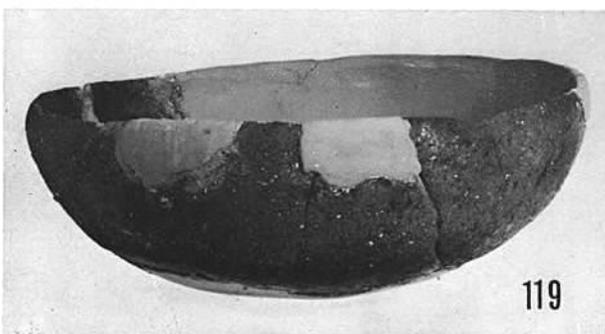
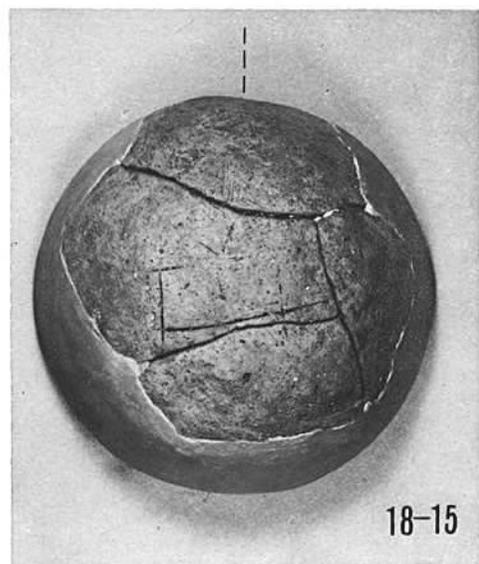
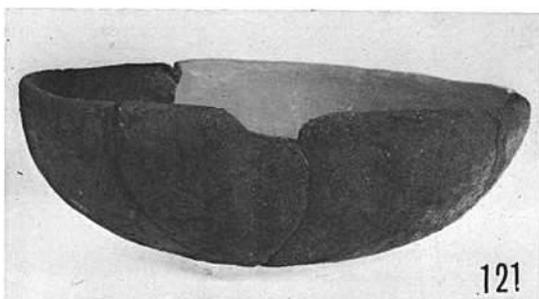
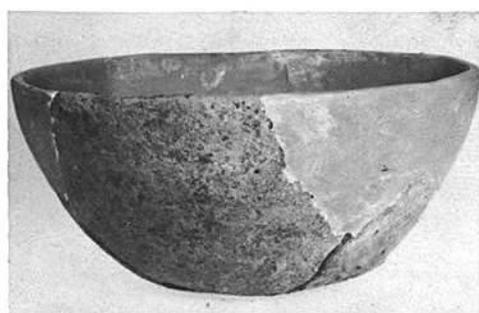
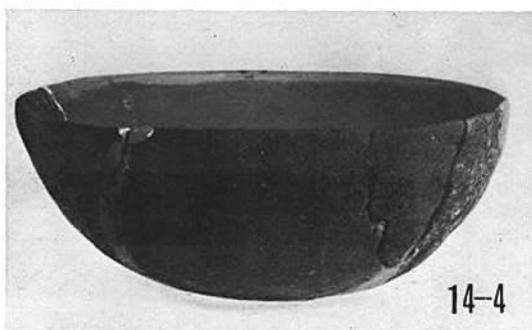
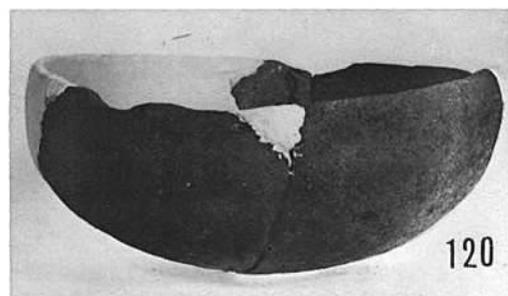
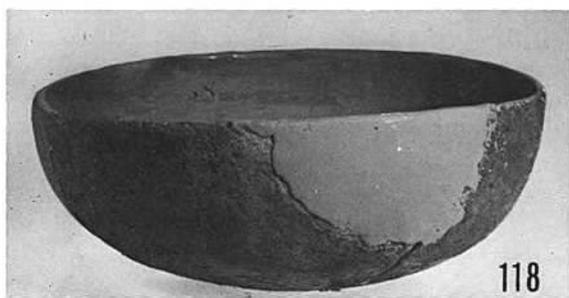
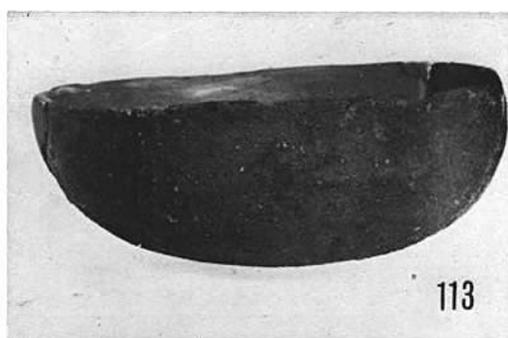
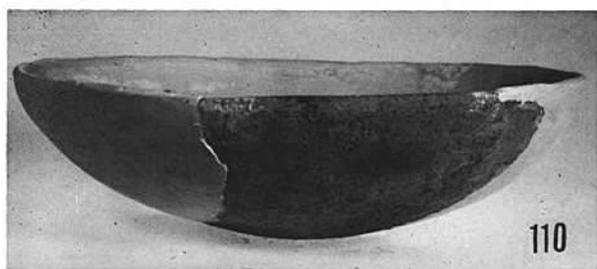


太田町遺跡出土弥生式土器（その7）・土師器

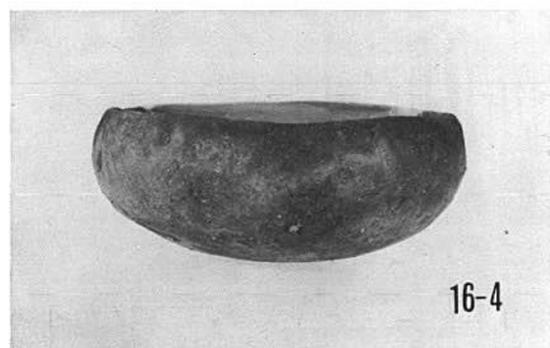
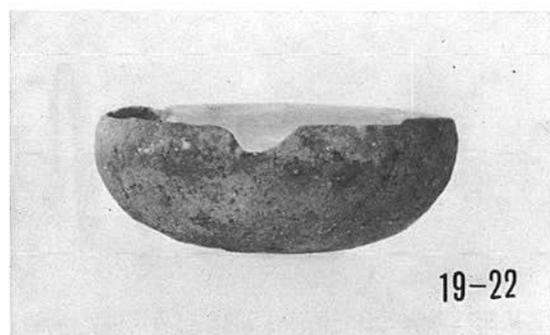
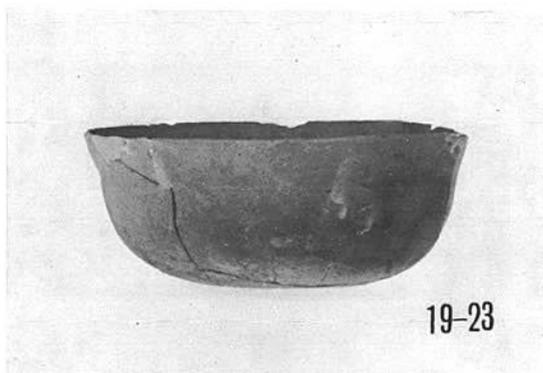
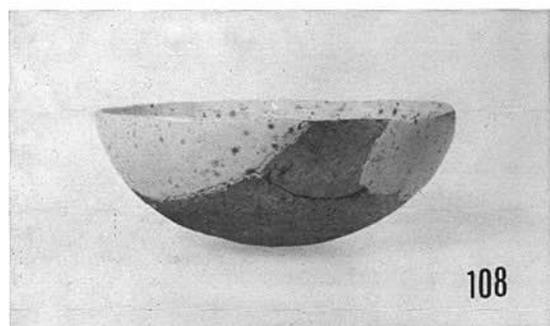


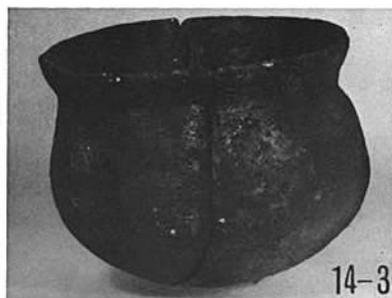
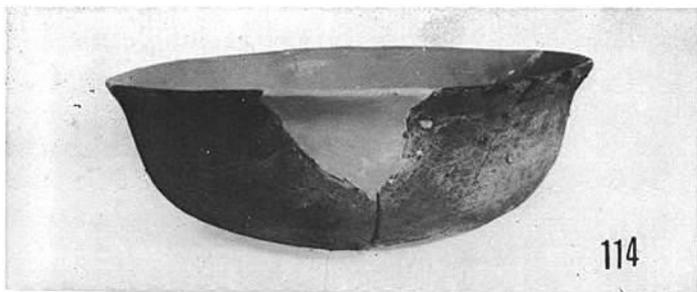
1. 太田町遺跡出土石器・砥石

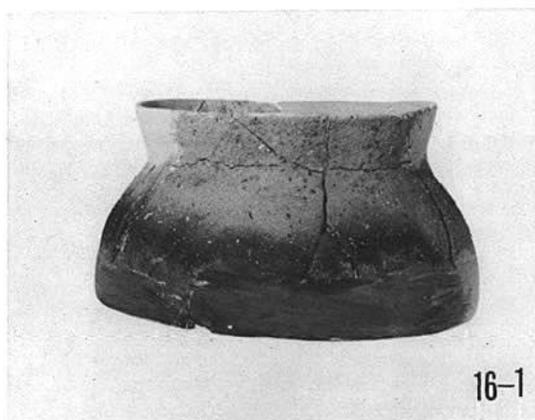
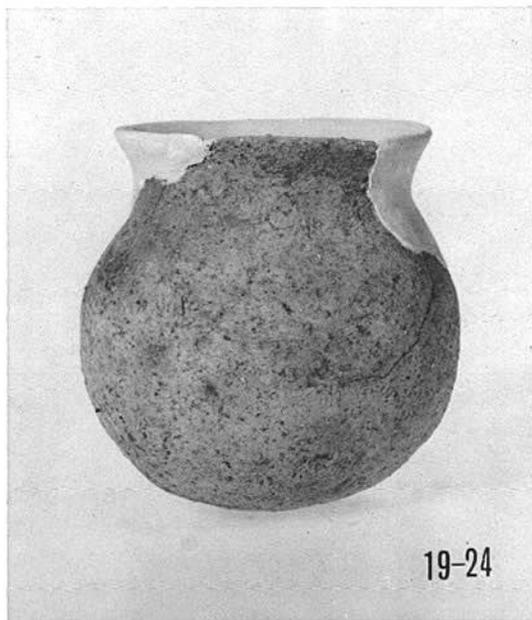


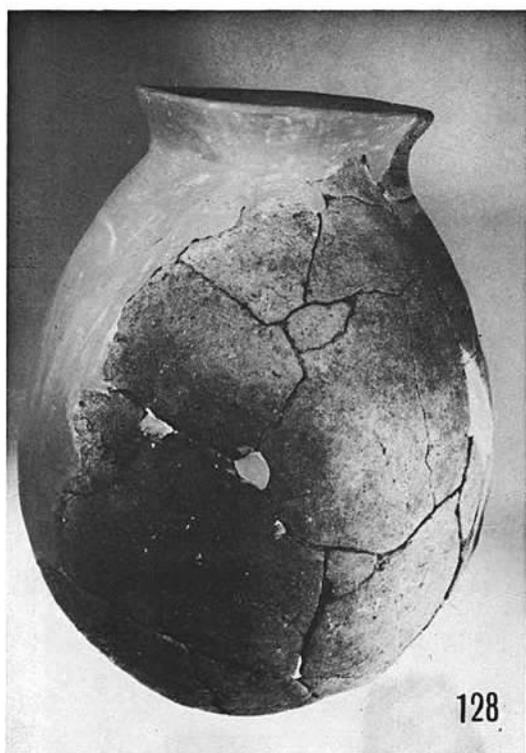
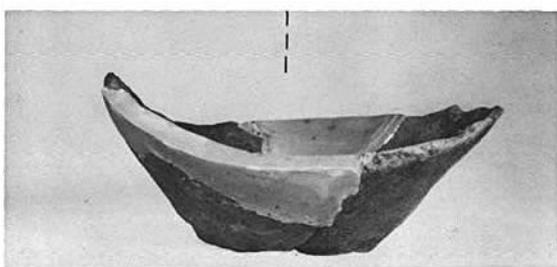
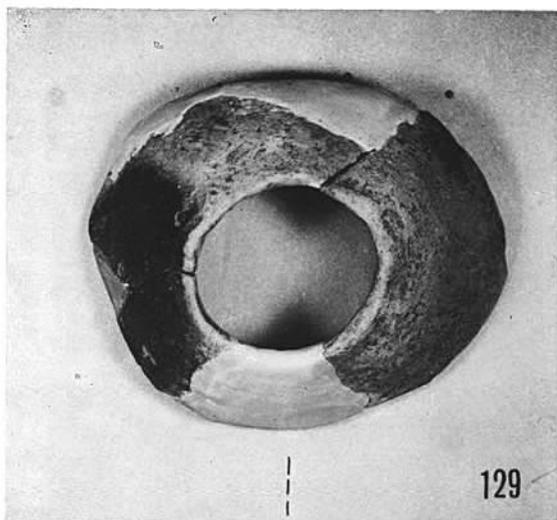


太田町遺跡出土土師器 (その2)

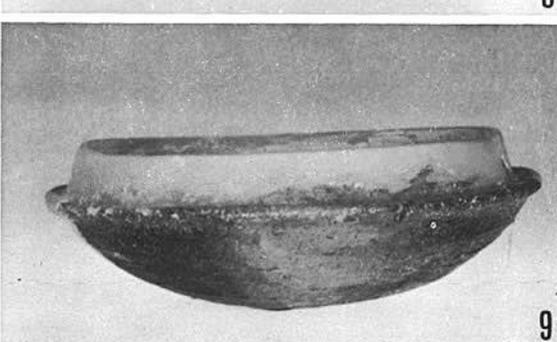
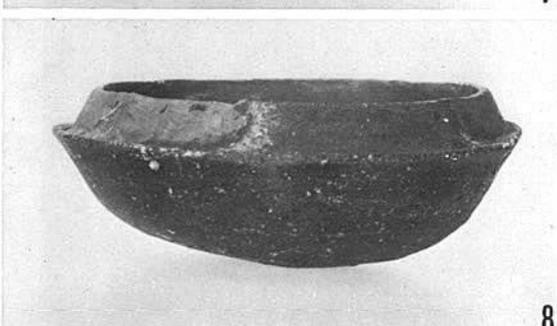
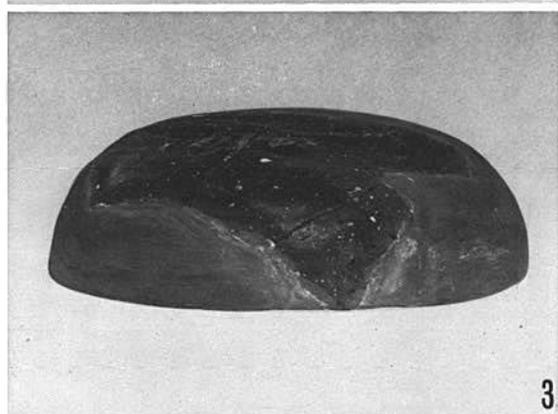
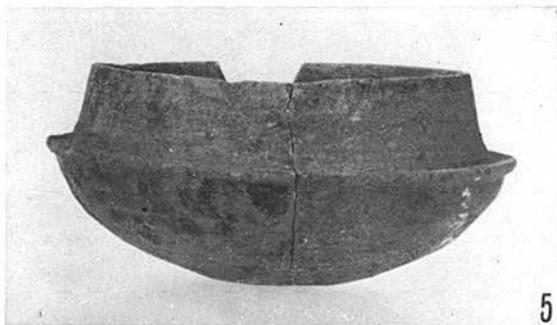




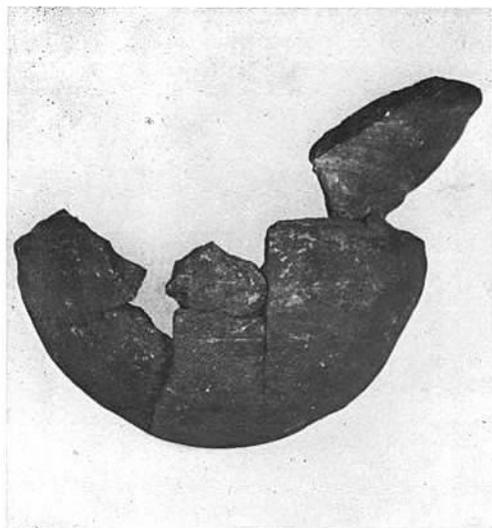




太田町遺跡出土土師器（その6）



太田町遺跡出土須恵器



太田町遺跡出土須恵器



137



太田町遺跡出土「赤焼き」土器



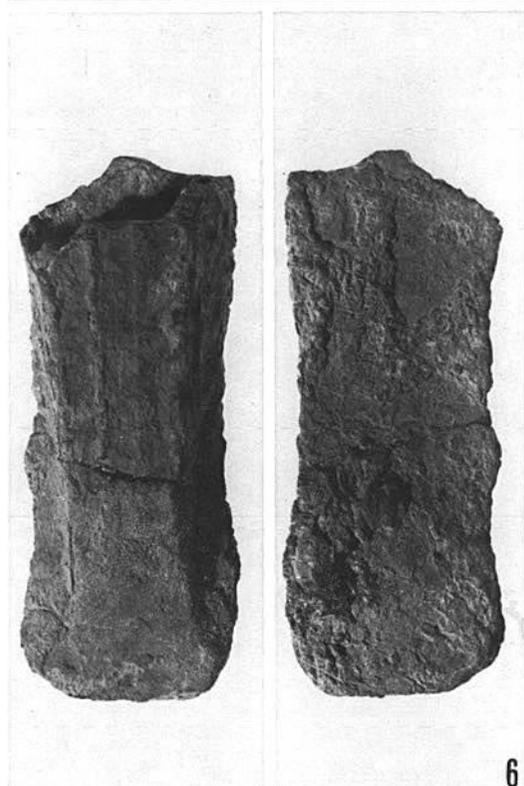
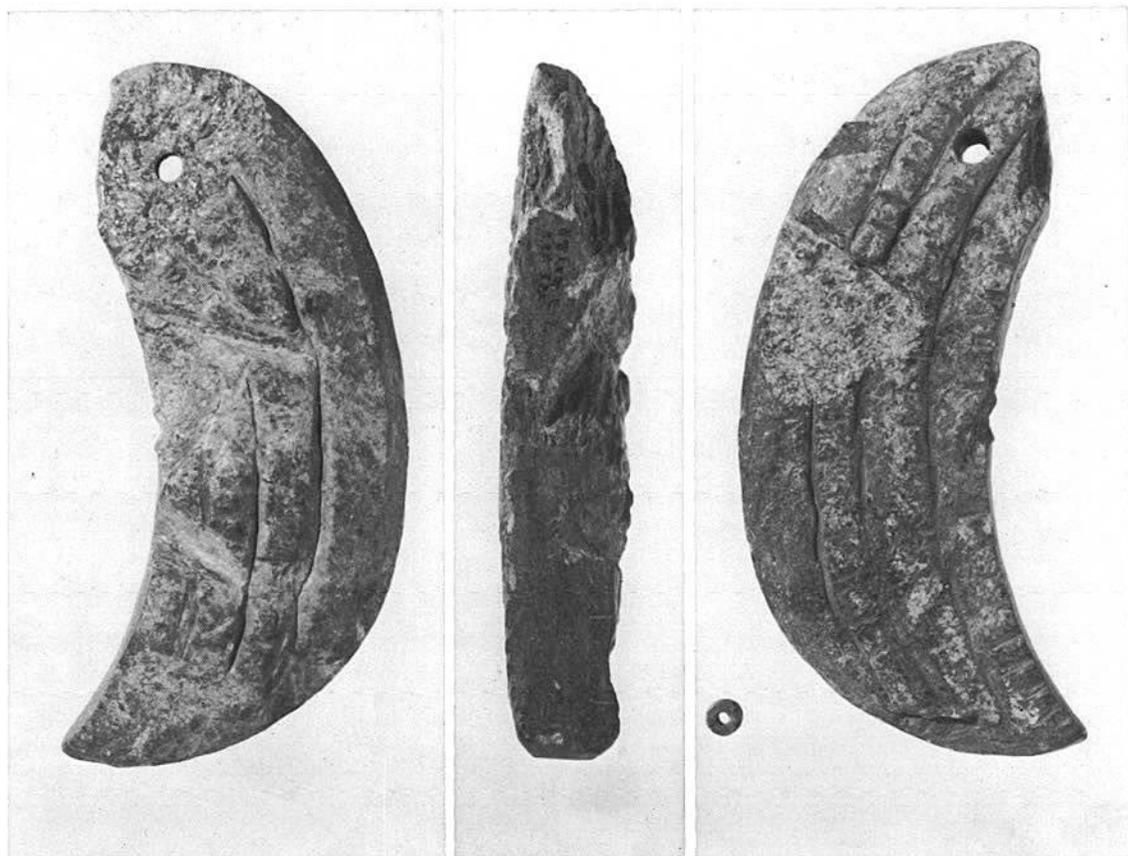
138

太田町遺跡出土瓦器

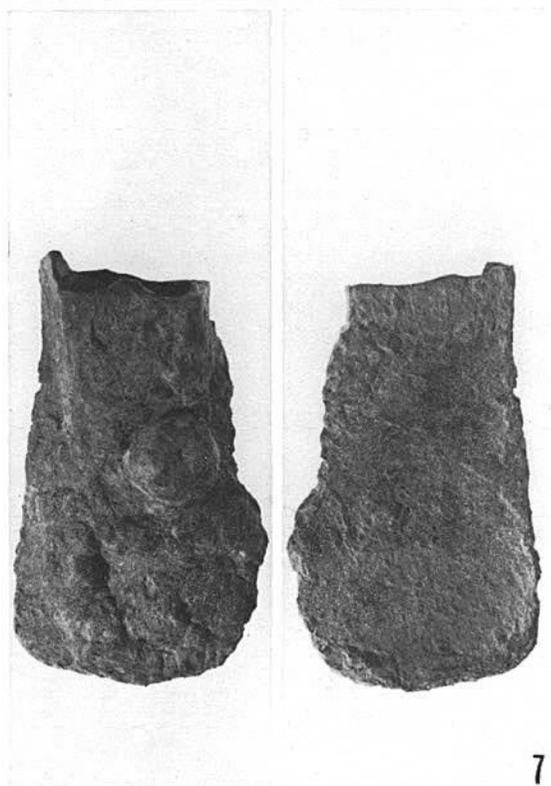


139

太田町遺跡出土青磁



6



7

太田町遺跡出土滑石製玉および鉄斧形鉄器

Ⅲ 各遺跡の調査

2 川原庵山遺跡

Ⅲ-2 川原庵山遺跡

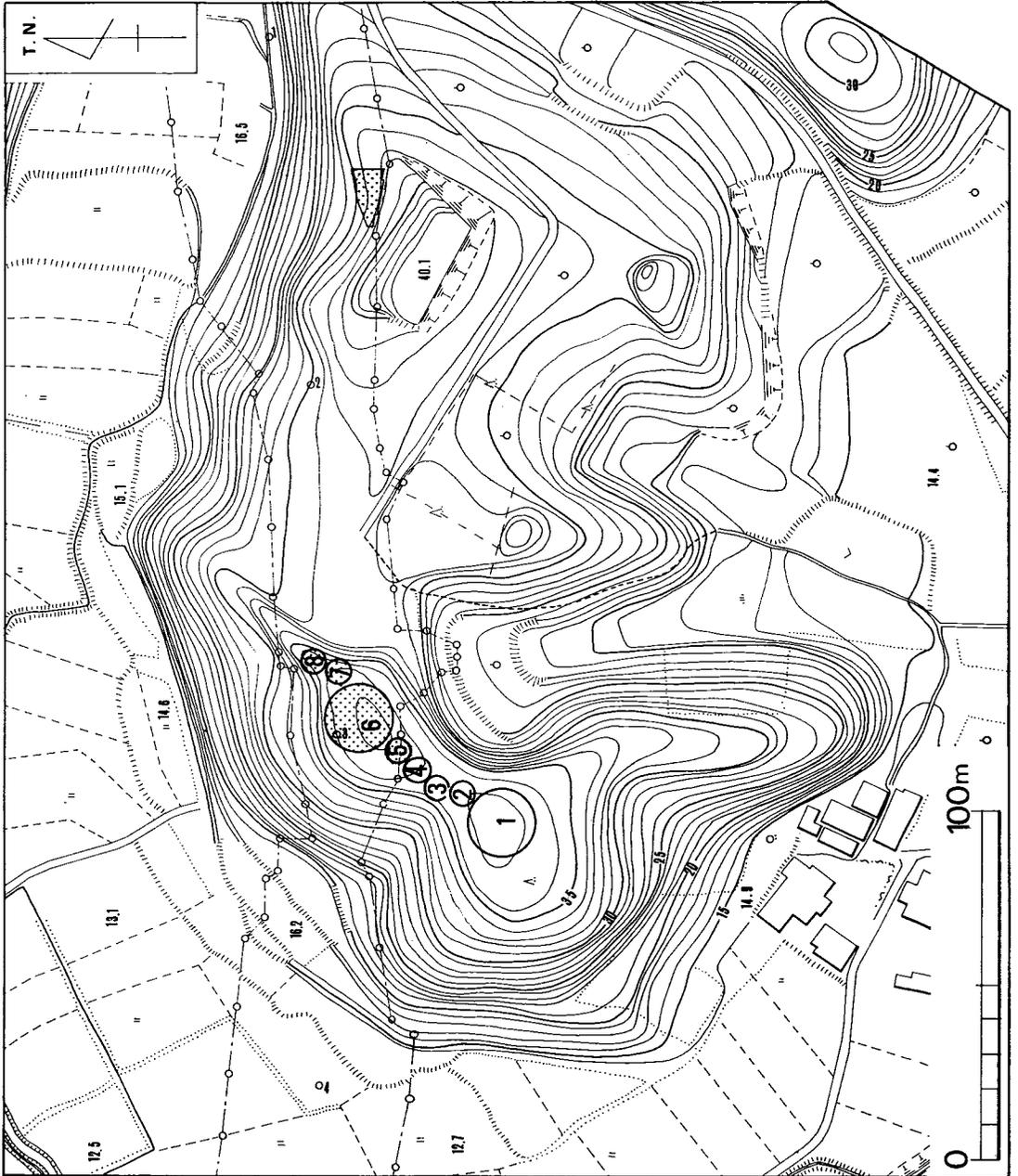


Fig.38 川原庵山遺跡・川原庵山古墳群周辺地形図 (1/2,000)

1 遺構 (Fig.38~41)

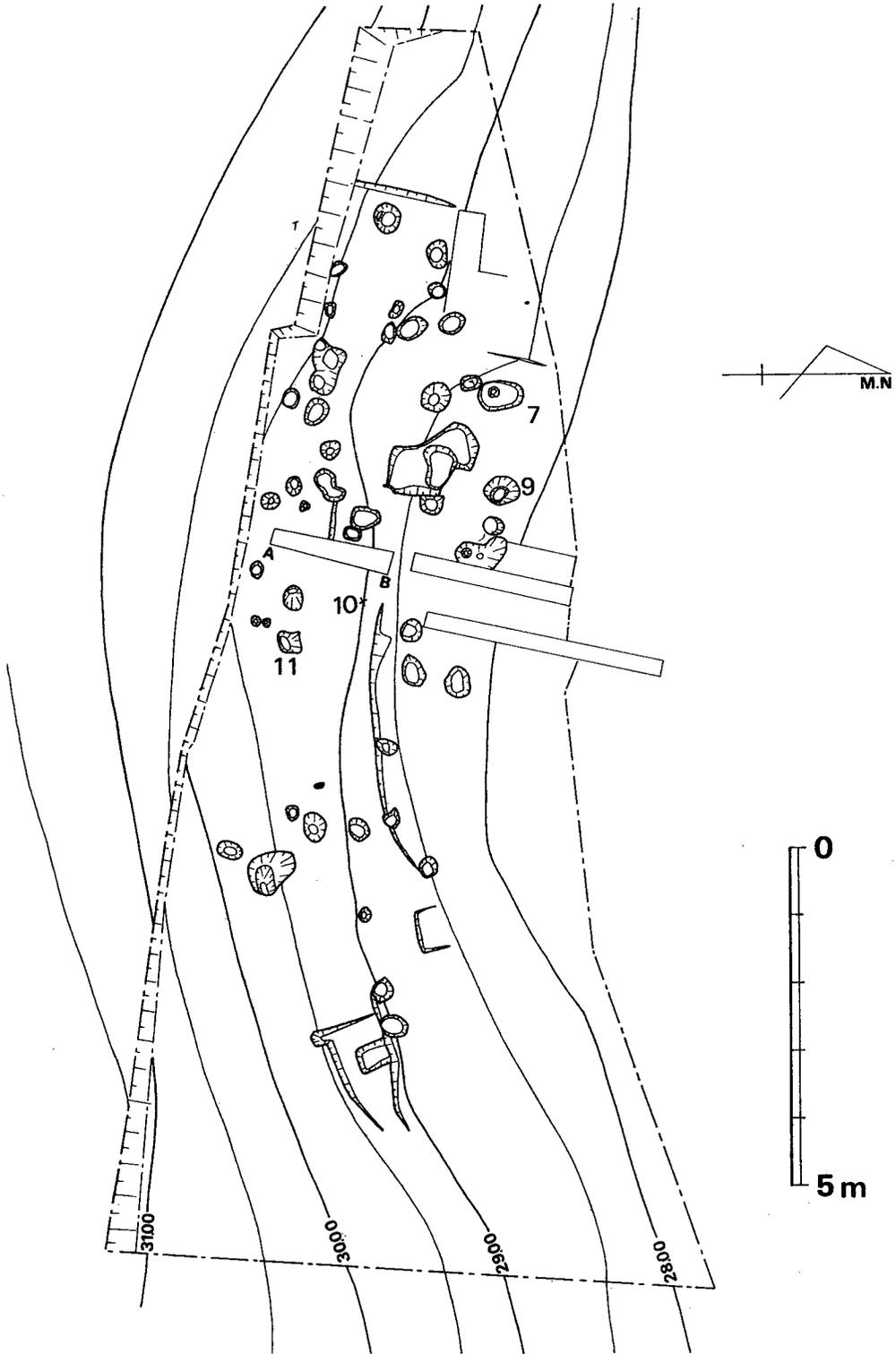


Fig.39 川原庵山遺跡全体図 (1/100)

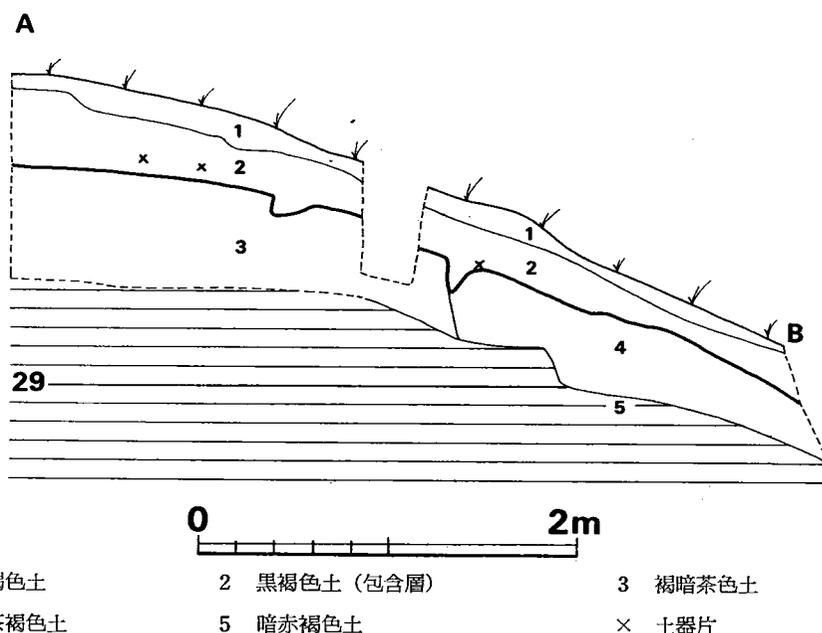


Fig.40 川原庵山遺跡土層断面図 (1/40)

川原庵山古墳群の東方約1.3kmの地点にあたる北斜面に位置している。同古墳群の調査中に、当地点についてのブルドーザによる表土剥ぎ作業によって土器片が出土しているのに気づき、応急的に調査を実施したものである。陽の当らぬ北斜面にあたることから、当初路線外の南側尾根線からの流れこみを想定したが、念のためにトレンチを設定したところ、一連のピット群からなる遺構を確認するにいたった。

これらのピットは不整形円形プランを呈するものが大部分で、生活面としては不適當なかなりの傾斜面に位置することから住居跡等の建物に伴なうものとは考えにくく、それらしき壁面の立ち上りも確認されていない。また、径・深さともに55cmのピットの上部近くに納められた土器9の出土状態(P.L.29-2)からみても同様である。土器7・11については、下のピットに確実に伴なうものとはいい難く、流れこみ等の可能性を残す。

従って、上方の尾根周辺に存在するであろう主たる遺構に付随する何らかの施設の一部かとも推定されるが確言できない。(石山 勲)

2 遺物

Tab.21 土器の観察(その1)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴底部の特徴	胎土・焼・色調	備考
甕		(I) 口径 26.6cm	・頸部内面に稜を作り 強く外反する口縁	・内面横ハケ ・外面縦ハケ	・胎土に粗砂少量 含む	

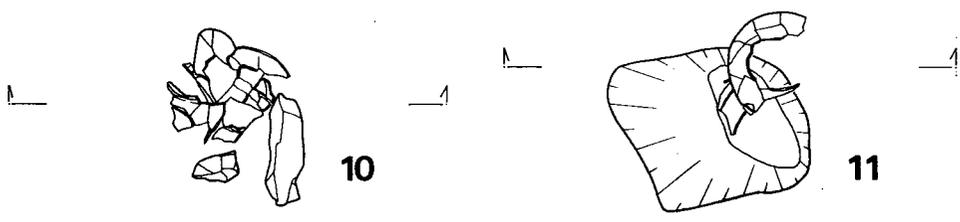
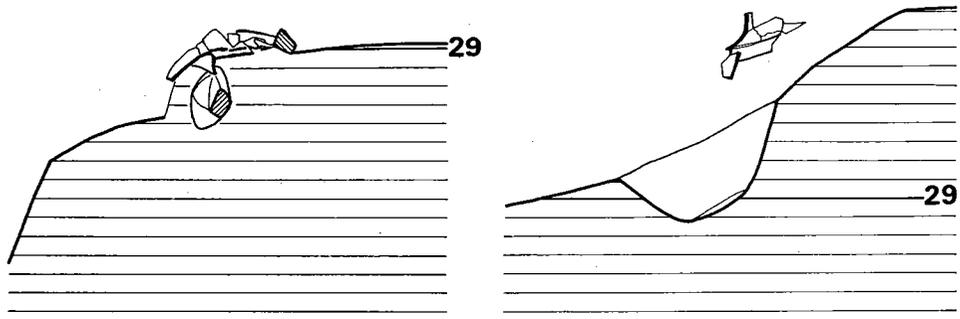
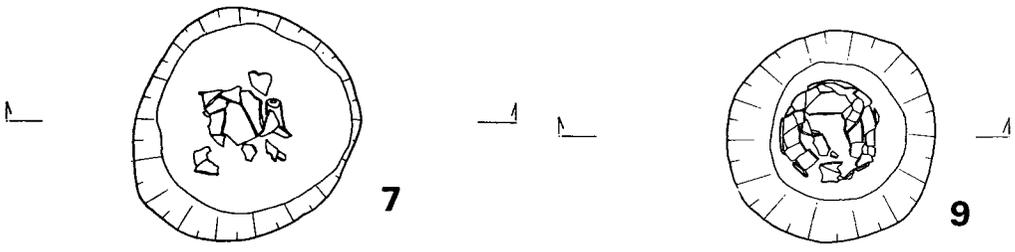
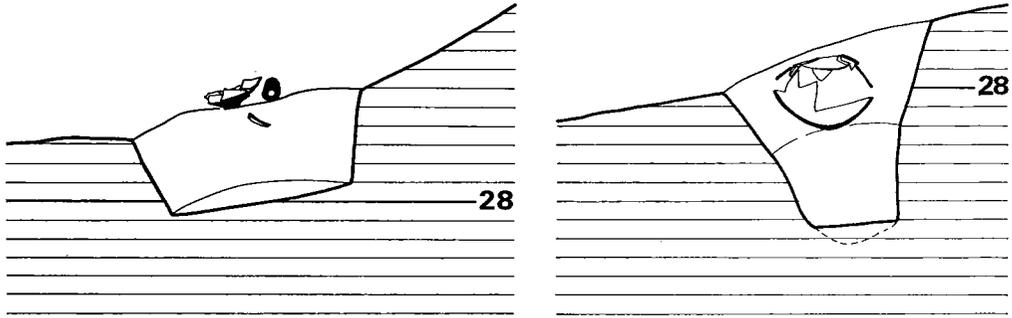


Fig.41 川原庵山遺跡土器出土状態実測図 (1/20)

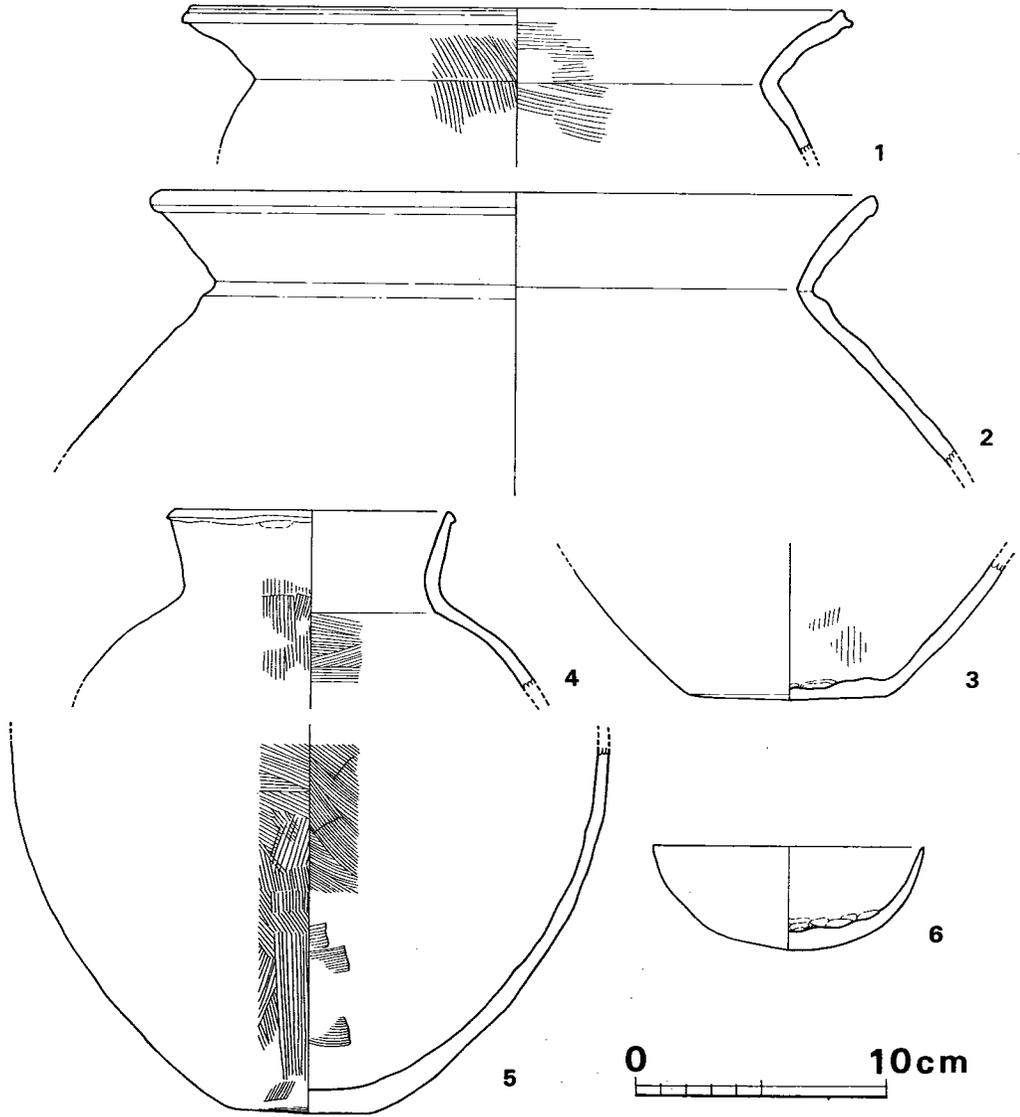


Fig.42 川原庵山遺跡出土弥生式土器実測図 (1/3)

Fig.42-1	土器11	(2) 器高	・端上面へこみ外端張り出す	・焼成良好 ・赤茶色
		(3) 胴最大径	・端部内外横ナデ ・内面横ハケ, 外面斜めハケ	
甕	土器10	(1) 29.0	・内面に稜を作り外反し, 外端は丸く張り出す	・強く張る胴部 ・胎土に細砂多く含む
		(2) —		

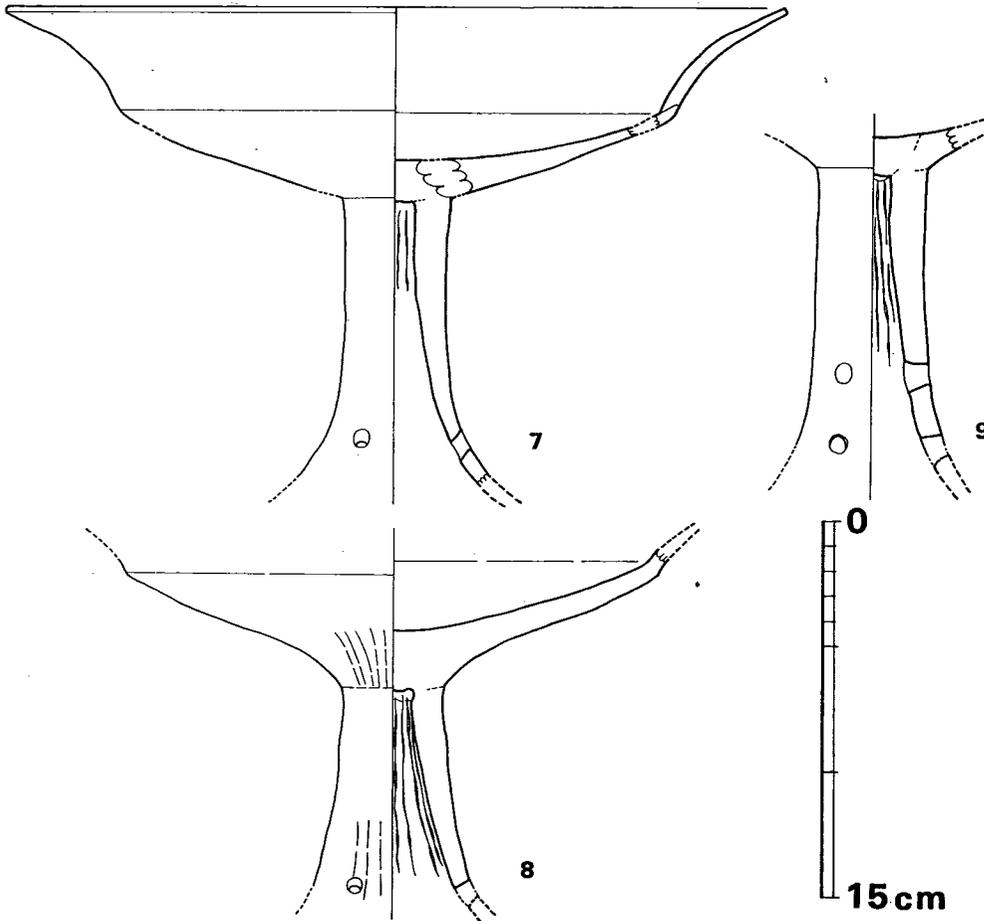


Fig.43 川原庵山遺跡出土弥生式土器実測図 (1/3)

Fig.42-2		(3) —	<ul style="list-style-type: none"> ・やや中ぶくらみ ・外面強い横ナデ 		<ul style="list-style-type: none"> ・焼成やや良 ・茶褐色 	1/2残存	
甕	包含層	(1) —	・欠損	<ul style="list-style-type: none"> ・薄手の丸底風平底 ・胴下半内面粗い縦ハケ ・底部内面指オサエ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に粗砂かなり含む ・焼成やや不良 ・外面淡黄褐色 ・内面暗褐色 		
Fig.42-3		(2) —					
		(3) 底径 7.9					
壺	土器7	(1) 11.4	<ul style="list-style-type: none"> ・直線的に外傾し外端張り出す口縁 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面やや粗い縦ハケ ・内面横ハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・胎土に細砂かなり含む 		

Fig.42-4		(3) —	・内外面横ナデ		・焼成良好 ・茶色	
壺 Fig.42-5	土器 9	(1) — (2) — (3) 胴最大 径 23.6	・欠損	・やや長い胴に小さい丸底風平底 ・内面中位細かい斜めハケ, 下半横ハケをナデで消す ・外面縦横ハケ	・胎土に粗砂少量 含む ・焼成良好 ・茶褐色	
杯 Fig.42-6	包含層	(1) 10.8 (2) 4.1 (3) —	・薄く開く口縁	・厚く不安定な底部 ・内面指オサエ ・手捏ね土器	・胎土に粗砂多く 含む ・焼成良好 ・内面淡茶白色 外面暗褐色	

Tab.22 土器の観察(その2)

器種	出土地点 遺構	法量	口頸部の特徴	胴部の特徴	胎土・焼・色調	備考
高杯 Fig.43-7	土器 6	(1) 杯部径 31.1 (2) — (3) —	・長い体部に長く外反する口縁を接合する ・内面ヘラ磨き	・細く長い脚柱下位に3孔を穿つ ・脚柱内面上半シボリ痕下半縦ナデ ・外面ヘラ磨き	・胎土に粗砂幾分 含む ・焼成良好 ・赤茶色	3部分 を図上 復元
高杯 Fig.43-8	土器 7	(1) — (2) — (3) —	・長い体部から屈折して口縁部開く ・下半外面縦ヘラ削り	・長い脚柱下位に孔を穿つ(3孔か) ・内面シボリ痕 ・外面下半縦ヘラ削り	・胎土かなり精良 ・焼成やや良 ・淡黄褐色	
高杯 Fig.43-9	包含層	(1) — (2) — (3) —	・欠損	・細く長い脚柱下半に縦に2個づつ穿孔する(3ヶ所計6個か) ・内面シボリ痕 ・外面ヘラ磨き	・胎土わりと精良 ・焼成やや良 ・暗茶褐色	

(中間研志)

太型蛤刃石斧 (Fig.44)

砂岩質の原材を用い、幅5.3cm・厚さ4.3cm・現存長8.5cmを測る。現存重量は311gで、 $\frac{1}{2}$ 欠損とすると約600gの重さが推定される。表面はかなり風化しているが、右側面の稜線は比較的明瞭に残っている。刃部の磨滅は著しく、かなり使用されたことは想像に難くない。蛤刃の類としては小型である。

(平島勇夫)

石 鏃 (Fig.45)

1は、表裏ともに原剝離面を残す剥片鏃である。表面片側に若干調整を加えている他は、抉部と先端縁辺部のみを加工する。部分的にいくらか気泡のみられる黒色の黒曜石製で、剥片鏃としてはいくらか大きめに類する。復元長3.0cm、幅1.9cmを測る。

2は、包含層出土品で、抉りが深く表裏ともに細かい調整をみせる。灰色半透明良質の黒曜石を用い、姫島産かと推定される。長さ2.15cm、幅1.6cmを測る。

3は、表採品で、長い石槍様の形態を有する。現長3.0cm、復元長4.3cm、幅1.25cmを測る。重量1.5gで、安山岩製。表面はかなり丁寧に両側辺を細加工するが、裏面には大きい原剝離面を残す。

(中間研志)

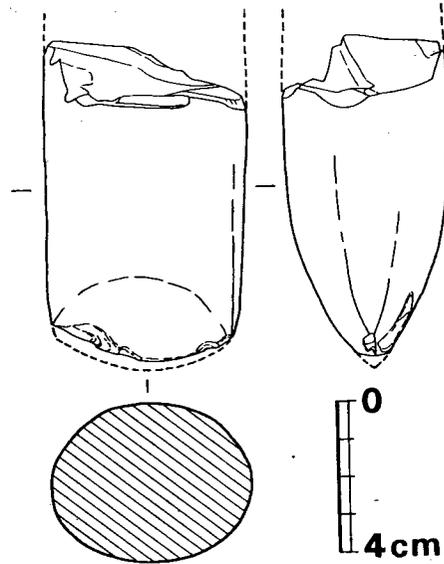


Fig.44 川原庵山遺跡出土石斧実測図 (1/2)

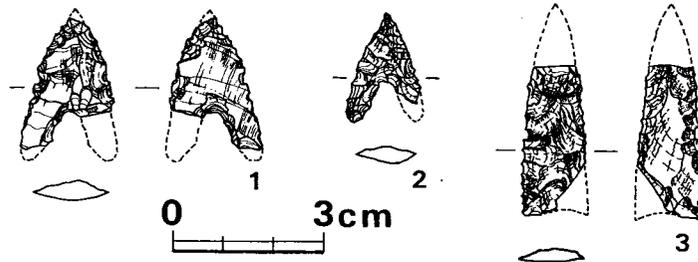
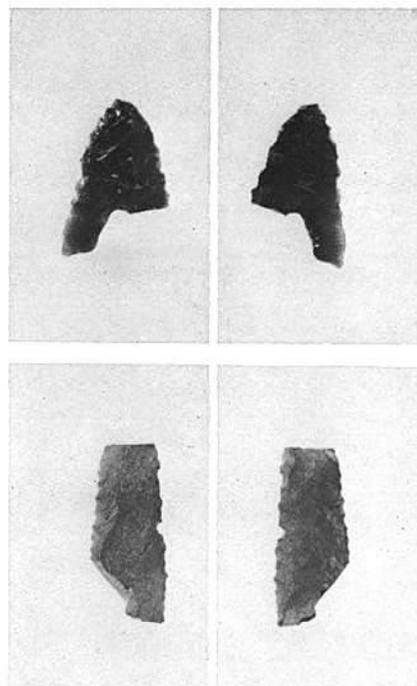
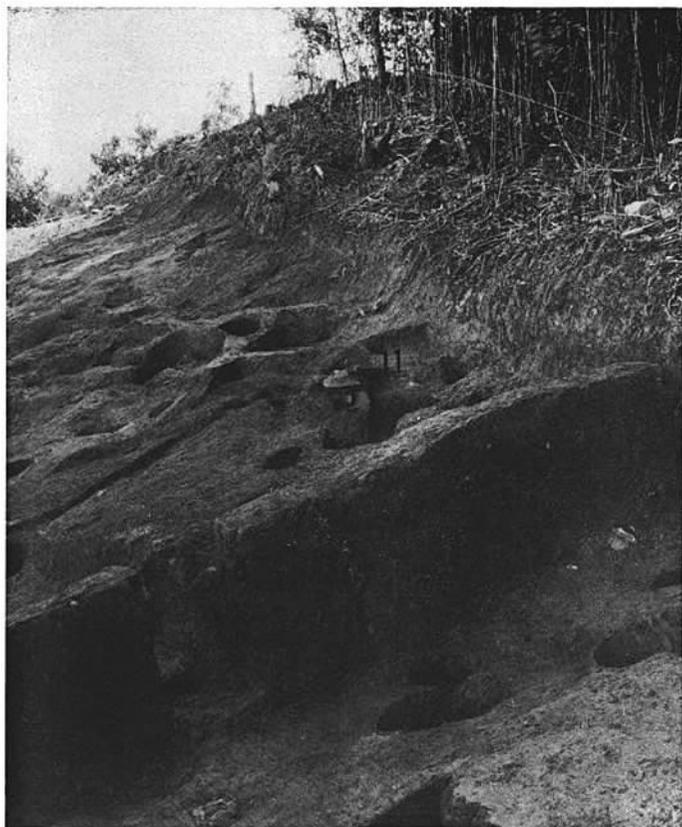


Fig.45 川原庵山遺跡出土石鏃実測図 (2/3)



3. 川原庵山遺跡出土石鏃

1. 川原庵山遺跡近景（西から）



2. 川原庵山遺跡土器10・11出土状態



1. 川原庵山遺跡土器10出土状態



2. 川原庵山遺跡土器11出土状態



1. 川原庵山遺跡土器7・9出土状態（北から）



2. 川原庵山遺跡土器9出土状態



3. 川原庵山遺跡土器7出土状態

Ⅲ 各遺跡の調査

3. 川原庵山第5号墳

Ⅲ—3 川原庵山第5号墳

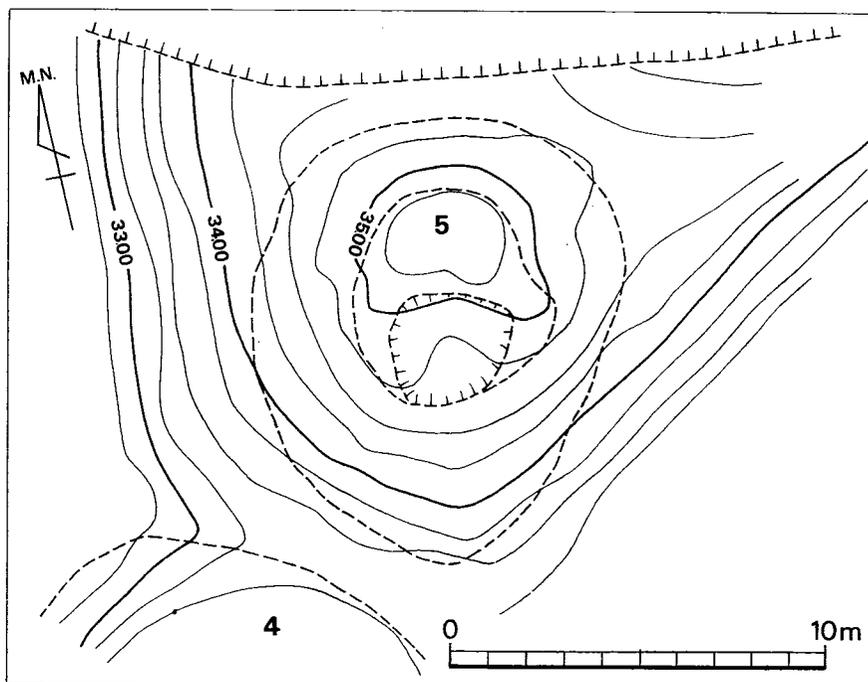


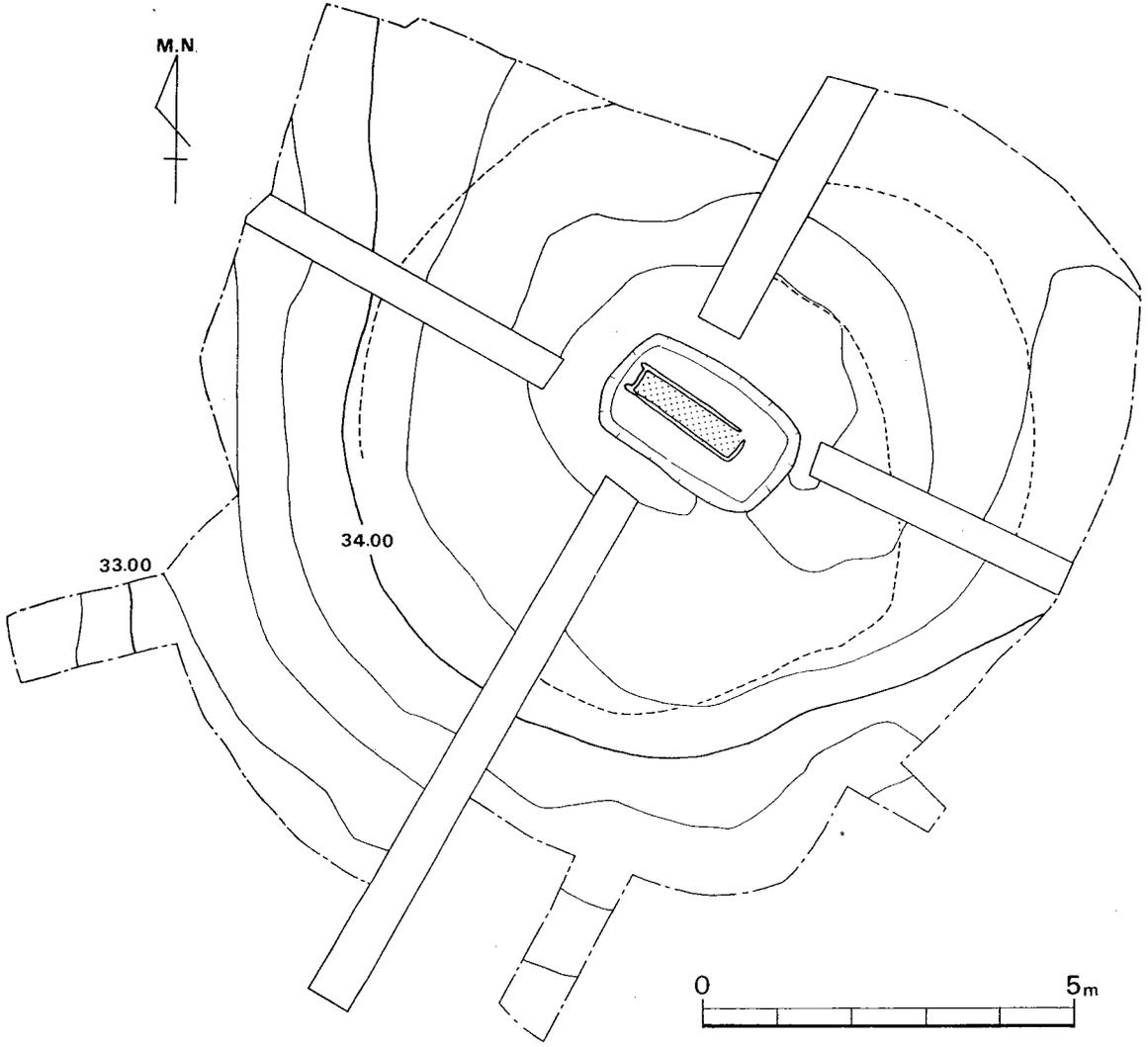
Fig. 46 川原庵山第5号墳墳丘測量図 (1/200)

本古墳群は、昭和47年度の踏査時には計8基からなり、水田との比高差約22mの尾根筋に墳裾を接するかのように接続して構築された円墳群である。1号墳・6号墳は径約20mを測り他を圧して大規模で、立地も最好所を選んで構築されているのに対して、他の6基は径10m前後と小規模で、立地は前2基と比べて劣り、従属的な在り方を呈している (Fig.38)。

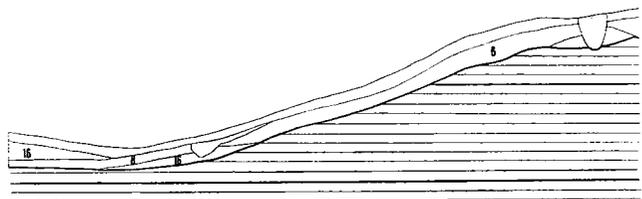
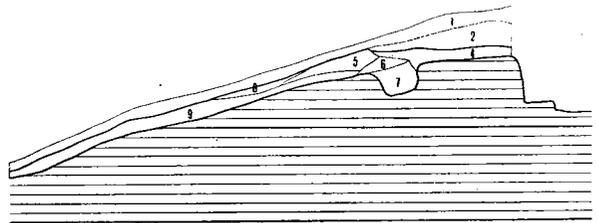
昭和47年度にそのうちの3基 (6号～8号墳) を調査し、内部構造はすべて小円礫を敷いて床とした組合式木棺であった (註1)。よって、5号墳の内部構造も木棺を想定して調査を実施した。

墳丘 (Fig.46・47・48)

北東から南西に向かう緩傾斜面に構築された円墳で、墳頂部に径3m程の陥没が認められた。墳丘のみかけの規模は長径 (南北径) 12m、短径 (東西径) 9.5mの不整長円形を呈し、最も比高差のある部分で高さ約1.1mである。南北径が長いのは、墳丘土砂の流出のためと思



- 1 表土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 赤褐色ブロック混黄褐色土
- 4 黒色砂質土混黄褐色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 暗黄褐色土
- 7 明黄褐色土
- 8 黄褐色土



われ、調査の結果当初の墳丘規模は径8～9m、高さ1m以上であったと思われる。また、墳丘構築に先だって地山整形をしており、それは旧表土層を全く残さない程に徹底している。

内部主体 (Fig.49)

隅丸長方形の墓室内に営まれた木棺で、床に小円礫を敷きつめている。墓室は二段掘りのもので、一段目は上端で長辺2.6m、短辺1.7m、深さ0.5～0.3m、二段目は長軸1.7m、短軸0.4m、深さ0.3mである。一段目の墓室底の南東側には、小円礫をまばらに敷いている。この礫は木棺床面に敷きつめられたものと同じものである。

木棺は南東―北西に主軸をおき、内法は主軸長1.5m、幅は頭部と思われる南東側で0.3m、北西側で0.25m程と思われる。棺材の組み合わせ方は、足部の方では長側板が小口板をはさみこむ形式であるが、頭部の方は明確ではない。この床面には地山直上から礫を敷いており、礫床の厚みは5cm程である。礫床上面のレベルは内側がやや低くなるようにしており、遺体を埋葬した折の安定性を考慮している。また、木棺に蓋をした後に、木棺を中心に長さ2.15m、幅0.6～0.6mの範囲に、極めて薄く黄色土を使用して被覆している。

出土遺物 (Fig.50)

礫床から5～15cm浮いた状態で南長側壁に沿って頭位側から、刀子・針を検出した。形状は図の通りで、1は長さ8.7cm(+)、2は8cm(+)である。3・4・5も2と同様にワラビ手形刀子になると考えられる。5は尖先部に近い部分の破片であり、この種刀子は最低3本は副葬されていたようである。6の針は長さ1cmの破片で径は1mm～1.3mmである。

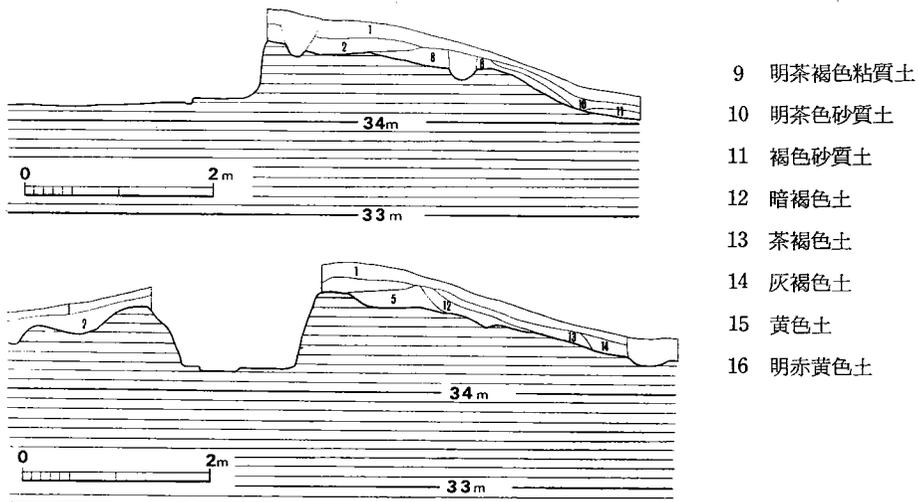
刀子4本(うちワラビ手形刀子3本)・針1本からなる副葬品は、その出土状態より、棺外副葬であったと考えられる。

(児玉真一)

註 1 福岡県教育委員会 <九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ> 1974

Fig. 47 川原庵山第5号墳地山整形面測量図 (1/100)

Fig. 48 川原庵山第5号墳墳丘断面図 (1/80)



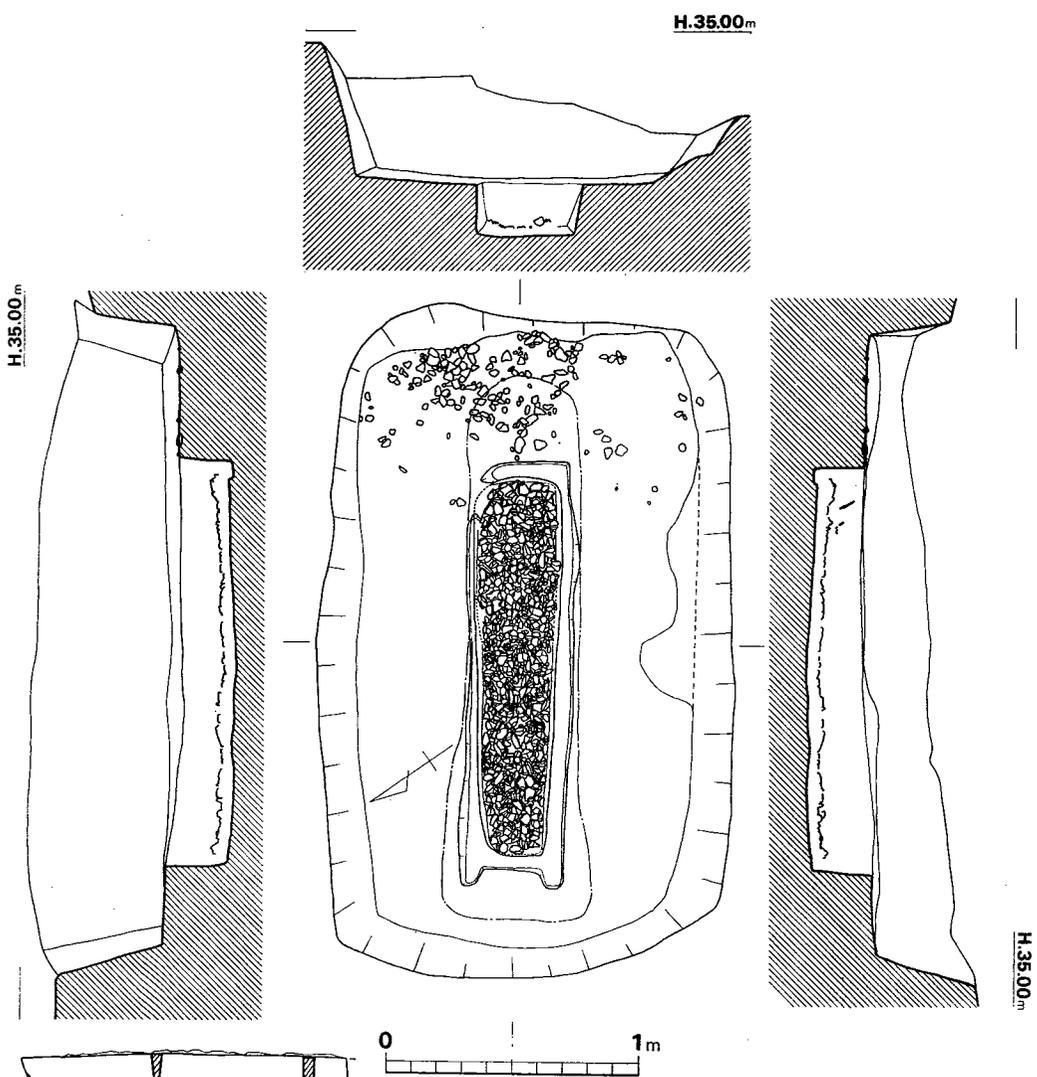


Fig. 49 川原庵山第5号墳内部主体実測図 (1/30)

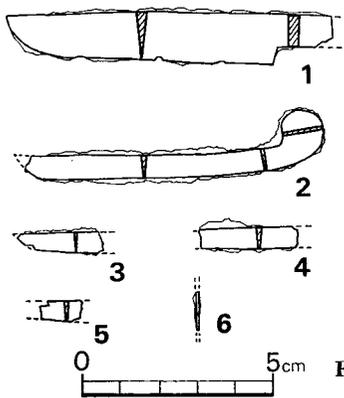


Fig. 50 川原庵山第5号墳内部主体出土遺物実測図 (1/2)

川原庵山4号墳 (Fig.51)

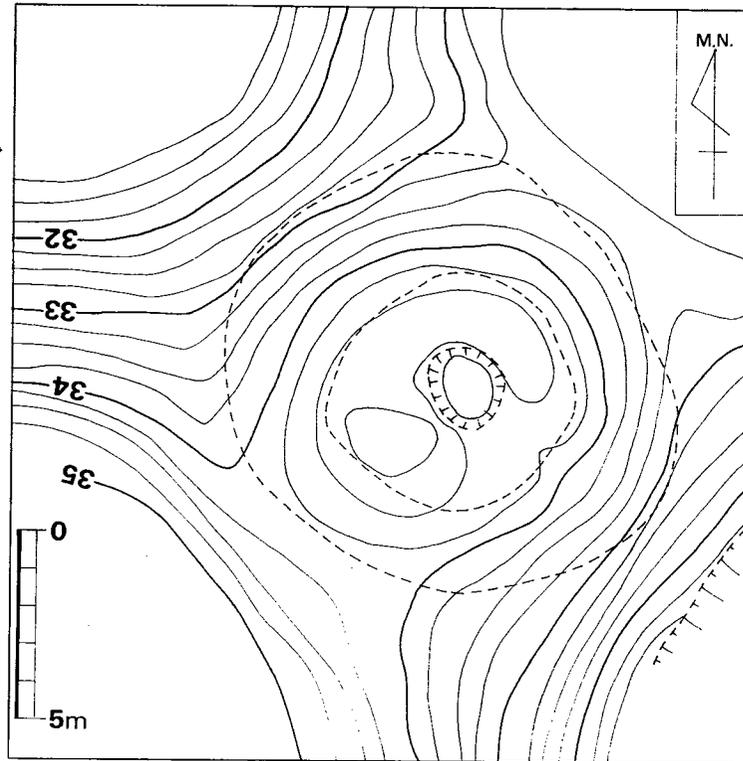


Fig. 51 川原庵山第4号墳墳丘測量図 (1/200)

墳丘測量のみを実施した。現状は東西径12m，南北11.5mの円墳で，北東側からのみかけの高さは約1.2m。墳頂部に盗掘孔がある。(石山 勲)



1. 川原庵山第5号墳航空写真（上方は高速道路）



2. 川原庵山第5号墳全景



1. 川原庵山第5号墳全景（後方は第4号墳）



2. 川原庵山第5号墳全景（左側の側道が拡幅された）



1. 川原庵山第5号墳近景



2. 川原庵山第5号墳主体部



1. 川原庵山第5号墳主体部



2. 川原庵山第5号墳主体部



3. 川原庵山第5号墳主体部



1. 川原庵山第5号墳主体部遺物出土状態



2. 川原庵山第4号墳墳丘（手前は第5号墳）

Ⅲ 各遺跡の調査

4 深町第1・2号墳

Ⅲ-4 深町第1・2号墳

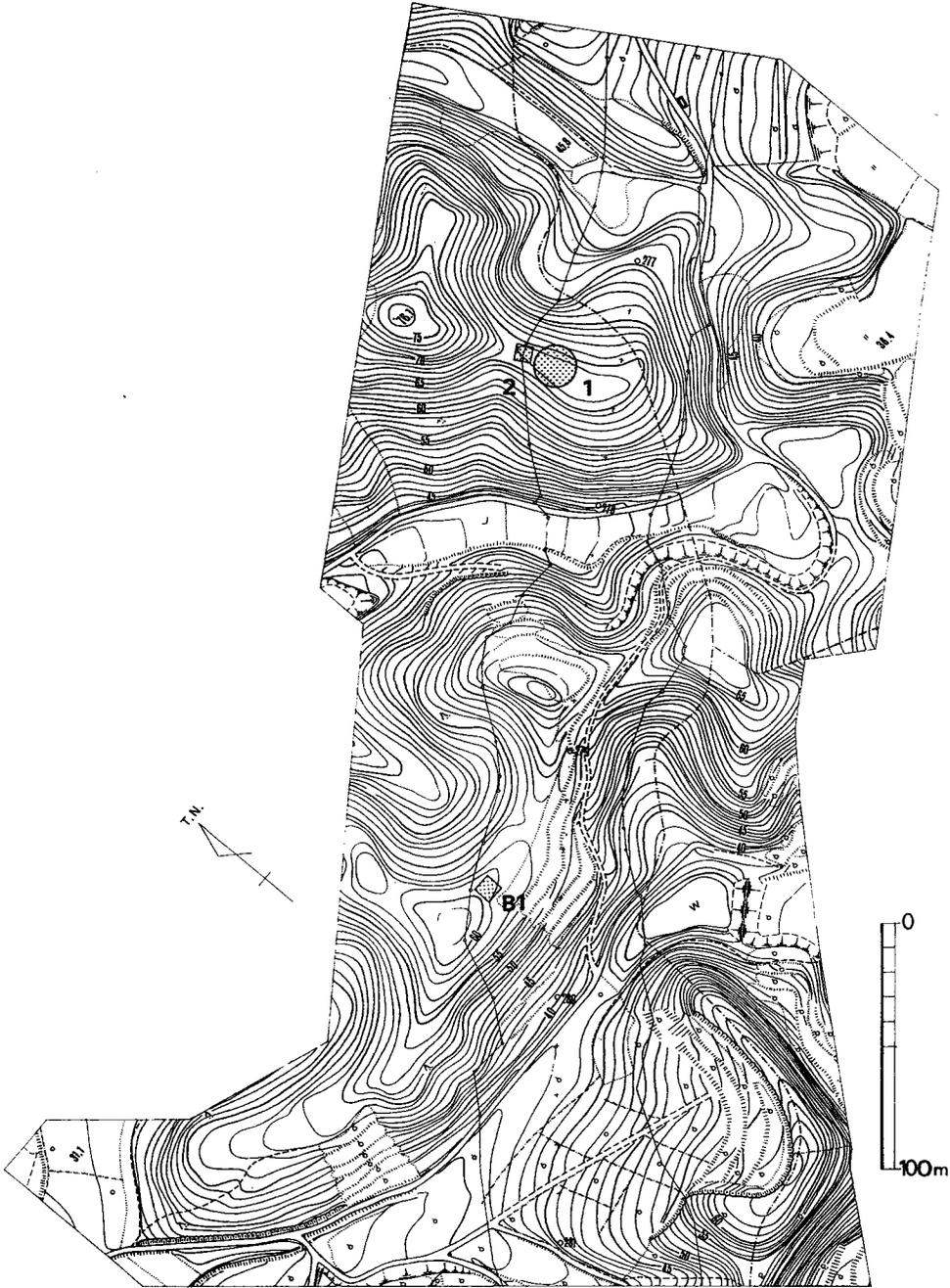


Fig.52 深町古墳群，原口B1号墳周辺地形図 (1/3,000)

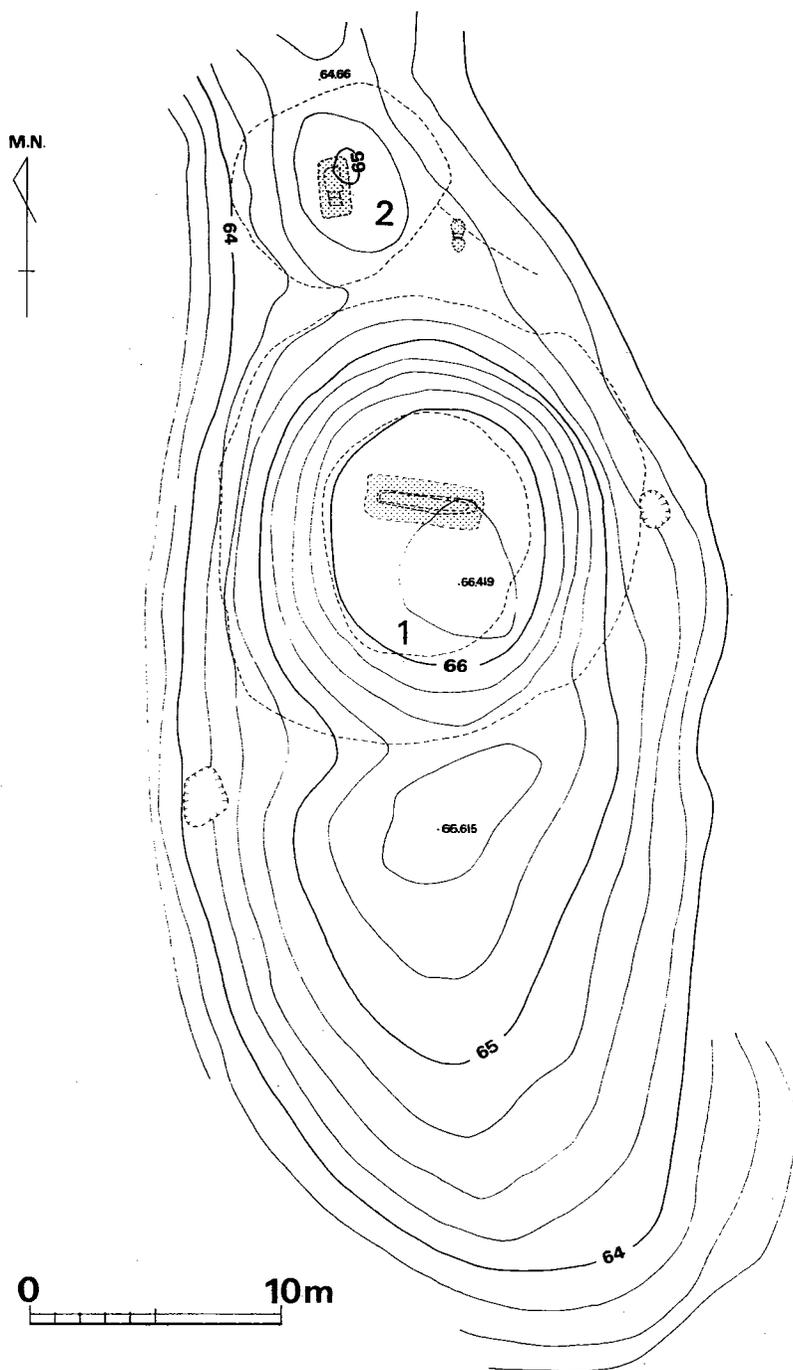


Fig.53 深町第1・2号墳丘測量図 (1/300)

1 はじめに

深町第1・2号墳は、南北に延びる尾根上に営なまれているが、第2号墳以北は上り坂となり北側に最高所があり、海への眺望が開けない奥まった位置にある (Fig.52)。縦貫道用地内の分布調査時には、これら両墳は直ちにその所在が確認されたが、第1号墳以南の尾根に少し余地があり、高まりは認められなかったが念のためにここに第3の地点を設定した (Fig.53・54)。しかし、調査の結果では、第1号墳以南に遺構は確認されず、北斜面にかけて須恵器

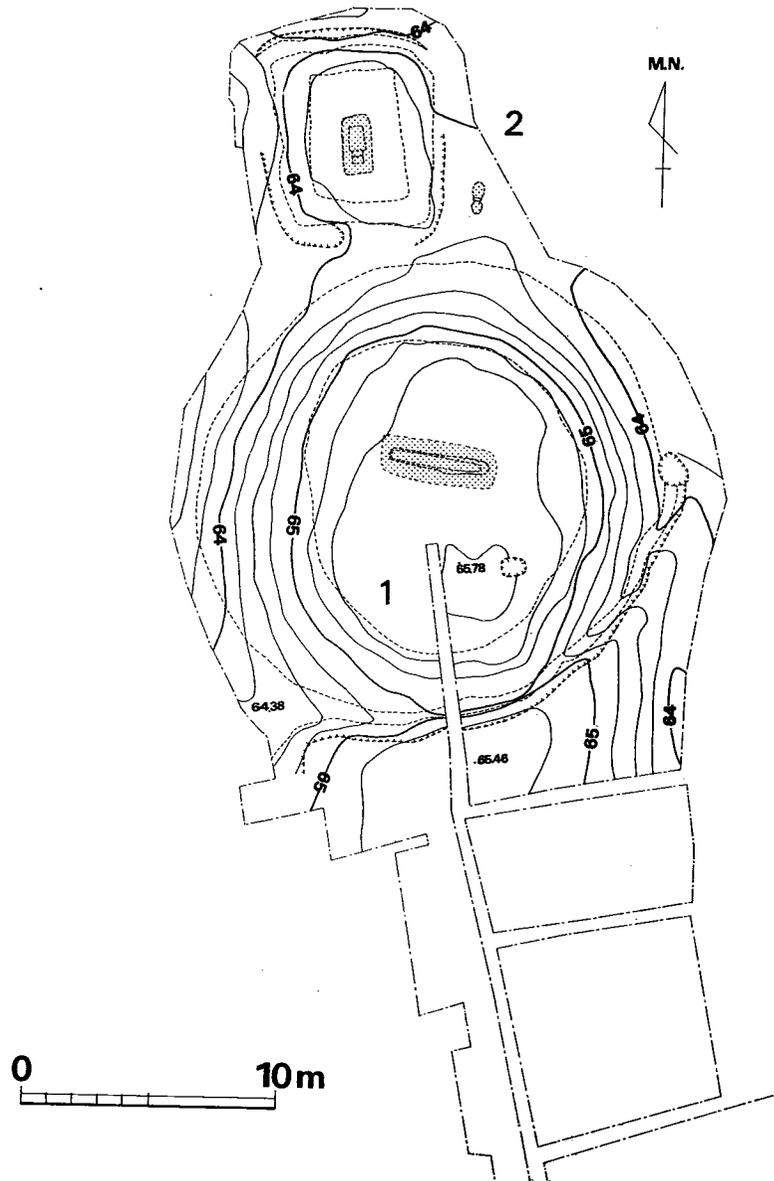


Fig.54 深町第1・2号墳発掘後全体図 (1/300)

細片多数が散在するのが確認されたのみである。第1・2号墳が須恵器を伴わないので、出土そのものが注意されたが、性格は不明である。

須恵器 (Fig.55)

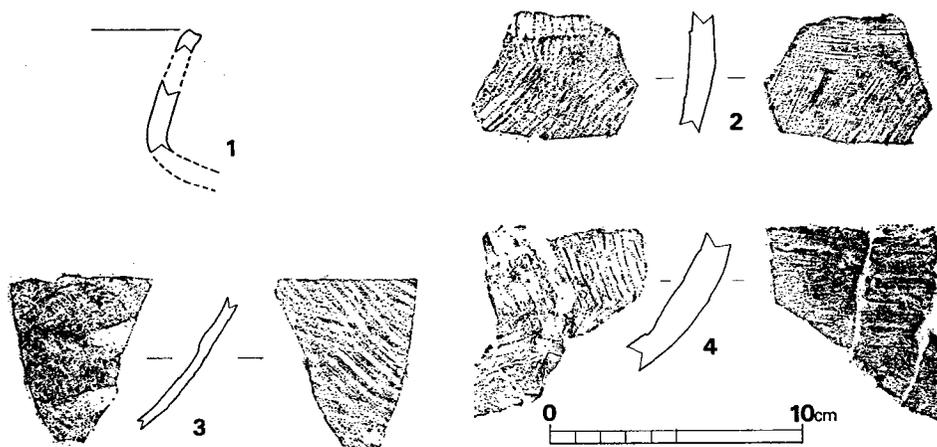


Fig.55 深町第1号墳南側出土須恵器実測図 (1/3)

全て細片となっており、全形の復元は困難である。1は、小型甕の頸部片である。2は体部上半、3・4は底部近くの破片と思われるが、いずれも成形法に特色がある。3はナデ消されているが、2・4の内面の工具痕は青海波文ではなく通常叩き板に使用される平行線文である。

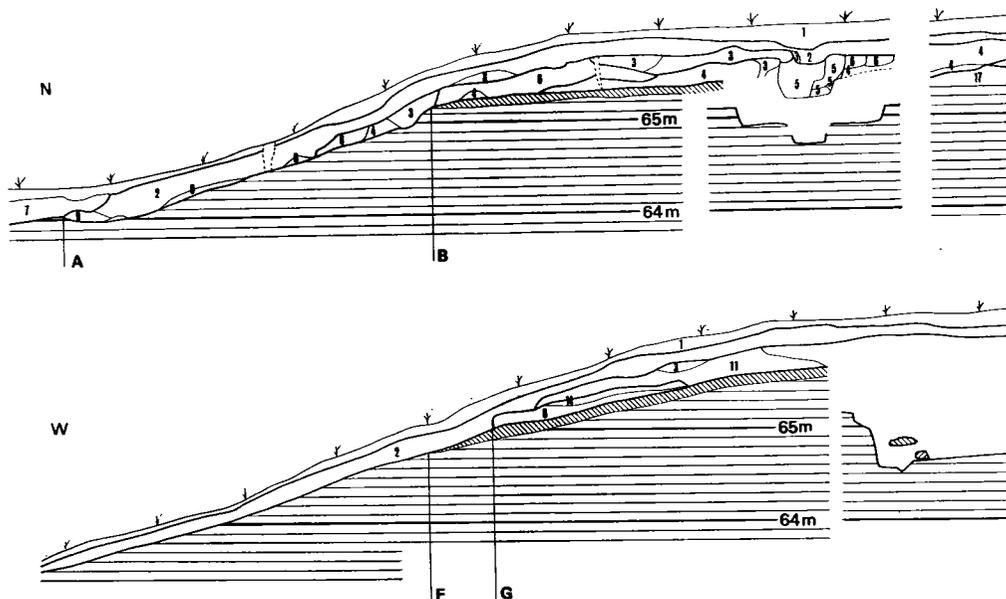


Fig.56 深町第1号墳墳丘断面図 (1/80)

り、4では曲面をもつ工具が使用されている。また4の器表は5・6mm間隔の荒い平行線文をとどめる。3は暗灰青色を呈して堅緻な焼成であるが、4は稍焼甘である。けれども胎土は良く似ており、同一個体に属すると思われる。

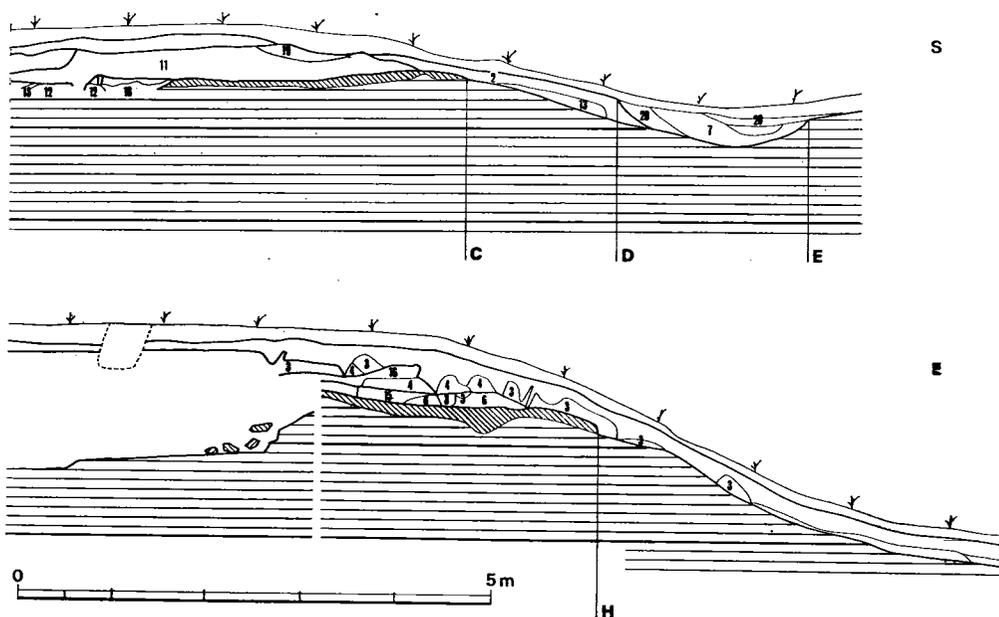
2 深町第1号墳

墳丘 (Fig.53・54)

発掘前のみかけの規模は、東西径19m、南北径18m、北側からの高さ径2mで、墳頂部は8×10mの平坦面となり、東側の小さな盗掘孔を除けば顕著な陥没はなく、截頭円錐形の秀麗な高まりであった。

墳丘築成に際しては、まず裾部の削り出しが行なわれ、B・C・G・I各点 (Fig.56参照) より外側がこれにあたる。主体設置後、これを覆う形で盛土がなされ、その厚さは現状で最も厚

- | | | |
|---------------|-----------|-----------|
| 1 表土 | 2 栗色土 | 3 暗褐色土 |
| 4 明褐色土 | 5 黒褐色土 | 6 黄褐色土 |
| 7 暗黒褐色土 | 8 暗褐色砂質土 | 9 褐色土 |
| 10 旧表土 (斜線部分) | 11 茶褐色土 | 12 黒褐色粘質土 |
| 13 暗黄褐色粘質土 | 14 暗褐色粘質土 | 15 混雑茶褐色土 |
| 16 混雑暗茶褐色土 | 17 11+12 | 18 12+13 |
| 19 11+2 | 20 7+2 | |



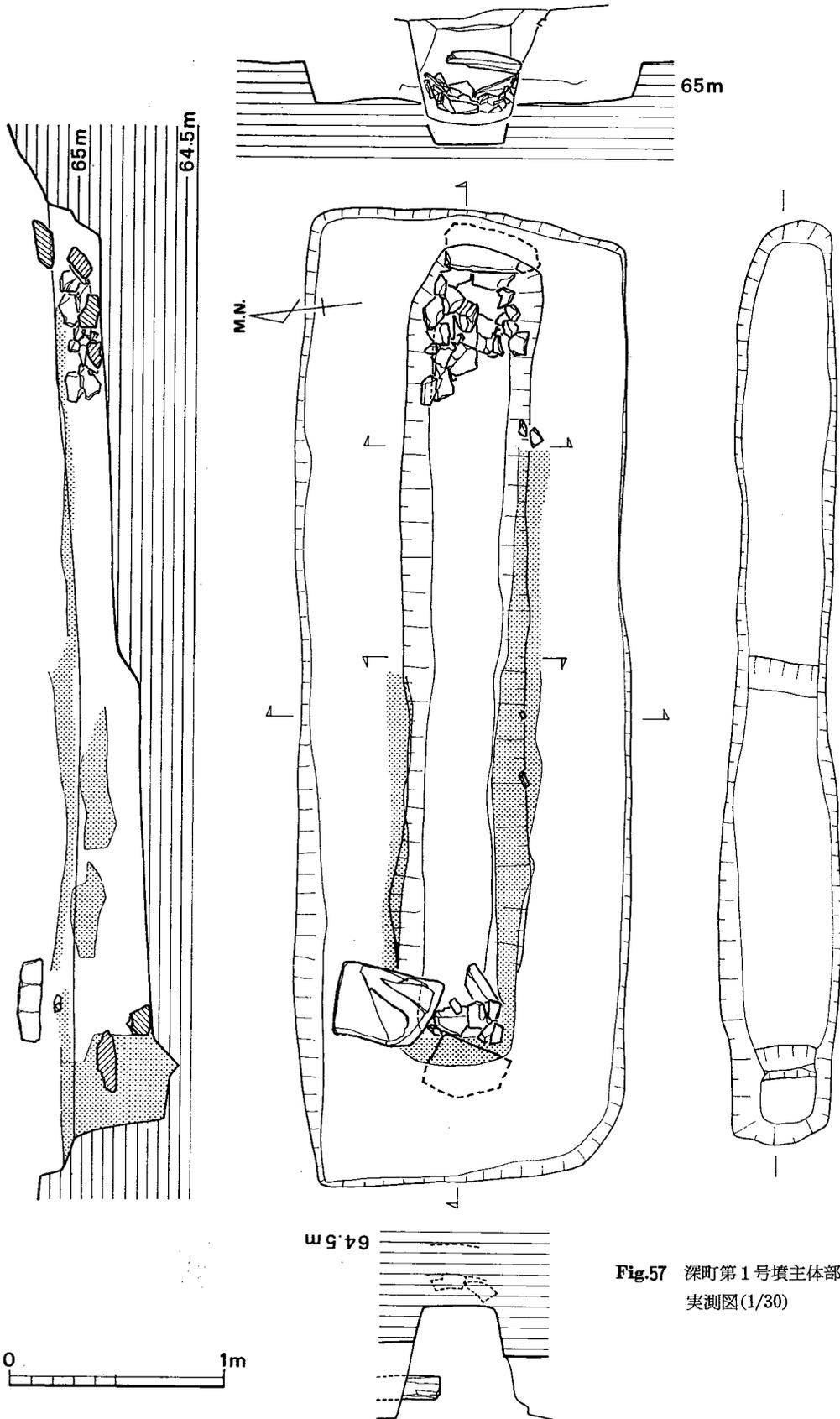


Fig.57 深町第1号墳主体部
実測図(1/30)

い所でも75cm前後に過ぎないが、削り出し手法を採っているので、北側裾部からのみかけの高さは2・1m弱に達する。南北両端は、D・Aに各求められ、径16・8m弱となる。斜面にあたる東西両端については明瞭ではないが、一応F・Iがこれらに相当するとみられて、その間は18m弱となり、東西が少しく長い長円形を呈していたとみられる。尾根筋にかかる南北方向のうち、平坦面につながる南半部には巾2m強（DE間）の浅い溝が設けられている。

内部主体 (Fig.57)

主体は東西に主軸をとるが、墳丘の中央部ではなく稍北に偏しており、さらに1基の主体の存在を思わせたが、精査の結果、他に主体が営なまれた痕跡は認められなかった。

墓壙は、旧表土から二段に掘りこまれており、上段は長さ4.6m強、巾1.52~1.57mの長方形プランを呈する。上段の全長は4.4mに達するが、東西両端に礫群があり、東高西低の床面は中央部でさらに10cmの段差がつき、2つの主体から成ることを思わせる。このうち東半は深さ20cm前後、最大巾48cm、西半は最も深い所で42cm、最大巾58cmであるが、両者の中軸はほぼ一直線となっており、上端でのみかけは狭長な土壙の観を呈している。西半の西端近くの床面にはさらにV字形断面の小溝が穿たれている。

東西両端には、いずれも床面から22~17cm上位に各1個の平石があり、西端では北肩にかけてさらに1個の平石が水平位に置かれていた。長さ50cm弱であり、蓋石とするには不適當であり、かつ断面にも盗掘による攪乱の痕跡はない。両端の礫群は、壙底より少しく上位にあり床面のカーブに合わせて中央部が稍低く、枕とするよりは本来は上部にあったものが落下したものと見做される。壙底の最大巾は、東半で0.4m、西半で0.45mに過ぎず、また壁も直立しない。

なお不明点はあるが、木蓋の使用が両端の礫のあり方から、また埋めこみ痕は確認されていないが墓壙壁および床の一部にみられた黄色粘土 (Fig.57でドットを付す部分) から側板の使用が、各推定され、従って主体の構造は組立式木棺2基と見做される。

東半の木棺の長さは最大で1.8mとみられるのに対し、西半部のそれは1.65mを超えず、ひとまわり小型である。高さは45cm内外と推定され、側板は直立せず外傾しており、この界面は赤い。赤色顔料は、東端床面の一部にも認められた。

葬法

東半部の遺体は東枕とみてよい。西半部の被葬者の頭位を西とすると、西に下傾する床面に若干の疑問がある。壙底の石を棺台とすることは、底板が県内では一般的には知られず、また床の構造からみて考えにくく、従って頭位を壙底に段差のある中央部とした可能性が強い。木棺は、東・西の2基とも同構造とみられるにもかかわらずより大きい東のそれを高位に置く点は、二人の被葬者の間のなんらかの差異を反映したものとみられる。

遺物 (P.L.38-3)

東端の礫群の間から、ガラス小玉2個を採取したにとどまる。一つは、高さ・径ともに5mmでライト・ブルーを呈する。他は、3mm強とひとまわりさく、少しく緑色がかっている。

この他、盛土中には弥生式土器片・石斧片 (Fig.58) がかなり含まれており、原口B1号墳と共通する。けれども遺構そのものは確認されていない。(石山 勲)

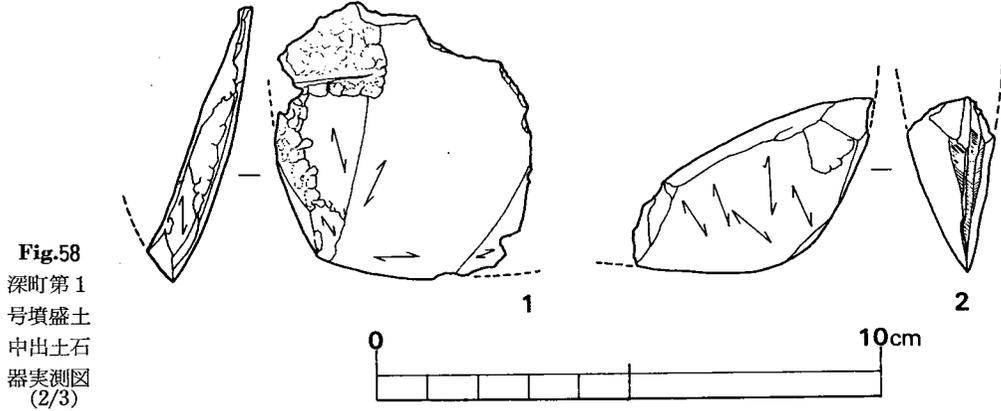
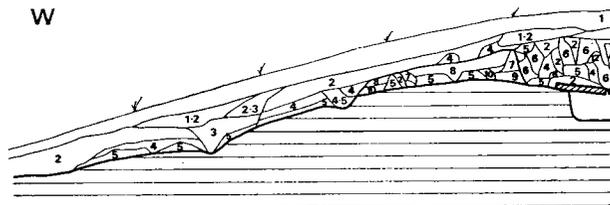
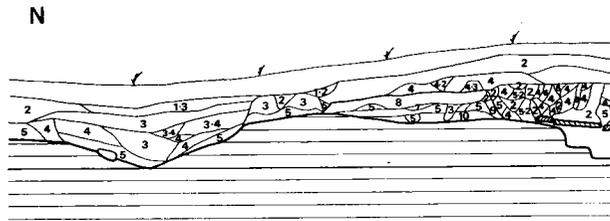


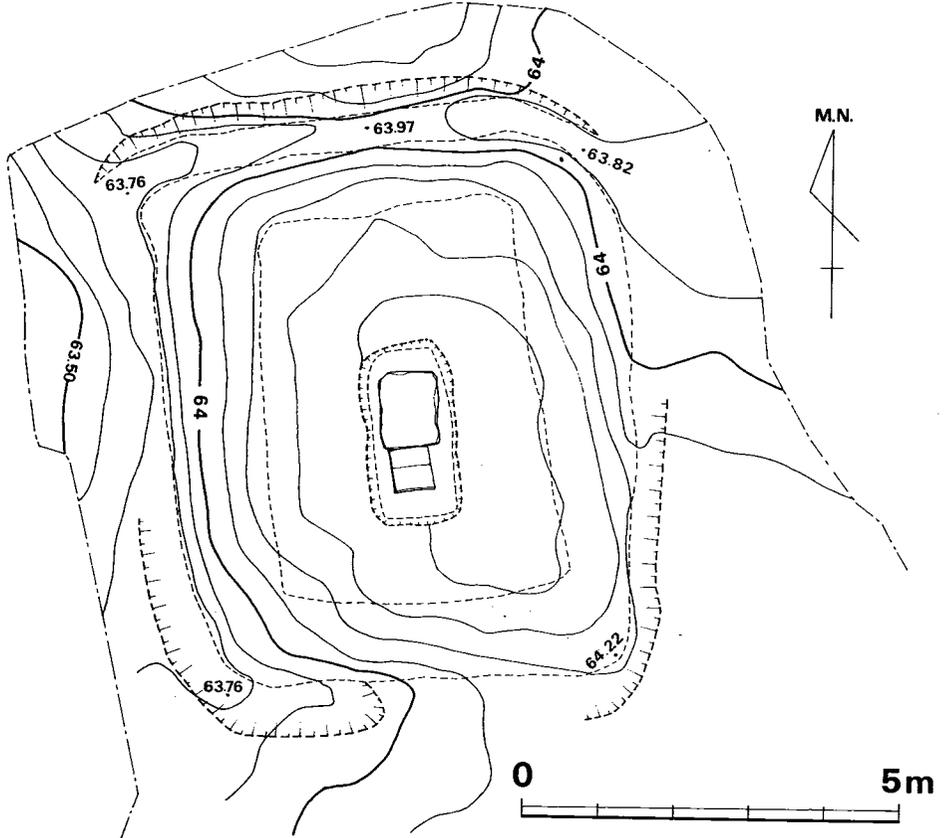
Fig.58
深町第1号墳盛土中出土石器実測図 (2/3)

3 深町第2号墳

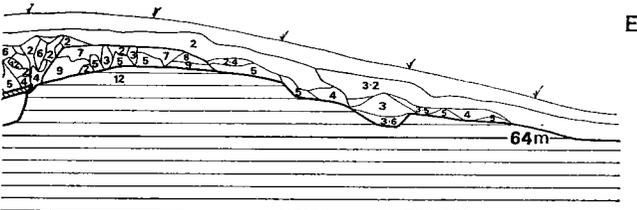
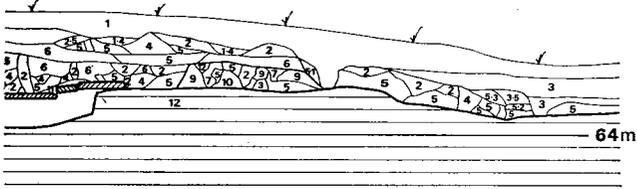
墳丘 (Fig.53・54・57・58)

- 1 表土
- 2 暗褐色土
- 3 黒色土
- 4 黄色砂質土混入暗褐色土
- 5 暗黄褐色土
- 6 暗褐色土混入黄褐色土
- 7 黄褐色砂質土 (地山)
- 8 2+炭混入
- 9 3+炭混入
- 10 5+炭混入
- 11 7+炭混入
- 12 黄青白色粘土





S Fig.59 深町第2号墳地山
整形面測量図
(1/100)



E Fig.60 深町第2号墳墳丘断面
面図(1/60)

山頂より南へ下がる尾根上の南端近くに円墳である1号墳が占地し、その北隣に位置する。墳丘測量当初径8m前後の円墳かと推定されたが、調査の結果南北辺7.1m、東西辺6.1m（周溝を含めると8.6×6.9m）のやや長方形気味の方墳と確認された。

北辺及び、東南隅・西南隅付近で地山を削り周溝を掘り、頂部を除き斜面を方墳形に削り出し、主体部を旧表土より掘り下げ遺体埋置後、若干の盛土を行う。盛土は地山土及び地山土と旧表土の混土を用い、土量的にも、周溝、墳丘形成削除時の地業範囲内の余剰土の使用のみに限られたと考えられる。盛土部分は頂部で40cmを測り、その結果墳丘高は北周溝底より0.95m、西裾下端より1.15mと微高である。

円墳の1号墳と隣接し、その接点近辺の墳丘土層断面観察で両者の前後関係は明確でなく、殆んど時期差は考えられないが、旧地形を利用している傾向の強い1号墳の方が占地的にみて先行するものと考えられる。

内部主体 (Fig.59)

主軸をN1°30'Wにとる石蓋土壙墓が頂部中心に設けられる。南北長2.45m、東西幅1.2mの略長方形プランの墓壙を旧表土より0.2m掘り下げ、更に、中心部に1.16×0.54m、深0.25mの略楕円形プランの土壙を掘る。土壙北端には高さ8cmの枕状台状部分を削り出す。遺体埋置後、蓋石をかぶせ、黄色粘土で目貼りを行う。蓋石は当初大小二枚の青色砂岩を丁寧に板状に加工して用いたものである。粘土目貼りの状況より、南側二枚は埋置前に割れたものと考えられる。蓋石裏面には殆んど全面に朱塗布がみられ、南蓋石側面にまで及んでいる。土層断面観察から蓋石をかぶせて後、墓壙上面より盛り上げるようにして土を充填していることがわかる。

内部主体及び墳丘・周溝からの出土品は皆無である。当墳は南東裾方に位置する壺棺墓よりは先行することが土層観察で明らかであり、更に前述の如く1号墳に先行される時期のものと考えられる。

埋葬方法としては、主体部土壙の規模から小児用であり、土壙直葬の北に頭位を置くものと推定されよう。また、蓋石の大きさ、加工の丁寧さ等をみると、通有弥生期にみられる石蓋土壙墓のそれとは全く趣を異にし、むしろ古墳時代箱式石棺墓のそれに近い類である。石棺用石材を用い乍らも、小児用埋葬の為にか伝統的な石蓋土壙墓という形態をとってしまったのであろうか。

地山を削り出した方形台状墓様の小方墳の主体部として石蓋土壙を採用している例も極めて稀れであり、副葬品等の貧弱さと考え合わせて、次期の近隣にみられる川原庵山古墳群・原口等における木棺礫床等の地方色豊かな形態の一種と考えられようか。当古賀平野域においては5C後半代を境としてこれらの折衷様の地方色の濃い墓制から初期は併行しながらも、鹿部浦口古墳群の竪穴系横口式石室へと移行してゆくものと考えられる。 (中間研志)

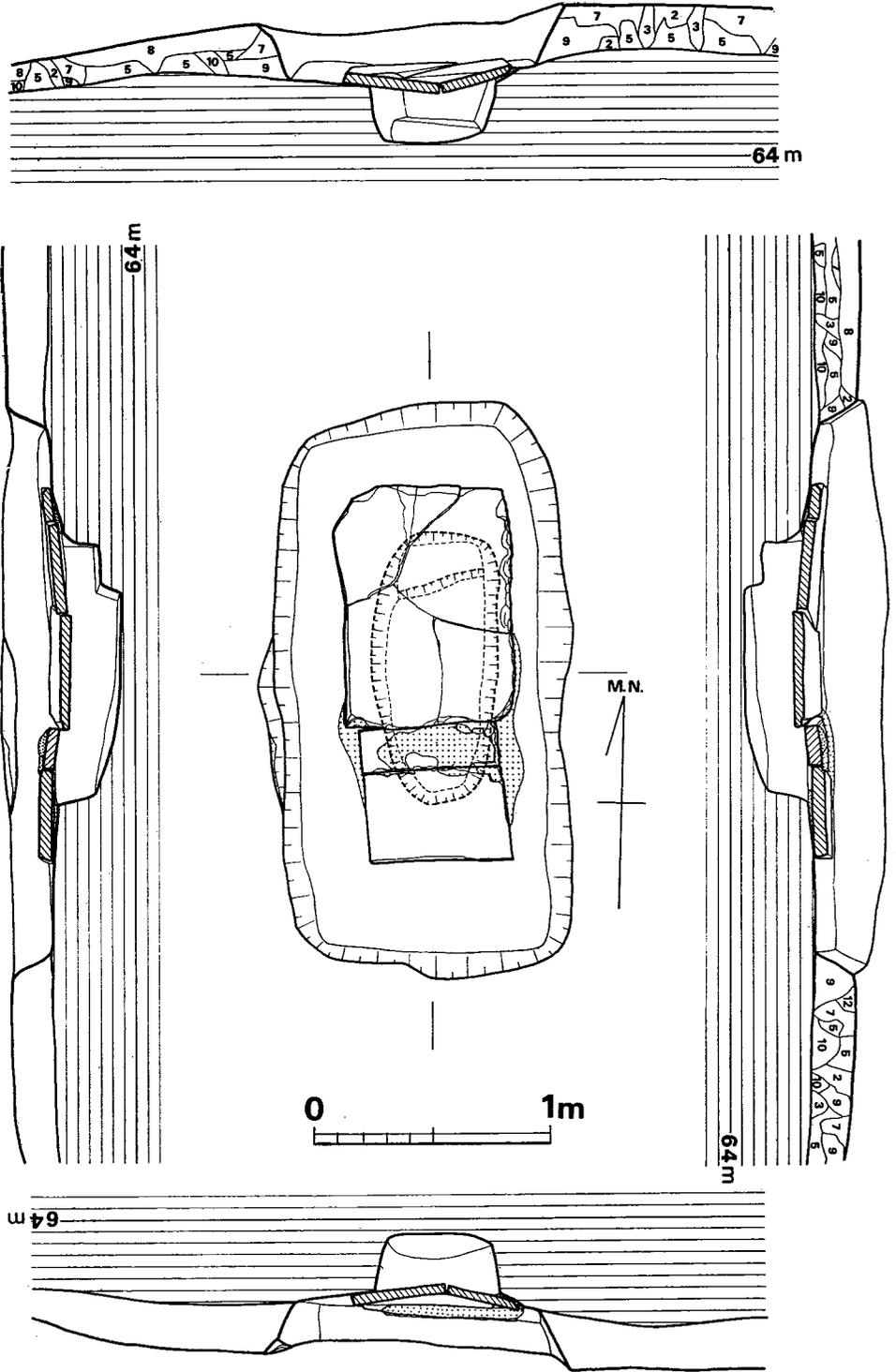


Fig.61 深町第2号墳内部主体実測図 (1/30)

4 壺 棺 (Fig.62)

2号墳の南東隅近く、周溝から約1m離れて2号墳主体とほぼ平行する状態で営なまれている。墓壙は、長軸を南北にとる1.4×0.7(上端値)mの不整長方形プランで、深さ約0.3mでほぼ水平位にあるが、南側が僅かに低い。

南側の薄手の複合口縁の壺に、口頸部を打ち欠いた厚手の壺形土器を挿入している。挿入に際しては、安定と密着とを容易にするために北側に磔3個を用いている。現状での全長は、96cmに過ぎず、明らかに小児用である。これを覆って、墓壙掘削時の排土が盛られている。

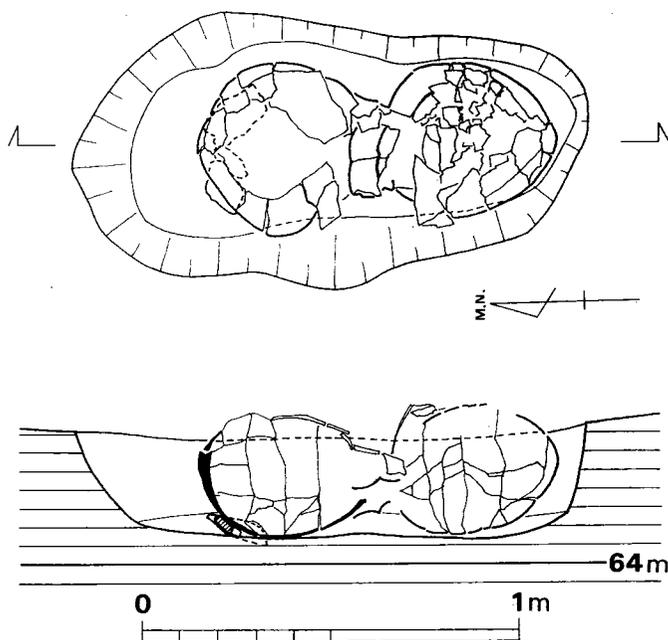


Fig.62 深町第2号墳南東裾部出土壺棺実測図 (1/20)

上 壺 (P L.42-3, Fig.63-1)

赤褐色を呈して焼成良好であるが、厚手で歪みを生じている。胴部最大径41.2cmは下位にあり、下ブクレで下壺とは対照的に野暮ったいつくりである。口頸部は打ち欠かれており、現存高42.7cm。頸部は内外から粘土で補強されており、内径は17~15cm。内面は篋削り・ナデが施され、器表頸部近くは、まず縦方向に櫛目調整を施し、次に指ナデ、さらに粗く横方向に櫛目調整する。体部下半までは、いったん縦方向に、後横方向、以下は各方向から櫛目調整を施す。底部は完全な丸底ではなく、平底の倂をとどめている。

下 壺 (P L.42-4, Fig.63-2)

器高56.5cmで、倒卵形の体部に略直立する複合口縁がつき、全体的に薄手で成形・調整は丁寧であり、洗練された感を受ける。頸径は19.4cmで、いったん内傾してから外反し、最大口径は25.8cm。器表の頸部付近は縦方向以下は横方向に刷毛調整を施す。淡赤褐色を呈し焼成は甘く、脆弱であるが、部分的に光沢ある肌を残す。頸部内径は17.4cm。

5 小 結

1号墳の主体は、構造上になお不明点があるが2体を安置したことは疑いない。これらを並

列せずに木棺の小口を接するかのようになら狭長な墓壇内に一直線上に置く点、極めて特異である。2号墳および壺棺はその内法からみて小児用と考えられ、成人用の1号墳の主体とは好一対をなす。

1号墳のゆとりある占地状態に対して、2号墳のそれは1号墳によって規制された状態にあ

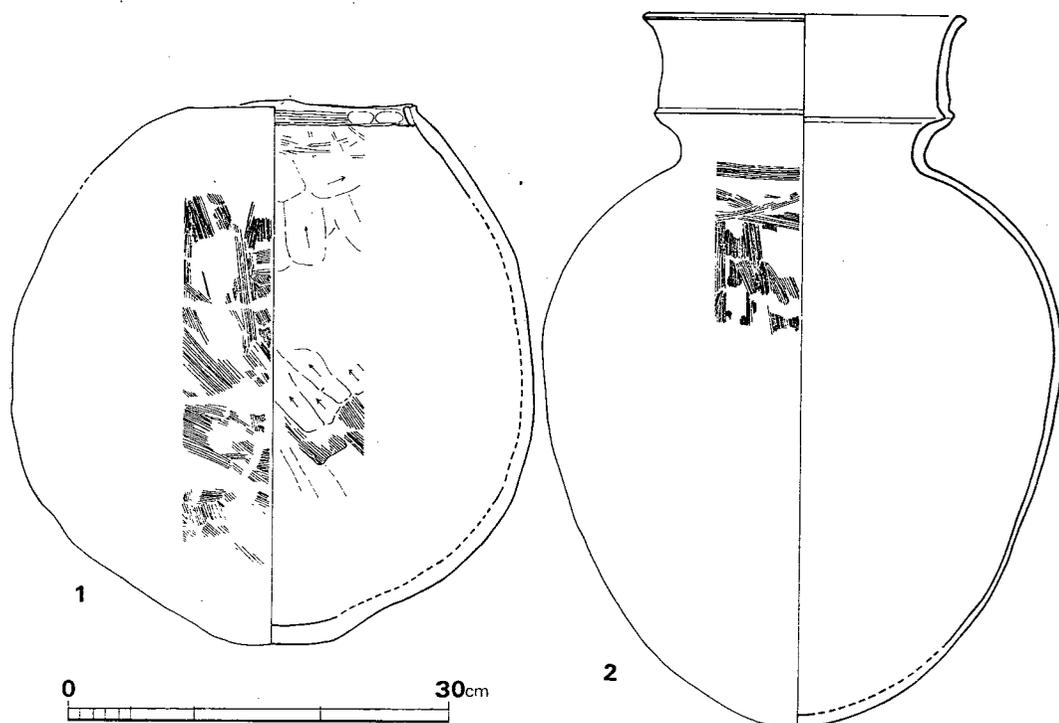


Fig.63 深町第2号墳東南隅壺棺使用土器実測図 (1/4)

る。かつ、壺棺は2号墳に後出することは明らかである。従って、築造順としては、1号墳→2号墳→壺棺とすることができる。また、三者は、墳丘、主体の構造・手法からその築造期が極めて接近しているとみられ、時間差はほとんどなく相次いで営なまれたとしてよい。

これらの被葬者達が濃い血縁関係にあることは、2号墳と壺棺との位置関係によっても窺われる。しかし、成人と小児とが同一墳丘には葬られず、しかも墳丘・墳形を異にし、あるいは同じ小児でも埋葬位置・主体構造に差異が認められる点特徴的であり注意される。

これら三者の築造期は、壺棺の型式より知られる。使用された複合口縁の壺に近いものには、春日市・柏田遺跡の第17号住居跡出土壺1（註1）がある。両者には、空間的な隔たりがあり、事実頸部の凸帯の有無・胴部の形態等に小異があるが、大略同傾向・同期の所産とみてよい。同器は、井上裕弘氏により柏田Ⅲ期「布留式期の古期のもの」に比定されている（註2）。

なお、1号墳東半木棺のガラス玉を除けば、副葬品、供献用土器類等を全くもたない点が印象的である。

また、成人を葬った第1号墳が円墳であるのに対し、小児を葬った第2号墳が小形ながら矩形墳と、墳形を異にする点に注意される。

(石山 勲)

註 (1) 井上裕弘他「古墳時代の遺構と遺物」『春日市・柏田遺跡の調査』〈山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告4 一下巻〉1977年。p268。

(2) 井上裕弘「おわりに」。註1文献所収



1. 深町第1・2号墳遠景（西から）



2. 深町第1号墳墳丘近景（南から）



1. 深町古墳群(1)および原口古墳群B支群第1号墳(2)航空写真(西から)



2. 深町第1・2号墳航空写真(東から)



1. 深町第1・2号墳航空写真（南から）



2. 深町第1号墳墳丘地山整形面（南西から）



1. 深町第1号墳主体部全景（西から）



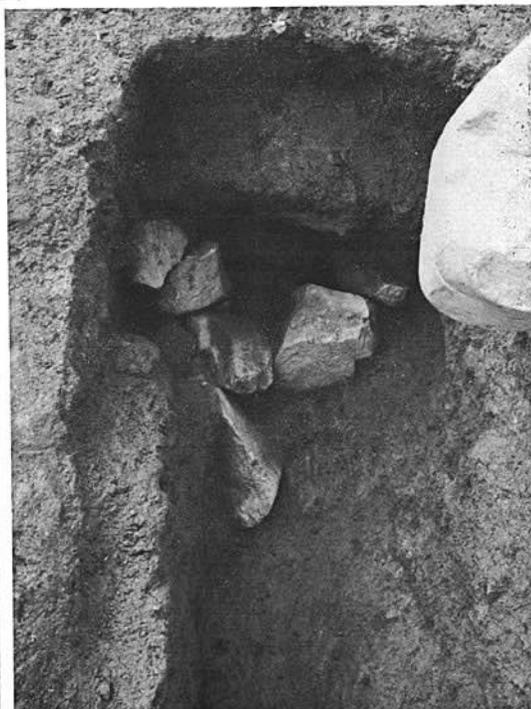
2. 深町第1号墳墓壙全景（西から）



3. 深町第1号墳主体部東端出土ガラス玉



4. 深町第1号墳主体部東端礫



5. 深町1号墳主体部西端礫



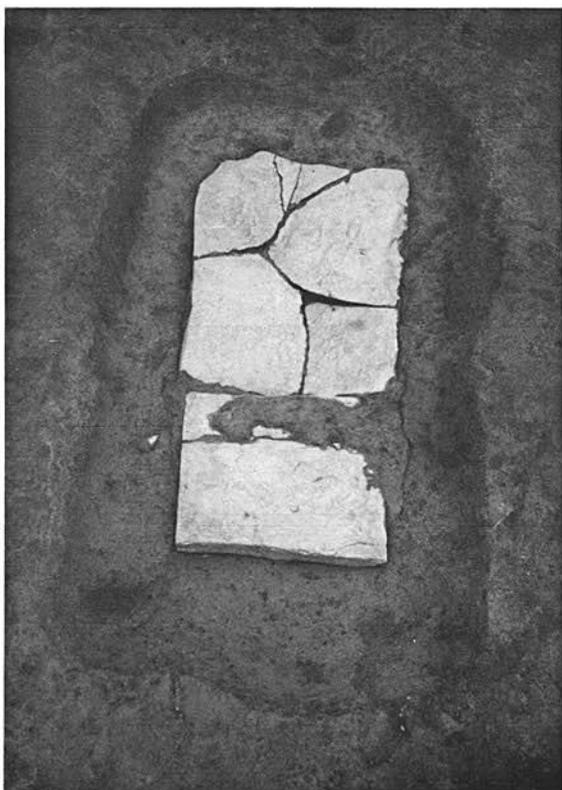
1. 深町第2号墳墳丘遺存状態（南から）



2. 深町第2号墳全景（南から）



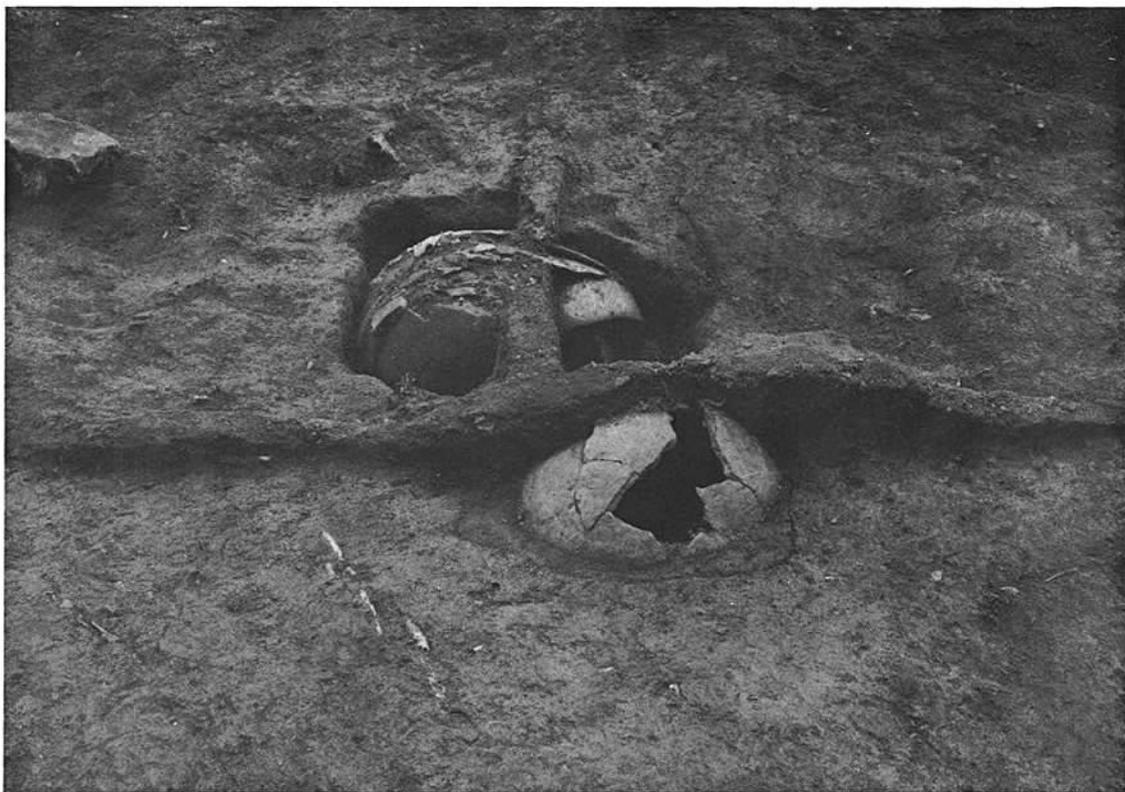
1. 深町第2号墳主体と墳丘盛土（南から）



1. 深町第2号墳主体部石蓋（南から）



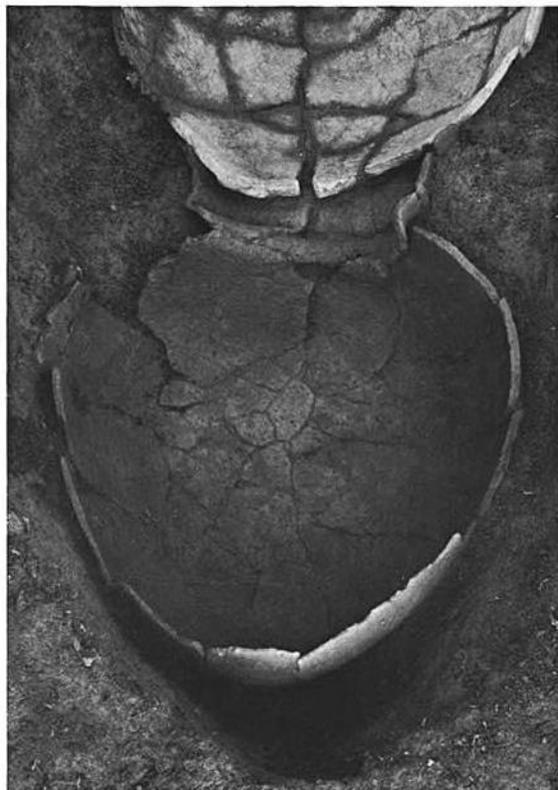
2. 深町第2号墳主体部土壙（南から）



1. 壺 棺



2. 壺棺全景 (東から)



1. 壺棺接口状態（南から）



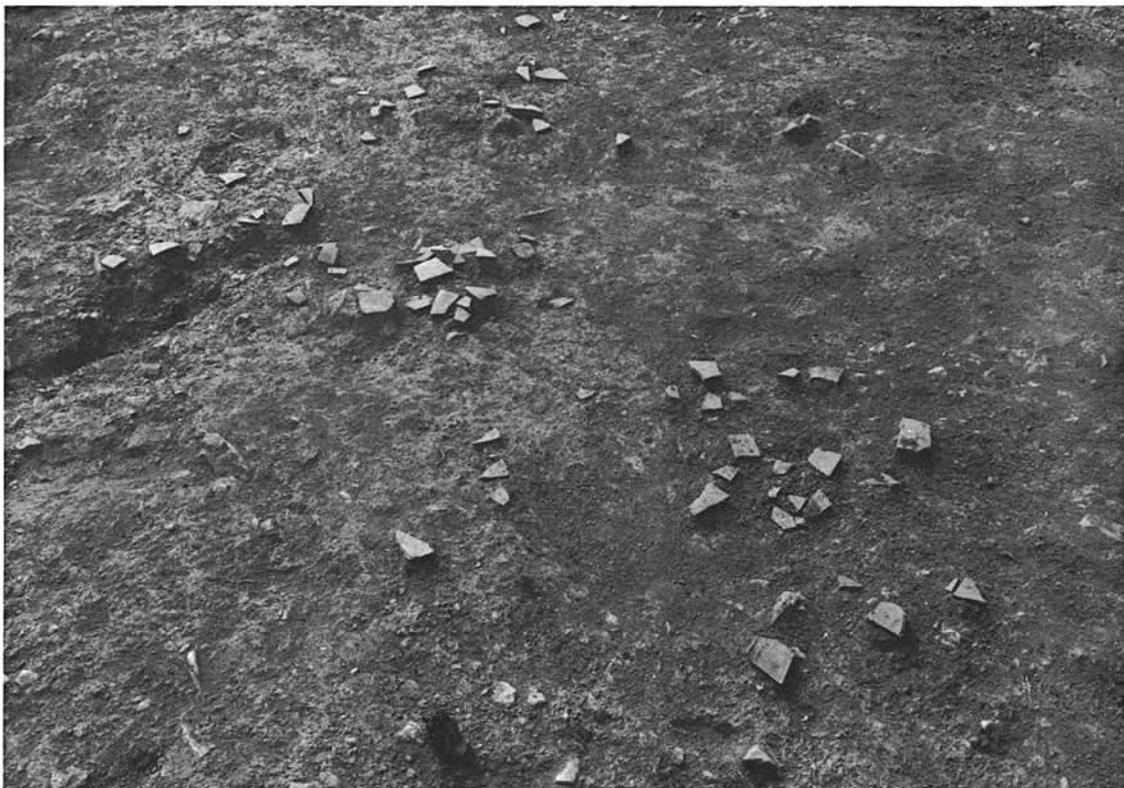
2. 壺棺設置土壙全景（南から）



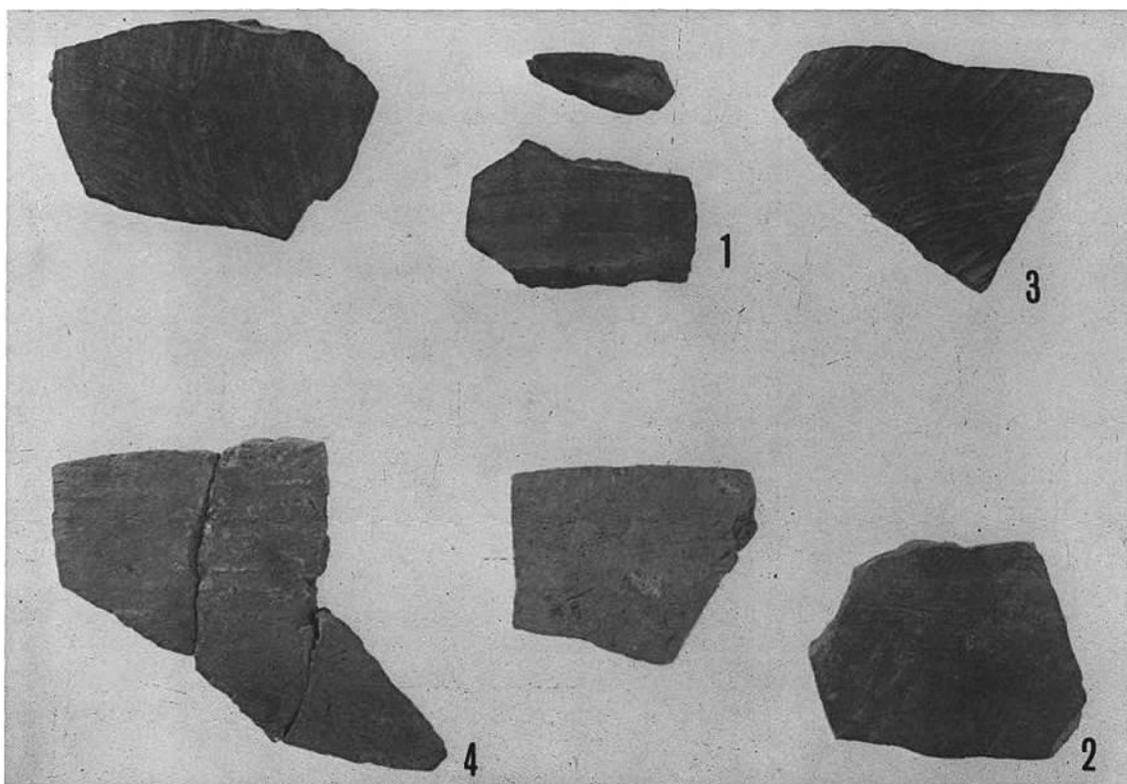
3. 壺棺使用壺



4. 壺棺使用複合口縁壺



1. 深町第1号墳南側須恵器出土状態



2. 深町第1号墳南側出土須恵器

Ⅲ 各遺跡の調査

5 原口 B1号墳

Ⅲ-5 原口 B1 号墳

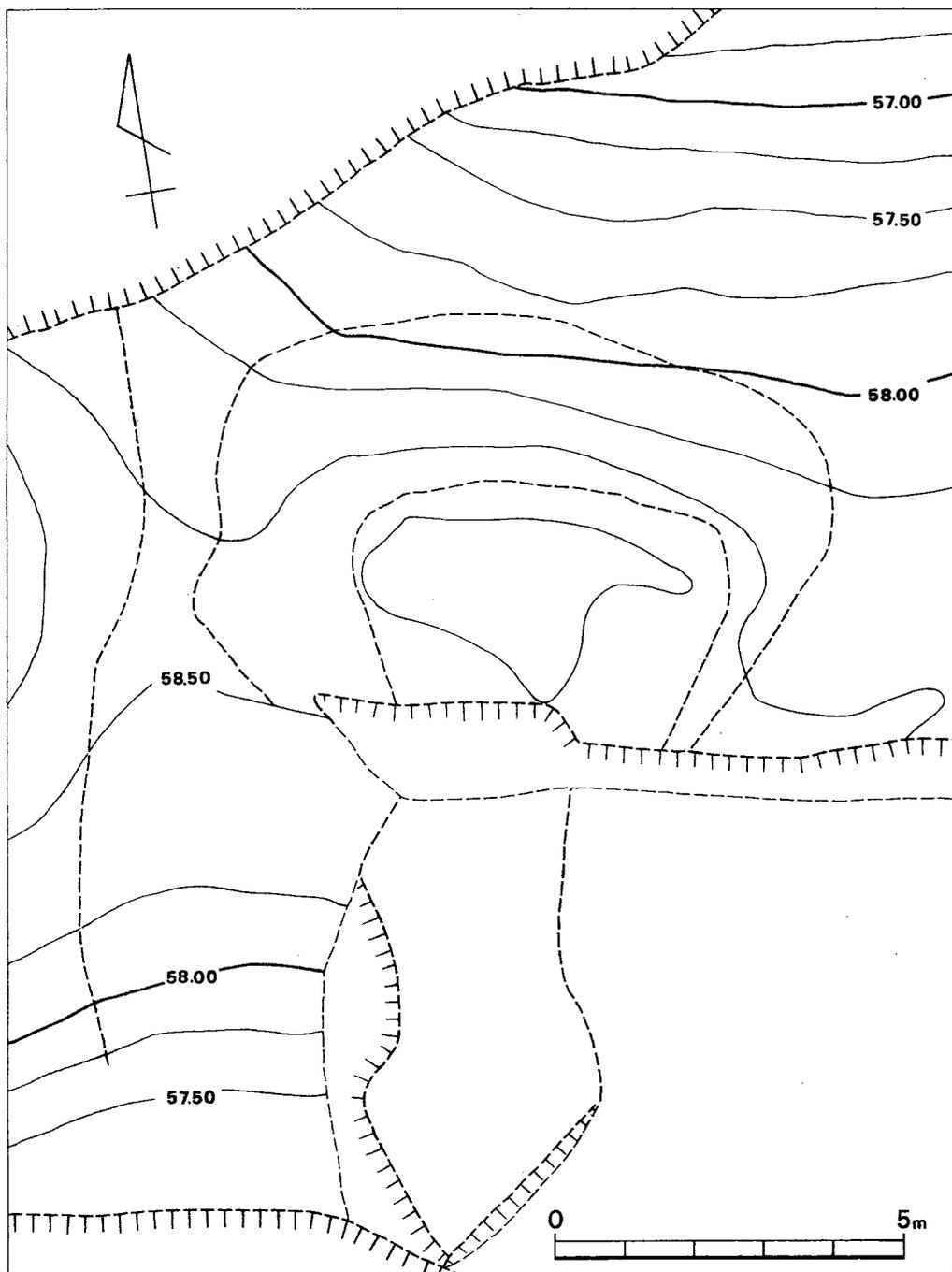


Fig. 64 原口 B 1 号墳墳丘測量図 (1/100)

墳丘 (Fig.64~66)

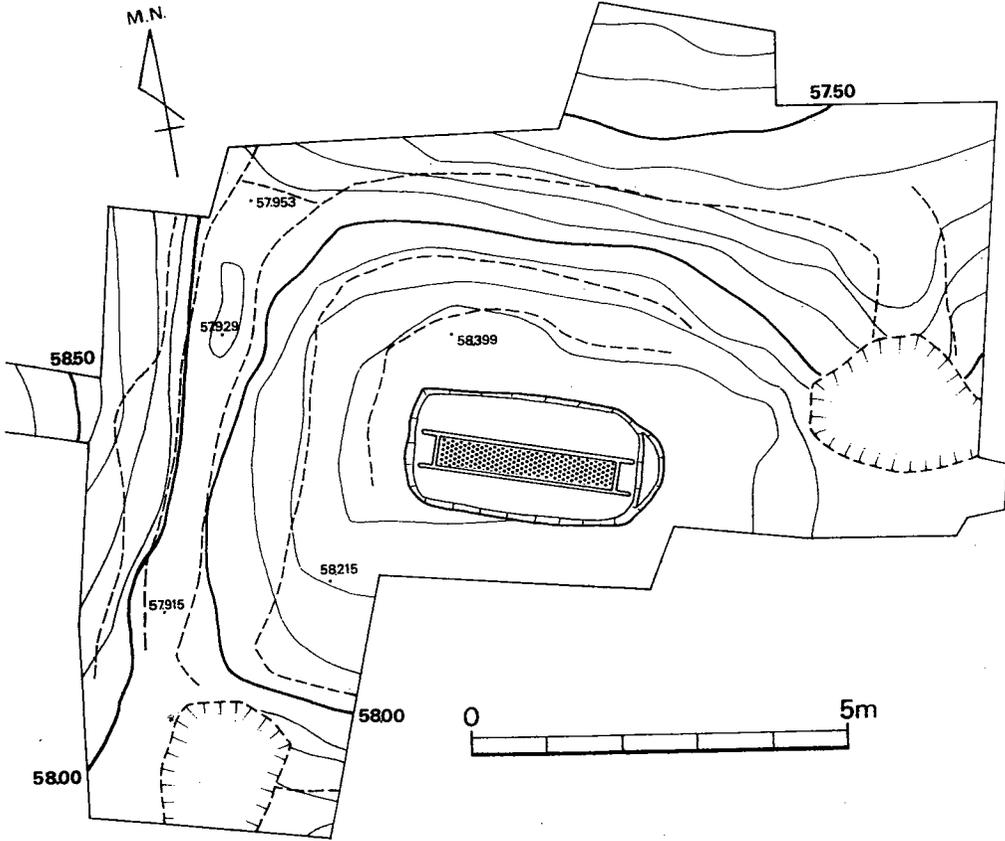


Fig. 65 原口B 1号墳地山整形面実測図 (1/100)

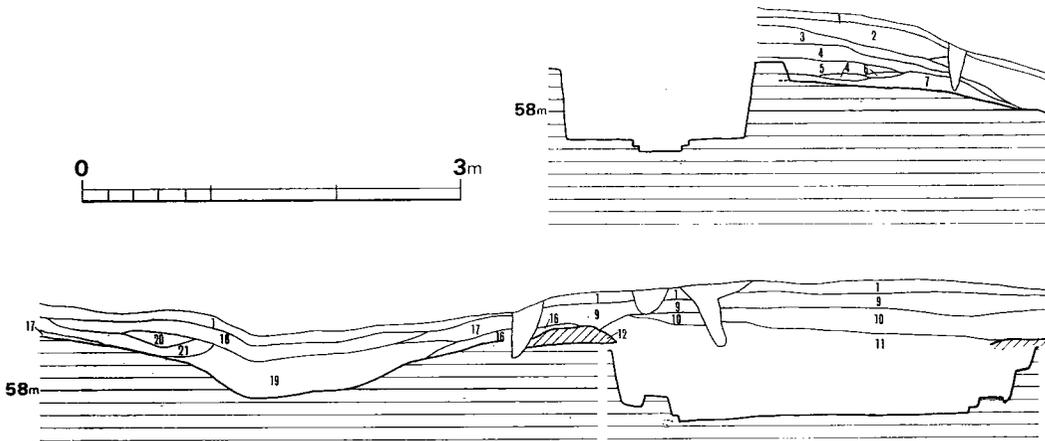


Fig. 66 原口B 1号墳墳丘断面図 (1/80)

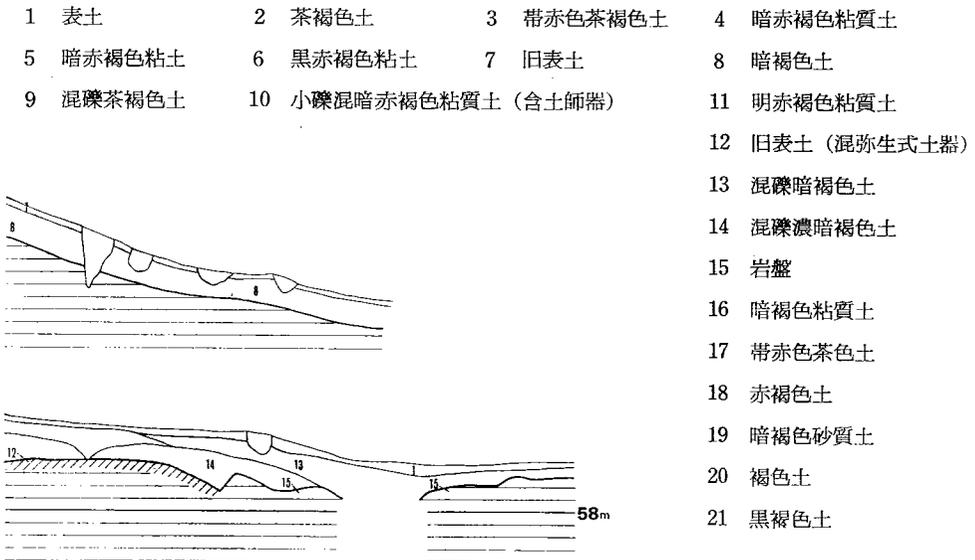
略東西方向にのびる尾根筋に構築された古墳で、墳丘南側は若干削平されている。周囲はミカン畑で、開墾がかなり進んでおり、以前には箱式石棺墓等の発見があった由である。

墳丘は一見して方墳状を呈していたが、墳丘自体の土砂の流出と開墾の手のはいつていることを考慮して、方墳の可能性を残しつつも、一応径約8m前後の円墳であろうと推定して調査を実施した。

調査の結果、本墳は長辺（東西辺）約8m、短辺（南北辺）約7mの方墳であることが判明した。また高さは、最も比高差のある北側で1m以上を測る。墳丘東側ではかく乱墾のため明確になし得なかったが、西側において尾根筋に直交する南北方向の溝一条を検出した。この溝は地山整形時に掘られたもので、墳域を決定する目的を有する。墳丘北側および南側は溝を有さず、地山整形時に斜面の傾斜度合に変化を持たせることによって墳裾を決定している。なお、地山整形時における墳頂部テラスは旧表を残しており、この面から墓壙を掘り込み、木棺を埋置した後に0.5m以上の盛り土をしている。

内部主体 (Fig.67)

主体はほぼ東西方向（丘陵尾根線と並行）に長軸をおく木棺で、床面に小円礫を敷きつめてある。木棺を納める墓壙は墳丘のほぼ中央にあり、長さ3.1m、幅1.5m、深さ0.5~0.6mの不整隅丸長方形を呈し、旧地表面から切り込まれている。墓壙は二段掘りの形式のものではなく、墓壙底面に木棺を構築する為に幅10cm弱の溝を掘り、木棺を組み立てた後に、墓壙を掘った際の土で裏込めを行なっている。木棺は長側板が小口板をはさむ形式のもので、その規模は内法で長さ2.3m、幅35cm~28cm、高さは礫床面から30~20cmである。礫は墓壙底直上から敷



かれており、その厚みは10cm前後である。礫床は東側が幅広く、レベルも10cm程高いので頭位は東側であった可能性が強い。また、遺体埋葬を終えて閉棺後に蓋の縁に沿って黄色粘土でいねいに目張りをしている。その粘土は厚い所で15cmに及ぶ。粘土の目張りの状態から見て、蓋は一枚板であったと考えられる。粘土で目張りをした後、墓壇内の空間は一挙に墓壇掘削時の土で埋めもどされている。

なお、副葬品は一点も検出していない。

(児玉真一)

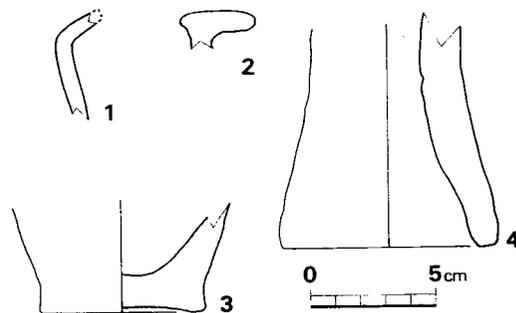


Fig. 68 原口B 1号墳墳丘内出土弥生式土器実測図 (1/3)

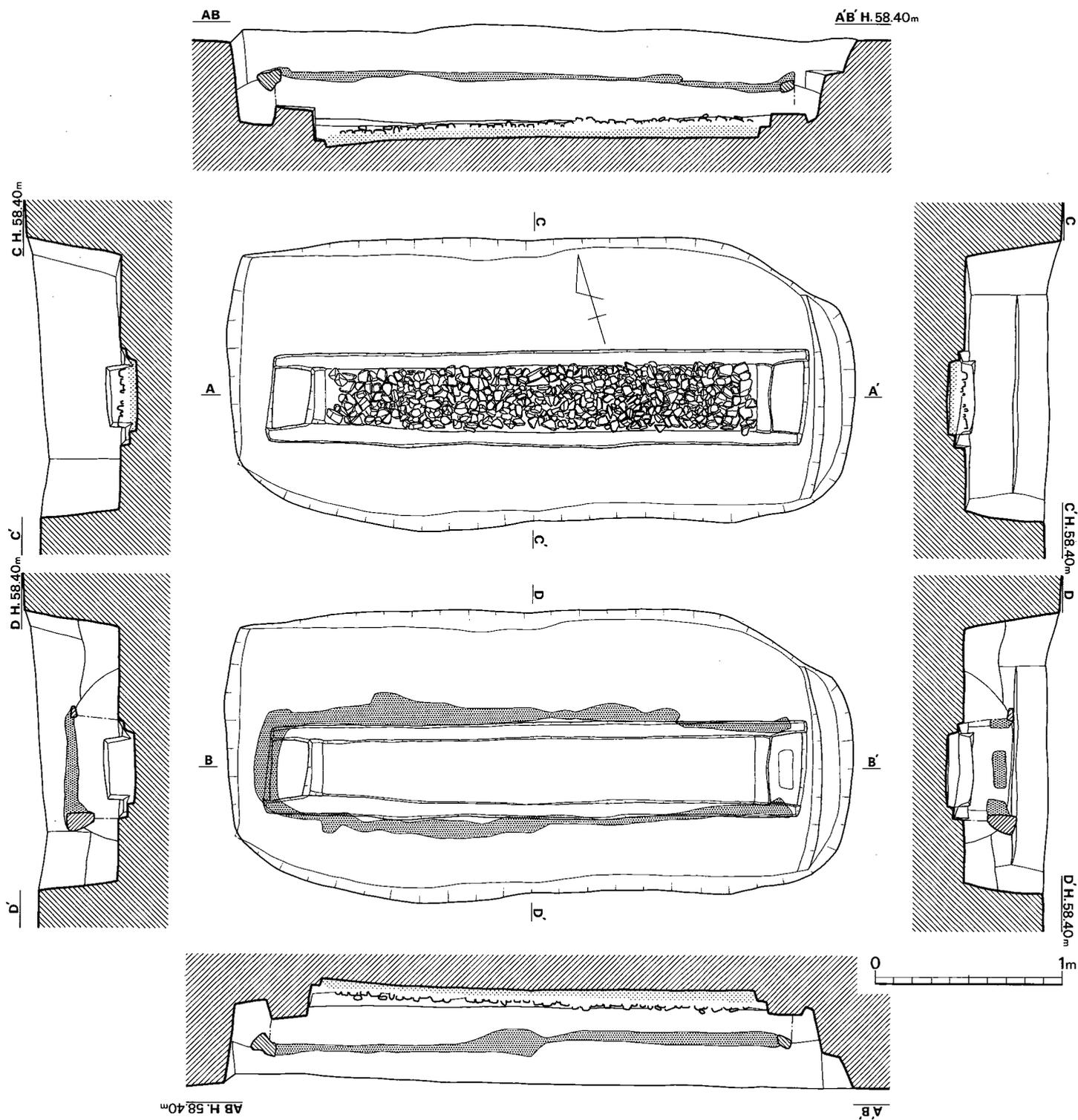


Fig. 67 原口 B 1 号墳主体部実測図 (縮尺 1/30)



1. 原口B1号墳遠景（北から）



2. 原口B1号墳遠景（西から）



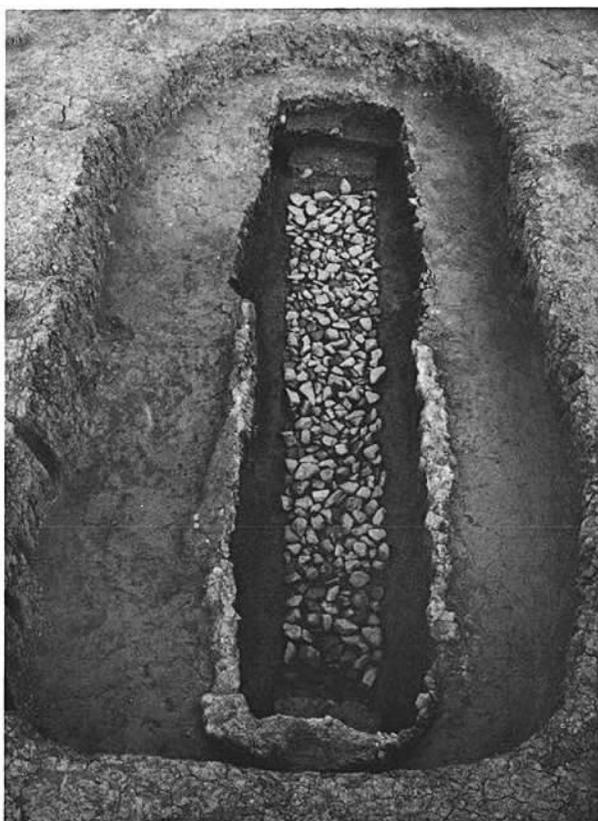
1. 原口B1号墳全景航空写真（上方は古賀I.C.）



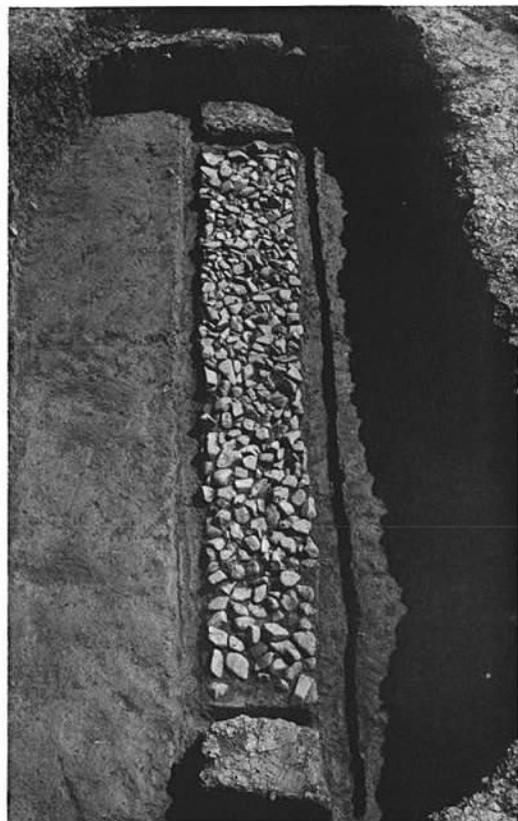
2. 原口B1号墳墳丘全景航空写真



1. 原口B1号墳全景



2. 原口B1号墳主体部



3. 原口B1号墳主体部（粘土除去後）



1. 原口B1号
墳北側果樹園
造成工事



2. 同上
破壊された石
棺残欠



3. 同上
赤く塗られた
割石残欠

Ⅲ 各遺跡の調査

6 水上遺跡

Ⅲ—6 水上遺跡

1 調査の経過

県道薬王寺—古賀線が温泉場として知られる薬王寺に向かう途中で、犬鳴山系から東西に延びる舌状台地を横断する。この県道を挟んで南北の台地上が、先に古賀地区第8地点として掲げられた水上遺跡である (Fig.69)。昭和49年6月4日より9月11日まで延べ60日間の調査を行ない、総面積 2,831 m^2 を精査した。その結果縄文時代の遺物と破壊削平された円墳、及び不明土壙等を検出した。調査前には遺跡としての地形は極めて良好に観察されたが、蜜柑畑等の攪乱により残存状況は極めて悪かった。本調査前の経緯に関しては前項で詳述してあるのでここでは省略する。

当該散布地を道路や畦等の現状に従ってA～Eの5地区に細分した (Fig.69) 各地区の調査要点のみを記すと次の通りである。

A地区 B地区から延びる溝状遺構を除いて他明確なものなし。

B地区 A地区に延びる溝状遺構と土壙1基を除いて、他に明確な遺構なし。

C地区 遺構なし

D地区 遺構はないが、縄文式土器出土

E地区 封土を全く失なった円墳 (横穴式石室) 1基及び土壙5基を検出

以下各地区毎に調査成果を詳述したい。

2 A地区の調査 (Fig.70)

遺跡の最東北端の県道の北側域で、B地区と連続する。652.6 m^2 を調査し、不整形落込群と溝状遺構を検出した。

溝状遺構

発掘区の南端にB地区から続く溝状遺構が検出された。最大巾 1.6 m 、深さ 20～35 cm を測り、底面レベルは東から西へ傾斜し、小礫・荒砂などがみられ流水があったと考えられる。現在の五穀神池の谷方向へ下っているようである。遺物は検出されない。

不整形落込群

中央付近から北端へかけて、不整形プランをした落込みが大小20ほどみられる。遺構と確認できるものは皆無で、遺物も全くみられない。以上のA地区において、表土中より打製石鏃5

個、スクレーパー状石器2個 (Fig. 一1~5・7・8) が出土している。D地区の縄文式土器の項の後でまとめて図示し、説明を加えたい。

3 B地区の調査 (Fig.70・71)

A地区に南接して県道に挟まれる区域である。A地区から続く溝状遺構を追い、477m²を調査した。この他に楕円形土壌1、小ピット5個を検出した。

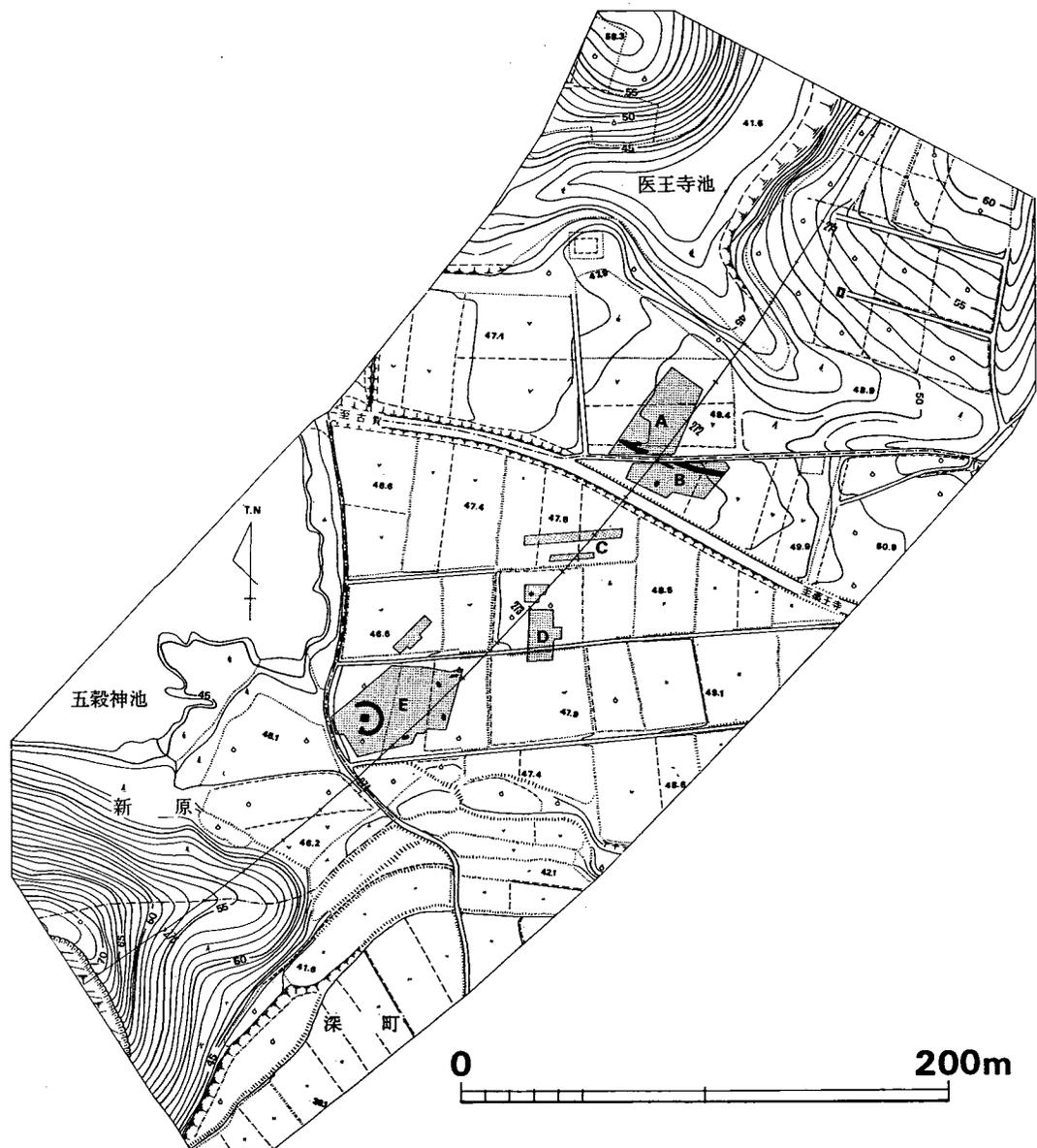


Fig. 69 水上遺跡周辺地形図 (1/3,000)

溝状遺構

発掘区の北東縁にみられ、A地区から延びると推定されるものとその枝部がみられる。いずれも同一溝となろう。最大幅 2.2m、深さ15~30cmを測り、その底面に径10~数cmの小転石が

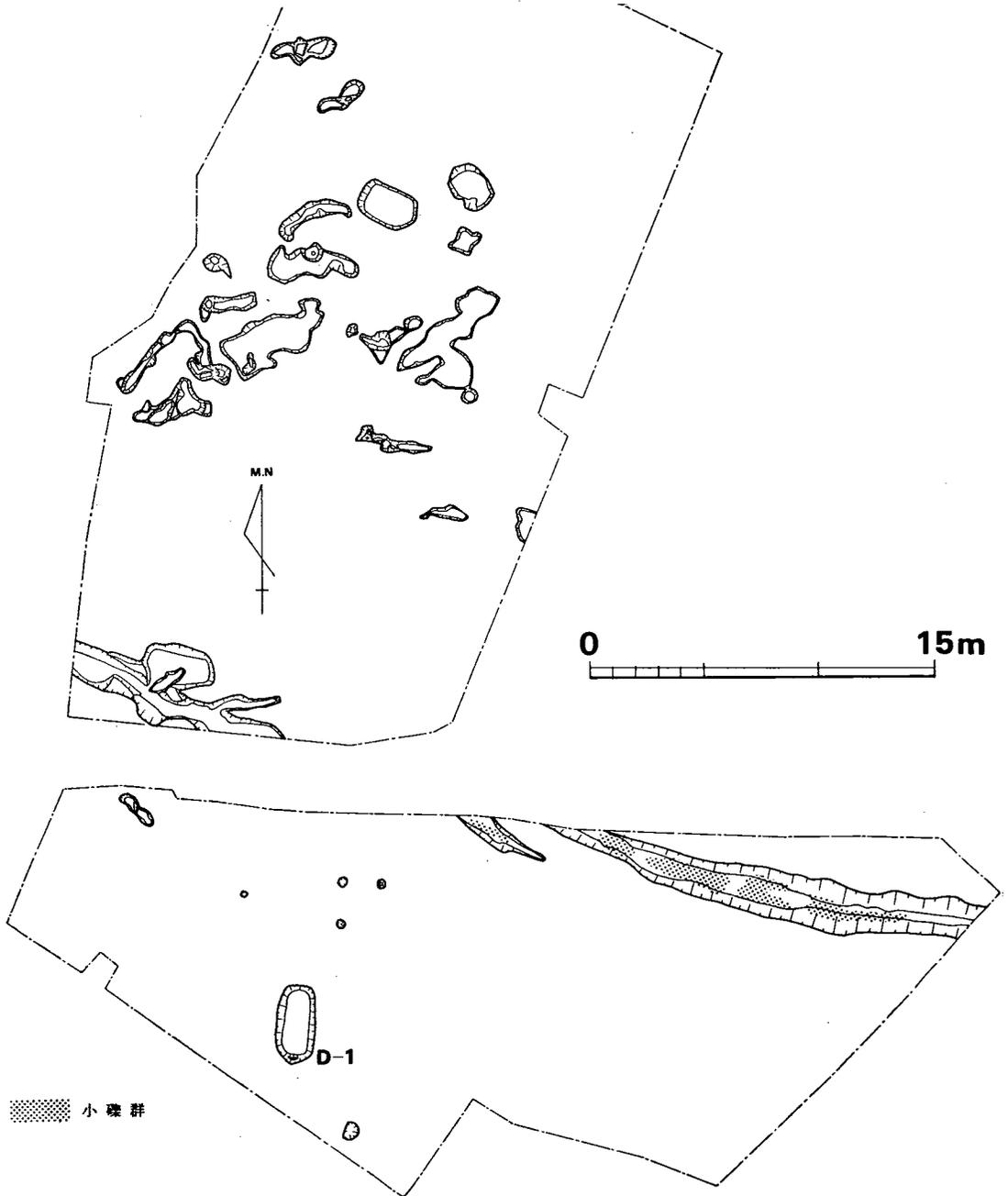


Fig. 70 水上A・B区遺構全体図 (1/300)

ほぼ全面にみられる。長さはA地区から40mに及び、略直線的に西流する。小転石群中より、須恵器小片1片をとり上げたが、磨滅著しく時代を判別し難い。この溝は、現在の畦方向ともずれており、たとえ当初人工の手が加わったものとしても、支流を作るなど雨期の自然流水路の色彩が強いことは否めない。

土壌 (Fig.71)

舟形プランをなし、主軸をN6°Eにとり、3.33×1.60m、深さ0.32mを測る。下底平面形はほぼ長方形をなし2.83×1.0mを測り、土壌墓としての可能性もある。出土遺物は全くみられない。

4 C地区の調査

県道の西南側に長さ40mと8mのトレンチ2本面積165.5m²を入れた。その結果、表土直下10~30cmで地山が平坦にみられ、遺構、遺物等全く検出されなかった。

5 D地区の調査

C地区の南隣に一段高く蜜柑畑があり、これをD地区として、348m²の調査を行なった。表土中よりわずかに縄文式土器片が出土しており、掘り下げたが、果樹園造営時の攪乱が著しく、厚く攪乱土層が認められた。遺構としては、縄文式土器片が上部にみられた土壌1が検出されたのみであった。

土壌 (Fig.71)

上層20~30cmを攪乱層で覆われた不整形土壌が検出された。2×1.5m、深さ0.5mを測り、地山上面に小礫14個が散乱し、その上部の攪乱土中から縄文式土器のかなりが出土した。よって縄文式土器がこの土壌に伴うものであると決定できる類ではない。(中間研志)

遺物 (Fig.72・73,)

縄文時代後期後半を中心とする土器片若干である。これらは精製土器と粗製土器とに大別される。精製土器浅鉢は口縁部の特徴により3類に分け、深鉢は2類に、粗製土器は2類に分けた。以下各分類に従って述べる。

(1) 精製土器

浅鉢 (Fig.72—1~15・9~16)

A類 (1・2・10~14)

A類は、頸部がほぼ直線的に開き、口縁部でやや内側に屈曲する。口縁部は少し肥厚し、外面に2条の沈線を施す。沈線の途中には、上下2個の指による横長の楕円形押圧文がみられる。内外ともに丁寧に横位の研磨が施されている。

胴部への屈曲部は、外面に2条の沈線を施し、その途中には、口縁部同様の押圧文がみられる。さらに下位押圧文から下方へ押えによる沈線が伸びる。10は唯一、屈曲部径が推定できる

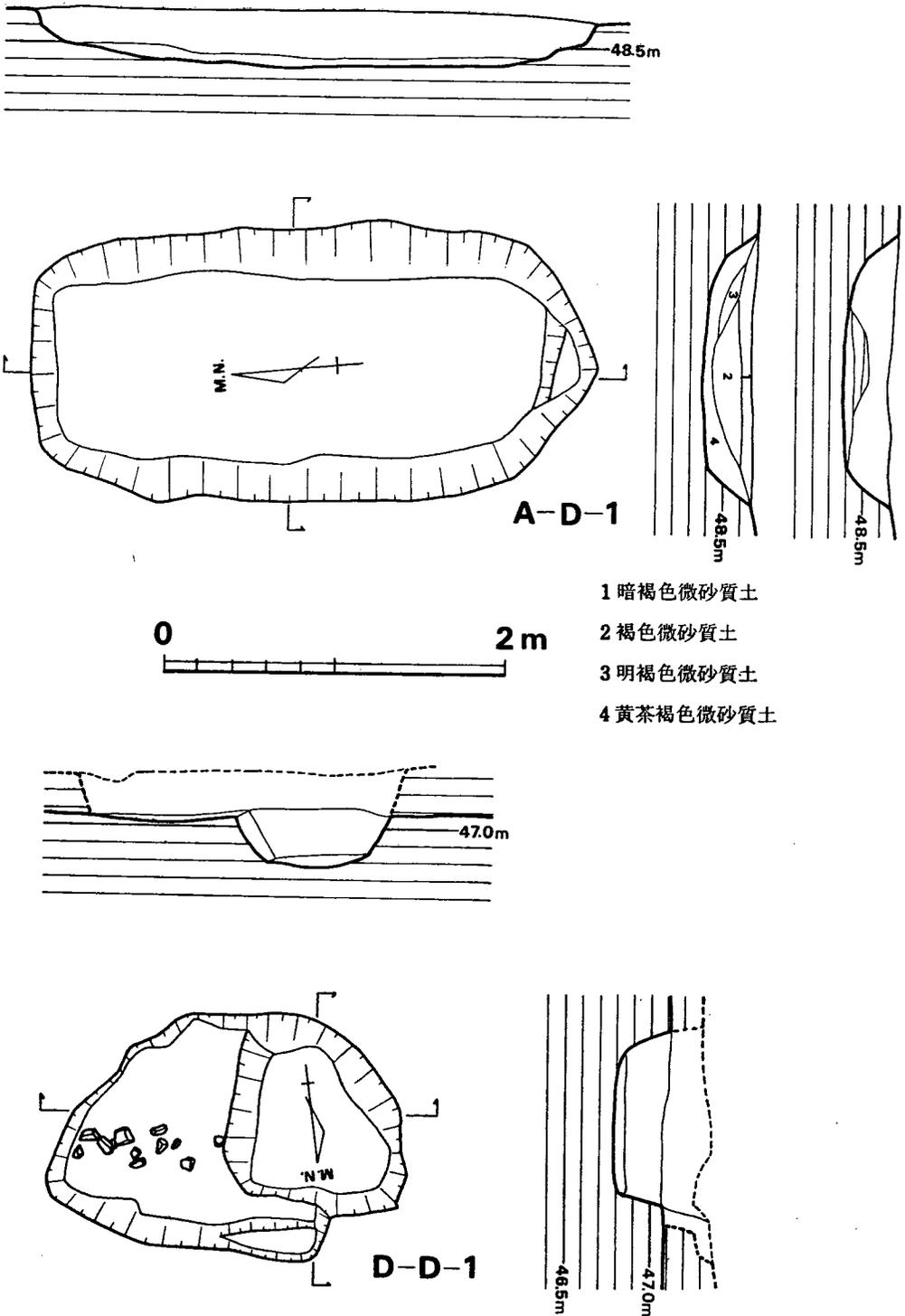


Fig. 71 水上遺跡B区第1号土壙・DE第1号土壙実測図 (1/40)

もので、31.0cmを測る。内・外面は丁寧に横位の研磨を施し、胎土には細砂粒をかなり含み、焼成良好で茶褐色乃至暗褐色を呈する。

B類 (3)

A類と同様に2条の沈線を施すが、口縁部断面が三角形に肥厚するもので、内面は直線的に伸びる類である。胎土に細砂粒かなり含み、焼成良好、暗褐色乃至黒褐色を呈する。

C類 (4・5・9・15・16)

口縁部は内側への明確な屈曲を示し、先端へ細くなるのを特徴とする。口縁外面には2～3

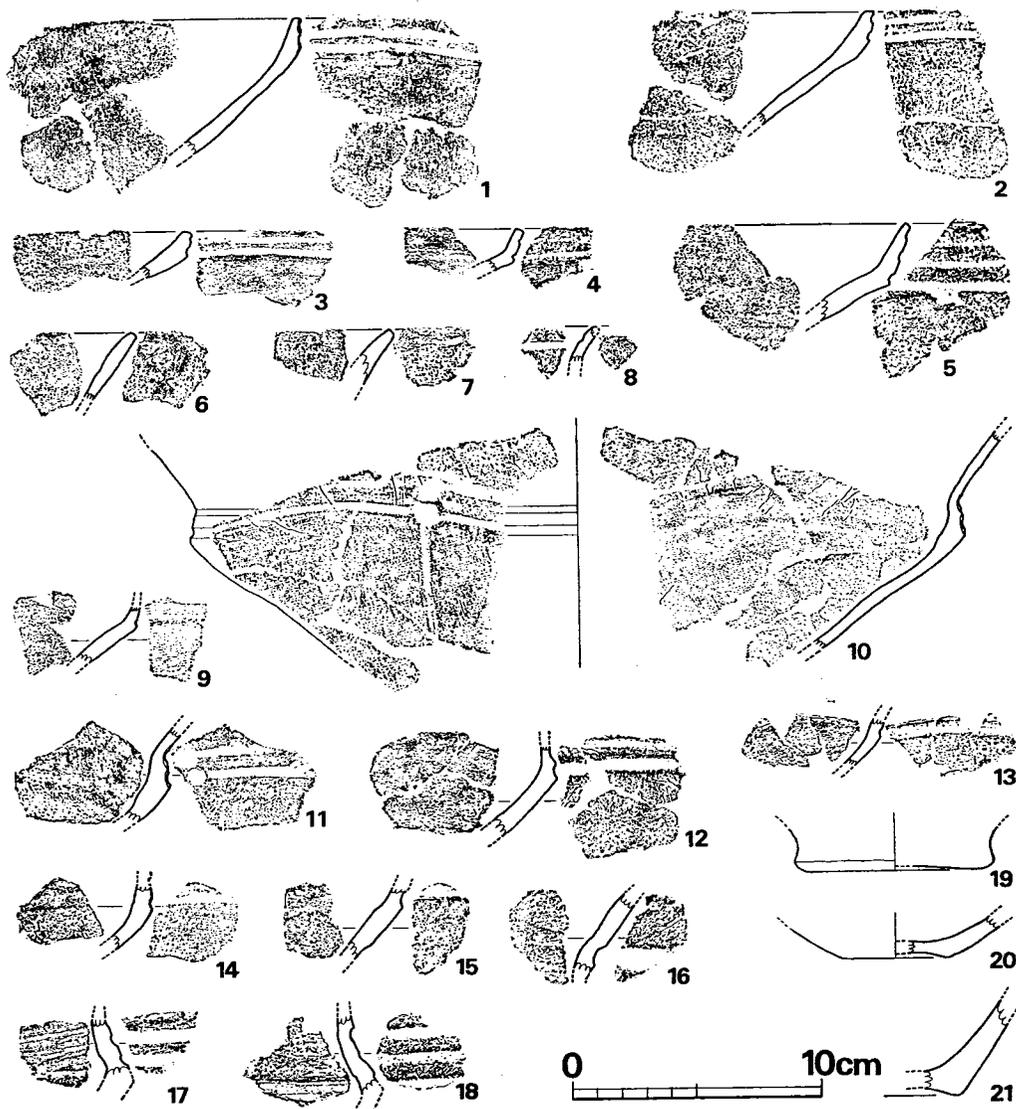


Fig.72 水上D区出土縄文式土器拓影1 (1/3)

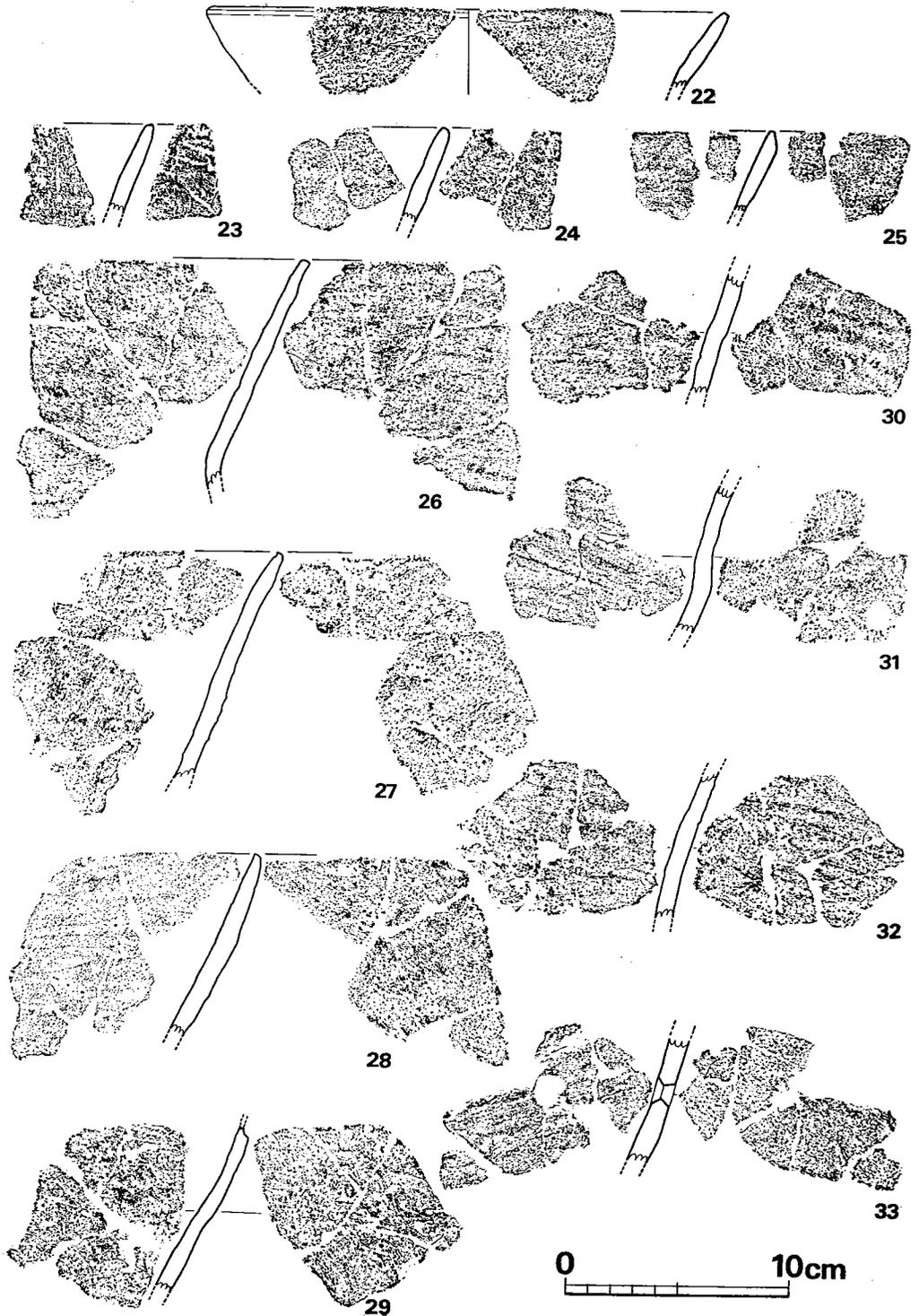


Fig.73 水上遺跡D区出土繩文式土器拓影 2 (1/3)

条の沈線が施される。この口縁部の屈曲部と推定されるものは15・16がある。屈曲部外面には太い1(+ α)条の沈線をめぐらす。内・外面は、横位の研磨を施し、胎土に細砂粒をいくらか含む。焼成良好で、赤褐色乃至茶褐色を呈す。

深鉢 (Fig.72—6～8, 17・18)

A類 (6～8)

口縁部が外反し、内面に1条の沈線を施すもの(8)や、素文のもの(6・6)である。薄手で小型の深鉢となるものと思われる。内・外面には横位の研磨を施す。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成は良好で、暗褐色(6・7)及び茶色(8)を呈す。

B類 (17・18)

口縁下で強く屈曲し、内傾して立ち上がる口縁部を有する。外面に3条の比較的太い沈線をめぐらす。内面を粗く横位に磨いているため、一見すると条痕風にみえる点はA類と異なる。大型の胴部で屈曲して稜をつくる器形となろう。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好、茶褐色を呈す。

底部片が3点出土している。いずれも精製土器であるがどの類に属するものか不明である。19は、円盤貼り付け状で径8.0cmを測る。わずかに上げ底をなす。浅鉢の底部となろう。胎土に粗砂をかなり含み、焼成良好、外面は明茶色を呈する。20は、底径4.3cmを測り、器壁の薄いわずかな上げ底となる。小型の深鉢と推定され、深鉢A類につくものか。内外面ともに丁寧に研磨される。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で、暗茶褐色を呈す。21は、器壁やや厚く、上げ底となる。深鉢B類の底部になるものであろうか。外面は、粗いへら磨きを施す。胎土に粗砂少量、細砂多量に含み、焼成良好。淡茶褐色を呈す。

(2) 粗製土器

A類 (Fig.73—23～25・27)

口唇部上面に明確な平坦面を持たないものである。胴部では31のような屈曲をもつ深鉢となろう。23は、口縁外面に粗い3条の沈線様の施文が見られる。内外面には、横の研磨を施すが、精製土器ほど丁寧ではない。胎土にやや粗い砂粒を含むが、焼成良好。暗褐色を呈す。褐色のもの(23)もある。

B類 (Fig.73—22・26・28)

口唇部上面に明確な平坦面をもつものである。26は直線的に長く伸びる口縁を有し、軽く「く」の字状に曲がりあまり張らない胴部へと続く器形をなす。22は、復元口径23.2cmを測り、やや小型の深鉢となろう。28の内面には粗い研磨痕が明瞭である。いずれにも表面に凹凸が見られる。胎土に粗砂をかなり含むが、焼成は良好。暗茶褐色を呈す。

以上の他に、胴部破片等について説明を加えたい。33は、胴部の破片で、焼成後に両面穿孔されており、補修孔かとも思われる。32は、頸部下半の破片である。胎土には粗砂を多量に含

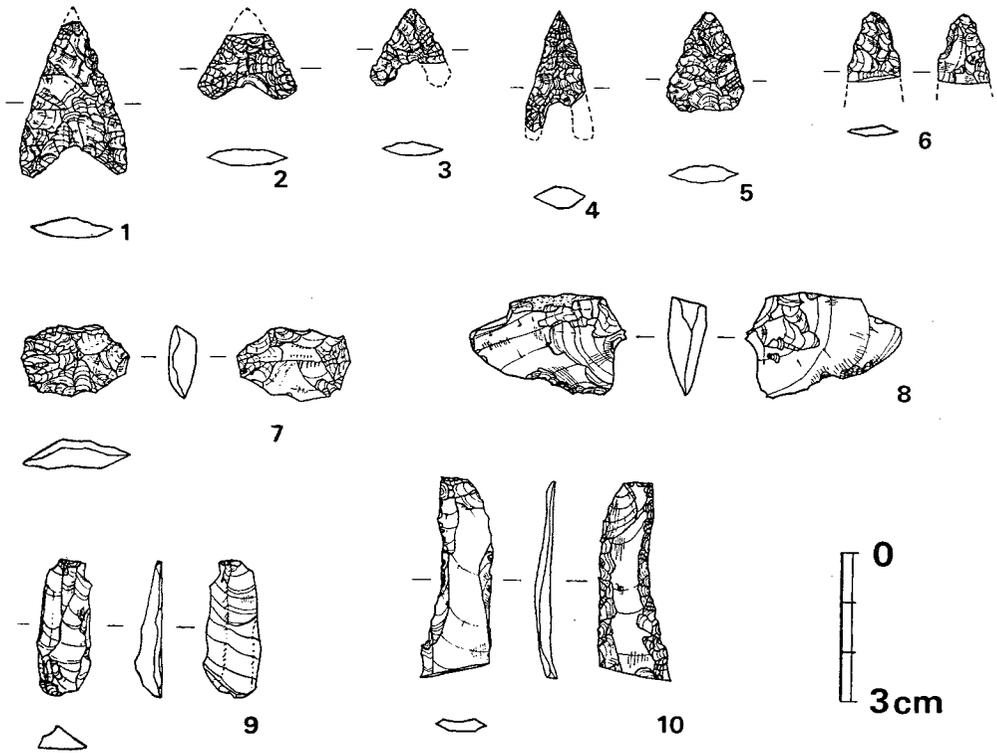


Fig.74 水上遺跡出土石器実測図 (2/3)

み、焼成良好、暗赤褐色乃至茶褐色を呈する。

(平島勇夫・中間研志)

打製石器 (Fig.74)

A地点表土中より1~5の石鏃、7・8のスクレーパー状石器が出土し、D地点縄文式土器包含層より9・10の石刃、E地点表土より6の石鏃様石器が各々出土している。

1は、漆黒色の気泡多く含む黒曜石製で、長さ3.45cm、幅2.2cmを測る。表面片側にはいくらか大まかな剝離をみせるが、他部裏面はより丁寧な細かい調整が施される。大型の類である。

2は、漆黒色を呈し小さい気泡がいくらかみられる黒曜石製である。復元長1.8cm、幅2.0cmを測る。表裏とともに丁寧な調整を施す。

3は、縞の入る灰黒色良質の黒曜石製で、長さ1.6cm幅1.6cmを測り、抉りの深い小型品である。自然面をごく一部分に残すが、他は表裏ともに細かい加工を行う。

4は、黒色良質の黒曜石製で、復元長さ2.6cm、幅1.4cmを測り、抉りの深い長狭な類である。断面が菱形に近い厚さを有し、丁寧な剝離を行なっている。

5は、黒色良質の黒曜石製で、長さ2.0cm、幅1.55cmを測る。表裏ともに丁寧な調整を行なうが、基部は表面の一打の剝離のみで、裏面基部には意図的抉り加工はみられない。

6は、全体に半透明の良質な黒曜石製で現存長1.4cm、幅1.05cmを測る。裏面に原剝離面を

残り、表面も大まかな剝離のまま薄手であり、剝片石器（鏃）の類になろう。

7は、漆黒色良質の黒曜石製である。裏面に原剝離面を残し、表面左・下縁辺に細加工を施すスクレーパー状石器である。

8は、黒色のいくらか気泡を含む黒曜石製で、上面に自然面を残し、縁辺に刃こぼれがみられ、スクレーパー様用途に供されたものであろう。

9は、漆黒色良質の黒曜石製ブレイドである。上端に自然面を残し長さ2.8cm、幅1.1cmの完結するものである。

10は、黒色良質の黒曜石製サイドブレイドで、両側辺に微細な加工を施し、下半は縁辺剝離状況より途中で欠損したものである。

6 E地区の調査

E地区は、五穀神池の東側の谷頭上方の低丘陵鞍部に位置する。ブルドーザーにて表土をはいだ際、表面にて須恵器片・管玉等を採集して、古墳時代遺構の存在が予測された。1,188㎡を調査し、円墳1、土墳5、溝状遺構1等を検出した。

E地区1号墳

墳丘を全く削平された単室横穴式石室の円墳である。周溝が外径15m、内径で11.5mの環状に廻り、西側で外縁周がとぎれる。深さ5～40cmを測り、底面は東側が高く、総じて西側へ低く傾斜する。この周溝埋土中より若干の土器類が出土しており、遺物の項で詳述する。

石室 (Fig.76)

環状の周溝の中心よりやや西寄りに認められ、敷石と腰石抜き跡のみが検出された。主軸をN70.5°Wにとり、床面は、奥行き2.55m、幅2.1mの規模が復元される。やや胴張りを呈することも考えられる。腰石抜き跡は、長3.3m、幅2.9mの掘り方沿いに全面にみられるが、腰石の数・位置が明確にされる状況ではない。側壁側に3～4個のやや小ぶりの腰石を用いたものかと推定される。西側の推定玄門部周辺も攪乱され、袖石・羨道等の状況も全く不明である。全体として、やや小型の方形に近い玄室に両袖式の単室横穴式石室であろうかと想定される。床面には、5～10cm大の小転礫がみられ、各所で抜かれているが、全面に敷かれていたものであろう。

遺物としては、西北隅(玄門側左隅)にガラス玉類が、中央寄り南壁(右壁)寄りに鉄鏃類、東南隅(奥壁際右壁)寄りにガラス玉類・管玉類が検出される。これらの遺物がほぼ原位置を保つものであるならば、東西に差違い状に葬置したもののか、とも考えられる。(中間研志)

遺物

須恵器 (Fig.77—1～7)

総てE地区1号墳周溝埋土より出土のものである。

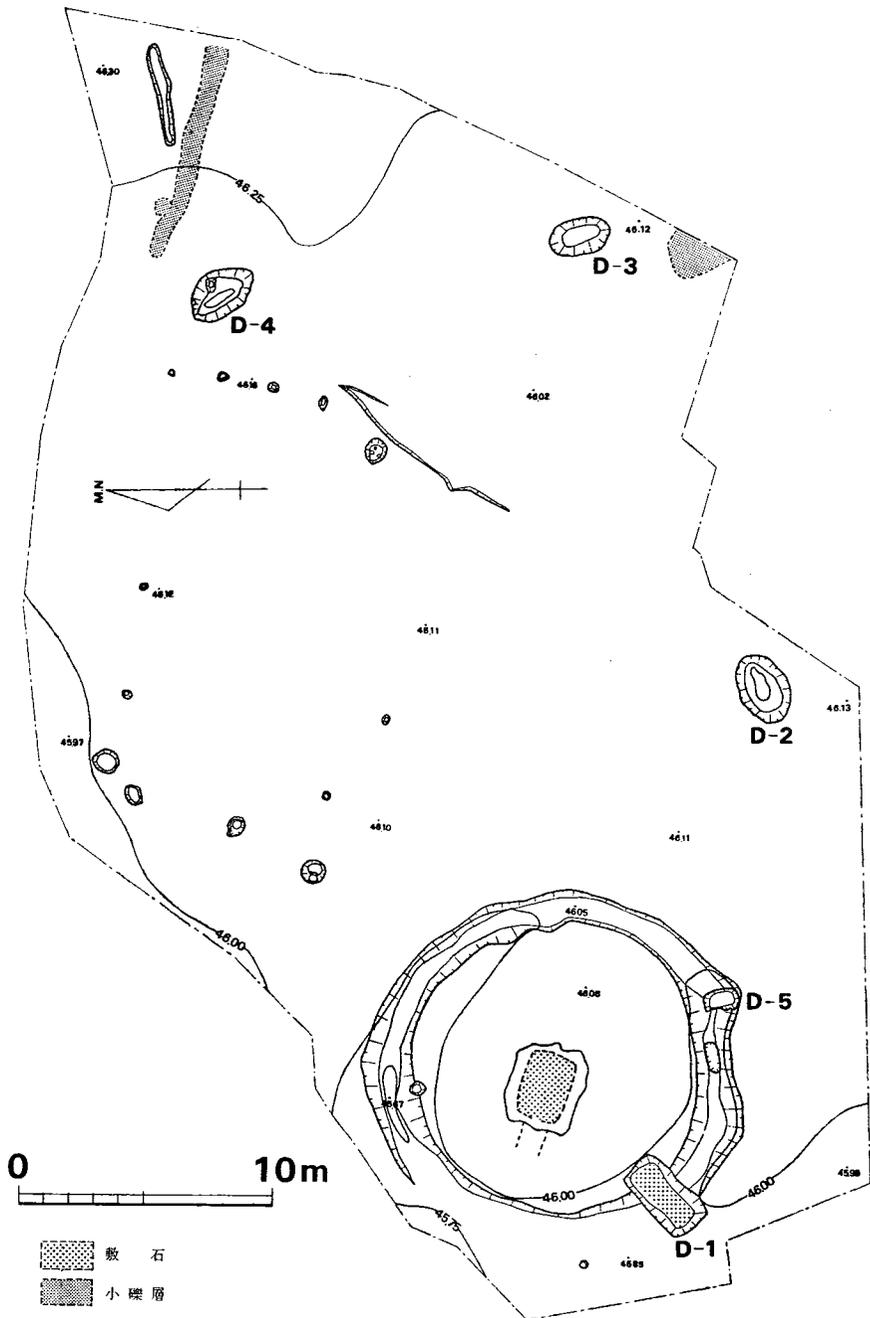


Fig.75 水上遺跡E区遺構全体図 (1/300)

杯身(1)

復元最大径13.4cmを計り,器高は5cmほどと思われる。体部外面の2/3以上はロクロの回転が停止した後左廻りヘラ削りを施す。立ち上がりから内面にかけては回転ナデ技法を行なう。立

ち上がりは垂直に近く古式の様相を示す。色調は青灰色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土には粗砂粒少量細砂粒かなり含む。約1/3現存。

短頸壺 (2・3)

2は、口径6.8cm、器高8.15cmで、最大径は底部より4.1cmの所で12.4cmを測る。口縁部は、高さ約1.7cmで途中がふくらみ端部には狭い平坦面をつくる。胴部はやや肩の張る扁平な球形で、安定した底部へと続く。しかし胴部と底部との境は明確でない。底部付近は回転ヘラ削りを施し、その方向は右廻りである。他部分の調整はすべて横ナデ。焼成は良好。表面は青灰色を呈するが、断面の観察では茶褐色を示す。胎土に小砂粗を少量含む。底部に一直線の「ヘラ記号」を持つ。約1/2現存。

3は、あまり肩が張らず、最大径は胴部のほぼ中央にあり、

10.45cmを測る。口縁部と底部を欠損する。底径は推定で約7cm。内・外面とも横ナデを施す。色調は青灰色を呈し、外面下半は黒色。焼成良好で、小砂粒を少量含む。約1/4現存。

壺 (4)

壺の口縁部と思われる小片である。口径は7~10cmになると推定される。内・外面とも横ナデを施す。色調は青灰色を呈し、焼成良好。小砂粒を少量含む。

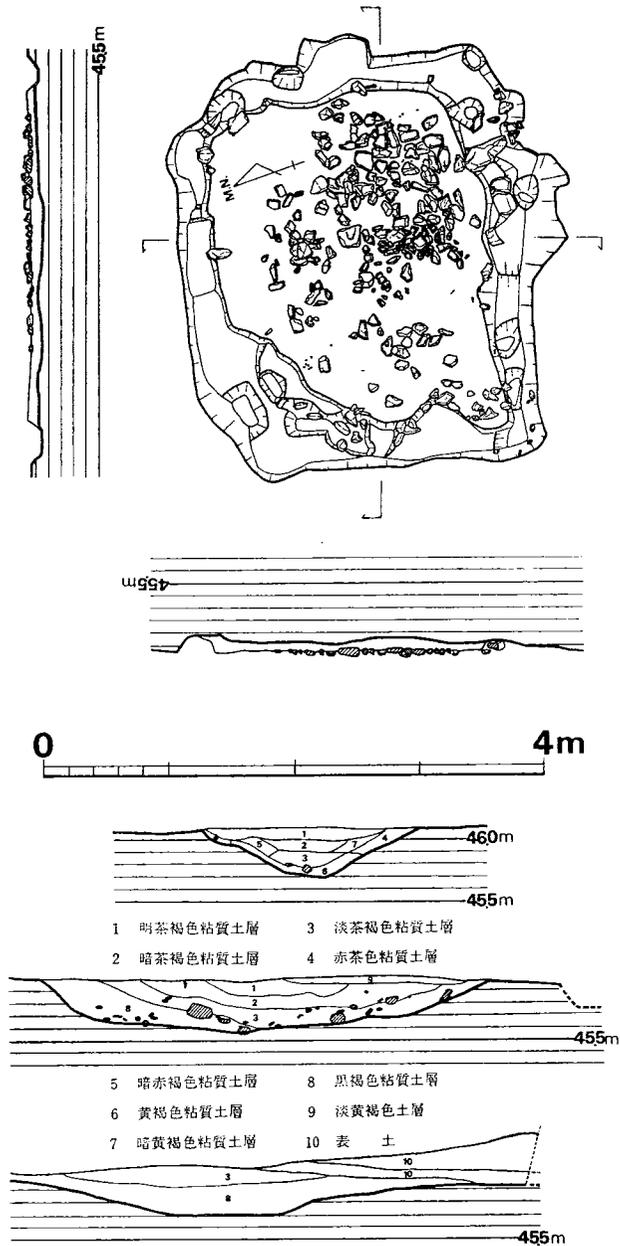


Fig.76 水上E1号墳石室及び周溝土層断面実測図 (1/60)

甕 (5)

口縁部の小片で、全面にわたって褐色の自然釉が薄く付着する。口径は12~16cmほどになると思われる。内・外面とも横ナデを施す。色調は青灰色を呈し、焼成良好。小砂粒を少量含む。

提瓶 (6・7)

6は、提瓶の口縁部と思われるもので、比較的強く外反し、先端に行く程、器壁は薄くなっている。肩部はやや内彎する。くびれ部の直径は6.2cm。外面および内面くびれ部のやや下ま

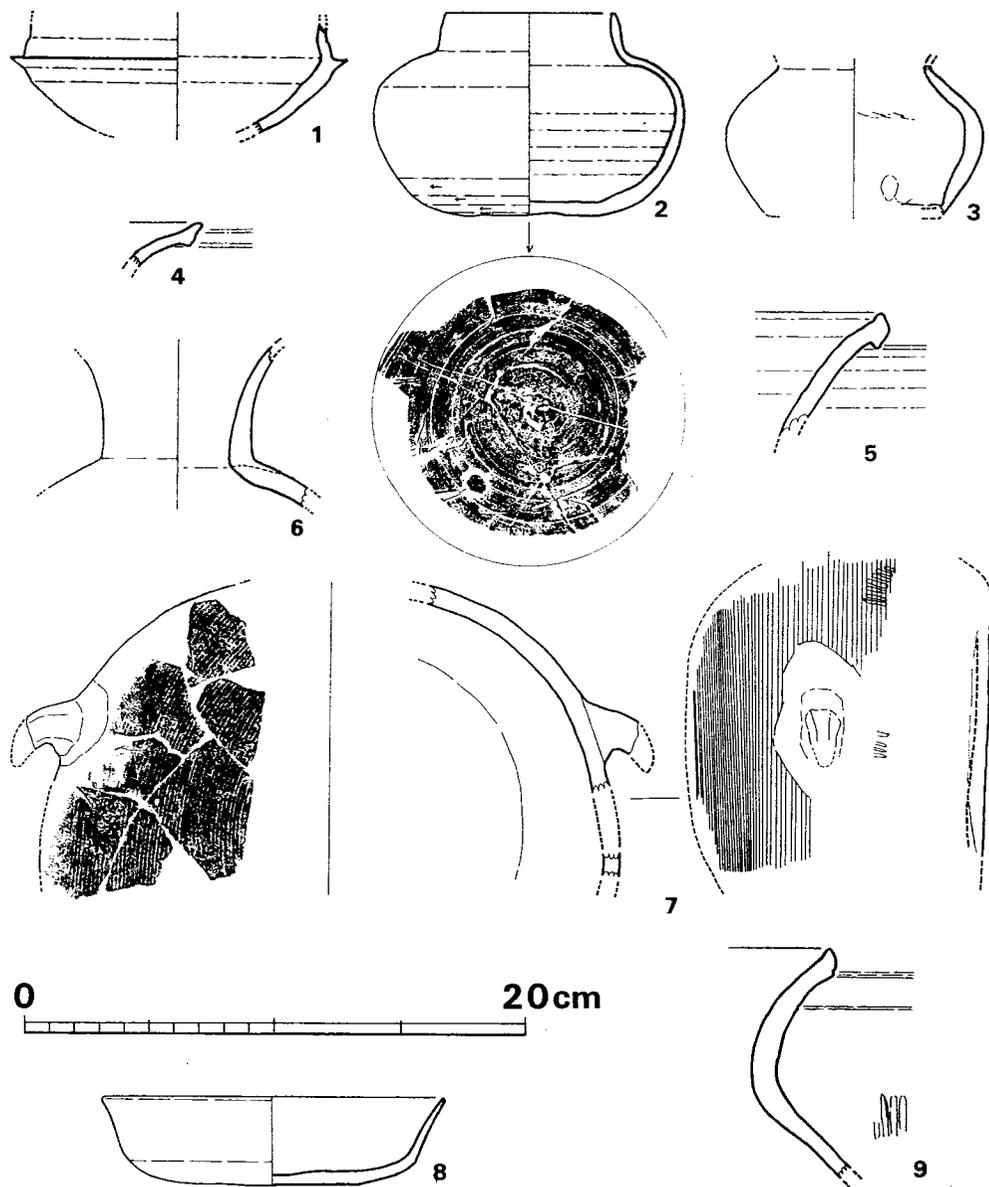


Fig. 77 水上E 1号墳出土須恵器・土師器実測図 (1/3)

では横ナデを施す。肩部内面は縦ナデの上を、一部横ナデで消されている。色調は淡青灰色を呈し、焼成はやや軟質。比較的多くの砂粒を含み、表面にかなり浮き出ている。約2/5残。平瓶或いは提瓶の頸部付近となろう。

7は、提瓶の把手付近の破片で、全体の器形ははっきりしない。胴部表面には、1.5~2mm間隔で同心円状のカキ目が見られる。背部は扁平で、ヘラ削りを施す。把手から背部にかけての間は、ヘラ削りをなで消している。また一部に条線状の叩き目が見られる。内面は縦方向の回転ナデ。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に粗砂をかなり含む。

土師器

椀(8)

口径13.8cm, 器高3.55cmを測る。器壁は比較的薄く、口縁部は外反する。底部は平坦であるが胴部との境ははっきりしない。口縁部は回転ナデを施す。外面底部は磨いているようである。色調は暗橙色を呈し、焼成良好。胎土には砂粒を少量含む。口縁部を除きほぼ完形。E地点1号墳周溝埋土中出土。

「赤焼き土器」甕(9)

口縁部の小片で、口縁部は強く外反する。口縁端部の下には細い沈線が1本確認できる。器壁の剝落が著しく、外面の一部に条線状の叩き痕がわずかに認められるほかは、はっきりしない。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は弥生式土器的な感じを与える。胎土には粗砂・石英粒などを多く含む。いわゆる「赤焼き土器」であろう。

(平島勇夫)

玉類 (Fig.78, Tab.23)

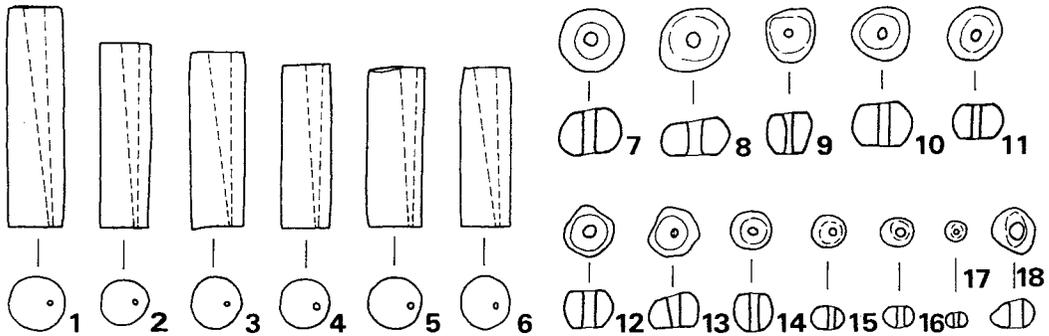


Fig.78 水上E1号墳出土玉類実測図 (1/2)

装飾品として玄室床面及び攪乱土中から碧玉製管玉6点, ガラス小玉12点が検出された。計測値等は表に示す通りである。管玉は総て縞が入り、一方向からの穿孔を行ない、小孔側では孔が中心より著しくずれる。ガラス小玉は1点のみが Light Blue を呈し、他は Dark Blue である。15~17は一段と小形品である。

Tab.23 水上E1号墳出土玉類計測一覧表 (単位cm)

番号	品名	長さ	径	厚さ	孔径	色	備考
1	碧玉製管玉	2.84	0.69		0.08~0.33	Dark Green	一方向からの穿孔
2	〃	2.40	0.62		0.08~0.36	〃	〃
3	〃	2.28	0.65		0.09~0.30	〃	〃
4	〃	2.11	0.60		0.08~0.31	〃	〃
5	〃	2.02	0.68		0.09~0.22	〃	〃
6	〃	2.05	0.62		0.09~0.32	〃	〃
7	ガラス製小玉		0.80	0.55	0.19~0.21	Dark Blue	上下に平坦面をつくる
8	〃		0.90~0.70	0.37	0.20~0.33	〃	かなり歪つ
9	〃		0.65	0.51~0.45	0.19~0.22	やや Light Blue 気味	上下に平坦面をつくるやや歪つ
10	〃		0.70~0.62	0.53	0.12~0.15	Dark Blue	上下に平坦面をつくる
11	〃		0.65	0.42	0.15~0.17	〃	〃
12	〃		0.62~0.55	0.49	0.25~0.20	〃	〃
13	〃		0.60	0.44~0.35	0.15~0.20	〃	〃
14	〃		0.52	0.40	0.20~0.18	〃	
15	〃		0.40	0.25~0.20	0.12	〃	
16	〃		0.42~0.39	0.22~0.25	0.12~0.10	〃	上下に平坦面をつくる
17	〃		0.32	0.18	0.09~0.11	〃	〃
18	〃		0.50~0.55	0.27~0.3	0.25~0.20	Light Blue	かなり歪む

鉄鏃 (Fig.79)

1号墳敷石間よりの出土品である。主に右側壁中央寄りに集中する。ただ、原位置を示すも

のは殆んど無く攪乱されている。総個体数も鋒の先端のみで15本以上で確定数ではない。銹着の状態等を見ると主に鋒先を4本以上揃えて束状に重ねたもの(13~16)が多く、また斜めに交叉したもの(6・7)もあり、数10本を壁際に幾つかの束状に副葬したことが推定される。

銹形態としては、片丸造尖根両関鑿箭式が殆んどである。残りの良い1の状況からみると、身部長2.7cm、幅1.2cm、箆被長8.4cm、で基部が欠損するが、全長17.5cm前後になると思われる。身部の長さで2類に大別できる。身長2.7~2.5cmのもの(1・3・6・11・12)と、やや小型で1.5~2.0cmのもの(2・4・8・10・13~15・24)の2種がある。

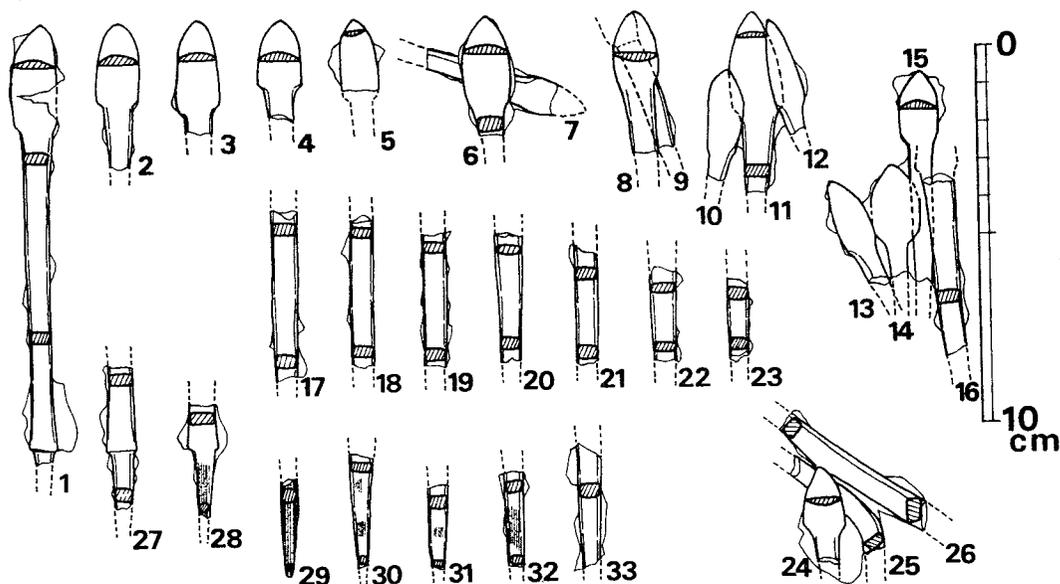


Fig.79 水上E 1号墳出土鉄鏃実測図 (1/2)

土壌群

第1号土壌 (Fig.80-D 1)

1号墳周溝の南側でこれを切り、掘り込まれている。主軸をN47° Eにとり、3.4×1.7m、深さ0.3mを測り略長方形プランを呈する。埋土下半~底床面にかけて極小礫と10~20cm大の転礫とが敷かれる。礫群中より須恵器・土師器細片が各々数片検出されたが、図示出来るものはない。土壌墓としての可能性も強いが、時期としては古墳時代後期以降というに留める。

第2号土壌 (Fig.80-D 2)

1号墳東南15mの位置にあり、2.75×1.95m、深さ0.45mを測る。主軸をN64° Eにとり、楕円形プランの断面皿状の形態を呈する。底面に浅い径20cmの小ピットがあり、床面より5~15cm浮いて大小の礫10個が検出された。出土遺物は皆無で、形態等からもその性格・時期等を推定することは困難である。

第3号土壌 (Fig.81-D 3)

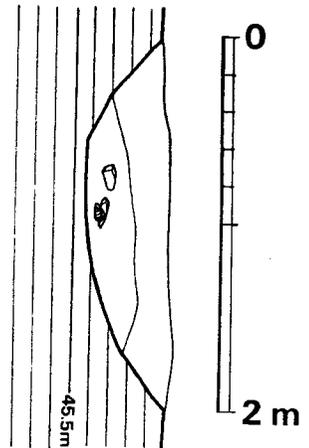
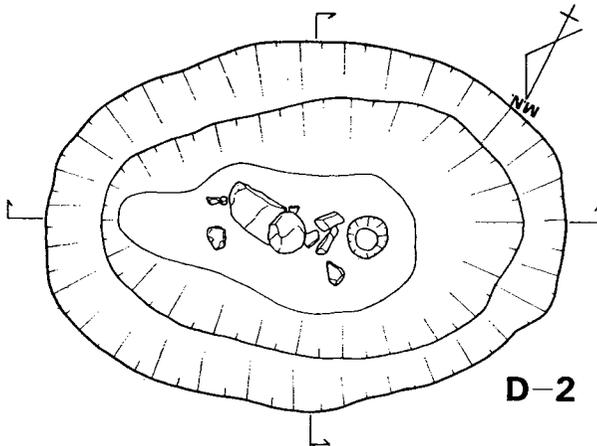
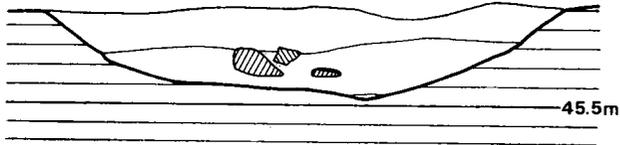
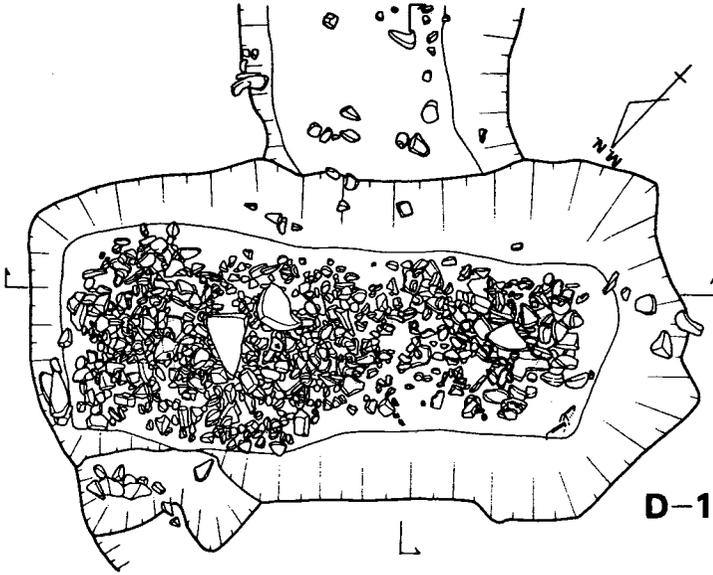


Fig.80 水上E区第1・2号土壌実測図 (1/40)

Ⅲ 各遺跡の調査

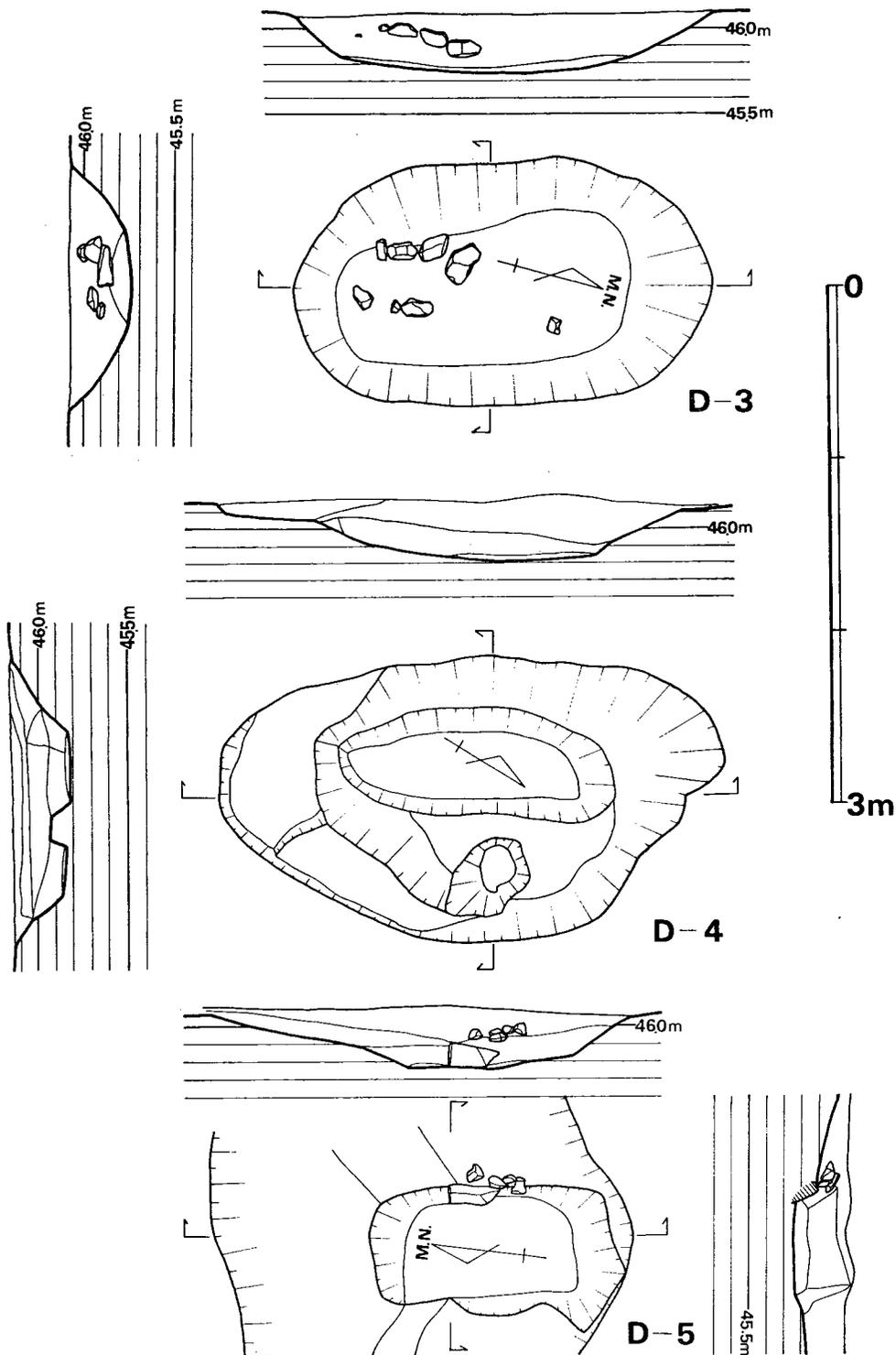


Fig.81 水上E地区第3・4・5号土坑実測図 (1/40)

1号墳から東へ33mに位置し、 $2.42 \times 1.4m$ 、深さ0.4mを測る。主軸をN15°Wにとり、舟形気味の楕円形プランを呈する。浅い皿状の形態で、床面から10~20cm浮いて大小の角礫8個が検出された。出土遺物は皆無で、時期・性格等不明である。

第4号土壙 (Fig.81-D 4)

1号墳の北東33mの位置にあり、 $2.9 \times 1.65m$ 、深さ0.5mを測る。主軸をN58°Wにとり、不整楕円形プランをなし、底部は $1.35 \times 0.4m$ と狭い。東壁寄りに浅い小ピットがあり、出土遺物はみられない。その性格・時期は全く不明である。

第5号土壙 (Fig.81-D 5)

1号墳の南南東側の周溝を切って造営される。 $1.5 \times 0.75m$ 深さ0.3mの略長方形プランを呈する。主軸をN7°Wにとり、底面は、 $1.0 \times 0.55m$ を測る小規模な土壙である。遺物等は全くみられず、土壙墓とも推定されるが、時期としては第1号土壙と同様に古墳時代後期以降とい

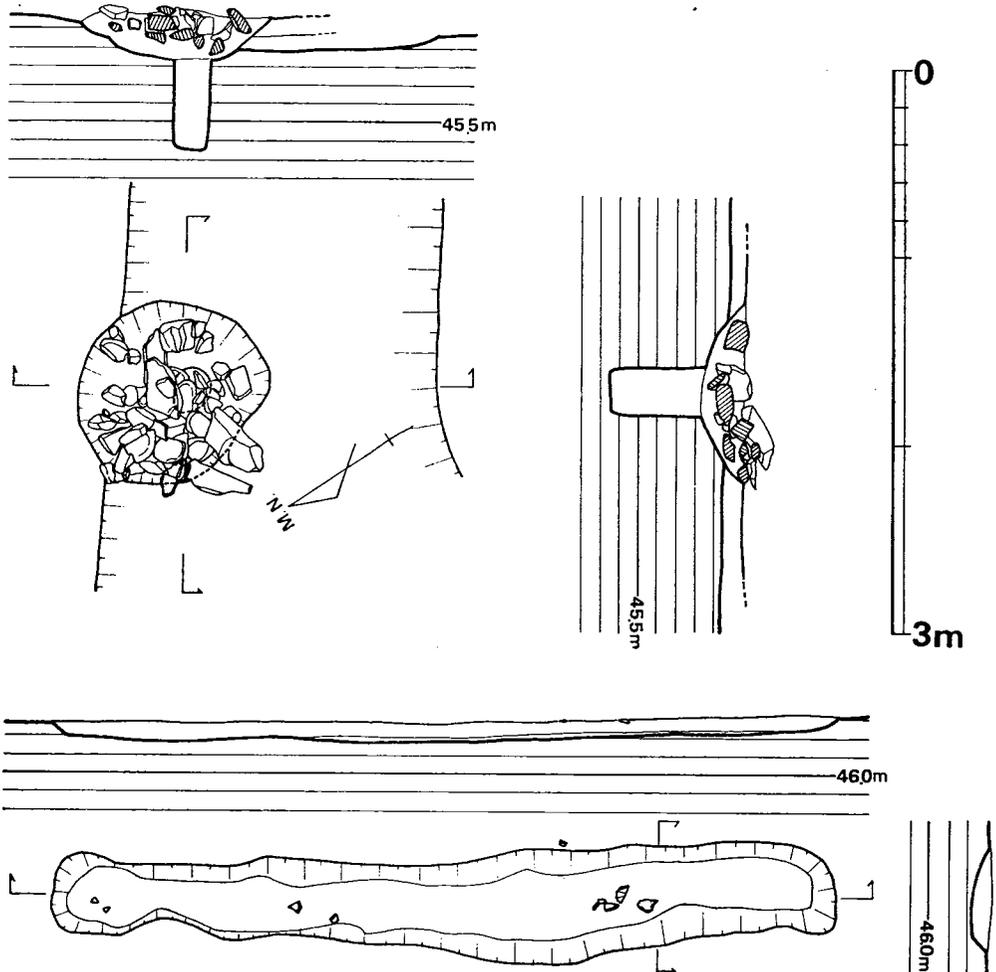


Fig.82 水上遺跡E地区掘立柱および溝状遺構実測図 (1/40)

うに留める。

掘立柱 (Fig.82-1)

1号墳周溝の北側に位置し、同周溝を切る。上端径0.95mの掘方のほぼ中央に径26cmの柱根部挿入のピットを掘り、下底は上面より70cmの深さとなる。上面掘方内の柱根を固めるように大小の礫を多く充填している。

ただこの遺構が掘立柱と推定されるにも拘らず、これと連なるような建物遺構を示す柱穴はみられない。

この遺構の他に、1号墳の北東約30mの位置に南北に一系列に4個の柱穴が並ぶ。(Fig.82)柱間がいずれも2.0mを測り、柵列等も考えられるが、時期等も定かでなく、柵としても何を区切るものかも判然としない。

溝状遺構 (Fig.82-2)

1号墳の東北東40mの位置に東西に4.1m延びる。幅0.6~0.3m、深さ0.1mを測り、上面より須恵器・土師器の小片が検出される。性格・時期ともに明確でない。(中間研志)

7 小 結

以上、各地区毎に、更に各遺跡毎に述べたが、全体として当遺跡の特に遺構の残存状態が極めて悪く、この為に記述の点でも曖昧で不如意なものとなったことを残念に思う。全調査面積2,831m²のうち、特に縄文時代の遺物がかかり出土しているにも不拘、その確実な遺構が果樹園造営による攪乱等により検出し得なかったことは返す返すも無念である。

1 縄文式土器について

この水上D地点出土の縄文式土器と関連する遺跡としては、熊本県菊池郡泗水町三万田東原遺跡(註1)、下益城郡城南町御領貝塚(註2)、熊本市健軍町烏井原遺跡(註3)、長崎県南高木郡国見町筏遺跡(註4)、宮崎県西臼杵郡高千穂町陳内遺跡(註5)などがある。

富田紘一氏は、三万田原遺跡の報告の中で、三万田式土器に、西平式の伝統を引く磨消縄文系と黒色研磨の細線羽状文系のふたつの系統が存在することを指摘する。本遺跡土器3は、磨消縄文系西平式の口縁の特徴を残し、全体に角のとれた器形へと変化する。また、土器10の屈曲部は、羽状文系の明確な稜を有し反転する類とは若干異なり、丸味を帯びた稜から一度内傾して屈折し再び外反する類であり、即ち、羽状文系というよりも西平的な様相をも感じさせるものである。次に水上D地点浅鉢C類の口縁下で明瞭な屈曲を示し立ち上がる器形をなし、楕円形押圧文の施文とともに、羽状文系の特徴として、とらえられる。ただ全体的に、羽状文そのものをみないことをも含めて、本遺跡土器はより磨消縄文系の影響を強く感ずる。また同氏は、烏井原遺跡出土の第1群・第2群土器を烏井原式と仮称し(註3)、三万田式と御領式の

過渡的な位置づけをしている。中でも第2群は、細線羽状文の消滅と、沈線の途中に見られる三角文が楕円形押点文へと変化するという2点を指標として型的には第1群より新しく見る。本遺跡では、細線羽状文は、1片もみられず、押点文がみられ、鳥井原第1群の範疇には入らない。

更に水上土器8のように口縁内面に沈線をめぐらす例としては、三万田遺跡や小原下遺跡(註4)がある。古田正隆氏は、筏遺跡の報告の中で、この類の土器を三万田式土器の終末に位置づけ、更に御領式土器の前半と平行関係にあるとする。また、御領貝塚においては、この種の深鉢をみない。よって形態的には三万田式後半以降で御領式との間の漸移的な類とされよう。

以上のような観点から本遺跡土器をみると、仮称鳥井原式の後半(第2群)のものに近似するといえるが、前述の如く、浅鉢屈曲部・口縁部(A類)等の特徴において若干趣を異にする。黒色研磨の完成されない本遺跡の位置を考える場合、中九州におけるそれらとはその変遷過程が若干異なることにより、形態上の相違を認め得るものとも理解されよう。

三万田式から御領式につながる土器を出土する遺跡を地域的に概観すると、長崎県南部から熊本県及び宮崎県の一部に分布し、一見中九州に集中するかにみえる。特に福岡県においては極めて稀少であり、本遺跡例はこの点においても重要であるといえる。富田氏も指摘される如く(註6)、羽状文系と磨消縄文系の相違は、同一地域内における漸移的というよりも外部からの強い影響を感じさせる。特に近畿・瀬戸内の宮滝式土器の強い影響は、先人の指摘するところである。北部九州沿岸に立地する本遺跡は、その受容過程において、中九州のそれとはいくらか異なる点があるのではないかと疑問を抱く次第である。(平島勇夫・中間研志)

2 古墳について

墳丘、石室の殆んどが削平されるという状況において詳細を論ずることは難しい。周溝埋土中の須恵器類をみると、Fig.77-1の如く、立ち上がり部があまり内傾せず器高の深いやや古式の様相を呈するものもあり、Ⅱ-A期(註7)に含まれ得る。この期を初築とし、Ⅱ-B期にかけての連続使用を単純に断定するには危険ではある。ただ、前述の如く玉類が各々奥壁際と玄門側に離れてグループをなすことを考えると追葬等の可能性も残さねばなるまい。

また、通有の後期～終末期の群集墳の在り方における如く、墓道が玄室床面より下がりながら延びることが多い事を考慮すると、当古墳墓道部に当たる部分において、現状が殆んど水平に削平されているにも不拘、墓道が検出されないという事は、あたかも「竪穴系横口式石室」の在り方を彷彿とさせる。即ち羨道・墓道部分の底面から玄室床面に向かってかなりの傾斜をなす、この種の石室をみる時、当石室がその系統の流れの中にあるという可能性も否定できないであろう。ただ、玄室プランが方形に近くなっていることを考慮すると、この系統の中でも、鞍手郡若宮町汐井掛古墳群(註8)にみられるような、その系統の発展した横穴式石室の類に含まれるのかもしれない。

立地としては、現五穀神池の在る谷部に対して谷頭の上部の丘陵鞍部にあたる平坦地に占地しており、その推定墓道方向は谷へ向いている。五穀神池の北岸の県道脇、即ち谷北側斜面に1基の横穴式石室が知られている。水上E1号墳から北西へ約150mの位置である。また、300m東側の県道脇蜜柑畑にも石室が輪切りにされた横穴式石室がみられ、薬王寺の西側に広がる水田面方向を向く丘陵斜面に占地すると考えられる。前者は水上E1号墳と同じ谷を共有する大きな一群に含まれ、後者は別のグループであろう。群の全体が明らかになっていない現状では断定は避けねばならないが、この谷の一群の中でも、水上E1号墳は、占地の上で、前述の如く、かなり特異な位置を占めており、径10数mの小円墳であるにしても、他の谷斜面のものとはある程度一線を劃するものであらうと考える。出土遺物の点でいわゆる「赤焼き土器」が出土したことは意義深い。この報告書中の太田町遺跡の項でもその出土例が記されているが、これは当古墳の西2kmの位置にあたる。

(中間研志)

- 註1) 富田紘一『三万田東原調査概報』熊本県菊池郡泗水町教育委員会 1972年
- 2) 小林久雄『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会 1967年
松本雅明編『城南町史』城南町史編纂会 1965年
- 3) 富田紘一『鳥井原遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会 1977年
- 4) 古田正隆『筏遺跡』<百人委員会埋蔵文化財報告第4集> 1974年
- 5) 鈴木重治・賀川光夫『陳内遺跡 日向遺跡総合調査報告第2輯』宮崎県教育委員会 1962年
- 6) 富田紘一「三万田式土器の文様」『九州の原始文様』『九州の原始文様展』写真集 佐賀県立博物館 1977年
- 7) 小田富士雄氏の編年による
- 8) 1975～1976年に九州縦貫自動車道建設に伴って福岡県教育委員会が調査した。



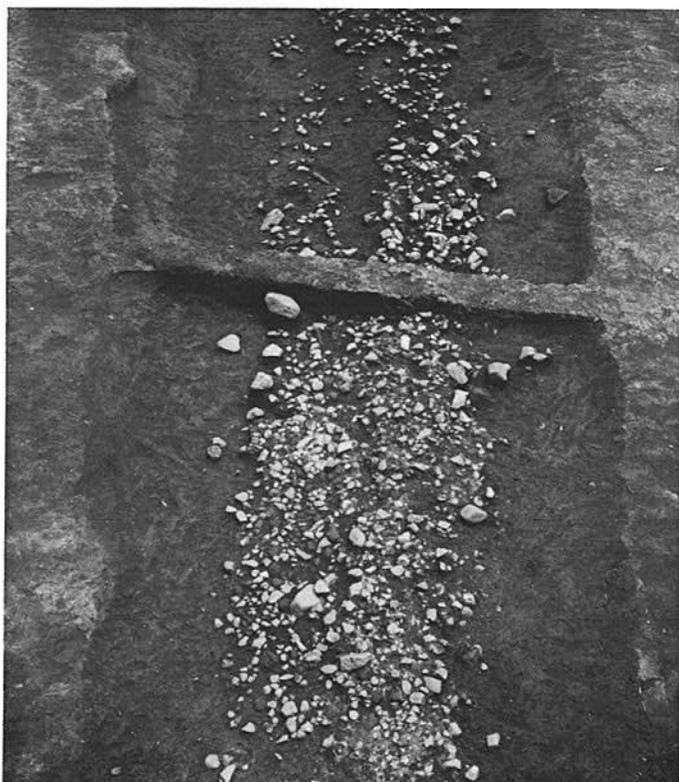
1. 水上A地区全景（東から）



2. 水上A～B地区への
のびる溝状遺構
（西から）



1. 水上B地区溝状遺構全景（西から）



2. 水上B地区溝状遺構中の小礫群
（西から）



1. 水上E地区全景（南西から）



2. 水上E 1号墳全景（東から）



1. 水上E1号墳石室（東から）



2. 水上E地区
第1号土壇
（北から）



1. 水上E地区掘立柱遺構（西から）



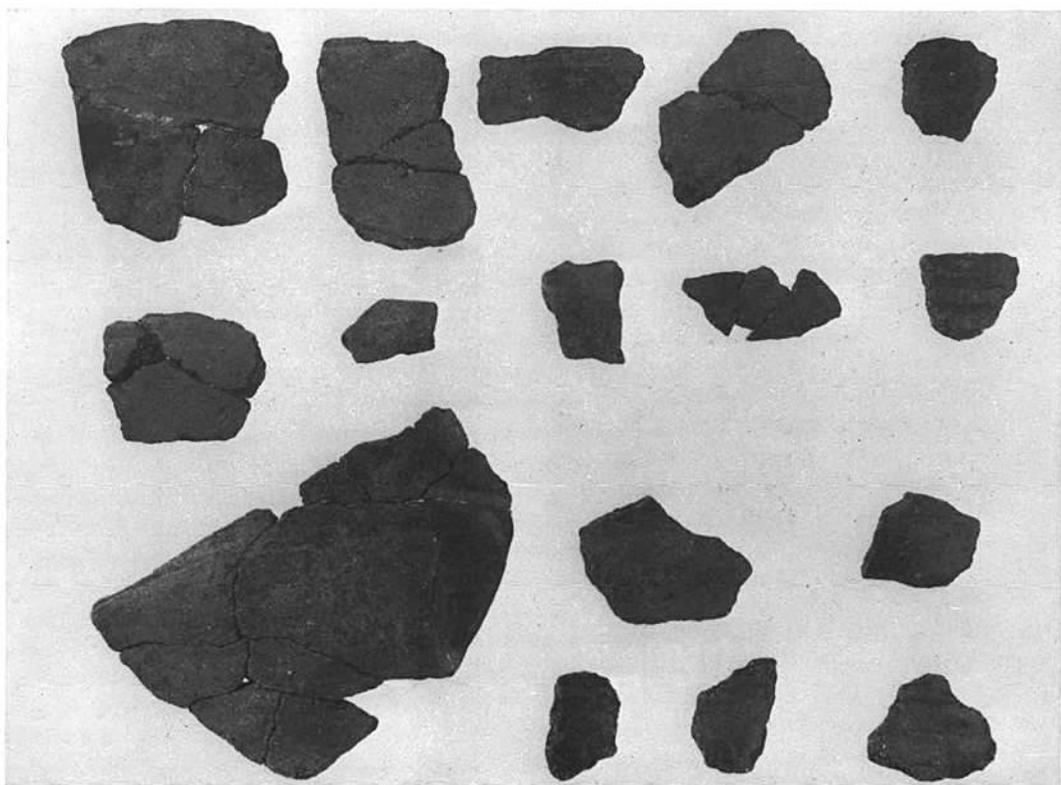
2. 水上E地区第3号土壇（北から）



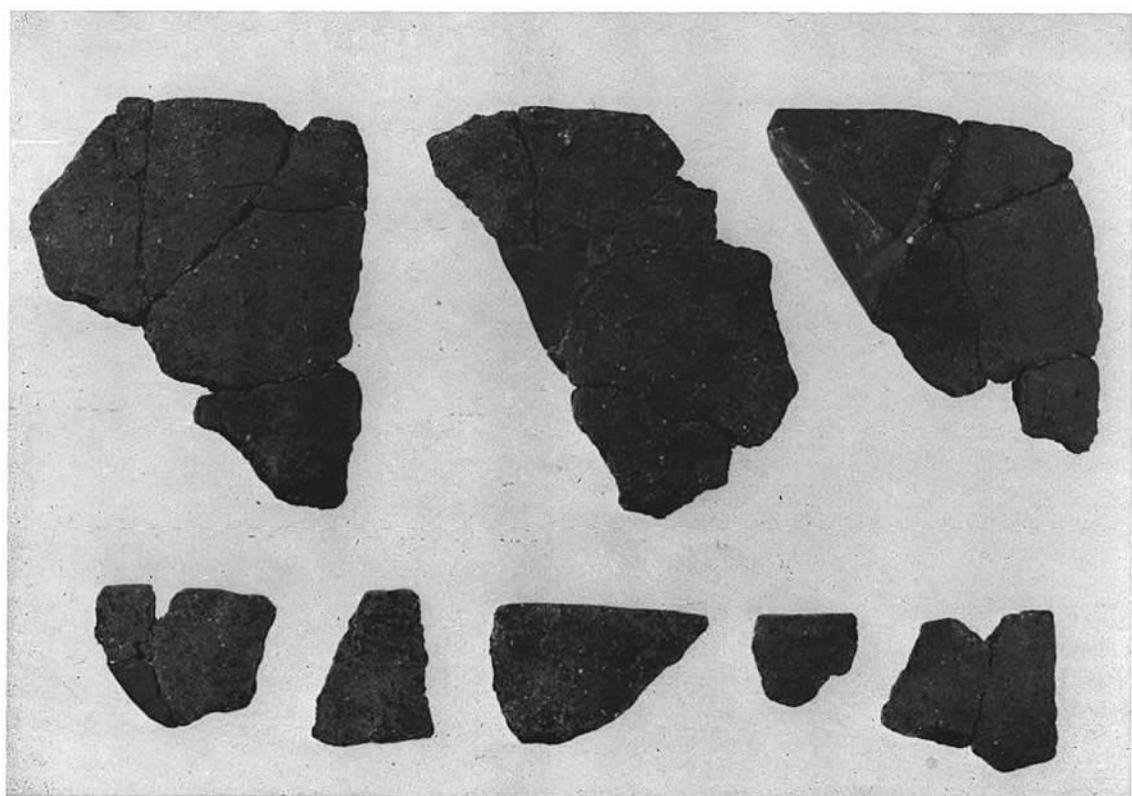
1. 水上D地区第1号土壙（北から）



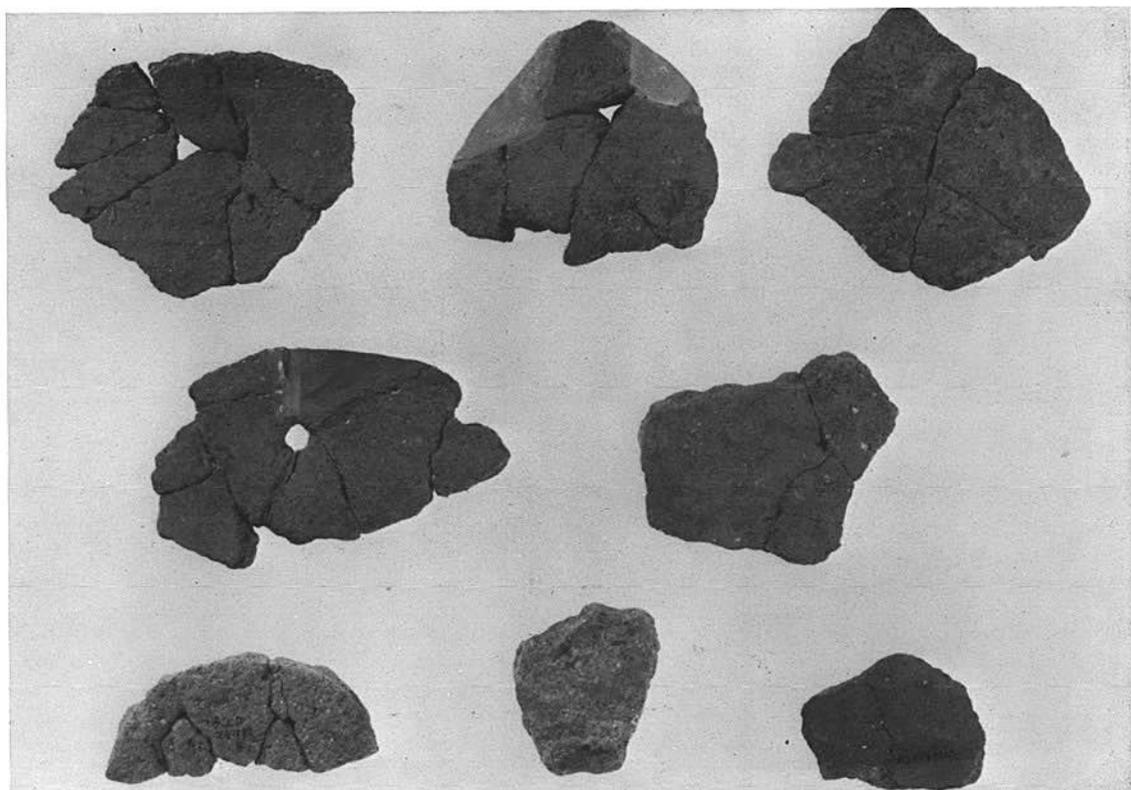
2. 水上E地区第2号土壙（南西から）



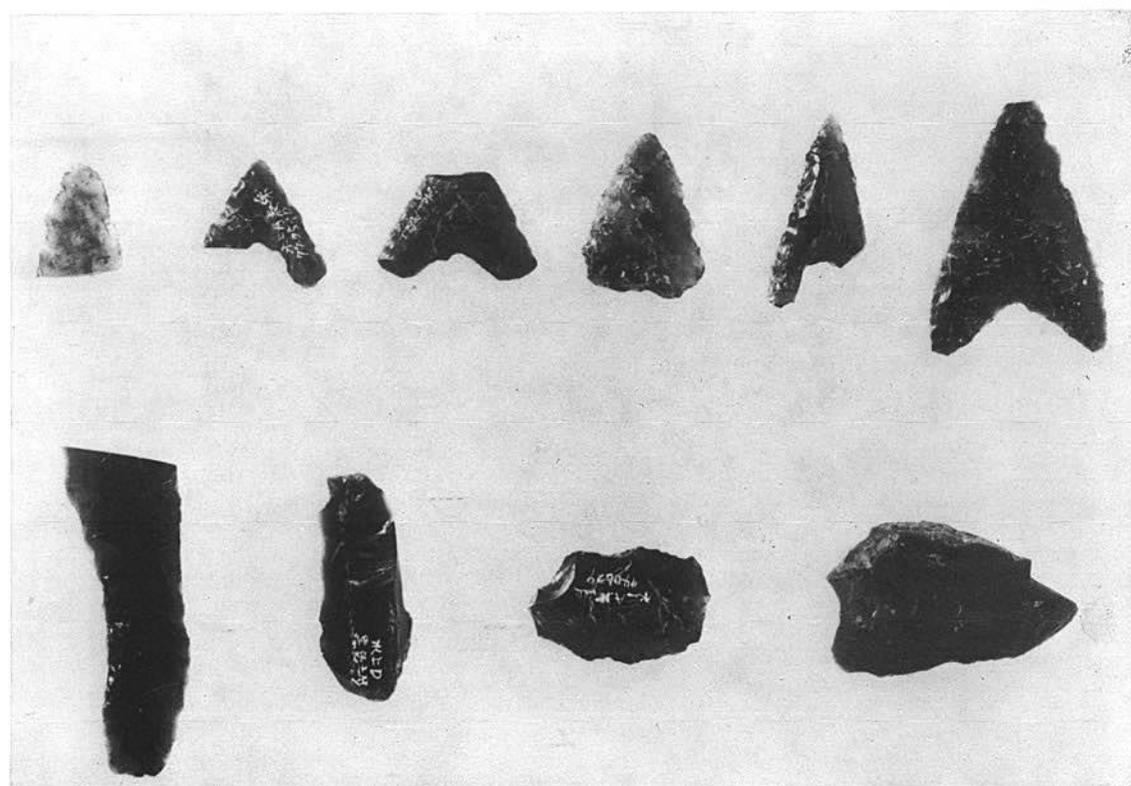
1. 水上E地区出土繩文式土器



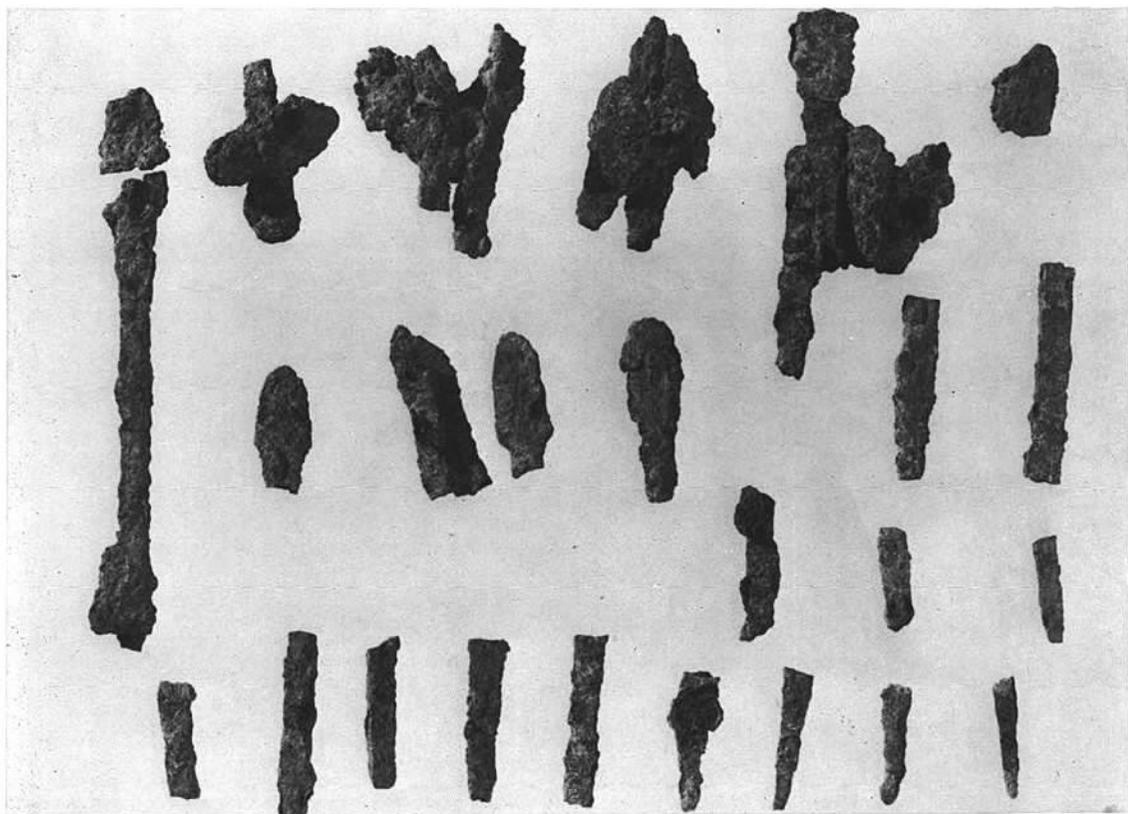
2. 水上E地区出土繩文式土器 (粗製土器)



1. 水上E地区出土縄文式土器（粗製土器・底部）



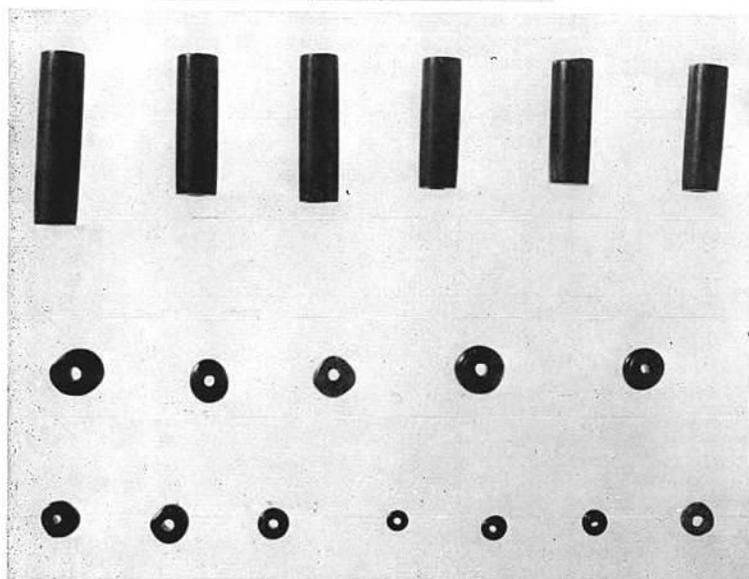
2. 水上遺跡出土石器



1. 水上E1号墳出土鉄鏃



2. 水上E1号墳周溝出土須恵器・土師器（左上）



3. 水上E1号墳出土玉類

Ⅲ 各遺跡の調査

7 古野古墳群

Ⅲ-7 古野古墳群

1 古墳の配列 (Fig.83)

計3次の調査では、24カ所を対象としたが、尾根筋にある一部を除く大部分は南側斜面に位置している。しかも、中央・東・西の三つのまとまりがあり、このまとまり——支群内部にもまた数単位があることが明らかとなった。それによれば、本群の構成は、

中央支群

A単位 — 第3, 4, 5, 6, 7号墳

B単位 — 第16, 17, 18, 22号墳

C単位 — 第19, 20, 21号墳

東支群

D単位 — 第8, 9, 10号墳 (筑波大調査)

E単位 — 第12, 13, 14, 15, 23号墳

西支群

F単位 — 第2号墳

G単位 — 第11, 24号墳 (筑波大調査)

となる。

これらの大部分は、果樹園造成のために原形が著しく損なわれており、墳丘盛土をとどめていたのは、第3, 4, 8, 13号墳等の数例に限られ、石室もまた玄室上半、羨道部は大破しており玄室の一部が辛じて遺存する程度に過ぎなかった。

以下、調査の結果を報告するが、本群の構成に従い、中央→東→西支群の順でこれを行ないたい。

(石山 勲)

2 A単位

(1) 古野第3号墳

墳丘

標高約100m, 付近の水田面との比高差約25mの丘陵頂部近くの南西斜面に構築された円墳である。樹木伐開後の墳丘は、斜面に構築されたため顕著ではなく、約2.5m四方の盗掘坑が存在したが、当初は大木の根の掘り跡かと思われる程度のものであった。

発掘前のみかけの墳丘規模は、径は明確ではなく、最も比高差のある南側で約2mの墳高であった。石室東側の部分に大きな攪乱墳があり、本墳丘はかなり荒らされていた。

墳丘構築当時の規模は、径約14mに復元される。盛り土は、墳丘西側のそれが比較的残りが良く、石室と墳丘構築の関係をうかがうことができる。まず、当時の表土層を除去して地山面まで整形した後に、墓壙を切り込んでいる。次に石室構築と平行して、石室構築の節となる段階で盛り土がなされ、その範囲は石室中心から約4mにまで及ぶ。この部分の盛り土は入念になされている。このように、石室構築と並行してまず小墳丘が構築され、石室完成後に当初に計画した墳丘規模に合わせて土盛りをしているようである。この際の盛り土はあまり入念にはなされていない。

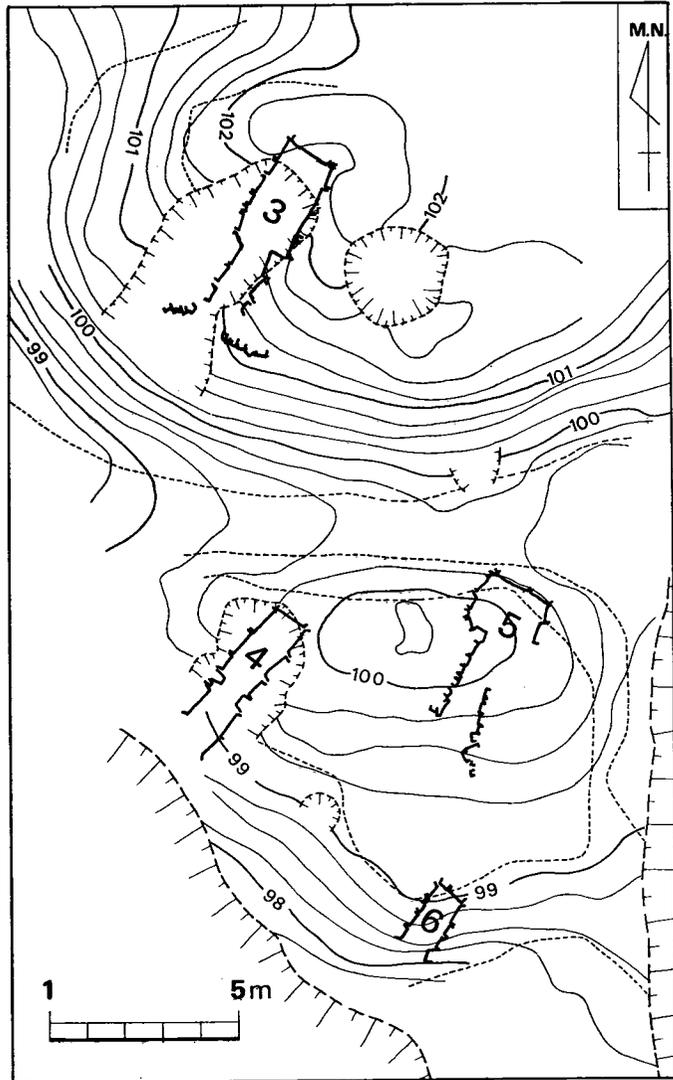


Fig.84 古野古墳群A単位全体図 (1/200)

石室 (Fig.85)

本墳の内部主体は南々西に開口する単室構造の横穴式石室で全長5.2mである。石室は地山面から切り込まれた深さ約2mの墓壙内に構築されている。

墓壙は玄室奥壁側で幅約3.5m、深さ2m強、羨道入口部付近で幅6mをはかり、平面プランは略長方形を呈し、玄門部付近で幅を狭ばめてそのまま墓道に続くといった傾向は見られない。玄室は長方形の平面プランを示し、長さ2.9m、幅1.5m程で、長さとの比は約2:1である。玄室床面はまず20cm大の石を要所に据えた後に5cm~10cm大の河原石を敷きつめてい

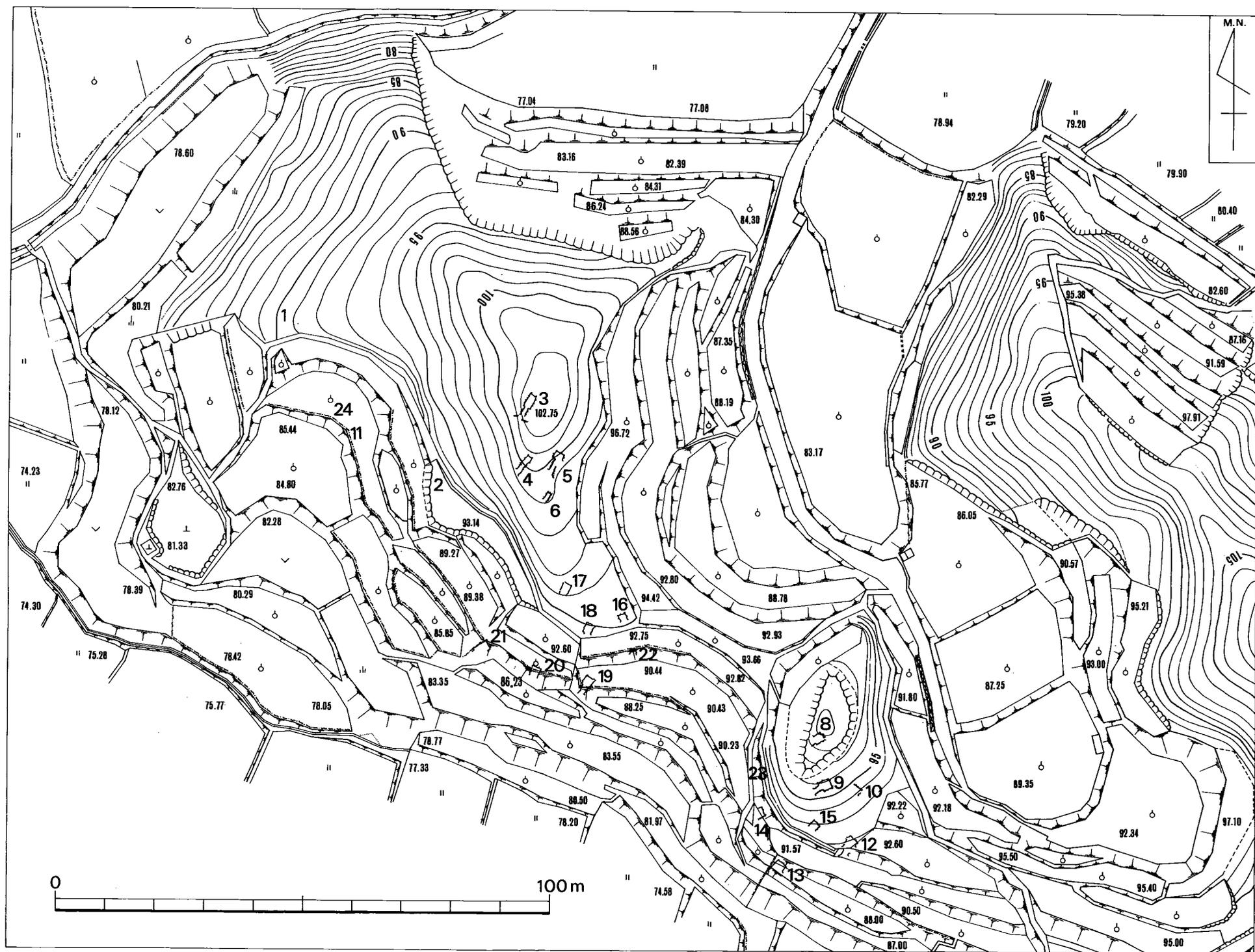


Fig. 83 古野古墳群全体図 (縮尺 1/1,000)

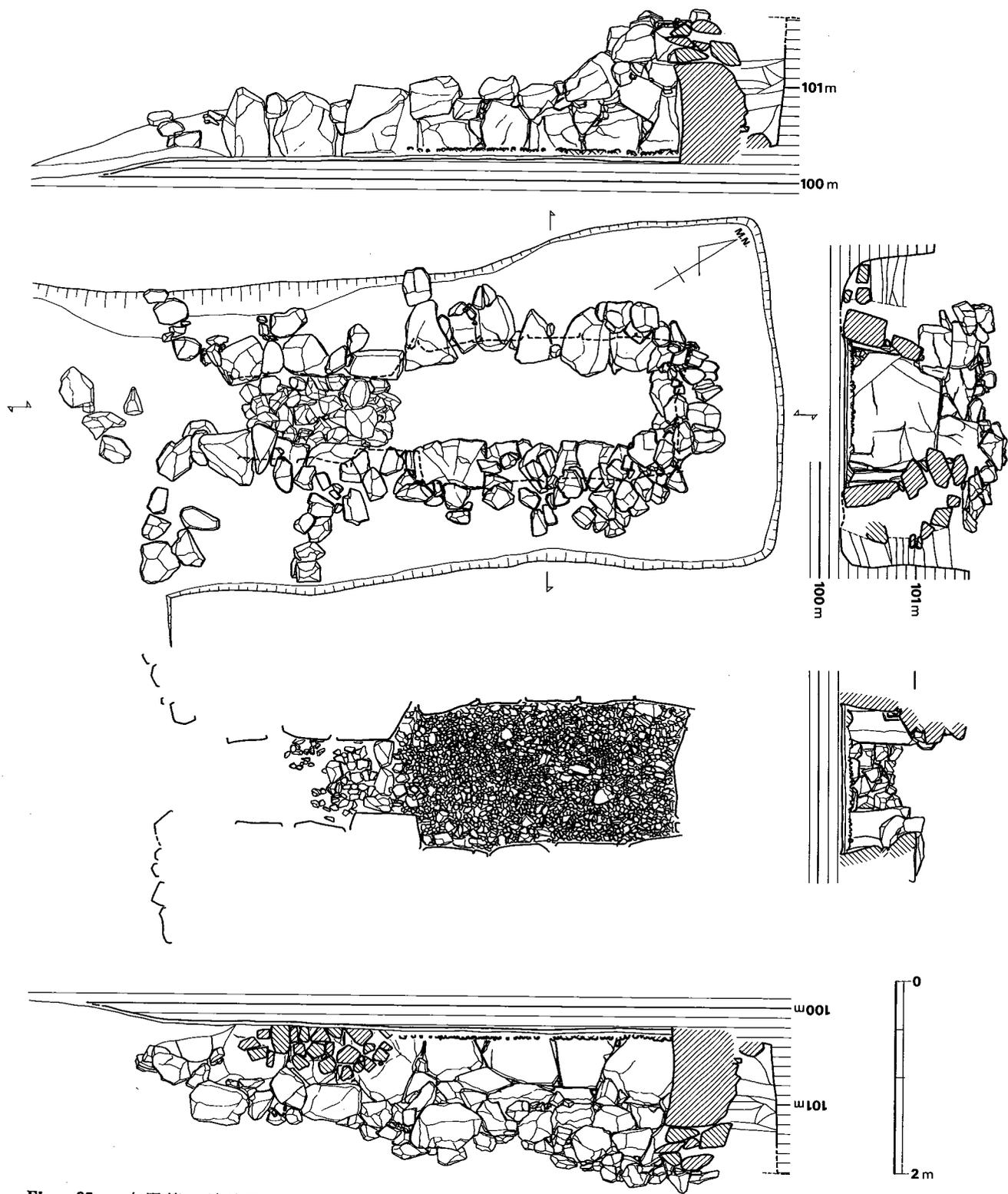


Fig. 85 古野第3号填石室実测图 (縮尺 1/60)

る。この玉石は意識的に使い分けがなされているようで、奥壁側は大きめの石を敷いて床を形成している。なお、床石下には厚さ2cm～3cmの暗赤色強粘質土を敷いている。床石を安定させるためであろう。



Fig.86 古野第3号墳遺物出土状態実測図 (1/40)

いる。羨道入り口は左右に石を配し、化粧をしている。

遺物出土状態 (Fig.86)

玄室の右側壁付近に須恵器を検出した。完形品は1点で他は破片である。床面に密着した状態で出土している。

(児玉真一)

玄室奥壁は石積みが4段目まで、高さ1.6mまでが残っている。最下段に大石を立てて鏡石とし、2段目までは大き目の石を積んでいる。奥壁のせり出しは急ではなく、少し内傾する程度である。

右側壁は4石を用いて腰石となし、4～5段の石積みが残っている。各石積み間は小石及び土砂でパッキングされている。

左壁は腰石に5石を使用している以外は右壁とほぼ同様である。残存状態は右壁の方が良く、床面から1.6mまで残っている。

玄門は、高さ0.6m～0.7mの石を立てて袖としている。右側袖石は2段目まで残っているが、左側袖石は1石だけで石積みは残っていない。現状では、玄門部は幅0.7m、高さ0.8mである。

玄室と羨道との仕切りは、3個の石を並べて仕切り石としている。

羨道部は、右側3石、左側2石を用いて腰石とし、その上に石積みを行なっている。残存状態の良い右壁で高さ1m、2段の石積みが残って

遺物

須恵器 (Fig.87)

1 はは略完存する。器高 7 *cm*，胴部最大径 8.6 *cm*，口径 6.1 *cm*。肩以下には篋削りを施す。黒灰色を呈して焼成良好。2 は，復元口径 10.4 *cm*，同器高 3.9 *cm*。灰青色を呈し，焼成良好。3 の長頸壺は，頸部は略完存するが肩部以下を失なっている。口径 9.2 *cm*，頸高 9.7 *cm*。胎土・焼成が 1 と酷似する点が注意される。

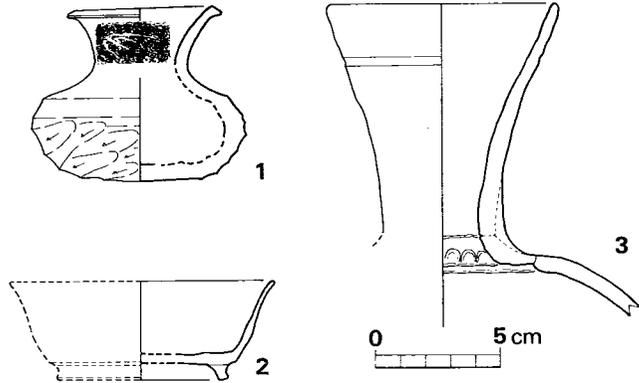


Fig.87 古野第3号墳出土土器実測図 (1/3)

(石山 勲)

(2) 古野第4号墳

墳丘 (Fig.88)

開墾により原形が著しく損なわれており，東西径 13 *m* 弱，南北径 9 *m* 弱の長円形を呈する高まりの西端に盗掘孔と露出した石材があることによって古墳であることが知られる程度であった。

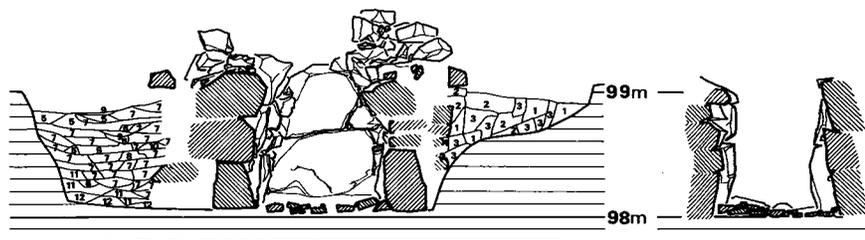
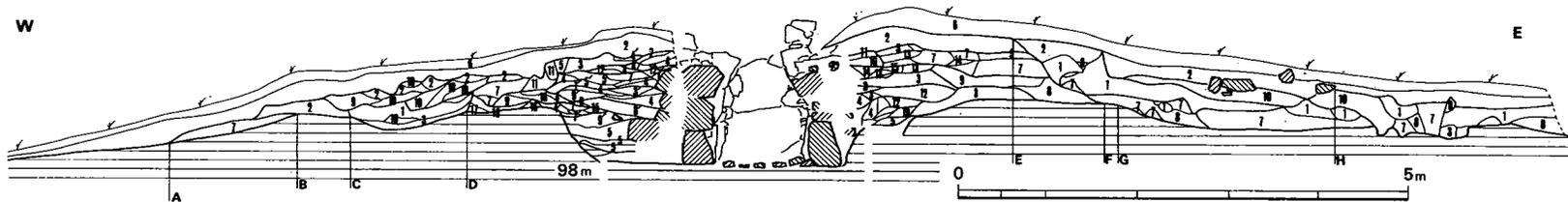
墳丘築成に際しては，予め表土が除去され，B点以西とG点以东について若干の削り出しが行なわれている。D F間までは緻密な作業が行なわれ，中核が形成されている。以上は墳形を整えることを主眼とする作業となり，東半で顕著にみられるように大まかとなる。C D，E H間は一見周溝状にくぼむが，この間は埋め戻されている。西端はA点と思われるが，東端はこれを明確には指摘できない。なお，A H間は約 13 *m* である。

石室 (Fig.89)

略南西に開口する全長 5.1 *m* の単室横穴式石室である。天井石の全てを失っているが，周壁の過半は現存しており，調査古墳中では第3号墳とともに遺存度は最良に属する。

地山に穿たれた墓窟は，最大幅 4.6 *m* 前後，長さ 5.8 *m* 弱（上端値）の不整長方形プランで，奥壁背後での深さは約 1.4 *m*。横断面は主軸に対して相称ではなく，東側では2段掘りとなる。

玄室内法は，中央長（奥壁から仕切石内側まで） 2.15 *m*，幅は奥壁部で 0.94 *m*，横口部で 1 *m* に過ぎず，狭長な長方形プランをとる。周壁の構築に際しては基部に大き目の石を配して腰石とするが，据えつけのための掘りこみは極めて浅い。現存高は約 1.6 *m* で，当初の高さもこれをそう大きく超えるものではない。狭小な石室内法にしては，石材は大ぶりといえる。小石



- | | |
|----------|-----------|
| 1 淡黒褐色土 | 2 淡茶褐色土 |
| 3 黄褐色土 | 4 暗赤色粘質土 |
| 5 黄赤色粘質土 | 6 表土 |
| 7 暗茶褐色土 | 8 茶褐色土 |
| 9 暗黄褐色土 | 10 1 + 2 |
| 11 2 + 5 | 12 3 + 4 |
| 13 3 + 5 | 14 4 + 7 |
| 15 4 + 8 | 16 8 + 17 |
| 17 赤褐色 | 18 暗赤褐色土 |
| 19 4 + 5 | 20 炭化物混入 |

Fig. 88 古野第4号墳填丘断面図 (縮尺 1/80)

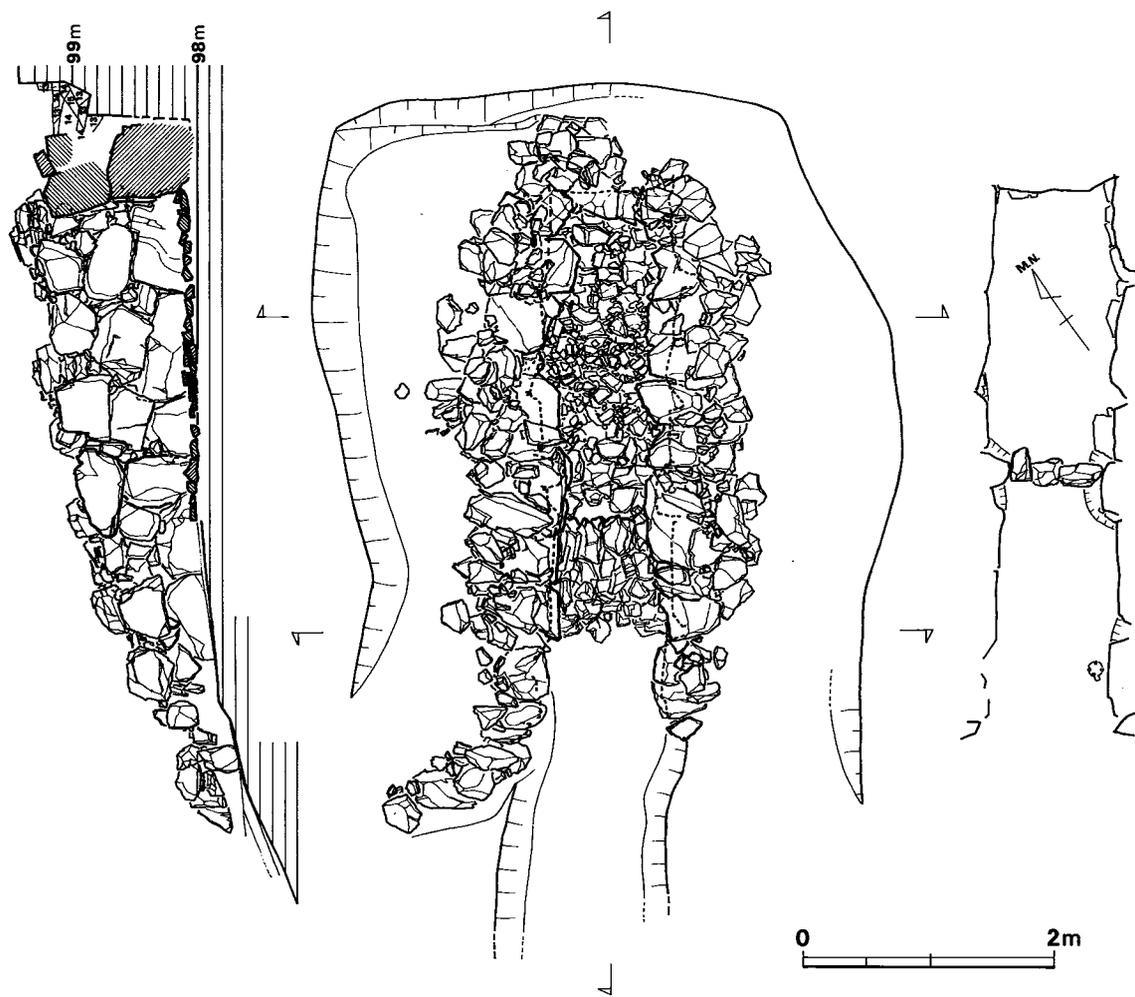


Fig. 89 古野第4号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

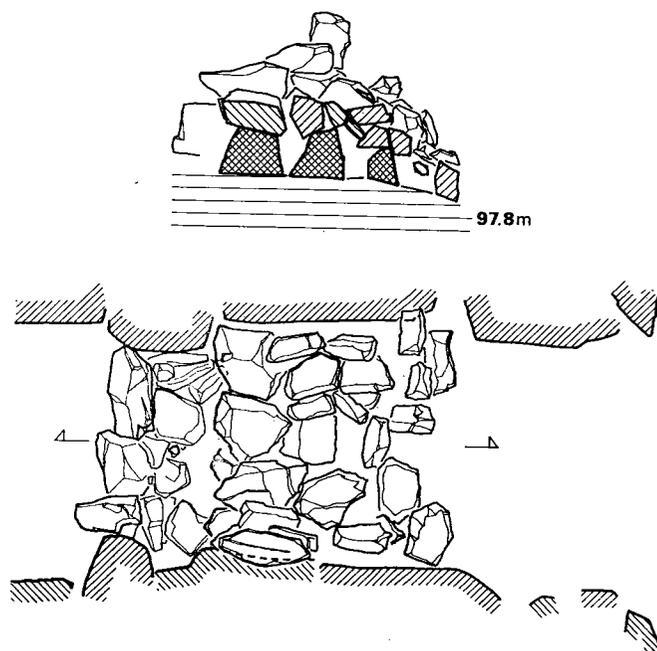


Fig.90 古野第4号墳石室閉塞状態突測図 (1/40)

材を適宜用いての裏ごめも緻密で、入念な作業がなされている。玄室床面は2層から成り、下層に扁平な小石を敷き、この上に小円礫を敷く。墳底・礫床面ともに水平位にはなく、外側に向けて下降する。排水を考慮しての所作と思われる。

横口部では、左右から石材を突出させて玄門となし、幅は現存上部で0.68m、下部で0.73m。袖石間の床には3石を並べて仕切石としており、この上面から袖石最上端までの高さは約1m。仕切石と礫床との高低差は顕著ではな

く、敷石に比して大ぶりである点と並置される点で識別される程度であり、こうした傾向は他墳でも顕著にみられることが注意される。

羨道部は、幅1m前後と玄室側壁の延長上にあるが、左側壁では奥壁から4.4m前後の地点から外開きとなる。先端に向うにつれて側壁高は漸次低くなり、玄門寄の現存最高部でも約1mに過ぎない。従って、天井の架構は袖石付近までと思われる。この前面に幅1.4m弱の浅い切通し状の墓道が付設されている。

閉塞には、裏込材と同大の石を用い、袖石前面——奥壁から約2.6mの地点に先端を揃えており、長さ約1mにわたる (Fig.90参照)。閉塞石と仕切石との間の床には礫が敷かれるが玄室内とは異なり一層のみである。

遺物出土状態

盗掘を受けており、土器2個を採取したにとどまる。玄室内左袖石付近床面からは、横倒しとなった状態の台付罫が、また羨道右側壁沿いの床面からは、仰向けとなった状態で亀形提瓶が出土した。

遺物

台付罫 (Fig.91-1)

口縁と脚部の一部を欠く。口縁は大きく外反し、加飾されていない。器高11.2cm、最大口

径12.2cm, 頸径2.8cm, 胴部最大径8.8cm, 脚底径8.2cm。器表全面にナデ調整を施し, 丁寧なつくりといえる。細粒を多く含み, 暗赤褐色を呈する。

亀形提瓶 (Fig.91-2)

口縁と脚先端の一部を欠き, 現存長19.1cm, 器高6.8cm。胴部最大径13.4cmに対して高さは6.8cmと極めて扁平である。これに粘土塊をちぎって折り曲げた四脚をつけている。成形・調整は稍荒く, 頸部も心もち歪んでいるが, 亀の姿をよくとらえており, 微笑まずにいられない。伏せると口縁部が地につくため, 仰向けにして焼成されている。

高台付杯 (Fig.91-3)

約1/4が残る。暗灰青色を呈して焼成良好。復元口径11.6cm, 同器高4.4cm。 (石山 勲)

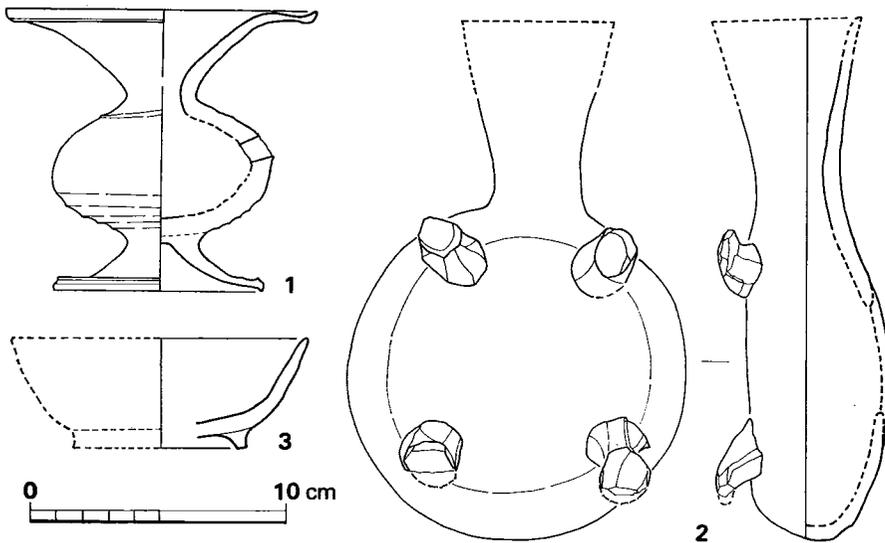


Fig.91 古野第4号墳出土須恵器実測図 (1/3)

(3) 古野第5号墳

墳丘

3号墳を頂点として南東へ延びる尾根上に, 3・4・5・6号墳の一群が占地し, 当5号墳は, 4号墳の東6号墳の北に隣接する。墳丘は, 現地表土直下が地山となり, 後世の削平の為か残らない。周溝等の痕跡も認められず墳丘径の推定すらできない。

石室 (Fig.92)

玄室平面形が方形に近いやや横長を呈する単室両袖横穴式石室である。玄室は, 長さ1.5m, 幅1.8mのやや不整形な横長の長方形の床面平面形をなす。奥壁側の突出する不整形の墓壇を掘り, 腰石掘り方を浅くめぐらす。奥壁の右壁ではこの掘り方内側に寄せて腰石を据える

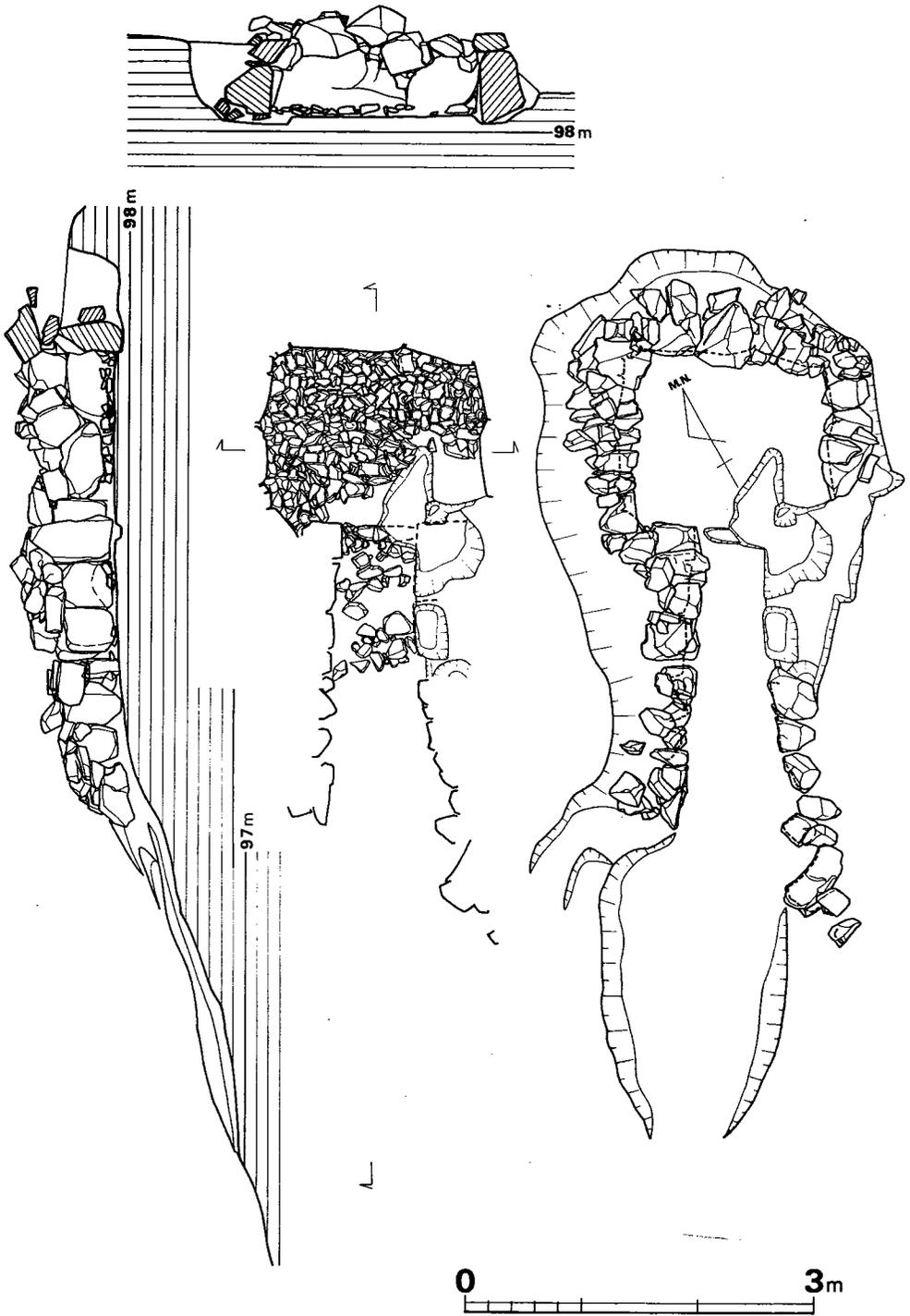


Fig.92 古野第5号墳石室夷测図 (1/60)

が、左側壁では20cmも外側へずらして据えている。これは、当初の計画段階では正方形（1辺1.5m）の玄室を予定して、実際の構築段階で奥壁腰石の石材長等により制約を受けてこのような玄室プランとなったものと推定される。奥壁腰石には大小の大石2個を横位に据え、左右側壁も左壁玄門際の1腰石を除いて他は横位に据える。しかし、左壁玄門際及び玄門部より羨道部に到るまでの腰石はすべて縦位に据える。腰石以上は2段目で腰石上面の凸凹をならすようにして、大小の石材を小口面を揃えるように積み、3段目まで、床面より90cmの高さまで残存する。左側腰石下では、割石を根締めに敷き、他位置ではみられず、腰石上面の調整のためかとも考えられる。裏込めの石は、奥壁側及び奥右コーナー部分にみられるが顕著ではない。

床面敷石は、右玄門部の石抜き取りに従ってその周辺が抜かれているが、全面に拳大の平たい角礫を敷き若干小さめの河原石をも充填している。

羨道部は、玄門部仕切石抜き跡から敷き石の残る部分までの幅0.6m、長さ1.3mを測る。右側壁は全く抜かれているが、左側壁は、玄門より3個の腰石が縦位に並列し、以下墓道側壁の粗い積み方との相異がみられ、更にその間にわずかな間隙も認められる。

墓道部分は、両壁石積みの開く部分と、地山を掘り下げた南斜面より入る部分とにわけられる。羨道敷石部より左壁で1.4m、右壁で2.1mの長さに石積が開き、この部分の腰石は地山より総て浮いた状態で積まれる。墓道部は地山を30cm前後下げて、最大幅1.6mの石室中軸線よりやや西（左）へ偏して先端が曲がる様相を呈する。袖石端より2.5m、玄門部より5.2mの長さを測り、当古墳群中では最も残り良く延びる。

遺物

玄室床面敷石及び右壁、右袖部の腰石などが抜かれていることからかなりの後世攪乱にあって考えられる。玄室中央付近床面より土玉1点が検出されている。

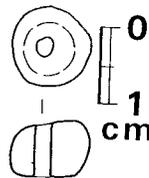


Fig.93 古野第5号墳出土土玉実測図（実大）

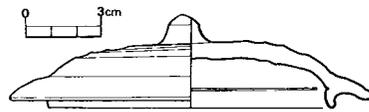


Fig.94 古野第5号墳出土須恵器実測図（1/3）

土玉 (Fig.93)

丸玉を模した土製玉である。径1.05cm、厚さ0.75~0.6cm、孔径0.2cmを測る。上下平坦面をなし、片側厚くやや歪む。胎土精良で、表面黒褐色を呈する。（中間研志）

須恵器 (Fig.94)

撮付の蓋杯である。最大径14.3cm、器高3.6cm。内面に鋭い稜がつく。暗灰青色を呈し焼成は良好。（石山 勲）

(4) 古野第6号墳

墳丘

3・4・5・6号墳の一群中で5号墳の南斜面に南に開口して構築される。現状では墳丘の盛土、周溝等の痕跡全く検出されず、不明である。

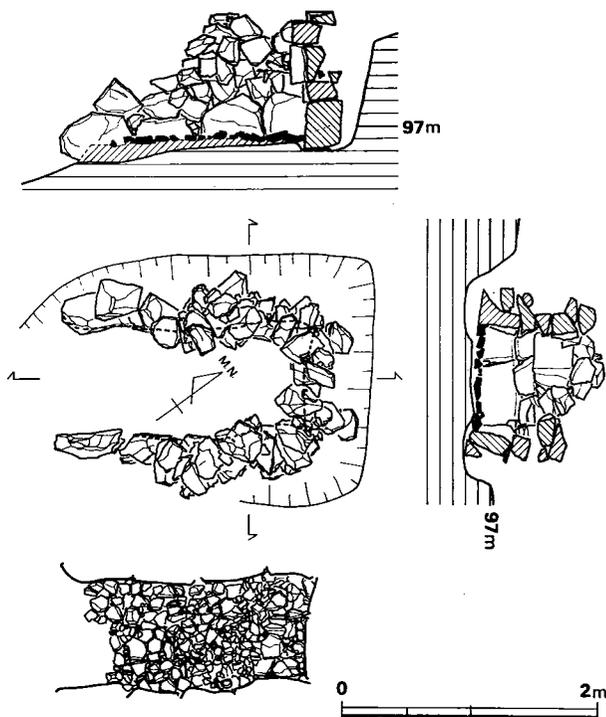


Fig.95 古野第6号墳石室実測図 (1/60)

床面から50cm以上になっていくらか持ち送る。これは、棺（遺体）埋納の際ある程度積んで後、棺のつかえない幅・高さに調整したものであろうか。この矮狭な石室において、横から入れた場合、その棺のつかえない高さを配慮したものであり、上から埋納したとすると、2段積んで後、その長さ・幅を考慮したものかと推定される。玄室床面は、やや斜めに下がる軟質岩盤面を水平に調整するように、その上に黄茶褐色砂質土を玄門寄りで15cmの厚さに張り、大きめの板状石を敷き、その間に緑色の小河原石を充填する。

当石室の形態は、細長い長方形プランのまま口の開くもの（無袖式小横穴式石室）になるのか、或いは、墓道をつくる横穴式小石室となるものか、また、外見上縦穴式石室に見える四壁の閉塞された「横穴式石室系小石室」（註1）になるものか、南半を削除され残らないのでいわずにせよ決定的ではない。無袖式小横穴式石室は、近辺では鞍手郡鞍手町向山5号墳（註2）、同若宮町から宮田町に広がる汐井掛6号、8号墳（註3）、福岡平野には終末期古墳群の

石室 (Fig.95)

長方形プランの玄室をもち、規模の小さい横穴式小石室と推定される。尾根斜面の軟弱な岩盤を奥壁側で0.9m掘り下げ、幅2.0mの略長方形の墓壇をつくる。更に腰石部分の壇を10cm弱の深さに墓壇壁際にめぐらす。玄室床面平面形は略長方形を呈し、幅0.85m、現存長1.96mを測る。腰石は奥壁に大小2個、側壁は左右とも4個を横位に配置する。積石は、小口部を揃えることに意を用いず、かなり雑に積み、現存では4段目まで、高さ1mまで残る。積石3段目までは、それほど持ち送りは著しくなく、床

中にわずかに筑紫郡那珂川町観音山古墳群中原支群中(註4),に3基等がみられる。向山例は7C中葉頃, 汐井掛例は7C前半以降(註5), 観音山例は7C後半から8C初頭に比定されている。横穴式小石室は, 福岡平野方面の, 油山山麓から早良平野山麓にかけて多く分布し, 福岡市西区駄ヶ原古墳群(註6), 倉瀬戸古墳群(註7), 相原古墳群(註8), また前述の観音山古墳群などの代表的な終末期古墳群の中に横穴式石室の退化形態としてみられる。汐井掛古墳群中にも7C後半代と推定されるものが存在する。「横穴式石室系小石室」は, 観音山古墳群中原支群, 筑紫野市八隈9号墳(註9), 同市剣塚2号墳北西側の小石室(註10), 小郡市津古内畑石棺群(註11), 汐井掛古墳群中に5基などが知られる。これらのうちには, 汐井掛の1例の如く宋代青磁を入れるものもあり, 地域によっては前二者タイプより新しくなる可能性も考えられる。他に至近例として, いづれのタイプが不明であるが宗像郡津屋崎町清田ヶ浦古墳群中9号墳(註12),も調査されている。

当古野6号墳においては, 3号墳を頂点とする一支群中の中で, 長方形プラン両袖式横穴式石室から, 略方形プランの両袖式横穴式石室, 及び当6号墳へと, 形態変化が認められている。更にその構築法において, 積石技法の若干の粗雑さを認める他は, 基本的にはその流れの中にあることは否めない。以上の諸関連類例と, 支群中における位置等の観点から, 無袖式小横穴式石室或いは, 横穴式小石室のいずれかと推定される。

遺物

石室内は一部の敷石が抜かれるなど荒されている節があり, 遺物も稀少であった。玄室中央付近床面より, 囊玉2個体分, 奥壁寄りにガラス製丸玉1個, 左壁寄りに半球形空玉状の製品1点が検出された。

囊玉 (Fig.96-1)

琥珀製で, 深赤茶色を呈し, 表面は擦れて白っぽい褐色をみせる。脆く砕けてかろうじて部分的に復元し得た。他1個体は復元できないが, ほぼ同質・同規格であろう。長さ(推定)3.3cm, 最大径2.4cm, 孔径0.3cmを測る。

ガラス丸玉 (Fig.96-2)

紺色で全面にひびが入り, 表面はかなり擦れている。径11mm, 厚さ7mm, 孔径2.2~2mmを測り, 上面の孔周囲が沈園状にへこむ。

不明空玉 (Fig.96-3)

銀製半球形の空玉状製品である。中央に外面より一孔を穿ち, 孔周辺が窪む。径1.15cm, 高

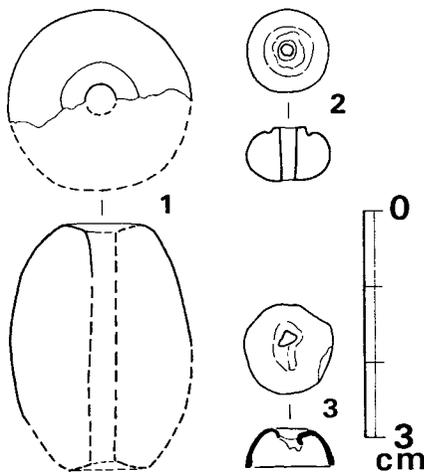


Fig.96 古野第6号墳出土玉類実測図(実大)

0.5cmを測る。対になる2個を合わせて空玉状となるものか、釘を打って棺の飾金具となるのか今後の資料の増加に持ちたい。(中間研志)

- 註 1) 上野精志「総括—b各古墳の年代等」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅻ〉1977年福岡県教育委員会において仮称される。
- 2) 上野精志「向山5号墳」上掲書中
- 3) 福岡県教育委員会〈くらてのむかしその3〉九州縦貫自動車道関係若宮町所在遺跡の調査報告会資料 1976年
- 4) 井上裕弘他〈山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報 47年度〉福岡県教育委員会 1973年
- 5) 調査担当の上野精志氏より御教示
- 6) 小田富士雄・真野和夫他『倉瀬戸古墳付駄ヶ原古墳群』倉瀬戸古墳群調査団 1973年
- 7) 前掲書(6)
- 8) 柳沢一男・藤田和裕『相原古墳群』〈福岡市埋蔵文化財調査報告書28〉 1974年
- 9) 酒井仁夫〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ〉福岡県教育委員会 1976年
- 10) 福岡県教育委員会が1974年、九州縦貫自動車道建設に伴って調査した。『祖先のあしあと』筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料 1974年
- 11) 西谷正・柳田康雄他『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会 1970年
- 12) 小池史哲『清田ヶ浦古墳群』津屋崎町教育委員会 1977年

(5) 古野第7号墳

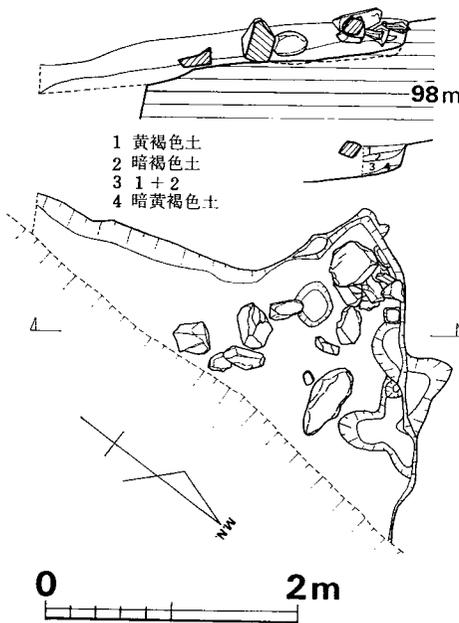


Fig.97 古野第7号墳石室実測図 (1/60)

5号墳の北東側に崖縁に石上面一部が露出していたので、遺構の有無を確認した。その結果石室と断定するには躊躇するような遺構を検出した。墳丘等の盛土は全くみられず、周溝等の地山変化も確認できない。

石室 (Fig.97)

西側にコーナーの一つを持ち、三角形の斜辺で崖となる掘り方状の遺構の中に、中小の石がやや散在して検出された。うち、西コーナー附近の石群は集石状に積まれた状態で、他は原位置を動いているものが多いと考えられる。北西の壁際には地山を更に掘り窪めた腰石掘り方状の部分もみられる。また壁際の土層断面をみると (Fig.97の中の土層断面図)、裏込めに版築状に埋めた痕跡がみられる。

出土遺物も全くみられず、石の並びも判然としない。石室であるとすればその開口が北東或いは南東方向と考えられ、この一支群中において他の南西方向と比べて、これだけ異なることになる。通常の横穴式石室のように、敷石・腰石も全く残らない。掘り方が明確であることと埋土状態がしっかりしている事等から、何らかの遺構ではあろうが、石室と断定するには難点が多い。
(中間研志)

3 B単位

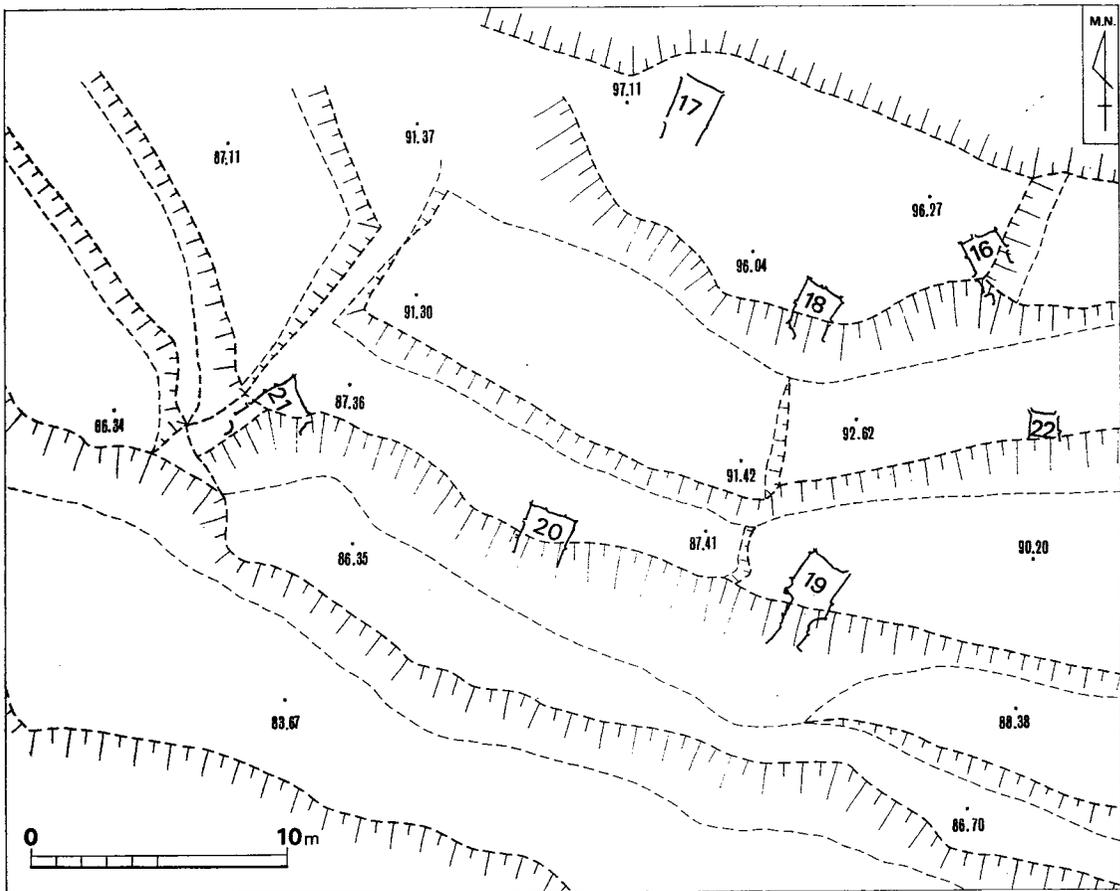


Fig.98 古野古墳群B・C単位全体図 (1/300)

(1) 古野第16号墳 墳丘

ミカン園造成のために削平され、全く残っていない。よって、墳丘に関する資料は全く得る

ことができなかった。

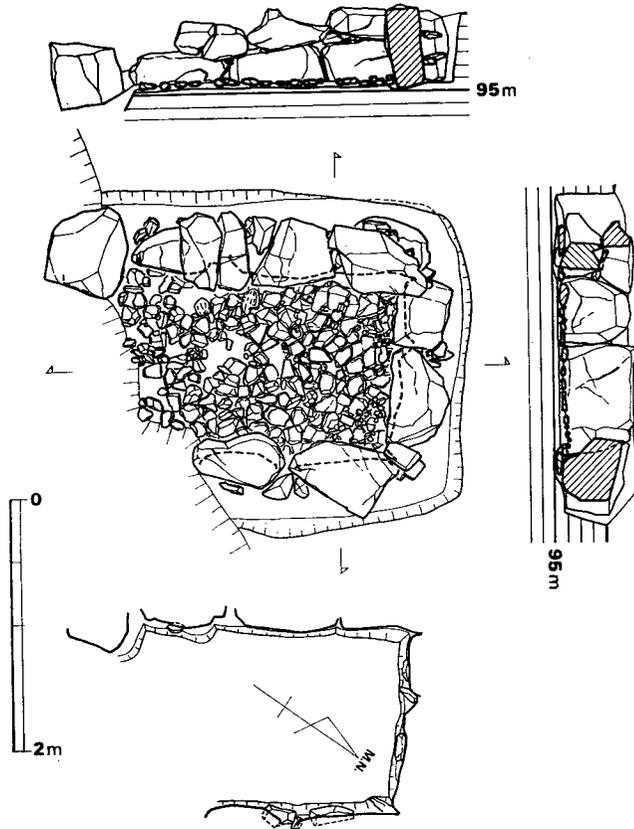


Fig.99 古野第16号墳石室実測図 (1/60)

右壁の腰石は現在2石しか残っていないが、左壁と同様に3石あったと推定される。腰石上の石積みは1段しか残っていない。

玄門は左袖石が残っているが、原位置を若干移動している可能性があり、右袖石を失っているので詳細は不明である。

なお、副葬品は1点も検出していない。

(児玉真一)

(2) 古野第17号墳

墳丘

削平され、高まりは全く観察されなかった。

石室 (Fig.100)

南西に開口する単室横穴式石室であるが、腰石1石と根石の一部をとどめるのみで大破して

石室 (Fig.99)

南東に開口する横穴式石室である。

玄室を除いてすべて破壊されており、本石室が複室構造か単室構造かは判明せず、羨道、玄門部の構造は全く不明である。石室掘り方についても削平されており、石室掘り方は床面から最高部で0.55mしか残っていない。

玄室は床面での幅1.4m～1.5m、長さ約2.2mの長方形プランを呈する。床面は10cm～20cm大の石を敷き、その間に小石をつめていたようである。床面の敷石は一重で重層構造は見られない。

奥壁は2石で腰石としており、石積みは残っていない。

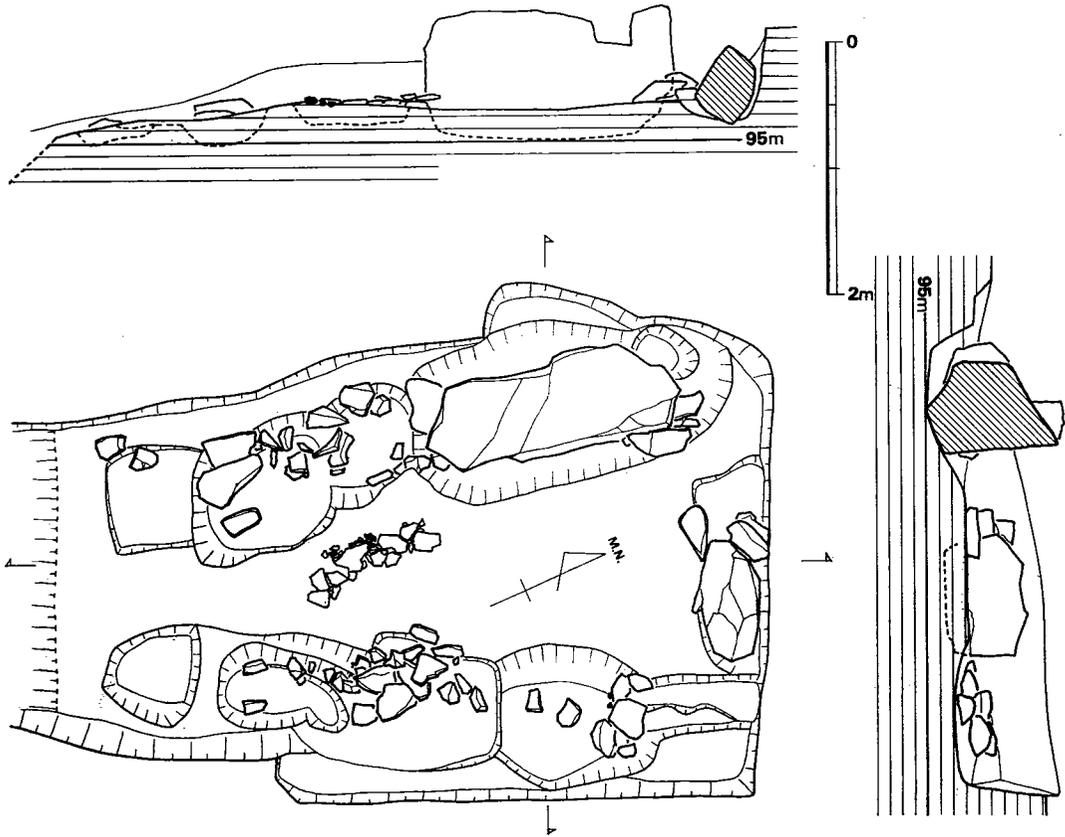


Fig.100 古野第17号墳石室実測図 (1/60)

いる。腰石据付痕から、敢えて玄室の規模を推測すれば、長さは約3m、幅は奥壁部で約2mであるが、横口寄りが少しく狭まかった可能性がある。(石山 勲)

遺物

須恵器 (Fig.101-2)

底径11.5cmを測る貼付け高台を有する底部片である。太く外方へ開く高台で、胴部外面はヘラ削り調整のままで、内面は回転ナデを施す。胎土にわずかに粗石英粒を含むが大旨精良で、焼成堅緻、外面灰～黒色、内面灰黒色を呈する。長頸壺等の底部であろう。

白磁碗 (Fig.101-1)

口径16cmを測る。口縁端を玉縁状に肥厚させる類で、内面と外面上半のみに灰色に近い釉をかけ

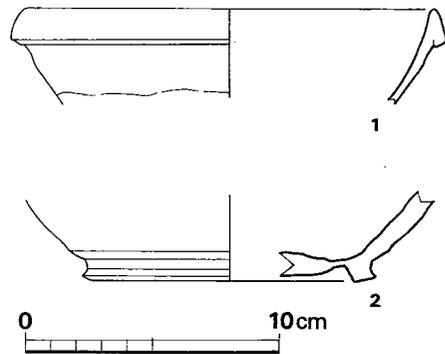


Fig.101 古野第17号墳出土磁器実測図 (1/3)

る。胎土はかなり密で、灰白色を呈する。

これらの他に、内面猫描きの青磁小片等がみられ、初築後にもこれらの遺物が示す2期以上の

の機会に追葬、再使用が行なわれたことを窺わせる。平安末～鎌倉期における埋葬形態等は明らかでないが、7～8世紀においては図示した須恵器の火葬蔵骨器としての可能性も考えられよう。

(中間研志)

(3) 古野第18号墳 墳丘

尾根筋上の南側末端部に位置し、標高94m前後の高さのところ築造されたものである。

墳丘は、開墾の際完全に削り取られていて、発掘前には崖面に袖石の一部が露出しており、盛土の状態、墳丘の規模などを推測することはできなかった。

石室 (Fig.102)

天井石は、全て開墾の際に除去されており、また羨道部分は、完全に削り取られて玄室部分と左側袖石を残

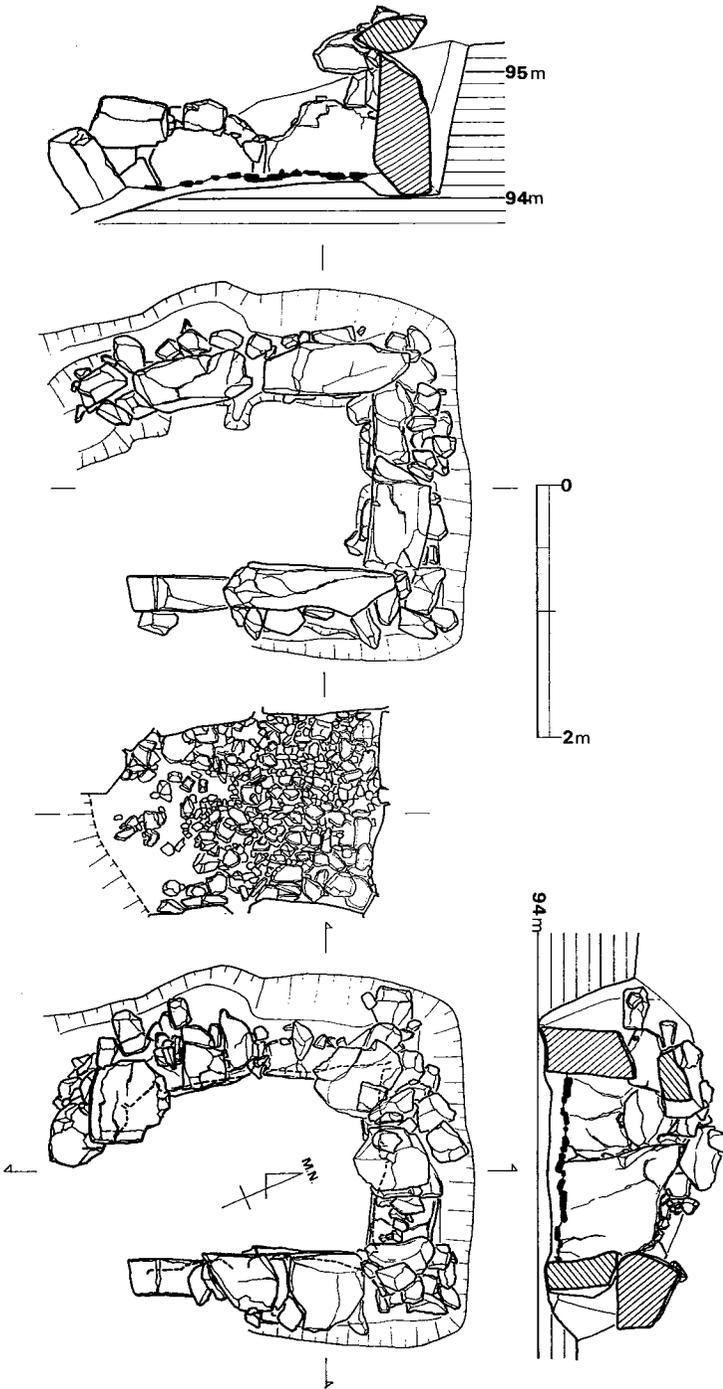


Fig.102 古野第18号墳石室実測図 (1/60)

すのみであった。

石室は、略南東に向って開口する横穴式石室である。腰石に使用されている石は、長方形の形の整ったものを用い、石室内面には面を揃えるために若干の加工を施している。奥壁は二枚の石を用いて作られており、石組の状態は、まず左側の石を据え、その後に左側の石を据えている。

奥壁が築かれた後に、左右の側壁が奥壁側から据えられている。二段目からは、四角形の扁平な石が積み上げられている。

石室プランは、略長方形を呈し、奥壁側で幅 1.6 m 、玄門付近で 1.5 m 、玄室長 2.1 m を測る。

床面は腰石周辺に大ぶりの角礫を用い、中央部は、小ぶりの礫を使用して丁寧に仕上げている。

墓壙は、地山から掘り込まれており、奥壁付近で 1 m 強を測る、さらに腰石を据付けるために部分的に掘り込まれている。遺物は、全く採取されていない。(平ノ内幸治)

(4) 古野第22号墳

墳 丘

尾根筋より少し下った南側斜面に築造されたもので、標高 92 m 程のところに位置している。

墳丘は、開墾によって完全に削り取られているため、盛土状態、墳丘の規模などは、まったく推定することはできなかった。

石室 (Fig.103)

石室を形成する石組は、すべて開墾によって取り除かれており、僅かに床石と、腰石の抜跡のみが確認されただけである。

腰石の抜跡から推定して、石室はほぼ南に向って開口する横穴式石室である。玄室の大きさは、奥壁付近で幅約 1 m 程で略長方形を呈し、玄室は、それ程大きなものでないことがわかる。

床面は、大ぶりの礫を敷きつめその隙間に小ぶりの玉砂利を用いて丁寧に仕上げている。

遺物は、開墾の際に失なわれたとみられ、なら採取されていない。(平ノ内幸治)

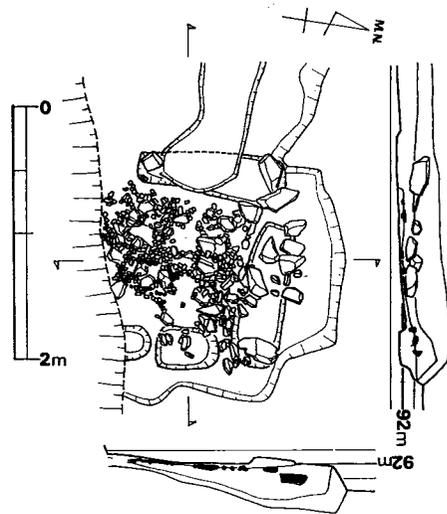


Fig.103 古野第22号墳石室実測図 (1/60)

4 C単位

(1) 古野第19号墳

墳丘

16・17・18号墳を頂部に19・20・21号墳が約10m低い下段斜面に並列する。蜜柑畑の段崖前面の露出した石材が発見の端緒となり、墳丘・周溝等は削平されて全く不明である。

石室 (Fig.104)

両袖式単室横穴式石室である。幅3.7mの長方形プランの墓壇を地山に1.7m掘り下げる。腰石部下を若干掘下げ、奥壁に大きい一枚石を鏡石状に据える。玄室左右側壁腰石は対称に大小の石材を各々横位、縦位に据える。裏込め石は、全体に極めて顕著で、特に奥壁側・玄室両側では著しく、積石は小口を揃えるように積まれ、その間に小割石を充填する。まず、腰石上面を均すように凹部に積み、以上は一段毎に上面を揃えて、わりと丁寧に持ち送る。奥壁側では石材間に埋土を入れられない程密に充填する。

玄室床面は幅1.73~1.8m、長さ1.95~2.15mの右袖がやや後退する歪な長方形を呈する。框部の仕切石は袖角部より羨道側にずれてつくられ、奥壁まで2.3mを測る。床面は二次にわたり敷かれており、第一次敷石は、腰石際に大きめの平石を敷きつめ、玄門側は残らないが全面にやや小さめの平礫を敷き、その上面より耳環・玉類が出土しており、明らかに第二次敷石の下にみられるものである。第二次床面は、第一次敷石の上に大きい平石を特に奥壁寄りに敷く。更に長い石材で奥壁際より0.65~0.8mの幅を持って屍床状の区画を設ける。同様の区画は、本古墳群中12号墳にもみられる。この第二次床面上より勾玉、須恵器片が出土している。

羨道部は、先述の框石から70cm前後羨門側に更に仕切石を3個縦列してつくり、その間はやや大きい敷石を敷く。墓道側が削除されるが、右壁羨門部から前庭が開くことから、羨道部はほぼ残存すると思われる。

閉塞は、羨道部にほぼ残る。まず羨門側仕切石部より羨門側に人頭大の石材を積み、全体として框石部から羨門部に到るまで、約30個をもって閉塞する。最高部は羨門側仕切石部にあり、削平上面まで残る。石材は花崗岩・安山岩・軟質頁岩等を用いる。

遺物出土状態

玄室第一次床面上から、耳環2、管玉1、水晶切子玉4、ガラス丸玉6、ガラス小玉1点が出土した。これらは、中心よりやや奥壁寄りの右側壁寄りに略集中する。頭位を東にとり、奥壁に平行に屍体安置したものと推定される。第二次床面土からは、丁字頭勾玉1点と、玄門部左に原位置を保つ須恵器平瓶と刀子1点がみられる。この他に、玄門部右壁寄りに、長頸壺胴部片3点がみられるが、追葬の際片付けられたものか、盗掘の際の残片なのかは明確でない。

遺物

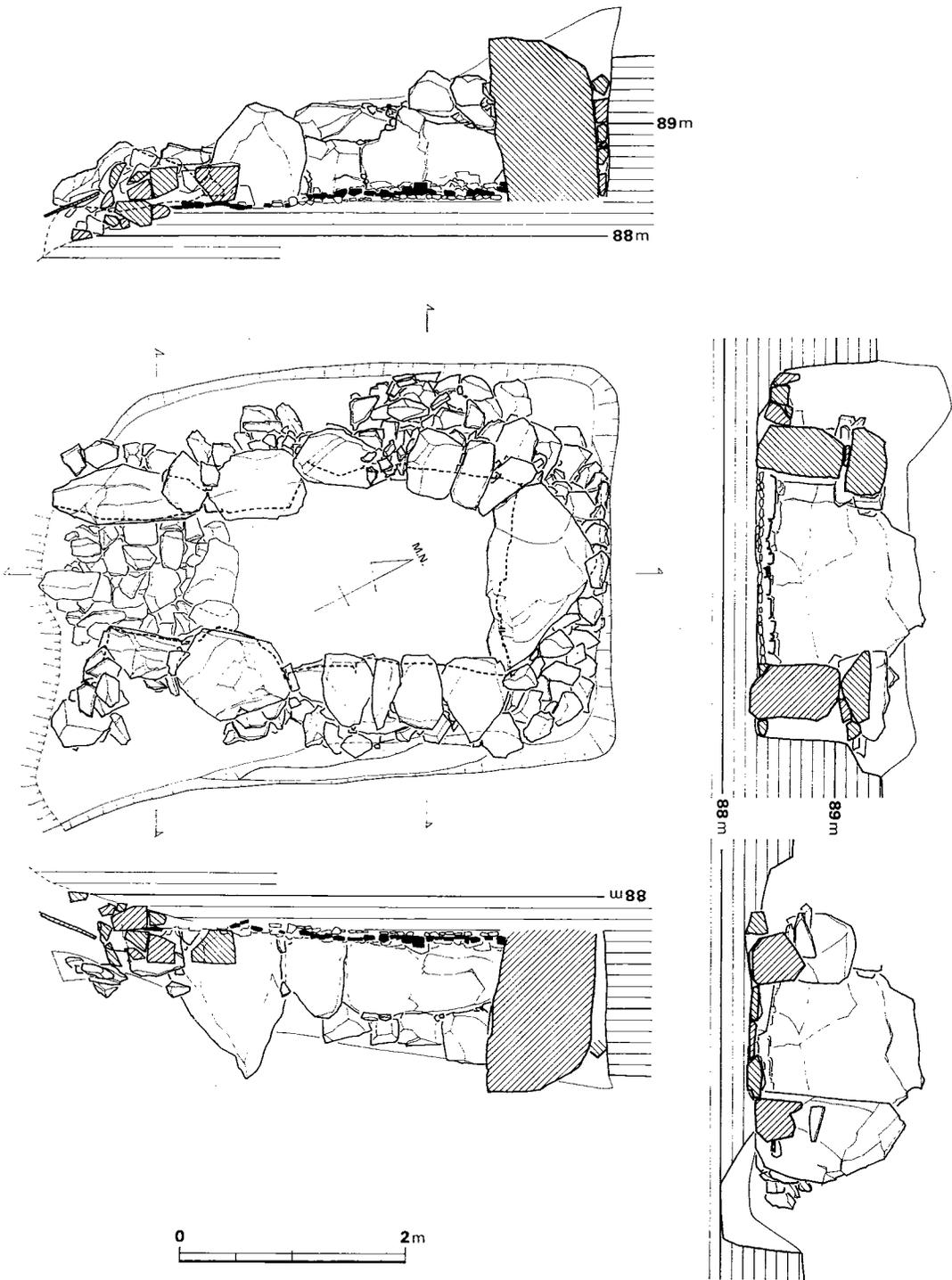
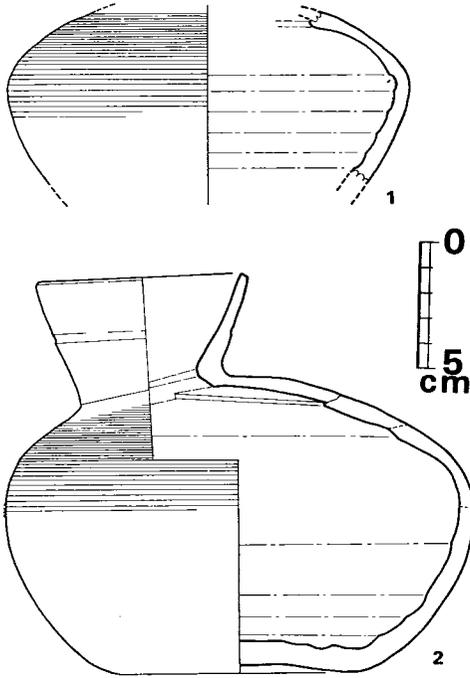


Fig.104 古野第19号墳石室実測図 (1/60)

須恵器 (Fig.105)



1は玄門右壁寄りの長頸壺片である。頸部近く内面に段を残し、肩に稜はつくらないがかなり張子器形を有する。外面上半にカキ目を施し、他は回転横ナデにより、特に内面には強いナデで稜線がみられる。胎土に細砂いくらか含み、焼成堅緻で外面黒色、内面暗青灰色を呈する。

2は、玄門部床面から潰れた状態で出土した平瓶である。肩に稜をつくらず丸味を帯びて、中心よりかなり扁って短い頸部をつける類である。口径8.3cm、器高15.9cm、胴最大径18.4cmを測る。胴上部の円孔を上より塞いだ後、頸部孔を穿ち、頸部を接合している。胴上へう削半は細かく、丁寧なカキ目調整を施し、以下はりの後、回転ナデを行なう。他部は回転ナデを行なう。底部内面は指押圧痕が7~8個所みられ、外面は一方向へのナデつけがみられる。胎土に細砂・粗砂をかなり含み、焼成堅緻で、灰黒色~赤黒色を呈する。

Fig.105 古野第14号墳出土須恵器実測図 (1/3)

耳環 (Fig.106-1・2)

対になる銀環2点である。径1.9cmでやや小型の類で、断面やや楕円形なとる。折損時の観

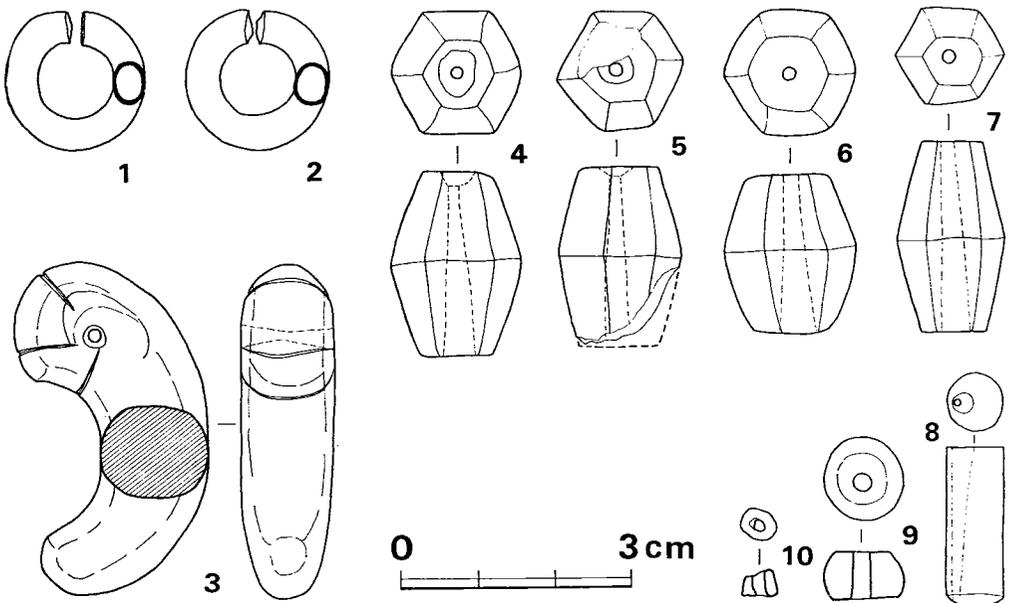


Fig.106 古野第19号墳出土装身具実測図 (1/2)

察により、銀胎の中空で、中に銅等の痕跡は全くみられない。

勾玉 (Fig.106—3)

濃緑色の碧玉製丁字頭勾玉である。厳密に3沈線が直角にならず、幾分鋭角に刻んでいる類である。全体に丁寧に研磨されており、稜線は明確ではない。孔周縁両面が窪み、孔は両面より穿孔する。長さ4.4cm、頭部幅1.7cm、厚さ1.2cmを測る。

水晶切子玉 (Fig.106—4・5・6・7)

長さ2.4cm、最大径1.7cmの類(4・5)、長さ2.1cm、最大径1.75cmの短かく太いタイプ(6)、長さ2.5cm、最大径1.4cmの細く長いもの(7)など変化をみせる。うち4・6はかなり磨滅して稜線が入味を帯びる。

管玉 (Fig.106—8)

碧玉製で、上端が丸くなる異形の類である。長さ2.1cm、径0.78cmを測り、中心よりひどくずれた位置に片面より穿孔を行なう。

ガラス丸玉 (Fig.106—9)

径1.05cm、厚さ0.65cmを測り、上下面に平坦面をつくる。緑色で気泡多く含む。図示したものの他に、白く腐蝕して実測に耐えないものが5個体分あり、いずれも径1cm前後の緑色の類である。

ガラス小玉 (Fig.106—10)

最大径0.48cm厚さ0.35cmを測るライトブルーのガラス小玉である。全体にかなり歪つである。

刀子 (Fig.107)

玄門部左側平瓶の脇より出土している。身長5.8cm、関部幅1.2cmを測る刀子で茎部は欠損する。茎部に部分的に木質を残し、関は両角関につくる類である。

(中間研志)

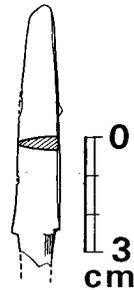


Fig.107 古野第19号墳出土鉄器実測図 (1/2)

(2) 古野第20号墳

墳 丘

19・21号墳とともに16・17・18号墳より一段下に並列する小群をなす。蜜柑畑の南崖前面に露出した石材が発見の端緒となり、上面は全く削平されており、墳丘・周溝等是不明である。

玄室前面、玄門部から墓道まで崖で削除されており、玄室のみが残るものである。

石室 (Fig.108)

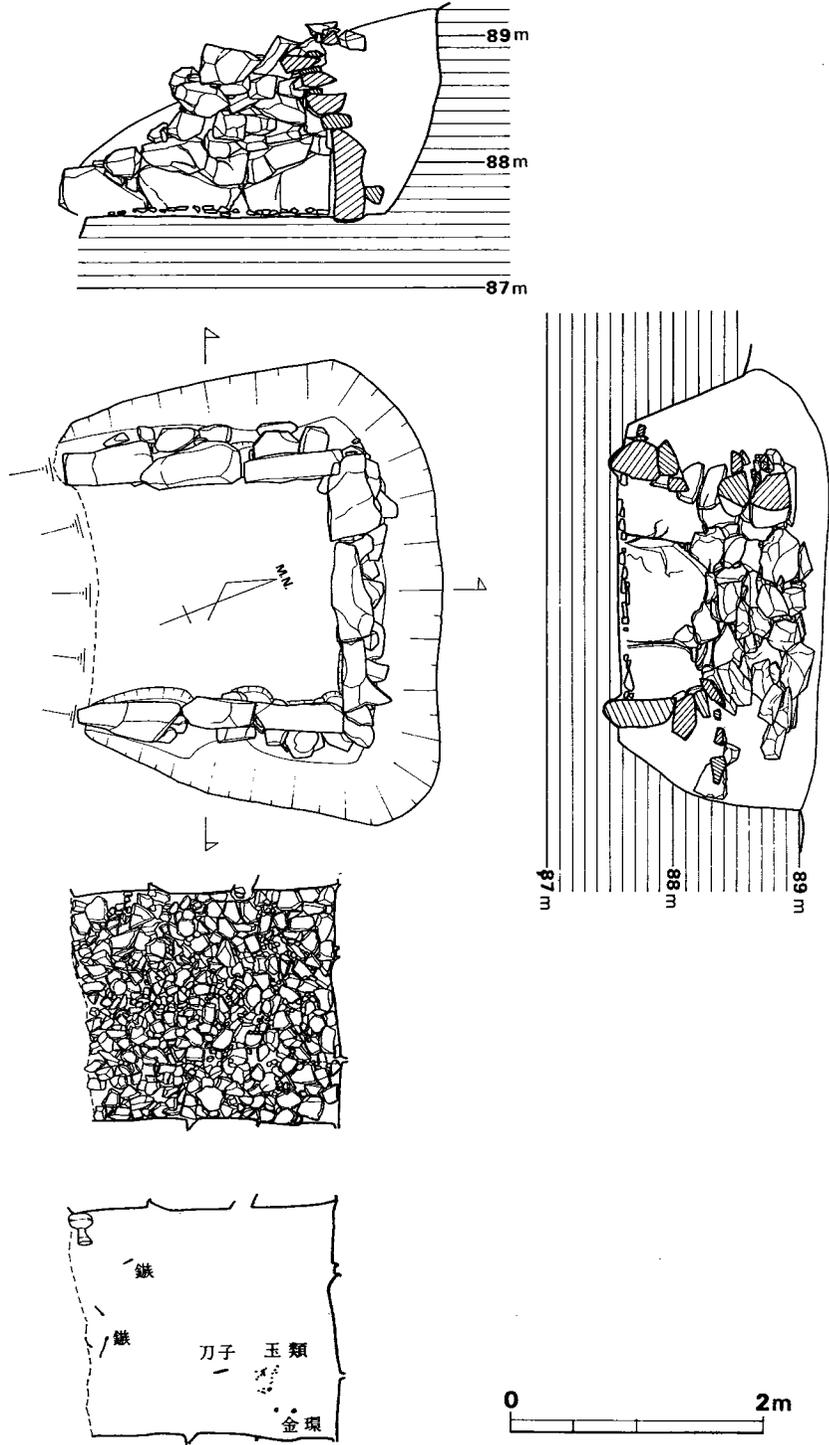


Fig.108 古野第20号墳石室実測図 (1/60)

主軸方位N20°Eをとる横穴式石室である。前面を削除されている為、袖部分以下は残らない。地山を1.6m掘り下げ、幅3.7mの墓壇をつくる。腰石下を5~15cm掘り込み、やや小振りの腰石を据える。腰石と墓壇最下部の間に腰石を支えるように若干の裏込め石を入れる。奥壁に3個、両側壁に各々3個の腰石を用いる。奥壁は中央の腰石が大きくそれを挟むように両側に各石を縦位に据える。両側腰石は横位に用いる。石積みは、基本的には小口を揃えるように持ち送るが、全体としてかなり雑で、内面の出入りを激しく、間隙の大きい部分もみられる。一段目では腰石の上面凹凸をならすように積むが、二~三段目以上になると各段上面が揃わず雑になる。各積石間隙には小石・土砂を充填する。

床面は幅1.85~1.75m長2.05mが残り、若干手前にせばまる長方形プランをなす。袖石は残らないが、須恵器長頸壺の出土状態などから、現存する部分までが丁度玄室の大きさを示すのではなかろうか。

床面敷石は密に敷かれ良く残る。腰石際は大きめの石を使用し、中央部でやや小さめになる。また、大きめの石の間隙に玉砂利・小角石をつめており、本古墳群中でも6号・13号墳などに顕著な例がみられる。

遺物出土状態

玄室床面より須恵器・耳環・玉類・鉄鏃類が検出されている。左壁最前端に横転して須恵器長頸壺が出土する。玄門近く中央部に鉄鏃3本・刀子1本がみられる。奥壁寄りの東側には、金環2点が対になり南北に15cm離れてみられ、その西側に勾玉1点、水晶切子玉2点、碧玉製管玉1点、ガラス丸玉12点、土玉1点が集中して検出される。これら耳環・玉類の出土状態は、幅1.85mの奥壁寄りに主軸に直交して東に頭を置いた葬法を推定させる。玉類は首~胸上部の位置に当たり、首飾りと推定させる。

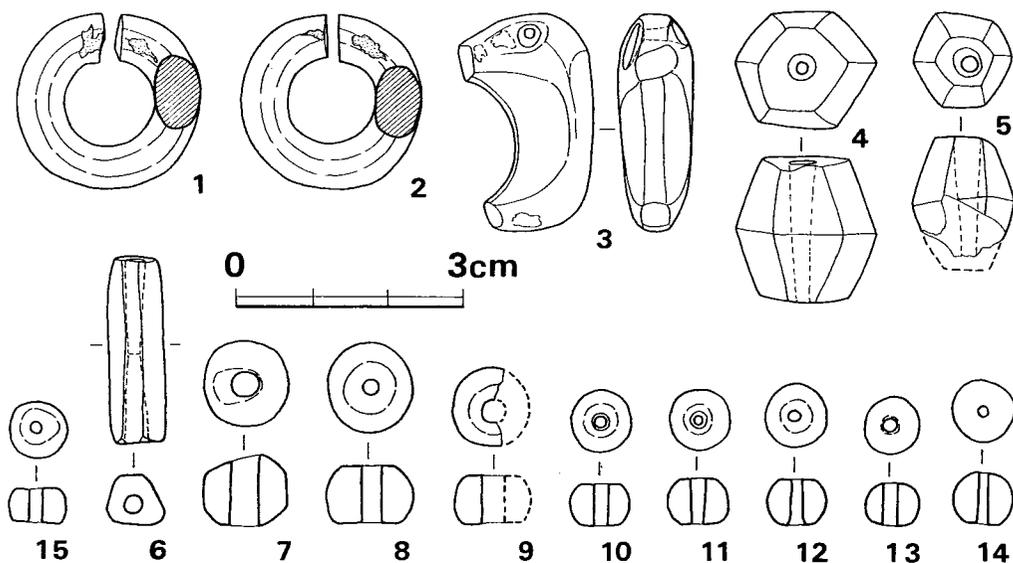


Fig.109 古野第20号墳玄室床面出土装身具実測図(実大)

遺物

金環 (Fig.109-1・2)

銅胎・金張りの残り良好な一対となる金環2点である。径2.4cm, 幅0.6×0.95cmを測る幅広い類である。中は空洞状となり, 筒状の銅に金を張ったものかと推定される。

勾玉 (Fig.109-3)

半透明黄褐色の瑪瑙製である。長さ2.95cm, 頭部幅1.7cm, 厚さ1.0cmを測る。孔は頭部上端寄りに穿たれ, 孔両面は広く窪む。製作時の稜線がかなり明確に残る。

水晶切子玉 (Fig.109-4・5)

短かく太い4と, 小型の5の2点が検出された。4は, 長さ1.95cm, 最大径1.88cmを測り, 表面はかなり擦れている。5は, 下半欠損するが, 復元長1.75cm, 最大径1.3cmを測り, 内面にひどくひびが入る。孔は, 4・5孰れも片側からの穿孔を行なう。

管玉 (Fig.109-6)

灰青色の碧玉製である。長さ2.5cm, 最大径0.7cmを測り, 断面でみる如く, 3面を面取り状に削っており, 通有の管玉とは異なる。孔は両面より穿孔する。

ガラス丸玉 (Fig.109-7~14)

図示した8点の他に腐蝕著しく実測に耐えないものが4個体分あり, これらはいずれも淡緑色大型の類である。大別して, 径1.15~1.0cm厚さ0.9~0.65cmの大振りの丸玉(7・8・9)と, 径0.8cm, 厚さ0.55~0.7cmの小型の類(10~14)に分けられる。うち7の1点のみが紺色の類で, かなり歪つになる。8・9はいずれも上下面に平坦面をつくり, 淡緑色の類で, 表面やや白っぽくなるが残りはい。小型の類には, 上下面に平坦面をつくるもの(10・11), 片面のみ平坦面をつくるもの(12・14), 平坦面をつくらないもの(13)などがあるが, いずれも緑色でわずかに腐蝕が進行している。

土玉 (Fig.109-15)

径0.75cm, 厚さ0.5cmを測り上下面に広く平坦面をつくる白玉状の土製玉である。胎土精良で表面は黒色を呈する。

鉄鏃 (Fig.110-1・2)

1・2ともに片丸造棘被篋鏃箭式に属し, 同規格品である。全長16.8cm, 鋒幅0.9cm, 莖長5.0cmを測る。莖部には若干の木質が残る。

刀子 (Fig.110-3)

全長10.5cm, 身長3.7cm, 関部身巾1.5cmを測る。莖が長く,

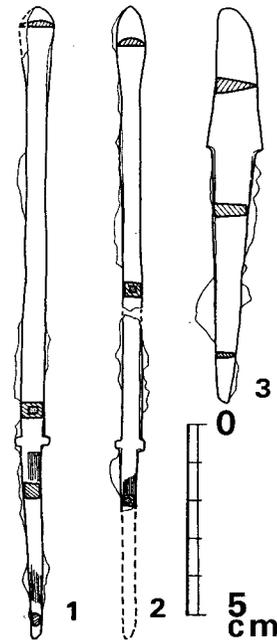


Fig.110 古野第20号墳出土鉄器
実測図 (1/2)

小さな両関をつくり、鋒に細くなる類である。

須恵器 (Fig.111)

1は口径24.5~22cmで焼き歪みを生じ、器高22.7cm、胴最大径18.4cmを測る。口縁下2.5cmの外面にナデによる稜を作り出し、胴上半はカキ目を施す。胴最下端~底外面は粗い左廻りの篋削りのままで、他面は回転による横ナデ調整が施される。頸部外面にかすかにシボり上げた痕が残る。胎土に細砂粒多量を含み、焼成いくらか軟質で、暗灰褐色を呈する。

2は、小型の蓋形の須恵器である。上面へこむボタン状のつまみをつけ、短い返りを有する。受け部径5.0cm、最大

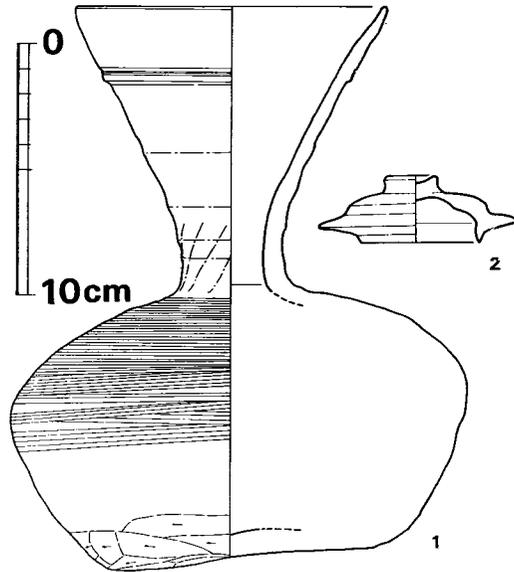


Fig.111 古野第20号墳出土須恵器実測図 (1/3)

径7.9cm、器高2.6cmを測る。天井部内面に強い指オサエがみられ、他は回転ナデによる。胎土に細砂幾らか含み、焼成幾分甘く、暗褐色~灰黒色を呈する。全体にやや歪つで、粗いつくりである。長頸壺・平瓶等の蓋になるものであるが、当石室出土品中には該当するものはない。

(中間研志)

(3) 古野第21号墳

石室 (Fig.112)

略南西に開口する横穴式石室で、他墳と同様に大破しており、奥壁寄の一部が現存するにとどまる。

墓壙は幅3.5m弱(上端値)で、奥壁側の深さは1.5m。玄室周壁基部には、壙底を僅かに掘り下げて腰石を据えつけ、小石材を用いて根締め、裏ごめを行なっている。

石室内法は、奥壁部の幅が1.85m、左袖石までの長さ約2.9mで、不整長方形プランを呈する。墓壙底および床面(礫層上面)は、いずれも略水平位にある。

(石山 勲)

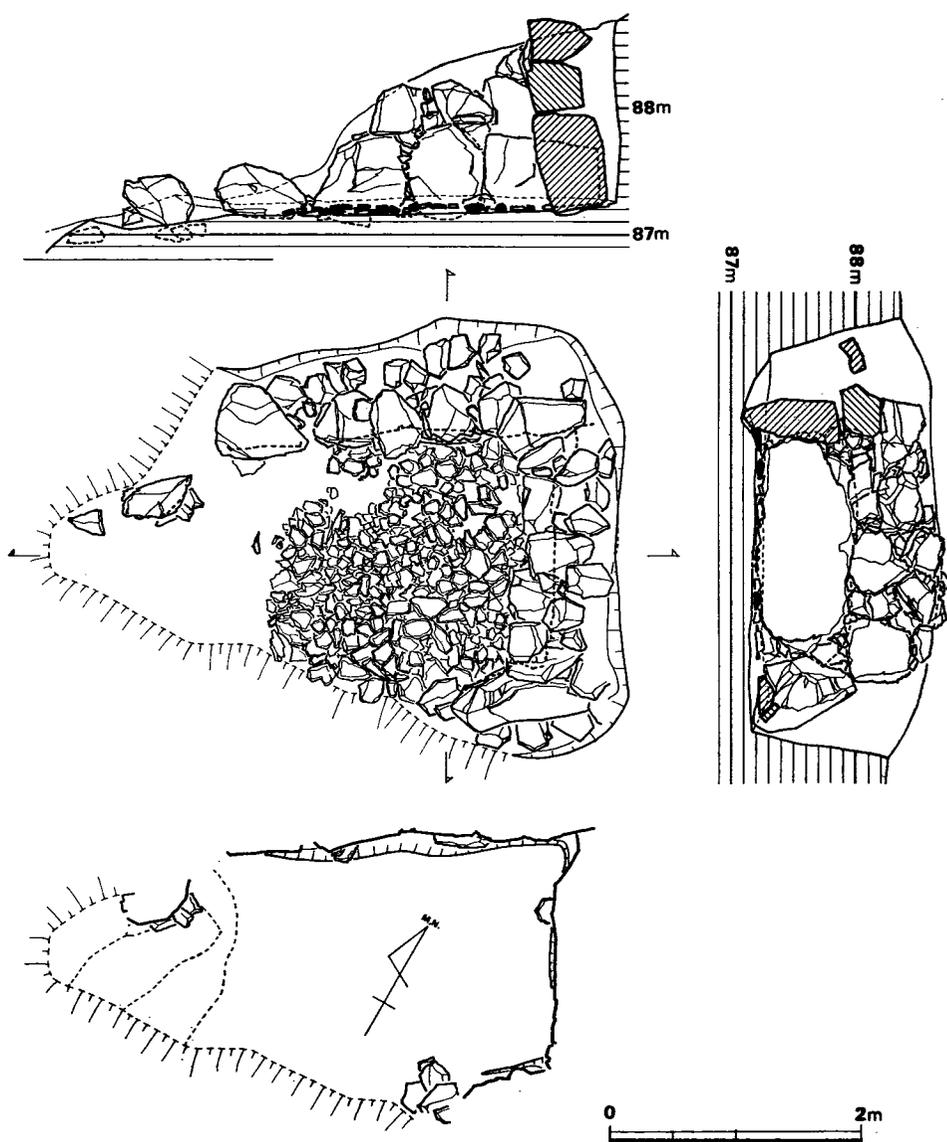


Fig. 112 古野第21号墳石室実測図 (1/60)

5. D単位

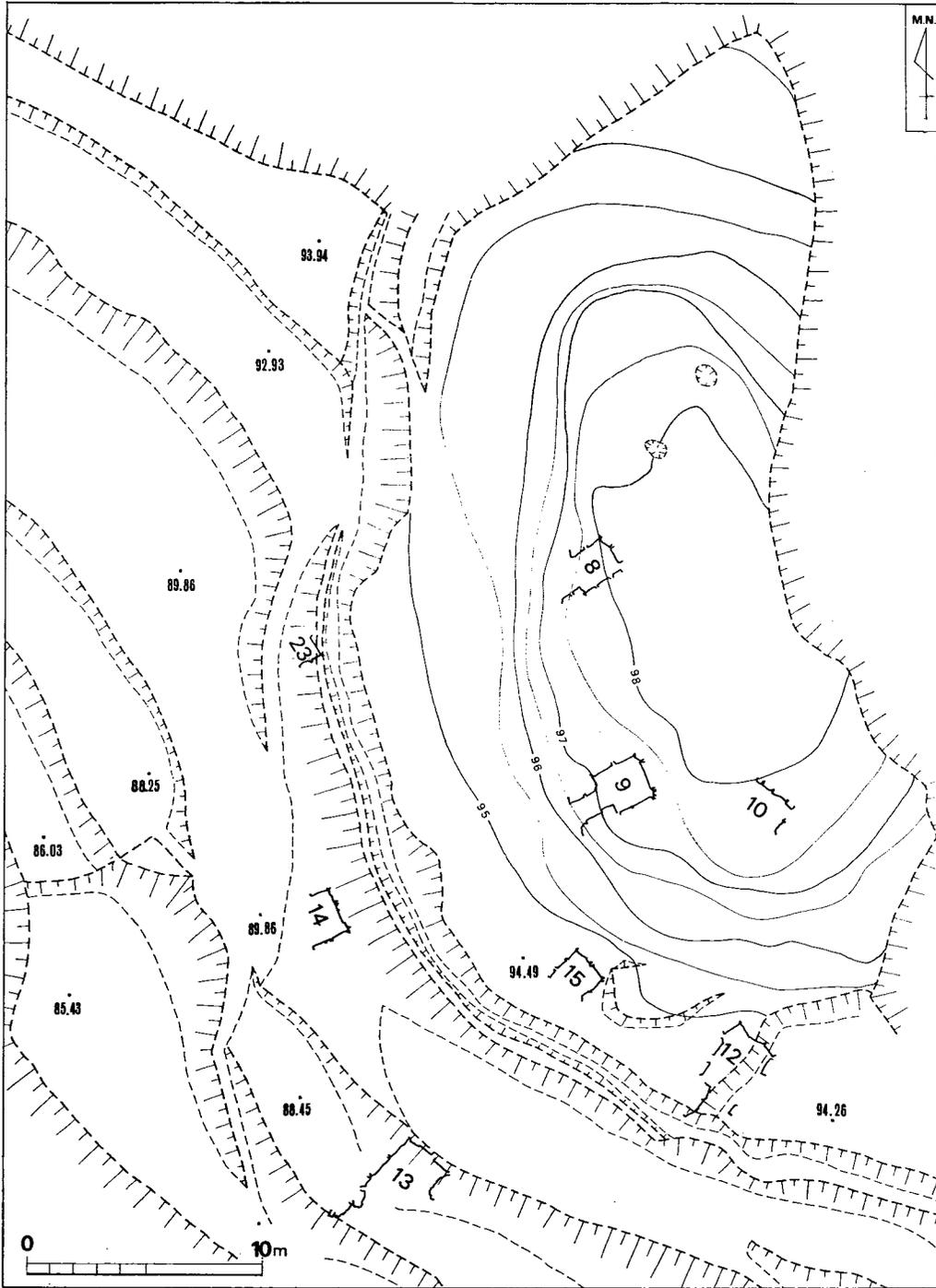
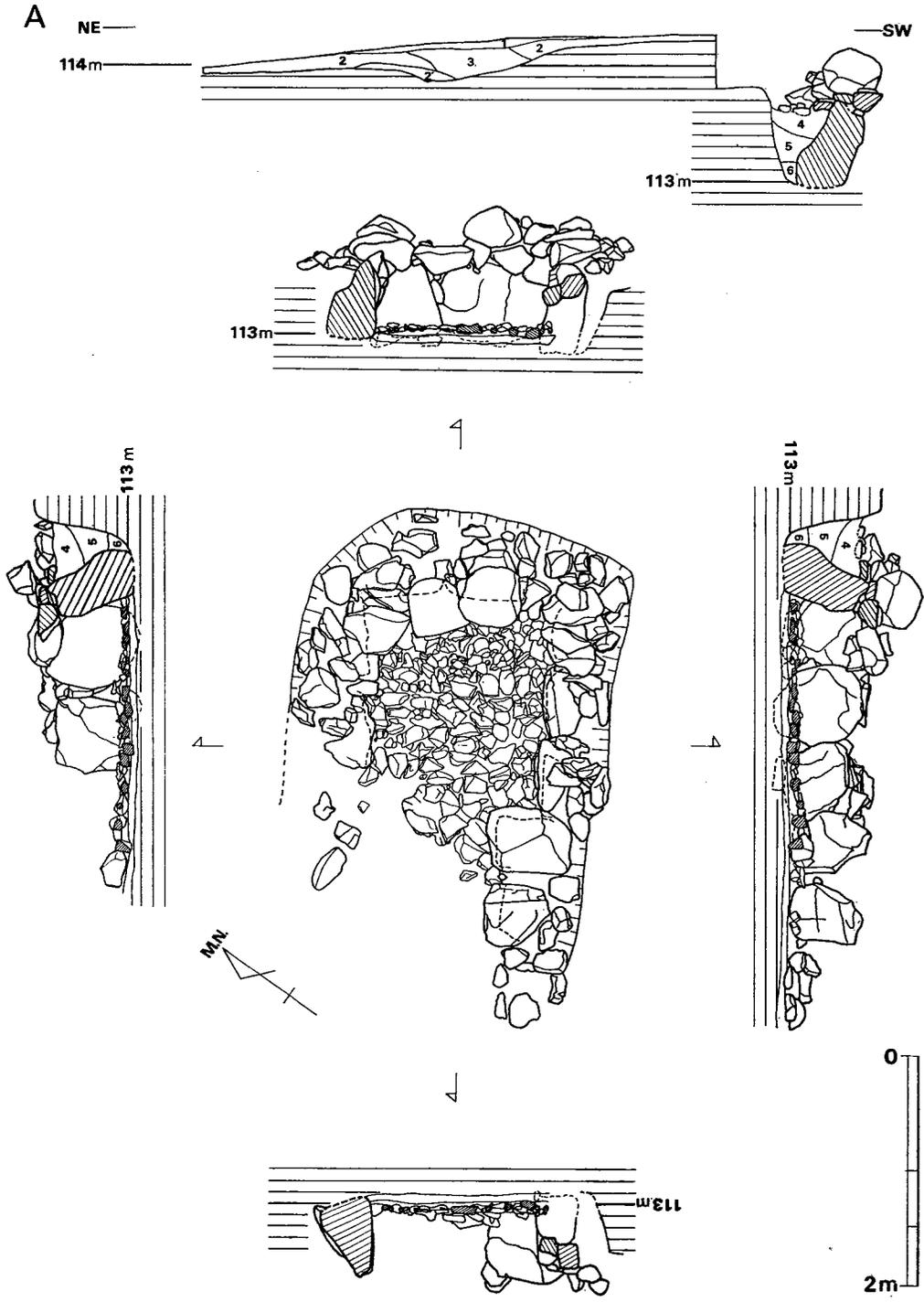


Fig.113 古野古墳群D・E単位全体図 (1/300)

(1) 古野第8号墳



- | | | | |
|--------------|---------------|-----------|----------|
| 1 表土 (褐色土) | 2 粘質黄褐色土 | 2' 砂質赤褐色土 | 3 砂質黄褐色土 |
| 4 バイラン土混赤褐色土 | 5 バイラン土混淡黄褐色土 | 6 粘質赤褐色土 | |

Fig.114 古野第8号墳石室実測図 (1/60)

墳 丘

墳丘は、北側・西側・羨道部が崖法面によって削られ、東側・南側も開墾によって殆どとり払われているが、南側に若干の盛り土を残しており、9号墳Aトレンチ土層断面図 (Fig. 118) によって墳丘径は約9mであったと推定される。

墓壙は、西側および墓道側が失われていて詳細は不明であるが、最大巾2.8m、全長約4.5mで墓壙から墓道にかけて掘り方がほぼ直線的にのびていたと考えられる。墓壙は地山の自然傾斜を利用して約60cmを掘り込み、墓壙と石室用材との間には黄褐色粘質土と黄褐色砂質土を交互に版築して裏込めしている。

石 室 (Fig.114)

内部主体は主軸をN-55°-Eにとり南西方向に開口する全長約4.5mの単室の横穴式石室である。

玄室は、南西側玄門の北側のピットが仕切石の掘り方と考えられることから長さ1.85mと推定され、奥壁側で巾1.52mをはかる。奥壁は床面よりの高さ70cmの石2個を腰石として用いて、その上に1ないし2枚の石を横積みにしてせりだしている。南東側壁は巾70cm、床面よりの高さ70cm前後の石3個を腰石とする。北西側壁も南東側壁と同大の石2個が残存することから同様に3個の腰石をもって築かれていたと考えられる。床面には破壊をうけた西側部分を除いて20cm大の平石が敷石されている。本来は全面に敷石があったと考えられる。玄門は南西側で高さ70cmの方柱状の石を用いており、欠損する西側玄門もほぼ同様であったと考え

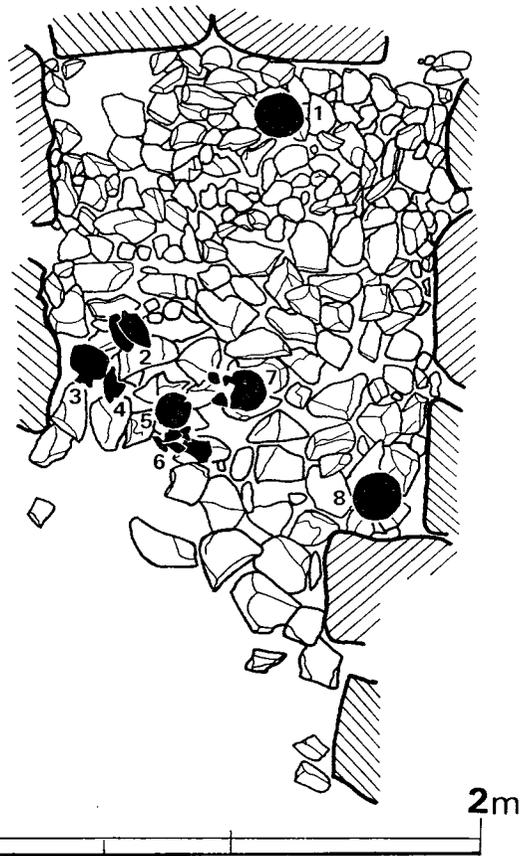


Fig.115 古野第8号墳石室内遺物出土状態実測図 (1/30)

ると、閉塞石抜去痕の大きさからみて最大巾50cmの石を床面下に深く埋めこんで仕切石とし、玄門間の距離は70cm以上であったと推定される。

羨道は南西側のみ玄門から2mほぞ残っているがこれも崖で切られており詳細は不明である。墓道は崖法面で切られて全く検出できなかった。

遺物出土状態 (Fig.115)

玄室床面上からは刀子片4点, 須恵器の長頸壺1, 広口壺1, 杯2および白磁碗2, 瓦器碗1が出土した。他に玄室埋土・墳丘中より須恵器片が数点出土した。

遺物

出土品は次のとおりである。

- | | | |
|--------|-----|-------|
| (1) 工具 | 刀子 | 4点 |
| (2) 土器 | 須恵器 | 4個体以上 |
| | 長頸壺 | 1個体 |
| | 広口壺 | 1個体 |
| | 杯 | 2個体 |
| | 白磁碗 | 2個体 |
| | 瓦器碗 | 1個体 |

刀子 (Fig.116—12~15)

いずれも破片である。12は残存長2.8cm, 最大厚1.5mmである。13は残存長4.8cm, 最大厚3mm, 14は残存長3.7cm, 最大厚3mm, 15は残存長7.4cm, 最大厚4mmである。

須恵器 (Fig.116)

長頸壺 (Fig.116—1~5)

1は, 口縁部径9.2cm, 胴部最大径14.5cm, 器高17.9cmである。頸部および胴部下半と, 口縁部・胴部・内面にヨコナデ調整を施す。口縁部は外反し端部は丸味を帯びる。頸部と胴部を接合した痕跡がある。胴部は張り出し最大径で稜をなす。ヘラ切底で外側にはった高台を付ける。底部内面に粘土片が付着している。灰褐色を呈し, 焼成良好, 硬質である。

2は, 頸部と胴部以下を欠損しており胴部の張り出しが稜となる。灰褐色を呈し硬質である。3は, 胴部上半と頸部を欠損し, 胴部の張り出しで稜となっており, 高台を有する。内外面ともヨコナデ調整を施し, 焼成は良好, 暗灰色を呈す。4は, 頸部を欠損し, 胴部上部に1条の沈線があり, 胴部最大径で張り出し稜をなす。胴部上半, 高台, 底部, 胴部内面にヨコナデ調整を施し, 底部に窯じるし有り。焼成は良好, 明灰色を呈す。5は胴部以下を欠損する。胴部との接合痕がみられる。口縁部は丸味をもち, 頸部下部に2条の沈線がある。内外面ともヨコナデ調整し, 暗灰色を呈す。焼成は良好で硬質である。

広口壺 (Fig.116—6, 7)

6は, 口縁部の一部のみ残存する。端部に丸味を持ち, 内外面ともヨコナデ調整を施す。砂粒混入土を用い, 焼成は良好, 灰褐色を呈す。

7は, 口縁部径10.3cm, 胴部最大径15.8cm, 器高18.2cmである。口縁端部はとがり, 頸部を後からとりつけた痕跡と輪づみの跡が2ヶ所みられる。胴部上半にカキ目, 下半の一部に自然

釉がみられる。底部は平底で多少上げ底気味である。砂粒混入土を用い、硬質で灰褐色を呈す。

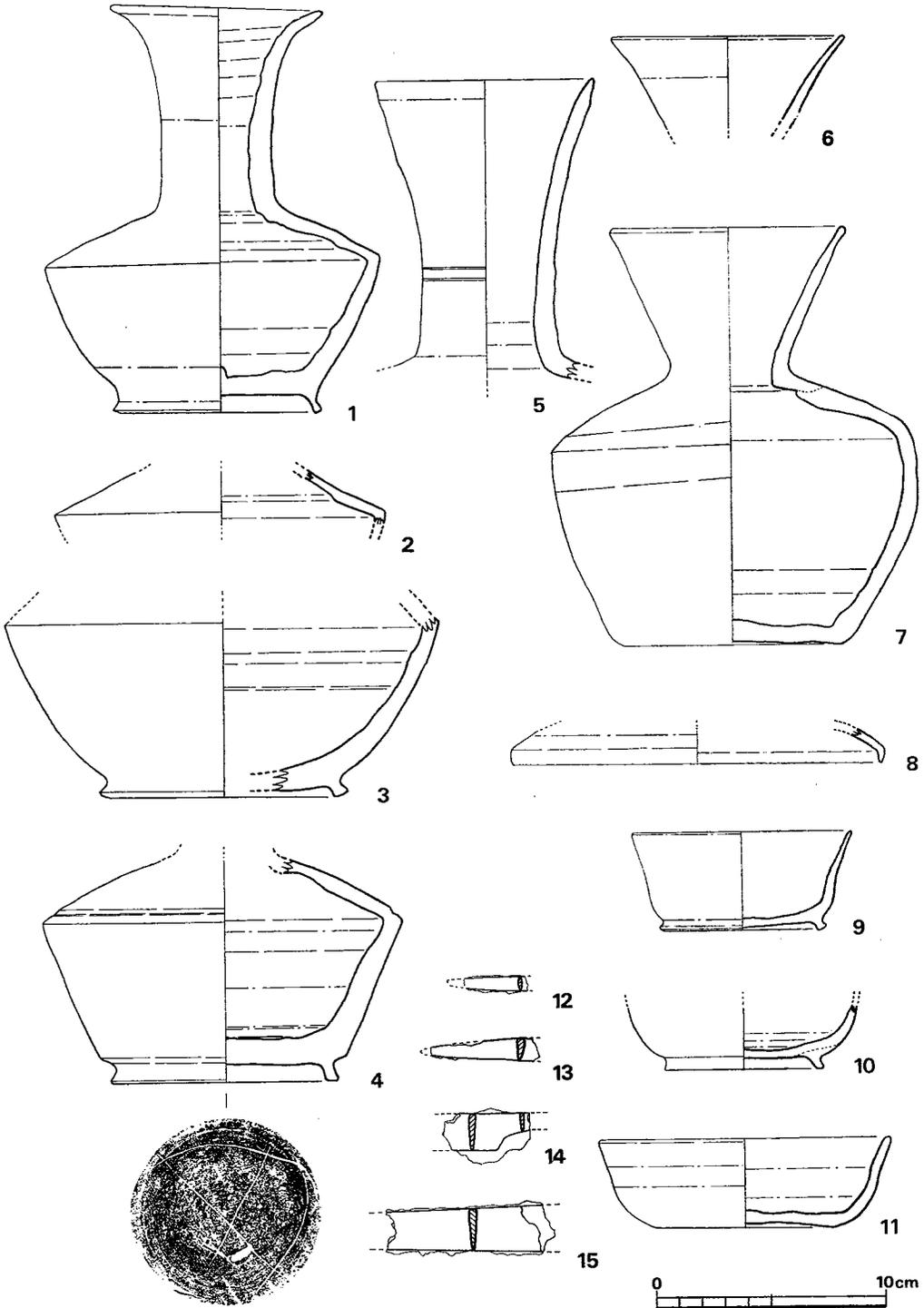


Fig. 116 古野第8号墳出土遺物実測図1

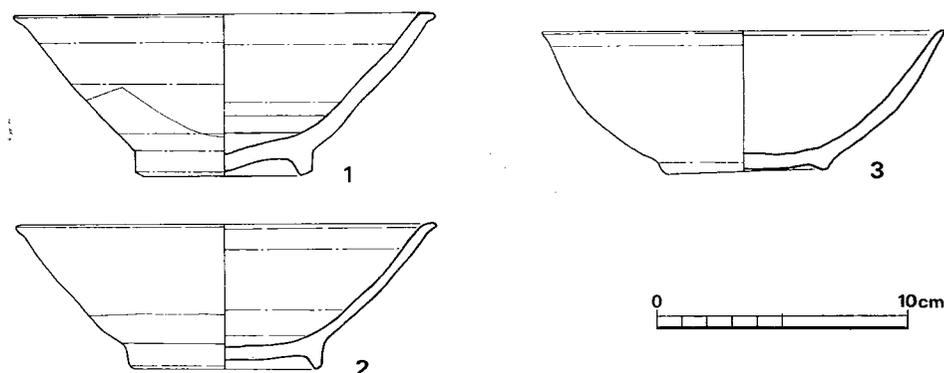


Fig.117 古野第8号墳出土遺物実測図2

杯 (Fig.116-8~11)

8は、蓋の口縁端部の一部である。表にヘラ削り、裏にヨコナデ調整を施す。表面に砂粒が多くみられ、焼成良好、表は灰褐色、裏は暗灰色を呈す。9は、口径9.6cm、器高4.3cmである。口縁部が外反し、口縁端部は丸味を帯びる。低い付高台をもつ。調整は底部内面がナデ、体部の内外面がヘラ切底である。焼成が不良で黄灰白色を呈する。10は、底部のみで、付高台をもち底部中央でやや下る。調整は、内、外面とも横ナデで、焼成は良好で暗灰白色を呈す。11は、口径12.8cm、器高3.9cmである。口縁部はやや外反し、端部は丸味帯びる。底部は上げ底でヘラ切りがみられる。調整は底部内面でナデ、体部は外面でヨコナデ、体部下部はヘラケズリである。焼成は良好で明灰色を呈す。

白磁 (Fig.117-1, 2)

白磁碗1は、口径16.6cm、器高6.4cm、やや厚手である。口縁端部は水平である。主部には水引調整のあとがみられる。高台は切高台で直立し、底部に目痕がみられる。胎土は灰白色で、釉は青味帯びた灰白色の釉をかけているが、流しがけによるものらしく内外面とも釉のたれた状態が認められる。2は、口径16.6cm、器高5.7cm、薄手で口縁端部は外反する。器形は美しく整っており、高台は切高台で直立する。胎土は黄灰白色で灰緑色の釉をかけている。

瓦器 (Fig.117-3)

口径16cm、器高5.7cmである。体部は自然なふくらみもち、口縁でやや外反し、端部は丸味帯びるが、全体的に器形のゆがみが甚しい。低い付高台をもつ。調整は体部が内外面ともヘラケズリ、底部内面にナデ、高台とりつけ部にヨコナデである。焼成不良で灰白色を呈す。

Tab.24 古野第8号墳遺物番号対照表

遺物番号	出土状態実測図番号	実測図番号	図版番号
1	1	Fig.117-2	PL.108-2
2	2	Fig.116-3	---

3	3	Fig. 116-7	PL. 107-3
4	4	〃 4	〃 2
5	5	〃 11	〃 4
6	6	〃 1	〃 7
7	7	Fig. 117-1	PL. 108-7
8	8	〃 3	〃 1
9	—	Fig. 116-5	PL. 107-1
10	—	〃 9	〃 5
11	—	〃 12	PL. 108-6
12	—	〃 13	〃 5
13	—	〃 14	〃 4
14	—	〃 15	〃 3
15	—	〃 2	—
16	—	〃 6	—
17	—	〃 8	—
18	—	〃 10	—
19	—	—	PL. 107-6

(2) 古野第9号墳
墳丘 (Fig. 118)

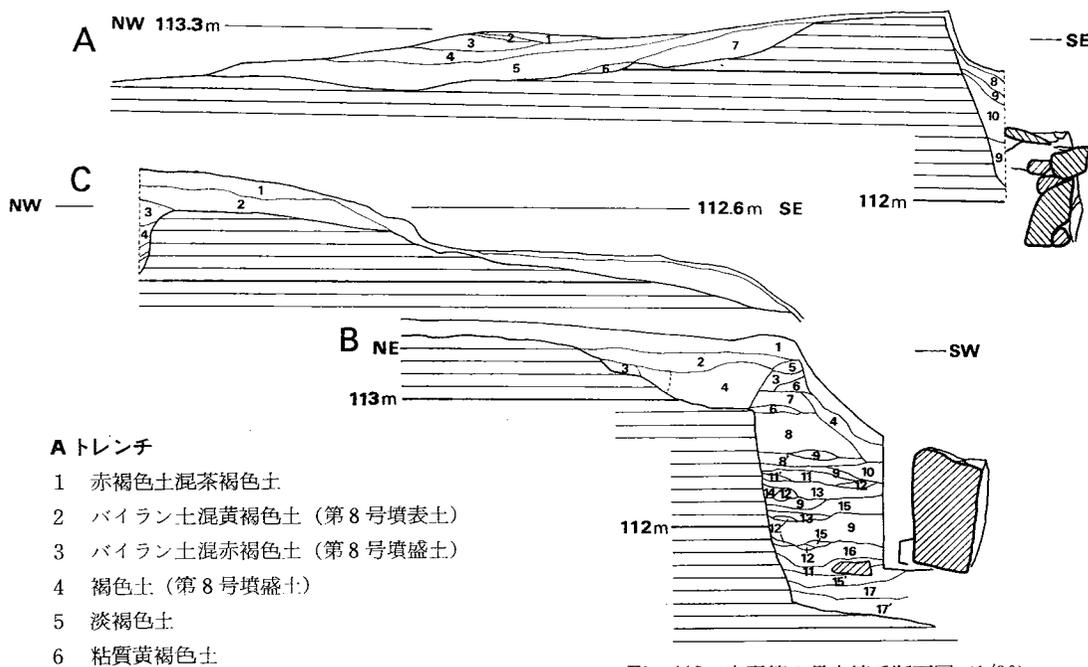


Fig. 118 古野第9号古墳丘断面図 (1/80)

封土は既にそのほとんどが流失し、トレンチによってわずかに墳丘裾部を検出し得たのみである。Aトレンチの土層断面の観察によると石室中心より4.5mの地点で旧封土と思われる粘質黄褐色土層(7)の端部と地山の傾斜変換点が一致しており、このあたりが墳丘の北裾であろう。一方トレンチの土層断面においては封土最下層と思われる茶褐色土層(2)が石室中心より4mの範囲で堆積しており、当墳は南北方向に8~9mの径を有す小円墳であったと思われる。レベルの高い東側のBトレンチでは、こうした傾斜地立地の古墳に通有の周溝状の掘り込みは認められず、墓壙端から1.4mの範囲では地山が階段状に墓壙端へ傾斜している様子が観察された。あるいは石室構築作業等の便宜上整形されたものかもしれない。

隣接する10号墳・8号墳のうち至近距離にある10号墳との間にはサブトレンチを入れてみたが削平が地山まで及んでおり、その先後関係を明らかにするには至らなかった。一方Aトレンチにおいては、9号墳の封土上に堆積した淡褐色土層(5)の上に8号墳の封土(2~4)がのっており、当9号墳は少なくとも8号墳より先行する事が明らかとなった。

石室 (Fig.119)

内部主体は主軸をN-66°-Eにとり、西南西に開口する全長4.4mの単室、両袖の横穴式石室である。

墓壙は地山面より掘り込まれており、奥壁側が最も深く羨門部で自然傾斜面につながるこうした立地の横穴式石室に通有の形態を示す。奥壁背後での深さは1.56mを測り、墓壙底はほぼ水平を保つ。平面形は左袖部でややせまることがほぼ長方形を示し、墓壙底での幅3.7m、長さ6mと石室規模に比してかなり大きめである。石室は、この墓壙の北西壁に片寄せて築造され

Bトレンチ

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 表土 | 11 バイラン土 |
| 2 茶褐色土 | 11' やや赤味を帯びる |
| 3 炭化物混淡黄褐色土 | 12 粘質黄褐色土 |
| 4 炭化物混赤褐色土 | 13 混バイラン土粘質赤褐色土 |
| 5 粘質赤褐色土 | 14 粘質黄褐色土(やや赤味をおびる) |
| 6 黄褐色土(やや黒ずむ) | 15 赤褐色土混バイラン土 |
| 7 淡黄褐色土 | 16 粘質赤褐色土 |
| 8 炭化物と赤褐色土を含む黄褐色土 | 16' 炭化物を含む |
| 8' 8よりもやや黄色 | 17 バイラン土混黄褐色土 |
| 9 粘質の赤褐色(ややバイラン土を含む) | 17' 赤味が少ない |
| 10 赤褐色土混黄褐色土 | |

Cトレンチ

- | | | |
|--------|--------------|------------|
| 1 表土 | 3 淡赤褐色土 | 4' やや赤味が強い |
| 2 茶褐色土 | 4 赤褐色土混バイラン土 | |

ており、北西壁と石室用材の間が30cm程度であるのに対し、南東壁とのそれは60cm、奥壁裏の北東壁へは1mも余す。石室用材と墓壇壁の間にはバイラン土を含んだ粘質の赤褐色土や黄褐色土を交互に版築しており、奥壁裏では墓壇底より2mの高さまで裏込めされている様子が観察された。石室高もおそらくはこれに近い値ではないかと思われる。

玄室は長さ、幅ともに約1.8mの方形に近いプランである。破壊を受けて腰石程度しか残さないが、腰石はいずれも墓壇底を若干掘りくぼめて据えられ、まわりを根石によって固めている。奥壁には床面より高さ1m、幅1.5mの三角形の大石を据えて腰石としており、その両側には高さ20cm程度の塊石を横積みしている。両側壁とも最下段は2個の腰石よりなり、いずれも奥壁側の腰石の方が大きく、20cm程高い。左側壁では腰石の上に大きめの塊石を2段残しているが横積みと小口積みが併用され、やや持ち送りになっている。袖部は左右とも高さ70cmの

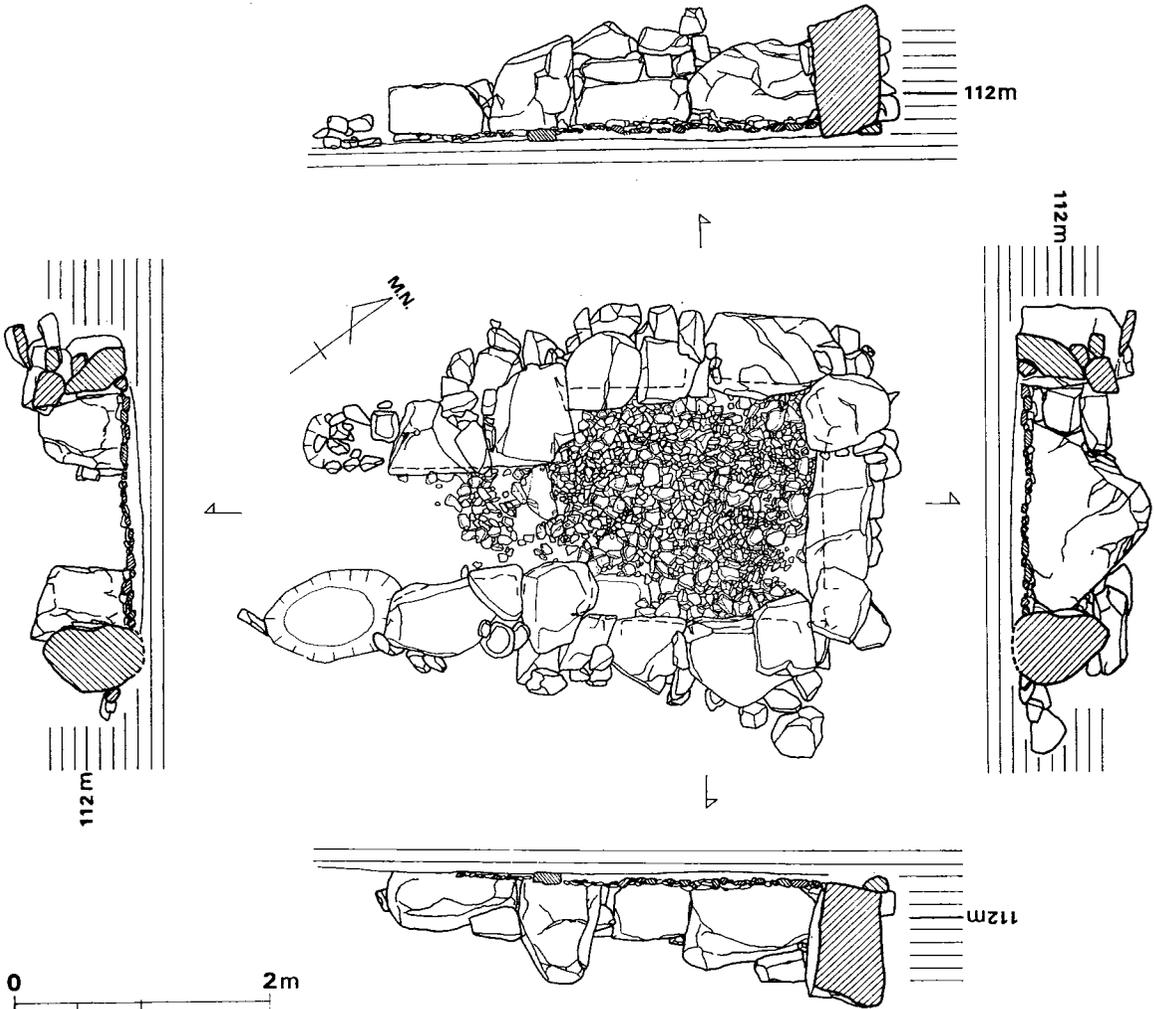


Fig. 119 古野第9号墳石室実測図 (1/60)

方柱状の大石を立てており、その間隔は78cmである。両石間は左袖石に接して幅20cm、長さ44cmの仕切石かと思われる平石がある、玄室床面は5~10cmの厚さで粘質茶褐色土を敷いて整形した上に大小さまざまな礫を密に敷いている。

羨道部は左右とも袖石を含めて3個の腰石より成っていたようであるが、現在ともに先端の1個を欠き、据えつけ痕と根石を残す。右側壁の方が30cm程長かったようで2.6m前後あったと推定される。幅は袖部から先端まで80cm前後を保っていた模様。敷石は後半部にのみ残存。

遺物出土状態 (Fig.120)

石室内では左袖部付近の床面上より直刀1・須恵器若干(杯2・杯蓋1)が出土し、石室外では東南部より須恵器(平瓶・杯・杯蓋各1)が出土した。

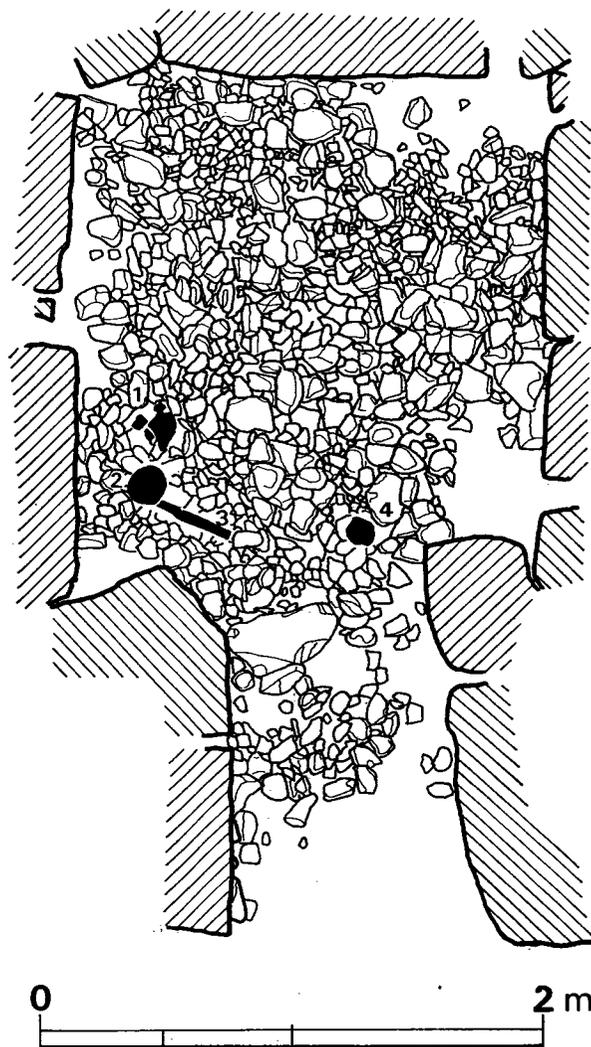


Fig.120 古野第9号墳石室内遺物出土状態実測図 (1/30)

遺物

出土遺物を列記すると次のとおりである。

- (1) 武器 直刀1振
- (2) 土器 須恵器6個体以上
 - 杯蓋2個体
 - 杯身3個体
 - 平瓶1個体

直刀 (Fig.121)

切先及び茎の一部を欠失するが平棟・平造の小刀である。刃わたり46cm前後で切先近くの中1.9cm、厚さ6mm、柄近くで中2.6cm、厚さ7mmを測る。関部に近く中2.5cmの鉄鋸が巻いてあり、関部には鏝の残欠を有す。茎部は中1.5cm、厚さ3mmである。

須恵器 (Fig.122)

杯蓋 (Fig.122-1・2)

1は口径14.8cm器高3.7cmで中心部に径2.3cm、高さ1cmの袂りのほとんどない宝珠つまみを有する。黒色の堅緻な焼成であるが焼き歪みが

著しく、天井部のふくらみの強い形になっており、焼成時にひび割れを生じている。天井部上面はヘラ削りが、内面は仕上げナデが施されており、口縁部は内外面とも横ナデがみられる。2は、全周の6分の1程の破片であるが復元径16.2cm、現存高2.3cmで扁平なつまみを有していたものと思われる。天井部は中心より5.5cmの所まで水平を保ち、そこから急に下降して口縁端部はやや長めの嘴状を呈する。天井部外面は粗い切り離しのままであり、口縁部内外面には横ナデ調整が、天井部内面には仕上げナデが施されている。色調は明灰色で焼成は良好である。

杯 (Fig.122-4~6)

4は、玄室内から出土したもので1の蓋とセットをなすものと思われる。口径13.5cm、器高5cmで高台を有する。体部から口縁部にかけては内湾気味にのびて口縁端部は丸くなっている。付け高台は強くふんばり端部は外方にはね上がる。内面は口縁から体部にかけて横ナデ調整を施し、底部には不定方向の仕上げナデが見られる。外面は体部をヘラ削りした後横ナデ調整を施してあり、高台装着部には丁寧な仕上げナデが見られる。胎土には砂粒を多く含むが黒色で焼成堅緻である。5は、底部を欠くが口径13.7cmで高台を有していたものと思われる。4と同様体部から口縁部へと内湾気味にのびて口縁端部は丸味におさめてある。口縁から体部にかけては内外面とも横ナデ調整であり、底部に近い所ではヘラ削りがなされている。6は、体部の大半を欠失しているが復元口径13cm、器高5.9cmを測る。体部はやや内湾しながらのびて口縁部で軽く外反する。高台は端部が外側へのびて鍵状を呈する。口縁、体部は内外面とも横ナデ調整を、体部下半はヘラ削りを施してある。灰色で焼成は良好である。

平瓶 (Fig.122-3)

口径7.8cm、最大径14.9cm、器高13.1cmを測る。頸部には2条の沈線がめぐり、口縁端部は丸く整形してある。頸部は内外面とも横ナデ調整である。肩部はヘラ削りによって整形してあり、明確な稜を持たない。胴部下半から底部にかけても同様にヘラ削りが施されている。体部上面にはヘラ記号を有す。色調は明灰色を呈し、焼成は良好である。

(蒲原宏行)

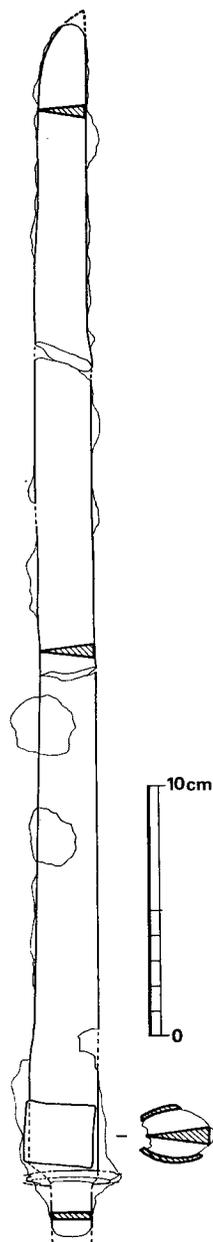


Fig.121 古野第9号墳出土遺物実測図1

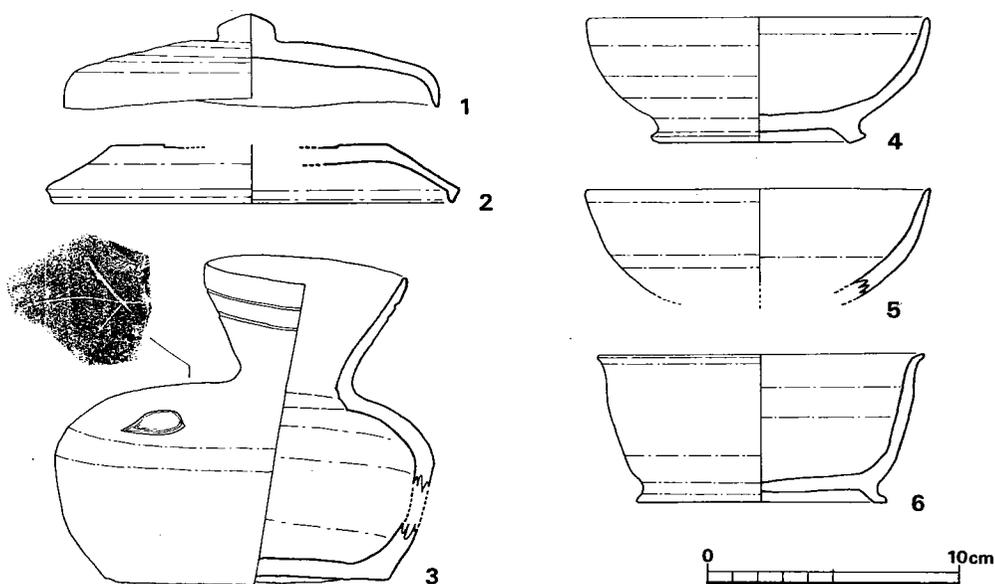


Fig. 122 古野第9号墳出土遺物実測図2 (1/3)

Tab. 25 古野第9号墳遺物番号対照表

遺物番号	出土状態実測番号	実測図番号	図版番号
1	1	Fig. 122-4	PL. 108-2-2
2	2	〃 1	〃
3	3	Fig. 121	〃
4	4	Fig. 122-6	PL. 108-2-4
5	5	〃 3	〃 6
6	6	〃 5	〃 3
7	7	〃 2	〃

(3) 古野第10号墳

墳丘 (Fig. 123)

他の古墳と同様、後世の削平をうけて殆ど墳丘を残しておらず、トレンチによってわずかに墳丘裾部を検出しえたのみである。土層断面図で明らかごとく、墳丘北東裾部では石室中心より4.1m~5.6mの範囲に地山を切り込んだ深さ20cm程度の周溝が観察され、南東裾部でも同じく石室中心より4mの地点で地山整形による傾斜変換点が認められるのもとは径8m前後の小円墳であったと思われる。古墳の南裾は地山が下がっているためほとんど掘り込みはみられない。墳丘西部は隣接の9号墳と重複関係にあったと思われるが削平が地山まで及び、その先

後関係を明らかにする事は出来なかった。

A トレンチ

- 1 表土
- 2 地山土混暗褐色土
- 3 植物根混赤褐色地
山土
- 4 赤褐色土
- 5 地山土混赤褐色土

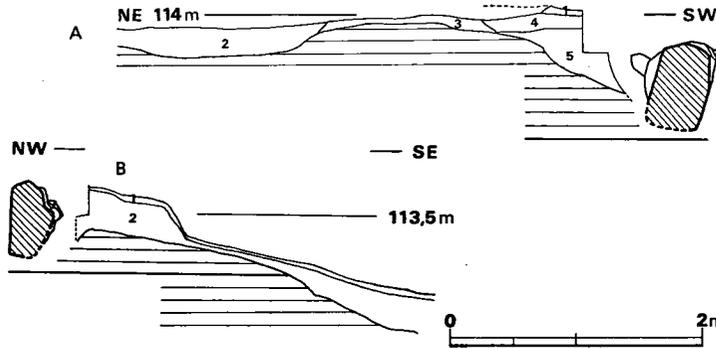


Fig.123 古野第10号墳丘断面図 (1/60)

B トレンチ

- 1 表土 (褐色土)
- 2 茶褐色土

石室 (Fig.124)

内部主体は主軸をN-45°-Eにとり、南西方向に開口する単室の横穴式石室である。墓壙は盗掘壙によりその北・西壁を破壊されており平面形を復元しえないが地山を穿った比較的浅い墓壙である。最も深い奥壁側で85cm、石室前面部では殆ど掘り込まれておらず、奥壁側へやや傾斜している。

石室は著しく破壊されており、わずかに腰石と敷石を残すのみで

あった。腰石の据えつけ痕及び敷石の遺存範囲よりみれば玄室は長さ1.8m、巾1.5~1.6m程度のやや方形に近いプランであろう。袖部の構造は袖石の据えつけ痕が検出できなかったため不明であるが、閉塞石と思われる塊石の出土状況より両袖式で、その先に長さ1m程度の羨道があったものとみられる。腰石はいずれも墓壙底に据えつけられ、まわりを根石によって安定さ

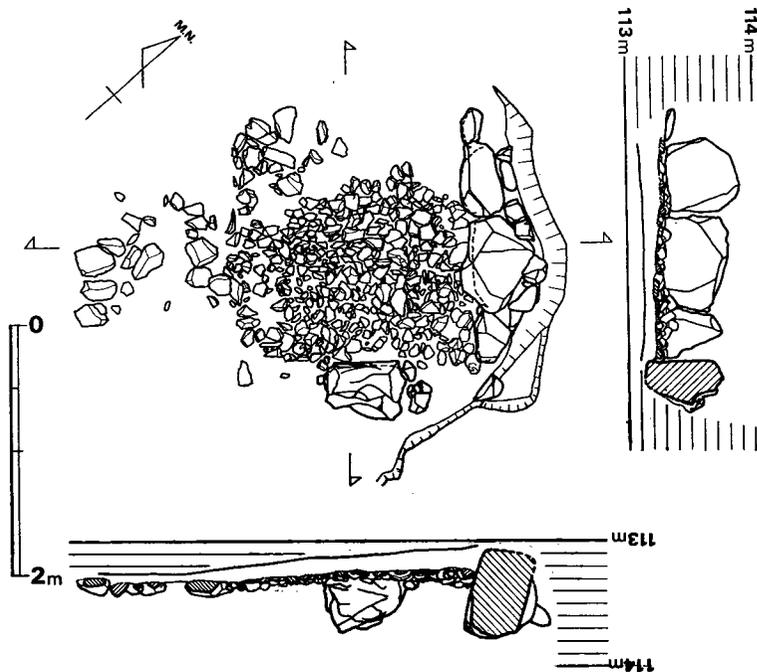


Fig.124 古野第10号墳石室実測図 (1/60)

せている。腰石と墓壁との間には塊石が裏込めされており、その間隙を地山パイラン土で充填してある。腰石の頂部は床面から50cm前後の高さでほぼそろっており、他の腰石も同様であったと思われる。床は地山パイラン土によって水平に整形した上に比較的大きめの角礫をほぼ全面に敷きつめてある。

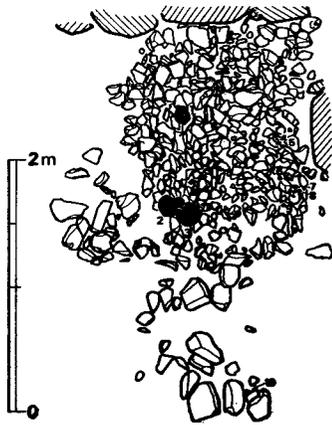


Fig. 125 古野第10号墳玄室内遺物
出土状態実測図 (1/60)

遺物出土状態 (Fig. 125)

石室内では中央部礫床上よりつぶれた土師器(埴) 1 個体
左袖部付近礫床上より須恵器(平瓶・長頸壺各 1 個体)、右
側壁寄りの礫床中より玉類・刀子片等が出土しており、石
室外では石室西側の地山面より土師器片(鉢)が 2 個体分、
南側の表土中より須恵器片(長頸壺) 1 点が出土した。

遺物

出土遺物を列記すると次のとおりである。

- | | | |
|------------|-----|-------|
| (1) 工具 | 刀子片 | 4 点 |
| (2) 用途不明鉄器 | | 2 点 |
| (3) 装身具 | 丸玉 | 2 個 |
| | 空玉 | 2 個 |
| | 囊玉 | 1 個以上 |
| | 管玉 | 1 個 |
| (4) 土器 | 須恵器 | |
| | 長頸壺 | 2 個体 |
| | 平瓶 | 1 個体 |
| | 土師器 | |
| | 埴 | 1 個体 |
| | 鉢 | 2 個体 |

刀子 (Fig. 126—1~4)

1 は茎を欠損しており、現存長 11.4cm。身巾は中央部で最も広く 12mm、身厚は 5mm。2 は鋒部のみであるが、1 よりやや大形のものであったと思われる。3・4 はともに極めて小形であるがやはり刀子の一種であろう。

釘 (Fig. 126—5)

平頭の丸釘で現存長 47mm、径 3mm、頭部の径 6mm。

用途不明鉄器 (Fig. 127—6・7)

6 は両縁部が厚く、中央部が薄い巾 15mm の折り返した鉄板上に円形の瘤を有す。鋌留金具の一種か。7 は流滴形の鉄板と断面四角形の軸より成る。軸の他端にも鉄板が付いていた痕跡が

ある。

丸 玉 (Fig. 126—8・9)

8は径13mm, 高さ10mm, 孔径2mm。ガラス玉の上に金箔を張り, さらにガラスをかけてある。9は径16mm, 高さ11mm, 孔径3~5mmで半分を欠く。コバルトブルーの練りガラスでできており, 一方より孔を穿ってある。

空 玉 (Fig. 126—10・11)

ともに黒化しているが薄い銀製で10は径16mm, 高さ8mmの扁平な形をしている。

棗 玉 (Fig. 126—12)

琥珀製であり, 最大径15mm, 長さ19mm, 孔径2mm。他に同様なものと思われる破片が若干出土した。

管 玉 (Fig. 126—13)

暗緑色の碧玉製で径7mm, 長さ22mm。孔径3~1mmの片面穿孔である。

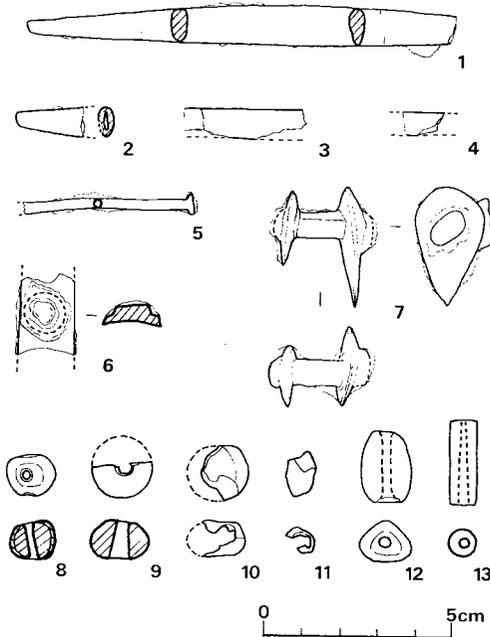


Fig. 126 古野第10号墳出土遺物実測図1 (1/2)

須恵器

長頸壺 (Fig. 127—1・2)

1は口径10.6cm, 器高23cmを測る。口径部は外反し, 端部は丸く調整してある。頸は体部の中心からややはずれて接合されており, 中央よりやや下方に2条の沈線を有す。頸部は内外ともヨコナデ調整で, 一部に自然釉がかかっている。肩部は張って明確な稜を有し, 稜の部分で最大径18.3cmを測る。体部下半はヘラ調整を, 高台は内外とも仕上げナデを施してある。底部外面は指圧による整形がみられる。色調は灰黒色で胎土には細砂粒を含み, 焼成は極めて良好である。2は胴部の破片のみであるが, 1同様に高台を持った長頸壺と思われる。胴部の復元最大径も18.9cmとほぼ1と同大であるが, 稜はよりシャープである。胴部内面はヨコナデ調整を, 外面は横位のヘラ削りの上にヨコナデ調整を施してある。高台の外面は剥落しているが1と同様の形状であろう。色調は青灰色で焼成は良好である。

平 瓶 (Fig. 127—3)

口径9.9cm, 器高16.2cmを測る。口縁端部は丸く整形してあり, 頸部には2条の沈線がめぐる。肩部から胴部へかけて丸味を帯びて明確な稜を持たず, 体部の上半はヨコナデ調整が, 下部は横位のヘラ削りが施されている。底部は上げ底になっており, 指の圧痕を残す。体部内面はヨコナデ調整である。色調は灰褐色で焼成は良好である。

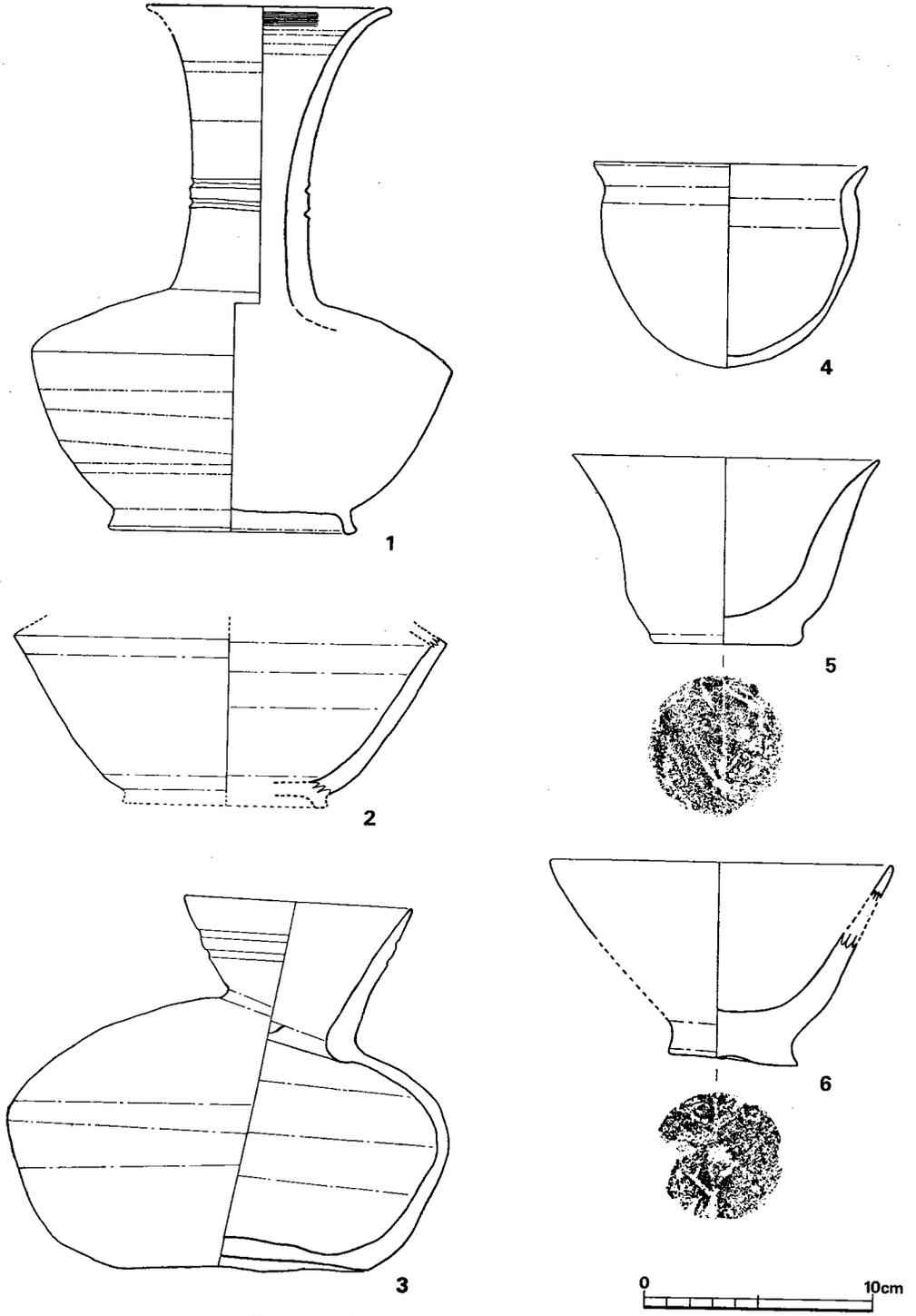


Fig. 127 古野第10号墳出土遺物表測図2 (1/3)

土師器

埴 (Fig. 127—4)

小形の埴で丸底をなし、器壁は薄手である。最大径は口縁で12cm、器高8.9cmを測る。口縁部は軽く外反し、端部は丸味におさめてある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、胴部内面にはヘラ削りが見られる。胎土には多くの砂粒を含み、焼成はやや不良で茶褐色を呈す。

鉢 (Fig. 127—5・6)

5は口縁がやや外反する小形の平底の鉢であるが、磨滅が著しく、器表観察は困難である。最大径は口縁で10.9cm、器高8.4cm、底径6.1cmを測る。底部内面は半球状を呈し、外面には葉脈痕を残す。色調は赤褐色で、胎土には砂粒を含み極めて軟質である。6は5よりやや大きめの鉢で胴部から口縁部にかけて直線的に広がる。半分近くを欠失するが復元口径15cm、器高8.7cm、底径5.7cmを測る。5同様器表が極めて荒れているが底部内面には炭化物が付着しており、底部外面には木葉痕を有す。色調は赤褐色で焼成は5よりも良好である。(蒲原宏行)

Tab. 26 古野第10号墳遺物番号対照表

遺物番号	出土状態実測図番号	実測図番号	図版番号
1	1	Fig. 127—4	PL. 109—17
2	2	〃 3	〃 16
3	3	〃 1	〃 15
4	4	—————	〃 3
5	5	Fig. 126—13	〃 5
6	6	〃 10	〃 4
7	7	〃 8	〃 6
8	8	〃 11	〃 2
9	9	〃 12	〃 1
10	10	〃 9	〃 7
11	—	〃 1	〃 8
12	—	〃 2	〃 9
13	—	〃 3	〃 10
14	—	〃 4	〃 14
15	—	〃 5	〃 11
16	—	〃 6	〃 12
17	—	〃 7	〃 13
18	—	〃 5	〃 18
19	—	〃 6	〃 19
20	—	〃 2	—————

(4) 小 結

1 遺構

a, 内部主体の形態

8・9・10号墳の内部主体はいずれも単室両袖型の横穴式石室であり、玄室長を越えない程度の羨道を有していたものと思われる。11号墳も奥壁の構築技法の類似等よりみて、9号墳に近く、やはり単室両袖型の横穴式石室であった可能性が強い。

b, 立地・開口方向

8・9・10号墳は丘陵南頂部に位置し、11号墳は丘陵中位の傾斜面に位置する。いずれも傾斜面に向って、すなわち8～10号墳は南西に、11号墳は西に開口している。9号墳が奥壁側に深い墓壙を有し、比較的短い羨道を付設していた事はこうした立地及び開口方向が与える当然の帰結であり、他の古墳にも同様の構造が推定されるゆえんである。なお丘陵南頂部に位置する3基の内、9・10号墳は傾斜面に向って開口するのに対し、8号墳はやや不自然に傾斜面に斜交する。その主軸方向はN-55°-EでN-66°-Eの9号墳に近く、9号墳Aトレンチにおいて観察された如く、9号墳に後出する8号墳はその構築に際して9号墳の開口方向を強く意識した事が考えられる。

c, 石室用材（特に腰石について）

石室の用材はすべて花崗岩であるが、その形状・用材としての使われ方には若干の差異が認められ、2つのグループに分ける事が出来る。

すなわち、9・11号墳では比較的面のそろった大ぶりの石を腰石として用いており、鏡石として高さ1m前後の立面形略三角形の巨石を用いる事を特徴とする。8号墳においては石材が全体に丸みを帯びて小形化し、一部に粘板岩質の堆積岩をも使用している。腰石は高さ70cm前後、巾60cm～80cm前後のものを奥壁に2個、側壁に3個当てているが、構築の様子は全体に雑である。3号墳の腰石は比較的整った面を有するが最も小ぶりで高さ50cm、巾60cm前後である。側壁に3個の腰石をあてていたと思われる点8号墳に類似しており、平面図形上で奥壁の線を重ねあわせてみると、10号墳の1個のみ現存する右側壁腰石は8号墳の3個の右側壁腰石中中央のものに位置・大きさともびたりと一致し、同様の構築状況を示していた事がうかがわれる。さらに主軸線上における床面と奥壁腰石のなす角度においても9号・11号墳の78°～79°に対して10号・8号墳は70°～71°とより強い内傾を示す。床石は各古墳とも大小様々の角礫より成っている。

d, 石室平面プラン

今回調査した古墳はいずれも著しく破壊されていたため、埋葬空間としての石室の全容については知るすべもない。しかし、8・9号墳においては腰石が比較的良好に残存し、石室構築当初の位置を保っていると考えられるので石室平面プランの企画性、特に袖石配置の問題について

てこの両古墳に若干の検討を加えてみたい。この種の検討に当っては、従来、各部計測値の数値分解によって使用尺度を推定し、推定尺度の方眼を石室平面図に重ねてその適合関係を調べる方法がとられている（註1）。しかしながら各部計測値については計測位置の相異によってかなりの違いが出てくると思われるので、計測位置について研究者間の合意をみない現状においては、使用尺度を推定するにあたってはかえって混乱を招く事になるのではないかと懼れるのであえて表にはしなかった。そこで両石室の平面プランの検討にあたっては現在、九州の横穴式石室についてその使用が推定されている晋後尺・高麗尺・唐尺の三種の尺（註2）について各々、方眼操作を行なってみた。その結果、両石室とも唐尺においてもっとも方眼の目と一致する事が看取された。（Fig.128）

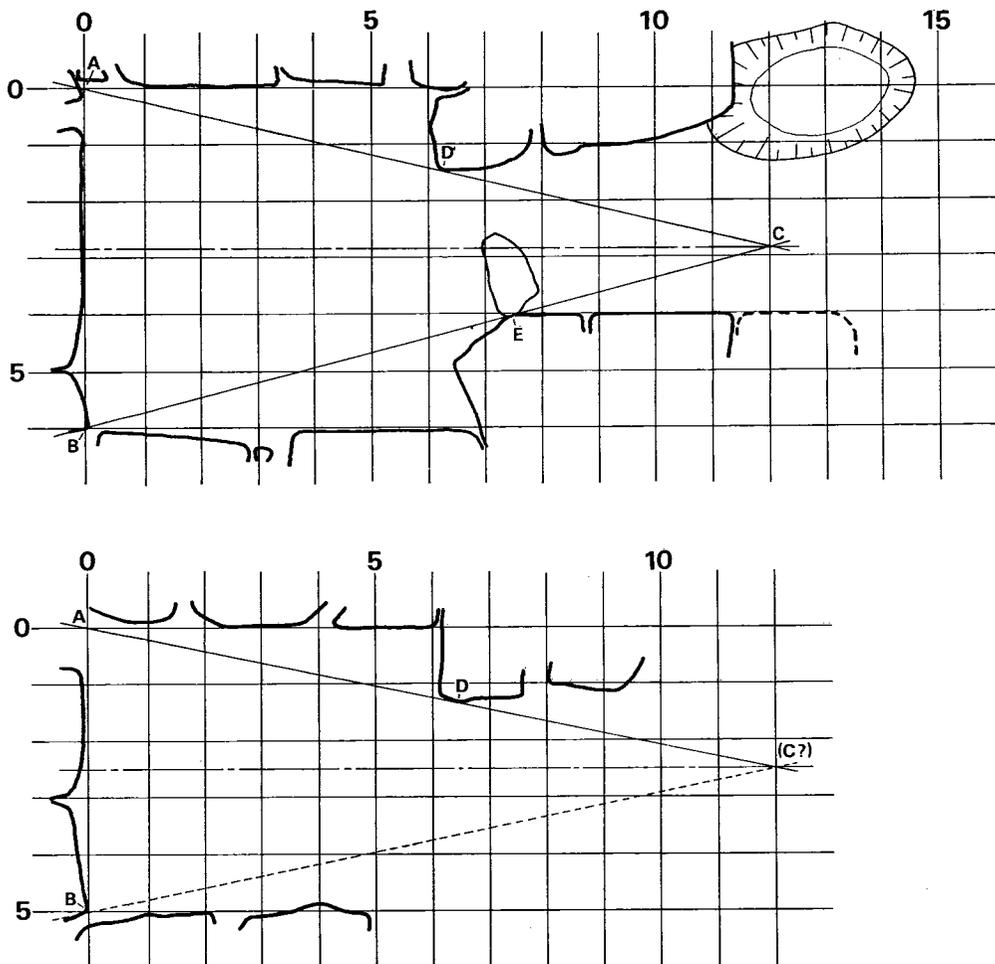


Fig. 128 唐尺方眼と石室平面プランの適合状況

上 古野第9号墳, 下 古野第8号墳 (1コマ30cm, 1/40)

まず9号墳について概観すると、玄室側壁は横線0と6にほぼ一致し、奥壁は縦線0に、右袖石は縦線6に、左袖石は側壁との接点において縦線7にのる。仕切石は縦線7と8の間におさまり、羨道左側壁は横線4にまったく一致している。羨道前端の腰石については左は残存状況の良好だった根石により復元線を描き、右の腰石の据えつけ痕をそのまま図示したが、その前端面は縦線14を前後する位置にある。

原企画を推定するにあたってまず玄室巾を6尺とする事に問題はあるまい。問題は玄室長である。左側壁が7尺、右側壁が6尺、玄室中央長（奥壁より仕切石まで）が7尺という値を示しているが、①本石室は墓壙の左壁に片寄せて築造されており、右側壁の腰石より左側壁の腰石が先行して設置されたと考えられる、②左袖石は羨道に続く面をきれいに横線上にのせており、おそらくは左側壁に制約される事なく、すなわち奥壁腰石の設置に続く早い段階に据えつけられたものと考えられる、③仕切り石の「仕切る」という意義、及び仕切り石が本石室においては他の用材からの制約を受けずに据えつけ得る事(註3)の3つの理由により本石室の玄室長原企画を7尺と考えたい。左袖巾は2尺で問題ないが、右袖巾は1.5尺であいまいな長さであり、したがって玄門巾(羨道奥巾)も完尺にならない。このように右袖石は玄室長を考えるにあたって袖巾を考えるにあたって極めて不可解な位置にある。これは、はたして当時の構築技術の限界によるものであろうか、それとも何らかの企画に基づいた位置なのであろうか。

ところで、これと同様な例は相原6号墳(註4)・今宿1号墳(註5)等に求め得る。相原6号墳を調査された柳沢一男氏は、この両古墳の袖巾のとり方に特殊な比定配分があり、羨道奥巾の決定に同一の手法が用いられていることを示唆されている(註6)この特殊な袖巾の決定が何らかの企画に基づいたものであるとすれば、それはどのようなものであろうか。

前述の如く本石室においては、奥壁腰石の設置に続く段階として袖石の設置が行なわれたと思われるので袖石の設置にあたっては、原企画の玄室奥巾(=6尺)が関係した事が考えられる。そこで試みに奥壁両端(点A及び点B)から両袖石との接点D・Eを通る直線を引き、その交点をCとした。そうすると点Cは縦線12上により石室主軸(註7)の横線3から実長にして4cm右側壁側にずれた所にくる。すなわち、三角形CABは底辺の2倍の高さを有する二等辺三角形に極めて近似している事が看取される。ここで点Cの横線3からのずれ4cmをどう考えるかは問題であるが、それは一応保留し、似たような袖のずれを有する今宿1号墳について同様な操作を行なった。結果はFig.128の如く、点Cは横線4と縦線20の交点(高麗尺方眼)に一致する。すなわち、ここでは交点Cは主軸の横線5からはまる1尺ずれているが底辺ABからの距離はABの2倍を保っている。

こうしてみると、これらの袖石の配置にあたっては二等辺三角形を意識したというよりも玄室巾の整数倍の高さの三角形を意図した可能性が高いように思われる。もしそうだとすれば玄室巾の倍数距離上での交点Cの位置はどのようにして決定されるのであろうか。それは当初か

ら企画された位置というよりも他律的な位置ではなからうか。古野9号墳の場合、おそらくは左袖石の設置にあたって左側壁長が7尺になるように、しかも羨道側の面が主軸に平行になるように置く事が当初から予定された企画であったと思われる。したがってそのような企画に基づいて設置された左袖石の点Eの位置は左袖石の石材としての形状の凹凸に大きく左右される事になる。とすれば点Cは現実には左袖石を置いた後に点Eの位置によって決定されたといえる。つまりこの三角形CABは石室構築途上、片袖を置いた段階で構築の現場において企画・設定されたものなのである。そしてこの三角形の一辺CAに接するように右袖石を置いたのであろうが、右袖石にもやはり石材としての凹凸があるため、第一義的な玄室奥巾を守るためには玄室長原企画の7尺を減ずるような位置に持ってこざるを得なかったのである。玄室側で縦線6に一致するのは偶然の一致と考えたい。このような袖石配置の方法によったと思われるものを、先学諸氏によって使用尺度と玄室奥巾原企画が推定されている石室を中心に求めてみると2倍例として王塚古墳(晋後尺一註8)・宮脇古墳(晋後尺一註9)・片江6号墳・8号墳(いずれも高麗尺一註10)等があげられ、3倍例として高崎3号(唐尺一註11)・八隈3号墳・8号墳(いずれも唐尺一註12)等があげられ、他に4倍例の相原3号墳(高麗尺一註13)・6倍例の八隈4号墳(高麗尺一註14)などもある。

このような袖石配置法の推定が妥当なものであるかどうか、疑問の余地も残るが一つの可能性として指摘しておきたい。

次に9号墳に後出し、隣接する8号墳についてみてみよう(Fig.128下)。8号墳の石室は左袖部及び羨道部を欠失しており、残存部からのみ原企画を推定する事にはかなりの危惧も感じられるが、概観して玄室腰石は縦線0と6、横線0と5とを周縁しており、原企画は玄室長6尺、玄室巾5尺が推定される。これは9号墳石室の原企画を一尺づつ減じたものである。当石室は片袖しか残さないが試みに9号墳と同様の操作を加えてみた。

AからDを通るように引いた直線は石室主軸と縦線12の交点を通る。12尺は玄室奥巾の倍数にはなっていないが、9号墳における点Cと奥壁の距離に等しく、9号墳において点Cが主軸に極めて近い事を考えればこの主軸・縦線12・直線ADの3直線の交点が点Cとなる可能性が強いように思われる。さすればこの8号墳・9号墳を築造した人々が主軸上に点Cを求めようとした可能性をもう一度考えてみる必要がある。そこで類例を求めてみると、やはり唐尺の使用が推定されている王城山C12号墳・C15号墳(註15)においても同様の操作を加えた場合、点Cは主軸上でそれぞれ14尺・17尺の完尺を示す。なおこの14尺・17尺という値はそれぞれの玄室奥巾の倍数にはなっていない。そうしてみると前述のような袖石配置法の他に、主軸上で完尺となる位置に点Cを求めるといった方法が存在した可能性も考慮してみる必要があるであろう。このような方法を推定した場合、三角形CABはあらかじめ企画される事になり、それによりうまく合うように袖石の用材を切り出し、あるいは整形する技術が必要になってくる。ちな

みに王城山C15号墳では左袖石は直角に切られ、右袖石から羨道後半部にかけては斜辺ACに沿うように設置されている。この第2の袖石配置法の類例（わずか4例ではあるが）がすべて唐尺を使用している事を考え合わせると、あるいは先の方法に後出する企画法なのかもしれない。いずれにしても類例の集積が極めて少ない現段階で推定したこれらの袖石配置法はあくまで可能性に過ぎず、類例の増加を待って検証していきたいと思う。

なお、検討の対象からはずした10号墳石室の平面プランについては床石の残存状況と根石及び腰石の据えつけ痕より考えて8号墳同様5尺×6尺の原企画であった可能性が高いことを付け加えておく。

2 遺物

遺物は各古墳とも主に玄室前半部より出土したが、出土遺物の各古墳ごとの特色として土師器と玉類が10号墳からのみ、直刀は9号墳からのみ、瓦器・白磁は5号墳からのみ出土した。

a, 須恵器について

編年の基準となる須恵器のうち主なものについて分類すると次のごとくである。

杯 蓋 口縁部の形状により4類に分類される。

I類 (Fig.146—1) かえりを有するもので口径10.5cmと小形である。

II類 (Fig.122—1) かえりを持たず天井部のふくらみが強い。

III類 (Fig.122—2) 断面三角形の短く下降する口縁を持ち、口縁外面に浅い段を有する。

IV類 (Fig.116—8, 146—2) 天井部よりだらだらと下降し、やや長い断面三角形の口縁を持つ。

杯 身体部の形状と高台の有無によって3類に分類される。

I類 (Fig.116—11) 高台を有さず口縁が軽く外反する。

II類 (Fig.122—4・5, 116—10) 付高台を有するもので体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がっており、形態的には椀に属するものである。

III類 (Fig.122—6, 116—9) 口径に比し器高が高く口縁は外反する。

長頸壺 全形を知りうるのは2点のみであるが破片が多く出土しており高台の付け方によって2類に分類した。

I類 (Fig.127—1・2, 116—1・3) 体部から高台にかけて明確な稜を有さない。

II類 (Fig.116—4) 体部は直線的で強く屈曲して高台に続く。

平 瓶

I類 (Fig.127—3) 大形で体部は丸みを有す。

II類 (Fig.122—3) 小形で体部はより扁平である。

以上各類に分けたが、杯蓋Ⅰ類はⅣB期に（註16）、Ⅱ類は杯Ⅲ類とのセット関係よりⅦA期に、Ⅲ類はⅦC期に、Ⅳ類はⅣC～ⅦA期にそれぞれ属するものと思われ、杯Ⅰ類はⅦ期に、Ⅰ類はⅦAおよびⅦB期に、Ⅲ類はⅦC～ⅦA期に属するものと思われる。長頸壺Ⅰ・Ⅱ類はⅦC～ⅦA期に、平瓶Ⅰ・Ⅱ類はⅦ期に属するのではないかと思われる。

b, 瓦器碗・白磁碗について

8号墳玄室内より出土した瓦器碗は形態的にⅡ—b型式（註17）すなわち12世紀前半～中葉に属するものである。同じく8号墳玄室内より出土した白磁碗2点は高台の形態のみについてみればⅡ類—a（註18）に属するものと思われるが、口唇部は水平をなしⅠ類—aの口縁に近い。このタイプの白磁碗は11世紀後半より福建あるいは広東方面の窯において生産されたものと推定され、我国へは12世紀初頭にもたらされ、12世紀を通じてみられるものである。（註19）

同伴の瓦器碗から見れば5号墳への埋置の時期は12世紀中葉頃ではないかと思われる。

これらの瓦器や白磁が副葬品として、すなわち遺体の搬入に伴って、玄室内に入れられたものか、それとも祖先供養の如き行為によるものかは問題となる所であるが、このような古墳や横穴の玄室内からの出土例が増加しつつある現状をふまえれば平安時代末期において横穴式石室再利用の風習あるいは祖先供養の風習がにわかに高まった事も考えてみる必要があろう。

3 古墳築造年代及び使用期間

遺構・遺物の小括の結果より各古墳の築造順及び築造年代・追葬の時期等についてまとめてみたい。

まず須恵器の編年による各古墳の築造・使用の時期はTab1のごとくである。すなわち最も年代的に遡り得るのはその存在を明確にし得なかった24号墳でⅣB期に属する杯蓋Ⅰ類を出土している。隣接する11号墳は奥壁構造が丘陵南頂部に位置する3基の内最も古い9号墳（ⅦA期）に類似しておりⅣB期～Ⅴ期にかけて築造された可能性が強い。石室平面プラン・腰石の形状等の類似した8号墳・10号墳は9号墳に続く時期に相前後して築造されたものと思われる。8～10号墳に関しては唐尺使用開始年代が7世紀中葉を遡り得ないとする従来の見解（註20）とも矛盾しない。

以上、まとめると7世紀初頭～前半に25（？）・24号墳が、中葉に9号墳が、後半に8・10号墳が順次築造されたのであろう。また各古墳とも8世紀初頭まで追葬が行なわれ、8号墳は12世紀中頃に何らかの形で再利用されたものと考えられる。（蒲原宏行）

編者註

編集の過程で、筑波大学調査分（第8・9・10・24号墳）を一章にまとめる計画があり、本稿はそれを受けて執筆されたものである。最終的には、単位毎にまとめる体裁をとったため、記述が前後する部分を生じることになった。これは全て編者の責任に帰す。

Tab. 27 各古墳出土須恵器編年表

時 期 古 墳	Ⅳ		Ⅴ	Ⅵ			Ⅶ
	A	B		A	B	C	A
8							
9					■		
10					■		
24		■					

- 註 1 石川正之助氏によって提唱された。石川正之助「野殿天王塚古塚の石室平面構成について」『共愛学園論集』1967「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」〈考古学雑誌54—4〉1968年
- 2 柳沢一男『片江古墳群』〈福岡市埋蔵文化財調査報告書24〉1973年『相原古墳群』〈福岡市埋蔵文化財調査報告書28〉1974年「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』1975年
- 3 石室平面企画における仕切石の意義については福岡県教育委員会文化課技師石山勲氏の御教示による。
- 4 註2文献(1974)
- 5 宮小路賀宏『今宿古墳群』〈福岡県文化財調査報告書38〉1968年
- 6 註2文献(1974)
- 7 ここでいう主軸とは線分A Bの midpointを通り線分A Bに直交する直線の事である。以下同様
- 8 川上市太郎『筑前王塚古墳』〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告11〉1935年梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳』〈京都帝国大学文学部考古学研究报告15〉1940年
- 9 高島忠平・藤田等『宮脇前方後円墳』『嘉穂地方史原始・古代編』1973年 註2文献(1975)
- 10 註2文献(1973)
- 11 浜田信也他〈今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告1〉1970年
- 12 酒井仁夫他〈九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ〉1976年
- 13 註2文献(1974)
- 14 註12文献
- 15 酒井仁夫他〈九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ〉1977年なお王城山C12号墳は片袖を欠失しており、あくまで参考資料にすぎない。
- 16 小田富士雄氏の編年による。
- 17 森田勉氏の編年による。
森田勉「九州地方の瓦器碗について」〈考古学雑誌59—2〉1973年
- 18 亀井明徳氏の編年による。
亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」〈考古学雑誌58—4〉1973年
- 19 亀井明徳氏の御教示による。
- 20 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966年

6 E単位

(1) 古野12号墳

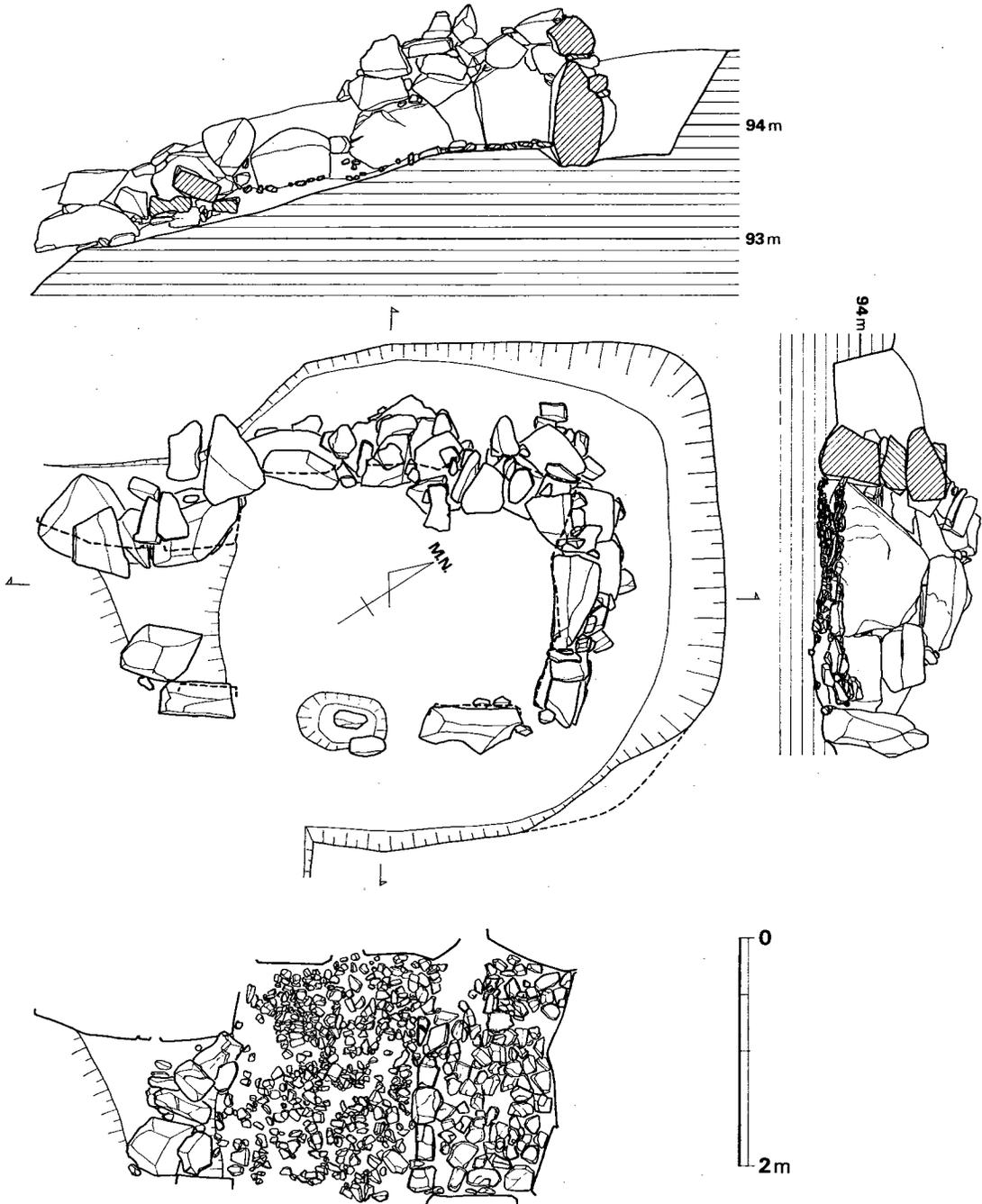


Fig. 129 古野第12号墳石室実測図 (1/60)

墳丘

墳丘がかなり削平されており、調査時には墳丘の大半を失っていた。よって墳丘規模及び墳丘構築状態については資料を得ることができなかった。

石室 (Fig.129)

南東に開口する現存長 4.5m の単室の横穴式石室である。他の古墳と同様に盗掘破壊されており、石室の残存状態はあまり良くない。最も石積みの残りの良い所で床面から約 1 m である。又、右壁は後世に排水溝を掘削した折に破壊されており、奥壁寄りの石を除いては残存しておらず、腰石掘り方すら検出できなかった。

玄室は、主軸長 2.8m、幅 2 m の長方形の平面プランを呈する。床には一面に石が敷かれている。奥壁から 1 m の所で、石室主軸に直交した石列が設定されている。この玄室を画した石列と奥壁との間は「屍床」であったと推定される。「屍床」の規模は長さ 2 m、幅 1 m で、床面の敷石は他の部分の床石よりも大きな石を使用し、石室掘り方直上に敷いている。この床石は水平には置かれておらず、奥壁側が高く、石列側に向ってやや床面レベルが下降し、そのレベル差は 5 cm 前後である。頭位は床石の大きさ及び敷き方から考えて、右壁側（東）であったと推定される。

玄室床面の「屍床」を除いた部分は「屍床」より 1 段低くなっており、約 40cm の比高差がある。このことは、石室掘り方床面のレベルとも関連があるようであり、石室掘り方床面は「屍床」の部分はほぼ水平であるが、「屍床」の外は、石室入り口に向って約 15°~20° の角度で傾斜している。石室内に土砂を搬入して床面を平坦にしようとする努力のあとが見られるが、それも空しい結果となっている。この床面は、「屍床」を除いて傾斜した部分とほぼ平坦な部分にわけられ、「屍床」はやや傾斜するがほぼ平坦であり、「屍床」から約 80cm までが傾斜し、それから玄門部までがほぼ平坦に床石を敷いている。

玄門部から羨道にかけては敷石は見られない。

次に、石室壁面の状態についてみれば、石積みは極めて粗雑である。

奥壁は 2 石を用いて腰石となし、二段目までの石積みが残っている。腰石はほぼ直立し、二段目の石はややせり出しており、奥壁はほぼ 80° 位の傾斜で内傾していたようである。

側壁については、残りの良い左壁で見ると、玄室は 3 石を用いて腰石となし、腰石上に四段の石積みが残っている。各腰石間は密着せずに 10~20cm の間隙があり、調査時点ではその間隙に石材の充填された様子はなかった。壁面は 80°~75° で内傾している。羨道部の石積みについては、玄室と同様に粗雑である。

石室は地山深く穿たれた掘り方内に構築されてはいるが、掘り方床面が奥壁側から羨門側へ傾斜（比差高約 80cm）していることと、石積みの粗雑さから、本石室の石積みの残存状態は極めて悪く、腰石を除いて当初の状態を保っているものは少なく、羨門側に多少ずれていた。

(児玉真一)

遺物出土状態 (Fig. 130)

閉塞石を除いた後、玄室入口の左袖石付近の床面に、遺物が若干検出された。

須恵器	長頸壺	1点
鉄器	鉄 鏃	10数点
	馬 具 (轡)	1点

鉄鏃は敷石直上に散乱した状態で単位としてまとまりを呈していないため、原位置にあるとはいいがたい。

他のものについてはほぼ原位置である。これらの遺物のうち、鉄鏃と馬具については写真撮影後に現場においていたものが盗難にあい一部分しか残っていなかった。このことはきわめて残念なことである。



Fig. 130 古野第12号墳遺物出土状態実測図 (1/40)

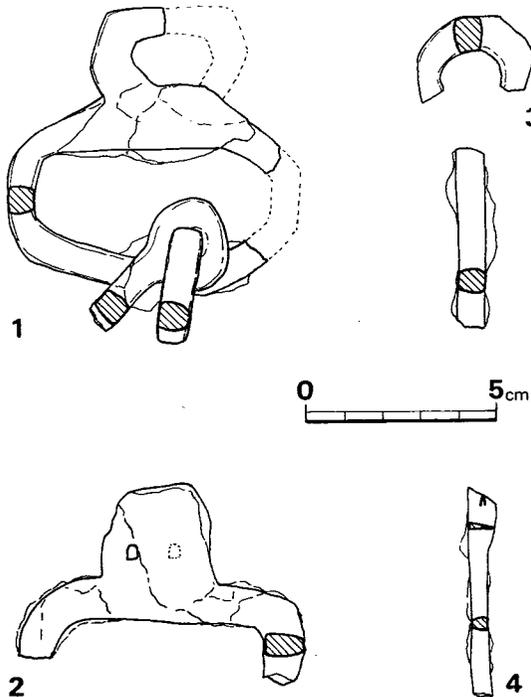


Fig. 131 古野第12号墳出土鉄器実測図 (1/3)

遺物

馬 具 (Fig. 131—1~3)

轡2具分で、1は楕円形に近い素環の鏡板で、衝と引手の一部とが銹着している。2は、形状が稍異なるほか、立間に刺金がついて鉸具となっており、1とは別個体に属する。3は、引手の一部である。

鉄 鏃 (4)

細身の片刃鏃で、現存長54mm。

(副島邦弘)

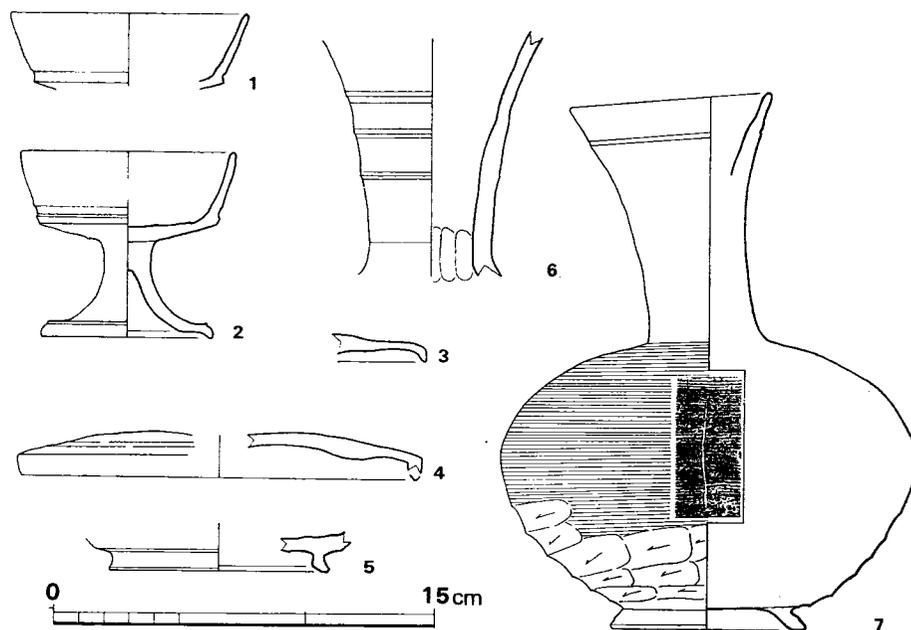


Fig. 132 古野第12号墳出土土須恵器実測図 (1/3)

須恵器

無蓋高杯 (Fig. 132—1・2)

1は、杯部のみ現存。復元口径 9.4cm, 同杯部高 3cm, 細粒を含むが焼成良好。2は、杯部と脚部の一部を欠く。口径8.6cm, 杯部高3.6cm, 脚底径6.8cm, 器高7.2cm。暗灰青色を呈して焼成良好。

杯蓋 (Fig. 132—3・4)

いずれも口縁の一部を残すのみである。3は暗黒色を呈し焼成良好。4は暗灰色を呈し焼成良好で、復元口径16cm。

杯身 (Fig. 132—5)

過半を欠く。細粒を含み、暗青色を呈して焼成良好。復元高台径8.7cm。

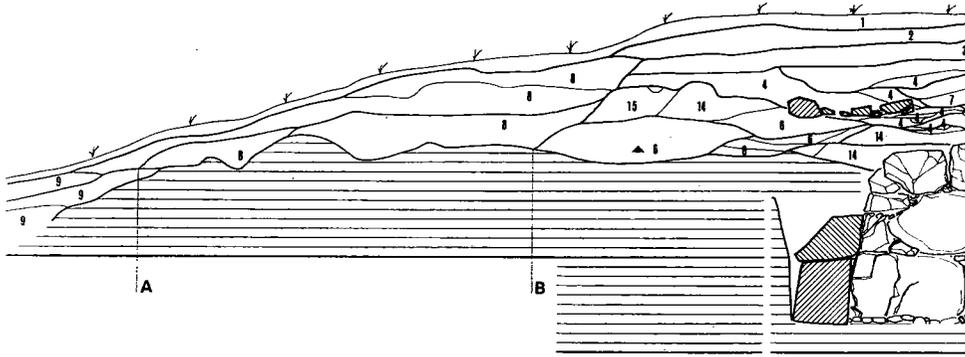
長頸壺 (Fig. 132—6・7)

6は頸部の一部のみ現存。灰褐色を呈し、焼成良。胴部の接合部付近は指頭によりナデ調整を施す。7は、完形品。口縁部は歪み、口径8.5~7.9cm。胴部最大径 16.4cm, 高台径7.7cm。器高21.3cm。胴部全体にカキ調整を施した後、下半については手持状態にて篋削りを施す。胴部に縦一条の篋記号を刻む。

(石山 勲)

(2) 古野第13号墳

墳 丘 (Fig. 133)



- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1 表土 | 2 黄白色砂質土 | 3 赤褐色粘質土 |
| 4 茶褐色土 | 5 赤褐色土 | 6 黒褐色土 |
| 7 暗茶褐色土 | 8 黄茶褐色土 | 9 赤黄褐色土 |
| 10 明茶褐色土 | 11 茶色土 | 12 暗褐色土 |
| 13 褐色土 | 14 白黄色土 | 15 褐色粘質土 |

Fig. 133 古野第13号墳墳丘断面図

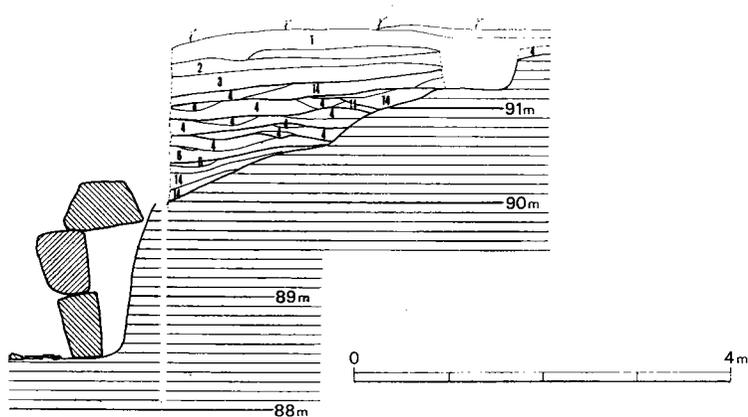
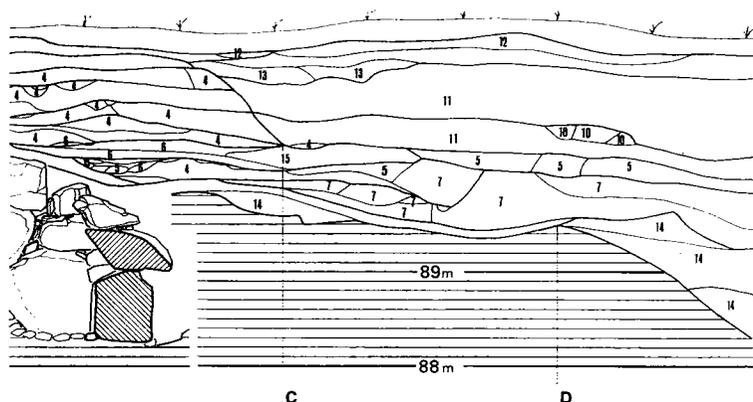
他墳と同様、果樹園造成により削平され墳丘の高まりは確認できなかったが、法面を清掃した結果、幸じて盛土層を検出し得た。

それによると、盛土に先行して表土は除去されかつ若干削平されている。D点から地山が急角度で下降するが、削り出しを意図した結果とは思われない。BC間が石室構築と平行して盛られた中核部分にあたり、外周から中心へと盛られた形跡がある。標高90.5m前後の高さに略水平位に一群の小石があり、また第6層中(▲印を付す部分)からは、須恵器甕片が採取されている。葬送儀礼に伴うかと推定されるが、精査していないのでこれらの性格は不明とせざるを得ない。

盛土範囲はさらに外側に及ぶが、西端は一応A点とみられる。東限はC点以東の層位が水平位に続くように観察されて確言し難い。因みにA点から石室中軸までは、9.3m強である。

石 室 (Fig. 134)

略南西に開口する横穴式石室を主体とする。尾根に向う北東側で1.7mの深さに穿った墓竈底に営まれており、墓竈上端巾は約3.8m。石室は大破し、特に右側壁は過半を失なってお



り、現在全長は 4.8m に過ぎない。

玄室は長方形プランを呈し、奥壁巾 2.1m 長さ約 3m 。基部に腰石を用いており、据えつけのため掘りこみは浅いが要所に根締石を置く。現存高は 1.9m 弱。床は2層で、下層に平石を上層に小円礫を敷く。床面は羨道部に向かって徐々に下降し、奥壁から 2.2m の地点で明瞭な段がつき、レベルを揃えるためにこの部分に大き目の石材を充填している。

閉塞石の基部が現存するが、その最下段は玄室床面よりも一段低い。通常敷設される袖石間の仕切り石は認められず、上述の床面構造と関連すると思われる。

遺物出土状態

徹底的な盗掘を受けており、原位置を保つと思われる出土例はなく、玄室内堆積土中から耳環・刀子片各一を、閉塞石前面の敷石上から伏せた状態の杯蓋1を採取したにとどまる。

遺物

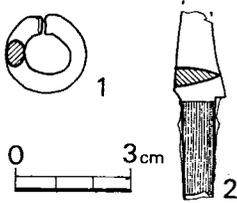


Fig. 135 古野第13号墳出土耳環、刀子片実測図 (1/2)

耳環 (Fig. 135—1)

1個のみで、中空の銀胎品。最大径21mm弱と小ぶりである。

刀子片 (Fig. 135—2)

現存長5cm弱で、研ぎ減りが著しい。棟厚が5mmあり、茎も含めてズングリとした感を受ける。

須恵器杯蓋 (Fig. 136—2)

撮がつき、最大径15cm、器高2.6cm。灰青色を呈し、身にかぶせての焼成。頂部は匏削りされ、最終調整は指ナデ。

須恵器甕 (Fig. 136—1)

前述の盛土からの採取品。加飾はみられず、器肌はザラつく。灰白色を呈し、焼成温度が高過ぎたとみられる。

(石山 勲)

(3) 古野14号墳

墳丘

8・9・10号墳をのせる丘陵の、南斜面に、15・12・23・14・13号の各石室が設けられる。うち最下位の13号墳の北西斜面に、一段高く位置する。石室玄門側の半分が下の畑開墾により削除されており、石室側の盛土は殆んど残らない。奥壁側の斜面の土層を観察すると、当初、奥壁側墓壇壁より1.3m離れて幅60cmの周溝を削り出し、排土を盛土に使用し、その周溝は時期を経ずに急斜面の上方からの落土で略完全に埋まり、自然な斜面となってしまう。周溝は石室奥側のみ弧状にめぐり、側壁側及び前面においては、(後世削除関係もあろうが)認められない。丘陵斜面の群集墳において、奥壁側上半分のみ周溝状に削り、盛土に使用することが知られるが、恐らくその類であろう。周溝上部には、近代用水路が略完全に埋没した状態でみられる。

石室 (Fig. 137)

玄室部の略半分のみ残り、奥壁幅1.92m、右側壁長 $1.9m + \alpha$ を測る横穴式石室である。墓壇は奥壁側で深さ1.8m地山(軟質岩盤)を掘り込み、コーナーを持った長方形プランにつくる。両コーナー部ではオーバーハングをなす。

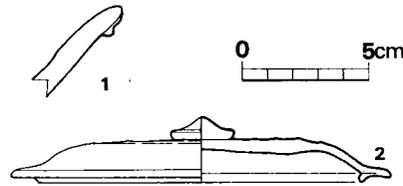


Fig. 136 古野第13号墳出土須恵器実測図 (1/3)

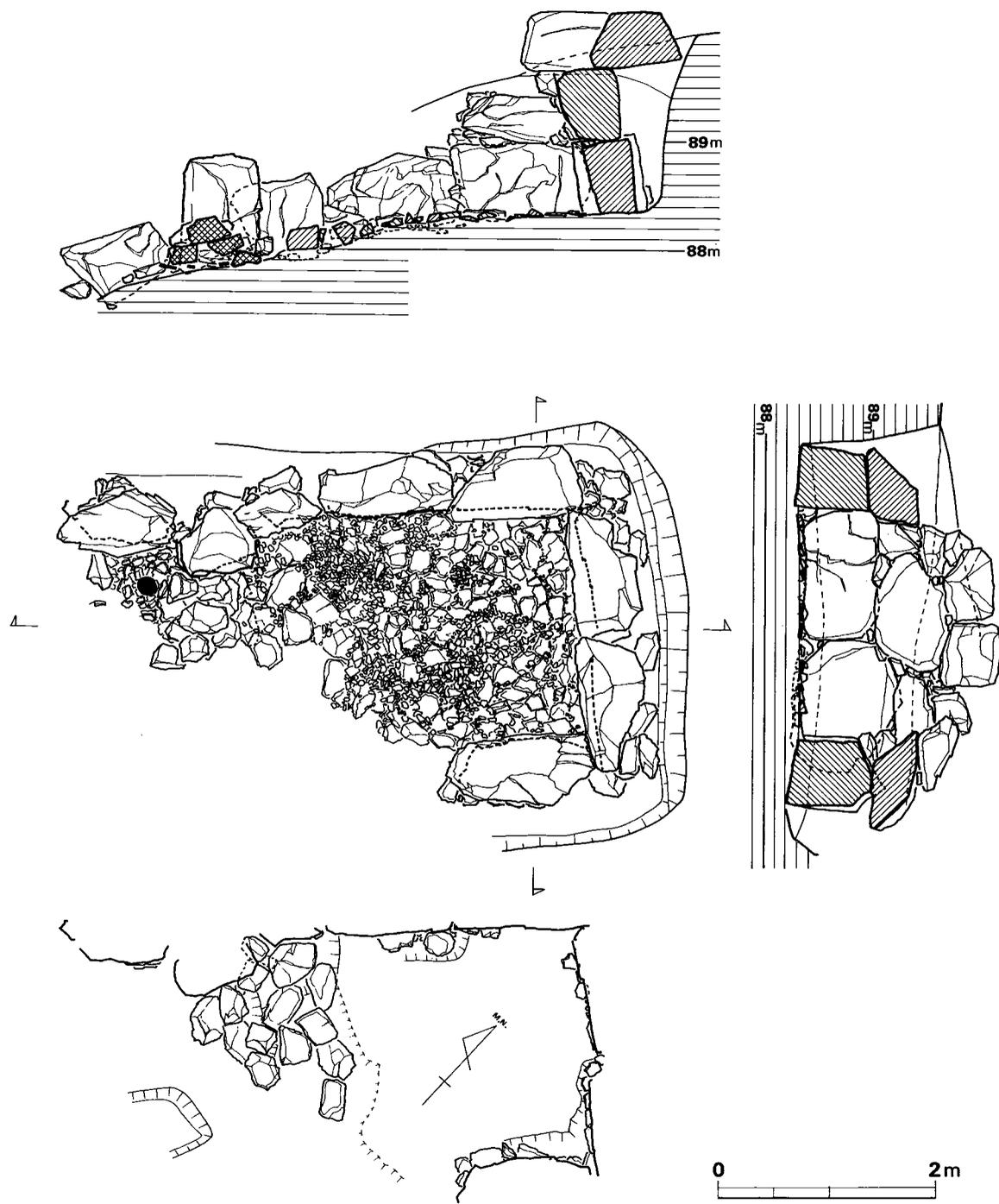


Fig. 134 古野第13号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

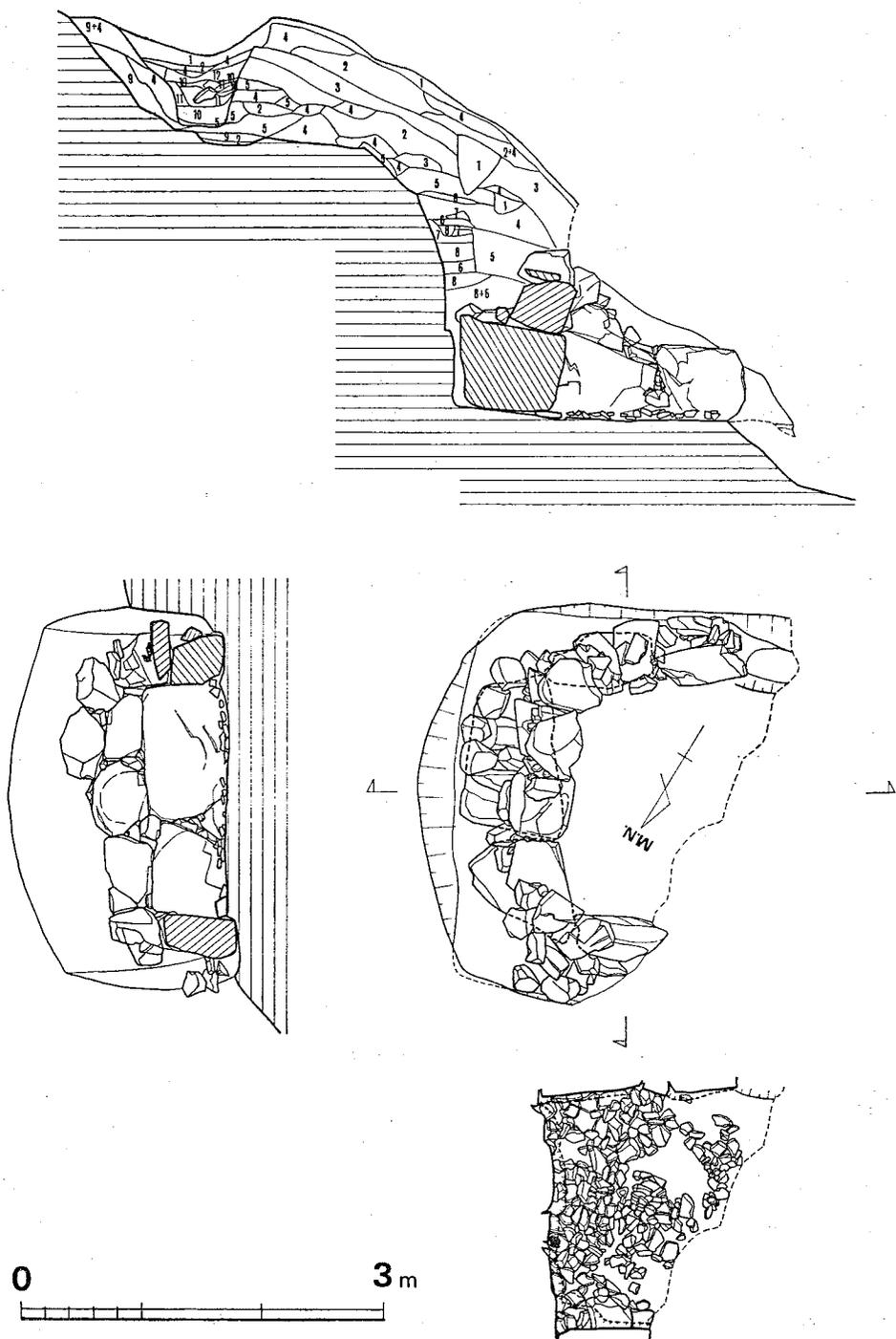


Fig. 137 古野第14号墳石室実測図 (1/60)

奥壁は大小の腰石を据え、特に大石の方は、厚さ $0.8m$ の重量ある石材を用いる。腰石下は $5\sim 10cm$ わずかに掘り窪め、根石は奥壁側が若干みられるのみである。積石は2段目まで高さ $1.4m$ 残るが、間隙に小割石を楔状に填め、段毎に上面を揃える工夫を施す。腰石と墓壇壁との間には、左右側壁側で裏込め様の塊石群がみられ、腰石の坐りの良い奥壁側ではみられない。石室石材は総て花崗岩を用いる。

床面は左壁際・奥壁際の北西半・右壁際の奥壁寄りの各部にやや大きい花崗岩平石を腰石際に敷きつめ、間隙や中央部に花崗岩小転礫や青色小河原石をも補充して用いる。盗掘等によりかなりの部分が抜かれている。

遺物

後世攪乱等で玄室内遺物は、須恵器杯1点が奥壁際床面より出土するのみである。特筆すべきは、奥壁側周溝底のやや北西寄り得手捏ね製品の一群が検出され、更にその群中に鉄滓2点、籬羽口小片2点がみられたことである。これらは、削り出した周溝底にはほぼ密着し、この古墳築造の際の祭祀に関する遺物であることに疑いを容れない。羨道・墓道を含めた古墳前半が削除されており、これら祭祀用品の総量・配置等による祭祀形態の全体像をつかむことはできないのが惜まれる。この他に墳丘表土中より須恵器片若干が出土している。

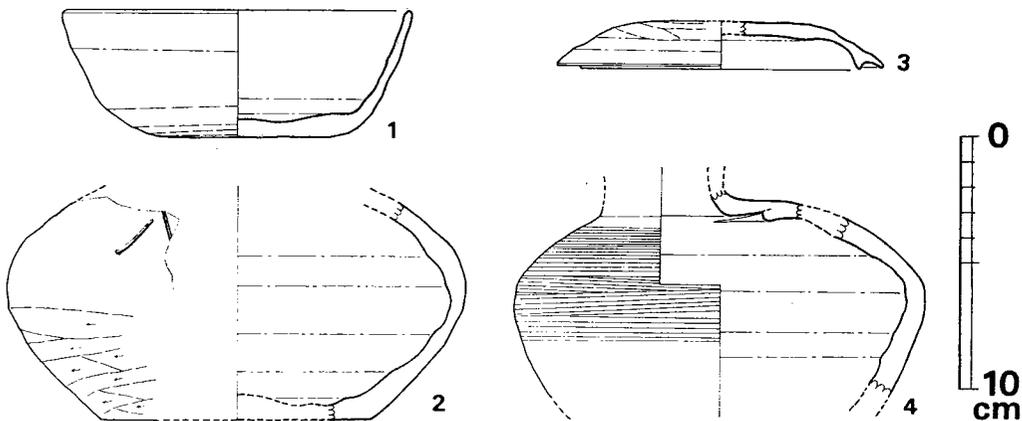


Fig. 138 古野第14号墳出土須恵器実測図 (1/3)

須恵器 (Fig. 138)

1は、玄室奥壁際床面出土の杯身である。口径 $13.6cm$ 、器高 $5.0cm$ を測り、直線的に開き端部は丸く収める。体部外面口縁は下半から底外面に左廻りのヘラ削り調整がみられ、口縁内外面回転ナデ、底部内面には一方への指ナデつけがみられる。胎土に粗砂かなり含み、焼成甘く軟質で灰色を呈する。

2は周溝底の手捏ね製品群中より出土した長頸壺片である。復元底径 $10.6cm$ 、胴最大径 $17.9cm$ を測り、扁平に張る胴部を有する。胴最大径部分が最も器壁薄く、胴外面下半及び底外面に

左方向へのヘラ削り調整が行なわれ、内面には強い横ナデによる稜をみせる。肩部外面にヘラ記号がみられ、「X」字状の半片と思われる。胎土に粗砂粒目立ち、焼成堅緻で黒灰色を呈する。

3・4は、墳丘表土中出土品で、3は、受け部径10.9cm、器高1.9cmを測る。小型の低い杯蓋片である。返り部短かく、受け部端部より僅かに下方へ出る。天井外面は内から外への左廻りヘラ削りが施され、天井部内面に一方向への指ナデつけ、他面は回転ナデ調整が行なわれる。胎土に細砂かなり含み、焼成堅緻で灰黒色を呈する。

4は、頸部の接合部が、胴部上端内面の円形の段の中心よりかなりずれて接合されている為平瓶として復元した。内面は回転横ナデ、外面上半にカキ目、下半は横ナデ調整を施す。胎土に粗砂かなりみられ、焼成軟質で暗灰褐色呈する。

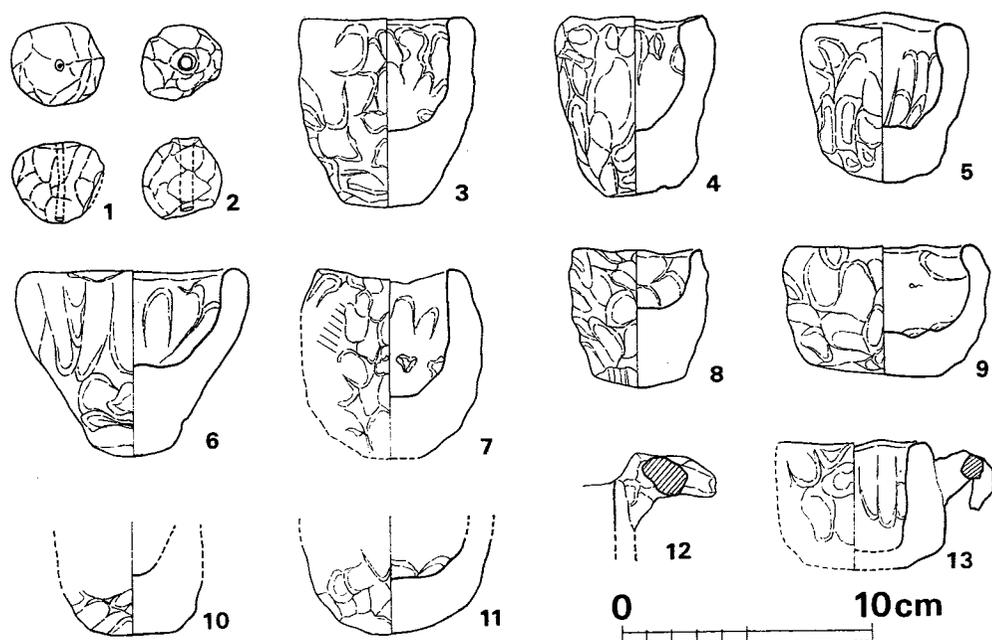


Fig.139 古野第14号墳出土土製模造品実測図 (1/3)

土製模造品 (Fig.139)

玉模造品2点と、コップ状模造品10個体分である。いずれも胎土に僅かに細砂含むが精良で、焼成不良で灰黒色を呈し、全部同一胎土、焼成である。

1, 2は、手捏ねによる凹凸の著しいかなり歪つな球形で、略中心に1は細く、2は太く孔を穿つ。径3.6~2.9cm、厚さ3.2~3.0cm、孔径0.3~0.5cmを測る。他の手捏ね土器群と共存することや、胎土・焼成が同一であることなどから、みかけは大きい土錘等とは考え難く、玉類の模造品と推定される。

3~11は、手捏ねコップ状模造品であるが、調査中に荒された為、復元不能なものもある

が、総個数は、底部の数より10個と推定される。器形・法量等により各々若干の相違がある。口径6.5cm、器高7.5cmで小さな不安定な極めて厚い平底にはほぼ直口する口縁を持つもの(3)、口縁やや内湾するもの(4・5)、小さな底部から鉢状に開くもの(6)、蛸壺状に外面丸くなるもの(7・11)、小型で厚い底部に比べ浅い器形をなすもの(8・10)、口径大きく全体に浅いもの(9)などバラエティーに富む。いずれも指オサエ、強いナデ上げ痕が明瞭で、7の外面には簀子状の圧痕がみられ、8の底面にも同様な圧痕がみられる。

12は、把手部で、口縁上端に接合される類でいずれに付くのか不明である。13は下方に強く曲がる把手をつけたコップ状の器形である。12・13いずれの把手部も指オサエ痕明瞭である。

以上の出土遺物の他に、手捏ね模造品群中から、鉄滓2点、鞆羽口小片2点(同一個体)がみられる。鉄滓供献古墳は、福岡市周辺で32例、13古墳群が知られている。(註1)特に製鉄関連遺跡の多い早良平野に面する山麓群集墳中に調査古墳群中22%の高い率で供献されるといふ。本古墳群至近例としては、宗像郡津屋崎町清田ヶ浦8号墳(註2)が知られ、粕屋・宗像周辺での稀少な例である。製鉄関連遺跡についても本墳周辺には発見されず、東南7kmの和白遺跡(註3)、北方8kmの津屋崎遺跡群にみられるのみである。次に出土位置をみると、本墳の如く奥壁側周溝部出土はみられず、殆んど石室内・羨道・墓道部に集中するようである。本墳墓道側前半が削除されている事情を顧ると、通有の位置における供献も不可能ではなく、あながち稀少例ともいえないのかもしれない。また、製鉄関連遺物の出土と手捏ね土器群の共伴状況からみると、これら手捏ね土器が、坩堝の模造品なのではなかろうかとの想像もできはしまいか。類例の増加をまちたい。(註4) (中間研志)

- 註 1) 柳沢一男「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡について 4 鉄滓供献古墳について」における集成による。『広石古墳群』<福岡市埋蔵文化財調査報告書> 1977年
- 2) 小池史哲『清田ヶ浦古墳群発掘調査報告』津屋崎町教育委員会 1977年
- 3) 柳田純孝・塩屋勝利『和白遺跡群』<福岡市埋蔵文化財調査報告書> 1971年
- 4) 柳沢一男『相原古墳群』<福岡市埋蔵文化財調査報告書> 1974年 及び前掲書(1)の大沢正巳「福岡平野を中心に出土した鉄滓の分析」中に、相原3号墳Ⅲ区墳丘裾溝黒土層出土の「肉厚のルツボを思わせる様な器種」の図示がみられ、復元口径9.4cm、器高6.6cm、底部器厚2cmを測るもので、本墳例と近似する類である。ただ相原例は内面が焼けただけ、実用に供せられた後に供献されたものとされる。この点を除けば、墳丘裾溝状遺構出土という点、器形等類似点からも、本墳例が使用前の坩堝或いはその模造品と推定されよう。

(4) 古野第15号墳

墳 丘

ミカン園造成の際に墳丘が削平されたようで、調査時には墳丘は全く残っていなかった。よって墳丘に関する資料は全く得ることができなかった。

石室 (Fig.140)

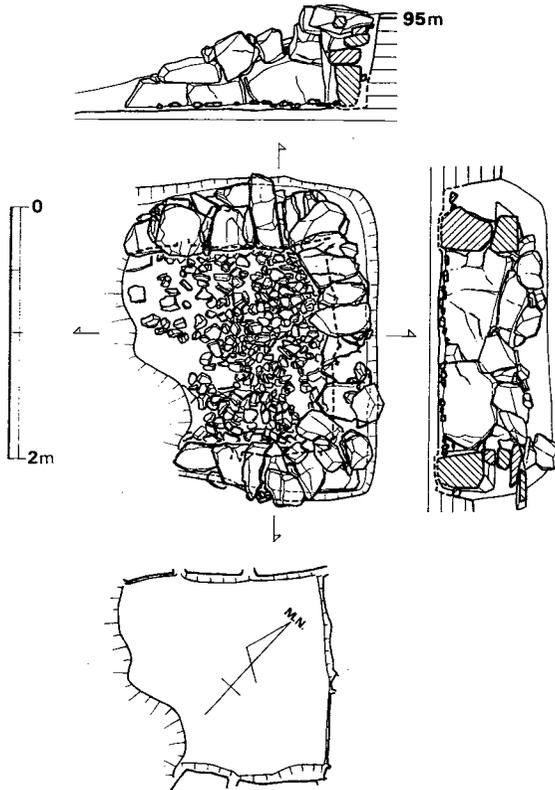


Fig. 140 古野第15号石室実測図 (1/60)

際に削られており、奥壁側で床面からの高さ0.8m、最も残りの悪い部分で0.2mを残すにすぎない。石室内からの出土遺物は全くなかった。 (児玉真一)

南西に開口する横穴式石室である。

玄室の半分を残して他の部分は全て削平された折に破壊されている。

玄室は残存部で幅1.55m~1.65m、長さ1.7m以上であり、長方形の平面プランを呈するものと思われる。床面には5cm~10cmの石を敷きつめている。敷石は一重である。

奥壁は2石を寝せて腰石となし、その上に1~2段の石積みが残っている。最も残存状態の良い部分で、床面からの高さは0.8mである。

側壁の腰石は右壁が2石、左壁が3石残っており、現状では腰石の上に、右壁では3段の、左壁では1段の石積みが残っている。共に奥壁寄りの石積みが最も良く残っており、床面から0.8m~1mの高さまで残っている。

石室を内蔵する墓壇は、墳丘削平の際に削られており、奥壁側で床面からの高さ0.8m、最も残りの悪い部分で0.2mを残すにすぎない。石室内からの出土遺物は全くなかった。

(児玉真一)

(5) 古野第23号墳

墳丘

尾根筋より少し下った西側斜面に位置し、標高92~93m程のところに築造されたものである。

墳丘は、開壟の際に削り取られており、発掘前は、石室の石が一部露出しており、築造時の盛土の状態、墳丘の規模など推測することはできなかった。

石室 (Fig.141)

略南東に開口する横穴式石室で、玄室の半分を残して全て羨道側から削りとられていた。

残存部分は、僅かに右側壁、奥壁、床石だけであった。

石組に使用された石材は、腰石には四角形のものを用いており、二段目からは、扁平なものを用いている。両者共玄室内の面を揃えるための加工は施されていない。

玄室の大きさは、奥壁部分で幅約1m程あまり大きな石室ではない。

床面は、大ぶりで扁平な石を敷き詰め、その上に小ぶりの石を敷いている。

掘り方は、奥壁側で残存中最も深く1mを測る。さらに腰石の部分は据付ける際に若干掘り込んでいる。

遺物は、開壟の際に全て失なわれ、なんらをも採取できなかった。

(平ノ内幸治)

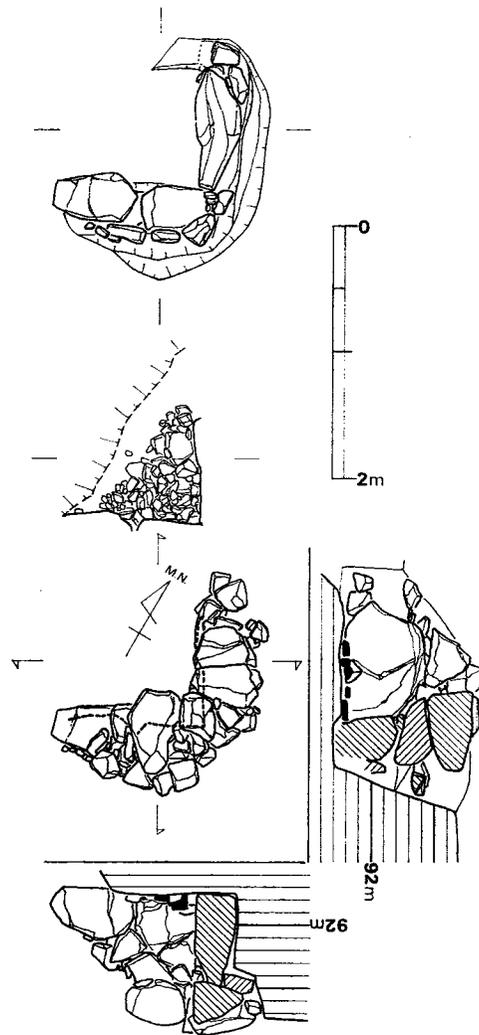


Fig. 141 古野第23号墳石室実測図 (1/60)

7 F 単位

(1) 古野第2号墳

墳 丘 (Fig. 142) ・ 石室 (Fig. 143)

略南西に開口する小形の横穴式石室とみられるが、奥壁腰石、右側壁奥寄が現存するにとどまる。墓壟の中は2.7m前後と推定され、深さは奥壁寄で1.1m強。構築に際しては、基部に壙

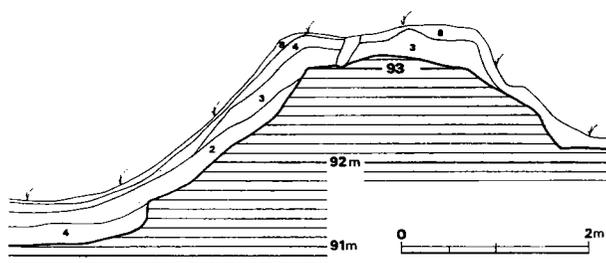


Fig. 142 古野第2号墳墳丘断面図 (1/80)

- 1 混白黄色茶褐色砂質土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 暗茶褐色土
- 4 暗赤褐色土
- 5 1 + 2
- 6 1 + 3
- 7 黒灰褐色土
- 8 表土

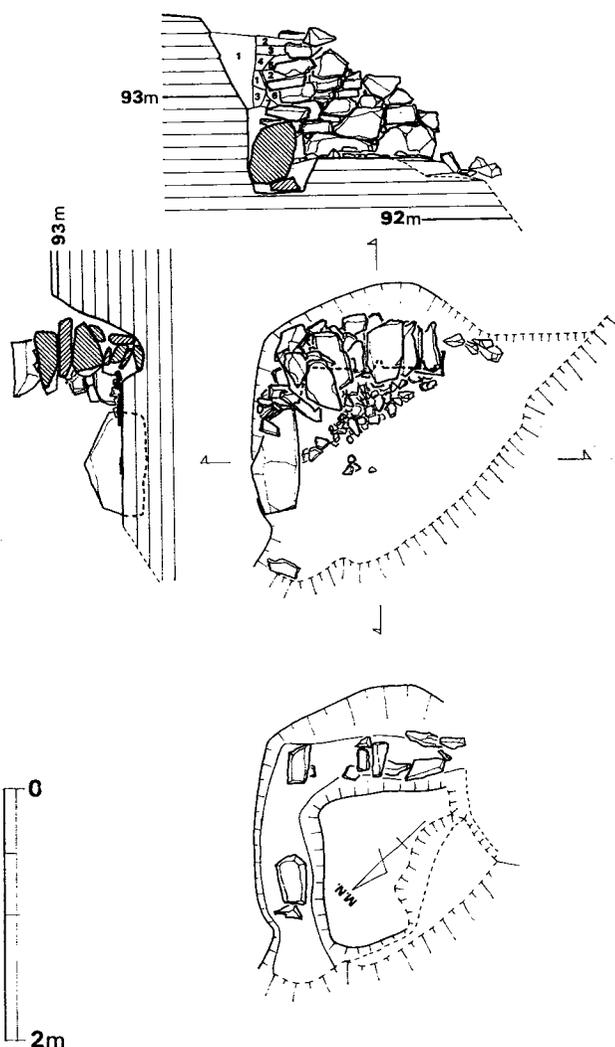


Fig. 143 古野第2号墳石室実測図 (1/60)

底を15~30cm穿って腰石を据え、以上は控えを長くとり要所に粘土を詰めつつ積み上げ、調査した古墳の中では最も整った感を受ける。現存高は1m強。長さは不明であるが、巾は1.5m前後と推定される。

床は礫一層から成る。

遺物

杯蓋 (Fig. 144)

撮を欠く。最大径13.1cm、現存高2.6cm。暗灰青色を呈して、焼成良好。身に被せての焼成。

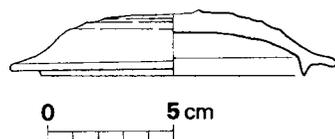


Fig. 144 古野第2号墳出土土器実測図 (1/3)

(石山 勲)

8 G 単位

(1) 古野第11号墳

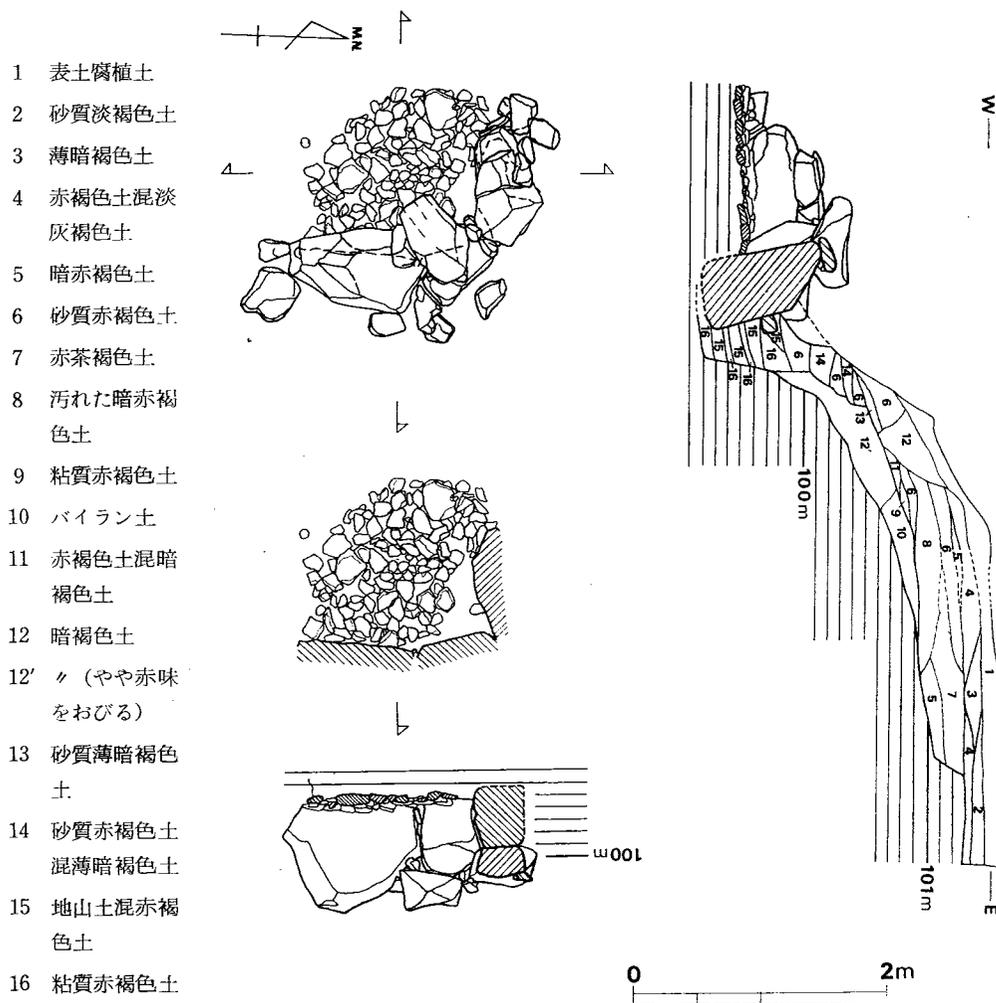


Fig. 145 古野第11号墳石室実測図 (1/60)

墳丘 (Fig. 145)

11号墳はみかん畑開墾の時、その墳丘のみならず石室の一部まで削平されていた。東側の崖に掘ったトレンチによりその規模を推定すると径約6mの墳丘を有するものであったと思われる。

墓壙は北東部のコーナーのところで確認できたが、その規模は不明である。奥壁と思われる石室用材と墓壙の間では、粘質土とバイラン土とで交互に版築してある。

石室 (Fig.145)

北東部の一隅を残すのみで、その規模、構造とも不明である。東側の壁が奥壁と考えられるので主軸はS-2°-Eとなりほぼ真西に向って開口していたと思われる。奥壁に2コ、北側の壁に1コ腰石を残すのみで、その上に一段積み石が残っていた。床には一面に大きさ5~30cm程度の礫の敷石がみられた。

石室、墓壇内の遺物は皆無であった。

(尾垣勝彦)

(2) 古野第24号墳

墳丘・主体

24号墳の北方5~7m、ほぼ24号墳と同レベル崖法面に礫石の集積が認められたので「25号墳」として発掘調査を行った。しかし集積の状況は何ら遺構としての様相を呈さず礫石の除去後南北に入れたトレンチにおいても古墳らしき遺構は認められなかった。しかしながら礫石群上部より須恵器杯蓋1個体の他、杯、杯蓋、甕の細片若干が出土しており、これらの礫石群あるいは上部斜面に存在した古墳が果樹園造成の際に崩壊流出したものかとも思われる。

遺物

杯蓋 (Fig.146-1・2)

1は破片であるが復元口径10.6cmのかえりを有する杯蓋である。天井部は平坦で右廻りのヘラによる回転痕を残している。かえりの先端を欠いているが口縁部水平面より3~4mm程長かったものと思われる。口縁部内外面にはヨコナデ調整を、天井部内面にはナデ調整を施している。色調は灰褐色で焼成は良好である。2は口径15.6cm、器高3.5cmの宝珠つまみを有し、かえりを持たない杯蓋で外面は天井部から口縁近くにかけて左廻りのヘラ削りが施されている。口縁部は長い嘴状を呈し、端部はわずかに平坦面を有する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整

で天井部内面には不定方向のナデが見られる。色調は淡緑灰色で胎土には多くの砂粒を含む。焼成はやや不良であり、外面にヘラ記号を有す。

(蒲原宏行)

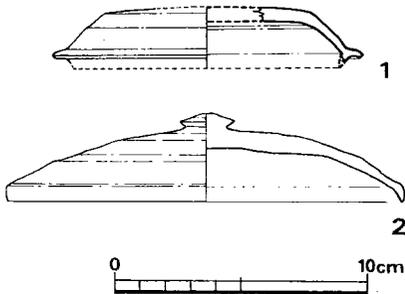


Fig.146 古野第24号墳出土土器実測図 (1/3)

9 その他

(1) 古野第1号墳

墳丘

3号墳を頂点とする尾根の一群より、北西に張り出し下がる尾根線上に存在する。当初、大石群が地表上に頭を出し、掘り下げたが、後述する如く、古墳であるとの確証は得られない。墳丘及び盛土等の痕跡も認められない。

石室 (Fig. 147)

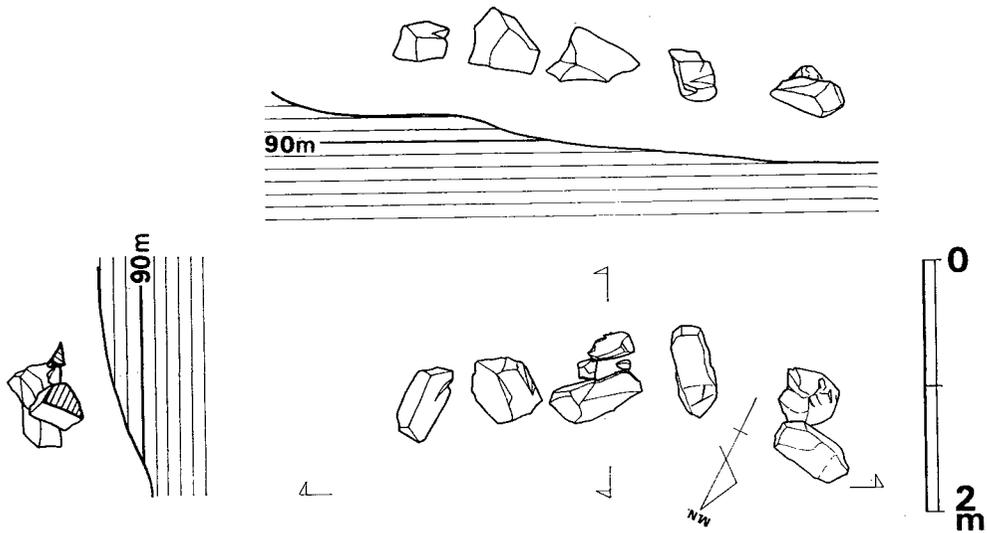


Fig. 147 古野第1号墳石組実測図 (1/60)

調査の結果0.5~1.0m大の花崗岩が尾根方向（南西—北東）に4個、更にその北東端に2個みられた。いずれも地山面より30~50cm浮いており、その並び方も、整然となる類ではない。各石の下或いはその周辺における石材抜き跡等もみられない。遺物等も全く検出されない。他古墳群とも離れた位置にあり以上の事から、古墳とは比定し難い列石群である。

(中間研志)

10 小 結

本群の構成については冒頭で述べたが、再述すると、

中央支群

- A単位 第3～6号墳
- B単位 第16～18・22号墳
- C単位 第19～21号墳

東支群

- D単位 第8～10号墳
- E単位 第12～15・23号墳

西支群

- F単位 第2号墳
- G単位 第11・24号墳

となる。これらの他に、G単位以西の採土予定地外にもなお1～2単位の存在を想定させる石材が散見されたが、破壊が著しく進行しており実態は明らかではない。けれども、D・E単位以東に古墳が営なまれた形跡はなく、北側斜面についても同様である。従って古野古墳群は、尾根筋から南斜面に営なまれた群集墳とすることができる。またこれらの3支群は小さな谷によって明瞭に画されており、厳然とした墓域の設定があったことが知られる。西支群の実態が不明確ではあるが、立地および古墳数からみて中央支群が相対的に優位にあることは疑いない。

石室構造上では、長方形プランと方形プランとに二分され、各々

I. 長方形プラン

- a—3・4・6・2号墳？
- b—13・14・16・20・21号墳
- c—12・19号墳
- d—15・18号墳
- e—8号墳

II. 方形プラン

- a—9号墳
- b—5号墳

と細別される。なお、本群では明確な複室構成をとる例は確認されていない。立地する傾斜面との関連からみても前室以前が破壊されたためとは考えにくく、単室であったと考えてよい。これが構造上古式にあるのではなく、一種の退化型式であることは明らかである。

以下、各支群を構成する単位の内部について少しく検討を加えたい。

中央支群

A単位

尾根筋の高所に営なまれる点で、東支群のD単位と共通し、他の単位とは立地上際だった差

異があることがまず注意される。最高所に位置する3号墳が先行し、4→6号墳と相次いで営なまれ、5号墳が最も後出するとみられる。3号墳は群中では最古とみられ、本単位は本古墳群の先駆的存在といえる。築造位置は、より低位へ南東へと移動している。石室構造上では、3・4・6号墳は狭長なプランに特色があって同系統に属するが、小型化する傾向にあり、かつ東支群にはこのタイプが築造されない点が注意される。また、3・4号墳石室は、羨道側壁最先端が墳丘裾部に沿って外反する点特徴的であり、同時に玄室巾：玄室長：石室全長がほぼ1：2：4の比率にあって企画性に富む。

これに対して5号墳石室は、稍横長の方形プランの玄室に裾開きとなる長い羨道を設けるといふ全く異質の構造をとり、ギャップを感じさせるものがある。

B単位

単位内では最高所に位置する17号墳が、先行しかつ最大とみられ、この点でA単位と通ずるものがある。16・22号両墳と17・18号両墳とでは開口方向が異なる。

C単位

3号墳は東西に並び、玄室床面高は東端の19号墳が西端の21号墳に対し約0.9m高位にあるが、垂直的移動はさほどではない。20・21号墳は19号墳よりも大型であり、後者よりも先行すると思われる。なお、19号墳石室は奥壁と平行する屍床を設けており、東支群E単位の12号墳と共通することが注意される。

東支群

D単位

8・10号両墳は略同位にあり、中央の9号墳はやや低位にある。10号墳は不明であるが、8号墳は、方形に近い長方形、9号墳は方形プランを呈し、本単位は群全体の中でも異色の存在である。

E単位

群中では最大規模の玄室面積をもつ12・13号両墳を含むことがまず注意される。両墳に続く規模とみられるのは、C単位の21号墳である。15・12号墳については、これをD単位あるいは新たな単位に属されることも可能であるが、D単位の石室プランの特異性を考えると、これに含めるには躊躇する。13号墳は、最低位にあるが、C単位の21号墳と石室の形態では通ずるものがある。この他にも14号墳は20号墳に、12号墳は19号墳にと、C単位の諸例と共通する特色をもつ古墳が多いことが特徴的である。

西支群

F・G単位

先述したように破壊が著しく進行しているので全体像は明らかではない。けれども地形等から敢えて推測すれば、いずれも3～4基で1単位が構成されたとみられ、既述した本群の他の単

位との間に顕著な差があったとは考えられない。

各単位は、いずれも3・4基から成る点で共通しながらも、多少の個性が認められる。A単位は、石室構造・立地上で群全体の中でも特異な存在といえ、没交渉的である。これに対して同じく中央支群に属するC単位は、前述のとおりE単位との交流が認められ、また石室の規模もE単位と同様群内部では大型で中核的存在といえる。B単位からは、エネルギー的なC・E単位に比して全体的に小じんまりとした感を受ける。

なお、14号墳からの鉄鏝・鞆羽口が注目され、本群を形成した集団の生産活動の一端が窺われる。

これら各単位の营造時期ならびに相互の先後関係が問題となるが、基本的にはⅢ期（註1）に遡る須恵器が皆無である点から終末期古墳として位置づけられる。既述のように破壊が進行しており、遺物特に須恵器の遺存度にばらつきがあり、初葬時・追葬時の確定にはかなりの困難がある。

とりあえず、各古墳で採取された須恵器のうち、より古い型をとり挙げてみることにする。まず、第Ⅳ期に該当する須恵器を伴う例としては、A単位の4号墳、E単位の12・13号墳、F単位の2号墳、G単位の24号墳が挙げられる。このうち、4号墳では第ⅥA期、12号墳では第ⅦC期、24号墳では第ⅦC・ⅧA期、と後出する型式を伴う。第Ⅴ期の須恵器を伴う例としては、C単位の19号墳、E単位の14号墳がある。第Ⅶ期の例は、D単位の8～10号墳に限られ、しかも3墳とも第ⅦA期の須恵器を伴う点が特徴的である。

以上の各墳における須恵器の型式比定は築造時期決定上の一応の目安に過ぎないが、D単位の3墳が他の単位に比して後出することは明らかで、既述の石室構造における特異性とも符合する。また、各支群とも第Ⅳ期に築造が開始されたとみられるが、そのうちでも中央支群A単位の第3・4号墳が若干先行したのではないかと推定される。以後第Ⅴ期まで、D単位を除く各古墳が相次いで築造されたとみられ、単位内部での先後関係については前述のとおりである。第Ⅶ期の築造にかかる古墳は3基に過ぎず、それ以前の計19基に比して圧倒的に少なく、本群はこの時期にいたりまさに最終末を迎えたとみられる。

（石山 勲）

註 1 ここで使用する型式・年代観については、小田富士雄・真野和夫両氏の見解に従っている（八女古窯跡群調査団『立山山窯跡群』〈八女古窯跡群調査報告Ⅳ〉1972）。同書で両氏は各々、「7世紀代（第Ⅴ・Ⅵ期）から8世紀代（第Ⅶ期）」、「第Ⅲ期が6世紀終末から7世紀の前半代にかけての時期、第Ⅵ期は7世紀後半代を中心とする時期」とされている。小田氏は、この年代観を近著でもほぼ踏襲されている（同氏「豊前地方における須恵器」『天観寺窯跡群』1977年所収）。

なお、参考までに大阪府・陶邑古窯跡群の調査結果に基いての中村浩氏の最新の編年と上記の小田

・真野編年とを対比すれば、

Ⅱ型式第6段階 ————— 第Ⅳ期

Ⅲ型式第1・第2段階 ————— 第Ⅴ期

Ⅲ型式第3段階・第Ⅳ型式第1段階 ——— 第Ⅵ期

となると思われる。器種、成形・調整技法等にかかなりの差異があり、単純な比較は危険であるが、一応の目安として敢えて対比を試みた次第である（中村浩『陶邑Ⅱ』〈大阪府文化財調査報告書29〉1977年）



1. 古野古墳群全景航空写真



2. 古野古墳群全景（上方道路が縦貫道）



1. 古野古墳群中央支群A単位全景



2. 古野古墳群B～G単位全景



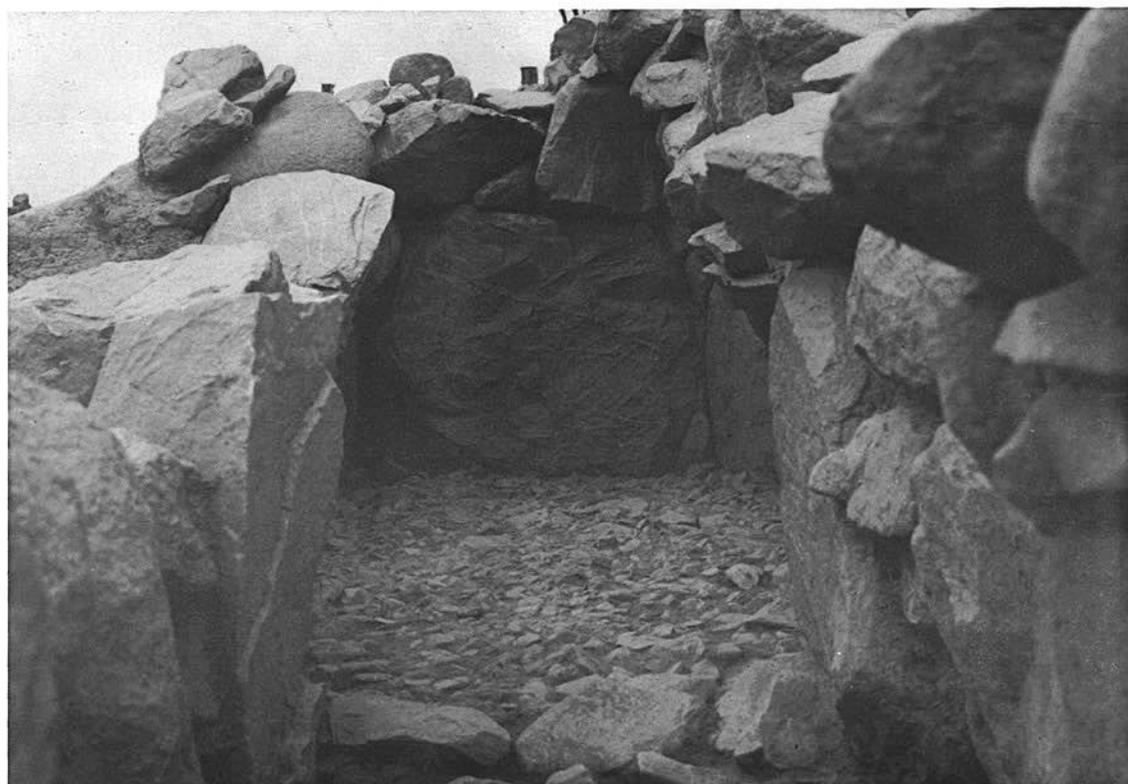
1. 古野第3号墳全景



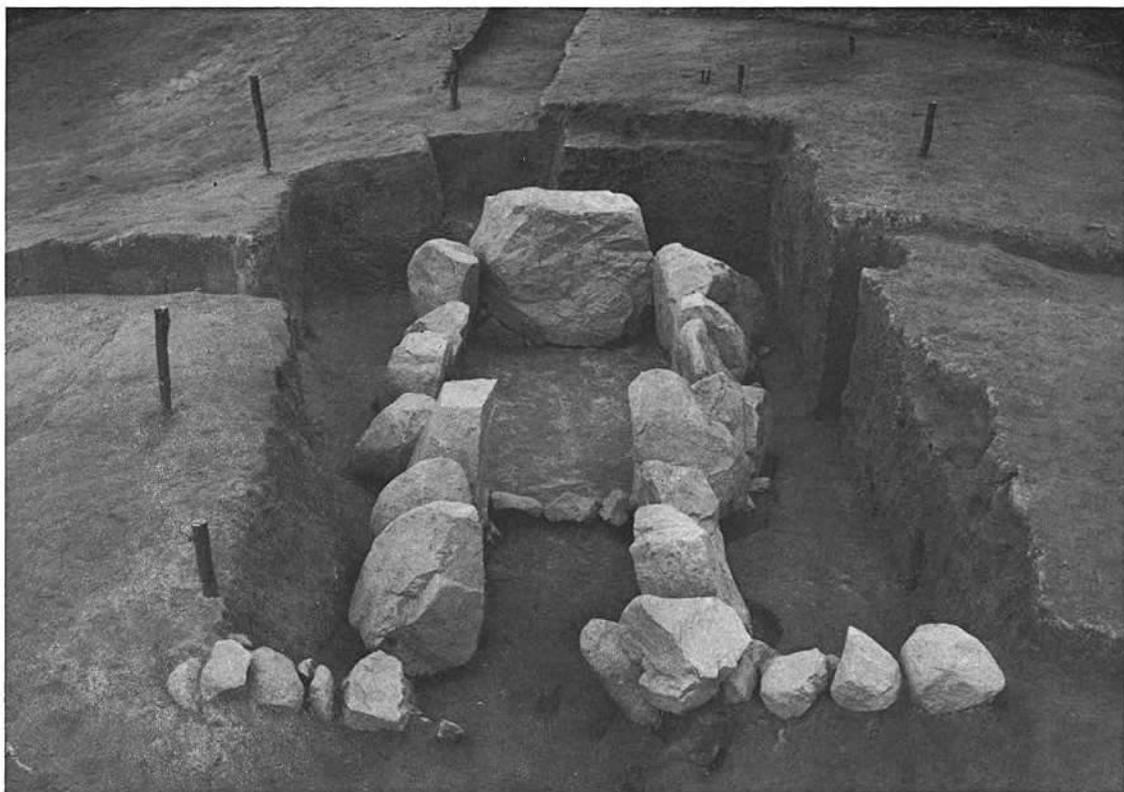
2. 古野第3号墳羨道部



1. 古野第3号墳石室全景



2. 古野第3号墳玄室奥壁



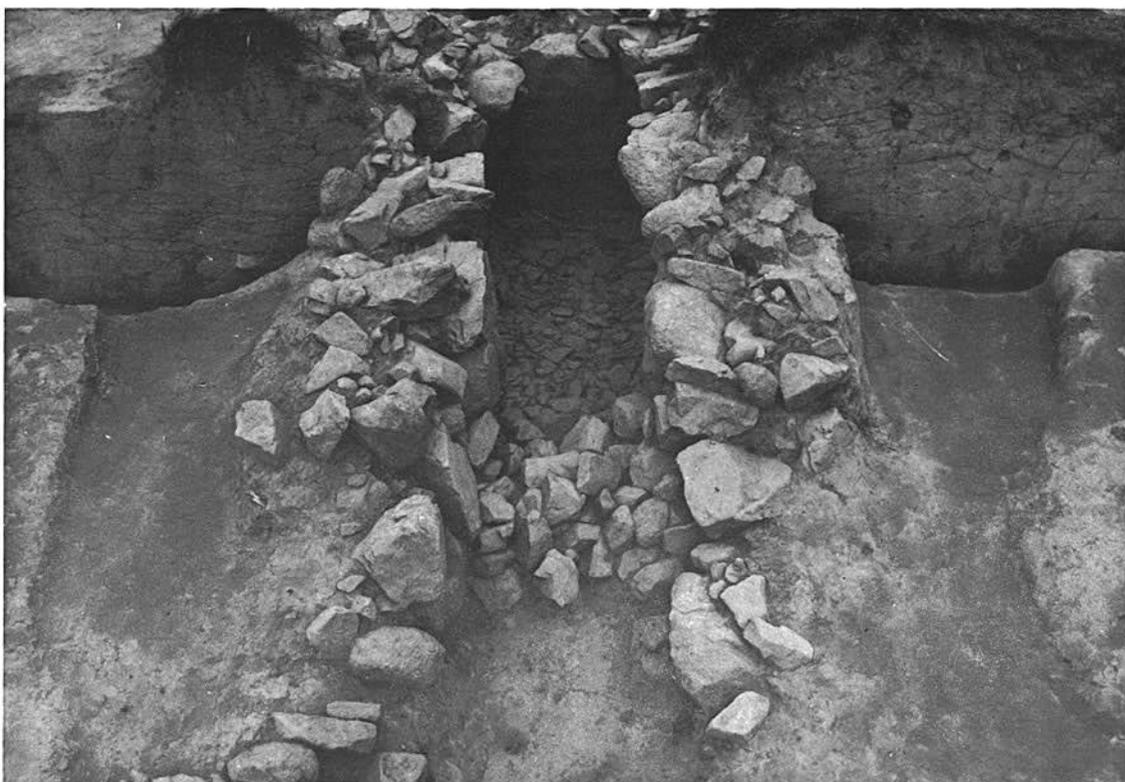
1. 古野第3号墳腰石据付状態



2. 古野第3号墳遺物出土状態



1. 古野第4号墳墳丘全景（北から）



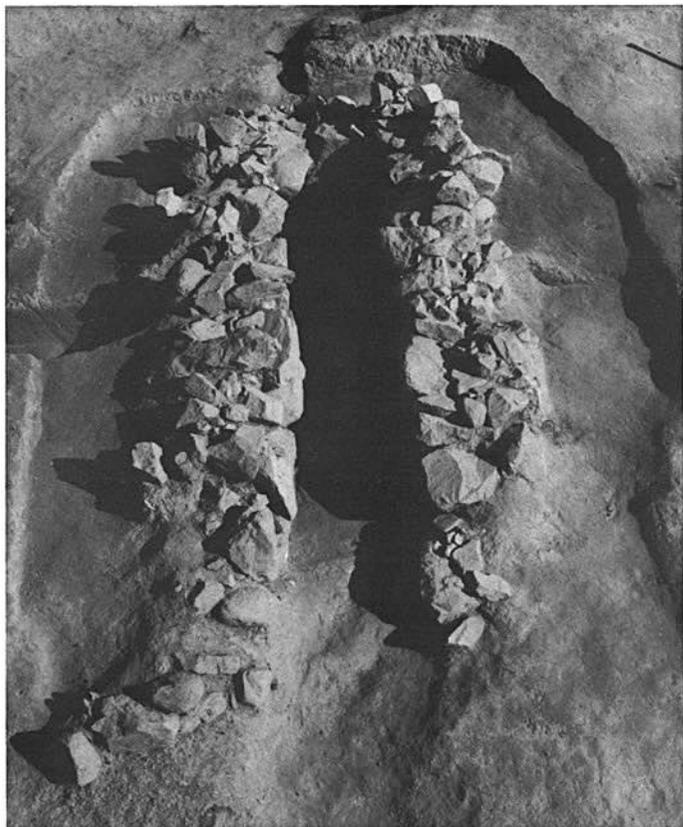
2. 古野第4号墳閉塞状態



1. 古野第4号墳墳丘断面東半



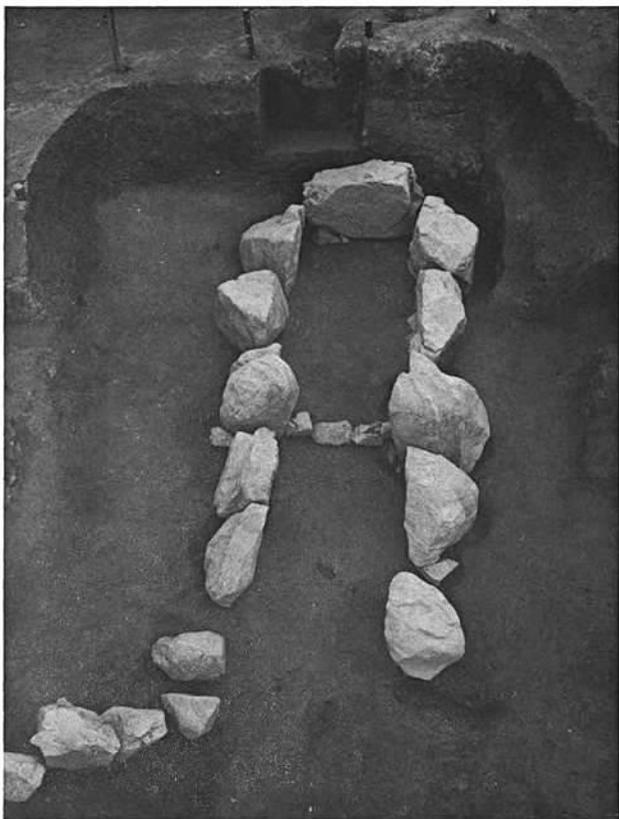
2. 古野第4号墳墳丘断面西半



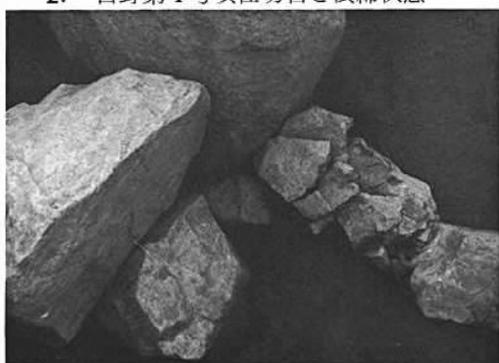
1. 古野第4号墳石室全景



2. 古野第4号墳羨道左側壁（上方は第3号墳）



1. 古野第4号墳石室根石据付状態



2. 古野第4号墳仕切石と根締状態



3. 古野第4号墳台付礫出土状態



4. 古野第4号墳亀形提瓶出土状態



1. 古野第5号墳石室全景



2. 古野第5号墳玄室奥壁（右上方は第4号墳）



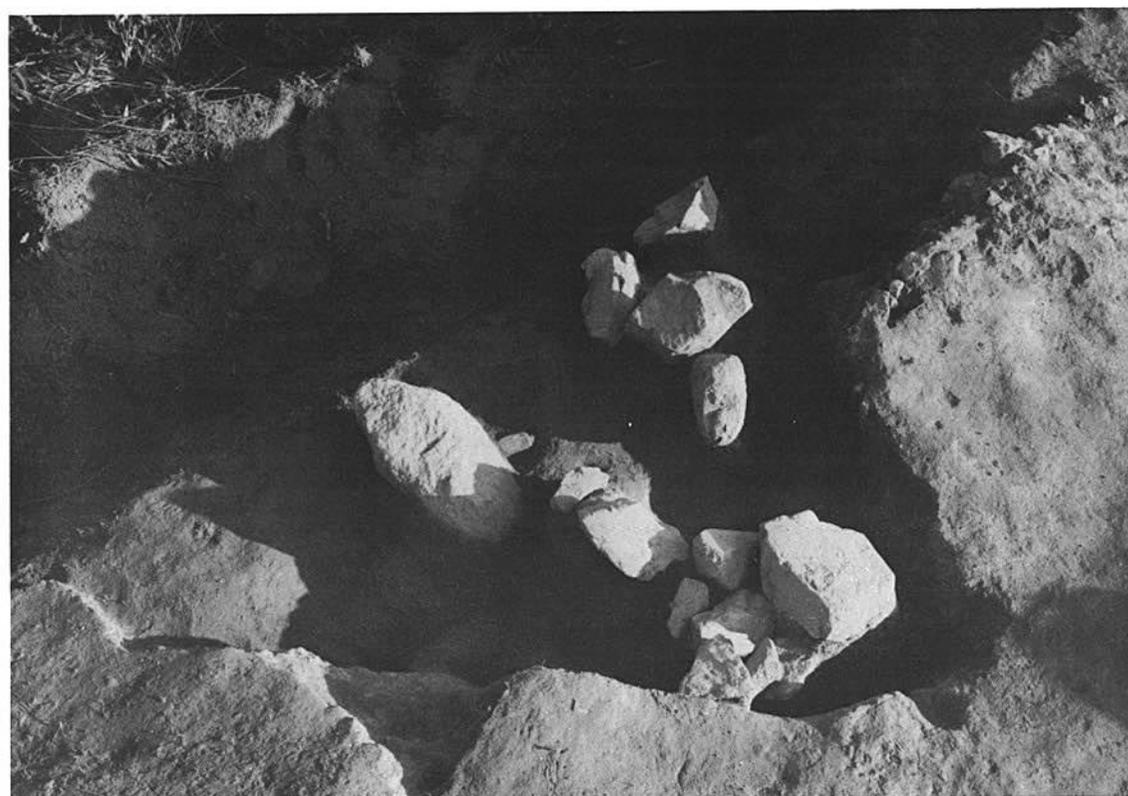
1. 古野第5号墳左側壁



2. 古野第6号墳発掘前石材露出状態



1. 古野第6号墳石室全景



2. 古野第7号墳? 石材残存状態



1. 古野第16号墳発掘前全景



2. 古野第16号墳石室全景



1. 古野第16号墳玄室腰石据付状態（左端は第18号墳）



2. 古野中央支群B単位墓壙全景



1. 古野第17号墳石材残存状態



2. 古野第17号墳石室全景



1. 古野第18号墳石室全景



2. 古野第18号墳腰石据付状態



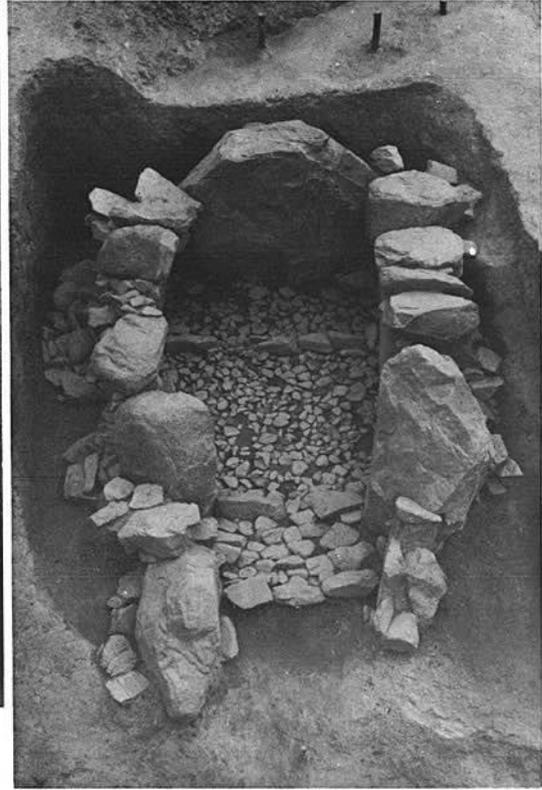
1. 古野第22号墳石室全景



2. 古野第22号墳墓壁全景



1. 古野第19号墳石室全景



2. 古野第19号墳石室全景（閉塞石除去後）



3. 古野第19号墳石室腰石据付状態



1. 古野第19号墳玄室横口部土器出土状態



2. 古野第19号墳丁字頭勾玉出土状態



1. 古野第20号墳石室全景



2. 古野第20号墳玄室奥壁



1. 古野第20号墳石室腰石据付状態



2. 古野第20号墳長頸壺出土状態



1. 古野第21号墳発掘前石材露出状態



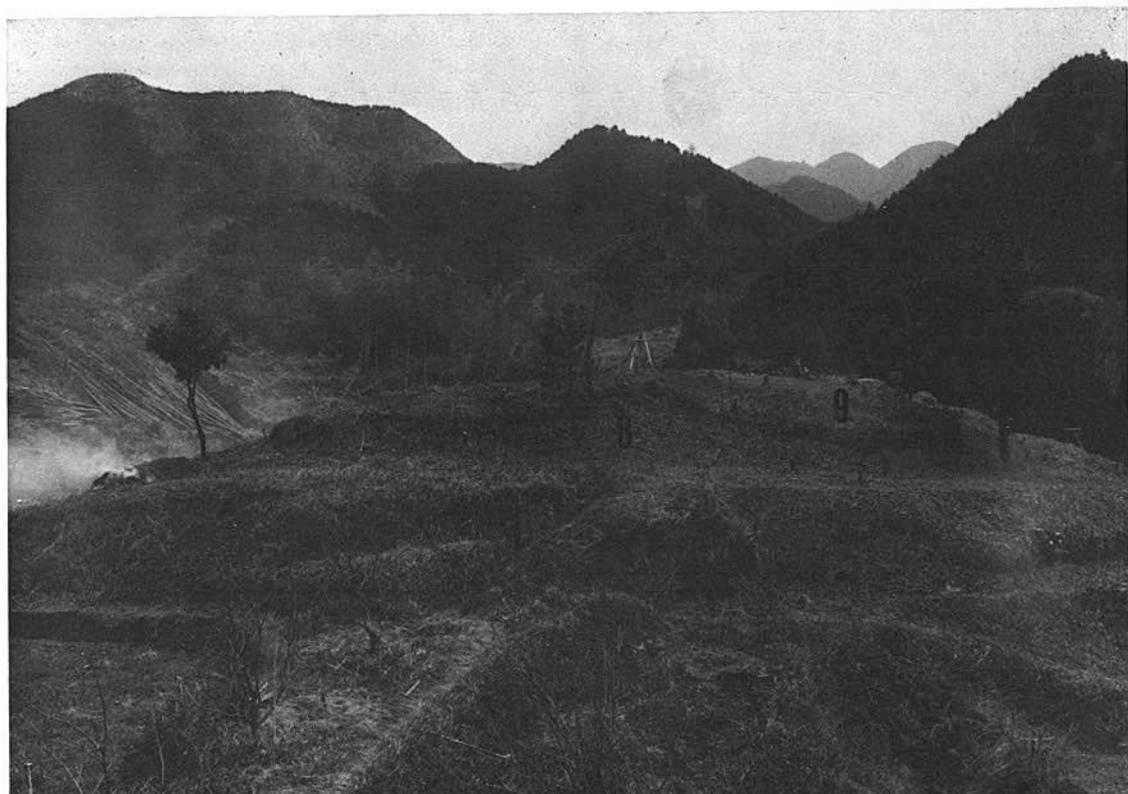
2. 古野第21号墳石室全景（床上層の小円礫除去後）



1. 古野第21号墳腰石据付状態



2. 古野第21号墳墓跡全景



1. 古野東支群D單位発掘前全景



2. 古野東支群D・E單位全景



1. 古野第8号墳石室全景



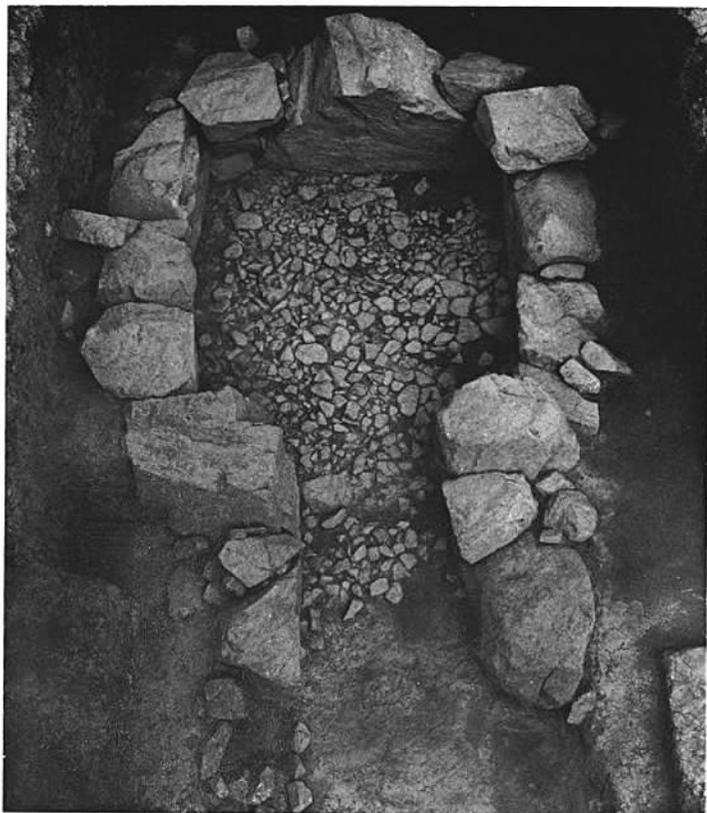
2. 古野第8号墳石室近景



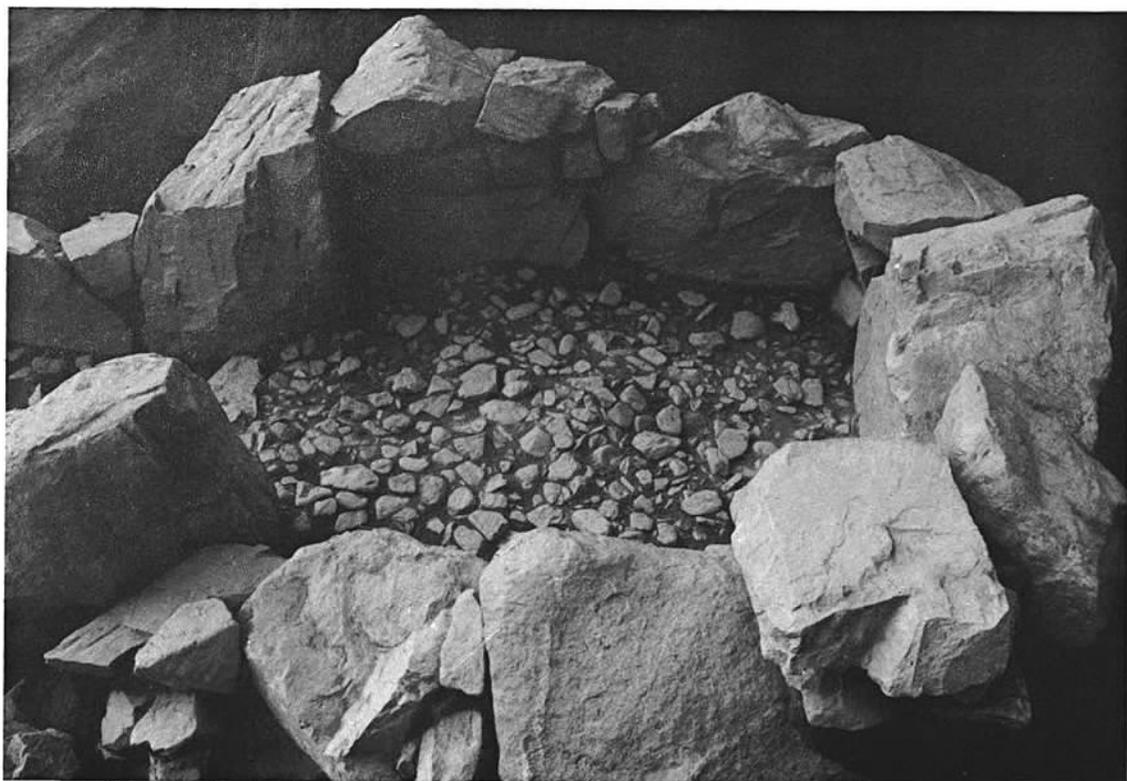
1. 古野第8号墳女室奥壁



2. 古野第8号墳土器出土状態



1. 古野第9号墳石室近景



2. 古野第9号墳石室左侧壁



1. 古野第9号墳石室全景（右上方は第10号墳）



2. 古野第9号墳玄室遺物出土状態



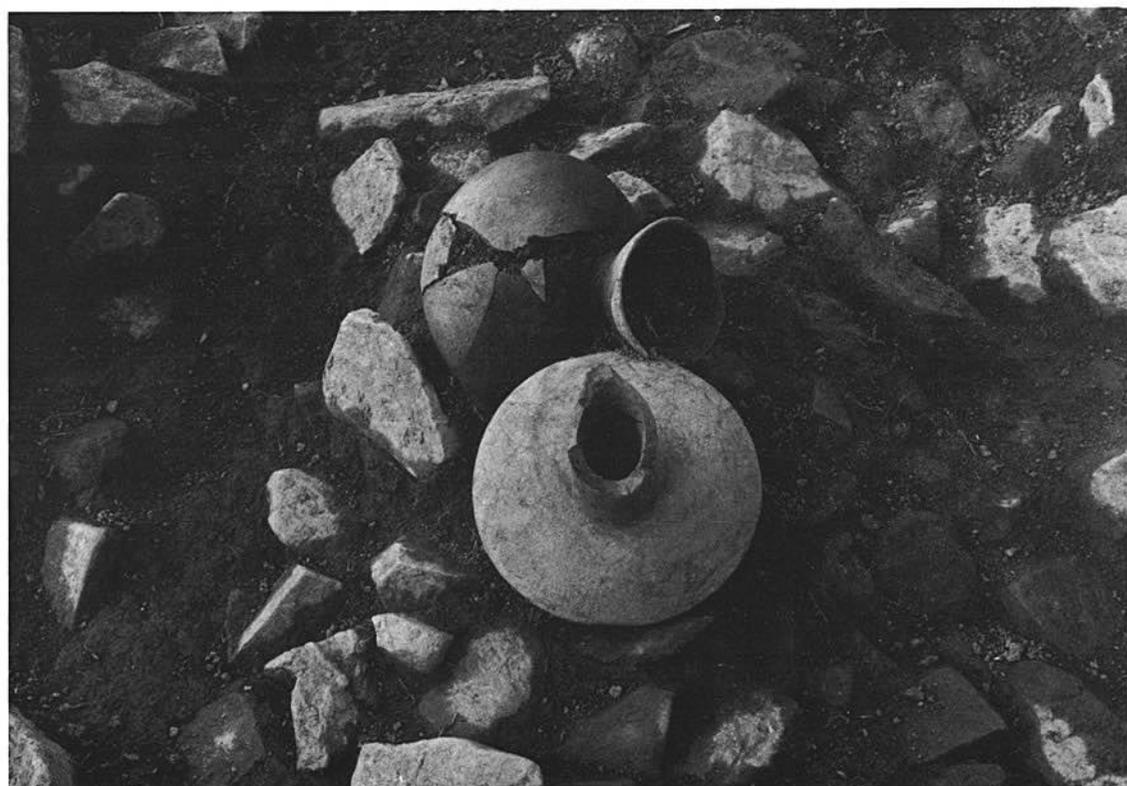
1. 古野第10号墳石室全景



2. 古野第10号墳石室全景



1. 古野第10号墳遺物出土状態全景



2. 古野第10号墳須恵器出土状態近景



1. 古野第12号墳石材露出状態



2. 古野第12号墳石室全景



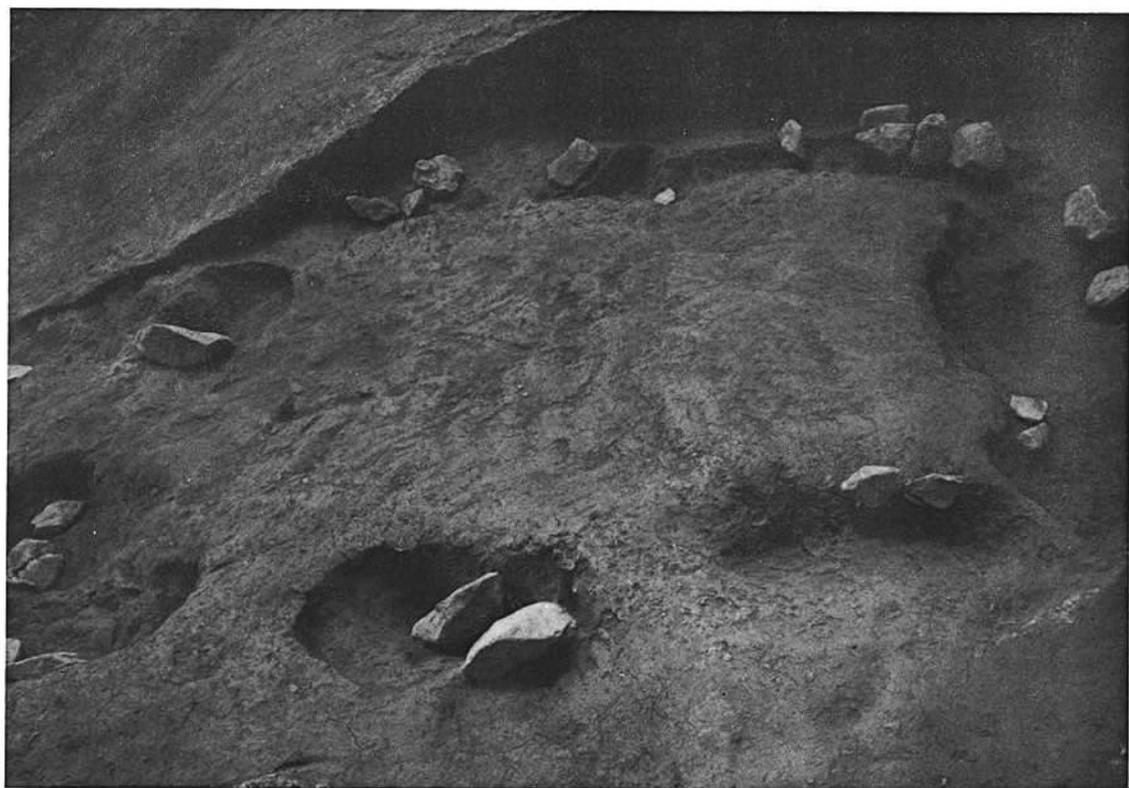
1. 古野第12号石室全景



2. 古野第12号墳玄室床面 (右が奥壁)



1. 古野第12号墳腰石据付状態



2. 古野第12号墳腰石据付のための孔と根石



1. 第12号墳玄室遺物出土状態



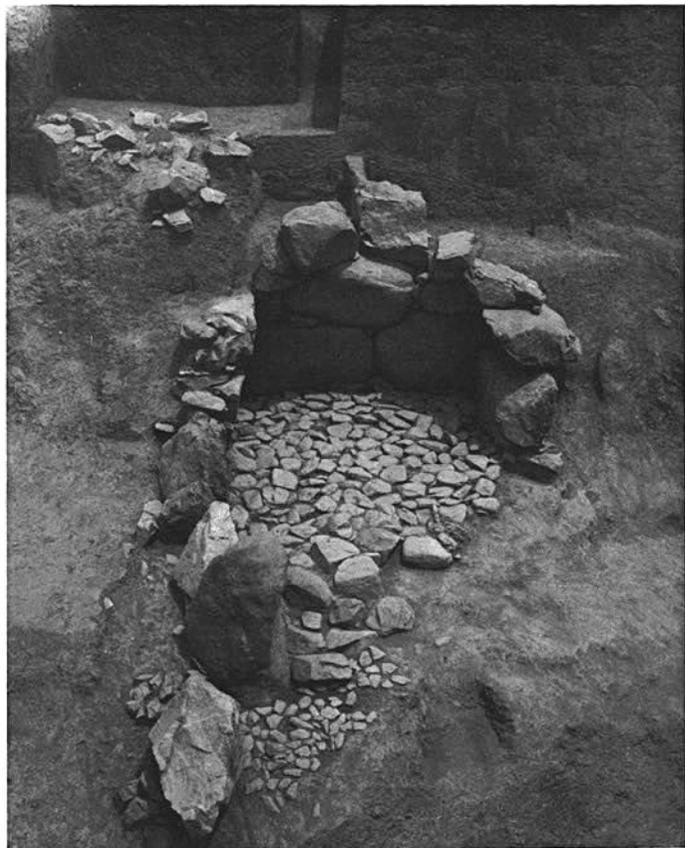
2. 第13号墳全景



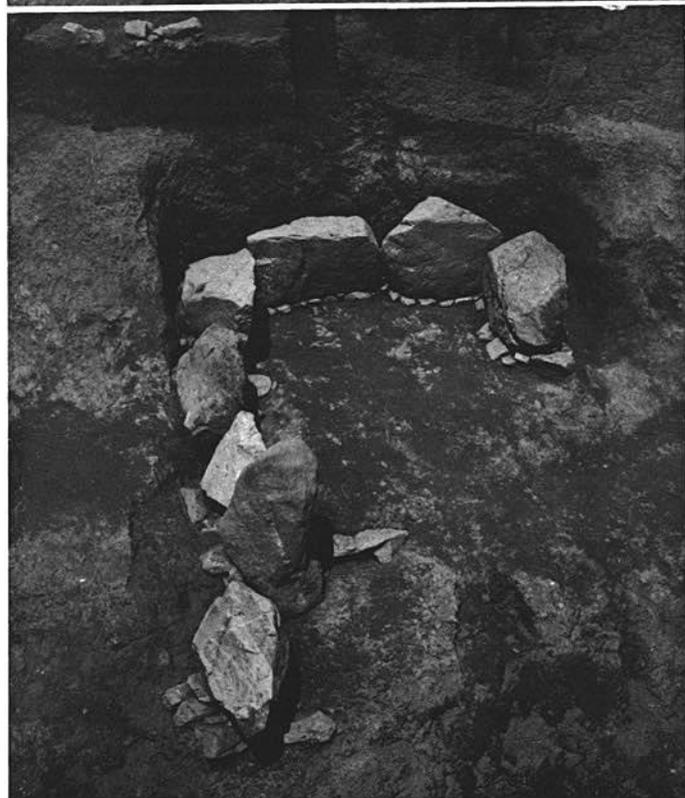
1. 古野第13号墳墳丘中核と玄室腰石据付状態



2. 古野第13号墳玄室奥壁と左側壁



1. 古野第13号墳石室全景



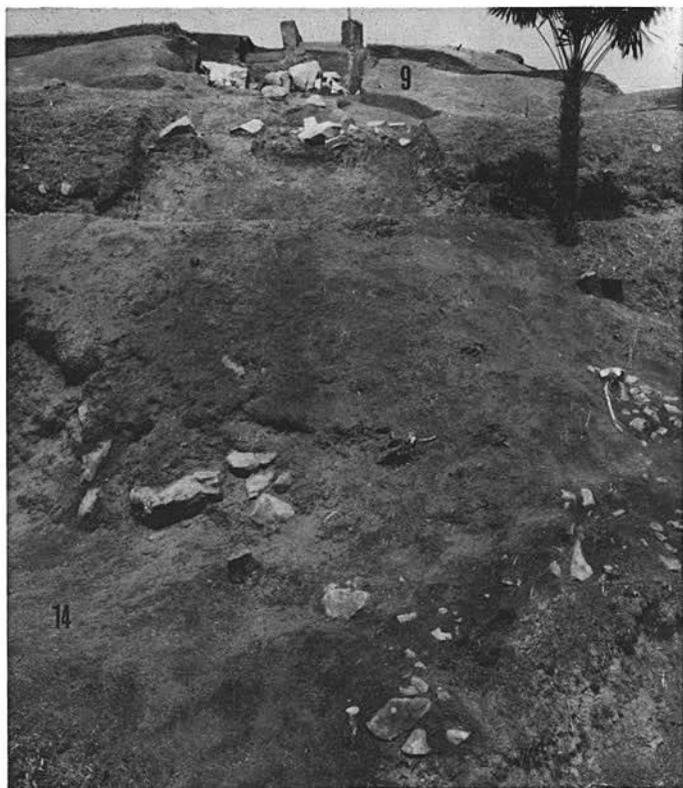
2. 古野第13号墳腰石据付状態



1. 古野第13号墳腰石据付状態（南東から）



2. 古野第13号墳玄室床面と羨道床面との高低差



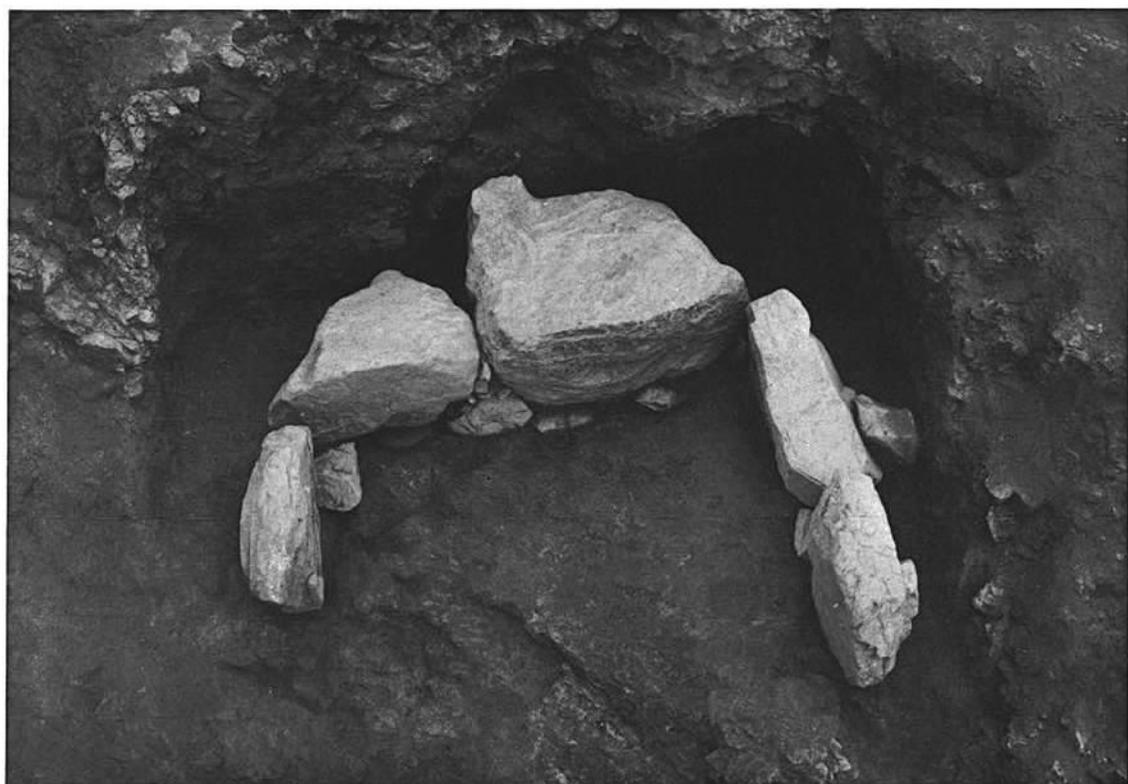
1. 古野第14号墳石材露出状態



2. 古野第14号墳奥壁背面墳丘断面



1. 古野第14号墳全景



2. 古野第14号墳玄室腰石据付状態



1. 古野第14号墳土器出土状態



2. 古野第14号墳



1. 古野第15号墳玄室全景



2. 古野第15号墳玄室腰石据付状態



1. 古野第23号墳玄室奥壁



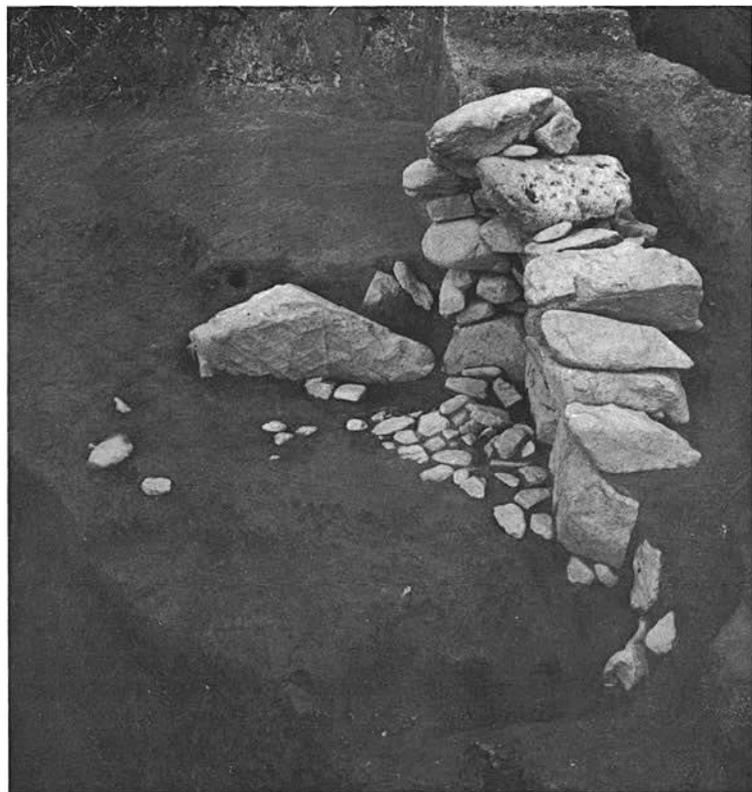
2. 古野第23号墳腰石据付状態



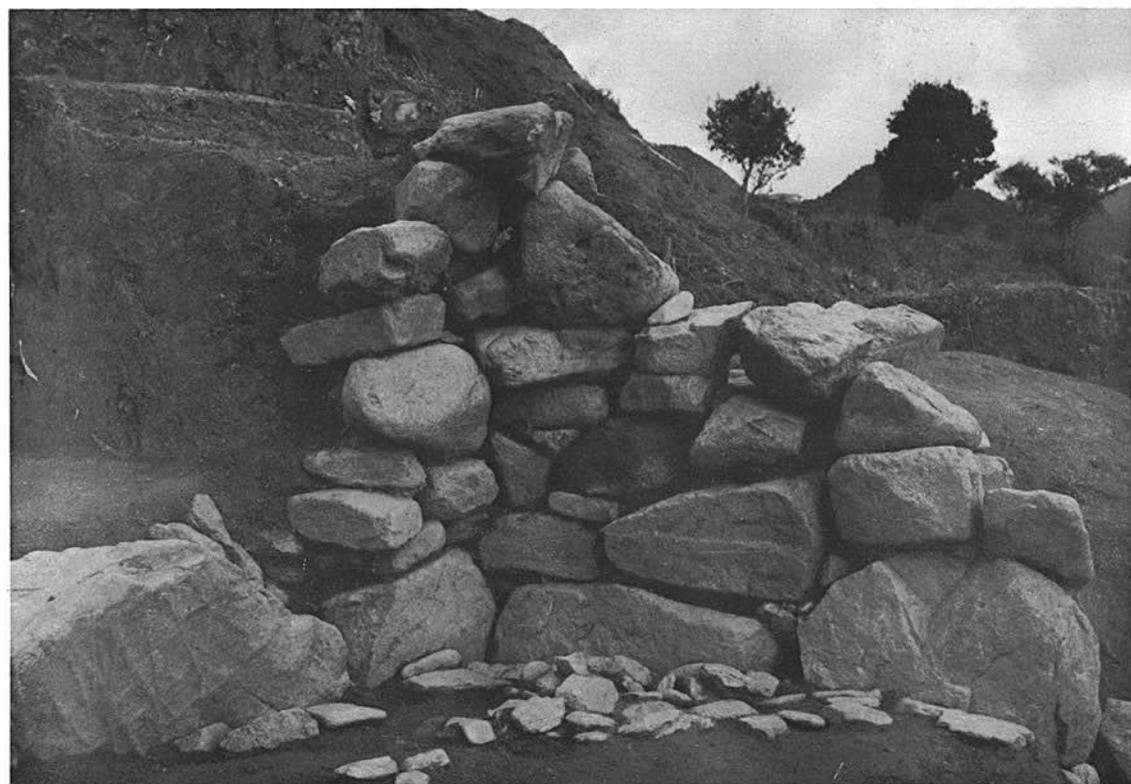
1. 古野第2号墳（南東から）



2. 古野第2号墳（北から）



1. 古野第2号墳石室全景



2. 古野第2号墳玄室奥壁と右側壁



1. 古野第11号墳石材集積状態（西から）



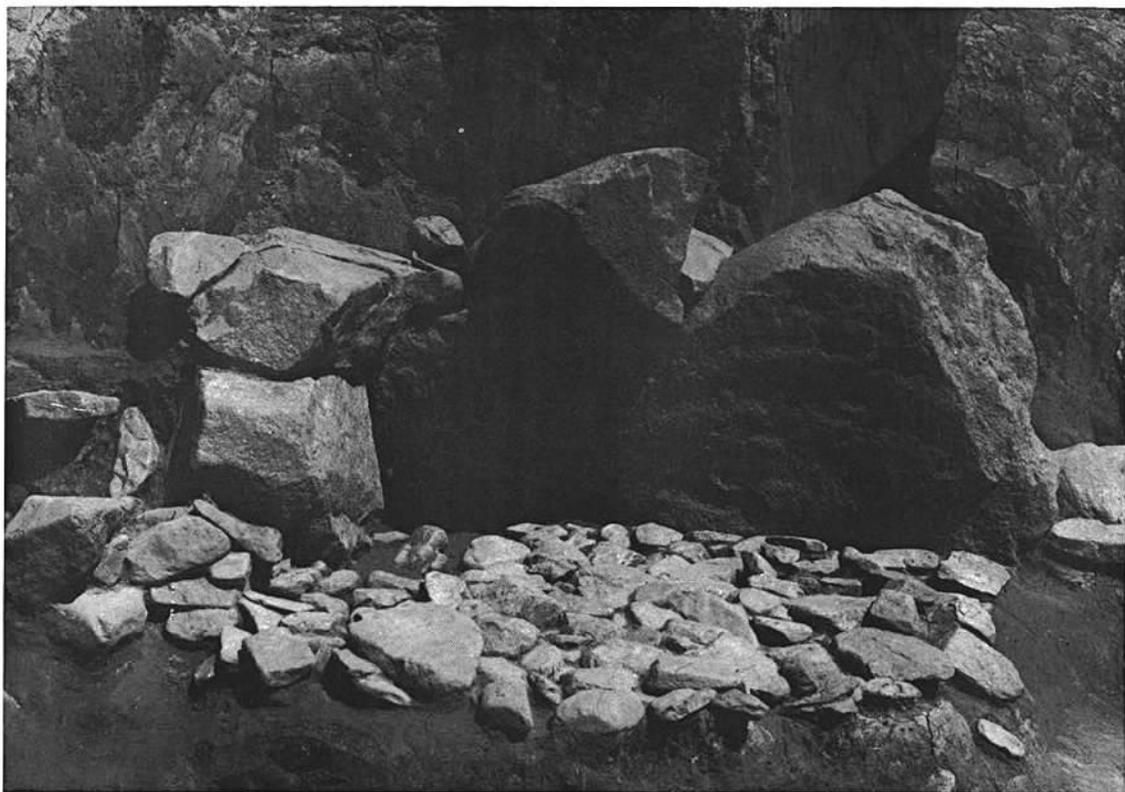
2. 古野第11号墳石材集積状態



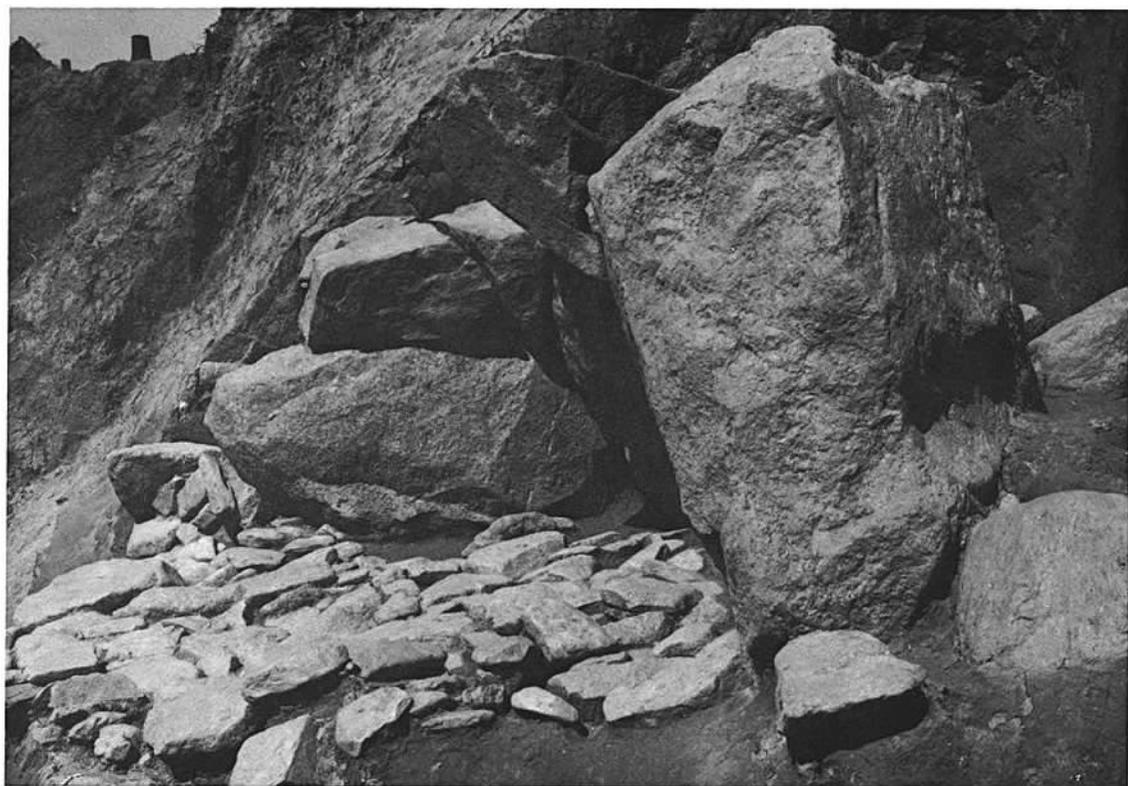
1. 古野第11号墳石材集積状態（南から）



2. 古野第11号墳玄室全景



1. 古野第11号墳玄室奥壁



2. 古野第11号墳玄室左侧壁



1. 古野第1号墳（発掘前）



2. 古野第1号墳（発掘後）



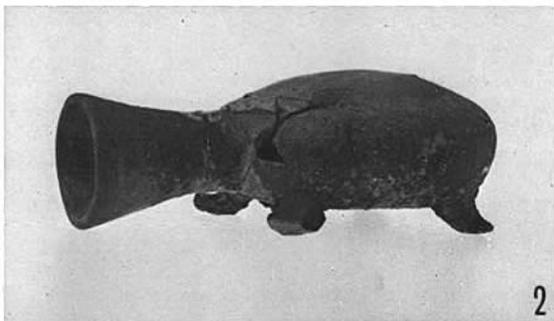
1



1



3

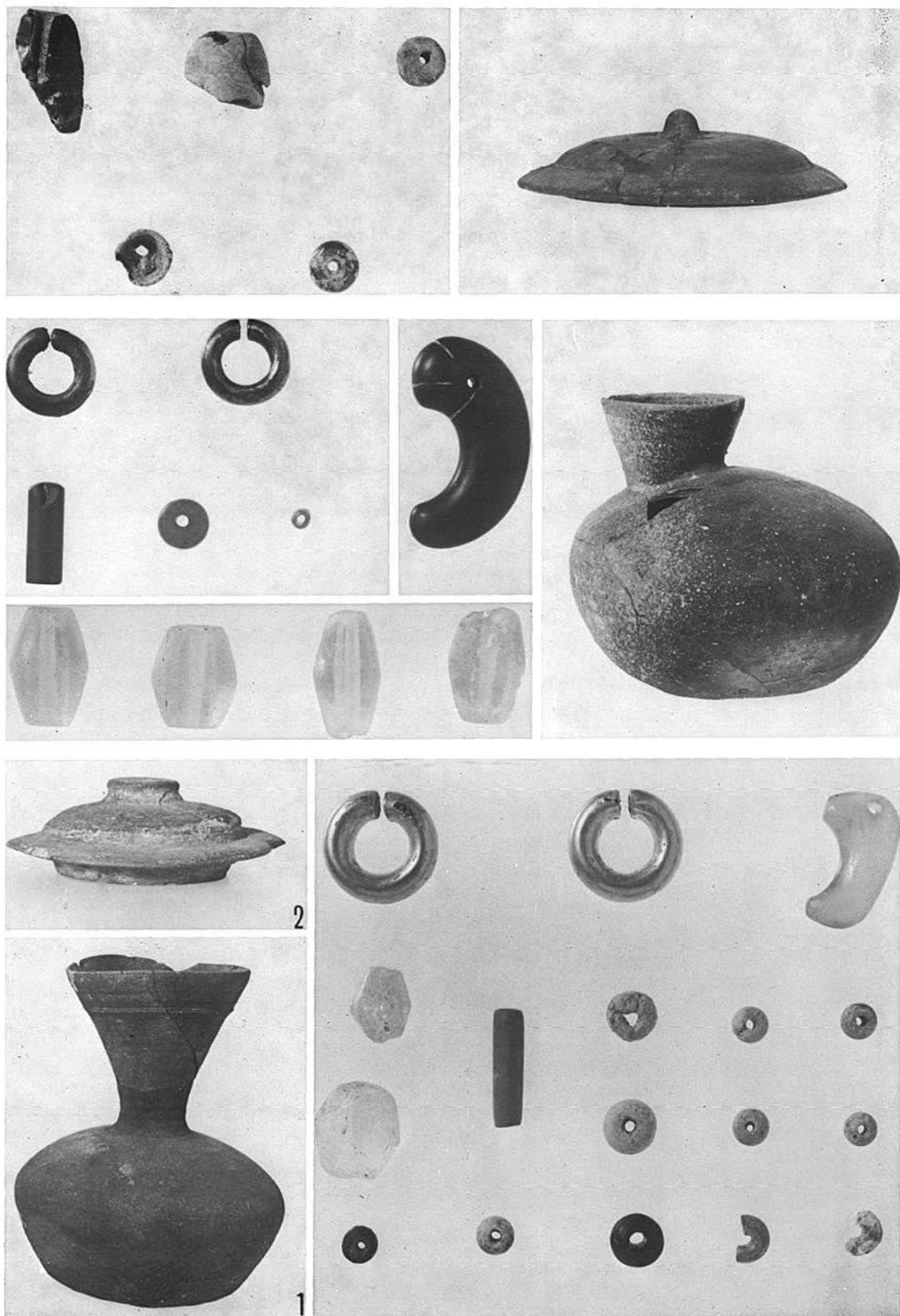


2

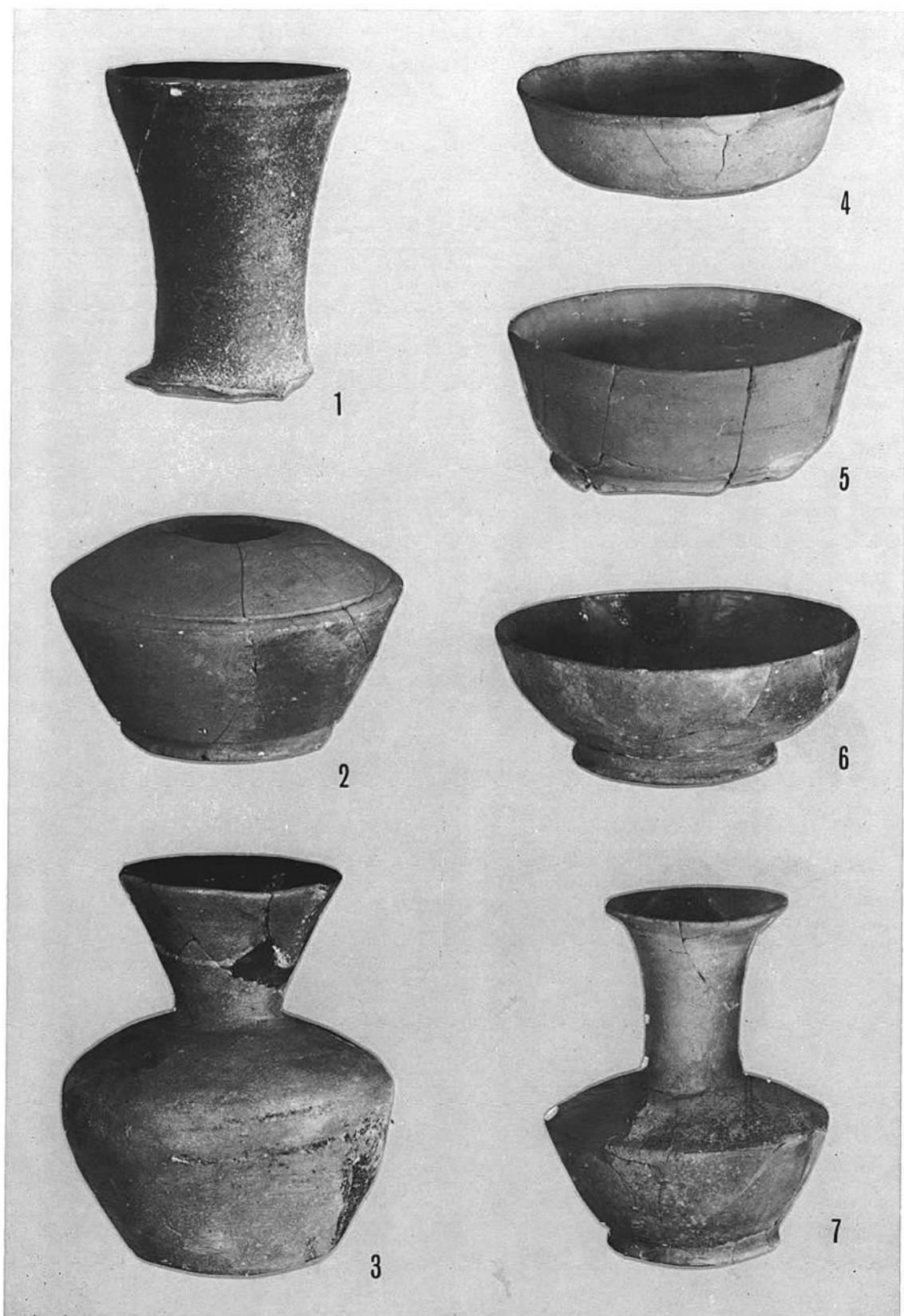
1. 古野第3号墳出土須恵器



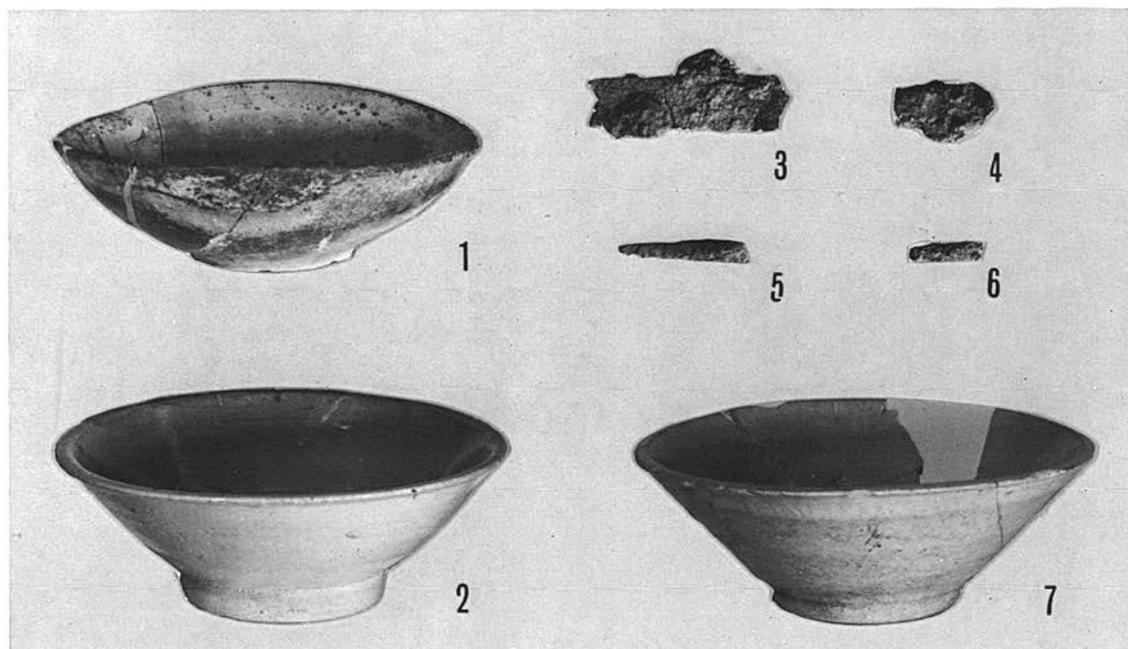
2. 古野第4号墳出土須恵器（台付碗・亀形提瓶）



古野第6・19・20号墳出土遺物（上段—6号墳，中段—19号墳，下段—20号墳）



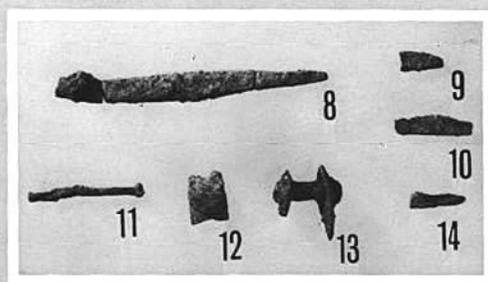
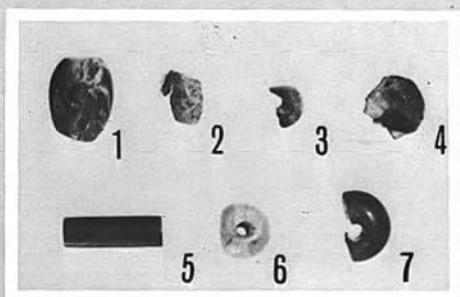
古野第 8 号墳出土土器



1. 古野第8号墳出土遺物



2. 古野第9号墳出土土器



15



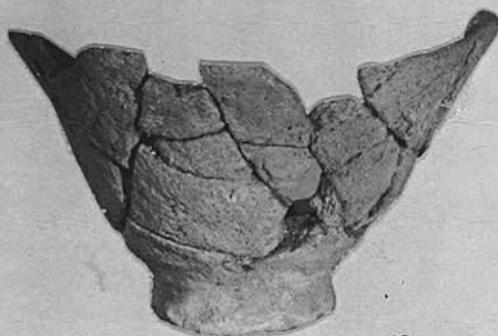
17



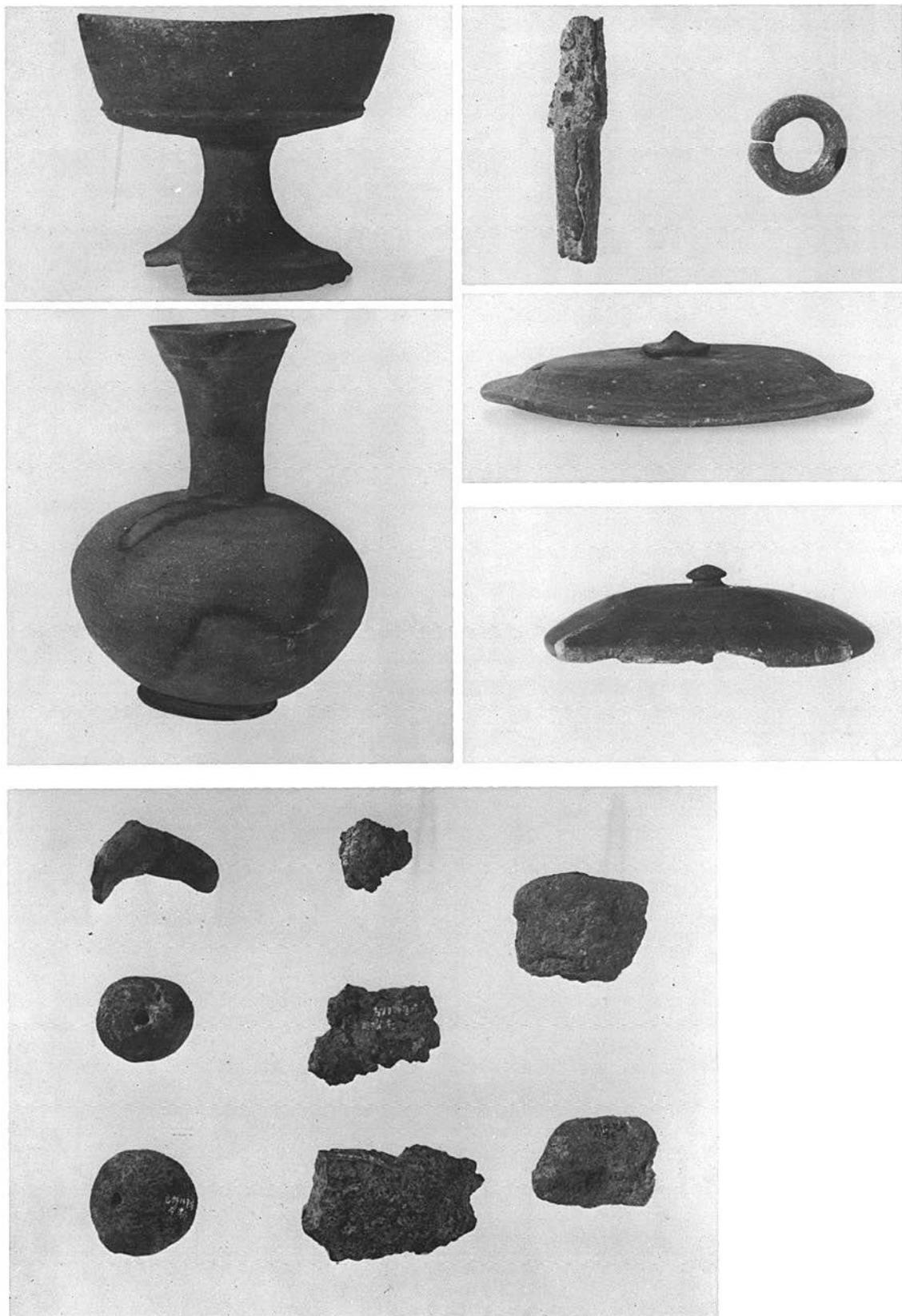
18



16



19



古野第12・13・14・23号墳出土遺物（上段左列—12号墳，上段右列—13・24号墳，下段—14号墳）



古野第14号墳出土土製模造品

Ⅳ 結 語

(1)

昭和47年度から50年度にわたった古賀地区関係の調査によって、多くの考古学的新知見が得られた。後期後半を中心とする時期の縄文式土器（水上遺跡）・弥生時代後期初頭に比定される石蓋甕棺（中ノ坪遺跡）の確認は、その代表的な例である。また、遺構との関連は不明確ながら、太田町遺跡から採取された弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての一群の土器は、従来貧弱であった当地での当該期の土器の実態の一端を明らかにし、かつ福岡平野との関連を示唆する点で重要な資料といえる。

対象となった遺跡は、数量的には古墳が圧倒的に多い。もとよりこれらの調査は、当該地域で展開された多様な墓制の一斑を垣間みただけに過ぎないのであるが、今後の深化に備えて以下、調査結果の整理を行ない、当該地域内における位置づけあるいは周辺地域との関連についてその概略を述べ、結びとしたい。

(2)

調査した古墳の築造時期は、須恵器出現以前と以後とに二分され、今回報告した古野古墳群・水上E1号墳と前回報告済の原口A1号墳とが後者にあたる。

まず須恵器出現以前の墓制であるが、最も古式に属するのは深町第1・2号墳で、その下限は2号墳南東周溝外壺棺の土器型式が柏田Ⅲ期に相当することから4世紀代（註1）に遡るとみられる。従って、古賀町での古墳時代の墓としては最古例の一つとすることができる。

深町古墳群は、地山削出による明確な墳丘をもち、壺棺・石蓋土壙・木棺と主体構造は多様である。しかもこれらの異なる主体構造は同格ではなく、壺棺・石蓋土壙は小児用、木棺は成人用に使用され、その間に歴然たる格差が認められる点で、注意される。けれども、いづれの主体も副葬品は皆無に近く、構造にみられる格差とは対照的である。

川原庵山第5号墳・原口B1号墳は、前者が円、後者が矩形と墳形を異にしながらも、いづれも地山に穿った墓壙底に小円礫を敷きつめた組合式木棺を置き、前回報告した川原庵山第6

～8号墳の主体構造と全く同様である。礎床の有無を除けば前出深町第1号墳の主体と通ずるものがあり、これに後出することは明らかである。従って、構造的には、深町第1号墳の先駆的な木棺に後述する箱式石棺から礎床をとり入れることによってこの種の組合式木棺が完成したとみられる(註2)。同時に、川原庵山第6号墳において櫛の出土状態から確認された違い2体葬を導入することによって、異様に長い墓壇は姿を消すのである。

川原庵山古墳群全体では、8基が確認されており、このうち第1・6号墳が立地・墳丘規模からみて中核をなしたとみられることは前回報告のとおりである。調査した計4基のうち、確実に小児用とみられる主体例はなく(註3)、未調査の1～4号墳についても同様とすれば、先行する深町1・2号墳とは異なり、小児については特に新たに主体を設けないとも考えられ注意を要する。

顕著な墳丘を築きながらも副葬品は貧弱であり、特に装身具は第6号墳櫛のを除けば皆無で、この点深町1・2号墳と変りはない。けれども、第8号墳が鋤先1、手斧鋤2、鏡1、刀子2、鉾1を、7号墳が鉄鏃1、刀子片を、5号墳が刀子4、針1をと、実用的な鉄製農・工具、武器を伴う点で異なり、この地域に波及した鉄器化とその所有形態の変遷の一端が窺われる。

7号墳出土のU字形鋤先は、その型式からみて5世紀中葉が上限とみられている(註4)。一方5号墳出土の蕨手刀子は、九州では古式横穴式石室からの一部の出土例を除けば竪穴式石室・箱式石棺に集中しており、大略5世紀代に属する。周辺地域では、宗像郡玄海町・上高宮古墳からの出土例がある(註5)。同墳では、三角板革綴式短甲を伴出しており、5世紀中葉を下らないと思われる。従って第5号墳の年代もこれとほぼ同期と思われ、第7号墳に少しく先行すると思われる。

一方、所属時期の比定に不明確な部分があるが、これらの組合式木棺とほぼ併行・同期——5世紀と思われる竪穴式石室・箱式石棺の存在が知られつつある。原口B1号墳が占地する丘陵はなお西側に延びるが、この北側斜面は稜線を僅かに残して果樹園となっている。この造成工事によって竪穴式石室・箱式石棺数基が破壊され、川原庵山第6～8号墳を調査中の我々が駆けつけた時には、赤く塗られた扁平割石・板石が散乱していた(PL.47)

これらの破壊された古墳は1号墳とともに原口B支群を形成したとみられるが、1枚の写真すらなくまま消滅し慙慙にたえない。この他にも、町内各地の低台地・丘陵上からの箱式石棺の出土が伝えられており、附篇に収めた藤津第1号石棺、鴻巣第1号石棺の2例はその一部にすぎない。これらは、不用意に発見、破壊される例が多く、墳丘・群構成等実態に不明点が多いが、藤津第1号石棺では底に礎床を敷きつめていることが確認された。注目されるのは、鉄器を前出組合式木棺群に比して相対的に多量に有する点である。両者に木と石という棺材の差異の他に、副葬品の多寡が認められるとすれば、この間に明瞭な格差があるとなればなら

ない。また、古賀平野における箱式石棺の構築と鉄器の供給については、古賀町の北方にあって玄海灘に面した宗像郡津屋崎町一带を中心とする宗像勢力が重要な役割を果たしたことは想像に難くない(註6)。

上記のように、須恵器出現以前の墓制は多様に展開しているが、以上を要約すれば構造的な多様さが直ちに時間差を示すものではなく、複数の墓制が併行ししかもその間に明瞭な格差が認められるのである。

(3)

古賀町における最古の横穴式石室は、西部の鹿部山の支脈尾根上に営まれた浦口第3号墳石室とみられ、「I期後半」にあたる須恵器を伴ない、「5世紀後半」に比定されている(註7)。同石室は大破しているが、「II期」の須恵器を伴う同4号墳石室と同様に竪穴系横口式石室に属する(註8)。竪穴系横口式石室は、古式横穴式石室の一つのタイプであり、北部九州を中心に分布し沿海地帯に飛石的に核が形成されており、前述の津屋崎地区にもその一つがある。浦口3号墳石室を遡る可能性がある例としては、前回報告した下別当第1号墳が挙げられる。赤く塗られた同石室は過半が破壊されており、閉塞構造をもつか否かは確言できないが、板石を立てた腰石一枚のみ現存していた一には、竪穴系横口式石室を想定させるものがある。

6世紀初頭以前の古式の横穴式石室は、他地域を同様類例が少ないが、以降はFig. 1に示すとおり平野に面する丘陵尾根筋・斜面を中心として多くの群集墳が営まれる。調査側が意外に少なく、実態は必ずしも明らかではないが、中でも、久保・筵内・薦野の三地区を中心とする福岡町に近い北部に集中する傾向があって注意される。

これらのうち久保字花見の砂丘下から発見された花見古墳は(Fig. 1—2)、単室横穴式石室で豊富な出土品をもつ(註9)。大略6世紀中葉に比定され、町内では最古の本格的横穴式石室(Fig.148)の一つと思われるが、石室構造は、津屋崎町の18号タイプ(註10)の系統上

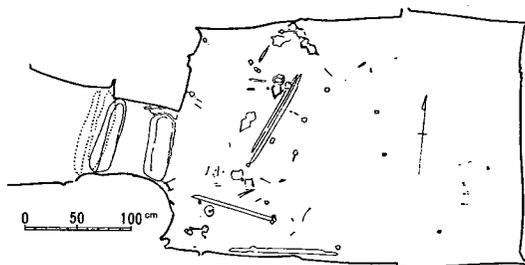


Fig. 148 花見古墳石室平面図 (1/70)

にあり、金銅装刀子・銅鏡をはじめとする副葬品のほとんどが石室前半から出土して葬法を暗示するものがある。

筵内字佐谷の佐谷古墳の石室は、奥壁腰石一石と床石のみが残存するのみで大破していたが、据え付痕等からみて、花見古墳と同様な長方形プランの単室であったと推定される(註11)。単室墳とし

ては他に方形プランの玄室を営む鹿部山の唐ヶ坪4号墳(註12)があるが、これまた前出津屋崎町の124号タイプにつながるとみられる(註13)。

6世紀後半代でも津屋崎地区からの影響は強く認められ、前回報告した原口A1号墳、鹿部山の唐ヶ坪6号墳(註14)はその代表的な例である。両墳の石室は、いずれも形式的ながら複室構造をとり、特に前者は玄室の天井が高くかつ両側壁の持ち送りが合掌形ともいふべき急角度である点が特徴的である。

前代ほど明確には指摘できないが、終末期の古野古墳群への方形プラン石室の導入等についても、やはり津屋崎地区の存在を無視できないものがある。

(4)

以上を要するに、当該地域での古墳時代——特に5世紀以降の葬墓制の形成・展開について、宗像君、の根拠地である津屋崎地区からの強い影響が認められる点に、その特色が求められる。こうした影響は、終末期に限られた資料ではあるが古野第12号墳からの鉄鏝・鞆羽口の出土から知られるように、主として鉄器生産・製鉄を通じての関係を反映した結果に他ならない。町内において前方後円墳の確実な例は未発見であり、県下の前方後円墳の約1割(註15)が集中する津屋崎地区に対する地位のほどが自ずと知られる。

けれども、古墳時代の全期間を通じて、津屋崎地区の全くの影響下にあったか否かについては速断し難い。5世紀における箱式石棺の大型化については既述のとおり同地区からの波及としても、礫床をもつ組合式木棺もまた彼の地で完成された構造を導入したのか、それとも当該地域で複合された独自の墓制であるのかは不明である(註16)。

また、宗像君、に対して従たる地位にある当該地域社会内部においても一定の秩序が存在したことは疑いないが、その実態については同時期資料が豊富とはいえ従って判然としない。けれども、少なくとも既知の例では、単室横穴式石室期(大略6世紀中葉代)では津屋崎町に隣接する宗像郡福岡町に近い——古賀町では北部にあたる地域に営なまれた古墳が副葬品の質・量において優るかに見える。

ともあれ、一連の調査で、結果的に、予想を上まわる各時代・各種の墓制が展開され、かつそれが単なる構造上の多様さにとどまらず墓制に向けられた規制の厳しさを物語ることが明らかとなった。上記の問題点については、これらの調査結果と今後さらにもたらされるであろう新資料との厳密な対比・分析により解明されるものと思われる。(石山 勲)

註 1 調査者の井上裕弘氏の見解による。氏の年代観については<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅧ>のP103に述べられている。

- 2 県内における弥生時代の木棺では、底板——特にその上に側板を立てる確実な例は知られていない。これは箱式石棺についても同様であり、後出する古墳時代の各種石棺においても、一部を除けば礫床とする例が多く、前代からの伝統を強くとどめるものとして注意される。
- 3 前回報告では、第7号墳について「巾が狭いので小児の可能性はある」としたが、これを撤回・訂正する。拙稿「川原庵山7号墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ〉所収 1974年
- 4 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」〈考古学研究13-3〉1967年
- 5 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書13〉1939年
- 6 津屋崎町・荘園古墳(津屋崎第13号墳)は、径26mの円墳で大形の箱式石棺を主体とする(1977年8月同町教委調査。県文化課佐々木隆彦技師担当)。多量の装身具とともに箱に納めた多くの鉄製武器が出土しており、先に筆者が指摘したように、[△]宗像君[△]の経済的基盤の一つが鉄器生産にあったことを偲ばせる(拙稿「[△]宗像君[△]と周辺地域との関係について」『新原・奴山古墳群』〈福岡県文化財調査報告書54〉1977年)。
- 7 鹿部山遺跡調査会『鹿部山遺跡』1973年
- 8 註7文献
- 9 鏡山猛「福岡県粕屋郡花見古墳」〈日本考古学年報8〉所収
- 10 津屋崎地区の横穴式石室については、註6文献所収の拙稿を参照されたい。
- 11 福岡県教育委員会『佐谷・脇田山古墳調査報告』1974
- 12 註7文献に同じ
- 13 註10に同じ。ただし津屋崎町第124号墳では主軸と平行して両壁沿いに遺体が葬られている。
- 14 註7文献に同じ。
- 15 現時点では、消滅分をも含めて約200基の前方後円墳が知られている。
- 16 後者だとしても、礫床をもつ箱式石棺の木棺化——墓制への規制としての側面を合わせ持つとみられる。

V 周辺の遺構・遺物

1 中ノ坪甕棺墓

1 調査の経過

古賀町川原庵山古墳群・下別当古墳・原口古墳群・深町古墳群をのせる丘陵の北側平野部微高地一帯は、弥生式土器片等が散布し、集落遺構の存在が推定される遺跡地である。馬違池・五毛池・四反田池の3堤に囲まれた微高地、大字新原字中ノ坪の洪田氏所有ブドウ園内で石蓋単棺の弥生後期甕棺墓が発見された(Fig. 1—18)。当時、すぐ近くの水上遺跡調査中の県教委文化課職員がこの通報を受け、昭和49年5月31日古賀町文化財研究会員諸氏とともに応急の調査を行なった。

調査員の構成は次の通りである。

古賀町文化財研究会	吉川 鷹助
〃 〃	坂田 佳三
古賀町教育委員会	主事 城井 靖典
福岡県教育庁文化課	技師 石山 勲
〃 〃	〃 中間 研志

2 調査の内容

遺跡周辺は現在ブドウ畑等の果樹園造成により幾分開墾が進行するが、遺跡地は周辺の畑等と約10mの比高差を示し一段高い位置にある。標高43.5mを示す。

遺構 (Fig.149)

ブドウ畑開耕中に蓋石の1個が現われ、それを除去しようとした結果単棺の口縁部が確認されたとのことである。

墓壙は粘質の強い花崗岩培乱土の地山に径0.9×0.68mの略楕円形に0.4m掘り下げ、更に、甕棺挿入の為に斜めに深さ0.62m横穴を掘ってつくる。その結果、甕口縁下辺のあたる部分、即ち蓋石の乗る部分が段状に平坦面をなす形となる。

甕は、主軸をS59°30'Eにとり、傾斜角27°に斜めに挿入する。胴中位～下半においては墓壙底面にほぼ密着するが、底部は横穴の奥まで十分に挿入されてはいない。甕胴部のやや下

位，中軸線上の下位にあたる部分に一孔を穿つ。

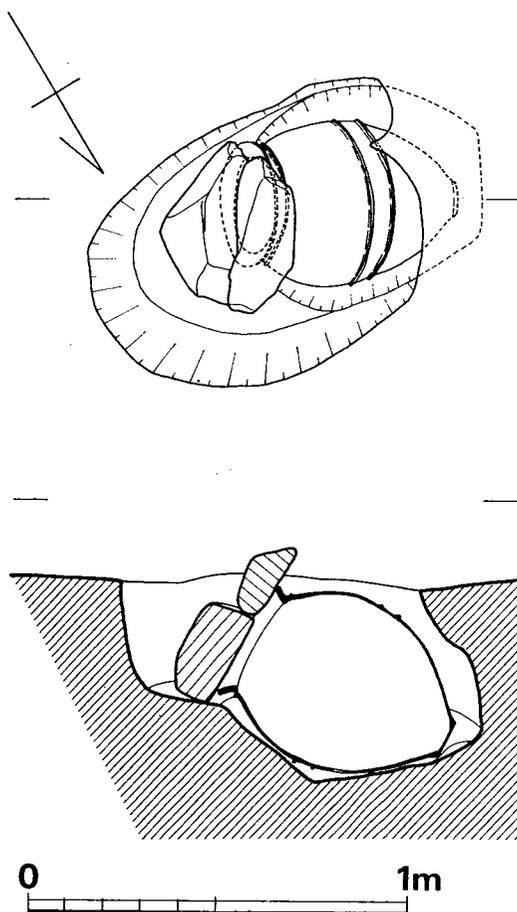


Fig. 149 中ノ坪壺棺検出状態実測図 (1/20)

当壺棺墓は，偶々ブドウ園耕作中に発見された1基のみの調査であり，同台地にどの程度の密度，範囲に分布する一群のものであるものか，或いは全く単独に造営されたものであるのか確認していない。ただ，同地での開墾等による壺棺等の発見例は聞かない。しかし，当遺跡より300m西の微高地の田地より多数の弥生時代後期～古墳時代にかけての土器片が採集されて

胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好で，茶褐色を呈し，全体に丁寧な作りをみせる。

本壺は中期終末期の特徴を備えながらも，口縁が「く」の字状に立ち上がる形態を示し，後期初頭に比定されよう。

3 結 語

当壺棺墓は，偶々ブドウ園耕作中に発見された1基のみの調査であり，同台地にどの程度の密度，範囲に分布する一群のものであるものか，或いは全く単独に造営されたものであるのか確認していない。ただ，同地での開墾等による壺棺等の発見例は聞かない。しかし，当遺跡より300m西の微高地の田地より多数の弥生時代後期～古墳時代にかけての土器片が採集されて

蓋石は，2個の大小の横長の石を横位に重ねており，密封の為の粘土目張り等は見られない。蓋石・壺は旧位置を全く保ち，壺も定形である。

遺物 (Fig.150, P L.112-2)

壺内部は精査したが，人骨・副葬品等の遺物は全く検出されなかった。

壺は，口径32.0cm，器高58.1cm，胴最大径48.1cmを測る。口縁内面で稜をつくり，「く」の字状に外反し，端部は凹状をなす。口縁外面にふくらみをみせ，頸部くびれ直下に断面三角凸帯一条を貼りつける。胴最大径を中位よりやや上にとり，かなり張る胴部をなす。胴部中位に二条の断面梯形凸帯を貼り付け，その上面は凹状になる。胴部下半で底部へとすぼまり，器壁の薄い平底となる。

口縁から頸部凸帯直下までの外面，及び胴内面上端までは横ナデ調整を施し，胴中位凸帯上下部を除き他外面は縦方向へラ磨きを行なう。胴最下端外面には粗

おり、高木遺跡と称される（註1）。この東北側微高地一帯において集落が形成されたであろうことは容易に推定できる。集落背後の丘陵北麓の一段高い台地上に墓地を形成したことは、福岡平野等における主要甕棺墓地群立地における両者の関係からも推定できよう。

周辺遺跡については、前項「位置と環境」との重複を避けるが、同時期の遺跡としては、東方1 kmに大田町遺跡（註2）、更に東方2.5 kmには鹿部東町遺跡（註3）、北方2 kmには久保長崎遺跡（註4）などが調査されている。各遺跡からはいずれも、後期前半に比定される跳ね上がり口縁甕の出土がみられ、

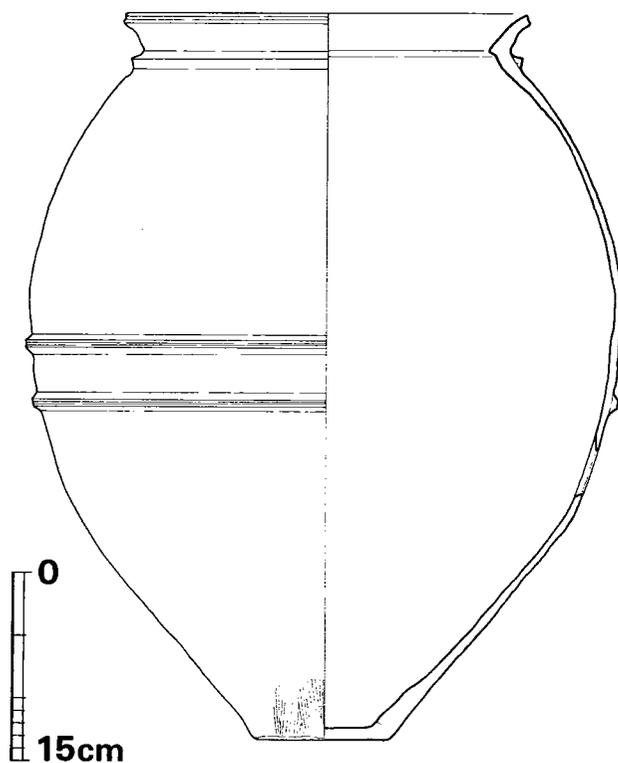


Fig. 150 中ノ坪甕棺実測図 (1/6)

遠賀川流域における中期前半期からの円滑な交流が考えられる（註5）。従来弥生期において福岡平野文化圏に容れられるとされていた裏粕屋地域において、東方の遠賀川流域との接点、或いは西方への前進基地的な位置付けとして今後大いに問題となるであろう。

甕棺墓地として群集する甕棺墓の在り方は、確認されたものでは、中期後半の鹿部山皇石神社（註6）が知られ、「甕棺文化圏」の北辺沿岸地域における最東端に位置付けられよう。また、本書所収の大田町遺跡において、中期初頭・中葉・後半期の甕棺片が出土している。これらの意味において、当中ノ坪甕棺墓地が群集するかどうか不明ではあるが、後期初頭の段階において福岡平野甕棺文化圏の波及が少なくともこの地までは及んだことを示すものとして以後重要な課題となろう。

（中間研志）

註 1) 『福岡県遺跡分布地図（粕屋郡）』作製のための分布調査による。近刊予定。

2) 本書所収。

3) 岩崎二郎他「東町遺跡の調査」『鹿部山遺跡』日本住宅公団 1973年

4) 松岡史『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 1973年

- 5) 上記東町遺跡において、更に下條信行「考古学・粕屋平野」〈福岡市立歴史資料館研究報告 第1集〉1977年においても、この他に朝顔型壺口縁の浮文や、直口する長頸壺等をも挙げて指摘を行なっている。
- 6) 古谷清「鹿部と須玖」〈考古学雑誌2-3〉1911年
 中山平次郎「九州北部における先史原史両時代中期期間の遺物に就いて」〈考古学雑誌7-10〉1917年

2 藤津第1号石棺

1 調査にいたる経過

昭和49年9月25日に、吉川鷹助・坂田佳三両氏が事務所を来訪され、墓地に箱式石棺が存在し、(Fig.1-26) 至急に調査の要ありとの情報をもたらされた。早速、両氏および中間・石山が現地へ赴き確認する一方、町教委の城井氏を通じて所有者との連絡・協議を行なった。この結果、改葬を29日(日)に予定されているとのことであり、前日の28日(土)に調査を行なうこととした。

調査は、28日の午後を利用して、石棺の清掃・実測・撮影等の応急的に行ない、工具使用痕を明瞭にとどめる板石一枚を、事務所へ搬入した。調査には、上記諸氏の他に、古賀歴史研究会の高原桂太郎氏・県文化課技師児玉真一・調査補助員川述公紀・同進博次各氏の参加を得た。

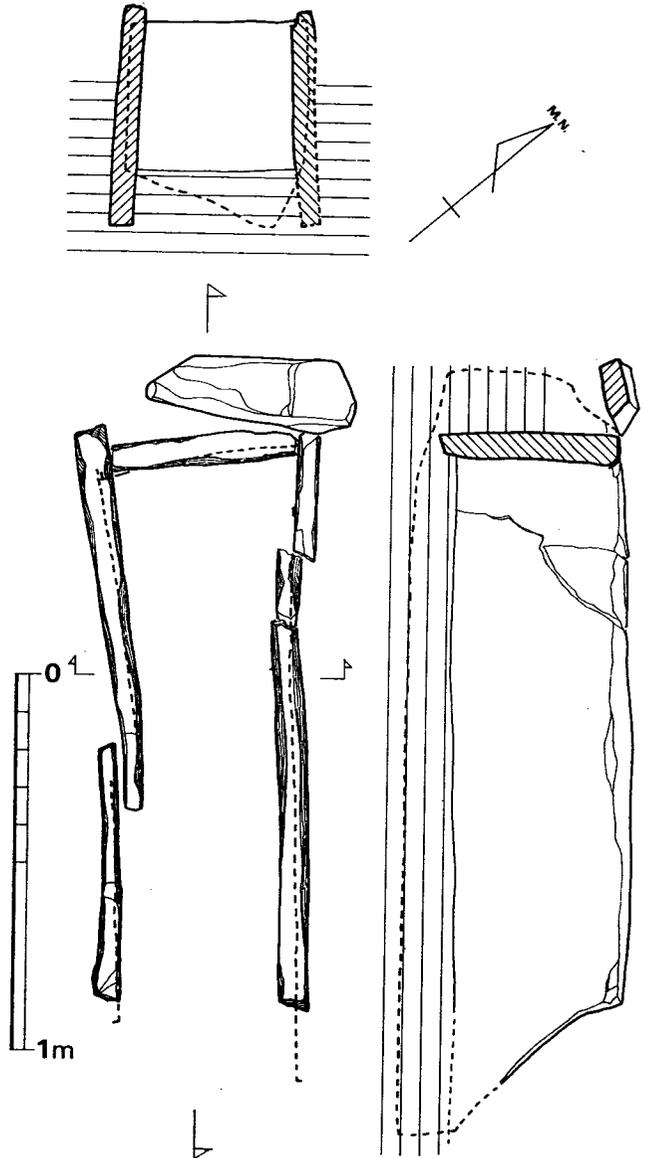


Fig. 151 藤津第1号石棺実測図 (1/20)

なお、箱式石棺は通例では単独ではなく群集するが、現状が墓地により著しく改変されており、1基の確認にとどまった。

2 遺跡の内容 (Fig.151)

主軸を北西から南東にとり、蓋石の全てと南東側小口の石材が抜かれていた。両小口と北側石は各1枚から成り、北側の石材は $0.6 \times 2m$ の長大なもので、厚さも8cm前後ある巾は、北西側で52cm、南東側で46cmであるが、長さは推定1.6m強と稍短かい。高さは45cm前後で、南東側が少しく高い。床一面に小円礫が敷かれていた。

棺材には、巾1.7~1.8cmの工具痕が明瞭に残っており (Fig.152)、また接合の便のために一端を薄く殺いでいる。

予想に反して、各種の鉄器が遺存していたが、過半は北西側に集中していた。(Fig.153)。



Fig. 152 藤津第1号石棺棺材工具痕拓影 (1/2)

3 遺物

鉞 (Fig.154—Y 1)

莖先端部を欠き、現存長7.4cm、刃部最大巾12mm弱。銹化が著しく進行し裏スキは判然としない。三木文雄氏分類のA類にあたる (註1)。

鉄鏃 (Fig.154)

小異はあるが、いずれも片丸造の篋被椿葉式 (註2) に属する。身長は、4.7 (A 8) ~5.6 (A10) cmと短かい。完存するのはA10のみで、全長8.3cm。篋には篠竹が用いられており、A2.8では椿巻の痕跡をとどめる。A3.5では、薄い鉄製リング (ドットを付す部分) を用いて

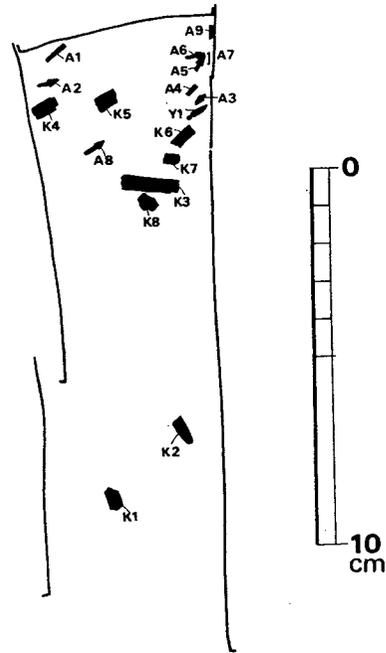


Fig. 153 藤津第1号石棺遺物出土状態実測図 (1/20)

篋と茎とを固定している。

(石山 勲)

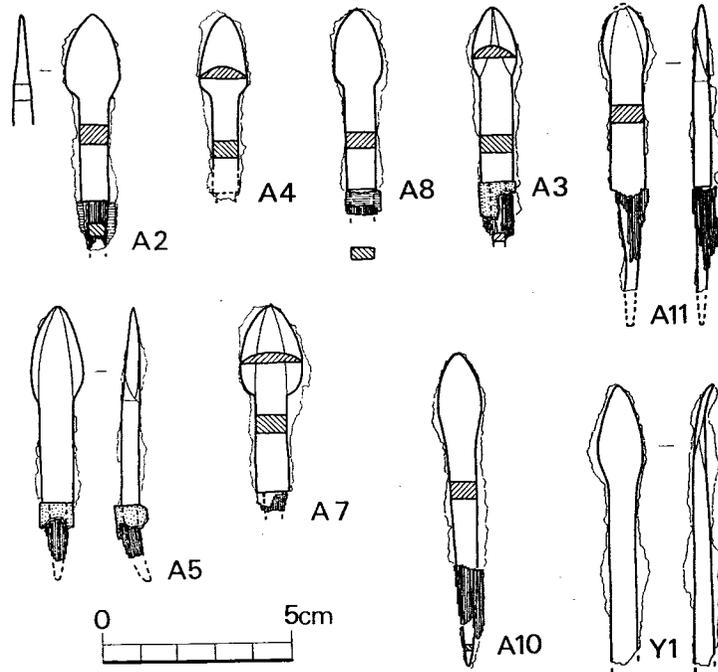


Fig. 154 藤津第1号石棺出土鉄器実測図 (1/2)

3 鴻巣第1号石棺出土遺物 (Fig.155)

ここに報告する鉄器は、吉川鷹助(古賀町教育委員)・石井忠(県立古賀養護学校教諭)両氏が当課へ寄託されたものである。石井氏によれば、石棺の所在地は、古賀町大字久保字鴻巣であり (Fig. 1—5)，昭和51年秋に当該地で造成工事が行なわれ、その際ブルドーザにより破壊された石棺から人骨とともに鉄器類が出土したとのことである。これらの鉄器はいったん作業員によって持ち去られたが、その後病気等の「あたり」があらわれたために元の位置に戻され、これを両氏が回収されたものである。蓋石は玄武岩で、赤色顔料が塗られ、石井氏提供の写真(吉川氏撮影)に抛れば人骨(頭骨?)もまた朱に染まっている。石棺の内法等は不明であるが、蓋石が2枚以上であったことは疑いない。

以下、回収された鉄器の概要を記すが、報告にあたり、適切な処置をとられ、かつ本書への報告を快諾された吉川・石井両氏に対し心から感謝いたします。

劍 (Fig.155—1~4)

6片と他に小片若干が採取されており、2ないしは3口分とみられる。1は、関部での巾3.5cm強で茎先端を欠く。鑄は明瞭でない点で3と共通しており、1と3とは同一個体に属するとも思われる。2は断面菱形の鑄高で最大巾2.7cm、厚さ6mmで1よりも少しく細身である。

銚 (Fig.155—5)

銚と袋部的一端とを欠失しており、現存全長27cm強。身部は鑄高の劍身形で、最大巾2.7cm強、厚さ8mm。袋部は長さ15.5cm、断面は不整八稜形。目釘孔はあるが釘および木質は認められず、柄を装身せにず副葬したとみられる。(石川 勲)

- 註 1 同氏「古墳出土の劍について」<考古学雑誌42—3>
2 後藤守一「上古時代鉄鍔の年代研究」

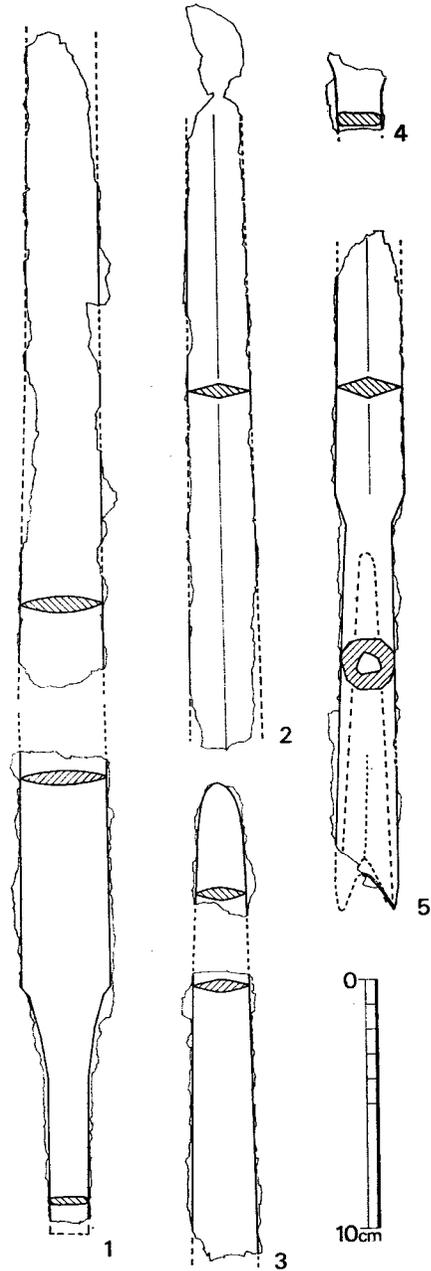


Fig. 155 鴻ノ巣第1号石棺出土鉄器実測図 (1/3)



1. 中ノ坪石蓋甕棺墓全景



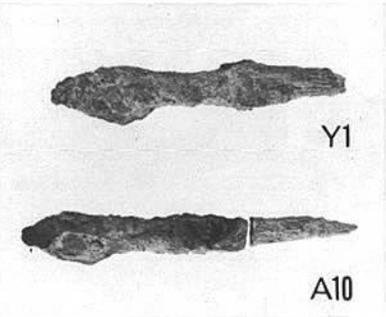
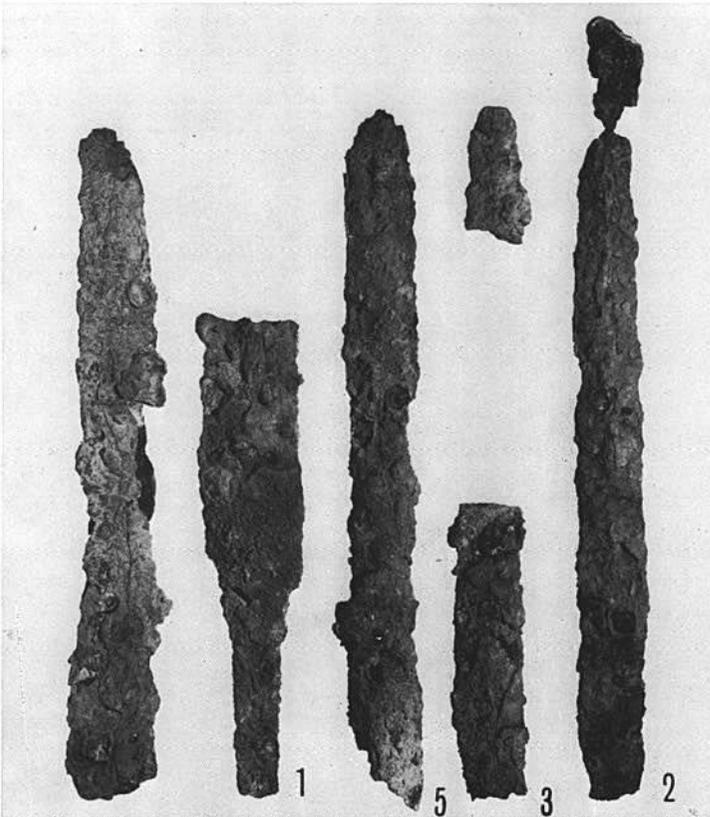
2. 中ノ坪甕棺



1. 藤津第1号石棺全景（足部から）



2. 藤津第1号石棺全景（頭部から）



3. 藤津第1号石棺出土鉄器

4. 鴻巣第1号石棺出土遺物

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXI—

昭和53年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町1-1